

只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告 2

中西部遺跡

第 1 分冊〔本文編〕

2025年

福島県教育委員会
公益財団法人 福島県文化振興財団
福島県土木部

只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告 2

なかにし ぶ
中西部遺跡

第1分冊 [本文編]

序 文

只見川は、国指定特別天然記念物である尾瀬に源流を發し、会津地方南西部を北上して阿賀川に合流する阿賀野川水系の最大支川で、古来より会津地方の生活を支えてきました。一方、平成23年7月の新潟・福島豪雨のほか度重なる浸水被害に見舞われており、洪水被害の抑制及び軽減を図るため、福島県土木部では只見川河川整備工事に取り組んでいるところです。

事業の計画当初は、同事業計画地内の大沼郡金山町中西部の地に遺跡があることは知られておりませんでした。工事に先立ち分布調査及び試掘・確認調査を行った結果、多くの遺構・遺物が出土し、ここに遺跡が存在することが初めて把握されました。福島県教育委員会では、この「中西部遺跡」の保存のための協議を土木部と行いましたが、現状での保存が困難であったため、記録保存のための発掘調査を実施することとしました。

本報告書は、令和4年度に実施した発掘調査の調査結果をまとめたものです。中西部遺跡では、縄文時代後期から平安時代までの遺構が確認されました。特に弥生時代の墓跡とみられる多数の土坑のほか、縄文時代晩期から弥生時代中期の掘立柱建物跡などが幾重にも重なって見つかったことが注目されます。また、生活用品である土器・石器のほか、管玉という装飾品も複数出土し、北陸地方や関東地方とのつながりをうかがわせる土器の出土もあります。更に、弥生時代のものとしては県内に類例のない集石遺構の検出などは、只見川のほとりで長い期間にわたり営まれてきた多様な生活文化の証といえます。

この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御理解と御協力を頂いた福島県土木部会津若松建設事務所、金山町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和7年3月

福島県教育委員会

教育長 大 沼 博 文

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

只見川流域築堤工事は、平成23年7月の新潟・福島豪雨によって甚大な被害を生じたことをうけ、福島県土木部によって進められています。

この事業にかかる埋蔵文化財の調査は、令和元年度に三島町の小和瀬遺跡、令和4年度の金山町の中西部遺跡を対象として実施されました。

本報告書は、このうち中西部遺跡の調査成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代後期、同晩期から弥生時代中期、同後期、平安時代、江戸時代にそれぞれ人々の営みがあったことが明らかとなりました。とくに、縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての多くの遺構が確認され、また多くの遺物が出土したことは、地域の歴史に新たな1ページを加える成果です。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらには地域の歴史を理解する資料として、生涯学習の場などで幅広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、この調査にご協力いただきました金山町や関係機関に深く感謝申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団
理事長 鈴木 淳一

緒 言

- 1 本書は、令和4年度に実施した只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告である。
- 2 本書には、金山町に所在する中西部遺跡の調査成果を収録した。
中西部遺跡 福島県大沼郡金山町大字大塩字中西部 埋蔵文化財番号：445400044
- 3 本書は、第1分冊：本文編、第2分冊：自然科学分析・写真図版編、付図2枚で構成した。
- 4 本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の委託により実施し、調査・報告にかかる費用は福島県土木部が負担した。
- 5 福島県教育委員会では、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。
- 6 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の次の職員を配し調査・報告書の作成にあたった。
令和4年度
副主幹 青山博樹 文化財主事 布尾和史
文化財主事 能登谷宣康 文化財主事 吉野勤也
他に、飯村 均、國井秀紀、片平菜々、安田楓加の協力を臨時に得た。
令和5年度
副主幹 青山博樹 文化財主事 能登谷宣康
令和6年度
副主幹 青山博樹 (職名は当時)
- 7 本書の執筆は、令和5年度に配置された調査員が行い、文責は文末に示した。
- 8 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し付章にその結果を掲載している。
株式会社加速器分析研究所 放射性炭素年代(AMS測定)、樹種・種実同定
株式会社パレオ・ラボ レプリカ法による土器種実圧痕の同定、樹種・種実同定、
土壌分析、土器付着物分析(放射性炭素年代測定を含む)、
炭化物分析
バリノ・サーヴェイ株式会社 出土遺物付着顔料等分析
なお、出土石器の蛍光X線分析については、福島県文化財センター白河館の勝川若菜による分析結果を掲載した。
- 9 本書に掲載した石器の実測とトレースは、株式会社一測設計に多くを委託した。
- 10 本書に掲載した石器・石製品の石材鑑定は、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 11 本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 12 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに福島県土木部が作成した工事用地図を複製もしくはトレースしたものである。
- 13 出土遺物は、遺構ごと(遺構外の場合はグリッドごと)、種別ごとに集計した。ただし、縄文土器と弥生土器の峻別が特に小片について困難であったため、これを分けることはしなかった。
- 14 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関及び個人から協力・助言をいただいた。
金山町教育委員会 只見町教育委員会 ただみ・ものと暮らしのミュージアム
福島県立博物館 三島町教育委員会
青野友哉 五十嵐純一 石川日出志 太田 圭 川合正裕 佐々木由香 佐藤祐輔
滝沢規朗 高橋 満 長島雄一 本名隆二 吉田博行 渡部賢史 渡邊朋和(50音順)

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下の通りである。

- (1) 方 位 表記がない遺構図は、すべて本書の天を北とした。
- (2) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (3) 標 高 断面図及び地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (4) 土 層 基本土層はアルファベット大文字のLとローマ数字、遺構内堆積土はアルファベット小文字のℓと算用数字を組み合わせて表記した。
- (5) ケ バ 遺構内の傾斜部は「Ⅲ」、相対的に緩傾斜の部分には「Ⅱ」、後世の攪乱部や人為的な削土部は「Ⅰ」の記号で表現した。
- (6) 用 例 挿図中の網点は以下を示す。これ以外は同図中に用例を示した。
 焼土化
- (7) 遺 構 番 号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は略号で記載した。
- (8) 土 色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下の通りである。

- (1) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (2) 番 号 挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 注 記 出土位置・層位を、遺物番号右脇の()内に示した。
- (4) 土 器 断 面 粘土紐の積上げ痕は、一点鎖線で示した。
- (5) 計 測 値 各挿図中に示した。()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。管玉については一覧表に示した。
- (6) 用 例 挿図中の網点等は、同図中に用例を示した。
赤彩については、面的な広がりをもって施されたもの、沈線内のみにみられるものは、赤色のアミ掛けとした。器面のごく一部に赤彩が遺存するなど赤彩が施された範囲が不明瞭なものについては、実測図に「赤彩」の文字を傍示した。

3 本書で使用した略号は、以下の通りである。

金 山 町…KY	中西部遺跡…NNB	堅穴・平地住居跡…SI	掘立柱建物跡…SB
溝 跡…SD	土 坑…SK	集石遺構・配石遺構…SS	土器埋設遺構…SM
焼土遺構…SG	柱穴・ピット…P	性格不明遺構…SX	遺構外堆積土…L
遺構内堆積土…ℓ	グ リ ッ ド…G		

総 目 次

第1分冊 [本文編]

序 章

第1節	事業の概要	1
第2節	調査に至る経緯	2
第3節	調査経過	4
第4節	地理的環境	5
第5節	歴史的環境	8
第6節	調査方法	11

第1章 遺構と遺物

第1節	遺跡の概観	12
第2節	基本土層	20
第3節	竪穴・平地住居跡	22
第4節	掘立柱建物跡	45
第5節	土 坑	154
第6節	溝 跡	340
第7節	集石遺構・配石遺構	343
第8節	土器埋設遺構	357
第9節	焼土遺構	360
第10節	ピ ッ ト	365
第11節	性格不明遺構	377
第12節	遺構外出土遺物	379

第2章 総 括

第1節	遺 物	441
第2節	遺 構	460
第3節	ま と め	477

第2分冊 [自然科学分析・写真図版編]

付章 自然科学分析

第1節	弥生土器内面付着物の赤外分光分析	1
第2節	出土遺物化学分析	6
第3節	出土石器の蛍光X線分析について	18
第4節	放射性炭素年代(AMS測定)	22
第5節	放射性炭素年代測定	33
第6節	炭素・窒素安定同位体比分析	48
第7節	レプリカ法による土器種実圧痕の同定	50
第8節	樹種・種実同定	56
第9節	出土した炭化種実	62
第10節	プラント・オバール分析	64

写真図版	67
------	----

第1分冊 [本文編] 目 次

序 章

第1節 事業の概要	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 調査経過	4
第4節 地理的環境	5
第5節 歴史的環境	8
第6節 調査方法	11

第1章 遺構と遺物

第1節	遺跡の概観	12		
第2節	基本土層	20		
第3節	竪穴・平地住居跡	22		
1号住居跡(22)	2号住居跡(26)	3号住居跡(29)	4号住居跡(33)	5号住居跡(35)
6号住居跡(37)	7号住居跡(40)	8号住居跡(42)	9号住居跡(44)	
第4節	掘立柱建物跡	45		
1号建物跡(48)	2号建物跡(49)	3A・B号建物跡(50)	4号建物跡(53)	
5号建物跡(54)	6号建物跡(55)	7号建物跡(58)	8号建物跡(59)	9号建物跡(62)
10号建物跡(67)	11号建物跡(68)	12号建物跡(69)	13号建物跡(72)	14号建物跡(76)
15号建物跡(79)	16号建物跡(80)	17号建物跡(85)	18号建物跡(88)	19号建物跡(90)
20号建物跡(94)	21号建物跡(97)	22号建物跡(100)	23号建物跡(102)	24号建物跡(104)
25号建物跡(106)	26号建物跡(110)	27号建物跡(112)	28号建物跡(115)	29号建物跡(118)
30号建物跡(120)	31号建物跡(123)	32号建物跡(125)	33号建物跡(127)	34号建物跡(129)
35号建物跡(131)	36号建物跡(132)	37号建物跡(133)	38号建物跡(134)	39号建物跡(136)
40号建物跡(138)	41号建物跡(139)	42号建物跡(140)	43号建物跡(142)	44号建物跡(143)
45号建物跡(145)	46号建物跡(146)	47号建物跡(149)	48号建物跡(151)	49号建物跡(153)
第5節	土 坑	154		
遺 構(154)	遺 物(253)			
第6節	溝 跡	340		
1号溝跡(340)	2号溝跡(340)			
第7節	集石遺構・配石遺構	343		
1号集石遺構(343)	2号集石遺構(346)	1号配石遺構(347)		

第8節 土器埋設遺構	357
1号土器埋設遺構(357)	2号土器埋設遺構(357) 3号土器埋設遺構(360)
第9節 焼土遺構	360
1号焼土遺構(360)	2号焼土遺構(361) 3号焼土遺構(361) 4号焼土遺構(361)
6号焼土遺構(361)	7号焼土遺構(361) 8号焼土遺構(363) 9号焼土遺構(363)
10号焼土遺構(363)	11号焼土遺構(363) 12号焼土遺構(365) 13号焼土遺構(365)
第10節 ビット	365
第11節 性格不明遺構	377
1号性格不明遺構(377)	2号性格不明遺構(378)
第12節 遺構出土遺物	379
土 器(380)	石器・石製品・金属製品(397)

第2章 総 括

第1節 遺 物	441
1. 土 器(441)	2. 石器・石製品(454)
第2節 遺 構	460
1. 竪穴住居跡(460)	2. 平地住居跡(461) 3. 掘立柱建物跡(462) 4. 遺構密集成(471)
5. 土 坑 墓(473)	6. 集石遺構(473) 7. 配石遺構(475) 8. 土器埋設遺構(476)
第3節 ま と め	477
1. 縄文時代後期(477)	2. 縄文時代晩期～弥生時代中期(477) 3. 古代以降(482)

挿図・表目次

[挿図]

図1 中西部遺跡位置図……………	1	図32 5号建物跡……………	54
図2 只見川河川整備事業 (片門地区～只見地区位置図)……………	2	図33 6号建物跡……………	56
図3 工事計画と遺跡の位置……………	3	図34 7号建物跡……………	58
図4 中西部遺跡周辺の表層地質図……………	7	図35 8号建物跡(1)……………	60
図5 周辺の遺跡位置図……………	9	図36 8号建物跡(2)……………	61
図6 遺構配置図(1)……………	13	図37 9号建物跡(1)……………	64
図7 遺構配置図(2)……………	14	図38 9号建物跡(2)・出土遺物……………	65
図8 遺構配置図(3)……………	15	図39 10号建物跡……………	67
図9 遺構配置図(4)……………	16	図40 11号建物跡・出土遺物……………	69
図10 遺構配置図(5)……………	17	図41 12号建物跡(1)……………	70
図11 遺構配置図(6)……………	18	図42 12号建物跡(2)・出土遺物……………	71
図12 基本土層……………	21	図43 13号建物跡(1)……………	74
図13 1号住居跡(1)……………	23	図44 13号建物跡(2)・出土遺物……………	75
図14 1号住居跡(2)……………	24	図45 14号建物跡(1)……………	77
図15 1号住居跡(3)……………	25	図46 14号建物跡(2)・出土遺物……………	78
図16 1号住居跡出土遺物……………	26	図47 15号建物跡……………	80
図17 2号住居跡(1)……………	27	図48 16号建物跡(1)……………	82
図18 2号住居跡(2)……………	28	図49 16号建物跡(2)・出土遺物……………	83
図19 3号住居跡(1)……………	30	図50 17号建物跡(1)……………	86
図20 3号住居跡(2)……………	31	図51 17号建物跡(2)・出土遺物……………	87
図21 3号住居跡出土遺物……………	32	図52 18号建物跡・出土遺物……………	89
図22 4号住居跡・出土遺物……………	34	図53 19号建物跡(1)……………	92
図23 5号住居跡・出土遺物……………	36	図54 19号建物跡(2)・出土遺物……………	93
図24 6号住居跡・出土遺物……………	38	図55 20号建物跡……………	95
図25 7号住居跡・出土遺物……………	41	図56 20号建物跡出土遺物……………	96
図26 8・9号住居跡、8号住居跡出土遺物……………	43	図57 21号建物跡・出土遺物……………	99
図27 掘立柱建物跡の計測位置……………	45	図58 22号建物跡……………	100
図28 1号建物跡……………	48	図59 22号建物跡出土遺物……………	101
図29 2号建物跡……………	50	図60 23号建物跡・出土遺物……………	103
図30 3A・B号建物跡・出土遺物……………	51	図61 24号建物跡・出土遺物……………	105
図31 4号建物跡……………	53	図62 25号建物跡……………	107
		図63 25号建物跡出土遺物……………	109

图64	26号建物跡・出土遺物	111
图65	27号建物跡	113
图66	27号建物跡出土遺物	115
图67	28号建物跡・出土遺物	116
图68	29号建物跡・出土遺物	119
图69	30号建物跡・出土遺物	121
图70	31号建物跡	123
图71	31号建物跡出土遺物	125
图72	32号建物跡・出土遺物	126
图73	33号建物跡	128
图74	34号建物跡・出土遺物	130
图75	35号建物跡	132
图76	36号建物跡	133
图77	37号建物跡	134
图78	38号建物跡・出土遺物	135
图79	39・40号建物跡・出土遺物	137
图80	41号建物跡・出土遺物	139
图81	42号建物跡・出土遺物	141
图82	43号建物跡・出土遺物	143
图83	44号建物跡・出土遺物	144
图84	45号建物跡	146
图85	46号建物跡・出土遺物	148
图86	47号建物跡・出土遺物	150
图87	48号建物跡・出土遺物	152
图88	49号建物跡	153
图89	1・4・8・10号土坑	156
图90	9・12~15・17・496号土坑	157
图91	18・20・21・23・25~27号土坑	159
图92	28・30・32~35・40・41号土坑	160
图93	42~47・49・50号土坑	161
图94	51・52・54~57・910号土坑	162
图95	58~60・63~66・126・127号土坑	163
图96	61・62・67~70・905号土坑	164
图97	71~73・76・79・ 119・120・312・916号土坑	165
图98	78・81・82・84~87・ 911・912号土坑	166

图99	88~94・472号土坑	167
图100	95~97・100・101・ 105・106・108号土坑	169
图101	109~111・113・114・ 116・117・124号土坑	170
图102	118・122・123・125・128~130・ 480・908号土坑	171
图103	132~136・138・139・142号土坑	172
图104	143~150号土坑	173
图105	151~153・155・158・ 159・161号土坑	174
图106	170~173・175・176・178号土坑	176
图107	179・181・182・184・ 186・187・192号土坑	177
图108	193・195~200号土坑	178
图109	201・202・204・205・ 207~210号土坑	179
图110	211~218号土坑	181
图111	219~226号土坑	182
图112	228~233・235・236号土坑	183
图113	238~246号土坑	184
图114	247~253・255号土坑	186
图115	258~265号土坑	187
图116	266~270・272~274号土坑	188
图117	275~284号土坑	189
图118	285~293号土坑	190
图119	294~301・305号土坑	191
图120	302~304・306・308・315・ 320・322・323号土坑	192
图121	324・326~331号土坑	193
图122	332・333・336~338・ 340~343号土坑	194
图123	344~351・354号土坑	195
图124	353・356~361・392・539号土坑	196
图125	362~364・369~373号土坑	197
图126	374・376~383・385号土坑	198
图127	387・389・390・393~400号土坑	200

图128	401~404 · 406 · 407 · 409 · 410 · 412 · 920号土坑 ·····	201
图129	413 · 415 · 416 · 420 · 422 · 425 · 428 · 429号土坑 ·····	202
图130	430~437 · 439号土坑 ·····	203
图131	442~446 · 450 · 451号土坑 ·····	204
图132	452~456 · 458~461号土坑 ·····	206
图133	462 · 463 · 465 · 467 · 469~471 · 473 · 474号土坑 ·····	207
图134	475 · 477~479 · 481 · 483 · 484 · 486 · 487号土坑 ·····	208
图135	489 · 491~494 · 497 · 499 · 500 · 502 · 915号土坑 ·····	209
图136	503~506 · 508~511 · 513号土坑 ···	210
图137	514~521号土坑 ·····	211
图138	523~525 · 527 · 528 · 532~534 · 536号土坑 ·····	212
图139	537 · 538 · 541 · 544~548号土坑 ···	213
图140	549~556号土坑 ·····	214
图141	557~560 · 562~566 · 568号土坑 ···	216
图142	567 · 569~571 · 573~576 · 580 · 583号土坑 ·····	217
图143	578 · 579 · 581 · 582 · 585 · 586 · 588号土坑 ·····	218
图144	592 · 594 · 595 · 597~600号土坑 ···	219
图145	603~611号土坑 ·····	220
图146	612~618 · 620号土坑 ·····	221
图147	621 · 622 · 624 · 626 · 630~632号土坑 ·····	222
图148	634 · 636~642 · 660号土坑 ·····	223
图149	643~647 · 649 · 651 · 652号土坑 ···	224
图150	653 · 656 · 658 · 659 · 661~663号土坑 ·····	225
图151	664~671号土坑 ·····	227
图152	672~674 · 676~680号土坑 ·····	228
图153	682~690号土坑 ·····	229
图154	691~699号土坑 ·····	230

图155	700~704 · 727号土坑 ·····	231
图156	705 · 707~709 · 711 · 713 · 715 · 716号土坑 ·····	232
图157	717~723号土坑 ·····	233
图158	724~726 · 732~734 · 739 · 740号土坑 ·····	235
图159	741~746 · 750号土坑 ·····	236
图160	751~758号土坑 ·····	238
图161	759~766 · 769 · 770号土坑 ·····	239
图162	774 · 776~780 · 782号土坑 ·····	240
图163	785 · 786 · 789 · 791 · 794 · 921号土坑 ·····	241
图164	795~797 · 799~805号土坑 ·····	242
图165	806~809 · 812 · 813 · 815号土坑 ···	243
图166	816~818 · 821~825号土坑 ·····	244
图167	826 · 827 · 829 · 830 · 832~835号土坑 ·····	245
图168	837 · 840~849号土坑 ·····	246
图169	851~853 · 856~860号土坑 ·····	247
图170	862 · 865~872号土坑 ·····	248
图171	873~875 · 877~879 · 882 · 883号土坑 ·····	249
图172	884~892号土坑 ·····	250
图173	893~897 · 900 · 902号土坑 ·····	251
图174	904 · 907 · 909 · 914 · 918 · 919 · 922号土坑 ·····	252
图175	924~926号土坑 ·····	253
图176	土坑出土遗物(1) ·····	298
图177	土坑出土遗物(2) ·····	299
图178	土坑出土遗物(3) ·····	300
图179	土坑出土遗物(4) ·····	301
图180	土坑出土遗物(5) ·····	302
图181	土坑出土遗物(6) ·····	303
图182	土坑出土遗物(7) ·····	304
图183	土坑出土遗物(8) ·····	305
图184	土坑出土遗物(9) ·····	306
图185	土坑出土遗物(10) ·····	307

図186	土坑出土遺物(11)	308
図187	土坑出土遺物(12)	309
図188	土坑出土遺物(13)	310
図189	土坑出土遺物(14)	311
図190	土坑出土遺物(15)	312
図191	土坑出土遺物(16)	313
図192	土坑出土遺物(17)	314
図193	土坑出土遺物(18)	315
図194	土坑出土遺物(19)	316
図195	土坑出土遺物(20)	317
図196	土坑出土遺物(21)	318
図197	土坑出土遺物(22)	319
図198	土坑出土遺物(23)	320
図199	土坑出土遺物(24)	321
図200	土坑出土遺物(25)	322
図201	土坑出土遺物(26)	323
図202	土坑出土遺物(27)	324
図203	土坑出土遺物(28)	325
図204	土坑出土遺物(29)	326
図205	土坑出土遺物(30)	327
図206	土坑出土遺物(31)	328
図207	土坑出土遺物(32)	329
図208	土坑出土遺物(33)	330
図209	土坑出土遺物(34)	331
図210	1号溝跡(1)	341
図211	1号溝跡(2)・出土遺物、 2号溝跡	342
図212	1・2号集石遺構(1)	348
図213	1・2号集石遺構(2)	349
図214	1・2号集石遺構(3)・出土遺物	350
図215	1号配石遺構(1)	353
図216	1号配石遺構(2)	354
図217	1号配石遺構出土遺物	355
図218	1～3号土器埋設遺構	358
図219	土器埋設遺構出土遺物(1)	359
図220	土器埋設遺構出土遺物(2)	360
図221	1～4・6～8号焼土遺構	362

図222	9～12号焼土遺構・出土遺物	364
図223	13号焼土遺構	365
図224	ピット(1)	367
図225	ピット(2)	368
図226	ピット(3)	369
図227	ピット(4)	370
図228	ピット(5)	371
図229	ピット出土遺物	372
図230	1号性格不明遺構	377
図231	2号性格不明遺構・出土遺物	379
図232	グリッド別遺物出土量	380
図233	遺構外出土遺物(1)	389
図234	遺構外出土遺物(2)	390
図235	遺構外出土遺物(3)	391
図236	遺構外出土遺物(4)	392
図237	遺構外出土遺物(5)	393
図238	遺構外出土遺物(6)	394
図239	遺構外出土遺物(7)	395
図240	遺構外出土遺物(8)	396
図241	遺構外出土遺物(9)	397
図242	遺構外出土遺物(10)	398
図243	遺構外出土遺物(11)	399
図244	遺構外出土遺物(12)	400
図245	遺構外出土遺物(13)	401
図246	遺構外出土遺物(14)	402
図247	遺構外出土遺物(15)	403
図248	遺構外出土遺物(16)	404
図249	遺構外出土遺物(17)	405
図250	遺構外出土遺物(18)	406
図251	遺構外出土遺物(19)	407
図252	遺構外出土遺物(20)	408
図253	遺構外出土遺物(21)	409
図254	遺構外出土遺物(22)	410
図255	遺構外出土遺物(23)	411
図256	遺構外出土遺物(24)	412
図257	遺構外出土遺物(25)	413
図258	遺構外出土遺物(26)	414

図259	遺構外出土遺物(27)	415
図260	遺構外出土遺物(28)	416
図261	遺構外出土遺物(29)	417
図262	遺構外出土遺物(30)	418
図263	遺構外出土遺物(31)	419
図264	遺構外出土遺物(32)	420
図265	遺構外出土遺物(33)	421
図266	遺構外出土遺物(34)	423
図267	遺構外出土遺物(35)	424
図268	遺構外出土遺物(36)	425
図269	遺構外出土遺物(37)	426
図270	遺構外出土遺物(38)	427
図271	遺構外出土遺物(39)	428
図272	遺構外出土遺物(40)	429
図273	遺構外出土遺物(41)	430
図274	遺構外出土遺物(42)	431
図275	遺構外出土遺物(43)	432
図276	遺構外出土遺物(44)	433
図277	遺構外出土遺物(45)	434
図278	遺構外出土遺物(46)	435
図279	遺構外出土遺物(47)	436
図280	管玉出土状況	438

付図1 中西部遺跡遺構配置図(1)

〔表〕

表1	周辺の遺跡一覧.....	10
表2	掘立柱建物跡一覧.....	46
表3	土坑一覧.....	332
表4	ピット一覧.....	373
表5	遺構外出土管玉一覧.....	440

図281	遺構外出土遺物(48)	439
図282	土器の変遷(1)	443
図283	土器の変遷(2)	444
図284	土器の変遷(3)	445
図285	土器の変遷(4)	446
図286	異系統土器	448
図287	弥生時代中期末葉以降の土器	450
図288	放射性炭素年代測定結果と土器	452
図289	石鍬の変遷	455
図290	横刃形石器の諸例	457
図291	会津における平安時代の住居跡	460
図292	掘立柱建物跡の分類	462
図293	掘立柱建物跡の規模(桁行・梁行) ..	463
図294	掘立柱建物跡の規模 (長方形部分の面積) ..	464
図295	掘立柱建物跡を構成する 柱穴の規模.....	466
図296	掘立柱建物跡の各類の消長	469
図297	1号集石遺構の構築過程	474
図298	1号配石遺構の類例	476
図299	環状集落の諸例	479
図300	会津地方における遺跡の消長	480

付図2 中西部遺跡遺構配置図(2)

表6	放射性炭素年代測定結果と土器.....	451
表7	種実圧痕と土器.....	453
表8	会津地方の種子圧痕.....	454
表9	福島県域の玉類.....	459
表10	配石遺構	476

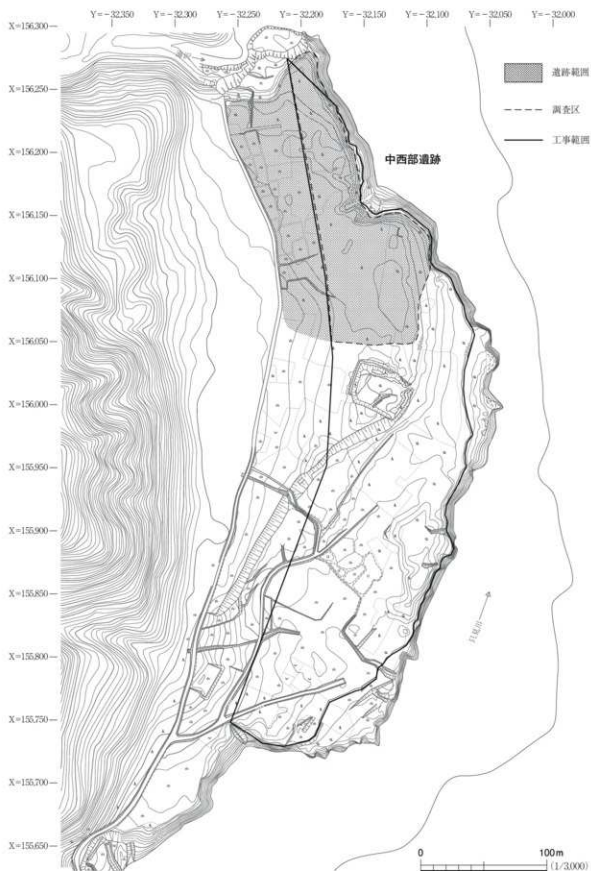


図3 工事計画と遺跡の位置

休後とされた。また、例年の降雪開始時期を勘案して12月2日までに工事を終了し、進入路の敷き鉄板を撤去する予定であるという状況説明があった。これを受けて、発掘調査期間は11月下旬までとすることが取り決められた。(青 山)

第3節 調 査 経 過

中西部遺跡の本発掘調査に関する福島県教育委員会と当財団との委託契約は令和4年4月1日付けで締結され、同日付けの指示書により当財団は遺跡調査部の調査員4名を配置した。

調査期間は令和4年5月9日から令和4年11月25日までで、延べ調査日数は136日である。

本遺跡の発掘調査を実施するにあたっては、周辺の人口が少ないこと、只見川の河川改修工事や道路改修工事が遺跡の隣接地をはじめ各所で行われていることなど、重機と作業員の確保に困難が予想されたことから、これらを発掘調査支援業務委託によって行うこととした。調査日数が限られるため、表土剥ぎにかかる重機の台数を増やして表土除去を早期に終了させること、遺構掘削排土の運搬に不整地運搬車を用いるなどして、調査にかかる労力の低減と作業の効率化を企図した。業務受託者は作業員の確保に苦労したとのことで、作業員は遺跡が所在する金山町の他に、喜多方市、会津坂下町、西会津町、柳津町、三島町、只見町、昭和村、南会津町、下郷町から募集した。

発掘調査を開始したのは、進入路の整備が完了した5月の大型連休明けである。表土除去と測量基準杭の打設を6月上旬までに終了し、表土除去の終了した部分から作業員による遺構検出作業を行った。調査区中央部は表土中にも遺物が多く包まれていることが試掘調査によって判明していたため、この部分の表土除去は人力で行った。調査区全体の遺構検出作業と遺構分布状況の把握に6月下旬までを費やした。

試掘調査の結果から、本発掘調査前の段階で土坑約300基とその他の遺構が検出されることが見込まれたものの、遺構検出作業を進めるにしたがい遺構が幾重にも重複していることが判明し、遺構検出総数は想定約5倍となった。

遺構の掘り込みと記録類の作成は7月から開始した。遺構検出作業によって調査区中央部に遺構が特に密集していること、河岸段丘の縁辺部に集石遺構や配石遺構などが存在することが判明し、これら時間と手間がかかる箇所の掘り込みから着手した。

遺構の掘削を開始してまもなく、深い掘り込みと柱痕を有する遺構が多数確認され、掘立柱建物跡の存在がのちに明らかとなった。調査区中央部は遺構が何重にも重複していたこと、深く掘り込まれた遺構が多かったことなどから、掘削に多くの労力と時間を要した。

以上のような状況から、7月以降、担当調査員に加えて1～3名の職員を臨時に配置して対応したものの、遺構数の多さから、時間が許す限り遺構の記録作業を行うことが常態化した。調査終盤は祭日も勤務日とし、調査終了後に休日を振り替えるなどして調査日数の確保を期した。

9月には、隣接する工事現場へ出入りする車両の運行時間との兼ね合いから発掘作業の開始時間

を30分繰り下げてほしい旨の申し入れが工事側からあり、9月下旬からこれを実施したことも調査の進捗に影響した。幸いだったのは、雨天による作業中止の日数が少なかったことである。

10月には、遺構の掘り込みと図化作業の範囲を調査区の北西部に広げて精査を進めた。当初は10月頃に現地説明会の開催を予定していたが、上記のような状況から断念せざるを得なかった。代替措置として、翌年5月に金山町開発センターを会場に報告会と遺物の展示を行うことを申し合わせた。

出土遺物量も当初の想定を上回り、整理作業の遅延が危惧された。大型の石剣をはじめ石器の出土量も多く、その資料化にも多大な労力と時間を要する見通しとなった。このため、遺物の洗浄とネーミング作業、石器の実測作業の大部分を外部に委託することとし、その準備と実施を現場作業と併行して進めた。

遺構数など当初の見込みを大きく上回る状況であったが、天候に恵まれたこと、多くの応援により、11月上旬にドローンによる空中写真撮影と地形測量にこぎつけ、11月25日に遺構の掘削と基本土層などの諸記録、各種サンプルの採取を行って発掘調査を終了した。(青山)

第4節 地理的環境

南会津 本遺跡は、福島県会津地方に所在する。会津地方は、浜通り地方・中通り地方とともに福島県を構成する三地方の一つである。福島県はこれとは別に県内を七つの生活圏に区分している。会津地方の生活圏は会津地域と南会津地域からなり、当遺跡は南会津地域に所在する。

南会津地域は奥会津とも呼ばれる。会津盆地以北を除いた会津地方南西部を領域とし、会津地方の約半分の面積を占める。西は越後山脈、南は焼ヶ岳や帝釈山系、東は二岐山や那須連山など、標高1,000～2,000m級の高山に囲まれた、東西約60km、南北約60kmの山間地域で、北東は会津盆地、東は中通り地方、南は栃木県、南西は群馬県、西は新潟県に境を接する。

南会津の大部分を占める山地の多くは、新生代に海底火山の噴出物が堆積してできた緑色凝灰岩(グリーンタフ)や流紋岩などからなり、北部に第四紀火山である沼沢カルデラが位置する。地形は火山噴出物が侵食された急峻なもので、谷底に数多の河川が流れる。阿賀川とその支流である只見川の二大河川がこれら諸河川を集めておおむね北東に流れ下り、合流した後は西に流れを変えて越後山脈を貫いて越後平野の北部に沖積平野を形成し、日本海に注ぐ。

上述のように当地域は日本有数の豪雪地帯である。年間降水量は県内最多で、その主体は雪である。多発する雪崩が表土を削り取ることで形成される雪食地形が卓越することの特徴とする。

平地面積は少なく、その多くは谷底を流れる河川の両岸に形成された河岸段丘である。これら河川に沿う狭小な平地が、当地域の人類活動の主な舞台である。とりわけ、河川に沿う諸街道は諸峠とともに当地域を縦横に結んで交通網を形成し、東北、北陸、関東などと隣接する諸地域をも結ぶ交通路としての役割を担った。近世には多くの宿場が整備され、参勤交代にも利用された。

只見川沿いの街道は、会津盆地と越後平野、北関東を結び、沼田街道と通称される。沼田とは、群馬県北部の沼田である。沼田街道は明治期以降の呼称で、それ以前は、伊北街道、越後街道、越後裏街道、上州街道などと呼ばれた。

この街道は柳津町～只見町間をおおむね東西に延び、只見町からは六十里越・八十里越と通称される二つの峠道によって新潟県長岡市、同三条市に通じる。只見川の支流である伊南川沿いに分岐する街道は南に向かって松枝岐村に至り、さらに分岐して一方は枝折峠を越え新潟県魚沼市に、一方は尾瀬を経て群馬県片品村、さらに沼田市に通じる。阿賀川沿いの街道は会津盆地から南会津町を川沿いに進み山王峠を越えて栃木県日光市に通じる他、いくつかの峠道が中通り地方に通じる。

現在これらのルートは国道などとして整備されている他、人しか通れない道も存在する。当地域の諸街道は隣接諸地域を結ぶ回廊の役割を果たしたが、近代以降、主要幹線の整備が遅かったこともあり、交通路としての重要性は低下した。

金 山 町 本遺跡が位置する大沼郡金山町は、只見川沿いにあって会津盆地と新潟県中越地方のほぼ中間に位置する。町域のおよそ9割は山地で、中央部を只見川が南西から北東へ流れ下り、川沿いの平地に沼田街道(国道252号)とJR只見線が通り、いくつかの集落が連なる。西は只見町、東は三島町と接し、南は昭和村と接する。北は御神楽岳など標高1,000～1,300m級の越後山脈をへだてて新潟県に接し、道は、大塩と本名から阿賀町(旧上川村)空谷に通ずる尾根道、宮崎から只見川を渡り尾根筋を同柴倉に通じる沼越峠(鉾峠)がある。後者は大山越えと呼ばれ、登山口に大山祇神社がある。かつては山入行事を伴う成年式が行われていた。

町の東部には、火口湖の沼沢湖を有する沼沢カルデラが位置する。大沼郡の名はこの湖に由来するともいわれる。只見川沿いに多くの温泉が湧出し、塩分が含まれることや炭酸泉で知られる。

沼沢火山は縄文時代前期末葉に大噴火し、只見川に出現した堰止湖の決壊により下流一帯に大規模な洪水被害をもたらしたことが知られている。堰止湖の範囲は現在の只見町域に達したと考えられ、本遺跡周辺を含む只見川沿いの一帯はこの時に水没したことが明らかとなっている。

遺跡がある大字大塩の地名は、塩分の濃い鉱泉が湧出する大塩温泉に由来すると思われる。

気候・動植物 気候は日本海側気候区に属する。冬季の豪雪で知られ、年間降水量の大半は降雪が占める。山間地のため、夏は比較的過ごしやすい。

雪食地形の卓越する山地部にはブナなどかなる落葉広葉樹林をはじめ変化にとんだ植生がみられ、河川沿いにはユビソヤナギなどの希少種を含む河畔林がみられる。これらの植生により動物種は多様で、他地域で絶滅した動植物も多くみられるとされる。金山町には今もマタギが住む。只見川や支流の伊南川にはダムが建設されるまでサケやマスが遡上した。

春先に初めて現地に赴いた際には熊のものらしきフンが落ちていた。春はキツツキが木を突く音が引切りなしに聞こえ、夏は発掘現場にカワセミが飛来することがあった。

周辺地域の特産品には、三島町のアワ饅頭と会津桐、金山町のアザキ大根(ノダイコン)と赤カボチャ、昭和村のカラムシなどがある。

(青 山)

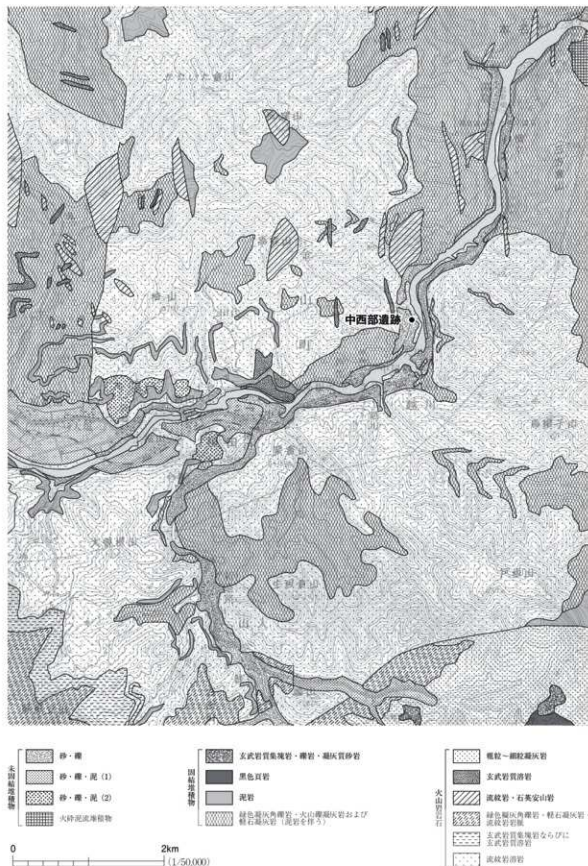


図4 中西部遺跡周辺の表層地質図

第5節 歴 史 的 環 境

南会津地域における人類活動のもっとも古い痕跡は旧石器時代のものである。只見町猿倉遺跡、同蒲生A遺跡などが知られている。

縄文時代草創期には、西会津町塩喰岩陰遺跡の他、爪形文土器が採集されている南会津町(旧南郷村)高清水遺跡などが知られる。遺跡数が増加するのは縄文時代早期である。早期の昭和村小峠遺跡、同一坪田遺跡、同矢の原A・B遺跡など、南会津町(旧田島町)石橋遺跡などが知られている。

温暖化が進んだ縄文時代前期には遺跡数がさらに増加し、会津地方では堅穴住居跡やフラスコ形の貯蔵穴が確認され始める。縄文時代前期末葉に沼沢火山が大噴火し、只見川流域の遺跡数は激減する。これらの地域で縄文時代前期末葉以前の遺跡がほとんど確認されないのは、この噴火による噴出物下に埋没したためと考えられる。南会津町域や下郷町域などは噴火の影響をさほど受けなかったと考えられ、南会津町(旧田島町)寺前遺跡や、下郷村南倉沢遺跡などの遺跡が知られている。

只見川流域でふたたび遺跡数が増加するのは縄文時代中期中葉で、南会津地域では縄文時代を通じてこの時期の遺跡数が増える。金山町石神平遺跡(22)、同寺岡遺跡(14)、只見町窪田遺跡、柳津町石生前遺跡のように、河岸段丘などに堅穴住居跡からなる大規模な集落が形成される。

寒冷化が進んだとされる縄文時代後期に遺跡数は減少に転じ、遺跡の多くが山間部に立地するなどの変化がみられる。金山町石神平遺跡、桧枝岐村下ノ原遺跡などが知られる。

縄文時代晩期前半までこの傾向が継続するが、同後半に遺跡数は増加に転じる。この時期の遺跡に、柳津町砂子原居平遺跡、三島町小和瀬遺跡、同荒屋敷遺跡、只見町宮前遺跡などがあり、同末葉には只見町窪田遺跡、金山町宮崎遺跡などの再葬墓が営まれ始める。これらの遺跡の多くは弥生時代中期まで継続する。下郷町や田島町など阿賀川上流域では、弥生時代中期の二ツ釜式期に遺跡が急増することが指摘されているが、続く川原町口式期に遺跡数が激減する。同後期にもこの傾向は継続し、三島町小和瀬遺跡、同銭森遺跡などでこの時期の土器の出土が知られるのみである。

古墳時代も、当地域における遺跡の確認例は少ない。会津盆地に多くの古墳が築造されるが、南会津地域では金山町の沼沢山山頂の平地に径約30mの円墳である塚原古墳が知られるのみである。

文献記録によれば7世紀中頃に陸奥国が成立したとされる。会津地方には会津郡が成立し、『和名類聚抄』には、伴々(伴部)、多具、長江、倉精、菱方、大島、屋代、大江、余戸の各郷が記される。平安時代には、耶麻郡、大沼郡、河沼郡が会津郡から別れた。これらは、会津四郡とも呼ばれる。

南会津地域は遺跡数がきわめて少ない状況が継続する。金山町黒岩洞穴遺跡で土師器の小片、只見町亀岡三ツ岩岩陰遺跡でロクロ土師器が出土しているなど、当地域における古墳時代から古代にかけての遺跡は他地域と異なる様相がみられる。平安時代後期以降、磐梯山麓の恵日寺が権勢をもち会津を治めたが、源平の争いで平氏に組して衰退し、奥州藤原氏が勢力を伸ばす。

1189(文治5)年、源頼朝は奥州藤原氏との戦いに功のあった関東武士に奥州藤原氏に組みした

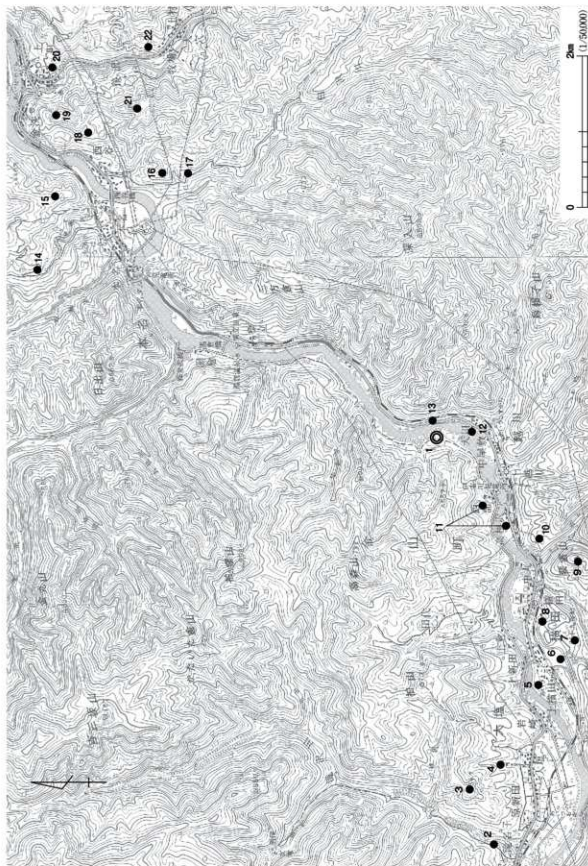


図5 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	時代	種別
1	中西部遺跡	金山町大字大塚字中西部	縄文・弥生・平安	集落跡
2	中ノ平遺跡	金山町大字滝沢字中ノ平	縄文	散布地
3	中山城跡	金山町大字大塚字中山・上平・要害山	中世	城館跡
4	大塚炭酸鉱泉	金山町大字大塚字地獄谷	近代	その他
5	上横田館跡	金山町大字横田字上横田	中世	城館跡
6	横田鉱山	金山町大字横田字上横田	近代	その他
7	四十九院遺跡	金山町大字横田字大曾根	縄文	散布地
8	本城寺跡	金山町大字横田字大曾根	中世	社寺跡
9	中丸城跡	金山町大字横田字要害山	中世	城館跡
10	高根沢ノ橋	金山町大字横田字高根沢	中世	城館跡
11	高根沢館跡	金山町大字横田字高根沢	中世	城館跡
12	桶場遺跡	金山町大字越川字大川	縄文	散布地
13	中の沢遺跡	金山町大字越川字市野	縄文	散布地
14	寺岡遺跡	金山町大字本名字寺岡	縄文	散布地
15	鞍掛ノ館跡	金山町大字本名字夏井	中世	城館跡
16	西谷ノ館跡	金山町大字西谷字八幡山	中世	城館跡
17	荒新田遺跡	金山町大字西谷字荒新田	縄文	散布地
18	芋窪遺跡	金山町大字西谷字芋窪	縄文	散布地
19	玉縄城跡	金山町大字川口字梵天山	中世	城館跡
20	上町遺跡	金山町大字川口上馬場	縄文	散布地
21	雀の館跡	金山町大字西谷字雀の館	中世	城館跡
22	石神平遺跡	金山町大字小栗山字堂平	縄文	集落跡

者の所領を没収して与え、会津四郡に、会津郡の蘆名氏、長江荘の長沼氏、伊南の河原田氏、伊北と金山谷の山内氏が入部した。鎌倉～戦国時代の約400年間、これら会津四氏が会津地方を治めた。

鉱山の多い金山町周辺は金山谷と呼ばれ、山内氏が横山城を築いたことが『会津旧事雑考』に記される。当地域の城館跡の多くはこの時期に造営されたと考えられ、金山町横田にある丸山城跡や中丸城跡をはじめとする城館跡は、山内氏とその分家や家臣の居城に比定される。

1589(天正17)年、蘆名氏は摺上原合戦で伊達政宗に敗れて滅亡した。伊達政宗は次いで南会津の山内・河原田両氏を攻めたが、そのさなか豊臣秀吉の奥州仕置により会津全域が没収されて蒲生氏郷領となり、伊達政宗による会津支配は1年余りで終わった。蒲生氏の御家騒動を経て会津は上杉領となったが、関ヶ原合戦に勝利した徳川家康により蒲生氏が再入部し、1627(寛永4)年、同氏にかわり加藤嘉明が入部した。南会津地域は南山御藏入領と呼ばれ、1643(寛永20)年の加藤氏改易後は保科正之が藩主となった。1687(貞享4)年に幕府直轄地となった後は、会津藩預り領と幕府直轄領となることを繰り返した。この時期、郡代官の指導による新田開発が行われた。

近世会津の特産は蠟と漆で、会津藩はこれを専売制とした。戊辰戦争の際は、南会津地域の諸道が長岡藩への物資の補給路となり、西軍が会津若松へ進む経路ともなった。

1871(明治4)年の廃藩置県で会津地方は若松県となり、1876(明治9)年に福島県に併合された。1889(明治22)年の町村制施行により現在の金山町には、沼沢、川口、本名、横田、大滝の各村が

発足、1955(昭和30)年の合併により金山村が成立し、1958(昭和33)年に金山町となった。

戦後、只見川の電源開発により流域一帯に多くのダムが建設された。1971(昭和46)年に只見線の只見―新潟県入道村大白川間が開通し、会津若松市から新潟県小田町が鉄道で結ばれた。

現在は人口減少が進み、金山町は福島県でもっとも高齢化率が高い自治体である。(青山)

第6節 調査方法

調査と整理は、文化庁文化財部記念物課監修『発掘調査の手引き』を参照し下記の通り行った。

発掘調査にあたっては、調査区全体を覆う10×10mの方眼(グリッド)を設定し、東西方向はアルファベットの英文字、南北方向はアラビア数字を用い、その組み合わせによって呼称した。グリッドの方位と座標は国土座標第Ⅸ系に一致させた。グリッド境の交点には木杭を打設し、これをグリッド杭と称した。グリッド杭は遺構の実測を行う際の基点とし、必要に応じて標高杭とした。

表土の除去の大部分は機械力によって行った。試掘調査によって遺物が多く含まれることが判明していた調査区中央部の表土の除去、遺構の検出と掘り込みは人力で行った。遺構の掘り込みに際しては、土層観察用の畔を残すか半裁した。検出された遺構は遺構の種別ごとに通し番号をふった。土坑とピットについては、おおむね規模50cm以上を土坑、これ未満をピットとした。

遺構の記録は、写真撮影、実測、註記によって行った。ピットについては平面図の実測と深さの記録のみとした。平面図の実測は光波測距儀を用い、断面図の実測は水平に張った糸から測り込んだ。平面図には、遺構内各所の標高を実測して記入した。一部の遺構はデジタルカメラを用いた3D計測を併用した。写真撮影はAPS-Cサイズ一眼レフデジタルカメラを用い、RAWとJPEG形式で記録した。撮影に際してはグレースケールを写し込んだ。

遺跡に堆積する土層は基本土層と呼び、「L」とローマ数字によってLⅠ・Ⅱ・Ⅲ…、遺構内堆積土層は「ℓ」と算用数字によってℓ1・2・3…と呼称し、さらに細分された場合にはアルファベットの小文字を用いて、LⅠa、ℓ2b…のように表記した。

出土遺物には、遺構名と層位を付し、遺構外出土遺物はグリッドと層位を付した。遺物量が特に多い調査区中央部にはグリッドを「田」字形に4分割し、北西から時計回りにa～dを付け加えて「G17a」「H18b」などと表記した。遺物の出土状況は、写真撮影と実測によって必要に応じて記録した。一部の遺構の掘削に際しては、掘り上げた堆積土のフルイがけを行った。

土層は『新版標準土色帖』によって各層の土色と土質、含有物などの量・大きさなどを記録した。

遺跡の全景写真の撮影と地形測量は、遺構の掘り込みが終了した時点で調査員立ち合いのもと委託業者がドローンによって上空から行った。

発掘調査で得られた各種記録と出土遺物は、(公財)福島県文化振興財団遺跡調査部で整理作業を行った。出土遺物の水洗いとネーミング、石器実測の大部分は外部委託した。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管される。(青山)

第1章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概観

本遺跡は、只見川左岸の河岸段丘上に位置する。只見川兩岸に形成されている段丘は上位・中位・下位の三者があり、本遺跡が所在する段丘は中位砂礫段丘に分類される（福島県農林水産部農村計画課2017『土地分類基本調査 只見・小林』）。この段丘は東流する只見川の流れが南に流れを変えてすぐの位置にある。

本遺跡がある段丘面の平面形は、南北に長い半月形である。東側は只見川を見下ろす断崖で、凝灰岩の岩肌が露出する。西側は越後山脈の東麓斜面である。北側は運張沢と呼ばれる溪谷によって画され、只見川との合流点を間近に見下ろす。南側は段丘の幅を狭く絞めて急斜面に移行する。

段丘の上面は、標高によって二分することができる。標高の高い北西部と標高の低い南東部で、両者の間には傾斜の緩やかな段丘崖が形成されている。標高差は4～5mで、それぞれ上面はおおむね平坦である。

上流側約0.6kmに位置する河岸段丘には西部集落があり、本遺跡がある段丘面との間に小道が通じている。「西部」という地名は『新編会津風土記』に初めてみえる。下流側約3.0kmに位置する河岸段丘にある湯倉集落との間にも小道が通じているが、現在は廃道となっている。現在の只見川の水位は下流の本名ダム完成後のもので、かつての川岸は水没している。

本遺跡は、この段丘面の北部に位置する。南部は試掘調査によって遺跡の範囲が及んでいないことが確認された。工事が行われる直前は山林で、昭和30～50年代頃まで山裾付近の一部が畑や水田として利用されていたことが国土地理院の空撮写真から判読できる。地元の方によれば、耕作によって出土した大型の石器が畑の脇に積まれていたという。

工事前まで段丘面の北部に栗林があり、只見川に面した急斜面にはかつて湧き水があったようである。遺跡付近は水はけがよく、降雨で水たまりができて翌日はしみ込んでいた。

只見川は遺跡の東側で川幅が狭まっており、地元の方の話ではこの狭窄部分を「ヤビツ」と称しているという。どのような字を当てるのかはわからないとのことである。

遺跡からの眺望は、雪食地形の発達した山々を四周に仰ぎ、東と北は只見川の緑色がかった流れを臨む。南東側の只見川対岸にはJ R只見線と国道252号（沼田街道）が通り、列車や車の往来を目の当たりにする。国道の位置は本遺跡より標高が低く、往来をやや高い位置から見下ろす形になる。その背後の山の頂には岩肌が露出する急崖がそびえ立ち、薄緑色と灰色の凝灰岩が層をなすのが望見される。只見川対岸の山の急斜面は時折崩落し、発掘作業中にその崩落音が聞こえてくることがあった。秋は只見川の川面から立ちのぼる霧がしばしばみられた。

遺跡の西側は越後山脈の山裾、東側は只見川の断崖、北は只見川に注ぐ運張沢溪谷に画され、南

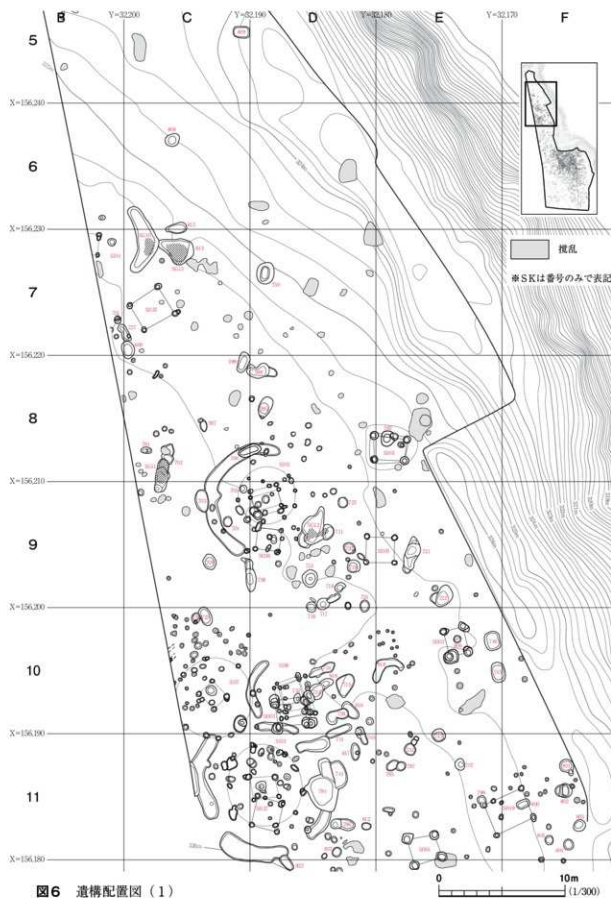
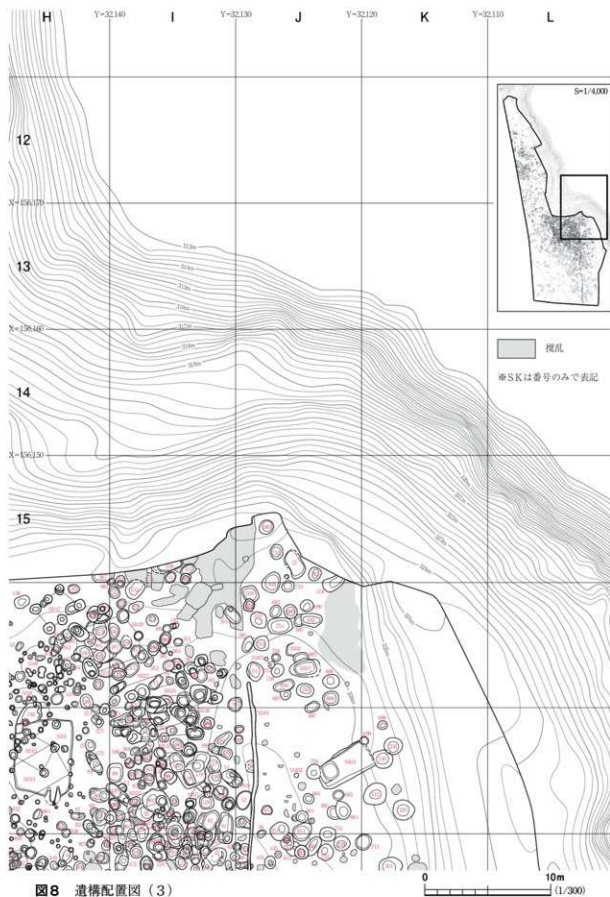
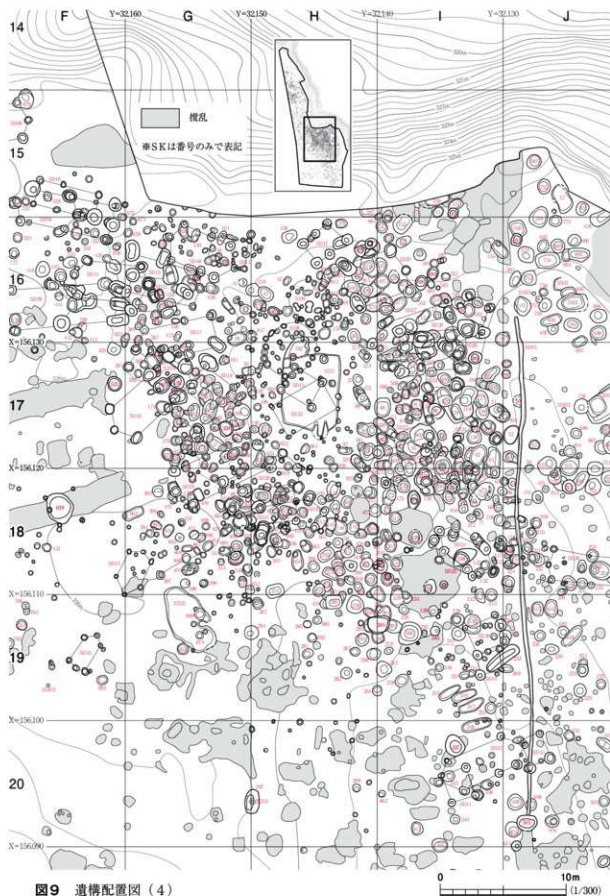


図6 遺構配置図(1)



図7 遺構配置図(2)





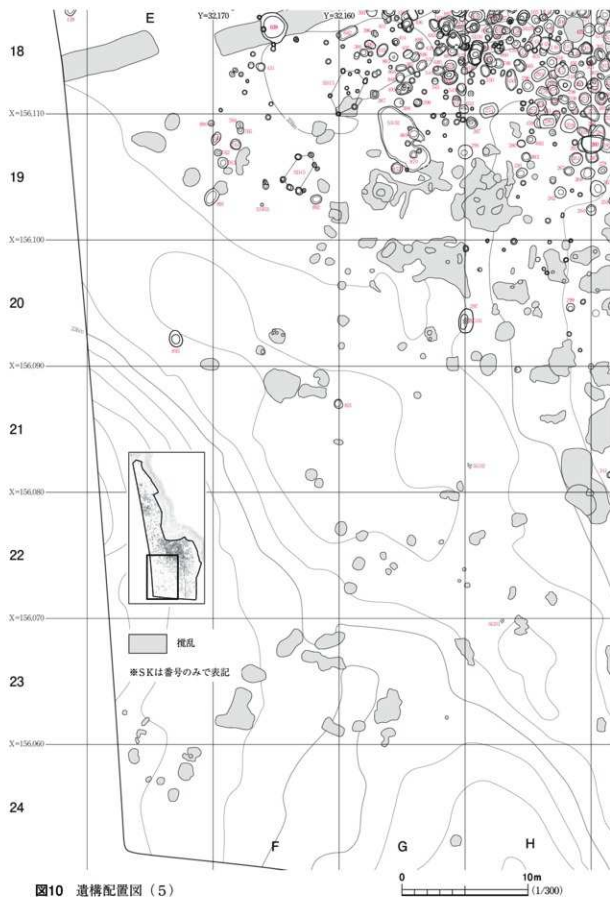


図10 遺構配置図(5)

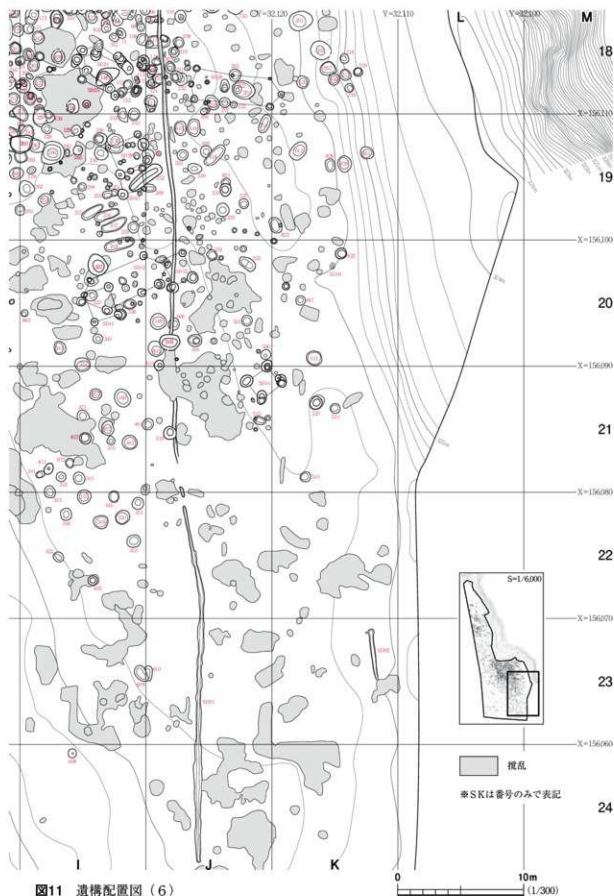


図11 遺構配置図 (6)

側には段丘の平坦面が広がる。遺跡の範囲は、東西150m、南北230m、面積20,000㎡である。戦後の一時期、遺跡の西部に水田と畑が造成されたものの、調査前の時点では林となっていた。

発掘調査を行ったのは、河川改修工事で掘削される遺跡の東部である。調査区は、東西約110m、南北約230m、面積12,000㎡で、南北に長い。確認された遺構は、堅穴・平地住居跡9軒、掘立柱建物跡50棟、土坑711基、溝跡2条、集石遺構2基、配石遺構1基、土器埋設遺構3基、焼土遺構13基、性格不明遺構2基、ピット799基である。掘立柱建物跡については、単に建物跡とする場合がある。調査区のほぼ中央は、只見川に面した急崖を侵食する開析谷によって挟られている。調査区は、これを境に北部と南部に分けることができる。

北部は只見川と運張沢溪谷に向かって緩やかに標高を減じ、遺構の密度は相対的に低い。平安時代の堅穴住居跡、弥生時代中期と同後期の周溝をもつ平地住居跡や掘立柱建物跡、土坑、ピットなどが位置する。

南部は、南端付近に浅谷がみられる他はおおむね平坦で、只見川に面したごく一部分が段丘崖を挟んでテラス状に一段低くなっている。表土を除去すると、砂質土を基調とする層が調査区の大部分に広がり、下層の砂礫層が部分的に露出した。上述した調査区中央部の開析谷に接した部分に遺構が密集し、この部分を本書では中央部と呼ぶことがある。

遺構が密集する部分は、東西約30m、南北約30mで、中央部に位置する遺構が少なく、全体として環状をなす。遺構の大半は、建物跡、土坑、ピットである。深い掘り込みをもち柱痕跡が認められる柱穴も多く確認された。

これらを覆っていた表土は、調査前に行われた伐採と伐根によって部分的に攪乱され、これにより壊されていた遺構も少なくない。表土とこれら攪乱層には、大量の遺物が含まれていた。遺物は、縄文時代晩期～弥生時代中期のものが大半で、縄文時代後期、弥生時代後・終末期、古代、近世の遺物が少量出土した。

環状を呈する遺構密集部分の中央部、遺構の密度が低い部分に、この調査で検出された平安時代の2軒の堅穴住居跡のうちの1軒が位置する。

遺構密集部分の東側、只見川に面した部分は遺構の密度は相対的に低いものの、集石遺構、配石遺構、土器埋設遺構などが位置する。このうち配石遺構と土器埋設遺構の1基は縄文時代後期のものである。調査区内で確認された縄文時代後期の遺構はいずれもこの場所にある。

調査区南部のうち、只見川と前述の開析谷に臨むⅠ16グリッド付近は伐根による攪乱を受けていたものの、フルイがけによって約150点の管玉が出土した。ここに大量の管玉を蔵する遺構があったと推定される。

発掘調査で確認された遺構の年代は、以上のように縄文時代後期、縄文時代晩期～弥生時代中期、弥生時代後・終末期、平安時代のもので、他に近世の溝跡が1条、調査区南部の東部に只見川に並行するように南北約80mにわたって延びる。

(青 山)

第2節 基本土層

「表層地質調査」によると、本遺跡が位置する河岸段丘を含む只見川兩岸に形成される中位段丘には未固結の礫と砂が堆積する（中村洋介2018「表層地質調査」『土地分類基本調査 只見・小林』福島県農林水産部農村計画課）。

試掘調査時の土層観察では、遺跡の表層はシルト質の黒色土で覆われ、直下に褐色砂質土の堆積が確認された。さらに、遺構が数多く分布する調査区中央部では、表土層と褐色砂質土層との間に遺物が多量に含まれる層が2層確認された。以上のような所見をもとに、表土をLⅠ、遺跡中央部の遺物を多く含む二つの層をLⅡ・Ⅲ、その下層に堆積する褐色砂質土層をLⅣとした。

本発掘調査でもこの層序を踏襲し、さらに調査区内各所に土層観察のためのサブトレンチを掘削することで、これらの下層に堆積する土層の観察と記録を行った。その結果、LⅣが地点によって複数の層に細分されること、LⅣの下層には段丘礫層と考えられる砂礫層が調査区内のほぼ全域に堆積していることが把握された。この砂礫層をLⅤとした。

表土であるLⅠを除去すると、遺跡中央部を除く調査区の大部分にLⅣが堆積しており、一部にLⅤが露出した。遺構の多くはLⅣの上面、一部はLⅤの上面で検出された。

調査区南部にある浅谷地形の堆積土の観察では、LⅠが細分された。これらをLⅠa～gとした。遺物は含まれず各層の年代は明らかにできなかったが、最下層で縄文時代後期初頭の土器が出土したことから、これ以降、現代までの間に堆積したと考えられる。

各層の概要は、下記の通りである。

- LⅠa 黒色土 10YR1.7/1（表土）
- LⅠb 黒褐色土 10YR3/2（炭化物粒少量）
- LⅠc 黒褐色土 10YR2/2（炭化物粒少量）
- LⅠd 黒色土 10YR2/1
- LⅠe 黒色土 10YR1.7/1（暗褐色土斑状に含む）
- LⅠf 黒褐色土 10YR2/2（炭化物粒微量）
- LⅠg 暗褐色土 10YR3/3（褐色砂質土斑状に含む）
- LⅡ 黒色土 10YR2/1（小礫・礫を多量）
- LⅢ 黒褐色砂質土 10YR2/3（炭化物粒を微量）
- LⅣ 褐色砂質土 10YR4/4
- LⅣa 褐色砂質土 10YR4/4
- LⅣb 褐灰色砂質土 10YR5/1
- LⅣc 褐灰色砂 10YR5/1（礫少量）
- LⅤ にぶい黄褐色砂 10YR5/4（礫多量）

（青 山）

第3節 竪穴・平地住居跡

本遺跡の調査において、調査区中央部から竪穴住居跡1軒、調査区南半部北寄りから竪穴住居跡1軒と平地住居跡2軒、調査区北半部から平地住居跡5軒が検出された。竪穴住居跡は平面形が長方形を呈し、平安時代のものである。調査区南半部北寄りの平地住居跡は地表面を床面とし、壁際に巡る側柱穴で屋根荷重を受けるタイプの住居跡である。平面形が円形ないしは楕円形と推測され、縄文時代のもので推測される。調査区北半部の平地住居跡は地表面を床面とし、方形に配された主柱穴とその周囲に巡る側柱穴で屋根荷重を受けるタイプの住居跡で、平面形が円形と推測され、外周溝を伴い、弥生時代のもので推測される。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図13～15、写真14・15)

本遺構は調査区南半部のH17グリッドに位置し、平坦面に立地する。LIV上面において検出したが、表土掘削時に設定したH17グリッド中央部を東西方向に横断する土層観察用畦の断面観察(図13のC-C')により、LII上面から掘り込まれていることを確認した。本遺構は8号住居跡、10・33号建物跡、782・832号土坑、H17P40・45・47・49・50・52・54・55と重複し、これらより本遺構の方が新しい。

平面形は南北主軸の不整長方形で、東に行くにつれて南北長が長い。規模は、南北長5.1～6.1m、東西長4.6mを測る。周壁はLIVで、南西部は傾斜が緩いが、他では全体的に直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。壁高はLIV上面で検出された部分では14～23cmであるが、LIIからの掘り込みを確認した部分では44cmを測る。床面はほぼ全面が貼床であるが、北半部は調査の際に掘りすぎてLVの礫が多く露出している。南半部では若干起伏が認められ、壁際を除いて踏み締まりが認められる。また、北西隅は床面より約5cm高く、65×50cmの台状を呈している。なお、南東部の東壁際からは長さ2～10cmの破砕された礫59個と楕円礫2個がまとまって出土した。破砕された礫は、長さ4～7cmのものが全体の約7割を占め、被熱しているものも認められることから、円礫が被熱後に破砕されたものと推測される。

遺構内堆積土は6層に分層され、ℓ1～5は遺構廃絶後の堆積土、ℓ6は貼床土である。なお、北東部のℓ3には炭化物が含まれているが、これはℓ3の堆積過程において住居外から廃棄されたものと推測される。また、北東部の北壁際のℓ5から土師器杯がほぼ正位の状態でも出土し、東壁中央部の壁際の床面から鉄製刀子が出土した。

南壁東半部からカマドが検出された。カマドの規模は、幅88～135cm、奥行き120cmを測る。両袖は直線的に張り出し、内壁は直立気味に立ち上がり、被熱硬化している。その焼土化は壁面から最大12cmまで及んでいた。左袖は長さ70cm、幅15～50cm、高さ8～20cmを測り、右袖は長さ

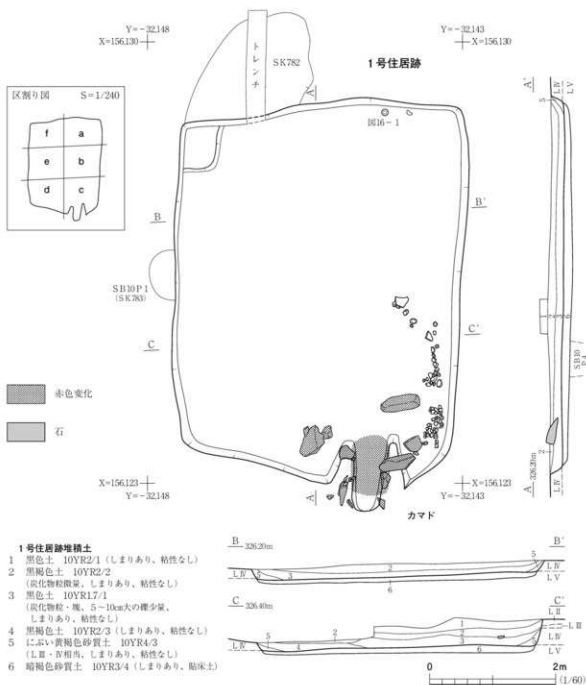


図13 1号住居跡(1)

55cm、幅18~50cm、高さ15cmを測る。底面は焚口から40cmは平坦であるが、そこから奥は緩やかに上昇している。幅は焚口で50cm、奥で28cmを測る。焚口から97cmは被熱硬化し、焼土化は底面から最大15cmの深さまで及んでいた。カマドを断ち割ったところ、燃烧部は掘形をもち、この掘形内に粘質土を客土して構築されていることが判明した。また、両袖脇や両袖上、堆積土内から大型礫を含む表面が赤色変化した礫が出土していることから、袖は礫を芯材にして構築されていたと推測される。さらに、左袖手前35cmの床面から出土した62×24×22cmの大型礫は、焚口の天井に掛けられていたと推測される。

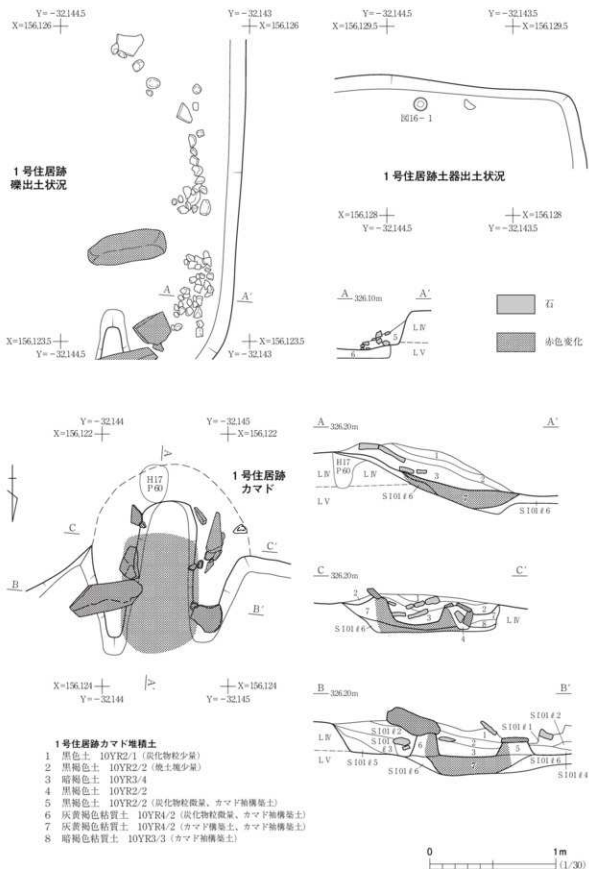


図14 1号住居跡 (2)

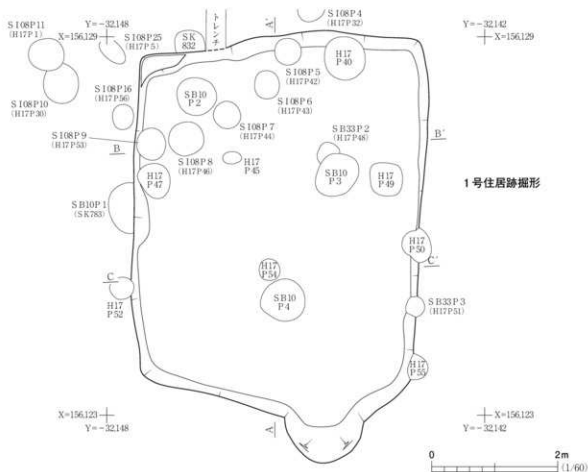


図15 1号住居跡(3)

カマド燃焼部の堆積土は8層に分層される。ℓ1～3はカマド廃絶後の流入土で、ℓ4はカマド廃絶時に右袖の芯材を抜いた穴に堆積した土、ℓ5～8は燃焼部構築土である。

住居跡の掘形はLVを掘り込んでおり、底面は平坦であるが、砂質で締まりがない。

遺物(図16、写真176・177・242・285)

本住居跡からは、土師器5点、縄文・弥生土器660点、鉄製品1点、石器・剥片213点が出土した。このうち、土師器3点、弥生土器1点、鉄製品1点、石器4点を図示した。

図16-1～3は、土師器の杯である。1はロクロ成形で、糸切り痕を残す平底から緩やかに湾曲しながら外傾し、口縁部に至る。外面はロクロナデ、内面は黒色処理が施され、剥落のため明瞭ではないもののわずかにミガキが観察される。剥落は底部と体部下半が特に激しい。外面は二次被熱により赤変劣化する。内外面とも口縁部付近に油煙が部分的に付着していることから、燈明皿として使用されたと考えられる。2は体下部の小片である。平底で、底面に回転ヘラケズリ、体部外面にロクロメ、内面にミガキのち黒色処理が施される。3は、口縁部の一部が遺存する。輪積み成形と思われる。内外面ともミガキが施され、内面に黒色処理が施される。

同図4は、弥生土器の蓋である。つまみ部付近が遺存する。つまみ部の上面は凹面をなし、つまみ部から体部に向かって緩やかに広がる。口縁部は遺存していないものの、全体の器形は笠形と考

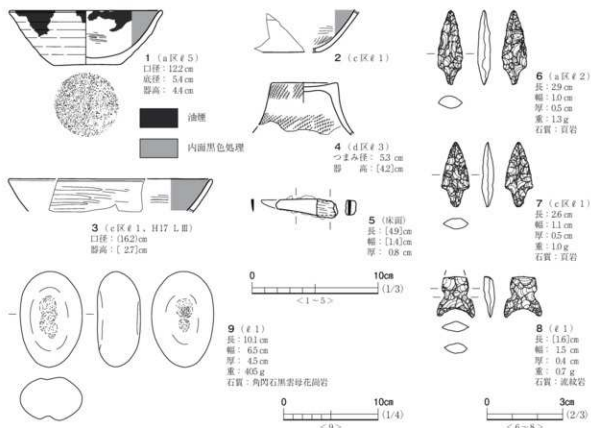


図16 1号住居跡出土遺物

えられる。外面つまみ部下半の無文帯を挟んでつまみ部上半と体部に縄文が施される。

同図5は鉄製の刀子である。切先と柄の端を欠失する。柄に木質が遺存する。

同図6～8は石鏃である。8は先端を欠損する。6・7は凸基、8は基部の両側縁に抉りをもつ。

同図9は凹石である。こぶし大のやや扁平な自然礫の両面に凹みが穿たれる。凹みは礫の長軸方向に細長く穿たれ、それぞれ特に深い部分が2・3箇所みられる。

まとめ

本遺構は南北主軸の不整長方形を呈する竪穴住居跡で、南壁東半部にカマドが付されている。主柱穴等の柱穴は確認できなかった。カマド周辺には被熱して赤変した大小の礫が散在することから、これらの礫を芯材にしてカマドが構築されていたことが推測される。時期は、出土遺物から平安時代と推測される。

(能登谷)

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図17・18、写真16)

本遺構は調査区中央部のD・E 14グリッド、E 15グリッドに位置し、平坦面に立地する。L IV上面において検出した。本遺構の東方には只見川に向けて開口する沢が入り込み、北東70cmから644号土坑、南東約2mから656号土坑が隣接して検出された。なお、北東壁中央部から南方にかけては後世の攪乱を受けている。

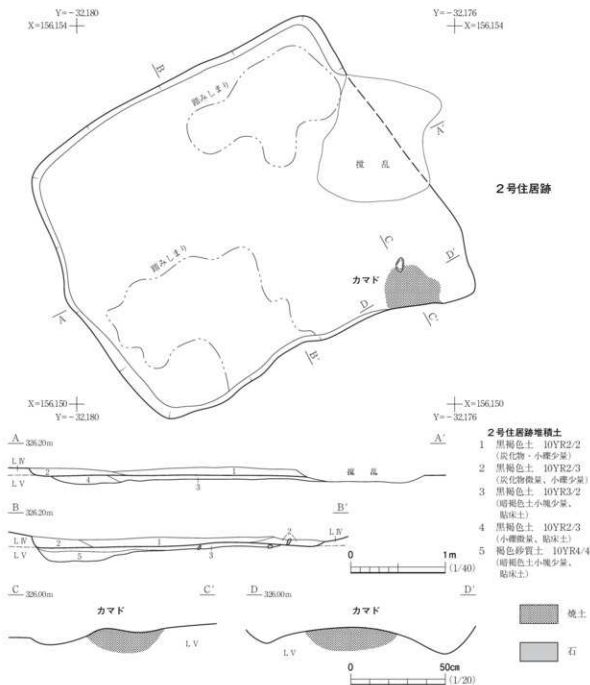


図17 2号住居跡(1)

平面形は北東-南西主軸の不整長方形で、規模は、長軸長3.9m、短軸長3.2~3.5mである。周壁は北東壁中央部から南壁東部にかけて後世の攪乱や削平により残存していないが、それ以外はLIVで、南西部で緩く立ち上がる他は直立気味ないし直線的に急外傾して立ち上がる。壁高は5~11cmで、北西隅付近で最大である。床面は壁際を除いて貼床であるが、調査時に掘りすぎてLVの礫が露出している部分がある。床面には若干起伏が認められ、北東部と南西部には踏み締まりが認められる。後世の削平を受けている南東壁の東端付近から焼土面が検出された。カマド燃焼部の名残と考えられる。焼土面の規模は58×44cmで、焼土化した範囲は深さ13cmまで及んでいた。

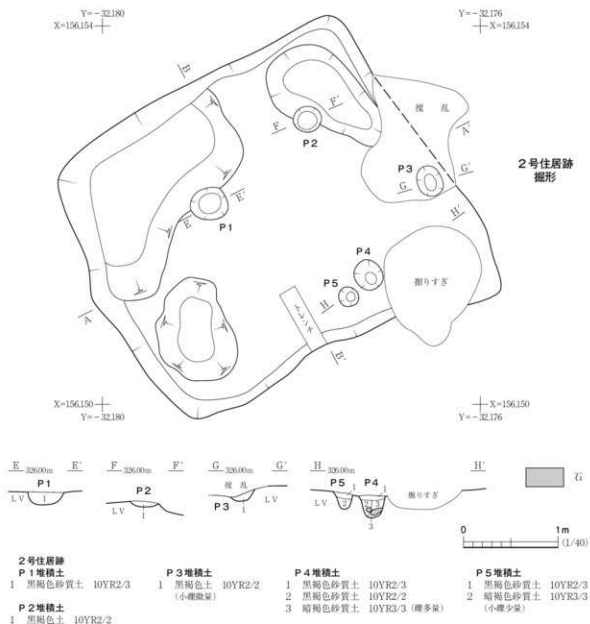


図18 2号住居跡 (2)

遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ 1・2は遺構廃絶後の堆積土、ℓ 3～5は貼床土である。

住居掘形はLVを掘り込んでいるが、北東部・西北部・南西部がそれぞれ深く掘り込まれ、中央部は平坦である。底面から柱穴と推測される平面形が円形ないしは楕円形のピットが5基検出されたが、それらの配列に規則性は認められない。それぞれのピットの規模は、P 1は40×35cm、P 2は30×27cm、P 3は34×26cm、P 4は33×30cm、P 5は径21cmを測る。

本遺構からは、弥生土器22点、剥片3点が出土した。図示できた遺物はない。

まとめ

本遺構は北東-南西主軸の不整長方形を呈する竪穴住居跡で、南東壁東端手前にカマドがあったと推測される。時期を推測可能な出土遺物はないが、平安時代と推測される。(能登谷)

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図19・20、写真17・18)

本遺構は調査区北半部のC・D10～12グリッドに位置し、平坦面に立地する。遺構の大部分はL IV上面において検出されたが、東側外周溝と南側外周溝付近は表土掘削時に削平しすぎたことから、L V (砂層) 上面での検出である。6・7号住居跡、3A・B号建物跡、37号建物跡、744・794・922号土坑、C11P1～5、D10P13、D11P6～10と重複し、7号住居跡、744・794・922号土坑、C11P4、D11P8より古く、3A・B号建物跡、D11P9より新しい。この他の遺構との新旧関係は不明である。また、西端部は調査区外に延びている。

平面形は円形で、35基のピットと外周溝から構成され、ピットは外周溝の内側に存在する。

外周溝は一連のものではなく、断続的に環状に巡る弧状及びブーメラン形の4基の溝状土坑(S K 730・738・792・793)として検出された。これらの溝状土坑が東西南北に存在することから、便宜的にS K 793を東側外周溝、S K 792を南側外周溝、S K 730を西側外周溝、S K 738を北側外周溝と呼称した。

東側外周溝中央部は744・794号土坑と重複し、西側外周溝の中央部が調査区外に存在することから、遺構全体の東西長は不明であるが、南北長は南北それぞれの外周溝の外縁間で計測すると11.2mで、北西-南東方向の長さは東西それぞれの外周溝の外縁間で計測すると11.8mである。また、外周溝に囲まれた内側の規模は、南北長9.2m、北西-南東方向の長さ9.8mを測る。

東側外周溝は長さ7.3m、幅95cm、深さ10～20cmを測り、周壁は全体的に緩やかだが部分的に急外傾している。底面はL V (砂層) で、ほぼ水平である。南側外周溝は長さ5.7m、幅0.9～1.7m、深さ7～13cmを測り、周壁は急外傾している。底面はほぼ水平であるが、東半はL V (砂層) で、西半はL V (砂礫層) である。西側外周溝は長さ7.1m、幅1.05～1.3m、深さ5～17cmを測り、周壁は全体的に緩やかであるが、部分的に急外傾している。底面はほぼ水平でL V (砂層) が大半であるが、北半部ではL V (砂礫層) が認められる。北側外周溝は遺存長3.5m、幅0.5～0.7m、深さ10～25cmを測り、周壁は全体的に緩やかであるが部分的に急外傾している。底面はL V (砂層) で、それぞれの端部から反対方向へ緩く下降している。各外周溝内の堆積土は1～4層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。

ピットは外周溝の内側に当初39基検出したが、そのうち、3基(P 6・8・22)は37号建物跡の柱穴に変更し、P 38は調査の結果、欠番とした。なお、P 27は37号建物跡P 4と同位置に存在する。

P 1は本遺構の中心に存在する。平面形は不整形で、長軸長108cm、短軸長86cmを測る。周壁中に傾斜変換点を持ち、下半部は急外傾している。

P 2～5はP 1を長方形に囲み、主柱穴と推測される。柱痕ないしは柱穴の芯々間における柱間寸法は、P 2-3間が2.0m、P 3-4間が1.6m、P 4-5間が2.0m、P 2-5間が1.7mである。P 2は平面形が楕円形基調のものであるが、西壁上部が広がっている。長径72cm、短径45cm、深

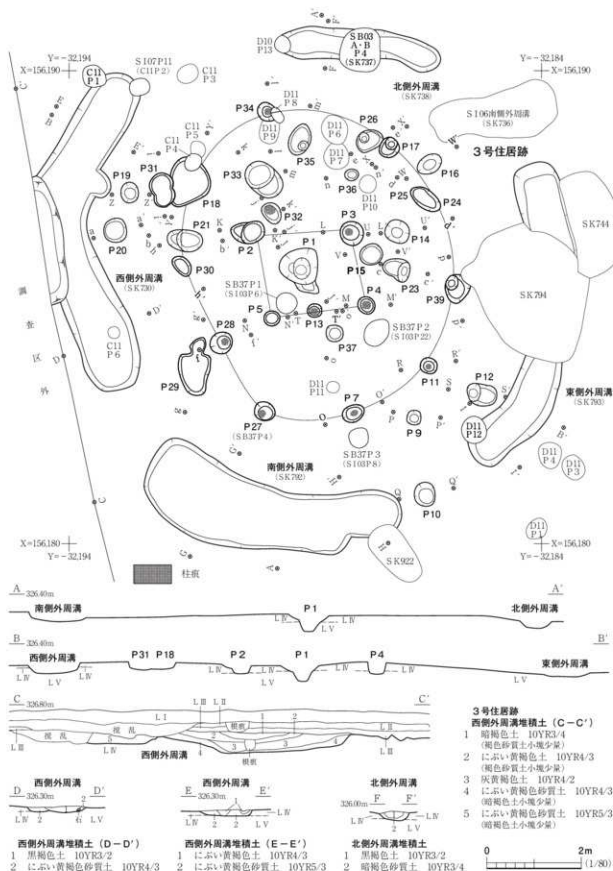


図19 3号住居跡 (1)



図20 3号住居跡 (2)

さ23cmを測る。P 3～5は平面形が円形ないし楕円形で、P 3は径52cm、深さ23cmを測り、P 4は長径40cm、深さ25cm、P 5は径34cm、深さ19cmを測る。また、P 3・4の堆積土には柱痕が認められ、その規模はP 3では径16cm、P 4では径18cmである。

P 7・11・17・18・24・27・28・30・34・39はP 2～5の外側を回り、支柱穴と推測される。これら10基のピットは、北西～南東主軸の長径6.5m、短径5.4mの不整楕円形の線上に存在し、柱痕ないし柱穴の芯々間における柱間寸法は、P 34～17間2.7m、P 17～24間1.5m、P 24～39間1.7m、P 39～11間1.8m、P 11～7間1.9m、P 7～27間2m、P 27～28間1.7m、P 28～30間1.8m、P 30～18間1.8m、P 18～34間2.2mを測る。P 18は他のピットより規模が大きく浅いが、他のピットは径あるいは長径が38～54cmの円形ないし楕円形である。深さはP 18が10cm、他は15～28cmを測る。なお、P 7・11・27・28・34の堆積土には径11～15cmの柱痕が認められる。

以上の小穴の他にも小穴が20基存在するが、それらの配置には規則性は認められない。

遺物 (図21、写真177)

本住居跡からは、縄文・弥生土器32点、石器・剥片18点が出土した。内訳は、各ピットから縄文・弥生土器が計25点、石器・剥片が計14点、東側外周溝から弥生土器7点、石器・剥片4点である。このうち、弥生土器2点を図示した。37号建物跡と同位置にあるP27出土土器は本遺構に伴うと判断した。

図21-1は、甕の口縁部である。口径が推定40cm以上の大型品と考えられる。器壁はもともと厚い部分で1cm以上である。内傾する体部上半と「く」字に屈曲して外傾する口縁部からなり、口縁部下端に連続する指頭圧痕が施される。内外面にナデが施されたのち、口唇部と口縁部外面にオオバコのものと思われる擬縄文が施される。外面の特に口縁部に炭化物が付着する。口唇部の破断面にも付着することから、一部が欠損した状態で煮炊きされたと考えられる。

同図2は器種不明の体部で、外面にナデののちオオバコの擬縄文が施されたのち、2本の沈線による波状文と横方向に巡る沈線が描かれる。内面には、条を有する工具によってナデが施されている。

まとめ

本遺構は外周溝が断続的に環状に巡る平地住居跡である。遺構の中央部にP 1が存在し、これを方形に囲むP 2～5は支柱穴である。さらに、その外側には楕円状に10基の支柱穴が巡っている。なお、外周溝に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかった。

時期は出土遺物から弥生時代後～終末期と推測される。

(能登谷)



図21 3号住居跡出土遺物

4号住居跡 S I 04

遺 構 (図22、写真19)

本遺構は調査区北半部のB 6・7グリッド、C 6・7グリッドに位置し、平坦面に立地する。L IV上面において検出された。10号焼土遺構と重複し、本遺構の方が古い。東方に813・815号土坑が近接して検出され、南東1.6mからは35号建物跡が検出されている。遺構の西半部が調査区外に延びていることから全容は不明であるが、ピットを囲むように弧状の溝が検出され、同じく調査区北半から検出された3・5・6号住居跡と状況が似ていることから、本遺構もそれらと同様の遺構と推測される。

外周溝は南北方向に延び、中央部で幅が最大となる弧状を呈している。外周溝に囲まれた内側の規模は、径約8mと推測される。外周溝の周壁はL IV～Vが露出し、全体的にやや急な角度で立ち上がるが、南半部では立ち上がりが緩やかな部分がある。底面はL V(砂層)で、緩やかな起伏が認められ、全体的に北に緩やかに下降している。規模は、長さ5.9m、幅1.0～1.7m、深さ30～40cmを測る。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。ℓ 1上面から10号焼土遺構が検出された。

ピットは、外周溝の西側に4基存在する。そのうち、P 1・2は主柱穴と推測される。P 1は平面形が不整楕円形であるが、北側が深いのに対して、南側は浅く南方に延びている。北側の堆積土断面に柱痕が認められる。長径63cm、短径42cm、深さ36cmを測り、柱痕幅は14cmを測る。P 2は平面形が不整楕円形で、堆積土断面に柱痕が認められる。長径40cm、短径28cm、深さ32cmを測り、柱痕幅は13cmを測る。また、P 1～2間の芯々間における柱間寸法は1.7mである。

P 3・4はP 1・2と外周溝の間に存在し、芯々間における柱間寸法は2.1mを測る。P 3は平面形が楕円形で、堆積土断面に柱痕が認められる。長径52cm、短径39cm、深さ17cmを測り、柱痕幅は14cmを測る。P 4は平面形が不整隅丸方形で、長軸長62cm、短軸長60cm、深さ24cmを測る。堆積土に柱痕は認められない。

遺 物 (図22、写真177)

本住居跡からは、縄文・弥生土器49点、石器・剥片7点が出土した。P 1から縄文・弥生土器1点が出土した他は、いずれも外周溝から出土した。このうち、弥生土器4点を図示した。

図22-1は、壺の口縁部である。外面口唇部直下に平行する2本の沈線が巡らされ、その下に2本の沈線で弧文が描かれる。口唇部には縄文が回転施文される。

同図2・3は、壺の体上部である。外面に沈線による渦文が描かれ、交互ミガキがまばらに施される。渦文間に、2は菱形の小文が配置され、3は附加条縄文が施される。2は、沈線内に赤色顔料がわずかに残り、外面に炭化物が付着する。

同図4は、壺の体部である。外面に、平行する2本の沈線、鋸歯文、集合沈線が接して描かれる。小片で天地の確証に乏しい。

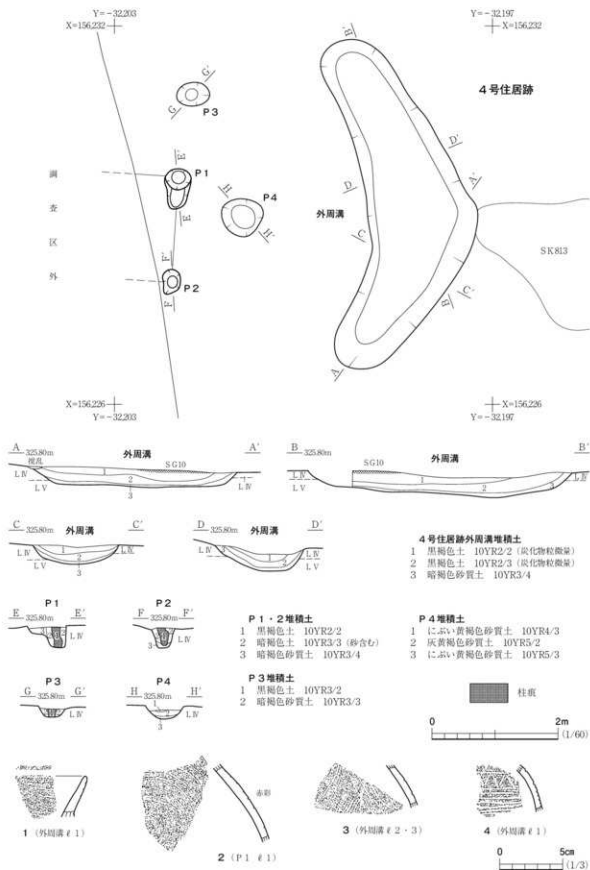


図22 4号住居跡・出土遺物

まとめ

本遺構は外周溝が断続的に環状に巡る平地住居跡と推測され、外周溝の内側の規模は径約8mと推測される。さらに、主柱穴が方形ないしは長方形に配され、主柱穴と外周溝の間に存在するP3・4は円形ないしは楕円形に巡る支柱穴の一部と推測される。なお、外周溝に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかった。

時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。

(能登谷)

5号住居跡 S I 05

遺 構 (図23、写真20)

本遺構は調査区北半部のC8・9グリッド、D8・9グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅣ上面において検出した。36号建物跡、594・703・711号土坑、12号焼土遺構、C9P4～6・8、D8P3・15、D9P41と重複し、いずれよりも本遺構の方が古い。また、遺構範囲内には704号土坑や他にもピットが多く存在するが、本遺構との新旧関係は不明である。

平面形は円形で、ピット17基と外周溝から構成され、ピットは外周溝に囲まれた内側に存在する。

外周溝は一連のものではなく、遺構北部から反時計回りに南西へ弧状に延びる溝跡と、平面形が不整な遺構南東部の溝状土坑(SK710)として検出された。前者を西側外周溝、後者を東側外周溝と呼称した。外周溝が断続的であり、東側外周溝の南東部が広がっているものの、遺構全体の本来の規模は径約9.6mと推測される。また、外周溝に囲まれた内側の規模は約7.4mを測る。なお、外周溝に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められなかった。

東側外周溝は長さ3.5m、幅2.0m、深さ30cmを測り、周壁は両端部付近では急外傾している部分があるが、全体的に緩やかに立ち上がる。底面はLⅤ(砂層)で、起伏が認められる。遺構内堆積土は3層に分層され、人為堆積と推測される。Ⅱ1上面から12号焼土遺構が検出された。

西側外周溝は全体的に整った形をしているが、中央部の東辺が三角形に約35cm東方に張り出している。長さ12.9m、幅0.9～1.1m、深さ12～22cmを測り、周壁は急外傾している。底面はLⅣで緩やかな起伏が認められ、北半部が低くなっている。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然流入土と推測される。

ピットは遺構中心部にP1が存在し、これをP2～5とP6～9が長方形に囲み、さらにこれらの外側をP10～17が巡っている。なお、P1は当初、SK706として調査を進めていたものである。

P1はP2～5に囲まれた中のほぼ中央に存在し、平面形が楕円形で、長径64cm、短径58cm、深さ30cmを測る。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。底面はLⅤで平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積土である。

P2～5及びP6～9はそれぞれ1間四方の長方形に配され、主柱穴と推測される。それぞれの南西部のP5・9の重複関係から、前者の方が古い。

P2～5の芯々間における柱間寸法は、P2～3間が2.2m、P3～4間が1.7m、P4～5間が

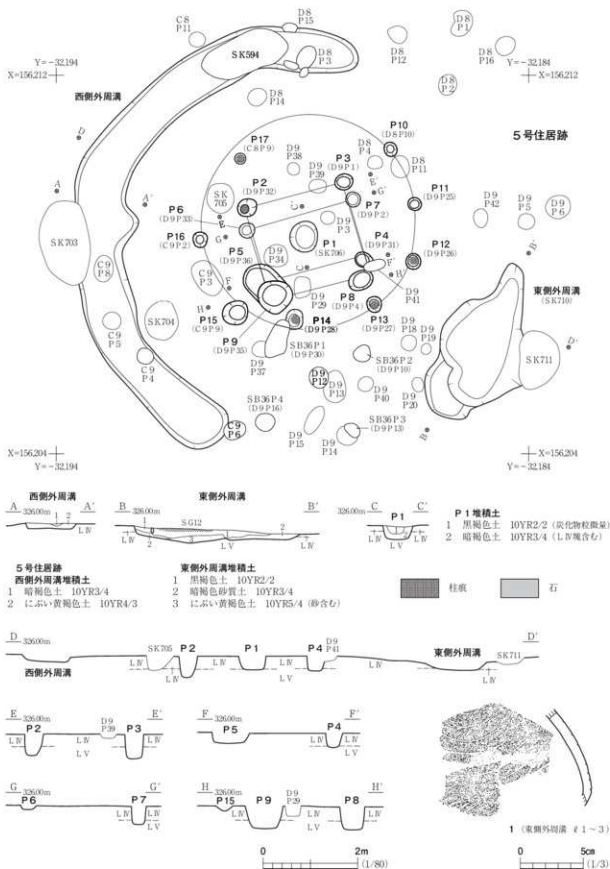


図23 5号住居跡・出土遺物

2.2m、P2-5間が1.5mである。P2は平面形が楕円形で、長径42cm、短径38cm、深46cmを測る。堆積土に径18cmの柱痕が認められる。P3は平面形が円形で、径36cm、深さ52cmを測り、P4は平面形が楕円形で、長径(遺存値)37cm、短径32cm、深さ32cmを測る。P5は本来の平面形が円形と推測され、推定径70cm、深さ23cmを測る。

P6-9の芯々間における柱間寸法は、P6-7間が2.3m、P7-8間が1.7m、P8-9間が1.9m、P6-9間が1.5mである。P6・7は平面形がいずれも径32cmの円形で、深さはP6が9cm、P7が39cmを測る。P8は平面形が楕円形で、長径54cm、短径40cm、深さ49cmを測る。P9は平面形が不整隅丸方形で、長軸長72cm、短軸長70cm、深さ48cmを測る。

P10-17は直径約4.5mの円形の線上ないしはその付近に存在し、支柱穴と推測される。柱痕ないしは柱穴の芯々間における柱間寸法は、P10-11間が1.3m、P11-12間が1.2m、P12-13間が1.2m、P13-14間が1.7m、P14-15間が1.2m、P15-16間が1.7m、P16-17間が1.9m、P17-10間が3.2mを測る。いずれも平面形は円形ないし楕円形である。P15は長径56cm、短径50cm、深さ31cmを測るのに対して、他のピットは径または長径が24-45cm、深さが17-26cmを測る。P12-14・17の堆積土には径13-18cmの柱痕が認められる。

遺物 (図23、写真177)

本住居跡からは、縄文・弥生土器52点、石器・剥片14点が出土した。内訳は、P1で縄文・弥生土器が2点、P3で縄文・弥生土器、石器・剥片がそれぞれ18点と3点、P7で同じく1点と1点、東側外周溝で同じく31点と10点である。このうち、弥生土器1点を図示した。

図23-1は、壺の体部である。体部最大径の位置に巡らされた沈線より上に交互ミガキが施された渦文もしくは同心円文、下に附加条縄文が施される。内面は剥落が激しい。

まとめ

本遺構は外周溝が断続的に環状に巡る平地住居跡である。遺構の中央部にP1が存在し、これを長方形に囲むP2-5及びP6-9は新旧2時期の主柱穴で、P2-5の方が古い時期のものである。さらに、その外側にはほぼ環状に8基(P10-17)の支柱穴が巡っている。なお、外周溝に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかった。

時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。

(能登谷)

6号住居跡 S I 06

遺構 (図24、写真21)

本遺構は調査区北半部のC・D10グリッド、D11グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅣ上面において検出した。遺構範囲内には3号住居跡や7号住居跡の一部、3A・B号建物跡、732-734・919号土坑、多くのピットが存在するが、そのうち、7号住居跡、D10P12は本遺構より新しく、741号土坑、D10P32は本遺構より古く、これ以外は本遺構との新旧関係は不明である。

平面形は円形と推測される。12基のピットと外周溝から構成され、ピットは外周溝に囲まれた

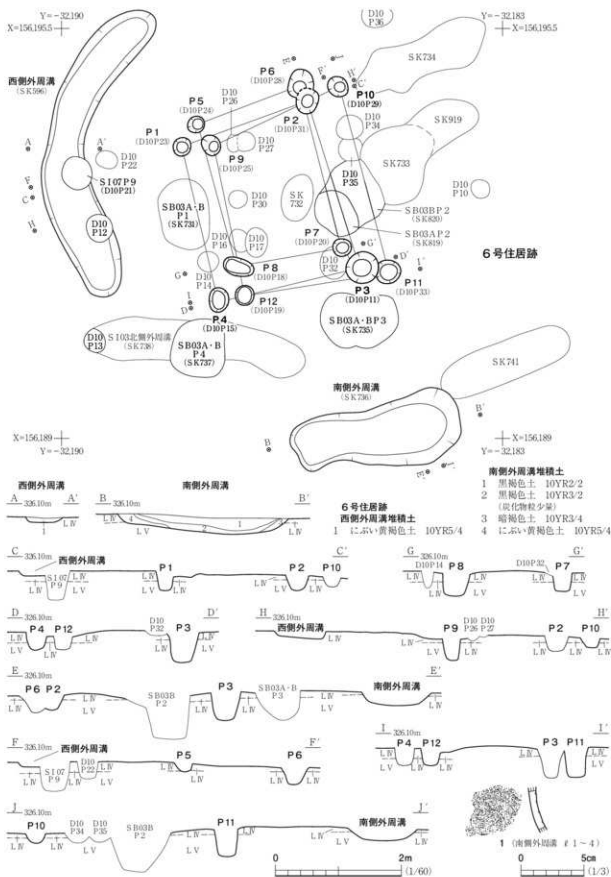


図24 6号住居跡・出土遺物

内側に存在する。

外周溝は一連のものではなく、南側の不整長楕円形の土坑(SK736)と遺構西側の弧状の溝状土坑(SK596)として検出された。前者を南側外周溝、後者を西側外周溝と呼称した。外周溝が断続的であり、東側と北側の様相が不明であるが、残存部から遺構全体の規模は径約9.3mと推測され、外周溝に囲まれた内側の規模は径約7.3mと推測される。なお、外周溝に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められなかった。

南側外周溝は長さ2.7m、幅0.7～1.1m、深さ24～32cmを測り、周壁は西側では急外傾して立ち上がり、中央部から東側では緩やかに立ち上がる。底面はLV(砂層)で、西から東へ緩やかに下降している。遺構内堆積土は4層に分層され、自然堆積土と推測される。

西側外周溝は長さ5.1m、幅0.6～0.8m、深さ7～13cmを測り、周壁は緩く立ち上がる。底面はLVではほぼ平坦であるが、北部が若干低くなっている。遺構内堆積土は1層で、自然堆積土と推測される。

ピットは遺構中央部の4箇所(3)に3基ずつまとまって存在する。これらのピットは主柱穴で、P1～4、P5～8、P9～12で一組と推測される。いずれも4基のピットを結んでできる平面形は、東辺を底辺とする台形を呈する。P2とP6、P3とP11が重複しており、それぞれの新旧関係からP6・11はP2・3よりも古いことが認められたことから、P1～4はこれら3組の中で一番新しいことが推測される。

P1～4の芯々間における柱間寸法は、P1～2間が2.1m、P2～3間が2.8m、P3～4間が2.3m、P1～4間が2.5mである。P1は平面形が円形で、径30cm、深さ32cmを測る。P2は平面形が楕円形で、長径40cm、短径34cm、深さ25cmを測り、P3は平面形が円形で、径52cm、深さ48cmを測る。P4は平面形が楕円形で、長径40cm、短径32cm、深さ28cmを測る。

P5～8の芯々間における柱間寸法は、P5～6間が1.7m、P6～7間が2.6m、P7～8間が1.7m、P5～8間が2.3mである。P5は平面形が円形で、径27cm、深さ14cmを測る。P6は平面形が楕円形で、長径47cm、短径40cm、深さ26cmを測る。P7は平面形が円形で、径30cm、深さ29cmを測る。P8は平面形が楕円形で、長径50cm、短径29cm、深さ36cmを測る。

P9～12の芯々間における柱間寸法は、P9～10間が2.2m、P10～11間が3.1m、P11～12間が2.4m、P9～12間が2.4mである。P9は平面形が楕円形で、長径34cm、短径29cm、深さ34cmを測る。P10も平面形が楕円形で、長径36cm、短径32cm、深さ15cmを測る。P11は平面形が円形で、径38cm、深さ47cmを測る。P12も平面形は円形で、径32cm、深さ28cmを測る。

遺物(図24、写真177)

本住居跡からは、縄文・弥生土器37点、石器・剥片3点が出土した。内訳は、P3で縄文土器・弥生土器1点、石器・剥片1点、P9で石器・剥片1点、南側外周溝で縄文・弥生土器36点、石器・剥片1点である。このうち、弥生土器1点を図示した。

図24-1は、壺の頸部である。交互ミガキが施された渦文が上下2段に描かれ、銀杏葉形と思われる小文の一部が遺存する。

まとめ

本遺構は外周溝を伴う平地住居跡で、他の住居跡同様、平面形は円形と推測される。遺構中央部に主柱穴が3時期分存在することから、本遺構は2回建て替えられていることがわかり、P1～4が一番新しい時期の主柱穴である。また、P5～8及びP9～12の新旧関係に関しては、直接の重複がないものの、それぞれにおいてピットを結んだ平面形やその規模は、前者が先行するものと推測した場合、P1～4への変遷がスムーズになる。

1回目の建て替えは、P5・8をそれぞれ南南東方向に約40～50cm移動してP9・12、P6は東方へ約60cm移動してP10、P7は南東へ約80cm移動してP11となり、4基の柱穴で囲まれる範囲が広がっている。

2回目の建て替えは、4基の柱穴で囲まれる範囲の広さをほぼ変えることなく、P9・12をそれぞれ西方に約40～50cm移動してP1・4、P10を南西へ約60cm移動してP2、P11を西へ約50cm移動してP3としてしていると推測される。

なお、外周溝に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかったが、主柱穴に囲まれた内側から検出された732号土坑は、3・5・7号住居跡のP1と同じ性格を有する可能性もある。

時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。

(能登谷)

7号住居跡 S I 07

遺 構 (図25、写真22)

本遺構は調査区北半部のC・D10グリッド、C11グリッドに位置し、平坦面に立地する。LIV上面において検出した。遺構西部が調査区外に延びていることから全容は不明であるが、調査区域の土層断面によると、平面的には捉えることができなかったが、本遺構には外周溝が伴い、外周溝やピットはLIII a上面から掘り込まれていることが判明した。つまり、表土掘削時にかなり遺構面を削平している。3・6号住居跡、C10 P54と重複し、いずれよりも本遺構の方が新しい。また、遺構範囲内には他にもピットが多く存在するが、そのうち、C10 P52・53は本遺構よりも新しい。

平面形は円形と推測され、12基のピットと外周溝から構成される。

外周溝は先述のように、遺構北西部に存在していたと推測されるが、他の区域にも存在していたかは不明である。北西部における外周溝の幅は推定90cm、深さ29cmで、堆積土は自然堆積土と推測される。

ピットは遺構中心部よりやや北寄りにP1が存在し、これをP2～5が長方形に囲み、さらにこれらの外側をP6～12が環状に巡っている。なお、P1は当初、SK728として調査を進めていたものである。

P1はP2～5に囲まれた中の北寄りに存在し、平面形が楕円形で、長径88cm、短径78cm、深さ33cmを測る。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。底面はLVで平坦である。

遺構内堆積土は4層に分層され、 $\phi 1$ は幅25cmの柱痕である。

P2～5は1間四方の長方形に配され、主柱穴と推測される。P2～5の芯々間における柱間寸法は、P2～3間が1.5m、P3～4間が1.7m、P4～5間が1.4m、P2～5間が1.7mを測る。P2・3は平面形が不整楕円形で、P2は長径48cm、短径41cm、深さ38cmを測り、P3は長径40cm、短径34cm、深さ29cmを測る。P4は平面形が楕円形で、長径66cm、短径47cm、深さ60cmを測る。P5は平面形が隅丸方形で、長軸長46cm、短軸長42cm、深さ20cmを測る。

P6～12は直径約6.2mの円形の線上に存在し、支柱穴と推測される。柱痕ないし柱穴の芯々間における柱間寸法は、P6～7間が2.3m、P7～8間が2.6m、P8～9間が2.4m、P9～10間が2.5m、P10～11間が2.3m、P11～12間が2.7mを測る。平面形は円形ないし楕円形・隅丸方形・隅丸長方形である。P10以外のビットは長径ないし長軸長が38～54cm、短径ないし短軸長が28～50cm、深さ17～47cmを測る。P10は長径1.4m、短径1mを測る規模の大きなものであるが、その底面東側の柱穴部分は、長径67cm、短径54cmの楕円形に掘り込まれ、深さは60cmを測る。なお、P9の堆積土に径20cmの柱痕が、P10の堆積土に径15cmの柱痕がそれぞれ認められる。

遺物 (図25、写真177)

本住居跡からは、縄文・弥生土器12点、剥片2点が出土した。内訳は、縄文・弥生土器が、P1で3点、P4で1点、P10で7点、P12で1点、剥片がP10で2点である。このうち、弥生土器1点を図示した。

図25-1は、壺の口縁部である。受け口状で、口唇部に縄文が回転施文され、口唇部下の外面に大豆大の粘土塊を1箇所貼り付け、沈線で文様が描かれる。

まとめ

遺構のほぼ中央部にP1が存在し、これを長方形に囲むP2～5は主柱穴で、さらに、その外側には環状に7基(P6～12)の支柱穴が巡っている。外周溝の状況は不明であるが、同じく調査区北半から検出された3・5・6号住居跡と状況が似ていることから、本遺構もそれらと同様、外周溝が環状に巡る平地住居跡と推測される。なお、支柱穴に囲まれた内側では、踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかった。

時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。

(能登谷)

8号住居跡 S I 08

遺構 (図26、写真23)

本遺構は調査区南半部のH16・17グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅣ上面及び1号住居跡掘形底面(LⅤ)において群在するビット群を検出し、その中から本遺構に伴うビットを抽出した。1号住居跡、10号建物跡、782・832号土坑、H17 P2と重複し、切り合い関係及び出土遺物から1号住居跡及びH17 P2よりは古い、他の遺構との新旧関係は不明である。また、北東に9号住居跡が隣接する。

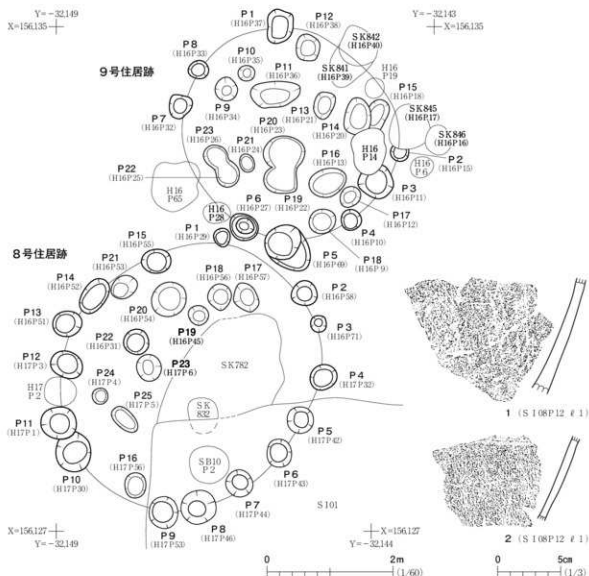


図26 8・9号住居跡、8号住居跡出土遺物

平面形は北東-南西主軸の楕円形で、15基の楕円形に巡るビットとその内側の10基のビットから構成される。

外周を巡るP1～15は長径4.4m、短径3.9mの楕円形の線上に存在し、柱穴の芯々間における柱間寸法は、最大1.7m(P9～10間)、最小0.5m(P2～3間、P10～11間)で、0.5～0.9mが主体をなしている。ビットの平面形は円形ないしは楕円形を呈し、規模は径あるいは長径が26cm(P3)～60cm(P14・10)で、42～55cmのものが主体をなしている。深さは14～46cmである。遺構内堆積土は黒褐色土ないしは暗褐色土で、堆積土断面観察でP11から幅20cmの柱痕が確認された。

内側に存在するP16～25の平面形も円形ないしは楕円形を呈し、規模は径あるいは長径が27cm(P24)～58cm(P20)で、40cm台のものが主体をなしている。深さは27～59cmで、33cm以下のものが主体をなしている。遺構内堆積土は黒褐色土ないしは暗褐色土で、堆積土断面観察でP16から幅14cm、P25から幅16cmの柱痕が認められた。なお、これらのビットは北側から西側を経て南

西側に存在することから、重複する782号土坑は本遺構よりも新しく、782号土坑の範囲内に存在したピットは削平されている可能性が推測される。

遺物 (図26、写真177)

本遺構からは、縄文土器47点、剥片1点が出土した。このうち縄文土器2点を図示した。

図26-1・2は、粗製の深鉢である。1は体下部、2は体上部である。いずれも網目状熱糸文が施され、内面に炭化物が付着する。

まとめ

本遺構は壁際にピットが巡る平地住居跡と推測される。掘り込みの浅い竪穴住居跡の可能性もある。ピットが楕円形状に巡る内側には踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかった。

時期は出土遺物から縄文時代晩期中葉と推測される。(能登谷)

9号住居跡 S I 09

遺構 (図26、写真23)

本遺構は調査区南半部のH16グリッドに位置し、平坦面に立地する。LIV上面において群在するピット群を検出し、その中から本遺構に伴うピットを抽出した。841・842・845号土坑、H16 P14・19・28・65と重複し、切り合い関係及び出土遺物からそれらの遺構よりも古い。また、南西には8号住居跡が隣接している。

平面形は北西-南東主軸の楕円形と推測され、8基の楕円形に巡るピットとその内側の15基のピットから構成される。

外周を巡るP1~8は長径3.4m、短径3.2mの楕円形の線上に存在し、柱穴の芯々間における柱間寸法は、P1-2間で最大2.8m、P2-3間、P5-6間、P7-8間が最小0.6m、P3-4間が0.7m、P4-5間が1.2m、P6-7間が2.2m、P1-8間が1.5mを測る。ピットの平面形は円形ないし楕円形、不整長方形を呈し、規模は径あるいは長径・長軸長が30~38cmのもの(P2・4・7・8)、47~55cmのもの(P1・3・6)、82cmのもの(P5)があり、深さは9~33cmのもの(P1・2・4~8)と55cmのもの(P3)がある。遺構内堆積土は黒褐色土ないしは暗褐色土である。

内側に存在するP9~23の平面形は円形ないしは楕円形、長楕円形を呈する。規模は、径あるいは長径が27cm(P10)~78cm(P11)で、大小の幅がみられる。深さは10~20cmのものが主体をなし、他に28~38cmのもの(P17・18)、75cmのもの(P14)がある。遺構内堆積土は黒褐色土ないしは暗褐色土である。

本遺構からは縄文土器14点が出土し、うち9点がP3から出土した。図示できた遺物はない。

まとめ

本遺構は壁際にピットが巡る平地住居跡と推測される。掘り込みの浅い竪穴住居跡の可能性もある。ピットが楕円形状に巡る内側には踏み締まり等の硬化面は認められず、炉跡も検出されなかった。

出土遺物から時期の推定はできないが、隣接する8号住居跡と近い時期の可能性がある。(能登谷)

第4節 掘立柱建物跡

本調査において、掘立柱建物跡を50棟検出した。これら50棟を構成する柱穴の総数は269基であるが、そのうち、199基は土坑として、39基はピットとしてそれぞれ個別に調査を進めていたものである。調査時に現地で柱穴の対応関係を検討し、掘立柱建物跡を認定することに努めたが、S B 01～15・40・41・43～45の21棟しか認定できず、他は調査終了後の整理作業時に認定した。なお、遺跡内からはこの他にも柱穴と推測される土坑が277基検出されており、ピットも多数検出されていることから、認定したものの以外にも多くの掘立柱建物跡が存在したものと推測される。

遺構を構成する柱穴の外側の柱穴を結んだ平面形は、長方形(不整長方形・平行四辺形含む)・亀甲形・片亀甲形の3種類がある。長方形平面となるものは、側柱のみから構成されるもので、亀甲形平面となるものは、側柱による長方形平面の建物跡の両妻側の中央外側に棟持柱の柱穴をもつもの、片亀甲形平面となるものは、側柱による長方形平面の建物跡の一方の妻側の中央外側に棟持柱の柱穴をもつものである。

遺構の占地をみると、調査区北半部中央に10棟が散在し、調査区南半部北寄りに40棟が群生している。

各建物跡の計測値等について表2に記したが、各計測に当たり、柱痕の認められるものはその中心を基点とし、柱痕が認められなかった柱穴については底面の中心を基点とした。平面形が長方形のものは、桁行・梁行の長さや面積を計測し、主軸方位は桁行の一方の柱列で計測した。一方、平面形が亀甲形や片亀甲形のものは、側柱による長方形平面の建物跡の桁行・梁行の長さの他に両妻の棟持柱間の長さを全長とし、棟持柱と最寄りの梁の距離(突出長)も計測した。また、面積は側柱による長方形部分の他に、平面形全体に関しても計測し、主軸方位は桁行の柱列と棟持柱列がほぼ一致する時は棟持柱列の方位を計測し、ずれる場合は桁行の柱列の一方の方位を計測した。

報文中では、桁行長と梁行長に関してはそれぞれ長い方の計測値を記述し、各建物跡の大きさは、側柱による長方形部分の面積が10㎡未満のものを「小型」、10㎡以上20㎡未満のものを「中型」、

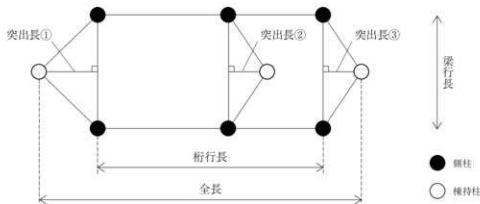


図27 掘立柱建物跡の計測位置

表2-1 掘立柱建物跡一覽

No.	タリッド	平面形	方位 (測位位置)	面数	面数 発行	特殊数 全体 (補修)	全長 (m)	規模				面積 (㎡)		分期	
								相行長(北側) (m)	相行長(南側) (m)	相行長(西側) (m)	相行長(東側) (m)	特殊形状長さ (m) 西側 中央 東側	全体 長方形部分		
1	D-E-8	不定形状	K85W (南側発行)	1	1	4	-	27	24	19	17	-	-	ⅧA-1	45
2	E10	長方形	K14W (東側発行)	1	1	4	-	21	21	16	16	-	-	ⅧA-1	32
3A	D10	長方形	K85 E (南側発行)	1	1	4	-	24	22	17	17	-	-	ⅧA-1	40
3B	D10	長方形	K85 E (南側発行)	1	1	4	-	28	26	21	22	-	-	ⅧA-1	57
4	E11-12	不定形状	K72 E (南側発行)	1	1	4	-	22	23	22	21	-	-	ⅧA-1	45
5	D-E-9	長方形	K85W (北側発行)	1	1	4	-	22	22	20	20	-	-	ⅧA-1	45
6	E-F-15	亀甲形	K81 E (南側発行)	2	1	8 (2)	76	54 (31 + 23)	55 (33 + 22)	31	28	1.0	-	ⅧA-1	160
7	D-E-15, D16	長方形	K62 E (北側発行)	1	1	4	-	40	39	25	25	-	-	ⅧA-2	98
8	E15-16	亀甲形	K76 W (南側発行)	2	1	9 (3)	79 (48 + 31)	65 (31 + 33)	69 (36 + 33)	26	28	0.7	0.6	ⅧB-1	178
9	E-F-G17	亀甲形	K85 E (南側発行)	2	1	9 (3)	96 (60 + 36)	76 (33 + 43)	79 (37 + 42)	32	29	1.3	1.2	ⅧB-1	226
10	H17	長方形	K85 W (北側発行)	1	1	4	-	25	278	22	22	-	-	ⅧA-1	38
11	G-H16	長方形	K85 W (北側発行)	1	1	4	-	302	29	20	23	-	-	ⅧA-1	63
12	F-G16	亀甲形	K87 W (南側発行)	1	1	6 (2)	48	31	28	28	28	0.4	-	ⅧA-1	106
13	F-G16	亀甲形	K76 W (南側発行)	2	1	8 (2)	69	56 (25 + 32)	60 (28 + 32)	30	29	0.9	-	ⅧB-2	171
14	F-G16	亀甲形	K83 W (南側発行)	1	1	6 (2)	59	43	48	29	29	0.7	-	ⅧA-2	132
15	F-G19	亀甲形	K29 E (南側発行)	1	1	6 (2)	37	22	22	21	19	1.0	-	ⅧA-1	45
16	F-G17	亀甲形	K49 E (南側発行)	2	1	8 (2)	76	61 (41 + 20)	60 (41 + 19)	31	29	0.9	-	ⅧB-2	381
17	G16-17	片亀甲形	K77 E (北側発行)	2	1	7 (1)	64	54 (32 + 22)	54 (30 + 24)	26	26	1.0	-	ⅧB	138
18	G17	長方形	K41 E (西側発行)	1	1	4	-	45	46	30	28	-	-	ⅧA-2	130
19	G-H17-18	亀甲形	K64 E (北側発行)	2	1	8 (2)	75	65 (28 + 37)	67 (26 + 41)	306	32	0.7	-	ⅧB-2	204
20	H-116	亀甲形	K72 E (南側発行)	1	1	6 (2)	52	38	42	370	36	0.7	-	ⅧA-2	145
21	I17-18	亀甲形	K11 E (南側発行)	1	1	6 (2)	49	31	27	325	31	0.8	-	ⅧA-1	91
22	I17-18	長方形	K71 E (南側発行)	1	1	4	-	43	34	274	30	-	-	ⅧA-1	93
23	H-117-18	片亀甲形	K72 E (北側発行)	1	1	5 (1)	56	43	46	256	27	1.2	-	ⅧA-2	118
24	I18	亀甲形小	K52 W (南側発行)	1	1	5 (1)	36	16	24	236	-	1.0	-	ⅧA-1	-
25	I18	亀甲形	K65 W (北側発行)	1	1	6 (2)	53	30	30	236	24	1.0	-	ⅧA-1	72

表2-2 掘立柱建物跡一覧

No.	グリッド 平面図形 (方位位置)	間数 掘行 掘行	柱の本数 全体 (掘行付)	全長 (m)	掘行長(北側) (m)	掘行長(南側) (m)	掘行長(西側) 掘行長(東側) (m)	掘立柱間の長さ (m) 西側 中央 東側	面積 (㎡) 全体 長さの部分	分類
26	1-16-17 長方形	N 48° E (北側掘行)	1 1 4	-	5.2	5.1	3.2	3.0	-	ⅢA-2
27	H-116-17 長方形	N 72° E (南側掘行)	2 1 8 (2)	96	72 (3.4 + 1.8)	76 (4.7 + 2.9)	3.4	3.1	27.8	ⅢB-2
28	H17, G-H18 長方形	N 60° E (南側掘行)	1 1 6 (2)	69	5.3	5.2	3.0	3.0	8.2	ⅢA-2
29	G-H18 長方形	N 60° E (南側掘行)	1 1 6 (2)	60	3.9	4.2	2.2	2.4	11.5	ⅢA-2
30	1-16-17 片長方形	N 70° E (北側掘行)	1 1 5 (1)	39	3.3	3.1	3.3	3.2	0.7	ⅢA-1
31	1-16-17 長方形	N 77° W (東側掘行)	1 1 4	-	4.0	3.9	2.3	2.4	-	ⅢA-2
32	1-17-18 長方形	N 1° E (西側掘行)	1 1 4	-	2.5	2.4	2.2	2.3	-	ⅢA-1
33	H17 長方形	N 60° E (北側掘行)	1 1 4	-	4.4	4.5	2.8	2.7	-	ⅢA-2
34	G-H18 長方形	N 62° E (北側掘行)	1 1 6 (2)	5.1	3.9	3.7	2.9	2.8	0.2	ⅢA-3
35	C 7 長方形	N 61° E (南側掘行)	1 1 4	-	2.6	2.8	2.3	2.5	-	ⅢA-1
36	D 9 長方形	N 80° W (北側掘行)	1 1 4	-	1.9	1.9	1.7	1.7	-	ⅢA-1
37	C-D11 長方形	N 10° E (南側掘行)	1 1 4	-	2.4	2.3	2.1	2.1	-	ⅢA-1
38	J-K18 長方形	N 80° W (南側掘行)	2 1 8 (3)	72 (2.7 + 4.5)	5.9 (2.9 + 3.0)	6.0	2.5	2.2	0.3	ⅢB-1
39	1-J19 長方形	N 67° E (北側掘行)	1 1 4	-	2.5	2.4	2.4	2.2	-	ⅢA-1
40	1-J19 平行四辺形	N 72° E (北側掘行)	1 1 4	-	1.6	1.8	1.6	1.7	-	ⅢA-1
41	I-20 長方形	N 17° W (東側掘行)	1 1 4	-	2.4	2.3	2.0	1.9	-	ⅢA-1
42	1-J20 長方形	N 60° E (南側掘行)	2 1 7 (2)	7.4	4.7	46 (3.3 + 1.4)	2.8	2.5	1.4	ⅢB-2
43	J-20 長方形	N 22° W (南側掘行)	1 1 4	-	2.1	2.4	1.7	1.6	-	ⅢA-1
44	J-20-21, K-21 長方形	N 50° E (南側掘行)	1 1 4	-	1.9	2.2	1.9	1.8	-	ⅢA-1
45	F-19 長方形	N 30° E (南側掘行)	1 1 6 (2)	3.1	2.1	2.4	1.6	1.4	0.2	ⅢA-1
46	F-15-16 長方形	N 70° W (北側掘行)	2 1 6	-	4.8 (1.8 + 3.0)	5.0 (1.9 + 3.0)	1.9	2.0	-	ⅢB-2
47	H16 長方形	N 50° E (南側掘行)	2 1 6	-	2.5 (1.2 + 1.3)	3.0 (1.2 + 1.7)	1.9	2.1	-	ⅢB-1
48	G16 長方形	N 60° W (北側掘行)	1 1 6 (2)	5.7	4.0	3.7	3.1	2.9	0.8	ⅢA-3
49	E-F11 長方形	N 60° E (北側掘行)	1 1 4	-	3.3	3.3	2.6	2.5	-	ⅢA-1

※ 1A号建物跡P 4と1D号建物跡P 4は共有。

※ 30号建物跡P 4と40号建物跡P 1は共有。

※ 全長及び掘行長の()内は、西側の距離。

20㎡以上のものを「大型」とした。また、柱痕の幅に関しては、柱痕下部あるいは底面における値を記述した。

掘立柱建物跡の時期は柱穴から出土した土器によって判断したが、遺構が密集する調査区中央部に位置するものについては各時期の遺物が混在して出土した場合がほとんどで、古い時期の遺物の混入や重複する遺構に含まれていた遺物を取り上げている可能性がまったくないとは言いきれない。各掘立柱建物跡の時期の判断については原則としてもっとも新しい時期の遺物によって行ったが、以上のような理由により時期幅をもって判断したことがある。

なお、本報告では、新たに掘立柱建物跡の柱穴になった土坑やピットに関しては、当初の土坑番号やピット番号を削除せずに、「SB31P3 (SK02)」などのように新たな遺構番号と併記した。また、各掘立柱建物跡を構成する柱穴と直接の切り合いがない場合でも、2棟以上の掘立柱建物跡の全体平面形が重なる場合や掘立柱建物跡全体の平面形内に他の遺構が存在する場合は重複関係にあるとして記述する。なお、以下では掘立柱建物跡を単に建物跡と表記する。

1号建物跡 SB01

遺 構 (図28、写真24)

本遺構は調査区北半部のD・E8グリッドに位置し、平坦面の東側縁辺部に立地している。LV上面において検出した。592号土坑、E8P1・2と重複するが、直接の切り合いがないことから新旧関係は不明である。南方約6mに5号建物跡が主軸方位を同じくして存在する。

本遺構は4基の柱穴(P1～4)から構成される。平面形は東西主軸の不整長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P1～2間)2.7m、梁行長(P1～4間)1.9m、面積4.5㎡を測る。

P1は平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは内湾気味に急外傾して立ち上がる。規模は、

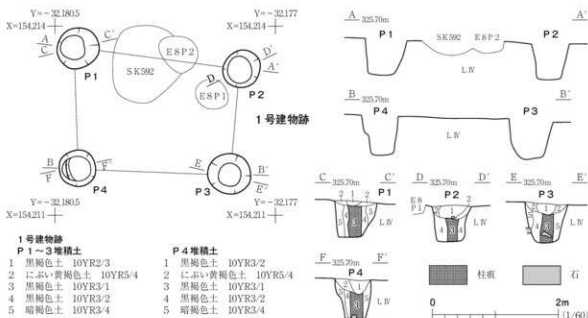


図28 1号建物跡

径64～68cm、深さ58cmを測る。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 3$ は柱痕、 $\ell 4 \cdot 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

P2は平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径58～62cm、深さ57cmを測る。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 3$ は柱痕、 $\ell 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は16cmを測る。

P3は平面形が円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径70cm、短径64cm、深さ65cmを測る。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 3$ は柱痕、 $\ell 4 \cdot 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は19cmを測る。

P4は平面形が円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、西壁には底面から約30～40cmの高さの所に段が認められる。規模は、径58cm、深さ64cmを測る。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 3$ は柱痕、 $\ell 4 \cdot 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、P3・4から剥片が計4点出土した。図示した遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の不整長方形を呈する小型の建物跡である。南方約6mに主軸方位を同じくして存在する5号建物跡とは柱穴の規模が異なるものの、面積が同じであり、何らかの関係が推測される。本遺構の時期は出土遺物から縄文～弥生時代と推測される。

(能登谷)

2号建物跡 SB02

遺 構 (図29、写真25)

本遺構は調査区北半部のE10グリッドに位置し、平坦面の東側縁辺部に立地している。LIV上面において検出した。806号土坑と重複するが、直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。北西約6mに5号建物跡が存在する。

本遺構は4基の柱穴(P1～4)から構成される。平面形は北西-南東主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P2-3間)2.1m、梁行長(P1-2間)1.6m、面積3.3㎡を測る。

P1(SK749)は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がっており、東壁上部では立ち上がりが緩くなっている。規模は、長径76cm、短径58cm、深さ62cmを測り、検出面から20cm下での規模は、径58cmを測る。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 2$ は柱痕、 $\ell 3 \cdot 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P2(SK814)は平面形が不整な長楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がるが、南東壁上部は立ち上がりが緩く、北西壁には底面から24cmの高さの所に段が認められる。規模は、長径96cm、短径62cm、深さ66cmを測る。堆積土は6層に分層され、 $\ell 1 \sim 4$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 5$ は柱痕、 $\ell 6$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は14cmを測る。

P3(SK747)は平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、北西側には底面か

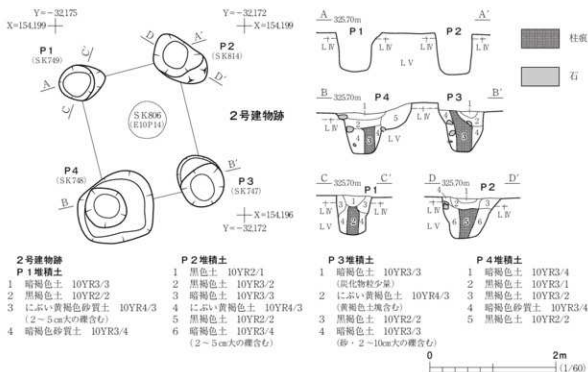


図29 2号建物跡

ら約40cmの高さに平坦面が認められる。規模は、長径85cm、短径70cm、深さ66cmを測る。堆積土は4層に分層され、ℓ1・2は廃絶後の堆積土、ℓ3は柱痕、ℓ4は柱抑えの土で、柱痕の幅は24cmを測る。

P4 (SK748) は平面形が隅丸長方形で、北西部が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直線的ないしは内湾気味に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長122cm、短軸長109cm、東側の深さ38cm、北西側の円筒形部分の深さ82cmを測る。堆積土は5層に分層され、ℓ1・2は廃絶後の堆積土、ℓ3は柱痕、ℓ4・5は柱設置時の埋土で、柱痕の幅は16cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、縄文・弥生土器7点がP3・4から出土した。いずれも小片で、図示した遺物はないが、つまみの天井部側縁に指頭圧痕を巡らせた蓋の小片が含まれる。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期と推測される。(能登谷)

3A・B号建物跡 SB03A・B

遺 構 (図30、写真26)

本遺構は調査区北半部のD10グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。3・6号住居跡、732・733・919号土坑、D10P11・14~20・30・32・35と重複し、3号住居跡、733・919号土坑、D10P35よりは古く、他の遺構とは直接の切り合いがないことから、

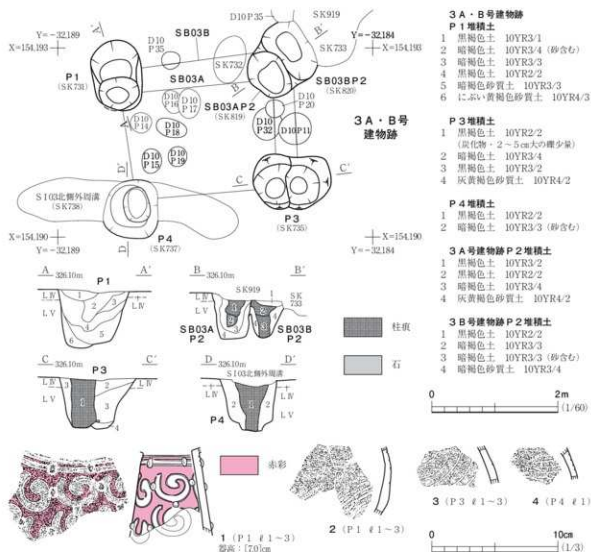


図30 3A・B号建物跡・出土遺物

新旧関係は不明である。

本遺構はそれぞれ4基の柱穴(P1~4)から構成される3A号建物跡と3B号建物跡が重複しており、P1~3の堆積土観察から、3A号建物跡の方が新しい。

3A号建物跡 平面形は東西主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P1~2間)2.4m、梁行長(P2~3間)1.7m、面積4.0㎡を測る。

P1(SK731)は平面形が楕円形で、底面の南側が一段深く掘り込まれており、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径112cm、短径78cmを測る。南側の一段低い底面は本遺構のP1の底面で、深さは93cmを測る。堆積土は6層に分層され、柱を抜いた後の埋土と推測される。

P2(SK819)は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がっている。規模は、長径83cm、短径62cm、深さ73cmを測る。堆積土は4層に分層され、①・②は柱痕、③・④は柱抑えの土で、柱痕の幅は16cmを測る。

P3 (SK 735) は平面形が不整な楕円形で、円筒形の掘り込みが東西に連結しているような形状である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。長径は124cmを測り、短径は西側で90cm、東側で84cmを測る。西側の掘り込みが本遺構のP3で、底面の深さは80cmを測る。堆積土は4層に分層されるが、そのうちのℓ1～3が本遺構のP3の堆積土である。ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は35cmを測る。

P4 (SK 737) は平面形が隅丸長方形で、底面の東側が一段低く、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。3B号建物跡のP4と同位置に存在し、東側の一段低い部分の底面が本遺構のP4の底面で、柱を据えるに当たり3B号建物跡のP4の底面の東寄りを深く掘り下げたものと推測される。規模は、長軸長93cm、短軸長86cm、深さ82cmを測る。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2は柱抑えの土で、柱痕の幅は19cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

3B号建物跡 平面形は東西主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P1－2間)2.8m、梁行長(P2－3間)2.2m、面積5.7㎡を測る。

P1 (SK 731) の上下2面の底面のうち、北側の上位面が本遺構のP1の底面で、3A号建物跡のP1の北に隣接して存在する。深さは83cmを測る。堆積土は3A号建物跡P1の柱を抜く際に掘り上げられたものと推測される。

P2 (SK 820) は、3A号建物跡のP2の北東に隣接して存在する。他の遺構との重複により不明な部分が多いが、平面形は隅丸長方形と推測される。周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長102cm、短軸長(遺存値)64cm、深さ(遺存値)60cmを測る。堆積土は4層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2・3は柱痕、ℓ4は柱抑えの土で、柱痕の幅は17cmを測る。

P3 (SK 735) の東西に並ぶ掘り込みのうち、東側掘り込みの底面が本遺構のP3の底面で、3A号建物跡のP3の東に隣接して存在する。深さは80cmを測り、検出面における短径は84cmを測る。堆積土は4層に分層された内のℓ4が本遺構のP3の堆積土で、柱を抜いた後の埋土と推測される。

P4 (SK 737) は3A号建物跡のP4と同位置に存在し、底面は上下2段認められるうちの上段であると推測される。深さは70cmを測る。

遺物 (図30、写真178・179)

本建物跡の各ビットから、縄文・弥生土器が計21点、剥片が計7点出土した。このうち、弥生土器4点を図示した。

図30-1は壺の頸部で、口縁部下端がわずかに遺存する。口縁部直下に3本の沈線を巡らせ、その下に小渦文が上下2段に描かれる。3本の沈線上と小渦文が接する位置には、大豆大の粘土粒が張り付けられる。小渦文の内部にはミガキが施され、その他の部分にはナデののち赤彩が施される。内面の口頸部の境には輪積み痕が残る。

同図2は壺の体部である。最大径の位置に2本の沈線を巡らせ、それより上に交互ミガキが施さ

れる渦文が同心円文が描かれ、下には附加条縄文が施される。外面の一部に炭化物が薄く付着する。

同図3は壺の体部で、渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキがまばらに施される。

同図4は壺の体部で、5本の沈線下に縄文の末端結節が巡らされる。

まとめ

本遺構は新旧2棟の建物跡が重複しているが、それぞれ1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡で、3B号建物跡→3A号建物跡の順に建て替えている。この建て替えに当たり、南側の桁と西側の梁の軸線は変えずに、北側の桁を南方へ、東側の梁を西方へそれぞれ36cm縮小している。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。(能登谷)

4号建物跡 SB 04

遺 構 (図31、写真27)

本遺構は調査区北半部のE11・12グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。北東約4.5mには主軸方位が近似する49号建物跡が存在する。

本遺構は4基の柱穴(P1～4)から構成される。平面形は東西主軸の不整長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P3～4間)2.3m、梁行長(P1～4間)2.2m、面積45㎡を測る。

P1(SK811)は平面形が方形基調の不整形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は一辺55～82cmで、長軸長85cm、深さ56cmを測る。堆積土は5層に分層され、ℓ1・2は廃絶後の堆積土、ℓ3は柱痕、ℓ4・5は柱抑えの土で、柱痕の幅は16cmを測る。

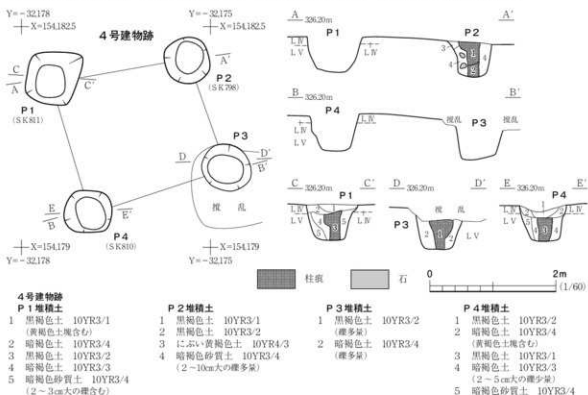


図31 4号建物跡

P2 (SK798) は平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径70~74cm、深さ58cmを測る。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は柱痕、 $\ell 3 \cdot 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P3 は平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)80cm、短径(遺存値)72cm、深さ66cmを測る。堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は14cmを測る。

P4 (SK810) は平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長76cm、短軸長67cm、深さ58cmを測る。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 3$ は柱痕、 $\ell 4 \cdot 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は16cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡のP4から、縄文・弥生土器2点が出土した。図示できた遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の不整長方形を呈する小型の建物跡である。北東約4.5mに主軸方位を同じくして存在する49号建物跡とは全体の規模や柱穴の規模が若干異なるものの、何らかの関係が推測される。本遺構の時期は、出土遺物から縄文〜弥生時代と推測される。(能登谷)

5号建物跡 SB05

遺 構 (図32、写真28)

本遺構は調査区北半部のD・E9グリッドに位置し、平坦面の東側縁辺部に立地している。LV上面において検出したが、東半部は遺構上部が削平されている。北方約6mに1号建物跡が主軸方位を同じくして存在する。

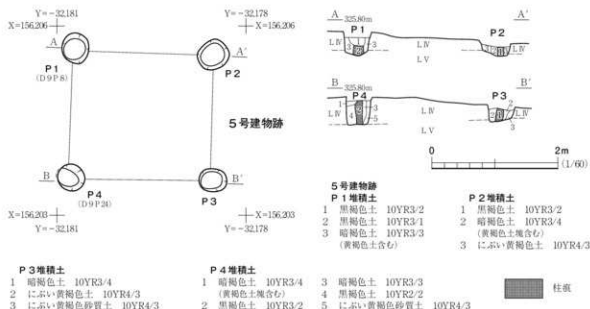


図32 5号建物跡

本遺構は4基の柱穴(P1~4)から構成される。平面形は東西主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P3-4間)22m、梁行長(P1-4間)20m、面積45㎡を測る。

P1(D9P8)は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径49cm、短径43cm、深さ38cmを測る。堆積土は3層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3は柱抑えの土で、柱痕の幅は16cmを測る。

P2は平面形が隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、いずれも遺存値で、長軸長50cm、短軸長44cm、深さ26cmを測る。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・ℓ3は柱抑えの土で、柱痕の幅は10cmを測る。

P3は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、いずれも遺存値で長径44cm、短径37cm、深さ28cmを測る。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・ℓ3は柱抑えの土で、柱痕の幅は13cmを測る。

P4(D9P24)は平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径44cm、短径42cm、深さ45cmを測る。堆積土は5層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3~5は柱抑えの土で、柱痕の幅は12cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、弥生土器2点がP1から出土した。うち1点は壺の口唇部の小片で、弥生時代中期後葉に位置づけられる。図示した遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。北方約6mに主軸方位を同じくして存在する1号建物跡とは柱穴の規模が異なるものの、面積が同じであり、何らかの関係が推測される。本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。(能登谷)

6号建物跡 S B 06

遺 構 (図33、写真29)

本遺構は調査区南半部のE・F15グリッドに位置する。只見川に向かって開析された東西方向の沢に北面し、北東方向に下る緩斜面の平坦面に立地している。LV上面において検出した。879号土坑と重複し、本遺構の方が古い。西方に656号土坑が近接し、南西約5mに7号建物跡、南東約4~5mに8・46号建物跡が存在する。

本遺構は8基の柱穴(P1~8)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・5)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1-5間)7.6m、桁行長(P6-8間)5.5m(西から3.3+2.2m)、梁行長(P2-8間)3.1m、全体の面積19.2㎡、長方形部分の面積(P2・4・6・8で囲まれる部分)16.0㎡を測る。棟持柱の突出長は西側のP1の方が東側のP5よりも83cm長い。

P1(SK655)は平面形がほぼ円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。

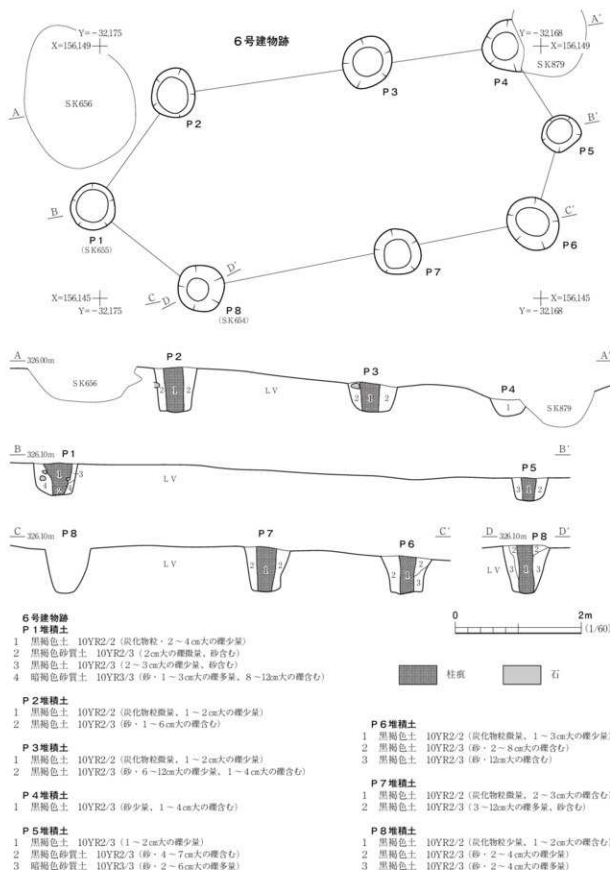


図33 6号建物跡

規模は、長径74cm、短径70cm、深さ52cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は柱痕、 $\ell 3 \cdot 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は17cmを測る。

P2は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径80cm、短径69cm、深さ70cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は27cmを測る。

P3は平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径86cm、短径76cm、深さ46cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は26cmを測る。

P4は東側を879号土坑によって削平されていることから全容は不明であるが、平面形は円形と推測される。周壁は直線的に外傾して立ち上がる。規模は、南北長84cm、深さ38cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は1層のみで、柱抑えの土と推測される。

P5は平面形が隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長61cm、短軸長54cm、深さ37cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \cdot 3$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P6は平面形が楕円形で、周壁は直立気味に立ち上がった後、急外傾して立ち上がる。規模は、長径90cm、短径78cm、深さ60cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \cdot 3$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は22cmを測る。

P7は平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径74cm、深さ71cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は22cmを測る。

P8(SK654)は平面形が隅丸方形に近い円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径74cm、深さ75cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \cdot 3$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は22cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、P2・3・6・7から弥生土器が計14点、P2・3から剥片が計4点出土した。図示できた遺物はないが、P3出土土器に、内外面が平滑に調整された褐色無文の壺の体部片、内外面に赤彩が施された無文の壺の頸部付近の破片が含まれる。いずれも球胴に復元される北陸系の土器と考えられ、弥生時代中期中葉～後期のものである可能性がある。

まとめ

本遺構は2間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈しており、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が長く、桁の柱間も西側の方が長いという特徴がある。また、各柱穴の底面の標高は、P2～4・6～8では325.1～325.2mで、特にP4以外は325.2m前後で揃っており、棟持柱の柱穴のP1・5でも325.4～325.5mと近似している。本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉～後期と推測される。

(能登谷)

7号建物跡 S B 07

遺 構 (図34、写真30)

本遺構は調査区南半部のD・E 15グリッド、D 16グリッドに位置し、平坦面に立地している。北側はL IV上面において検出され、南側はL V上面において検出した。北東約5mに6号建物跡が存在する。

本遺構は4基の柱穴(P 1～4)から構成される。平面形は北東-南西主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P 1-2間)4.0m、梁行長(P 1-4間)2.5m、面積9.8㎡を測る。

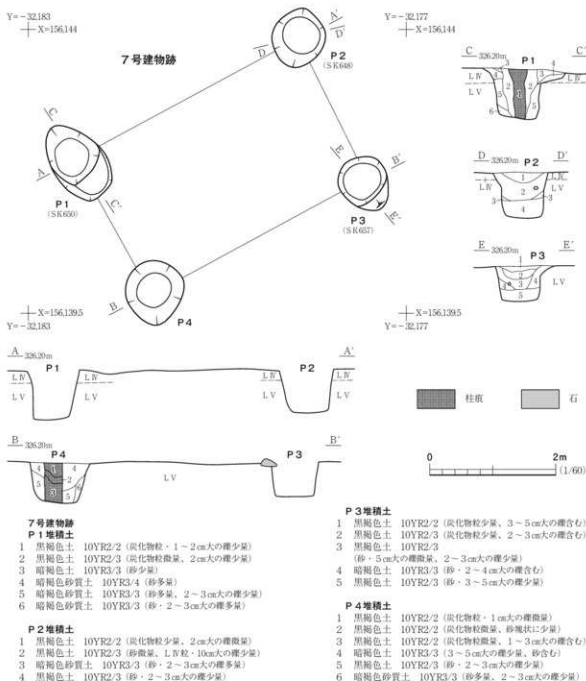


図34 7号建物跡

P1 (SK 650) は平面形が楕円形で、北西側は深い円筒形を呈し、南東側は浅い皿状を呈している。全体の規模は、長径132cm、短径84cmを測る。北西側の円筒形部分は平面形が不整楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾し、長径94cm、短径80cm、深さ81cmを測り、底面の標高は325.2mである。一方、南東側の皿状の部分は周壁が直線的に急外傾し、深さ16cmを測る。堆積土は6層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～6は柱抑えの土で、柱痕の幅は15cmを測る。

P2 (SK 648) は平面形が隅丸方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長88cm、短軸長82cm、深さ74cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。

P3 (SK 657) は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がるが、南東壁上部は緩く立ち上がる。規模は、長径92cm、短径78cm、深さ55cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は5層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。

P4 は平面形が不整隅丸方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長97cm、短軸長90cm、深さ66cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は6層に分層され、ℓ1～3は柱痕、ℓ4～6は柱抑えの土で、柱痕の幅は28cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、P1で縄文・弥生土器1点、剥片1点が出土した。図示できた遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。各柱穴の平面形は楕円形ないしは隅丸方形で、短径・短軸長は78～90cm、底面の標高は325.2～325.4mで近似している。本遺構の時期は出土遺物から、縄文～弥生時代と推測される。

(能登谷)

8号建物跡 SB08

遺 構 (図35・36、写真31)

本遺構は調査区南半部のF15・16グリッドに位置し、平坦面に立地している。北東部はLⅣ上面において検出され、それ以外はLⅤ上面で検出された。46号建物跡、527・528・532・534号土坑、ピットと重複し、46号建物跡よりも古いのが、他の遺構との新旧関係は不明である。北西約5mに6号建物跡、東方約4mに48号建物跡、南東約2mに13号建物跡、南方約2mに14号建物跡、南方約4mに9号建物跡が存在する。

本遺構は9基の柱穴(P1～9)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側と内部に棟持柱の柱穴(P1・5・9)をもち、平面形は北西～南東主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～5間)7.9m(西から4.8+3.1m)、桁行長(P6～8間)6.9m(西から3.6+3.3m)、梁行長(P4～6間)2.8mを測り、全体の面積は19.3㎡、長方形部分(P2・4・6・8で囲まれる部分)の面積は17.8㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が74cmを測り、東側のP5よりも34cm長い。また、P1～3・7～9で囲まれる亀甲形の部分の全体の面積は10.7㎡、P2・3・7・8で囲ま

れる長方形部分の面積は8.8㎡を測り、P9の突出長はP1よりも10cm短い。

P1 (SK526)は平面形が丸みのある方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。東側が円筒形に深く掘り込まれている。規模は、長軸長98cm、短軸長92cm、西側の深さ83cm、東側の深さ123cmを測り、底面の標高は西側では325.1m、東側では324.7mである。堆積土は4層に分層され、いずれも礫が多く含まれ、柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2 (SK529)は平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径125cm、深さ141cmを測り、底面の標高は324.6mである。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1$ は自然堆積土、 $\ell 2$ は柱痕、 $\ell 3 \sim 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は15cmを測る。

P3 (SK836)は平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がるが、東壁下半部はオーバーハングしている。規模は、長径117cm、短径100cm、深さ139cmを測り、底面

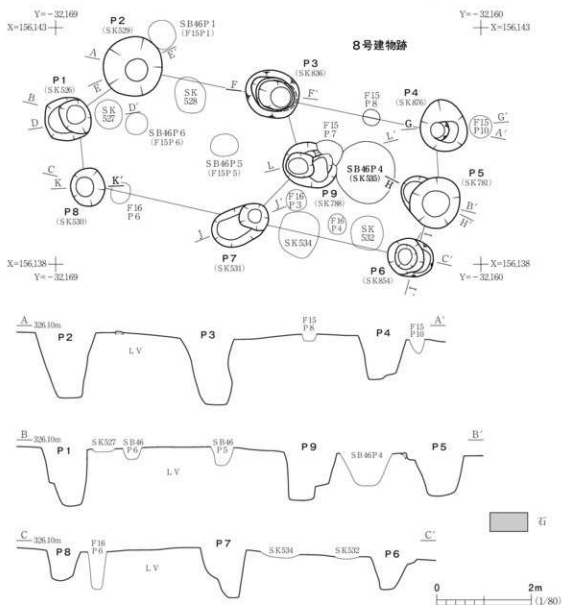
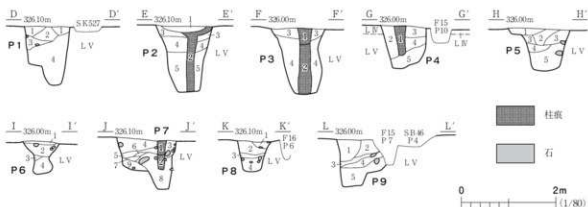


図35 8号建物跡(1)

の標高は324.4mである。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は柱痕、 $\ell 3 \cdot 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は23cmを測る。

P4 (SK 876)は平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面の西側は一段低くなっている。規模は、長径112cm、短径99cm、東側の深さ83cm、西側の深さ91cmを測り、西側の底面の標高は325.0mである。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \sim 5$ は柱抑えの土であるが、柱痕は底面まで達していないことから、柱は土層観察面より若干南側に設置されていたものと推測される。

P5 (SK 781)は平面形が不整楕円形で、南東側は円筒形を呈し、北西側は浅い皿状を呈しており、全体の規模は、長径130cm、短径110cmを測る。南東側の円筒形部分は平面形が円形で、周壁は直線的に



8号建物跡

P1堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒少量、3～5cm大の礫多量)
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・1～5cm大の礫多量)
- 3 黒褐色土 10YR2/3
(1～3cm大の礫多量、4～10cm大の礫少量、砂含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2～4cm大の礫多量)

P2堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物・2～10cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒・2～4cm大の礫少量)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、2～4cm大の礫多量)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・1～2・10～15cm大の礫多量)
- 5 暗褐色砂質土 10YR3/4 (砂・2～3cm大の礫多量、10～15cm大の礫含む)

P3堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒微量、1～2cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、2cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3
(1～3cm大の礫多量、7～10cm大の礫少量、砂含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3
(砂・1～4cm大の礫多量、10cm大の礫含む)

P4堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒微量、1～2cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (3～10cm大の礫多量、砂含む)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/4 (砂多量、2～8cm大の礫少量)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・3～12cm大の礫含む)
- 5 暗褐色砂質土 10YR3/3 (2～3cm大の礫少量、砂含む)

P5堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量、1～2cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (砂微量、1～4cm大の礫少量)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂多量、1～3cm大の礫含む)
- 4 黒褐色砂質土 10YR2/3 (6cm大の礫少量、砂・1～2cm大の礫含む)
- 5 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2～5cm大の礫多量)

P6堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (2～4cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3
(5～10cm大の礫多量、2～3cm大の礫含む)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂多量、3cm大の礫含む)
- 4 黒褐色砂質土 10YR2/2 (3～5cm大の礫多量、砂含む)

P7堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒微量、1～3cm大の礫少量)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (1～2cm大の礫少量)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、3～12cm大の礫含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒少量、3～10cm大の礫含む)
- 5 黒褐色土 10YR2/2 (5cm大の礫多量、炭化物片含む)
- 6 黒褐色砂質土 10YR2/3
(1～2cm大の礫多量、砂・4～6cm大の礫含む)
- 7 暗褐色砂 10YR3/3 (砂多量、3～5cm大の礫含む)
- 8 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・3～4cm大の礫多量)
- 9 黒褐色土 10YR2/2 (砂含む)

P8堆積土

- 1 黒褐色砂質土 10YR2/3
(砂多量、炭化物粒微量、10cm大の礫少量、4～10cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量、3～5cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂・1～2cm大の礫含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3
(砂多量、4～8cm大の礫少量、2～3cm大の礫含む)

P9堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2
(炭化物粒微量、5～7cm大の礫少量、1～3cm大の礫含む)
- 2 オリーブ褐色砂 25Y4/3
(1～3cm大の礫多量、5cm大の礫少量)
- 3 黒褐色砂質土 10YR2/3 (2～5cm大の礫多量、砂含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・4～5cm大の礫多量)
- 5 黒褐色土 10YR2/3 (砂・2～5cm大の礫含む)

図36 8号建物跡(2)

急外傾して立ち上がる。長径110cm、短径104cm、深さ90cmを測り、底面の標高は324.9mである。一方、北西側の皿状の部分は周壁が直線的に急外傾して立ち上がり、深さ12cmを測る。堆積土は5層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2～5は柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P6 (SK 854) は、平面形が楕円形で、西側は箱形を呈し、東側は浅い皿状を呈しており、規模は、長径100cm、短径82cmを測る。西側の箱形部分は、平面形が隅丸方形で、周壁が直線的に急外傾して立ち上がる。長軸長75cm、深さ70cmを測り、底面の標高は325.1mである。一方、東側の皿状の部分は周壁の立ち上がりは緩く、深さ10cmを測る。遺構東側で土層観察を行ったことから柱痕を検出できなかったが、土層観察面における堆積土は4層に分層され、いずれも柱抑えの土と推測される。

P7 (SK 531) は平面形が楕円形で、北東側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径126cm、短径80cm、南西側の深さ71cm、北東側の深さ110cmを測り、北東側の底面の標高は324.9mである。堆積土は9層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3～9は柱抑えの土であるが、柱痕は底面まで達していないことから、柱は土層観察面より若干北西側に設置されていたものと推測される。

P8 (SK 530) は平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径80cm、短径72cm、深さ65cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P9 (SK 788) は平面形が楕円形と推測され、西側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径113cm、短径94cm、東側の深さ69cm、西側の深さ99cmを測り、西側の底面の標高は324.8mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、縄文・弥生土器23点、剥片5点が出土した。いずれも小片で図示できた遺物はない。太い沈線をもつ小片、複合口縁の深鉢などが含まれ、縄文時代晩期～弥生時代前期に位置づけられる。

まとめ

本遺構は2間×1間の中型の建物跡で、両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。内部にも棟持柱をもち、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から縄文時代晩期末葉～弥生時代前期と推測される。本建物跡の一部を壊して建てられている46号建物跡が弥生時代中期後葉のものであることも矛盾しない。(能登谷)

9号建物跡 SB09

遺 構 (図37・38、写真32)

本遺構は調査区南半部のE～G 16グリッドに位置し、平坦面に立地している。西半部はLⅣ上

面において検出され、東半部はLV上面で検出された。12～14号建物跡、439・444・789号土坑と重複し、12～14号建物跡よりも古いのが、439・444・789号土坑との新旧関係は不明である。北方4mに8号建物跡、南東2mに17号建物跡、同5mに16号建物跡が存在する。

本遺構は9基の柱穴(P1～9)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側と内部に棟持柱の柱穴(P1・5・9)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～5間)9.6m(西から6.0+3.6m)、桁行長(P6～8間)7.9m(西から3.7+4.2m)、梁行長(P2～8間)3.2mを測り、全体の面積は26.7㎡、長方形部分(P2・4・6・8で囲まれる部分)の面積は23.6㎡を測る。棟持柱の突出長は西側のP1が131cmを測り、東側のP5よりも71cm長い。また、P1～3・7～9で囲まれる亀甲形の部分の全体の面積は15.0㎡、P2・3・7・8で囲まれる長方形部分の面積は11.0㎡を測り、P9の突出長はP1よりも11cm短い。

P1(SK438)は平面形が隅丸長方形で、周壁は下部が急な角度で、上部が直立気味に立ち上がる。規模は、長軸長97cm、短軸長82cm、深さ83cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～4は柱抑えの土で、柱痕の幅は22cmを測る。

P2(SK448)は平面形が不整隅丸方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長82cm、短軸長75cm、深さ72cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は5層に分層され、いずれも遺構廃絶に伴う柱抜き取り後の堆積土と推測される。

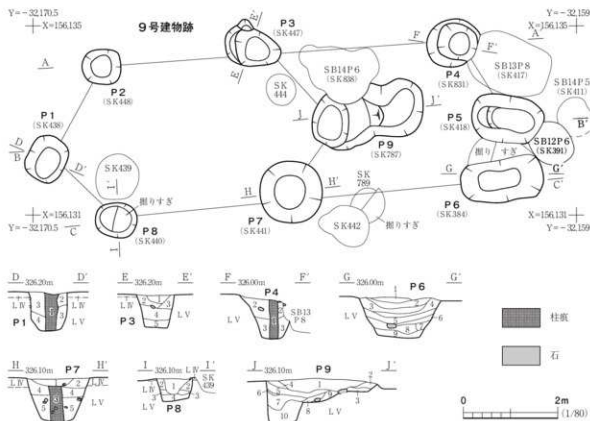
P3(SK447)は平面形が不整楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がるが、西壁には底面から約30cmの高さの所に段が認められる。規模は、長径122cm、短径95cm、深さ71cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、いずれも遺構廃絶に伴う柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P4(SK831)は平面形が楕円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)117cm、短径100cm、深さ93cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P5(SK418)は平面形が楕円形で、中央から東側が深く掘り込まれている。周壁は直線的ないしは内湾気味に急外傾して立ち上がる。規模は、長径154cm、短径(遺存値)103cm、西側の深さ87cm、東側の深さ108cmを測り、東側の底面の標高は324.5mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3・4は柱抑えの土で、柱痕の幅は30cmを測る。

P6(SK384)は、平面形が長楕円形で、南壁及び北壁は直立気味に立ち上がり、東壁及び西壁は直線的ないしは内湾気味に急外傾して立ち上がっている。規模は、長径175cm、短径は遺存値で92cm、深さ85cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は9層に分層され、いずれも遺構の廃絶に伴う柱抜き取り後の堆積土と推測される。また、ℓ3～8にはLV由来の礫や砂が多く含まれている。

P7(SK441)は平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がっている。規模は、径130～132cm、深さ93cmを測り、底面の標高は325.0mである。堆積土は5層に分



9号建物跡

P1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒・2~4cm大の礫少量)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (5~10cm大の礫多量、砂含む)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (2~5cm大の礫多量、砂含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/3 (2~5cm大の礫少量、砂含む)

P2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量、4~6cm大の礫少量、1~2cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (砂微量、2~3cm大の礫少量、4~6cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量、2~3cm大の礫含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2~6cm大の礫多量)
- 5 黒褐色土 10YR2/2 (砂・3~4cm大の礫含む)

P3 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量、2~3cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (2~5cm大の礫多量、砂含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/2 (6cm大の礫少量、2~3cm大の礫含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・3~6cm大の礫多量、15cm大の礫少量)
- 5 黒褐色土 10YR2/3 (3~4cm大の礫多量、6cm大の礫少量、砂含む)

P4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒微量、1~2cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒微量、砂少量)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 (炭化物粒微量、砂含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物粒・砂微量、2~10cm大の礫少量)
- 5 褐色砂質土 10YR4/4 (砂・2~4cm大の礫多量)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (3cm大の礫含む)
- 7 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2~6cm大の礫多量)
- 8 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、2~3cm大の礫多量)
- 9 暗褐色砂質土 10YR3/4 (砂多量)
- 10 オリーブ褐色砂 2.5Y4/3 (2~5cm大の礫多量)

P5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (小礫少量、5~15cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (小礫少量)
- 3 褐色砂質土 10YR4/4 (砂多量、小礫少量)
- 4 褐色砂質土 10YR4/4 (砂・小礫少量)

P6 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒少量、3~5cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (2~12cm大の礫含む)
- 3 暗褐色砂質土 10YR2/3 (砂・3~15cm大の礫多量)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (3~8cm大の礫多量)
- 5 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2~6cm大の礫多量)
- 6 黒褐色土 10YR2/2 (2~4cm大の礫多量)
- 7 にくい黄褐色砂 10YR4/3 (3~10cm大の礫多量)
- 8 黒褐色土 10YR2/3 (5~10cm大の礫多量)
- 9 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒少量、3~6cm大の礫含む)

P7 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (礫多量)
- 2 黒褐色土 10YR2/2
- 3 黒褐色土 10YR3/2 (礫少量)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (小礫多量)
- 5 暗褐色砂質土 10YR3/4 (礫多量)

P8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒・L.V.小礫微量、2~3cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (3~10cm大の礫多量)
- 3 にくい黄褐色土 10YR4/3 (L.V.塊・4~8cm大の礫多量)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量、2~4cm大の礫含む)

P9 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒・2~10cm大の礫少量、土片含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒微量、砂少量)
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 (炭化物粒微量、砂含む)
- 4 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物粒・砂微量、2~10cm大の礫少量)
- 5 褐色砂質土 10YR4/4 (砂・2~4cm大の礫多量)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (3cm大の礫含む)
- 7 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2~6cm大の礫多量)
- 8 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、2~3cm大の礫多量)
- 9 暗褐色砂質土 10YR3/4 (砂多量)
- 10 オリーブ褐色砂 2.5Y4/3 (2~5cm大の礫多量)

図37 9号建物跡 (1)

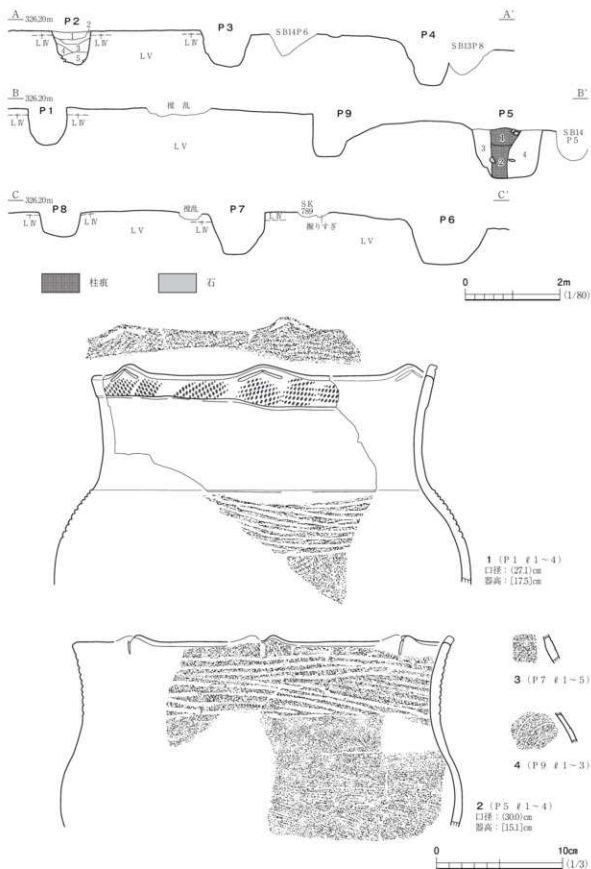


図38 9号建物跡(2)・出土遺物

層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 3$ は柱痕、 $\ell 4 \cdot 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は上部で26cmを測る。

P 8 (SK 440) は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径89cm、短径74cm、深さ50cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1$ は遺構廃絶時の柱抜き取り穴の堆積土、 $\ell 2 \sim 4$ は柱抑えの土と推測される。

P 9 (SK 787) は、平面形が東西主軸の不整楕円形で、西側が円筒形に深く掘り込まれており、その東方では底面に段が認められ、東から順に低くなっている。周壁は、西壁では直立気味に立ち上がり、他の壁では直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径240cm、短径(遺存値)134cm、東側の深さ23cm、中央の深さ45cm、西側の深さ93cmを測り、西側の底面の標高は325.0mである。堆積土は10層に分層され、 $\ell 1$ は自然堆積土、 $\ell 2 \sim 10$ は遺構廃絶に伴う柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図38、写真178・179)

本建物跡からは、縄文・弥生土器188点、剥片13点が出土した。P 1・2・7から出土した土器は縄文時代晩期～弥生時代前期のものが多く、もっとも多くの土器が出土したP 9のみ弥生時代中期の土器が含まれる。このうち縄文土器2点、弥生土器2点を図示した。

図38-1・2は、縄文土器の深鉢である。1は、やや張りのある体部、筒形の頸部、山形突起をもつ複合口縁をもつ。複合口縁と頸部の境、頸部と体部の境にそれぞれ段を有する。複合口縁と体部に縄文を施したのち、口縁部突起に「へ」字が、体部上端に斜行する沈線が密に描かれる。頸部は無文で、ミガキが施される。縄文の下には条痕がわずかに観察される。内面調整は、ナデのちミガキである。外面全体に炭化物が薄く付着する。2は、縄文土器の深鉢である。やや張りのある体部、内傾する頸部、二山の山形突起をもち緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁部と体部に条痕を施したのち、口縁部と頸部を画する1本の沈線を巡らせ、二山の山形突起の中央に縦の短沈線が、口縁部に斜行する沈線が密に描かれる。頸部は無文で、ミガキが施される。内面調整は、ナデ後ミガキである。外面のほぼ全体部に炭化物が厚く付着する。

同図3・4は弥生土器である。いずれも小片で、器種は不明である。3は磨消縄文が、4は渦文もしくは同心円文が描かれる。

まとめ

本遺構は2間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。内部にも棟持柱をもち、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が長いという特徴がある。本遺構から出土した土器は、縄文時代晩期～弥生時代前期のものと弥生時代中期～後葉のものの両者がある。ただし後者を出土した柱穴のうち、P 7については柱痕を含む堆積土の上部が攪乱されている可能性があること、P 9については一つの遺構として調査したものの2基の遺構が重複している可能性を否定しきれないことから、いずれも本遺構のものではない可能性がある。

本遺構の時期は、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期と推測される。本遺構より新しい12号建物跡が弥生時代中期前～後葉、13号建物跡が弥生時代前期～中期後葉であること、14号建物跡から縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉の土器が出土していることも矛盾しない。(能登谷)

10号建物跡 S B 10

遺 構 (図39、写真33)

本遺構は調査区南半部のH17グリッドに位置し、平坦面に立地している。遺構の大部分は1号住居跡の掘形底面(LV)において検出されたことから、P1の西半部以外は1号住居跡により上部が削平されている。なお、8号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P1～4)から構成される。平面形は北西～南東主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P1～4間)2.8m、梁行長(P3～4間)2.2m、面積5.8㎡を測る。

P1(S K 783)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、上部では直立する部分もある。規模は、長径82cm、短径(遺存値)64cm、深さ58cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2は、平面形が円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径(遺存値)59～64cm、深さ(遺存値)36cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は2層に分層され、①は柱抜き取り後の堆積土、②は柱抑えの土と推測される。

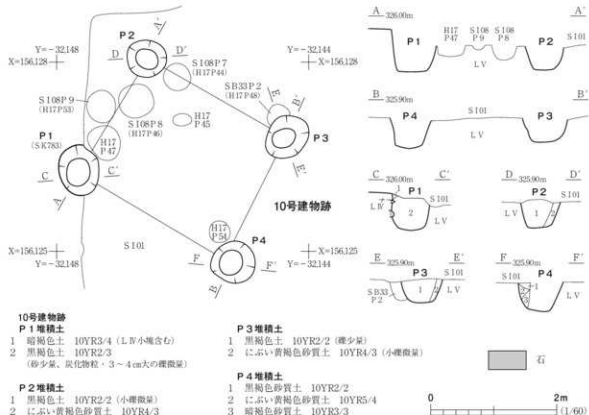


図39 10号建物跡

P3は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)76cm、短径(遺存値)62cm、深さ(遺存値)38cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2は柱抑えの土と推測される。

P4は、平面形が不整形円で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径(遺存値)67～70cm、深さ(遺存値)49cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、縄文・弥生土器23点、剥片5点が、いずれもP1から出土した。磨消縄文や条痕が施される土器など、弥生時代中期に位置づけられる土器が多い。図示した遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期と推測される。

(能登谷)

11号建物跡 SB11

遺 構 (図40、写真34)

本遺構は調査区南半部のG・H16グリッドに位置し、平坦面の北側縁辺部に立地している。LV上面において検出した。48号建物跡、91号土坑、G16P2・3・14～16・21～25、H16P66と重複し、91号土坑、G16P21より新しく、48号建物跡、G16P3、H16P66より古い。なお、他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

本遺構は4基(P1～4)の柱穴から構成される。平面形は東西主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P1～2間)3.0m、梁行長(P2～3間)2.3m、面積6.3㎡を測る。

P1(SK590)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上部では広がっている部分がある。規模は、長径(遺存値)71cm、短径62cm、深さ50cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は24cmを測る。

P2は、平面形が楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径54cm、短径40cm、深さ24cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は記録前に完掘してしまい、不明である。

P3(SK587)は、平面形が不整形楕円形で、東側は円筒形を呈し、西側は浅い皿状を呈する。東側の円筒形部分の周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)77cm、短径50cm、深さ41cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～4は柱抑えの土で、柱痕の幅は12cmを測る。

P4(SK591)は、平面形が長楕円形で、南西側は円筒形を呈し、北東側は皿状を呈する。周壁は、内湾気味ないしは直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長径98cm、短径60cm、深さ35cmを測り、

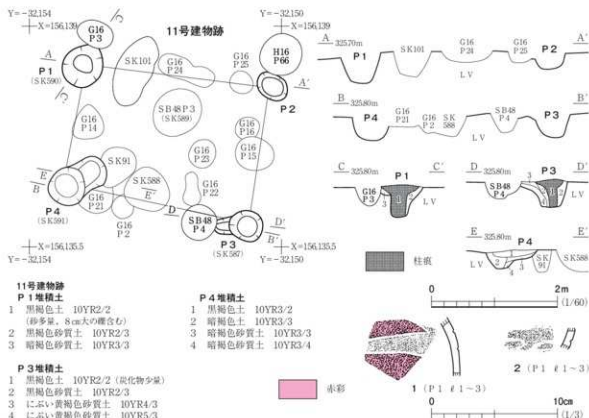


図40 11号建物跡・出土遺物

底面の標高は325.2mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後に堆積した土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図40、写真179)

本建物跡のP1・3・4から縄文・弥生土器が計48点、剥片が計13点出土した。このうち弥生土器2点を図示した。

図40-1は壺の体部である。磨消縄文による文様が描かれ、縄文部分に赤彩がわずかに残る。同図2は、太い沈線で工字文と思われる文様が描かれる。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。各柱穴は、平面形が楕円形で、短径が40～62cmと小型であり、底面の標高はP1(325.1m)以外では325.2～325.3mと近似している。本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期前葉と推測される。本遺構より新しい48号建物跡の弥生時代中期中葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

12号建物跡 SB12

遺構 (図41・42、写真35)

本遺構は調査区南半部のF・G16グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面におい

て検出した。9・13・14号建物跡、410・415・422・425・538・637・638号土坑、G16 P33と重複し、9・13・14号建物跡、425・538・637・638号土坑より新しいが、410・415・422号土坑、G16 P33との新旧関係は不明である。この他、北東約1.5mには48号建物跡、南東約1mには17号建物跡が存在する。

本遺構は6基の柱穴(P1～P6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は東西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～4間)4.8m、桁行長(P2～3間)3.1m、梁行長(P2～6間)2.8m、全体の面積10.6㎡、長方形部分の面積8.1㎡を測る。棟持柱の突出長は東側のP4が146cmを測り、西側のP1よりも110cm長い。

P1(SK923)は、平面形が長楕円形と推測され、周壁は外反気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径99cm、短径66cm、深さ49cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は1層で、柱抜き取り後の堆積土と推測される。

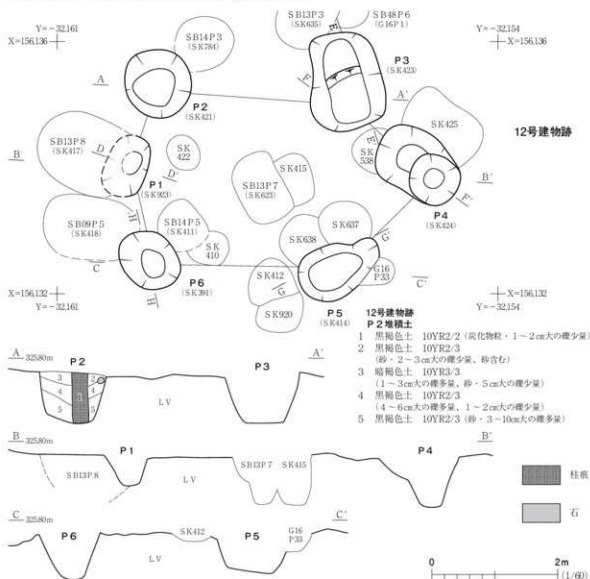


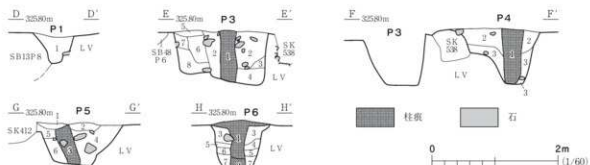
図41 12号建物跡(1)

P2 (SK421) は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径107～112cm、深さ81cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～5は柱抑えの土で、柱痕の幅は26cmを測る。

P3 (SK423) は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、底面の南半は一段低くなっている。規模は、長軸長158cm、短軸長121cm、北側底面の深さ67cm、南側底面の深さ84cmを測り、南側底面の標高は324.8mである。堆積土は8層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～4は柱抑えの土、ℓ5～8は古い段階の埋土で、柱痕の幅は24cmを測る。

P4 (SK424) は平面形が隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、南東側は円筒形に深く掘り込まれている。規模は、長径144cm、短径100cm、北西側底面の深さ51cm、南東側底面の深さ83cmを測り、南東側底面の標高は324.7mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は27cmを測る。

P5 (SK414) は、平面形が不整長楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち



12号建物跡

P1増殖土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物・2～5cm大の礫少量、砂微量)

P3増殖土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物・1～2cm大の礫少量)
 2 黒褐色土 10YR2/3 (3～20cm大の礫多量、砂含む)
 3 暗褐色砂 10YR3/3 (砂・1～2cm大の礫多量)
 4 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂多量、3～10cm大の礫含む)
 5 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量、2cm大の礫少量)
 6 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物少量、2～3cm大の礫含む)
 7 黒褐色土 10YR2/3 (3～4cm大の礫含む)
 8 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂多量、2～3cm大の礫少量)

P4増殖土

- 1 黒色砂質土 10YR2/1 (小礫微量)
 2 黒褐色砂質土 10YR2/2 (小礫含む)
 3 黒褐色砂質土 10YR2/3 (小礫多量)

P5増殖土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (2～3cm大の礫含む)
 2 黒褐色土 10YR2/2 (1cm大の礫少量)
 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂多量、1cm大の礫少量、1～2cm大の礫含む)
 4 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂・6～20cm大の礫含む)
 5 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・3～5cm大の礫多量)
 6 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂・2～5cm大の礫含む)

P6増殖土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒・4～6cm大の礫少量、1～2cm大の礫含む)
 2 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒微量)
 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 (1～4cm大の礫多量、砂含む)
 4 黒褐色土 10YR2/2 (砂微量、4～5cm大の礫少量)
 5 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂多量、2～3cm大の礫含む)
 6 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量、3cm大の礫含む)
 7 黒褐色土 10YR2/3 (砂・1～2cm大の礫少量)

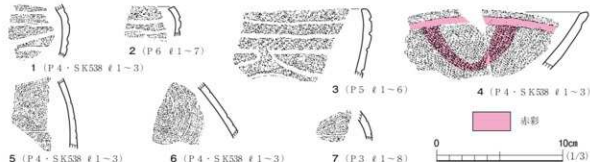


図42 12号建物跡(2)・出土遺物

上がる。規模は、長径138cm、短径87cm、深さ65cmを測り、底面の標高は325.0mである。堆積土は6層に分層され、ℓ1・2は廃絶後の堆積土、ℓ3は柱痕、ℓ4～6は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。ℓ3の柱痕が傾いているが、廃絶の際に柱を傾けた可能性がある。

P6（SK391）は、平面形が楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がるが、上部は立ち上がりが緩くなっている。規模は、長径104cm、短径84cm、深さ77cmを測り、底面の標高は324.9mである。堆積土は7層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3～7は柱抑えの土で、柱痕の幅は23cmを測る。なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物（図42、写真179）

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP3・5・6から計27点、剥片がP3・6から計6点出土した。P4については重複する538号土坑と同時に掘り込み、縄文・弥生土器41点、剥片7点が出土した。これらのうち、弥生土器7点を図示した。

図42-1・2は、深鉢の体部と口縁部である。外面に磨消縄文で文様が描かれる。いずれも外面に炭化物が厚く付着する。それぞれ異なるビットから出土したが、同一個体の可能性がある。

同図3は、深鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。文様は層波文と思われる。

同図4は、鉢もしくは高杯である。緩やかに湾曲しながら外傾する。口唇部に面を有し、口唇直下の外面に幅の狭い無文帯を挟んで幅5mmの帯状の浅い沈線を巡らせ、体部に縄文が施される。外面に部分的に赤彩がみられるが、塗り分けられたものか、部分的に遺存したものかは判断しがたい。外面全体と内面の口唇部付近にやや光沢のある炭化物が薄く付着する。

同図5～7は壺の体部で、5は渦文もしくは同心円文が、6はブリッジをもつ同心円文が、7は三角形の文様が、それぞれ細い沈線で描かれ、交互ミガキがまばらに施される。

まとめ

本遺構は1間×1間の小型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。梁からの棟持柱の突出長は東側の方が長いという特徴がある。本遺構から出土した土器には弥生時代中期前葉のものと同中期後葉のものがある。本遺構より古い9号建物跡の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、13号建物跡の弥生時代前期～中期後葉、14号建物跡の縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉、538号土坑の弥生時代前期、637号土坑の時期不明、638号土坑の時期不明という年代を勘案すれば、本遺構は弥生時代中期後葉のものと推測される。（能登谷）

13号建物跡 SB13

遺構（図43・44、写真36）

本遺構は調査区南半部のF・G16グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。9・12・14・48号建物跡、415・420・425・536～538・636号土坑と重複し、12号建物跡、415・420・425号土坑より古く、9・14・48号建物跡、536・636号土坑より新しい。なお、537・538号土坑とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

本遺構は8基の柱穴(P1～8)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・5)をもち、平面形は北西-南東主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1-5間)6.9m、桁行長(P6-8間)6.1m(西から2.9+3.2m)、梁行長(P2-8間)3.0mを測り、全体の面積は18.9㎡、長方形部分(P2・4・6・8で囲まれる部分)の面積は17.1㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が92cmを測り、東側のP5よりも68cm長い。

P1(SK419)は、平面形が不整楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)128cm、短径108cm、深さ105cmを測り、底面の標高は324.6mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2(SK855)は、平面形が不整楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径169cm、短径107cm、深さ88cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は13層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3～13は柱抑えの土で、柱痕の幅は28cmを測る。

P3(SK635)は、平面形が長楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径178cm、短径90cm、深さ92cmを測り、底面の標高は324.7mである。堆積土は8層に分層され、ℓ1～3は柱抜き取り後の堆積土、ℓ4～8は柱抑えの土で、ℓ6の裾部は柱抜き取り後に底面まで流れたものと推測される。

P4(SK164)は、平面形が不整楕円形で、北側は深い円筒形を呈し、南西側は浅い皿状を呈していたものと推測される。全体の規模は、長径116cm、短径70cmを測る。北側の円筒形部分は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾し、長径82cm、短径65cm、深さ55cmを測り、底面の標高は325.1mである。一方、南側の皿状の部分は周壁が緩く立ち上がり、深さ20cmを測る。堆積土は5層に分層され、ℓ1～4は柱抜き取り後の堆積土、ℓ5は柱抑えの土と推測される。

P5(SK543)は、平面形が楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径77cm、短径61cm、深さ42cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2は柱抑えの土と推測される。

P6(SK426)は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長58cm、短軸長52cm、深さ42cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3は柱抑えの土で、柱痕の幅は22cmを測る。

P7(SK623)は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味ないしは急外傾して立ち上がり、北壁と西壁の中央部には立ち上がりの緩い部分が認められる。規模は、長軸長114cm、短軸長(遺存値)75cm、深さ75cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は26cmを測る。

P8(SK417)は、平面形が隅丸長方形ないしは楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、東西両壁の上部は直立気味に立ち上がる。規模は、長径(遺存値)147cm、短径120cm、深さ80cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は10層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

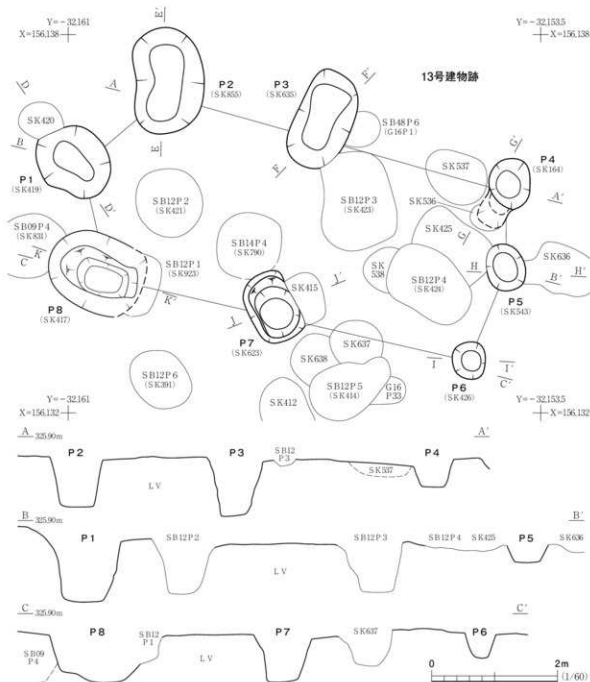


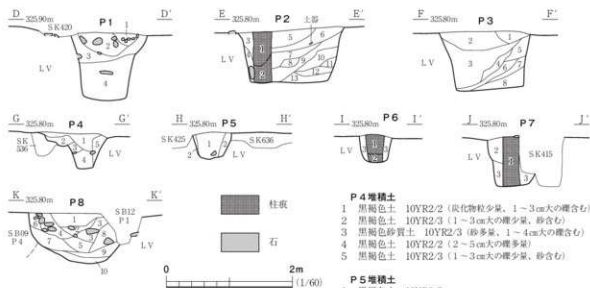
図43 13号建物跡 (1)

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図44、写真179)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP1・2・3・5・6・8から計64点、剥片がP1・2・5・6・8から計13点出土した。このうち、弥生土器9点を図示した。

図44-1～6は、深鉢である。1は、短く外傾する無文の波状口縁と体上部の一部が遺存する。体上部に変形工字文が描かれる。縦の短沈線が特に太く深く描かれ、その両脇に沈線を引いた際の粘土層が貼り付けられる。内外面ともミガキが施される。外面に炭化物が付着する。2は、口縁部



13号建物跡

P1堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒少量、2cm大の礫含む)
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・1~3cm大の礫多量、10~20cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、3~6cm大の礫含む)
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 (4~6cm大の礫多量、20cm大の礫少量、砂含む)

P2堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物・2~5cm大の礫少量)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒、1~2cm大の礫少量)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂・1~4cm大の礫少量)
- 4 黒褐色砂質土 10YR3/3 (砂・2~3cm大の礫含む)
- 5 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、2~3cm大の礫含む)
- 6 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量、2~3cm大の礫含む)
- 7 暗褐色砂質土 10YR3/4 (砂・1~2cm大の礫多量、3~4cm大の礫少量)
- 8 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂・1~2cm大の礫多量)
- 9 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量、2~5cm大の礫少量)
- 10 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂多量、1~3cm大の礫含む)
- 11 黒褐色砂質土 10YR2/2 (砂多量、1~2cm大の礫含む)
- 12 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量)
- 13 黒褐色土 10YR2/2 (3~10cm大の礫多量)

P3堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (5cm大の礫少量、炭化物粒・1~2cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (炭化物粒・砂少量、2~4cm大の礫多量)
- 3 黒褐色土 10YR2/2 (5~10cm大の礫含む)
- 4 明黄褐色砂 10YR6/6 (2~4cm大の礫多量)
- 5 黒褐色土 10YR2/3 (砂・2~3cm大の礫含む)
- 6 黒褐色土 10YR2/2 (砂・4cm大の礫少量)
- 7 黒褐色土 10YR2/3 (2~3cm大の礫少量、砂含む)
- 8 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂多量、黒色土少量、1~2cm大の礫含む)

P4堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒少量、1~3cm大の礫含む)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (1~3cm大の礫少量、砂含む)
- 3 黒褐色砂質土 10YR2/3 (砂多量、1~4cm大の礫含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (2~5cm大の礫多量)
- 5 黒褐色土 10YR2/3 (1~3cm大の礫少量、砂含む)

P5堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、炭化物粒・2~5cm大の礫少量)
- 2 黒褐色砂質土 10YR2/3 (2~4cm大の礫少量、砂含む)

P6堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物粒・1~2cm大の礫少量)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (砂少量、1~2cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂・1~3cm大の礫含む)

P7堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物少量、2~3cm大の礫含む)
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3 (4~6cm大の礫少量、砂・2~3cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (砂・5cm大の礫少量、2~3cm大の礫多量)

P8堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2 (砂少量、炭化物粒・2~5cm大の礫少量)
- 2 黒褐色土 10YR2/3 (砂・12cm大の礫少量、1~2cm大の礫含む)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (1~2cm大の礫少量、砂・8~20cm大の礫含む)
- 4 黒褐色土 10YR2/2 (10~15cm大の礫多量)
- 5 黒褐色土 10YR2/2 (砂・3cm大の礫少量)
- 6 黒褐色土 10YR2/3 (8cm大の礫少量、砂含む)
- 7 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・1~2cm大の礫多量、10cm大の礫含む)
- 8 暗褐色砂質土 10YR3/3 (砂・1~3cm大の礫多量、10~16cm大の礫含む)
- 9 黒褐色土 10YR2/2 (5~8cm大の礫少量)
- 10 暗褐色砂質土 10YR3/4 (砂多量、3~5cm大の礫含む)

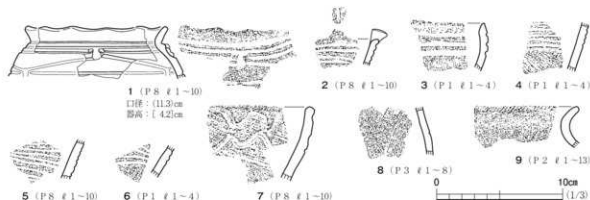


図44 13号建物跡(2)・出土遺物

に突起を有する。突起の上面に刻みが入れられ、外面に工字文が描かれる。3は口縁部、4は体部で、それぞれ縄文・条痕を施したのち沈線が引かれる。5・6は、体部である。異なるビットから出土したものであるが、同一個体と思われる。条痕を施したのち密集した沈線が引かれる。

同図7は粗製深鉢の口縁部で、外面に条痕を施したのち、口唇部直下に波状文が2列巡らされる。

同図8は、壺の体部である。渦文が同心円文が描かれたのち、交互ミガキが施される。

同図9は甕の口縁部で、口唇部に縄文が回転施文され、口縁部にヨコナデが施される。

まとめ

本遺構は2間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。梁からの棟持柱の突出長は西側の方が長いという特徴がある。本遺構から出土した遺物には弥生時代前期のものと同中期後葉のものがあり、本遺構の時期はこの間のいずれかと推測される。本遺構より新しい12号建物跡の弥生時代中期後葉、420・425号土坑の時期不明、本遺構より古い9号建物跡の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、14号建物跡の縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉、48号建物跡の弥生時代中期中葉、536・636号土坑の時期不明という年代を勘案すれば、本遺構は弥生時代中期後葉のものと推測される。(能登谷)

14号建物跡 SB14

遺 構 (図45・46、写真37)

本遺構は調査区南半部のF・G16グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。9・12・13号建物跡、410・422号土坑、F16P9と重複し、9号建物跡より新しく、12・13号建物跡、410号土坑より古い。F16P9との新旧関係は不明である。また、422号土坑とは直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。北方2mに8号建物跡、南東2mに17号建物跡が存在する。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は東西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～4間)5.9m、桁行長(P5～6間)4.8m、梁行長(P2～6間)2.9mを測り、全体の面積は15.2㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は13.2㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が67cm、東側のP4が70cmでほぼ同じ長さである。

P1(SK522)は、平面形が楕円形で、周壁は下半部では直立気味に立ち上がり、上半部では直立気味ないしは急外傾して立ち上がる。規模は、長径78cm、短径68cm、深さ97cmを測り、底面の標高は325.0mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3～5は柱抑えの土である。柱痕の幅は26cmを測る。

P2(SK675)は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、南東壁上部は緩く立ち上がる。規模は、長軸長90cm、短軸長70cm、深さ81cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。



図46 14号建物跡(2)・出土遺物

存積)74cm、短径(遺存積)70cm、深さ73cmを測り、底面の標高は324.9mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 6 (SK 838)は、平面形が北西-南東主軸の不整形で、南東側が円筒形に深く掘り込まれており、その北西では底面に段が認められ、北西から順に低くなっている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、北東壁上部は緩く立ち上がる。規模は、長軸長167cm、短軸長134cm、北西側の深さ48cm、中央部の深さ68cm、南東側の深さ80cmを測り、南東側の底面の標高は325.0mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図46、写真178・180)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP1・2・5・6から計32点、剥片がP1・6から計2点出土した。このうち、縄文土器と弥生土器5点を図示した。

図46-1は、深鉢である。外傾する口縁部と、緩やかに湾曲しながら内傾する体部からなる。口縁部は波状、無文で、体部との境に段を有する。体部には、縄文を施したのち小さな掘り去り部を有する工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。

同図2・3は、深鉢である。胎土・色調などの特徴から同一個体と思われる。体上部から口縁部が外傾し、口縁部に二山の突起を有する。外面に縦方向の条痕を施したのち、口縁部に突起を起点とする2本の沈線と口縁部と体部を画す沈線を巡らせる。外面に炭化物が付着する。

同図4は深鉢である。無文の口縁部と平行する沈線が描かれる体部の破片である。沈線の底に、沈線を引く際に工具を止めた跡が観察される。

同図5は深鉢の体部で、二重の沈線で四角形を「田」字に描き、四角形外に縄文を施したのち連続する円形刺突を十字に並べる。縄文は撚糸のようであるが、判然としない。

同図5は編年の位置が明らかでないが弥生時代中期前葉頃までのものと思われ、その他はいずれも縄文時代晩期末葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもち、全体の平面形は亀甲形を呈する。梁からの棟持柱の突出長は東西ともほぼ同じである。本遺構から出土した遺物は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉のものであるが、本遺構より古い9号建物跡の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期という年代を勘案すれば、本遺構は弥生時代前期～中期前葉と推測される。本遺構より新しい12・13号建物跡の弥生時代中期後葉、410号土坑の時期不明とも矛盾しない。(能登谷)

15号建物跡 SB15

遺構 (図47、写真38)

本遺構は調査区南半部のF・G18グリッド、F・G19グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。G18P22・27～29と重複するが、新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1-4間)3.7m、桁行長(P5-6間)2.2m、梁行長(P3-5間)2.1mを測り、全体の面積は6.0㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は4.5㎡を測る。棟持柱の突出長は、南側のP4が102cmで、北側のP1よりも57cm長い。

P1(G18P21)は、平面形が楕円形で、周壁は東壁では直線的に急外傾して立ち上がり、北壁では直立気味で、西壁から南壁では下半部がオーバーハングしている。規模は、長径40cm、短径30cm、深さ43cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土断面で幅16cmの柱痕が認められた。

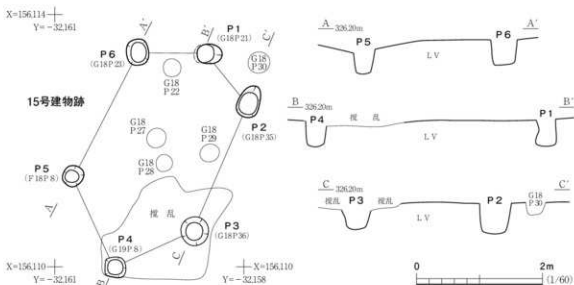


図47 15号建物跡

P2 (G18P35)は楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径51cm、短径33cm、深さ49cmを測り、底面の標高は325.5mである。

P3 (G18P36)は円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径45cm、深さ(遺存値)31cmを測り、底面の標高は325.6mである。

P4 (G19P8)は隅丸方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長38cm、短軸長32cm、深さ40cmを測り、底面の標高は325.6mである。

P5 (F18P8)は隅丸方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長32cm、短軸長29cm、深さ40cmを測り、底面の標高は325.5mである。

P6 (G18P23)は隅丸長方形で、周壁は直立気味に立ち上がる。規模は、長軸長39cm、短軸長36cm、深さ40cmを測り、底面の標高は325.6mである。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP1・3・4・6から計18点、剥片がP1・6から計3点出土した。図示した遺物はないが、時期がわかる土器はいずれも磨消縄文が施された弥生時代前期～中期前葉のものと考えられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の小型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。梁からの棟持柱の突出長は南側が長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代前期～中期前葉と推測される。(能登谷)

16号建物跡 SB16

遺 構 (図48・49、写真39)

本遺構は調査区南半部のF・G17グリッドに位置し、平坦面に立地している。遺構西部から北

西部にかけてはLⅤ上面において検出され、それ以外はLⅣ上面で検出した。17・18号建物跡、171・181・182・379・380・416・434号土坑、1号性格不明遺構、G17P4・6・15～17・23・24と重複し、380・416号土坑、1号性格不明遺構、G17P4・6・23・24よりは新しく、434号土坑よりは古い。17号建物跡との新旧関係は不明である。その他の遺構とは直接の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

本遺構は8基の柱穴(P1～8)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・5)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～5間)7.6m、桁行長(P2～4間)6.1m(西から4.1+2.0m)、梁行長(P2～8間)3.0mを測り、全体の面積は20.4㎡、長方形部分(P2・4・6・8で囲まれる部分)の面積は18.1㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が90cmを測り、東側のP5よりも30cm長い。

P1(SK449)は、平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径60～66cm、深さ56cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ3～5は柱抑えの土と推測される。

P2は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味に立ち上がる。規模は、長軸長84cm、短軸長70cm、深さ58cmを測り、底面の標高は325.3mである。

P3(SK183)は、平面形が不整楕円形で、周壁は、下部がやや緩く、上部が直立気味に急外傾して立ち上がる。規模は、長径114cm、短径96cm、深さ55cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2・3は柱痕、ℓ4は柱抑えの土である。柱痕の幅は24cmを測る。

P4(SK190)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径112cm、短径90cm、深さ34cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P5(SK189)は、平面形が不整円形で、周壁は急外傾して立ち上がり、北壁上部は緩く立ち上がる。規模は、径118～123cm、深さ56cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P6(SK188)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは急外傾して立ち上がる。規模は、長径88cm、短径68cm、深さ65cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P7(SK185)は、平面形が隅丸長方形で、南西側がボウル状に深く掘り込まれている。周壁は、下部が緩く、上部が直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長143cm、短軸長112cm、南西側の掘り込みの深さ54cm、東側の深さ25cmを測り、南西側の掘り込みの底面の標高は325.4mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P8(SK177)は、平面形が楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径107cm、短径79cm、深さ50cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は6層に分層され、いずれも柱抜

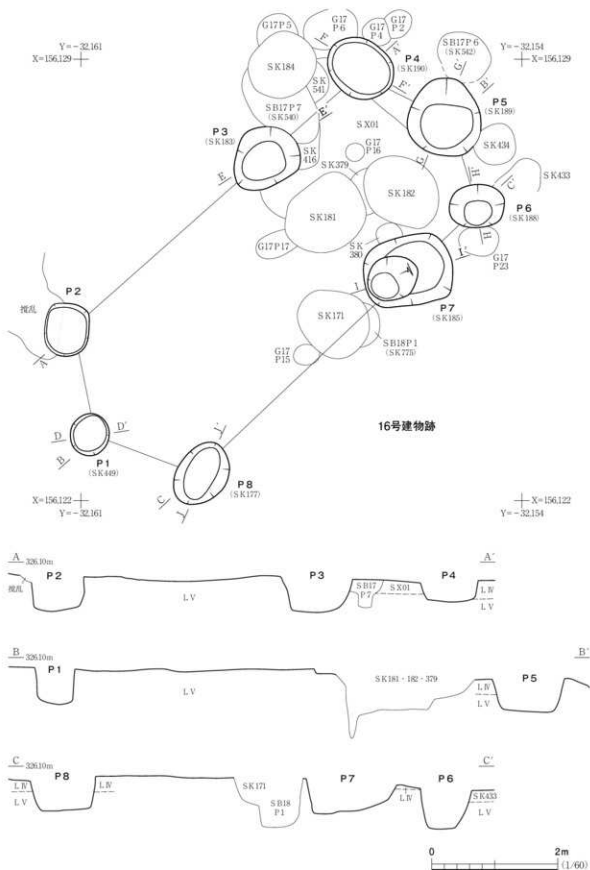


图48 16号建物迹(1)

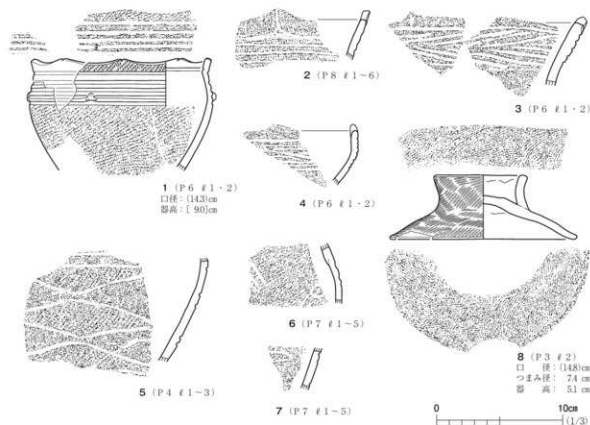
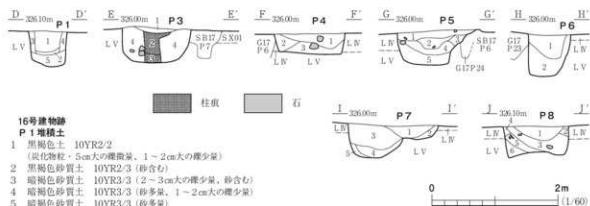


図49 16号建物跡(2)・出土遺物

き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図49、写真178・180)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP2を除く各ビットから計227点、剥片がP2・3を除く各ビットから計45点出土した。このうち、縄文・弥生土器を8点図示した。

図49-1は、鉢である。上部がやや張る体部とややくびれる頸部、短く外傾する波状の口縁部からなる。波頂部には刻みを有する。口縁部と頸部、頸部と体部の境にそれぞれ沈線が引かれ、頸部を無文とする。体上部の文様帯に粘土粒を貼り付けたのち工字文が描かれ、口縁部と体部文様帯以下に縄文が施される。縄文が施されない部分はミガキが施される。文様帯に貼り付けられた粘土粒はミガキによって丁寧に整形され、貼り付けの継ぎ目がわずかに残るのみである。口縁部内面にも沈線が1本巡る。胎土が緻密で焼成良好であるなど、非常に丁寧に作られている。

同図2は、深鉢の口縁部である。口唇部に突起を有する。外面に縦方向の条痕を施したのち、口縁部突起に縦の短沈線、口縁部下に4本の沈線が巡らされる。縦の短沈線の下端は二又に分かれ、4本の沈線の上端に接続する。外面に炭化物が付着する。

同図3は深鉢の口頸部で、口頸部の境が緩やかに屈曲する。口唇部に突起を有し、口縁部外面がやや肥厚する。口縁部に条痕を施したのち、口縁部突起に縦の短沈線、口唇部下に1本の沈線を巡らせ、口縁部を綾杉状に密集する沈線で充填する。頸部は無文である。外面に炭化物が付着する。

同図4は、鉢もしくは高杯の口縁部である。口唇部に突起を有し、体上部の文様帯に密集した沈線が充填される。内外面に光沢のある炭化物が薄く付着する。

同図5は、深鉢の体部である。磨消縄文により正逆の三角形と菱形を組み合わせたモチーフが描かれる。内面に炭化物がわずかに付着する。

同図6は、壺の体部と思われる。外面に縄文を施したのち、沈線で文様が描かれる。文様は一部しか遺存せず、どのような文様であるかは不明である。

同図7は、深鉢の体部である。磨消縄文によってヒトデ文が描かれる。外面に炭化物が付着する。

同図8は、蓋である。笠形の体部と短い筒形のつまみからなる。外面全体に無節の縄文が施される。

出土土器は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉のものである。

まとめ

本遺構は2間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。桁の西側の柱間は東側の柱間の2倍強で、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が長いという特徴がある。本遺構から出土した土器は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉のものである。本遺構より古い、380号土坑の時期不明、416号土坑の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、1号性格不明遺構の弥生時代中期前葉、本遺構より新しい434号土坑の時期不明という年代を勘案すれば、本遺構の時期は弥生時代中期前葉と推測される。

(能登谷)

17号建物跡 S B 17

遺 構 (図50・51、写真40)

本遺構は調査区南半部のG 16・17グリッドに位置し、平坦面に立地している。遺構北東部がL IV上面において検出された他は、L V上面において検出した。16号建物跡、184・383・385・387・389・390・413・541・896号土坑、1号性格不明遺構、G 17 P 1・2・4～6と重複し、184・383号土坑よりは古く、389・390・541・896号土坑、1号性格不明遺構よりは新しい。16号建物跡との新旧関係は不明である。なお、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。また、北方約1mに12・13号建物跡が存在する。

本遺構は7基の柱穴(P 1～7)から構成される。桁行2間、梁行1間で、西側の妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P 1)をもち、平面形は北東-南西主軸の片亀甲形である。規模は、全長6.4m、桁行長(P 5-7間)5.4m(西から3.0+2.4m)、梁行長(P 4-5間)2.6mを測り、全体の面積は15.0㎡、長方形部分(P 2・4・5・7で囲まれる部分)の面積は13.8㎡を測る。西側の棟持柱の突出長は104cmを測る。

P 1(S K 386)は、平面形が円形で、北側が深く掘り込まれている。深く掘り込まれた部分の平面形は楕円形である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がるが、南壁上部の立ち上がりは緩くなっている。規模は、径80～83cm、深さ80cmを測り、底面の標高は324.9mである。堆積土は5層に分層され、ℓ 1は柱痕、ℓ 2～5は柱抑えの土である。柱痕の幅は20cmを測る。

P 2(S K 388)は、平面形が楕円形ないしは円形と推測され、周壁は、下部はやや緩く、上部は急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)66cm、短径63cm、深さ55cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、ℓ 1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 3は柱抑えの土と推測される。

P 3(S K 427)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径63cm、短径56cm、深さ47cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3は柱抑えの土で、柱痕の幅は27cmを測る。

P 4(S K 162)は、平面形が不整形形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がるが、東壁上部は内湾気味にやや緩く立ち上がる。規模は、径78～86cm、深さ63cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は4層に分層され、ℓ 1～3は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 4は柱抑えの土と推測される。

P 5(S K 48)は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長154cm、短軸長90cm、深さ65cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 6(S K 542)は、平面形が不整形形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径80～88cm、深さ69cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3は柱抑えの土で、柱痕の幅は19cmを測る。

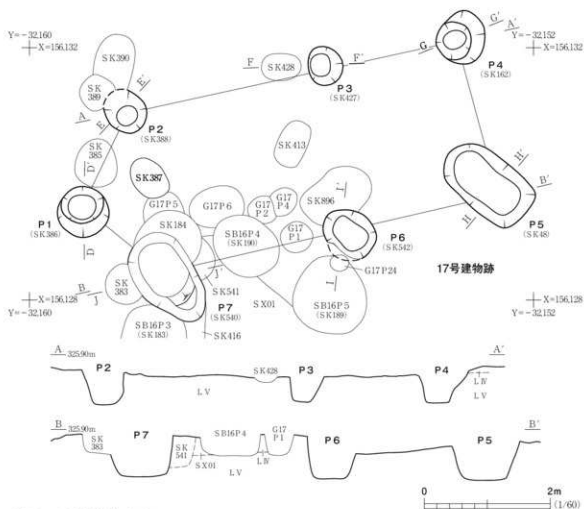


図50 17号建物跡(1)

P7 (SK 540) は、平面形が長楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径157cm、短径94cm、深さ65cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は6層に分層され、 ℓ 1・2は柱痕、 ℓ 3～6は柱抑えの土で、柱痕の幅は17cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図51、写真180)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計88点、剥片がP3・4・5・6から計13点出土した。このうち、弥生土器を4点図示した。

図51-1は、鉢の口縁部である。緩やかに湾曲しながら外傾する口縁部に、流水工字文が描かれる。内外面にミガキが施され、外面のミガキは施文後に施されている。沈線内に赤色顔料がわずかに残る。内面の一部にも赤色顔料が付着する。内外面のごく一部に光沢のある炭化物が付着する。

同図2は、鉢の口頸部である。頸部は屈曲し、緩やかに湾曲しながら外傾する口縁部に至る。口縁部に工字文が描かれ、頸部は無文である。口唇部直下の内面に、1本の沈線が巡らされる。内外面とも光沢をもつほどのミガキが施される。沈線内のみ赤彩が施されたことが、沈線内に部分的に付着する赤色顔料からうかがわれる。

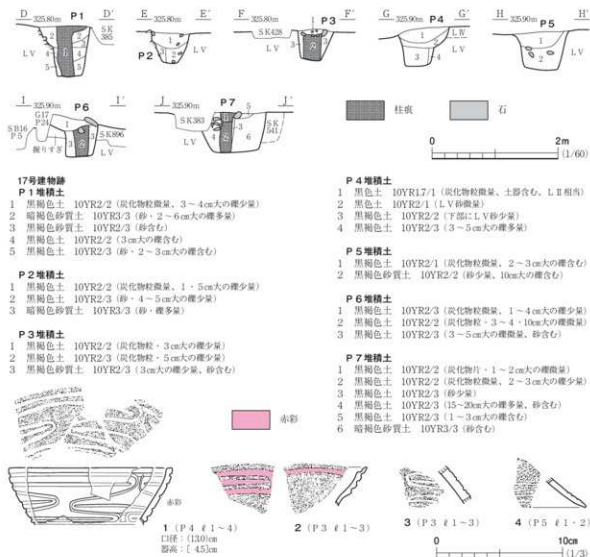


図51 17号建物跡(2)・出土遺物

同図3は、器種不明の体部片である。外面に工字文が描かれる。

同図4は、蓋の口縁部である。口唇部直上に4本の沈線を巡らせ、これ以上に無節の縄文が施される。口唇部付近の内外面に、炭化物が薄く付着する。

出土土器は、1～3など弥生時代前期のものが多くを占め、4など弥生時代中期中～後葉のものとと思われる土器が少量みられる。

まとめ

本遺構は2間×1間の中型の建物跡である。片側の妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は片竜甲形を呈している。棟持柱が一方の妻側にしかなく、桁の柱間は西側が長いという特徴がある。本遺構から出土した土器には弥生時代前期のものと同中期中～後葉のものがある。本遺構より古い389・390・896号土坑の時期不明、541号土坑の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、1号性格不明遺構の弥生時代中期前葉、本遺構より新しい184号土坑の弥生時代中期後葉、383号土坑の時期不明という年代を勘案すれば、本遺構の時期は弥生時代中期中～後葉と推測される。(能登谷)

18号建物跡 S B 18

遺 構 (図52、写真41)

本遺構は調査区南半部のG 17グリッドに位置し、平坦面に立地している。L V上面において検出した。16号建物跡、170・171・179・186・187・351・362～364・372・432～434・776号土坑、G 17 P 3・12・23と重複し、171・351号土坑、G 17 P 3よりは古く、372・776号土坑よりは新しい。なお、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。また、南東約2mには19号建物跡が存在する。

本遺構は4基(P 1～4)の柱穴から構成される。平面形は北東-南西主軸の長方形で、桁行1間、梁行1間である。規模は、桁行長(P 3-4間)4.6m、梁行長(P 1-4間)3.0m、面積13.0㎡を測る。

P 1(S K 775)は、平面形が円形と推測され、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径約70cm、深さ75cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 2(S K 365)は、平面形が北西-南東主軸の楕円形で、南西部中央が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直立気味ないしは急外傾して立ち上がる。規模は、長径180cm、短径124cm、北東側の深さ20cm、南西部の円筒形部分の深さ84cmを測り、南西部の円筒形部分の底面の標高は324.9mである。堆積土は5層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3は柱抑えの土で、柱痕の幅は21cmを測る。

P 3(S K 352)は、平面形が隅丸方形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長62cm、短軸長56cm、深さ61cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は6層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3～6は柱抑えの土で、柱痕の幅は22cmを測る。

P 4(S K 180)は、平面形が不整楕円形で、底面は北側が若干低く、周壁は下部がやや緩く急外傾して立ち上がる。規模は、長径154cm、短径118cm、北側の深さ73cmを測り、北側の底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺 物 (図52、写真181)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計119点、剥片がすべてのピットから計13点出土した。このうち、縄文・弥生土器を6点図示した。

図52-1は深鉢の体上部である。外面に縄文を施したのち6本の沈線を巡らせ、この中に三角形の深い掘り取り部を加えることで工字文としている。掘り取り部の両脇には粘土層がやや雑に盛り上げられている。内外面に炭化物が薄く付着する。なお、南に隣接する19号建物跡のP 3から出土した土器(図54-3)と諸特徴が一致することから、これと同一個体と考えられる。

同図2は鉢の口頸部である。頸部はくびれ、口縁部は内面側にやや湾曲し外傾する。口唇部直下に幅の狭い縄文帯が巡り、口縁部に工字文が描かれる。内面にも1本の沈線が巡らされる。

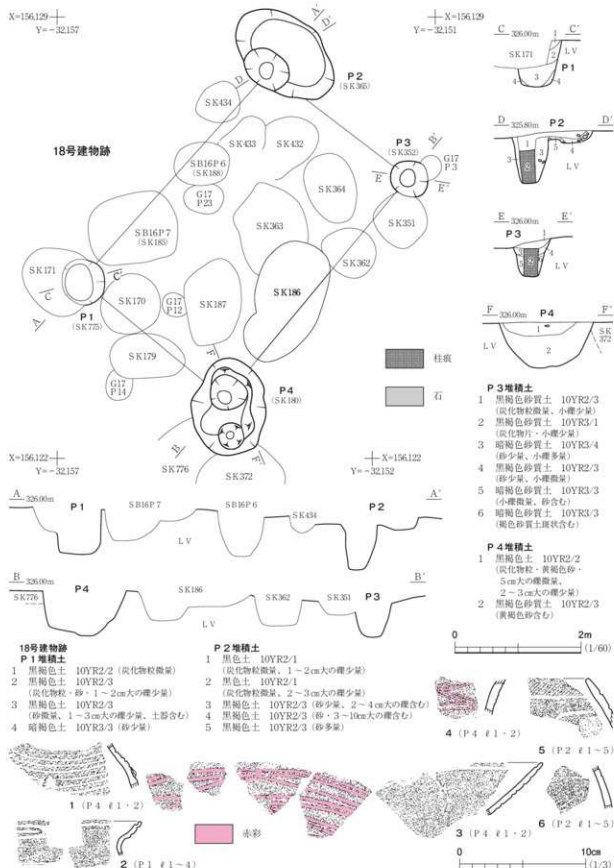


図52 18号建物跡・出土遺物

同図3は、鉢もしくは高杯で、口縁部から体部にかけて外傾する。口唇部直下に幅の狭い縄文施文帯をもち、以下に工字文が上下2段に描かれる。外面の沈線内にのみ赤彩が施されている。

同図4は、深鉢の体部である。3本の沈線で「く」字を鋭角に描き、その直下に2本の沈線を巡らせる。沈線内に赤色顔料が残る。

同図5は、深鉢の口縁部である。内傾する。磨消縄文により文様が描かれる。

同図6は、壺の体部である。2本の沈線と附加条縄文が施される。

本遺構のP1・3・4出土土器は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期に位置づけられ、図示しなかった土器に粗製深鉢の複合口縁が含まれる。P2から出土した土器には、弥生時代中期に位置づけられるものが含まれる。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する中型の建物跡である。なお、南西側のP1-4のはほぼ中間の南西外側に隣接して検出された179号土坑またはG17P14は本遺構の棟持柱の可能性もあり、その場合は、全体の平面形は片亀甲形となる。本遺構から出土した遺物は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期と弥生時代中期前葉、同後葉のものがあり、本遺構の時期はこの間のいずれかと推測される。ただ、本遺構より古い372号土坑から出土した土器の弥生時代中期前～中葉、本遺構より新しい171号土坑から出土した土器の弥生時代前期～中期前葉、351号土坑の弥生時代中期前葉という年代を考慮に入れると、遺構密集域にあって各遺構とも各時期の遺物が混在している状況がうかがえ、出土遺物から遺構の時期を特定することは難しい。

(能登谷)

19号建物跡 SB19

遺 構 (図53・54、写真42)

本遺構は調査区南半部のG・H17グリッド、G・H18グリッドに位置し、平坦面に立地している。南東部はLIV上面において検出し、それ以外はLV上面で検出した。28号建物跡、47・173・353・354・356～358・369～372・376～378・406・407・409・430・651・678・780号土坑、G17P20・21、G18P2～10・13・14、H17P34と重複し、28号建物跡、372・651号土坑よりは古く、376・407・430号土坑、G18P14よりは新しい。なお、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。また、北西約2mには18号建物跡が存在する。

本遺構は8基の柱穴(P1～8)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・5)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～5間)7.5m、桁行長(P6～8間)6.7m(西から2.6+4.1m)、梁行長(P4～6間)3.2mを測り、全体の面積は21.7㎡、長方形部分(P2・4・6・8で囲まれる部分)の面積は20.4㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が66cmを測り、東側のP5よりも39cm長い。

P1(SK408)は、平面形が不整隅丸長方形で、南側が円筒形に深く掘り込まれ、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長128cm、短軸長90cm、南側の円筒形部分の

深さ88cm、北側の深さ48cmを測り、南側の円筒形部分の底面の標高は325.1mである。堆積土は9層に分層され、 $\ell 1 \sim 7$ は柱抜き取り後の堆積土、 $\ell 8 \cdot 9$ は柱押えの土と推測される。

P 2 (SK 174) は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径95cm、短径85cm、深さ70cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \sim 4$ は柱抜き取り後の堆積土、 $\ell 5$ は柱押えの土と推測される。

P 3 (SK 839) は、平面形が円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、径56～62cm、深さ41cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は8層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 4 (SK 355) は、平面形が円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、径57～61cm、深さ50cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は柱抜き取り後の堆積土、 $\ell 3$ は柱押えの土と推測される。

P 5 (SK 194) は南半部が掘りすぎのために全容が不明であるが、平面形が円形と推測され、周壁は直線的に緩く外傾して立ち上がる。規模は、径90～92cm、深さ33cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の自然堆積土と推測される。

P 6 (SK 771) は、平面形が不整の円形ないしは楕円形と推測され、南西側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は南西側の円筒形部分では直線的に急外傾して立ち上がり、それ以外では緩く外傾して立ち上がる。規模は、長径83cm、短径(遺存値)72cm、南西側の円筒形部分の深さ48cm、北東側の深さ27cmを測り、南西側の円筒形部分の底面の標高は325.5mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 7 (SK 367) は平面形がややいびつな円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、直径が58cm、深さが50cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \sim 3$ は柱抜き取り後の堆積土、 $\ell 4 \cdot 5$ は柱押えの土と推測される。

P 8 (SK 405) は、平面形が隅丸長方形で、北側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長109cm、短軸長93cm、北側の深さ70cm、南側の深さ56cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺 物 (図54、写真178・181)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計315点、剥片がP 7を除くピットから計76点出土した。このうち、縄文・弥生土器を11点図示した。

図54-1は、粗製の深鉢である。体上部から内湾する口縁部に至る。複合口縁で、口縁部と体部の境の外面に輪積み痕を残して段をつくり、ハケメ様の条痕を外面の口縁部と体部にそれぞれ横・斜方向と縦方向に、口縁部内面に横方向に施す。外面に炭化物が厚く付着する。

同図2は、深鉢の体上部から頸部にかけてである。体上部が弱く張り、頸部は内傾する。頸部と

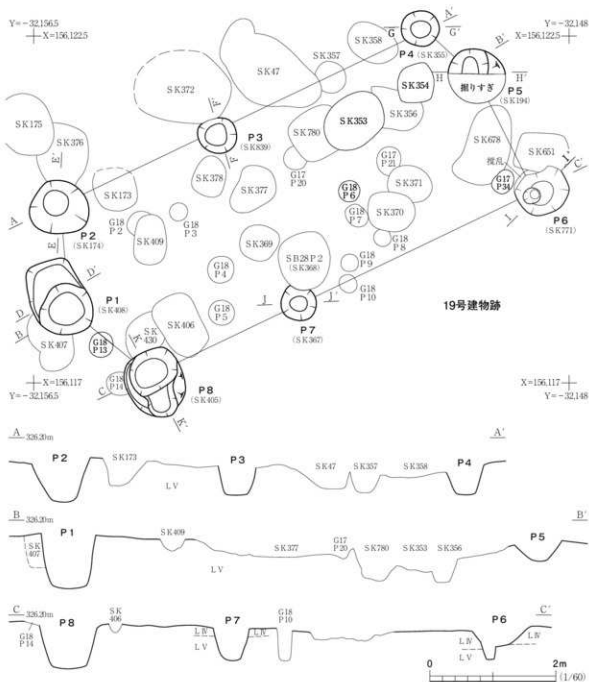


図53 19号建物跡 (1)

体部の境に段を有する。頸部は無文である。体部は、縄文を施したのち最大径の位置に沈線を巡らせ、以上を文様帯とする。文様帯は上下3段からなり、上段に1列の刺突文、中段に小さな三角形の掘り去り部をもつ工字文、下段に密集した沈線で綾杉文が描かれる。各段の幅は、上段がもっとも狭く、下段がもっとも広い。外面に炭化物が付着する。

同図3は、深鉢の体上部である。外面に縄文を施したのち6本の沈線を巡らせ、この中に短く深い三角形の掘り去り部を加えて工字文としている。掘り去り部の両脇には粘土層がやや雑に盛り上げられている。内外面に炭化物が薄く付着する。前述したように北に隣接する18号建物跡のP4

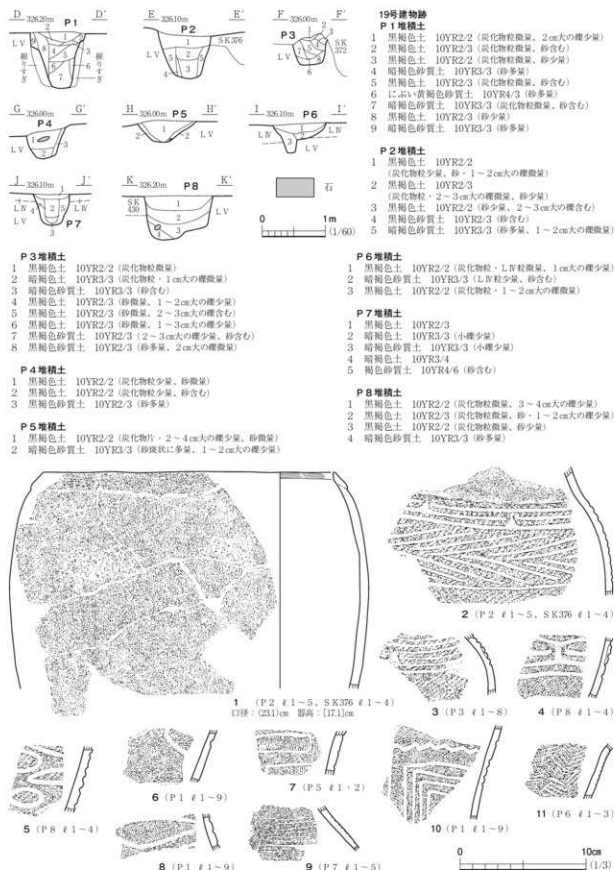


図54 19号建物跡(2)・出土遺物

から出土した土器(図52-1)と諸特徴が一致し、これと同一個体と考えられる。

図4は、深鉢の体部である。工字文が描かれ、工字文の中に縄文が施される。工字文の中の縦の短沈線の両脇が粘土の貼り付けにより低く盛り上げられている。内外面に炭化物が付着する。

図5～8は、深鉢の体部である。磨消縄文によって文様が描かれる。5・6は沈線による区画内に縄文が、7・8はカナムグラの擬縄文が充填される。

図9は、壺の体部である。細い沈線により四角形が描かれ、内部に横方向の密集する沈線で充填され。四角形の外は細縄文が施される。

図10は、深鉢の体部である。外面に縄文が施され、鋸歯文と多重の四角形が描かれる。鋸歯文は縄文の上に描かれ、四角形の中は縄文が充填されているようである。

図11は、深鉢の体部である。多重の鋸歯文が密集して描かれる。内外面に炭化物が付着する。

図示した土器のうち、重複する376号土坑と同時に掘り込んだP2出土のものについては、この土坑の土器が含まれる可能性がある。P2・376号土坑出土土器は縄文時代晩期末葉のもので、その他のピットから出土した土器は弥生時代前期～中期中葉のものである。

まとめ

本遺構は2間×1間の大型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。桁の柱間は東側が長く、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が長いという特徴がある。本遺構から出土した遺物の時期は、弥生時代前期～中期中葉のものである。本遺構より古い376号土坑の時期不明、407号土坑の弥生時代中期前葉、430号土坑の縄文時代晩期～弥生時代前期、G18P14の時期不明、本遺構より新しい372号土坑の弥生時代中期前～中葉、651号土坑の時期不明という年代を勘案すれば、本遺構の年代は弥生時代中期中葉と推測される。(能登谷)

20号建物跡 SB20

遺 構 (図55、写真43)

本遺構は調査区南半部のH・I16グリッドに位置し、平坦面の北側縁辺部に立地している。LIV上面において検出した。28・30・497・499・500・552・569・570・578・579・897・914・915号土坑と重複し、552・578号土坑より古く、499・500・570・579・897・914号土坑よりは新しい。なお、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。また、北西約1mに47号建物跡、南東約2mに27号建物跡が存在する。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1-4間)5.2m、桁行長(P5-6間)4.2m、梁行長(P2-6間)3.7mを測り、全体の面積は16.6㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は14.5㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が74cmを測り、東側のP4よりも30cm長い。

P1(SK157)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径

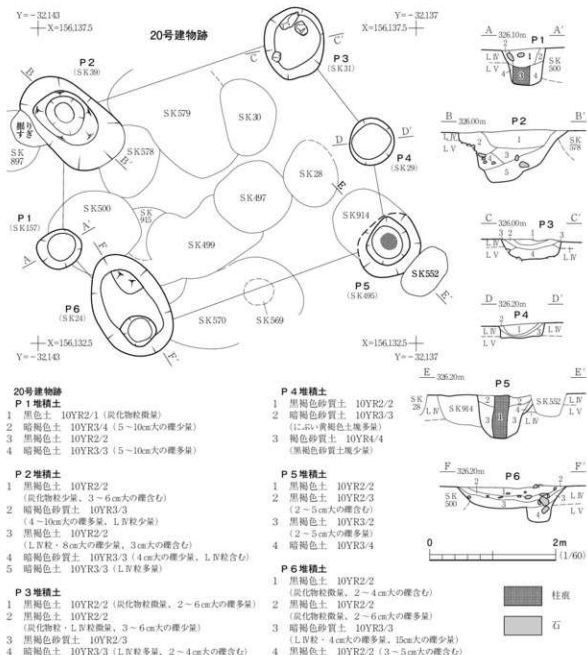


図55 20号建物跡

70cm、短径60cm、深さ59cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、ℓ 1・2は廃絶後の堆積土、ℓ 3は柱痕、ℓ 4は柱抑えの土で、柱痕の幅は26cmを測る。

P 2 (SK 39)は、平面形が北西-南東主軸の隅丸長方形で、北東壁と南西壁は直線的に急外傾して立ち上がり、北西壁と南東壁は外傾して立ち上がるが不整である。底面は中央部が一段深く掘り込まれている。規模は、長軸長176cm、短軸長107cm、深さ82cmを測り、底面の標高は325.0mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 3 (SK 31)は、平面形が楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径116cm、短径94cm、深さ33cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は4層に分層され、ℓ 1~3は自然

堆積土、 $\ell 4$ は柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P4 (SK 29)は、平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径72～74cm、深さ24cmを測り、底面の標高は325.7mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の自然堆積土と推測される。

P5 (SK 495)は、平面形が楕円形と推測され、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径110cm、短径(遺存値)85cm、深さ68cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \sim 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

P6 (SK 24)は、平面形が北西-南東主軸の楕円形で、南端部が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は南端部の円筒形部分では直線的に急外傾して立ち上がり、それ以外ではそれよりは緩く直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長径172cm、短径114cm、南端部の円筒形部分の深さ57cm、北側の深さ35cmを測り、南端部の円筒形部分の底面の標高は325.4mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図56、写真182・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計451点、石器・剥片がすべてのピットから計87点出土した。このうち、縄文・弥生土器12点、石器2点を図示した。

図56-1は、高鉢もしくは鉢の波状口縁である。外面は口縁部と体部に、内面は口縁部に沈線文が描かれる。外面に部分的に赤彩が残る。

同図2は、深鉢の体上部である。無文帯を挟んで上下2段に工字文が描かれ、以下に縄文が施される。工字文中の縦の沈線は深く彫られ、両脇が盛り上げられている。外面に炭化物が付着する。

同図3～6は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。4は、帯状の無文部にも沈線が引かれる。3は内面に、4・6は外面に薄く炭化物が付着する。

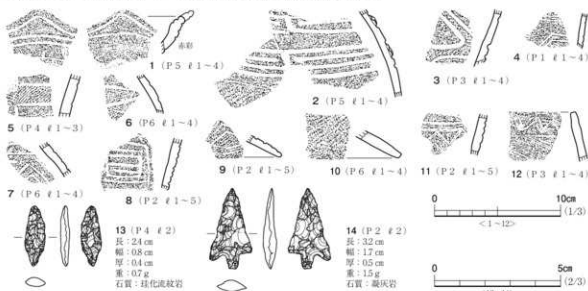


図56 20号建物跡出土遺物

同図7は、壺の体部と思われる。沈線で文様が描かれる。

同図8は、深鉢の体部である。沈線で多重の方格が描かれ、その内部が横方向の3本の沈線で充填される。外面に炭化物が付着する。

同図9・10は、蓋の口縁部である。9は縄文を施したのち沈線文を描く。口唇部付近に炭化物が付着する。10は縄文が施され、口唇部に沿って末端結節が巡らされる。内面に炭化物が付着する。

同図11は、深鉢の体部である。3本の沈線の下に接して鋸歯文が2重に描かれる。沈線の断面は「V」字の部分と底が平らな部分があり、沈線の底に筋状の凹凸が延びる。

同図12は粗製深鉢の口縁部で、やや内傾する。外面に条痕を斜め方向に施したのち、口唇部直下に鋸歯文を巡らせる。鋸歯文を描いた原体は幅5mmで、鋸歯文は浅く平らで底に多くの筋が延びる。

同図13・14は、凸基の石鏃である。

出土土器は、弥生時代前期～中期中葉までのものである。

まとめ

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈し、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が若干長いという特徴がある。本遺構から出土した土器は弥生時代前期～中期中葉までの幅がある。本遺構より古い499・570号土坑の弥生時代前期～中葉、500号土坑の弥生時代前期～中期前葉、579号土坑の弥生時代中期前葉、897号土坑の時期不明、914号土坑の弥生時代前期、本遺構より新しい552・578号土坑の弥生時代中期中葉という年代を勘案すれば、本遺構は弥生時代中期中葉のものと推測される。(能登谷)

21号建物跡 S B 21

遺 構 (図57、写真44)

本遺構は調査区南半部のI 17・18グリッドに位置し、平坦面に立地している。L IV上面において検出した、23・32号建物跡、60～62・69・70・119・125・126・149・904・905・909号土坑、8号焼土遺構、I 18 P 8と重複し、23・32号建物跡、60・61・69・70号土坑より古く、119・904・905号土坑より新しい。なお、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P 1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P 1・4)をもち、平面形は南北主軸の亀甲形である。規模は全長(P 1～4間)4.9m、桁行長(P 5～6間)3.1m、梁行長(P 3～5間)3.3mを測り、全体の面積は12.3㎡、長方形部分(P 2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は9.1㎡を測る。棟持柱の突出長は、北側のP 1が124cmを測り、南側のP 4よりも46cm長い。

P 1(S K 80)は、平面形が楕円形と推測され、南東側は円筒形に深く掘り込まれている。周壁は南西壁では内湾気味に外傾して立ち上がり、北東壁では一部では外反するものの、直立気味に立ち上がっており、南東側の円筒形部分では直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)110cm、短径80cm、北西側の深さ78cm、南東側の円筒形部分の深さ123cmを測り、底面の標高は

3248mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抑えの土と推測される。

P2 (SK53) は、平面形が円形で、南東側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径103～110cm、南東側の円筒形部分の深さ139cm、北西部の深さ42cmを測り、南東側の円筒形部分の底面の標高は3248mである。堆積土は上層では6層に分層されるが、下層が記録前に崩落したことから、下層の状況は不明である。 $\ell 1$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 2$ は柱痕、 $\ell 3 \sim 6$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は28cmを測る。

P3 (SK917) は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長(遺存値)93cm、短軸長(遺存値)74cm、深さ133cmを測り、底面の標高は3248mである。堆積土は記録前に崩落したことから不明である。

P4 (SK74) は、平面形が楕円形と推測され、北西側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)95cm、短径(遺存値)90cm、北西側の円筒形部分の深さ45cm、南東側の深さ26cmを測り、底面の標高は3256mである。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 2$ は柱痕、 $\ell 3$ は柱抑えの土である。柱痕の幅は24cmを測る。

P5 (SK77) は、平面形が長方形と推測され、周壁は直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長軸長98cm、短軸長(遺存値)86cm、深さ42cmを測り、底面の標高は3254mである。堆積土は3層に分層され、 $\ell 1$ は柱抜き取り後の堆積土、 $\ell 2 \sim 3$ は柱抑えの土と推測される。

P6 (SK318) は、平面形が隅丸長方形で、南西側が円筒形に深く掘り込まれている。円筒形部分の周壁は直立気味に立ち上がり、北壁から東回りに南壁にかけての上部は緩い立ち上がりである。規模は、長軸長85cm、短軸長76cm、深さ79cmを測り、底面の標高は3253mである。堆積土は4層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \sim 4$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は17cmを測る。

なお、遺構範囲内に踏み締まり範囲は認められなかったが、P5の北東0.3mで検出された8号焼土遺構が本遺構と同時期の場合には、8号焼土遺構は本遺構の炉跡の可能性もある。

遺物 (図57、写真182・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP4を除くピットから計140点、石器・剥片がP4を除くピットから計22点出土した。このうち、縄文・弥生土器4点、石器1点を図示した。

図57-1は深鉢の体部である。3本の沈線の上に縄文が施される。

同図2は、壺の体部と考えられる。磨消縄文により文様が描かれる。縄文は、沈線が引かれたあとに充填されている。

同図3は、壺の口頸部である。口縁部外面が肥厚し、肥厚部に縄文が施される。肥厚部下端の口頸部境に沈線が巡らされる。口唇部は面取りされている。頸部は無文で、ミガキが施される。

同図4は小片のため器種不明である。多重の四角形と鋸歯文が描かれる。

同図5は、凸基の石鏃である。

土器は、1が縄文時代晩期～弥生時代前期、その他は弥生時代中期前～中葉と考えられる。

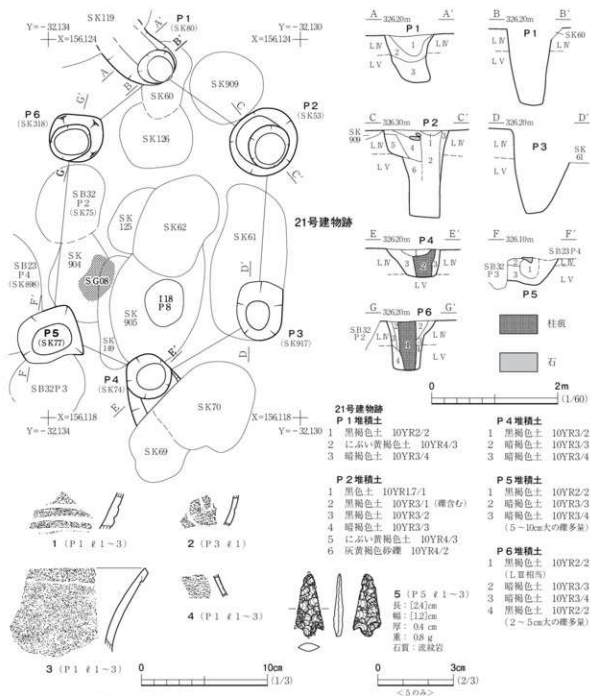


図57 21号建物跡・出土遺物

まとめ

本遺構は1間×1間の小型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は南北主軸の亀甲形を呈し、梁からの棟持柱の突出長は北側の方が長いという特徴がある。本遺構から出土した土器は、縄文時代晩期～弥生時代中期中葉まで幅がある。本遺構より古い119号土坑の弥生時代前期、本遺構より新しい23号建物跡と60号土坑の弥生時代中期、32号建物跡と69・70号土坑の弥生時代中期後葉、61号土坑の弥生時代中期前葉という年代を勘案すれば、本遺構の年代は弥生時代中期前葉と推測される。

(能登谷)

同図3は、壺の口頸部である。口縁部の外面が肥厚し、肥厚部に刺突文が密に施される。口唇部には沈線が巡らされる。焼成良好で、器面は灰色を呈する。

同図4～7は、石器である。4は有肩の石鏃、5は縦型の石匙、6は不定形石器、7は剥片に二次加工が加えられたもので石核の可能性もある。

本遺構から出土した土器は、弥生時代前期～中期前葉のものである。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代前期～中期前葉と推測される。本遺構より古い135号土坑の縄文時代晩期～弥生時代中期前葉、326号土坑の弥生時代中期前葉、本遺構より新しい23号建物跡の弥生時代中期中葉、136・471・907・908号土坑の弥生時代中期後葉、900号土坑の時期不明という年代とも矛盾しない。(能登谷)

23号建物跡 S B 23

遺 構 (図60、写真46)

本遺構は調査区南半部のH17・18グリッド、I17・18グリッドに位置し、平坦面に立地している。LIV上面において検出した。21・22・32号建物跡、55・83・84・93・123・130・136・320・323・324・473・900・902・907号土坑、6・7号焼土遺構、I17P1と重複し、93・902号土坑、6号焼土遺構、I17P1より古く、21・22号建物跡、320・324・473・900号土坑より新しい。なお、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

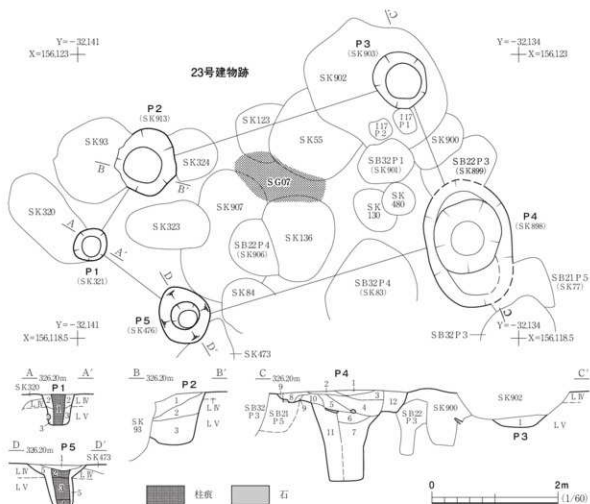
本遺構は5基の柱穴(P1～5)から構成される。桁行1間、梁行1間で、西側の妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1)をもち、平面形は北東-南西主軸の片亀甲形である。規模は、全長5.6m、桁行長(P4～5間)4.6m、梁行長(P3～4間)2.7mを測り、全体の面積は13.2㎡、長方形部分(P2～5で囲まれる部分)の面積は11.8㎡を測る。西側の棟持柱の突出長は117cmを測る。

P1(SK321)は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径51～53cm、深さ49cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は14cmを測る。

P2(SK913)は、平面形が楕円形ないしは円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径107cm、短径(遺存値)95cm、深さ84cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P3(SK903)は上部が大きく削平されているが、平面形が円形と推測され、周壁は直線的に緩く外傾して立ち上がる。規模は、いずれも遺存値で長径90cm、短径82cm、深さ18cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は1層で、柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P4(SK898)は、平面形が南北主軸の楕円形で、中央部が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は急外傾して立ち上がり、中央部の円筒形部分では直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径206cm、短径138cm、北側の深さ32cm、中央部の円筒形部分の深さ142cmを測り、



23号建物跡

P1堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3
- 2 暗褐色土 10YR3/3
- 3 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3

P2堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (2~10cm大の礫少量)
- 2 にぶい黄褐色砂礫土 10YR4/3 (L.V.相当)
- 3 黒褐色土 10YR2/3 (L.V.地少量)

P3堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2

P4堆積土

- 1 榛暗赤褐色土 5YR2/3 (SG06)
- 2 黒褐色土 5YR2/2
- 3 黒土 10YR2/1
- 4 黒褐色土 10YR2/2
- 5 黒褐色土 10YR3/2
- 6 黒褐色土 10YR3/2 (礫多量)
- 7 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (礫少量)
- 8 黒褐色土 10YR3/2
- 9 暗褐色土 10YR3/3 (L.V.地含む)
- 10 暗褐色土 10YR3/4
- 11 にぶい黄褐色砂礫土 10YR4/3 (砂・礫多量)
- 12 黒土 10YR1.7/1

P5堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (小礫少量)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (小礫少量)
- 3 褐色土 10YR4/4
- 4 褐色砂質土 10YR4/4 (小礫少量)
- 5 暗褐色土 10YR3/4 (小礫少量)



0 10cm (1/3)

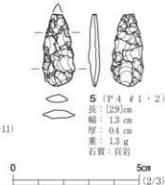
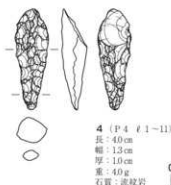


図60 23号建物跡・出土遺物

底面の標高は324.6mである。堆積土は11層に分層されるが、下層が記録前に崩落したことから、下層の状況は不明である。ℓ 1～7は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 8～11は柱抑えの土と推測される。

P 5 (S K 476) は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上部の立ち上がりは緩くなっている。規模は、長径96cm、短径81cm、深さ70cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は5層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2～4は柱痕、ℓ 5は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

なお、遺構範囲内に踏み締まり範囲は認められなかったが、P 2の東方約1mから検出された7号焼土遺構が本遺構と同時期の場合には、7号焼土遺構は本遺構の炉跡の可能性もある。

遺 物 (図60、写真182・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片が、すべてのピットからそれぞれ計202点と計31点出土した。このうち、弥生土器3点、石器2点を図示した。

図60-1・2は、いずれも壺の体部である。磨消縄文により文様が描かれる。2は沈線が細く、カナムグラの擬縄文が充填される。擬縄文の施文部にこくわずかに赤彩が残る。

同図3は、蓋の口縁部である。細い沈線で文様が描かれる。小片で全体像は不明であるが、層波文と思われる。口唇部付近の内外面に炭化物が付着する。

同図4・5は石器で、4は石鏃、5は削器である。

出土土器は、いずれも弥生時代中期中葉のものである。

ま と め

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。片側の妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は片亀甲形を呈している。棟持柱が一方の妻側にしかなく、桁行1間の長さが長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い21号建物跡の弥生時代中期前葉、22号建物跡の弥生時代前期～中期前葉、320・900号土坑の時期不明、324・473号土坑の弥生時代前期、本遺構より新しい93号土坑の弥生時代中期後葉、902号土坑とI 17 P 1の時期不明という年代とも矛盾しない。(能登谷)

24号建物跡 S B 24

遺 構 (図61、写真47)

本遺構は調査区南半部のI 18グリッドに位置し、平坦面に立地している。L IV上面において検出した。25号建物跡、116号土坑と重複し、25号建物跡より新しく、116号土坑とは直接の切り合いないことから、新旧関係は不明である。

本遺構は東側の柱穴に関して特定できなかったため、現況における平面形は至であるが、西側の妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P 1)をもつことから、平面形は北西-南東主軸の亀甲形と推測される。桁行1間、梁行1間で、全長は遺存値で3.6m、桁行長(P 4-5間)2.4m、梁行長(P 2-5間)2.3mを測る。

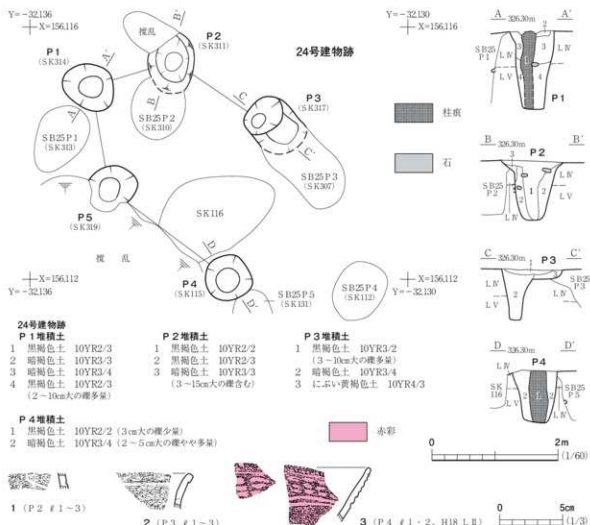


図61 24号建物跡・出土遺物

P 1 (SK 314) は、平面形が楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径87cm、短径70cm、深さ125cmを測り、底面の標高は324.9mである。増積土は4層に分層され、 ℓ 1は柱痕、 ℓ 2~4は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P 2 (SK 311) は、平面形が楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がり、上部は緩い立ち上がりとなっている。規模は、長径96cm、短径74cm、深さ96cmを測り、底面の標高は325.1mである。増積土は3層に分層され、 ℓ 1は柱抜き取り後の増積土、 ℓ 2・3は柱抑えの土と推測される。

P 3 (SK 317) は、平面形が北西-南東主軸の隅丸長方形で、北西側は円筒形に深く掘り込まれ、南東側は皿状を呈している。周壁は北西側の円筒形部分では直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、南東側の皿状の部分では外傾して立ち上がる。規模は、長軸長95cm、短軸長74cm、北西側の円筒形部分の深さ82cm、南東側の皿状の部分の深さ16cmを測り、北西側の円筒形部分の底面の標高は325.3mである。増積土は3層に分層され、 ℓ 1・2は柱抜き取り後の増積土、 ℓ 3は柱抑えの土と推測される。

P 4 (SK 115) は、平面形が隅丸方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上が

る。規模は、長軸長72cm、深さ82cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

P5(SK319)は、平面形が楕円形ないしは隅丸長方形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)78cm、短径70cm、深さ80cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は記録前に完掘した。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物(図61、写真182)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計13点、剥片がP2・3・4から計4点出土した。このうち、弥生土器3点を図示した。

図61-1は、深鉢の体部である。外面に磨消縄文で文様が描かれる。

同図2は、壺の口頸部である。口唇部に面をもち、口縁部外面が肥厚する。無文である。

同図3は、鉢、もしくは高杯の口縁部である。口唇部の直下に上から、刺突列、沈線、3条の押し引き列、2本の沈線をそれぞれ巡らせ、以下に縄文が施される。外面に赤彩が施される。色調は灰色である。

出土土器は、弥生時代前～中期に位置づけられるものである。

まとめ

本遺構は平面形が亀甲形を呈する建物跡と推測され、25号建物跡とはほぼ同じ位置に存在することから、25号建物跡を建て替えたものと推測される。東側の特定できなかった柱穴に関しては、25号建物跡P3・4と共有している可能性も否めない。本遺構から出土した遺物は少なく時期の特定は難しいものの、弥生時代前～中期と推測される。本遺構より古い25号建物跡が弥生時代中期前葉であることを勘案すれば、本建物跡の時期は弥生時代中期前～中葉と考えられる。(能登谷)

25号建物跡 SB25

遺構(図62、写真48)

本遺構は調査区南半部のI18グリッドに位置し、平坦面に立地している。上部が攪乱を受けているP6以外はLIV上面において検出した。24号建物跡、116・132・133号土坑と重複し、24号建物跡より古く、132号土坑よりは新しく、その他の遺構とは直接の切り合いがないことから、新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は北西～南東主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～4)5.3m、桁行長(P5～6間)3.0m、梁行長(P3～5間)2.4mを測り、全体の面積は10.0㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は7.2㎡を測る。棟持柱の突出長は、東側のP4が128cmを測り、西側のP1よりも24cm長い。

P1(SK313)は、平面形が楕円形で、北東側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直立気

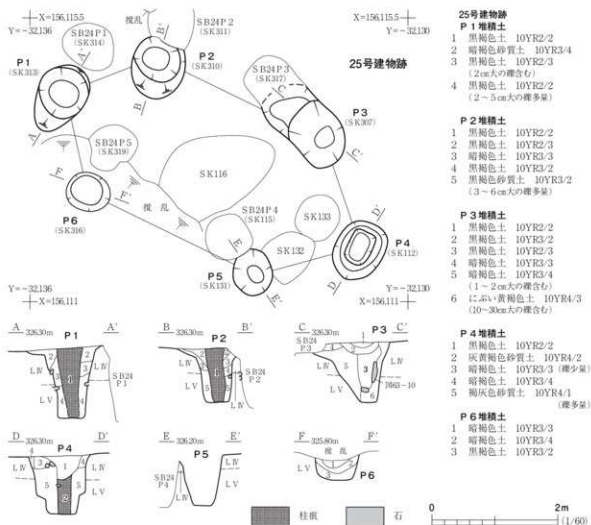


図62 25号建物跡

味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、北東壁上部と南西壁上部は緩い立ち上がりとなっている。規模は、長径116cm、短径80cm、深さ116cmを測り、底面の標高は324.9mである。堆積土は4層に分層され、①は柱痕、②~④は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P2 (SK310) は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上部では緩く立ち上がる。規模は、長径(遺存値)98cm、短径85cm、深さ84cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、①は柱痕、②~⑤は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

P3 (SK307) は、平面形が北西-南東主軸の長楕円形で、北西側は皿状を呈し、南東側は深く掘り込まれている。南東側の掘り込みの周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)136cm、短径80cm、南東側の掘り込みの深さ95cm、北西側の深さ27cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は6層に分層され、①~③は柱抜き取り後の堆積土、④~⑥は柱抑えの土である。なお、③と⑥の境から大型の石皿(図63-10)が上面を内側に向けて横位の状態で出土し、柱設置の際に根固めで再利用されたものと推測される。

P 4 (SK 112) は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、底面は2段に掘り込まれている。規模は、長径98cm、短径76cm、深さ95cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3～5は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

P 5 (SK 131) は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径74cm、短径64cm、深さ80cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は記録前に完掘した。

P 6 (SK 316) は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、いずれも遺存値で、長径70cm、短径62cm、深さ42cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の自然堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺 物 (図63、写真183・243・251)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計145点、剥片・石器がP 6を除いたピットから計26点出土した。このうち、縄文・弥生土器8点、石器2点を図示した。

図63-1は、鉢か深鉢の口縁部から体部である。口唇部に面を有し、口縁部外面が肥厚する。口縁部と体部にそれぞれ2本の沈線を巡らせる。沈線の底に工具の先端を止め押した跡がみられる。

同図2は、深鉢もしくは鉢の口縁部から体部である。口唇部に突起を有する。縄文を施したのち、工字文が描かれる。

同図3は、粗製深鉢の口縁部から体部である。口縁部は内湾する。外面に条痕が施される。

同図4は、壺もしくは鉢の口縁部である。口縁部突起を有する。無文である。

同図5は、深鉢の体部である。磨消縄文により文様が描かれ、縄文部にのみ赤彩が施される。

同図6は、深鉢の体部上端部分である。内面に口縁部境の稜線を有する。条痕が施されたのち、3本の沈線が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。

同図7は、壺の体部と考えられるが、小片のため判然としない。沈線により文様が描かれる。

同図8は、粗製深鉢の口縁部である。口唇部に面を有し、外面が肥厚する。条痕が施される。

同図9は、刃部磨製の石筥である。縦長剥片の両側縁に両面から剥離を加え、片端を研磨して両刃がつけられている。基部は欠損しているようである。

同図10は、凹石である。扁平な石の片側縁が整形され、両面に多数の凹みが穿たれる。

出土土器は、縄文時代晩期～弥生時代中期前葉のものである。

ま と め

本遺構は1間×1間の小型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈し、梁からの棟持柱の突出長は東側の方が若干長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期前葉と推測される。本遺構より古い132号土坑の時期不明、本遺構より新しい24号建物跡出土遺物の弥生時代中期前～中葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

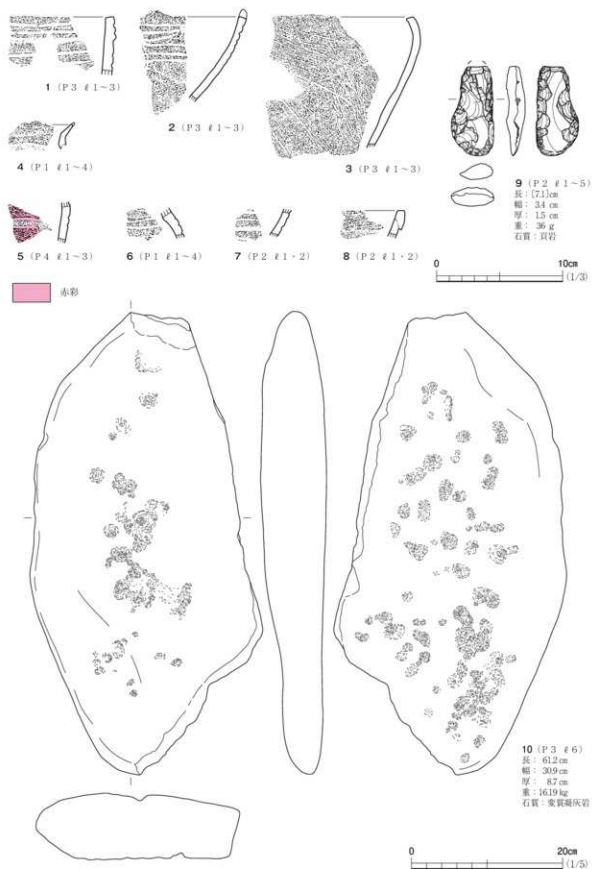


図63 25号建物跡出土遺物

26号建物跡 S B 26

遺 構 (図64、写真49)

本遺構は調査区南半部のI 16・17グリッドに位置し、平坦面に立地している。L IV上面において検出した。27・30・31号建物跡、14・15・18・20・192・193・373・374号土坑と重複し、30号建物跡、18・374号土坑より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P 1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は東西主軸の長方形である。規模は、桁行長(P 1～2間)5.3m、梁行長(P 1～4間)3.2mで、面積は16.1㎡を測る。

P 1 (S K 166) は、平面形が不整隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長(遺存値)102cm、短軸長93cm、深さ72cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P 2 (S K 880) は、平面形が不整隅丸長方形と推測され、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長(遺存値)138cm、短軸長143cm、深さ128cmを測り、底面の標高は324.6mである。堆積土は記録前に完掘した。

P 3 (S K 485) は、平面形が楕円形で、下半部は2基の円筒形の掘り込みが東西に連結したような形状を呈している。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径146cm、短径107cm、深さ114cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1 \sim 2$ は柱痕、 $\ell 3 \sim 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅は28cmを測る。

P 4 (S K 19) は、平面形が不整隅丸方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長108cm、短軸長104cm、深さ67cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺 物 (図64、写真183・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのビットから計149点、石器・剥片がP 1・3から計32点出土した。このうち縄文・弥生土器6点、石器1点を図示した。

図64-1は深鉢の体部である。工字文内に縄文を充填したのち、沈線をもう一度なぞっている。

同図2は、鉢の口縁部から体部である。口縁部外面が肥厚し、肥厚部に沈線文が描かれる。体部には縄文が施される。口縁部内外面に炭化物が薄く付着するので、蓋に転用されたものと思われる。

同図3は、深鉢の口縁部である。外面に斜め方向の条痕を施したのち、口唇部下に平行する沈線が巡らされる。外面に炭化物が付着する。

同図4・5は、いずれも深鉢の体部である。4は、3本の沈線の下に縄文を施したのち、ヒトデ文が描かれてその内部が磨り消されている。外面に炭化物が付着する。5は、磨消縄文によって文様が描かれている。縄文施文は充填によって行われている。

同図6は壺の体部である。細く直線的な沈線で四角形が描かれ、四角形の外に縄文が施される。

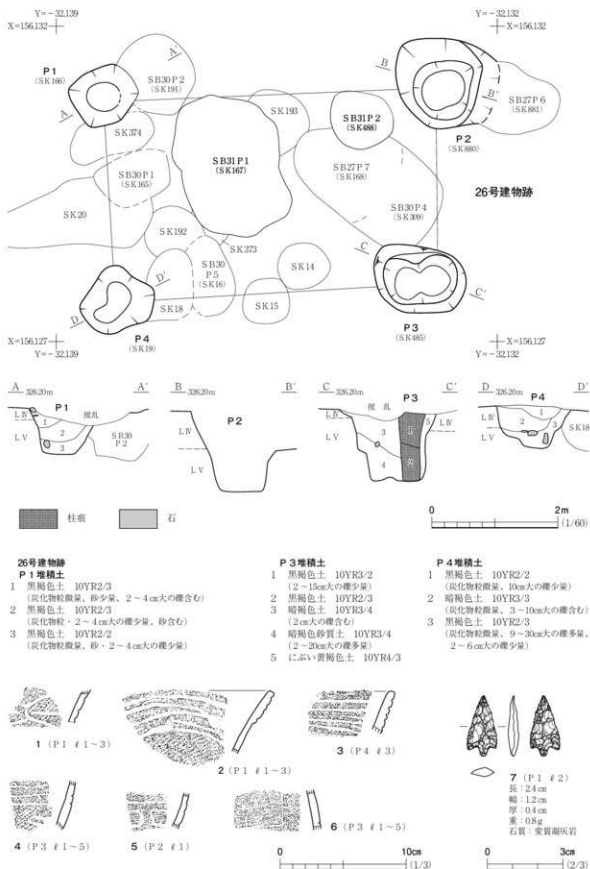


図64 26号建物跡・出土遺物

同図7は、凸基の石礎である。

出土土器は、縄文時代晩期末葉～弥生時代中期中葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する中型の建物跡であるが、西側の妻側(P1-4)のほぼ中間の西方から検出された20号土坑の底面中央の小穴は、本遺構の棟持柱の柱穴の可能性もあり、その場合には、全体の平面形は片亀甲形となる。本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い30号建物跡の弥生時代中期前葉、374号土坑の弥生時代前期という年代とも矛盾しない。

(能登谷)

27号建物跡 SB27

遺 構 (図65、写真50)

本遺構は調査区南半部のH16・17グリッド、I16・17グリッドに位置し、平坦面に立地している。LIV上面において検出した。26・30・31号建物跡、4・5・10・12・13・20・21・192・193・374・574・575・581・582・918号土坑と重複し、31号建物跡より古く、30号建物跡、193・574・918号土坑より新しい。その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は8基の柱穴(P1～8)から構成される。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・5)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1～5間)9.6m、桁行長(P6～8間)7.6m(西から4.7+2.9m)、梁行長(P2～8間)3.4mを測り、全体の面積は27.8㎡、長方形部分(P2・4・6・8で囲まれる部分)の面積は23.9㎡を測る。棟持柱の突出長は114cm及び115cmでほぼ同じである。

P1(SK572)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、上部は緩く立ち上がる。規模は、長径93cm、短径79cm、深さ68cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～4は柱抑えの土で、柱痕の幅は19cmを測る。

P2(SK22)は、平面形が北東-南西主軸の長楕円形で、南西側は円筒形に深く掘り込まれている。周壁は南西側の円筒形部分では直線的に急外傾して立ち上がり、その他では外傾して立ち上がる。規模は、長径142cm、短径66cm、南西側の円筒形部分の深さ55cm、北東側の深さ29cmを測り、南西側は円筒形部分の底面の標高は325.4mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1～3柱抜き取り後の堆積土、ℓ4・5は柱抑えの土と推測される。

P3(SK584)は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径40～42cm、深さ49cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2は柱抑えの土で、柱痕の幅は20cmを測る。

P4(SK169)は、平面形が楕円形で、周壁は下半部は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上半部は緩く立ち上がる。規模は、長径116cm、短径94cm、深さ73cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

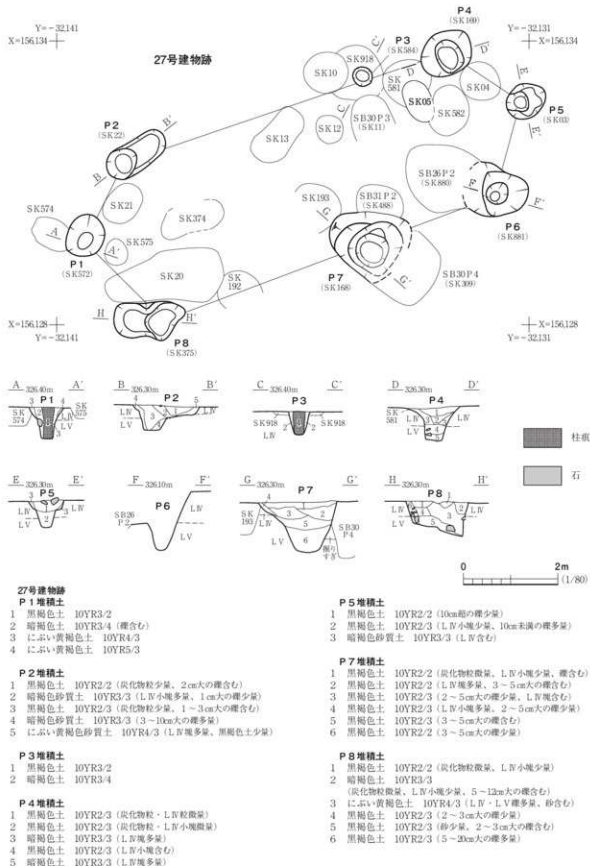


図65 27号建物跡

P5 (SK03) は、平面形が楕円形で、西側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は西側の円筒形部分では直線的に急外傾して立ち上がり、その他では急外傾して立ち上がる。規模は、長径88cm、短径77cm、西側の円筒形部分の深さ57cm、東側の深さ20cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ3は柱抑えの土と推測される。

P6 (SK881) は、平面形が不整楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)98cm、短径(遺存値)85cm、深さ124cmを測り、底面の標高は324.7mである。堆積土は記録前に完掘した。

P7 (SK168) は、平面形が不整楕円形で、南東側は深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、北西壁上部では緩く立ち上がる。規模は、長径(遺存値)155cm、短径148cm、深さ108cmを測り、底面の標高は324.9mである。堆積土は6層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P8 (SK375) は、平面形が不整長楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、底面は東方へ緩く下降している。規模は、長径152cm、短径82cm、深さ72cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は6層に分層され、ℓ1～5は柱抜き取り後の堆積土、ℓ6は柱抑えの土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図66、写真178・183・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP1・2・4・5・7から計298点、石器・剥片がP1・2・3・7から計40点出土した。特にP7からの出土量が、縄文・弥生土器260点、石器・剥片24点と多い。このうち縄文・弥生土器を8点、石器1点を図示した。

図66-1は、深鉢の口縁部から体部である。体上部に最大径を有し、縁部は緩やかに内傾する。体上部を幅広の文様帯とし、正逆の三角形と菱形を組み合わせた変形工字文が上下6段にわたって描かれる。変形工字文には、交互に縄文が充填される。幅の狭い文様帯を挟んで、体下部には縄文が施される。内外面に炭化物が付着する。

同図2～5は深鉢で、2は口縁部、3・5は体部で、いずれも磨消縄文により文様が描かれる。4は、深鉢の体部から口縁部である。接合しない破片をあわせて図上復元した。体部は弱く張り、頸部は弱くぐびれ、口縁部は緩やかに外傾する。口唇部直下を縄文帯とし、頸部は上下端に沈線を巡らせて文様帯とし磨消縄文により横長の帯状文を互い違いに上下4段描く。体部には縄文が施される。縄文施文部には、いずれもカナムグラの擬縄文が施される。内外面に炭化物が付着する。

同図6は、深鉢の体部である。沈線で多重の四角形が描かれ、四角形の内部は横方向の複数本の沈線によって充填される。内外面に炭化物が付着する。

同図7は、壺もしくは粗製深鉢の口頸部である。口縁部外面を肥厚させ、外面と口唇部に条痕が施される。条痕は口縁部が横方向、頸部が縦方向である。外面に炭化物が付着する。

同図8は、粗製深鉢の口縁部である。外面に斜め方向の条痕が深く施され、炭化物が付着する。

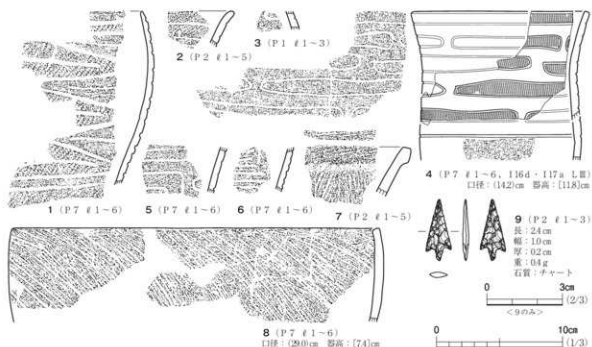


図66 27号建物跡出土遺物

同図9は、凸基の石織である。

出土土器は、弥生時代前期～中期中葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は2間×1間の大型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。梁からの棟持柱の突出長は両側とも同じで、西側の桁行が長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い30号建物跡の弥生時代中期前葉、193号土坑の弥生時代中期中葉、574・918号土坑の時期不明、本遺構より新しい31号建物跡の弥生時代中期中葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

28号建物跡 S B 28

遺 構 (図67、写真51)

本遺構は調査区南半部のH 17グリッド、G・H 18グリッドに位置し、平坦面に立地している。L IV上面ないしはL V上面において検出した。19・29・34号建物跡、370・626・630・651・678・774・785・833・849・887・889号土坑、G 18 P 8～12、H 17 P 34・41・57、H 18 P 8～11・14～16と重複し、626号土坑より古く、19・29・34号建物跡、774・889号土坑、H 17 P 57、H 18 P 8より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P 1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P 1・4)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P 1-4間)6.9m、桁行長(P 2-3間)5.3m、梁行長(P 3-5間)3.0mを測り、全体の面積は18.2㎡、長方形部分(P 2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は15.8㎡を測る。棟持柱の突出長は西側のP

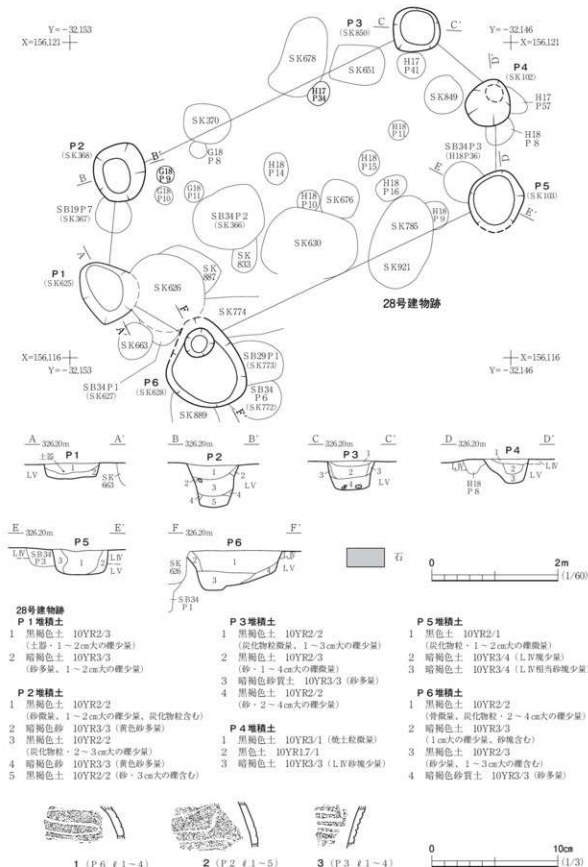


図67 28号建物跡・出土遺物

1で92cmを測り、東側のP4よりも20cm長い。

P1(SK625)は、平面形が不整楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径98cm、短径(遺存値)89cm、深さ25cmを測り、底面の標高は325.7mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2(SK368)は、平面形が不整隅丸方形で、周壁は内湾気味ないし直線的に急外傾し、上部では緩く立ち上がる。規模は、長軸長90cm、短軸長84cm、深さ69cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P3(SK850)は、平面形が隅丸方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長75cm、短軸長70cm、深さ45cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P4(SK102)は、平面形が不整隅丸方形で、周壁は北東側では直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、南西側では直線的に緩く立ち上がる。規模は、長軸長78cm、短軸長72cm、深さ38cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P5(SK103)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径97cm、短径84cm、深さ39cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は3層に分層され、①は柱抜き取り後の堆積土、②・③は柱抑えの土と推測される。

P6(SK628)は、平面形が不整楕円形で、北端部が若干深く掘り込まれている。周壁は、直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)147cm、短径119cm、深さ61cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物(図67、写真183)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片がすべてのピットから、それぞれ計270点と計45点が出土した。特にP5・6からの出土量が多い。このうち、弥生土器3点を図示した。

図67-1は、深鉢もしくは壺の体部である。沈線により文様が描かれる。外面に炭化物がわずかに付着する。

同図2は、深鉢の体部である。磨消縄文により文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。

同図3は、深鉢の体部である。重四角形が描かれ、内部に横方向の沈線が充填される。沈線が引かれる前に縄文が施されているが、磨り消されている。内外面に炭化物が付着する。

出土土器は、弥生時代中期中葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。桁行1間の長さが長く、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が若干長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い19・

29号建物跡の弥生時代中期中葉、34号建物跡の弥生時代前期～中期前葉、626号土坑の弥生時代中期前葉、774号土坑の弥生時代中期中葉、889号土坑の縄文時代晩期末葉、H17 P 57とH18 P 8の時期不明という年代とも矛盾しない。(能登谷)

29号建物跡 S B 29

遺 構 (図68、写真52)

本遺構は調査区南半部のG・H18グリッドに位置し、平坦面に立地している。南東部はLIV上面において検出されたが、他の部分はLV上面で検出された。28・34号建物跡、138・142・143・548・630・774・827・834・835・860号土坑、H18 P 8・12・13・26と重複し、28号建物跡より古く、34号建物跡、142・143・548・630・774・834・835号土坑より新しい。その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は北東-南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1-4間)60m、桁行長(P5-6間)42m、梁行長(P3-5間)24mを測り、全体の面積は11.5㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は9.2㎡を測る。棟持柱の突出長は西側のP1で92cm、東側のP4で106cmを測る。

P1(SK773)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)94cm、短径70cm、深さ84cmを測り、底面の標高は325.0mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ3は柱抑えの土と推測される。

P2(SK629)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がっている。規模は、長径113cm、短径101cm、深さ115cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3～5は柱抑えの土で、柱痕の幅は27cmを測る。

P3(SK137)は、平面形が不整隅丸長方形で、北側が深く掘り込まれている。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径121cm、短径90cm、北側の掘り込みの深さ60cm、南側の深さ22cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3～5は柱抑えの土で、柱痕の幅は14cmを測る。

P4(SK107)は、平面形が楕円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、上部では緩く立ち上がる。規模は、長径(遺存値)76cm、短径62cm、深さ46cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ3は柱抑えの土と推測される。

P5(SK141)は、平面形が不整隅丸方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長72cm、短軸長66cm、深さ73cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2・3は柱抑えの土と推測される。

P6(SK633)は、平面形が不整な長楕円形で、底面中央部が円筒形に深く掘り込まれている。

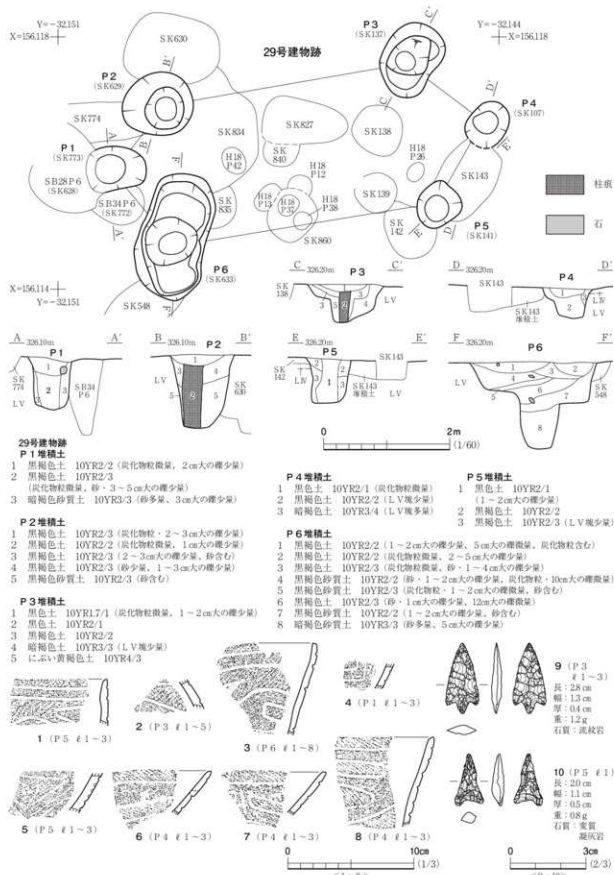


図68 29号建物跡・出土遺物

周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、中央部の円筒形部分では直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径199cm、短径106cm、中央部の円筒形部分の長径86cm、短径74cmを測り、中央部の円筒形部分の深さ137cm、北側の深さ48cm、南側の深さ65cmを測る。中央部の円筒形部分の底面の標高は324.5mである。堆積土は8層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図68、写真184・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片がすべてのピットから、それぞれ計248点と計68点が出土した。このうち、弥生土器8点と石器2点を図示した。

図68-1～8は深鉢で、1・3・6～8は口縁部、2・4・5は体部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれる。3には、ヒトデ文がみられる。4は、縄文が細かい。5は、縄文施文ののち刺突文が加えられる。6・7は、接合しないものの同一個体と思われ、遺構外の同じグリッドで出土したもの(図236-14)とも同一個体と思われる。6は、焼成後に補修孔が穿たれている。3を除き、炭化物が付着する。

同図9・10は、石畿である。9は凸基、10は凹基である。

本遺構出土土器は、弥生時代中期中葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の小型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈している。桁行1間の長さが長く、梁からの棟持柱の突出長は東側の方が若干長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い34号建物跡の弥生時代前期～中期前葉、142号土坑の時期不明、143・630号土坑の弥生時代中期前葉、548号土坑の弥生時代中期前～中葉、774・834号土坑の弥生時代中期中葉、835号土坑の弥生時代前期、本遺構より新しい28号建物跡の弥生時代中期中葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

30号建物跡 S B 30

遺構 (図69、写真53)

本遺構は調査区南半部のI 16・17グリッドに位置し、平坦面に立地している。L IV上面において検出した。26・27・31号建物跡、13・14・18・20・192・373・374・918号土坑と重複し、26・27号建物跡、18・20号土坑より古く、192・373・918号土坑より新しい。なお、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は5基の柱穴(P 1～5)から構成される。桁行1間、梁行1間で、西側の妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P 1)をもち、平面形は北東-南西主軸の片亀甲形である。規模は、全長3.9m、桁行長(P 2-3間)3.3m、梁行長(P 2-5間)3.3mを測り、全体の面積は11.6㎡、長方形部分(P 2～5で囲まれる部分)の面積は10.4㎡を測る。棟持柱の突出長は73cmを測る。

P 1(S K 165)は、平面形が不整隅丸長方形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。

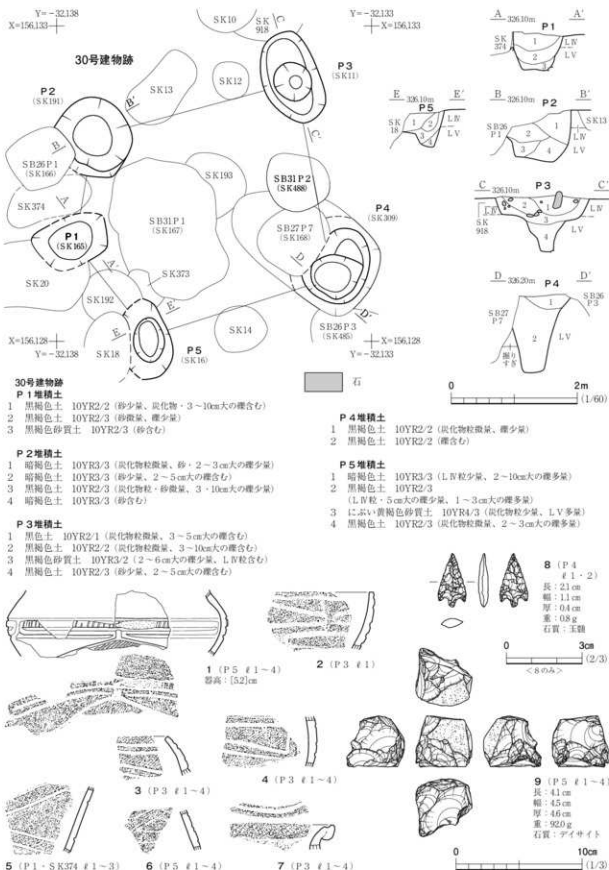


図69 30号建物跡・出土遺物

規模は、長軸長121cm、短軸長81cm、深さ60cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2 (SK191) は、平面形が不整形円で、周壁は外傾して立ち上がり、上部では直立気味に立ち上がる。規模は、長径131cm、短径(遺存値)110cm、深さ82cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P3 (SK11) は、平面形が長楕円形で、底面中央部が深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、中央部の掘り込みでは外反気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径148cm、短径91cm、中央部の掘り込みの長径64cm、短径58cmを測り、中央部の掘り込みの深さ85cm、北側の深さ26cm、南側の深さ36cmを測る。中央部の掘り込みの底面の標高は325.1mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P4 (SK309) は、平面形が隅丸長方形と推測され、底面南西側が深く掘り込まれている。周壁は、下部が直線的に急外傾して、上部が緩く立ち上がる。規模は、長軸長148cm、短軸長(遺存値)96cm、南西側の掘り込みの深さ124cm、北東側の深さ93cmを測り、底面の標高は324.8mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P5 (SK16) は、平面形が楕円形と推測され、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)126cm、短径(遺存値)70cm、深さ58cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図69、写真184・242・243)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片がすべてのピットから、それぞれ計384点と計67点が出土した。このうち、弥生土器7点と石器2点を図示した。

図69-1は、鉢の体部である。体部最大径の位置より下に変形工字文が描かれる。変形工字文の最上段には刻みが、下部には縄文がそれぞれ施される。

同図2～6は深鉢で、2・3は口縁部、4～6は体部である。いずれも磨消縄文によって文様が描かれる。3・4は接合しないものの、胎土、焼成、色調などの特徴から同一個体と思われる。2を除き、炭化物が付着する。

同図7は、壺の口縁部である。口縁部外面を粘土紐の貼り付けによって肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。口縁部内面には、1本の沈線が巡らされる。

同図8は凸基の石鏃、同図9は石核である。石核は、自然面が一部に残る。

本遺構出土土器は、弥生時代前期～中期前葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。一方の妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は片亀甲形を呈している。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期前葉と推測される。本遺構より古い192・373・918号土坑の時期不明、本遺構より新しい26・27号建物跡の弥生時代中期中葉、

20号土坑の弥生時代中期前葉という年代とも矛盾しない。本遺構より新しい18号土坑からは弥生時代前期の土器が出土しているが、周辺からの流れ込みと判断される。(能登谷)

31号建物跡 SB31

遺 構 (図70、写真54)

本遺構は調査区南半部のI 16・17グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。26・27・30号建物跡、14・15・193・373・486号土坑と重複し、27号建物跡、193・373・486号土坑より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P 1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は南北主軸の長方形である。規模は、桁行長(P 2～3間)4.0m、梁行長(P 3～4間)2.4mを測り、面積は9.3㎡を測る。

P 1(SK 167)は、平面形が不整隅丸長方形で、北側が深く掘り込まれている。北側の掘り込みの周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、南側の周壁は直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長軸長234cm、短軸長174cm、北側の掘り込みの深さ103cm、南側の深さ38cmを測

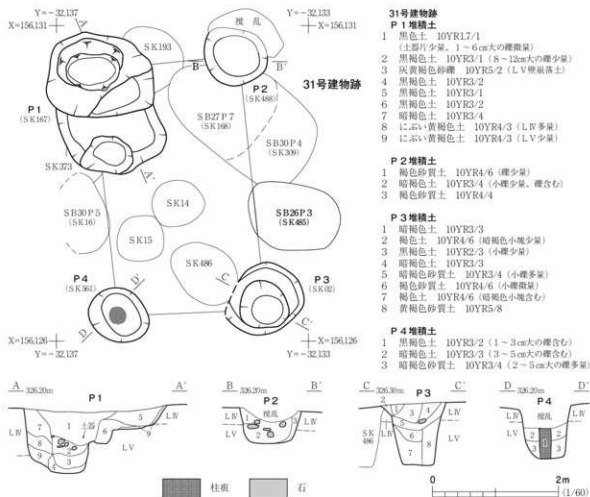


図70 31号建物跡

り、北側の底面の標高は324.9mである。堆積土は9層に分層され、ℓ1～4は柱抜き取り後の堆積土、ℓ5～9は柱抑えの土と推測される。

P2 (SK488)は、平面形が円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径98cm、短径(遺存値)92cm、深さ56cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ3は柱抑えの土と推測される。

P3 (SK02)は、平面形が楕円形で、南側は円筒形に深く掘り込まれている。周壁はいずれも直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径127cm、短径105cm、南側の円筒形部分の深さ101cm、北側の深さ15cmを測る。南側の円筒形部分の規模は、径76cmで、底面の標高は325.1mである。堆積土は8層に分層され、ℓ1～7は柱抜き取り後の堆積土、ℓ8は柱抑えの土と推測される。

P4 (SK561)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは急外傾して立ち上がる。規模は、長径99cm、短径84cm、深さ85cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図71、写真178・184・242・243・251)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片がすべてのピットから、それぞれ計399点と計95点が出土した。このうち、弥生土器7点と石器4点を図示した。

図71-1は、深鉢の口縁部から体上部である。接合しないものの同一個体と思われる破片もあわせて図示した。体部が張り、口縁部はやや外反した波状口縁である。体部に變形工字文が描かれ、口縁部内面に沈線が1本巡らされる。内外面にわずかに炭化物が付着する。

同図2は、鉢か高杯の体部である。變形工字文が描かれ、その内部に縄文が施される。縦の短沈線は他の沈線より深く、脇に粘土粒が盛り上げられている。内面に部分的に赤色顔料が付着する。

同図3・4は、深鉢の体部である。磨消縄文により文様が描かれ、外面に炭化物が付着する。

同図5は、壺の体部である。細く直線的な沈線が引かれたのち、細かな縄文が施される。

同図6は、壺か鉢の体下部である。結節を有する無節の縄文が施され、その下部にハケメ状の条痕が横方向に施される。無節の縄文が施される以前に施された縦方向の条痕がわずかに観察される。外面に炭化物が付着する。

同図7は、寛の口縁部から体上部である。体部は張り、口縁部は外傾する。体部外面に縄文が施され、内面に輪積み痕が残される。内外面に炭化物が付着する。

同図8～11は、石器である。8・9は削器、10は石鋸、11は凹石である。

本遺構から出土した土器は、弥生時代前期～中期中葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い27号建物跡・193号土坑の弥生時代中期中葉、373号土坑の時期不明、486号土坑の弥生時代中期前葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

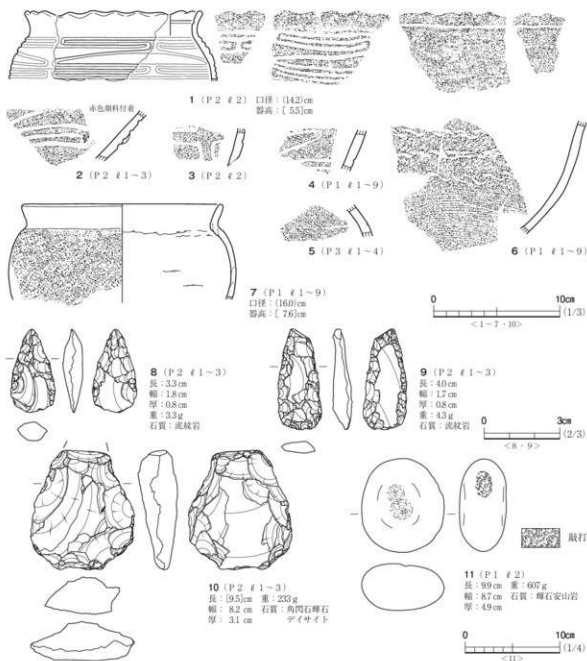


図71 31号建物跡出土遺物

32号建物跡 SB32

遺 構 (図72、写真55)

本遺構は調査区南半部のI 17・18グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。21～23号建物跡、76・122・130・150・480・483・484・900・902・904号土坑、6号焼土遺構と重複し、76号土坑より古く、21号建物跡、122・150・483・484・902・904号土坑より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P 1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は南北主軸の長

方形である。規模は、桁行長(P1-4間)2.5m、梁行長(P1-2間)2.3mで、面積は5.5㎡を測る。

P1(SK901)は、平面形が不整楕円形と推測され、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径90cm、短径(遺存値)70cm、深さ64cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は記録前に完掘した。

P2(SK75)は、平面形が楕円形と推測され、西側は深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)130cm、短径102cm、西側の掘り込みの深さ65cm、東側の深さ45cmを測る。西側の掘り込みの規模は、長径78cm、短径67cmを測り、底面の標高は

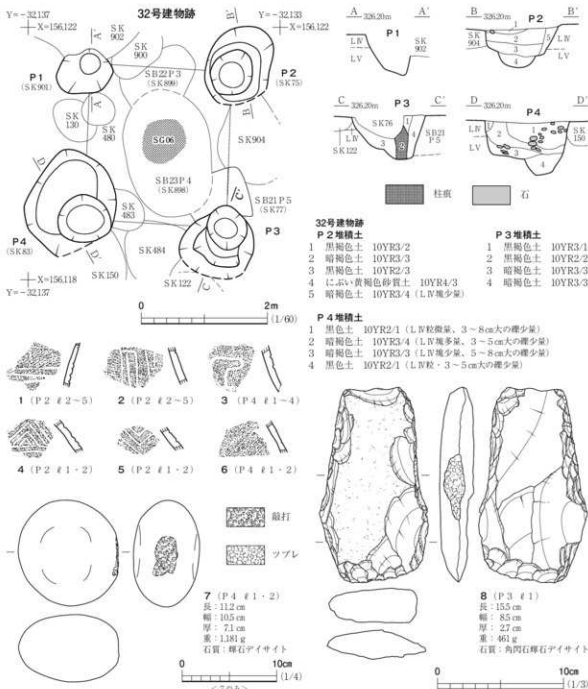


図72 32号建物跡・出土遺物

325.4mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1～4は柱抜き取り後の堆積土、ℓ5は柱抑えの土と推測される。

P3は、平面形が不整形と推測され、北側は円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾あるいはやや緩く外傾して立ち上がる。規模は、径120cm、北側の円筒形部分の深さ70cm、南側の深さ53cmを測る。北側の円筒形部分の規模は、長径70cm、短径63cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3・4は柱抑えの土で、柱痕の幅は18cmを測る。

P4(SK83)は、平面形が不整形で、南東側は円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、南東側の円筒形部分では直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長径160cm、短径138cm、南東側の円筒形部分の深さ86cm、北西側の深さ61cmを測る。南東側の円筒形部分の規模は、長径84cm、短径76cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内に踏み締め範囲は認められなかったが、遺構範囲内の中央部から検出された6号焼土遺構が本遺構と同時期の場合、6号焼土遺構は本遺構の炉跡の可能性もある。

遺 物 (図72、写真185・243・251)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がすべてのピットから計227点、石器・剥片がP1を除くピットから計75点出土した。このうち、弥生土器6点と石器2点を図示した。

図72-1～3は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。

同図4・5は、壺の体部である。沈線で文様が描かれる。

同図6は、壺の体部である。沈線で文様が描かれたのち、交互ミガキが施される。

同図7は、敲石である。同図8は、短冊形の石鍬である。背面に自然面を残す。

本遺構出土土器は、弥生時代中期前～後葉に位置づけられる。

ま と め

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。本遺構より古い21号建物跡・150号土坑の弥生時代中期前葉、122号土坑の弥生時代中期中葉、483号土坑の弥生時代前期～中期中葉、484号土坑の弥生時代中期前～中葉、902・904号土坑の時期不明、本遺構より新しい76号土坑の弥生時代中期末葉～後期初頭という年代とも矛盾しない。

(能登谷)

33号建物跡 SB33

遺 構 (図73、写真56)

本遺構は調査区南半部のH17グリッドに位置し、平坦面に立地している。P2は1号住居跡掘形底面から検出し、他の柱穴はLⅣ上面において検出した。1号住居跡、10号建物跡、H17P15・52・54と重複し、1号住居跡、10号建物跡より古く、他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P1~4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は北東-南西主軸の長方形である。規模は、桁行長(P3-4間)4.5m、梁行長(P1-4間)2.8mを測り、面積は12.3㎡を測る。

P1(H17P10)は、平面形が不整隅丸長方形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径53cm、短径32cm、深さ23cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は黒褐色土1層で、柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2(H17P48)は、平面形が円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、いずれも遺存値で径38cm、深さ30cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は黒褐色砂質土1層で、柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P3(H17P51)は、平面形が楕円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)37cm、短径(遺存値)32cm、深さ38cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は2層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P4(H17P14)は、平面形が隅丸方形で、周壁は直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長径39cm、短径36cm、深さ21cmを測り、底面の標高は325.5mである。堆積土は2層に分層され、幅

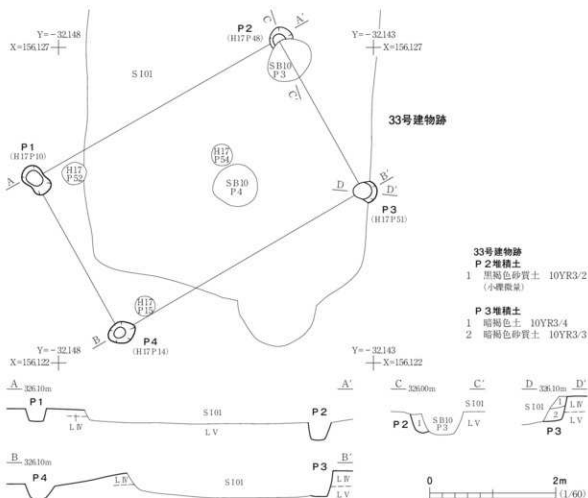


図73 33号建物跡

15cmの柱痕と柱抑えの土である。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡のP1から、縄文・弥生土器が2点、剥片が1点出土した。図示できる遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する中型の建物跡である。各柱穴は小型であり、底面の標高はP2(325.3m)以外では325.5～325.6mで近似している。出土遺物が少なく、遺物から本遺構の時期を推定することは難しい。本遺構より新しい1号住居跡の平安時代、10号建物跡の弥生時代中期という年代より古い遺構であることがいえるのみである。

(能登谷)

34号建物跡 SB34

遺 構 (図74、写真57)

本遺構は調査区南半部のG・H18グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面ないしはLV上面で検出した。28・29号建物跡、139・626・630・663・676・774・785・827・833・834・837・840・887号土坑、H18P9・10・16・42と重複し、28・29号建物跡、626・663号土坑より古く、139・833号土坑より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は北東－南西主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1－4間)5.1m、桁行長(P2－3間)3.9m、梁行長(P2－6間)2.9mを測り、全体の面積は12.8㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は10.9㎡を測る。棟持柱の突出長は、西側のP1が112cmを測り、東側のP4よりも94cm長い。

P1(SK627)は、平面形が楕円形と推測され、周壁は内湾気味に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)88cm、短径(遺存値)72cm、深さ100cmを測り、底面の標高は324.9mである。堆積土の大部分は626号土坑の調査の際に掘りすぎているが、残存部分では3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2(SK366)は、平面形が楕円形で、西側は円筒形に深く掘り込まれている。周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径114cm、短径99cm、西側の円筒形部分の深さ85cm、東側の深さ38cmを測る。西側の円筒形部分の規模は、径78cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2～4は柱抑えの土で、柱痕の幅は28cmを測る。

P3(H18P36)は、平面形が円形と推測され、周壁は直線的に外傾して立ち上がる。規模は、径62cm、深さ28cmを測り、底面の標高は325.7mである。堆積土は4層に分層され、ℓ1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ3・4は柱抑えの土と推測される。

P4(H18P17)は、平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上部は緩く立ち上がる。規模は、径49～54cm、深さ44cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は不明である。

P5 (SK140) は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、南壁の上部では緩く立ち上がる。規模は、長径64cm、短径57cm、深さ77cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2$ は柱抑えの土である。柱痕の幅は18cmを測る。

P6 (SK772) は、平面形が楕円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径(遺存値)80cm、短径(遺存値)68cm、深さ120cmを測り、底面の標高は324.6mである。堆積土は5層に分層され、 $\ell 1$ は廃絶後の堆積土、 $\ell 2 \sim 3$ は柱痕、 $\ell 4 \sim 5$ は柱抑えの土で、柱痕の幅

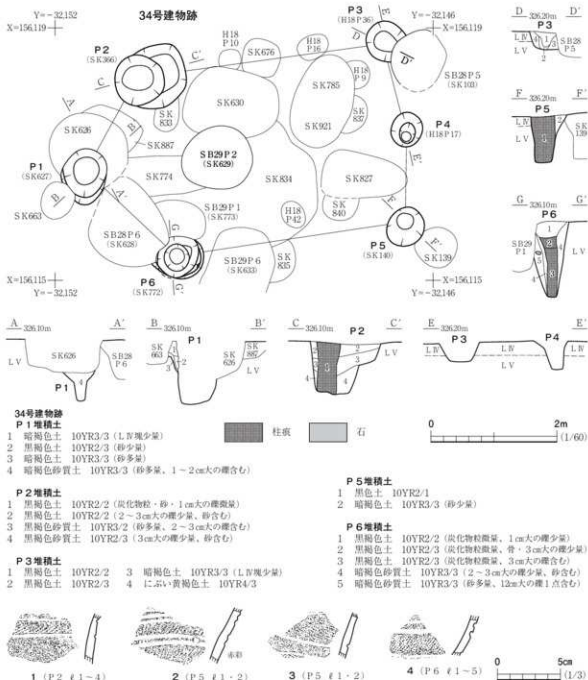


図74 34号建物跡・出土遺物

は15cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺 物 (図74、写真185)

本建物跡では、P2・5・6から縄文・弥生土器が計53点と剥片が計14点出土した。このうち、弥生土器4点を図示した。

図74-1～4は深鉢で、いずれも磨消縄文で文様が描かれる。1は、縄文を施したのち沈線が引かれている。2は、無文部に縦の深い短沈線が引かれ、その両脇に粘土粒が低く盛り上がる。外面には赤彩が施される。3・4は外面に炭化物が付着する。

本遺構から出土した土器は、弥生時代前期～中期前葉に位置づけられる。

ま と め

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈し、梁からの棟持柱の突出長は西側の方が大幅に長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代前期～中期前葉と推測される。本遺構より古い139号土坑の弥生時代前期、833号土坑の時期不明、本遺構より新しい28・29号建物跡の弥生時代中期中葉、626号土坑の弥生時代前期～中期中葉、663号土坑の弥生時代前期という年代とも矛盾しない。(能登谷)

35号建物跡 SB35

遺 構 (図75、写真58)

本遺構は調査区北半部のC7グリッドに位置し、平坦面に立地している。LⅣ上面において検出した。北西1.8mに4号住居跡が存在し、南西1.2mに727号土坑が存在する。

本遺構は4基の柱穴(P1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は北東-南西主軸の長方形である。規模は、桁行長(P3-4間)2.8m、梁行長(P2-3間)2.5mを測り、面積は6.5㎡を測る。

P1は、平面形が楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径52cm、短径45cm、深さ42cmを測り、底面の標高は325.2mである。

P2は、平面形が楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径60cm、短径48cm、深さ48cmを測り、底面の標高は325.2mである。

P3は、平面形が楕円形で、南西側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径72cm、短径45cm、南西側の円筒形部分の深さ49cm、北東側の深さ19cmを測る。南西側の円筒形部分の規模は、径45cmで、底面の標高は325.2mである。

P4(C7P2)は、平面形が楕円形で、周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径48cm、短径40cm、深さ43cmを測り、底面の標高は325.2mである。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、遺物は出土しなかった。

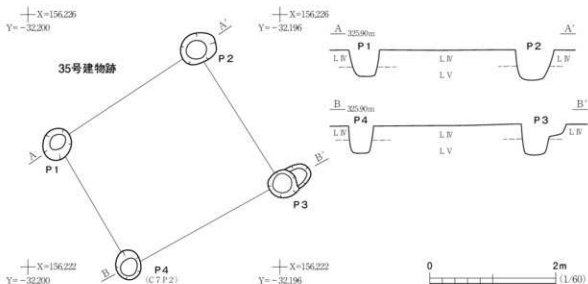


図75 35号建物跡

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。各柱穴は平面形が楕円形を呈する小型で、底面の標高が325.2m前後であることが特徴的である。時期は不明である。(能登谷)

36号建物跡 S B 36

遺 構 (図76、写真59)

本遺構は調査区北半部のD9グリッドに位置し、平坦面に立地している。LV上面において検出した。5号住居跡、D9 P11・12・14・15・37・40と重複し、5号住居跡、D9 P14・37より新しく、他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は北西-南東主軸の長方形である。規模は、桁行長(P1-2間)1.9m、梁行長(P1-4間)1.7mを測り、面積は3.2m²を測る。

P1(D9 P30)は、平面形が長楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径86cm、短径46cm、深さ44cmを測り、底面の標高は325.3mである。

P2(D9 P10)は、平面形が円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、径36cm、深さ36cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は12cmを測る。

P3(D9 P13)は、平面形が楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径38cm、短径(遺存値)24cm、深さ35cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3は柱抑えの土で、柱痕の幅は7cmを測る。

P4(D9 P16)は、平面形が円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径39-42cm、深さ47cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1

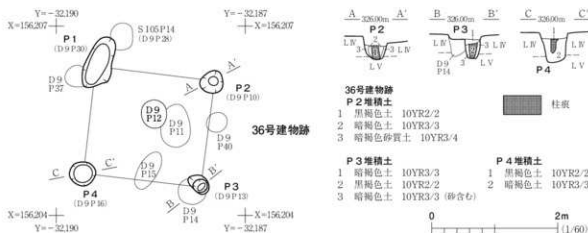


図76 36号建物跡

は柱痕の一部、ℓ 2は柱抑えの土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、縄文・弥生土器と剥片がP 4から1点ずつ出土した。図示した遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡であり、P 1以外の柱穴も小型である。また、各柱穴の底面の標高は325.3～325.4mで近似している。出土遺物が少なく、遺物から時期を考えることは難しいが、本遺構より古い5号住居跡の弥生時代中期後葉という年代から、これより新しい遺構であることがいえる。

(能登谷)

37号建物跡 S B 37

遺 構 (図77、写真60)

本遺構は調査区北半部のC・D 11グリッドに位置し、平坦面に立地している。L IV上面において検出した。3号住居跡、D 11 P 11と重複するが、新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P 1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は北東-南西主軸の長方形である。規模は桁行長(P 1-4間)2.4m、梁行長(P 3-4間)2.1mで、面積は5.0㎡を測る。

P 1(S I 03 P 6)は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径45cm、深さ32cmを測り、底面の標高は325.7mである。堆積土は3層に分層され、ℓ 1・2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 3は柱抑えの土と推測される。P 1は3号住居跡P 27と同位置にある。

P 2(S I 03 P 22)は、平面形が楕円形で、東側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は東側の円筒形部分では直立気味に立ち上がり、その他では直線的に外傾して立ち上がる。規模は、長径65cm、短径49cm、東側の円筒形部分の深さ40cm、西側の深さ7cmを測り、東側の円筒形部分の規模は、径30cm、底面の標高は325.6mである。堆積土は3層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3は柱抑えの土で、柱痕の幅は14cmを測る。

P 3(S I 03 P 8)は、平面形が不整形円で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち

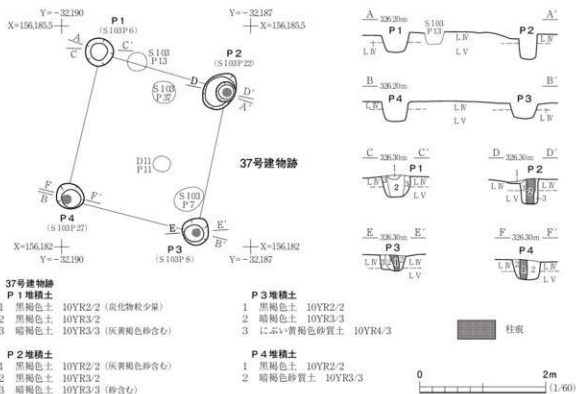


図77 37号建物跡

上がる。規模は、径44cm、深さ25cmを測り、底面の標高は325.7mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は8cmを測る。

P4 (S103P27)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急傾して立ち上がる。規模は、長径45cm、短径40cm、深さ32cmを測り、底面の標高は325.6mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2は柱抑えの土で、柱痕の幅は8cmを測る。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡では、縄文・弥生土器がP4から5点出土した。図示した遺物はない。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。各柱穴は平面形が円形ないしは楕円形を呈する小型で、底面の標高が325.6～325.7mで近似していることが特徴的である。本遺構の時期は不明である。

(能登谷)

38号建物跡 S B 38

遺 構 (図78、写真61)

本遺構は調査区東部のJ・K18グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約2m離れた平坦面で、検出面はLⅣ上面である。204・205・207・222・223・228号土坑、J18P8・13が重複し、205号土坑より本遺構が古い。調査時は本建物跡の各ビットをそれぞれ別の遺構と捉えていたが、調査終了後の検討で各ビットの配列から建物跡であると判断した。

態で出土した。

P 3 (J 18 P 9) は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急な角度で外傾する。規模は、長径26cm、短径22cm、深さ79cmで、底面の標高は325.4mである。

P 4 (K 18 P 1) は、平面形がほぼ円形で、周壁はやや急な角度で外傾する。規模は、径50cm、深さ42cmで、底面の標高は325.7mである。

P 5 (S K 203) は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径64cm、短径57cm、深さ78cmで、底面の標高は325.4mである。堆積土は2層に分かれる。

P 6 (S K 619) は、平面形がやや歪な円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、径56～61cm、深さ41cm、底面の標高は325.8mである。堆積土は2層に分かれる。

P 7 (J 18 P 3) は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径48cm、短径43cm、深さ50cm、底面の標高325.6mである。

P 8 (S K 206) は、平面形が楕円形で、その南部が深く掘り下げられている。検出面での規模は、長径103cm、短径71cm、深さ18cm、深く掘られた部分の平面形はやや歪な円形で、径50cm、深さ90cm、底面の標高325.4mである。堆積土は4層に分かれる。

遺 物 (図78、写真185)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP 2・6から計3点、剥片がP 6から2点出土した。このうち、縄文土器1点を図示した。

図78-1は、深鉢の口縁部から体上部である。口唇部に突起が1箇所ある。口縁部直下の外面に縄文を施文したのち内外面の口縁部下に沈線をそれぞれ1本巡らせ、突起下の内外面に縦の短沈線がそれぞれ引かれる。外面に炭化物が付着する。

ま と め

本遺構は、1間×2間の建物跡で、両妻側に棟持柱をもつ。柱穴からの出土遺物はごく少量であるものの、その特徴から縄文時代晩期末葉～弥生時代前期に位置づけられる。本遺構より新しい205号土坑の弥生時代前期という年代とも矛盾しない。

(青 山)

39号建物跡 S B 39

遺 構 (図79、写真62)

本遺構は調査区東部のI・J 19グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約15m離れた平坦面で、検出面はL IV上面である。238・241・253号土坑、I 19 P 20～25と重複し、253号土坑より本遺構が新しい。その他の遺構との新旧関係は不明である。また、本遺構のP 4と南側に隣接する40号建物跡のP 1が同じ位置にあって、いずれかのピットを壊したと考えられる。調査時は本建物跡の各ピットをそれぞれ別の遺構として調査したが、調査終了後の検討により各ピットの配列から建物跡と判断した。

本遺構は、4基の柱穴(P 1～4)からなる1間四方の建物跡である。平面形は東西がやや長い

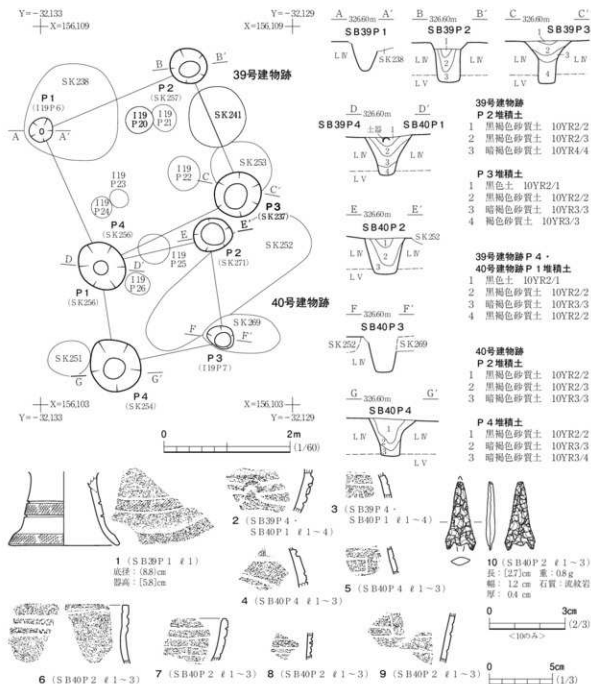


図79 39・40号建物跡・出土遺物

長方形で、北辺の長さ25m、西辺の長さ24m、面積5.6㎡である。

P1 (119P6)は、平面形がやや歪な楕円形で、周壁はやや急な角度で外傾する。規模は、遺存値で、長径41cm、短径37cm、深さ47cmで、底面の標高は325.8mである。

P2 (SK257)は、平面形が楕円形で、周壁は垂直に近い急な角度で立ち上がる。規模は、長径60cm、短径56cm、深さ63cm、底面の標高325.6mである。堆積土は3層からなる。

P3 (SK237)は、平面形が楕円形で、周壁は底面近くが急な角度で立ち上がり、上部はやや急な角度で立ち上がる。規模は、長径74cm、短径69cm、深さ68cm、底面の標高325.6mである。堆積

土は4層からなる。

P 4 (S K 256) は、平面形が楕円形で、周壁はやや急な角度で立ち上がる。規模は、長径83cm、短径70cm、深さ65cm、底面の標高325.6mである。堆積土は4層に分かれる。

遺 物 (図79、写真185)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP 1・2から計5点、剥片がP 2から11点出土した。この他、40号建物跡と同じ位置にあってどちらの建物跡に伴うか判断できないP 4から縄文・弥生土器8点、剥片2点が出土した。このうち、P 4から出土したものをあわせて土器3点を図示した。

図79-1は、高杯の脚部である。脚上部は円錐台形で、裾部はわずかに広がり外面を肥厚させる。脚部の中ほどに2本の沈線を巡らせ、その内部と肥厚部に縄文が施される。

同図2・3は、深鉢の体部である。2は、縄文を施したのち工字文が描かれる。縄文はオオバコ
の擬縄文と思われるが判然としない。3は、2本の沈線が巡らせ、その下に2本の沈線による波
状文が描かれる。いずれも外面に炭化物が付着する。

ま と め

本遺構は1間四方の建物跡である。出土遺物はごく少量で、縄文時代晩期末葉～弥生時代中期の
ものが含まれる。そのもっとも新しい遺物からすれば本遺構の時期は弥生時代中期と考えられる。
本遺構より古い253号土坑の縄文時代晩期末葉という年代とも矛盾しない。 (青 山)

40号建物跡 S B 40

遺 構 (図79、写真63)

本遺構は調査区東部のI・J 19グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約
15m離れた平坦面で、検出面はL IV上面である。252・269号土坑、I 19 P 25・26が重複し、いず
れも新旧関係は不明である。また、本遺構のP 1と北側に隣接する39号建物跡のP 4が同じ位置
にあって、いずれかのピットを壊したと考えられる。調査時は本建物跡の各ピットをそれぞれ別の
遺構として調査したが、調査終了後の検討で各ピットの配列から建物跡と判断した。

本遺構は、4基の柱穴(P 1～4)からなる1間四方の建物跡である。平面形は東西がやや長い
長方形で、北辺の長さ(P 1～2間)18m、西辺の長さ(P 1～4間)16m、面積29㎡である。

P 1 (S K 256) は、39号建物跡の項で述べた通りである。

P 2 (S K 271) は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径62cm、短径
52cm、深さ57cm、底面の標高325.7mである。堆積土は3層からなる。

P 3 (I 19 P 7) は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、いずれも遺存
値で、長径43cm、短径35cm、深さ57cm、底面の標高325.7mである。

P 4 (S K 254) は、平面形が楕円形で、周壁は下部が急な角度で、上部がやや急な角度でそれぞ
れ立ち上がる。規模は、長径90cm、短径79cm、深さ60cm、底面の標高325.7mである。堆積土は3
層に分かれる。

遺物 (図79、写真185・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片がP2・4からそれぞれ計23点と計6点出土した。この他、39号建物跡と柱穴を共有するP1から縄文・弥生土器8点、剥片2点が出土した。このうち、土器6点、石器1点を図示した。

図79・4・5・9は深鉢の体部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれる。5・9は出土したビットが異なるものの、細かな縄文などの特徴が似ることから、同一個体と思われる。

同図6・7は、深鉢の口縁部である。6は、外面を肥厚させ、肥厚部に縄文を施したのち2本の沈線が巡らされる。内面の口縁部下にも沈線が巡らされる。内面に炭化物がわずかに付着する。

同図8は、深鉢もしくは壺の体部である。沈線と円形の刺突によって文様が描かれる。

同図10は、凸基の石鏃である。基部を欠損している。

まとめ

本遺構は、1間四方の建物跡である。出土遺物はごく少量で、弥生時代前期～中期前葉のものが含まれる。そのもっとも新しい遺物から、弥生時代中期前葉に位置づけられる。(青山)

41号建物跡 SB41

遺構 (図80、写真64)

本遺構は調査区東部の120グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約19m離れた平坦面で、検出面はLIV上面である。42号建物跡、333号土坑と重複し、333号土坑より本遺構が古い。調査時は本建物跡の各ビットをそれぞれ別の遺構として調査したが、調査終了後の検討で各ビットの配列から建物跡と判断した。

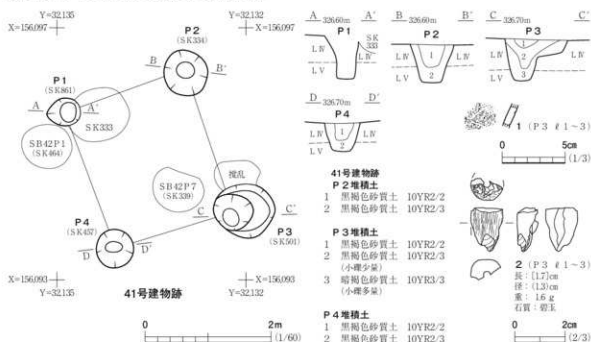


図80 41号建物跡・出土遺物

本遺構は、4基の柱穴(P1～4)からなる1間四方の建物跡である。平面形は南北がやや長い長方形で、北辺の長さ(P1～2間)2.0m、東辺の長さ(P2～3間)2.4m、面積4.6㎡である。

P1(SK861)は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径(遺存値)54cm、短径45cm、深さ68cm、底面の標高325.7mである。

P2(SK334)は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径76cm、短径70cm、深さ61cm、底面の標高325.6mである。堆積土は2層からなる。

P3(SK501)は、平面形が楕円形で、西部が深く掘り込まれている。周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、上端が長径98cm、短径86cm、深く掘り込まれた部分が長径63cm、短径57cm、深さ66cm、底面の標高325.8mである。堆積土は3層からなる。

P4(SK457)は、平面形が円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、径60cm、深さ45cm、底面の標高325.9mである。堆積土は2層からなる。

遺物 (図80、写真185・250)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP3・4から計4点、石製品・剥片がP2・4から計4点出土した。P3の堆積土の上部から管玉の破片が出土したことからそれ以下の堆積土をすべてフルイにかけて、土器が出土したのみである。出土遺物のうち、土器1点、石製品1点を図示した。

図80-1は、深鉢の体部である。磨消縄文により文様が描かれる。

同図2は、管玉である。片側の端部と側縁の一部が遺存する。荒削りの際の剥離面が研磨しきれず部分的に残り、研磨の際できた鈍い稜線や条線が顕著にみられるなど仕上げがやや粗雑である。

まとめ

本遺構は、1間四方の建物跡である。出土遺物はごく少量である。小片ではあるものの出土した土器から弥生時代中期に位置づけられる。本遺構より新しい333号土坑が弥生時代中期であることも矛盾しない。

(青山)

42号建物跡 SB42

遺構 (図81、写真65)

本遺構は調査区東部のI・J20グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約15m離れた平坦面で、検出面はLⅣ上面である。本建物跡と他遺構との直接の切り合いはないものの、本建物跡の範囲と41・43号建物跡の範囲、ビットが重複する。また、P1が攪乱によって西部を、P2・7が攪乱によって上部と北部をそれぞれ壊されている。調査時は本建物跡の各ビットをそれぞれ別の遺構として調査したが、調査終了後の検討で各ビットの配列から建物跡と判断した。

本遺構は7基の柱穴(P1～7)から構成される建物跡である。桁行2間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は南西-北東主軸の亀甲形である。南辺のP6は南辺中央より東寄りに位置する。また、この位置に対応する北辺にはビットが検出されなかった。

規模は、全長7.4m、桁行長(P2～3間)4.7m、梁行長(P2～7間)2.8m、全体の面積は

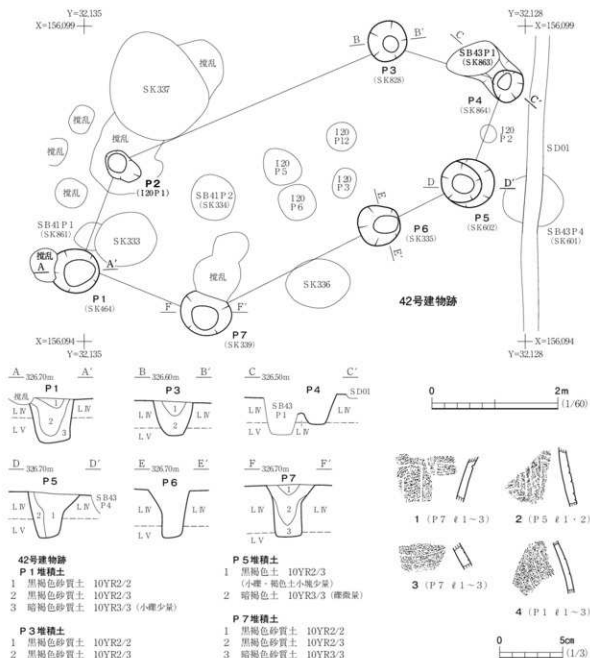


図81 42号建物跡・出土遺物

16.1㎡、長方形部分(P2・3・5・6・7に囲まれた部分)の面積は12.5㎡である。棟持柱の突出長は、P1・4とも130cmである。

P1(SK464)は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径が遺存値で76cm、短径71cm、深さ72cmで、底面の標高は325.7mである。堆積土は3層に分層される。

P2(I20P1)は、平面形が歪な楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径が遺存値で64cm、短径が遺存値で40cmである。深さの記録は調査時の不手際により不明である。

P3(SK828)は、平面形が円形で、周壁はやや急な角度で外傾する。規模は、径62～65cm、深さ55cmで、底面の標高は325.7mである。堆積土は2層に分層される。

P4 (SK 864) は、平面形が歪な楕円形で、周壁はやや急な角度で立ち上がる。規模は、長径54cm、短径50cm、深さ48cmで、底面の標高は325.8mである。

P5 (SK 602) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾し、東部のみ上部がやや急な角度で外傾する。規模は、長径85cm、短径77cm、深さ72cmで、底面の標高は325.6mである。堆積土は2層に分層され、そのうち①は柱痕と考えられる。

P6 (SK 335) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾し、西部のみ上部がやや急な角度で外傾する。規模は、長径68cm、短径64cm、深さ77cmで、底面の標高は325.6mである。堆積土については調査時の不手際で記録できなかった。

P7 (SK 339) は、平面形が楕円形で、周壁は下部が垂直に近い急角度で、上部がやや急な角度で外傾する。規模は、長径83cm、短径72cm、深さ82cmで、底面の標高は325.6mである。堆積土は3層に分層される。

遺物 (図81、写真185)

本建物跡からは、P2・4を除くピットから縄文・弥生土器と剥片がそれぞれ計47点と計12点出土した。このうち、土器4点を図示した。

図81-1・2は深鉢の体部である。1は磨消縄文、2は沈線で文様が描かれる。

同図3・4は壺の体部で、いずれも渦文か同心円文が描かれる。4の外面には炭化物が付着する。他に、P3から附加条縄文を施す土器が出土した。

まとめ

本遺構は、1間×2間の建物跡で、両妻側に棟持柱をもつ。柱の配置はやや不規則である。柱穴からの出土遺物は少量であるものの、その特徴から弥生時代中期後葉に位置づけられる。(青山)

43号建物跡 SB 43

遺構 (図82、写真66)

本遺構は調査区東部のJ 20グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約13m離れた平坦面で、検出面はL IV上面である。本建物跡のP4と1号溝跡が重複し、本建物跡が古い。各ピットをそれぞれ別の遺構として調査したが、調査終了後の検討で建物跡と判断した。南東側に溝が伴う可能性があるが、大規模な攪乱によって壊され、規模や形状は把握できなかった。

本遺構は、4基の柱穴(P1～4)からなる1間四方の建物跡である。平面形は南北がやや長い長方形で、北辺の長さ(P1～2間)1.7m、東辺の長さ(P2～3間)2.1m、面積3.9㎡である。

P1 (SK 863) は、平面形が楕円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径86cm、短径(遺存値)51cm、深さ58cm、底面の標高325.6mである。堆積土は調査時の不手際で記録できなかった。

P2 (SK 227) は、平面形が円形で、周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、径60cm、深さ66cm、底面の標高325.6mである。堆積土は4層からなる。

P3 (SK 466) は、平面形が円形で、周壁はやや急な角度で立ち上がる。規模は、長径92cm、短

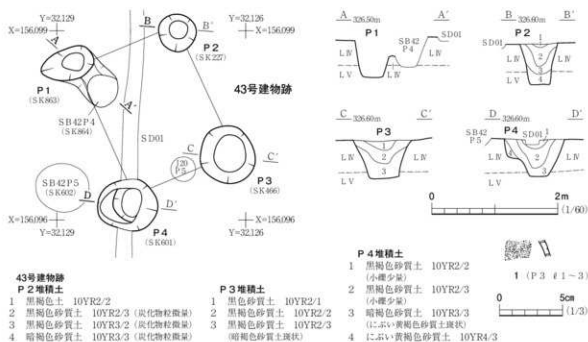


図82 43号建物跡・出土遺物

径86cm、深さ60cm、底面の標高325.7mである。堆積土は3層からなる。

P 4 (SK 601) は、平面形が楕円形で、西部に段を有する。周壁はやや急な角度で立ち上る。規模は、長径96cm、短径82cm、深さ60cm、底面の標高325.7mである。堆積土は4層に分かれる。

遺物 (図82、写真185)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP 3・4から計21点、剥片がP 3から2点出土した。このうち、土器1点を図示した。

図82-1は、壺の体部である。沈線で渦文か同心円文が描かれる。交互ミガキが施されているようであるが、判然としない。その他、P 4から附加条縄文が施された土器が出土した。

まとめ

本遺構は、1間四方の建物跡である。出土遺物は少量であるが、その特徴から弥生時代中期後葉に位置づけられる。(青山)

44号建物跡 SB 44

遺構 (図83、写真67)

本遺構は調査区東部のJ 20・21、K 21グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約8m離れた平坦面で、検出面はL IV上面である。P 3とK 21 P 1が重複するが、新旧関係は不明である。調査時は本建物跡の各ピットをそれぞれ別の遺構として調査したが、調査終了後の検討で各ピットの配列から建物跡と判断した。

本遺構は、4基の柱穴(P 1～4)からなる1間四方の建物跡である。平面形は東西がやや長い長方形で、北辺の長さ(P 1～2間)1.9m、東辺の長さ(P 2～3間)1.8m、面積3.8㎡である。

P1 (SK507) は、平面形が楕円形で、周壁はやや急な角度で立ち上がる。規模は、長径107cm、短径93cm、深さ57cm、底面の標高325.6mである。堆積土は3層に分かれる。

P2 (SK468) は、平面形が楕円形で、中央が一段深く掘り下げられている。周壁は、深い部分が急な角度で立ち上がり、その他はやや急な角度で立ち上がる。規模は、長径96cm、短径83cm、深さ60cm、底面の標高325.7mである。堆積土は4層からなり、 ℓ 2は柱痕とみられる。

P3 (SK234) は、平面形が楕円形で、南部が深く掘り下げられている。深い部分の周壁は急な角度で立ち上がる。規模は、長径105cm、短径82cm、深さ75cm、底面の標高325.5mである。堆積土は4層からなる。

P4 (SK512) は、平面形が楕円形で、南部が深く掘り下げられている。周壁はやや急な角度で

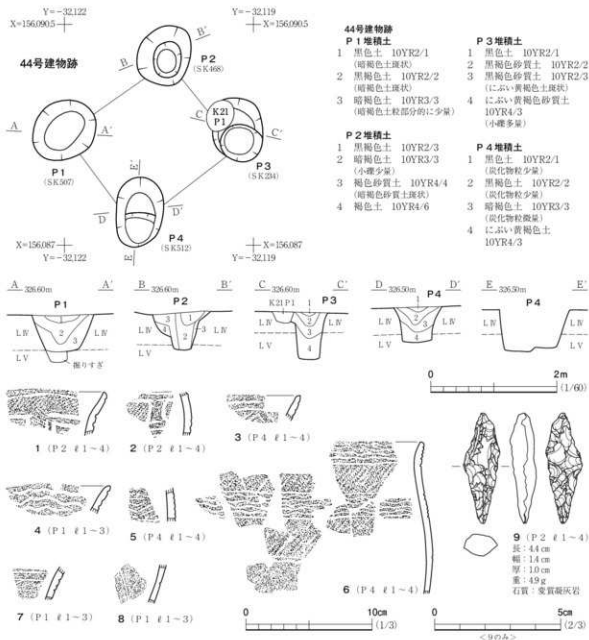


図83 44号建物跡・出土遺物

立ち上がる。規模は、長径111cm、短径75cm、深さ66cm、底面の標高325.5mである。堆積土は4層に分かれる。

遺 物 (図83、写真186・242)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と石器・剥片がP3を除くピットからそれぞれ計120点と計10点出土した。このうち、土器8点と石器1点を図示した。

図83-1～3は、深鉢である。1・3は口縁部、2は体部である。1・2は、接合しないものの同一個体と思われる。いずれも磨消縄文により文様が描かれる。1・3は、炭化物が付着する。

同図4は、深鉢の口縁部である。3本の沈線で波状文が描かれる。外面に炭化物が付着する。

同図5は、深鉢の体部である。沈線で多重の菱形が描かれる。外面に炭化物が付着する。

同図6は、深鉢の口縁部から体部にかけてである。体部の張りは弱く、頸部に向かうにしたがって内傾し、口縁部はわずかに外反する。口縁部と頸部の境に1本、頸部と体部の境に間隔をあけて2本の沈線を巡らせて文様帯とし、それぞれ4本の沈線による波状文が充填される。波状文が施された文様帯の間には縄文が施される。体部最大径の位置には平行する2本の沈線が巡らされ、これより下の体部下半は無文である。外面に炭化物が付着する。

同図7は、深鉢の体部で、地文を施したのち数本の沈線を巡らせ、沈線間が交互に磨り消されている。磨り消されない部分には、地文の上から斜め方向の短沈線を等間隔に描いて充填する。地文は、縄文が条痕が判然としない。

同図8は、壺の体部である。沈線で渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが施されている。

同図9は、石錐である。

ま と め

本遺構は1間四方の建物跡である。出土遺物から弥生時代中期後葉に位置づけられる。(青 山)

45号建物跡 S B 45

遺 構 (図84、写真68)

本遺構は調査区西部のF19グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約47m離れた平坦面で、検出面はLIV上面である。本建物跡のP3とF19P9が重複し、P3が古い。調査時は本建物跡の各ピットをそれぞれ別の遺構として調査したが、調査終了後の検討で各ピットの配列から建物跡と判断した。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される建物跡である。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は南西-北東主軸の亀甲形である。

規模は、全長3.1m、桁行長(P2-3間)2.4m、梁行長(P2-6間)1.4m、全体の面積は3.9㎡、長方形部分(P2・3・5・6に囲まれた部分)の面積は3.3㎡である。棟持柱の突出長は、P1が61cm、P4が22cmである。

P1(F19P4)は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径47cm、短径

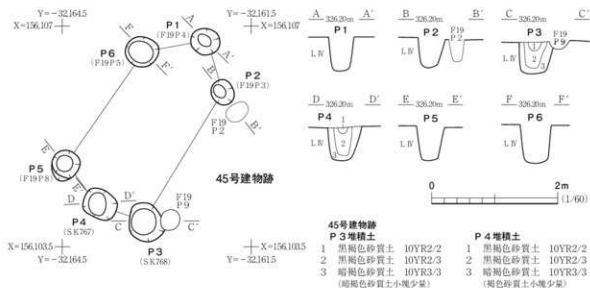


図84 45号建物跡

43cm、深さ54cmで、底面の標高は325.4mである。

P2 (F19P3) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径40cm、短径36cm、深さ48cmで、底面の標高は325.4mである。

P3 (SK768) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径64cm、短径55cm、深さ50cmで、底面の標高は325.3mである。増積土は3層に分かれる。

P4 (SK767) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径54cm、短径45cm、深さ55cmで、底面の標高は326.3mである。増積土は3層からなる。

P5 (F19P8) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径50cm、短径44cm、深さ54cmで、底面の標高は326.3mである。

P6 (F19P5) は、平面形が楕円形で、周壁は急角度で外傾する。規模は、長径54cm、短径48cm、深さ60cmで、底面の標高は326.3mである。

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP3・4から計8点出土した。図示した遺物はないが、P3から出土した土器に工字文と思われる文様を太い線紋で描いた小片がある。

まとめ

本遺構は、1間×1間の建物跡で両側側に棟持柱をもつ。柱穴からの出土遺物は少量であるものの、その特徴から縄文時代晩期末葉～弥生時代前期に位置づけられる。(青山)

46号建物跡 SB46

遺構 (図85、写真69)

本遺構は調査区北半部のF15・16グリッドに位置し、平坦面の北側縁辺部に立地している。LV上面で検出した。8号建物跡、528号土坑、F15P7・8と重複し、8号建物跡、F15P7より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行2間、梁行1間で、平面形は北西-南東主軸の長方形である。規模は、桁行長(P4-6間)4.9m(西から1.9+3.0m)、梁行長(P3-4間)2.0mを測り、面積は9.5㎡を測る。

P1(F15P1)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径63cm、短径56cm、深さ43cmを測り、底面の標高は325.5mである。遺構内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

P2(F15P2)は、平面形が隅丸長方形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長49cm、短軸長40cm、深さ37cmを測り、底面の標高は325.6mである。遺構内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

P3(F15P9)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径62cm、短径57cm、深さ45cmを測り、底面の標高は325.4mである。遺構内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

P4(SK535)は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径126～130cm、深さ76cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は5層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。ℓ4は壁崩落土である。

P5(F15P5)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径60cm、短径47cm、深さ40cmを測り、底面の標高は325.5mである。遺構内には炭化物を含む黒褐色土が堆積していた。

P6(F15P6)は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がっている。規模は、径46cm、深さ25cmを測り、底面の標高は325.7mである。遺構内には黒褐色土が堆積していた。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺 物 (図85、写真186)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP1・2・4から計118点、剥片がP4・5から計5点出土した。P4から出土した遺物が、土器115点、剥片4点とをもって多く、本建物跡から出土した遺物の大半を占める。このうち、弥生土器7点を図示した。

図85-1・2は深鉢である。1は体部で、宇字文が描かれ、沈線の部分にのみ赤彩が施される。2は口縁部で、口唇部に二山の突起を有し、磨消縄文で文様が描かれる。口縁部突起下の外面に焼成後の盲孔が1箇所穿たれる。

同図3は深鉢の口縁部から体部である。ハケメ状の条痕を施したのち、口縁部下に平行する2本の沈線を巡らせ、その間に刺突列をめぐらせる。刺突は器面に対して右斜め横から行われている。体部には、斜め方向の沈線が密に引かれている。外面に炭化物が付着する。

同図4は、壺の頸部である。沈線で弧文が描かれている。

同図5～7は、壺である。5は口縁部、6は頸部、7は体上部で、接合しないが同一個体と思われる。球胴で、頸部はすぼまり、口縁部は外反する。口縁部はミガキが施され、口頸部の境にきわ

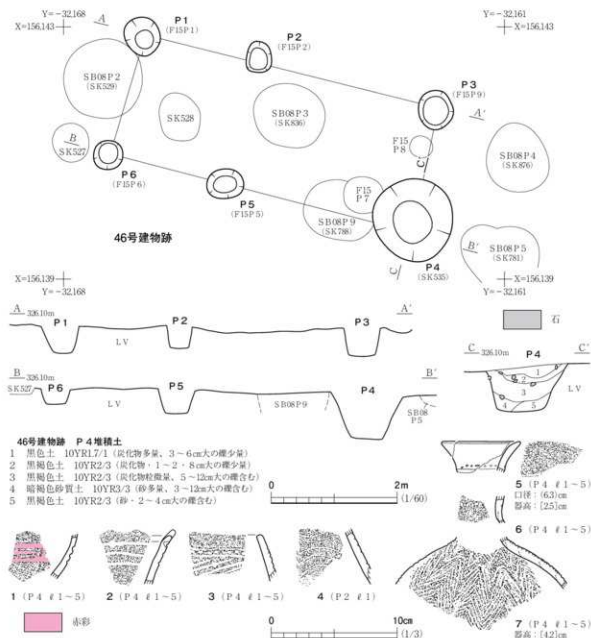


図85 46号建物跡・出土遺物

めて緩やかな稜線が巡り、稜線の直上に刺突列を巡らせる。刺突列は5・6にみられるが、これらが一連のものか、あるいは刺突列が2列巡らされているのか、判断が難しい。体上部には細い沈線による重鋸歯文が密に描かれ、その間隙に刺突文が施される。刺突は、頸部に近い位置の重鋸歯文の間隙に充填される他、重鋸歯の各頂部に沿って縦に列をなす。体部内面には輪積み痕が残る。

本遺構出土土器は、弥生時代前期～中期後葉のものである。

まとめ

本遺構は2間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。P4以外の柱穴は規模や底面の標高が近似しているのに対して、P4は位置に妥当性は認められるものの、規模が大きく、底面の標高もかなり低位にあることから、P4は本遺構の柱穴ではなく、本来同位置に存在した古い柱穴を

535号土坑が削平した可能性も否めない。

本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。本遺構より古い8号建物跡の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、F15P7の時期不明という年代とも矛盾しない。(能登谷)

47号建物跡 SB47

遺 構 (図86、写真70)

本遺構は調査区南半部のH16グリッドに位置し、平坦面の北側縁辺部に立地している。LIV上面において検出した。南東に20号建物跡、北東に35号土坑、西方に158号土坑が隣接して存在する。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行2間、梁行1間で、平面形は北東-南西主軸の長方形である。規模は、桁行長(P4-6間)2.9m(西から1.2+1.7m)、梁行長(P3-4間)2.1mを測り、面積は5.4㎡を測る。

P1(SK156)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径90cm、短径80cm、深さ39cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は3層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P2(SK37)は、平面形が不整楕円形で、北東側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は内湾気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径116cm、短径68cm、北東側の円筒形部分の深さ58cm、南西側の深さ26cmを測り、北東側の円筒形部分の底面の標高は325.1mである。堆積土は2層に分層されるが、柱設置時の柱抑えの土なのか、柱抜き取り後の堆積土なのかは不明である。

P3(SK160)は、平面形が楕円形で、北側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径82cm、短径72cm、北側の円筒形部分の深さ47cm、南側の深さ26cmを測り、北側の円筒形部分の底面の標高は325.2mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2・3は柱抑えの土と推測される。

P4(SK36)は、平面形が隅丸長方形で、東側が円筒形に深く掘り込まれている。周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長166cm、短径87cm、東側の円筒形部分の深さ90cm、西側の深さ67cmを測り、東側の円筒形部分の底面の標高は324.9mである。堆積土は5層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P5(SK154)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径83cm、短径77cm、深さ71cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は記録前に完掘したため、不明である。

P6(SK38)は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径90cm、深さ49cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は8層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図86、写真186)

本建物跡からは、縄文・弥生土器と剥片がすべてのピットからそれぞれ計118点と計36点出土した。このうち、縄文・弥生土器9点を図示した。

図86-1~8は深鉢である。1~5・7・8は体部、6は口縁部である。6は内傾し、口唇部が面取りされている。1は磨消縄文で雲形文が描かれる。2は工字文が、3は磨消縄文による工字文が、4~6は磨消縄文による文様が、7・8は沈線による文様が描かれる。1・3~5・8には炭化物が付着する。

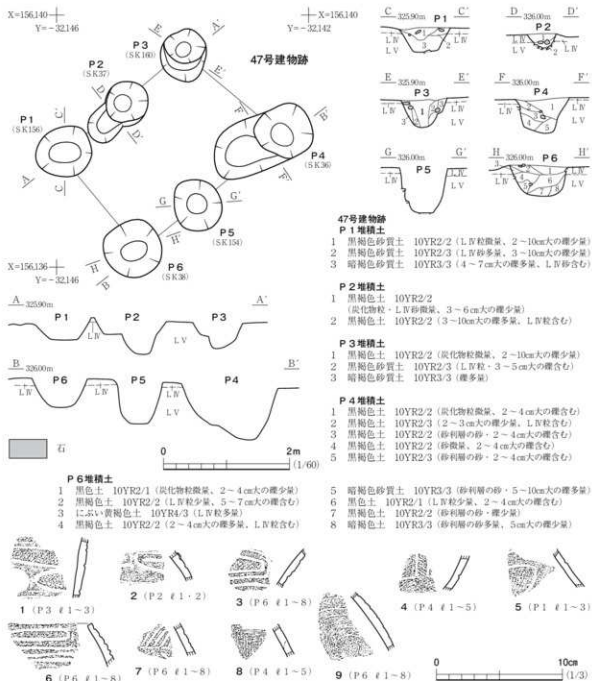


図86 47号建物跡・出土遺物

同図9は、壺の体部である。渦文が描かれたのち、交互ミガキが施される。

1は縄文時代晩期の大洞C2式、2～9は弥生時代前期～中期後葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は2間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と推測される。

(能登谷)

48号建物跡 SB48

遺 構 (図87、写真71)

本遺構は調査区南半部のG16グリッドに位置し、平坦面の北側縁辺部に立地している。LV上面において検出した。11・13号建物跡、91・100・101・537・588・926号土坑、G16P2・4・7・14・18・21・22と重複し、13号建物跡より古く、11号建物跡、91・926号土坑、G16P21・22より新しく、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は6基の柱穴(P1～6)から構成される。桁行1間、梁行1間で、両妻の中央外側に棟持柱の柱穴(P1・4)をもち、平面形は北西-南東主軸の亀甲形である。規模は、全長(P1-4間)5.7m、桁行長(P2-3間)4.0m、梁行長(P2-6間)3.1mを測り、全体の面積は14.1㎡、長方形部分(P2・3・5・6で囲まれる部分)の面積は11.5㎡を測る。棟持柱の突出長は、東側のP4が108cmを測り、西側のP1よりも33cm長い。

P1(SK98)は、平面形が不整楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、西壁から南壁の上部は緩く立ち上がる。規模は、長径86cm、短径68cm、深さ37cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2は柱抑えの土と推測される。

P2(SK99)は、平面形が楕円形気味の円形で、周壁は直立気味ないしは急外傾して立ち上がる。規模は、長径60cm、短径55cm、深さ48cmを測り、底面の標高は325.1mである。堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土で、柱痕の幅は16cmを測る。

P3(SK589)は、平面形が楕円形で、周壁は急外傾して立ち上がる。規模は、長径83cm、短径70cm、深さ31cmを測り、底面の標高は325.4mである。堆積土は5層に分層され、ℓ1・2は柱痕、ℓ3～5は柱抑えの土で、柱痕の幅は12cmを測る。

P4は、平面形が円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、径57cm、深さ36cmを測り、底面の標高は325.3mである。堆積土は2層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2は柱抑えの土と推測される。

P5(SK163)は、平面形が隅丸長方形で、周壁は外反気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長軸長86cm、短軸長78cm、深さ47cmを測り、底面の標高は325.2mである。堆積土は4層に分層され、いずれも柱抜き取り後の堆積土と推測される。

P6(G16P1)は、平面形が楕円形ないしは円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち

上がる。規模は、長径(遺存値)58cm、短径57cm、深さ32cmを測り、底面の標高は325.2mである。遺構内には黒褐色土が堆積していた。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

遺物 (図87、写真186)

本建物跡からは、縄文・弥生土器がP4を除くピットから計28点、剥片がP4・5を除くピットから計10点出土した。このうち、弥生土器2点を図示した。

図87-1・2は、壺の体部である。いずれも磨消縄文によって文様が描かれ、縄文はいずれも

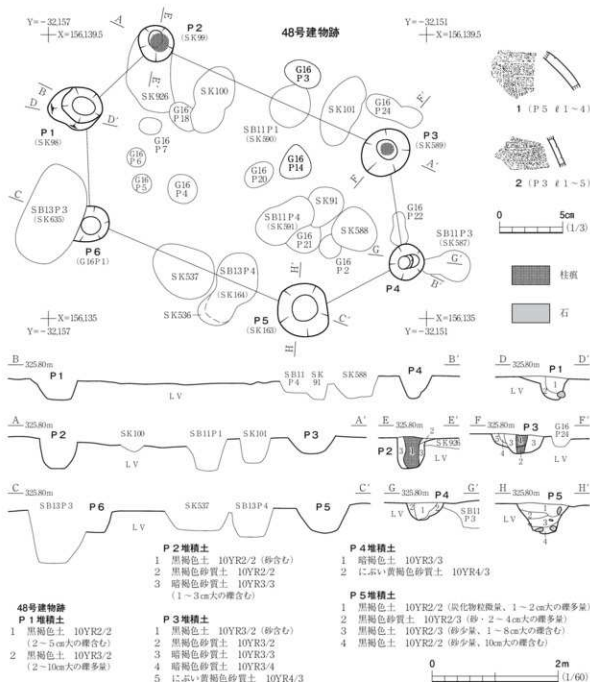


図87 48号建物跡・出土遺物

細縄文である。弥生時代中期中葉に位置づけられる。

まとめ

本遺構は1間×1間の中型の建物跡である。両妻側に棟持柱をもつことから、全体の平面形は亀甲形を呈し、梁からの棟持柱の突出長は東側の方が長いという特徴がある。本遺構の時期は出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い91・926号土坑とG 16 P 21・22の時期不明、本遺構より新しい13号建物跡の弥生時代中期後葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

49号建物跡 S B 49

遺 構 (図88、写真72)

本遺構は調査区北半部のE・F 11グリッドに位置し、平坦面の東側縁辺部に立地している。L V上面において検出した。799・800号土坑、E 11 P 13～15、F 11 P 6と重複し、799号土坑より古く、その他の遺構との新旧関係は不明である。

本遺構は4基の柱穴(P 1～4)から構成される。桁行1間、梁行1間で、平面形は北東-南西主軸の長方形である。規模は、桁行長(P 3-4間)3.3m、梁行長(P 1-4間)2.6mを測り、面積は8.4㎡を測る。

P 1は、平面形が楕円形ないしは円形と推測され、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径54cm、短径(遺存値)48cm、深さ39cmを測り、底面の標高は325.3mである。遺構内には黒

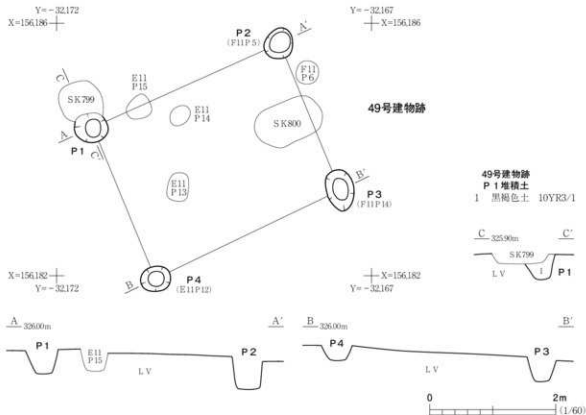


図88 49号建物跡

褐色土が堆積していた。

P2(F11P5)は、平面形が楕円形で、周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径51cm、短径45cm、深さ52cmを測り、底面の標高は325.0mである。遺構内には黒褐色土が堆積していた。

P3(F11P14)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がる。規模は、長径67cm、短径44cm、深さ39cmを測り、底面の標高は325.1mである。遺構内には黒褐色土が堆積していた。

P4(E11P12)は、平面形が楕円形で、周壁は直線的に急外傾して立ち上がっている。規模は、長径49cm、短径40cm、深さ24cmを測り、底面の標高は325.5mである。遺構内には黒褐色土が堆積していた。

なお、遺構範囲内において踏み締まり範囲や炉跡は認められなかった。

本建物跡からは、遺物は出土しなかった。

まとめ

本遺構は1間×1間の長方形を呈する小型の建物跡である。各柱穴は短径が40cm台と小型で、柱穴の底面の標高は西側のP1・4が東側のP2・3よりも若干高位に位置する。本遺構の時期は不明である。本遺構より新しい799号土坑が時期不明であることも矛盾しない。(能登谷)

第5節 土 坑

遺 構

本報告書で土坑として報告する遺構は711基である。現地における遺構検出の際には、検出順にSK01からSK926まで遺構番号を付したが、各遺構の調査を進める中で、木の根等の後世の攪乱と判断したSK104・482・490・498・577・593・712・714の8基は欠番とした。この他、2号土坑など197基は本報告の第4節で報告した建物跡を構成する柱穴、706号土坑など3基は住居跡に伴う穴、596号土坑など7基は住居跡の外周溝であることが調査中及び調査後の整理作業で判明したが、検出時に付した「SK02」などの遺構番号は削除せずに、「SB31P3(SK02)」などのように新たな遺構番号とともに記し、それぞれ住居跡・建物跡の項で扱った。

上記以外の711基の土坑の内訳は、建物跡を構成する柱穴と推測されるものが223基、土坑墓が11基、その可能性があるもの5基、木炭焼成土坑3基、廃棄土坑2基、貯蔵穴1基、溝状のもの6基、その他(柱穴の可能性が有るものも含む)が460基である。平面形は、円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形・隅丸三角形・溝状・弧状・鉤形・不整形に大別される。円形及び隅丸方形は長短比(短軸長/長軸長)＝約0.9以上のものとし、それ以下を楕円形・長方形とした。さらに、楕円形については長短比約0.65を目安にそれ以上を楕円形、それ以下を長楕円形と細分した。なお、各遺構の平面形・規模・他の遺構との重複関係・性格・出土遺物点数については表3に一覧として示した。

以下において、特徴的な土坑について記述する。土坑出土遺物と各土坑の時期については、後述

する土坑出土遺物の項目を参照されたい。

4号土坑 SK04 (図89、写真74)

本遺構は調査区南部のI16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形気味の円形である。周壁はLIVで直線的に急外傾して立ち上がり、底面はLV(砂層)でほぼ平坦である。遺構内堆積土は5層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。壁際から順次堆積している。全体的に礫の混入は少なく、ℓ4・5にはLIVが多く含まれている。

本遺構の性格は不明である。なお、同様の堆積状況を示す遺構に1・6号土坑がある。(能登谷)

10号土坑 SK10 (図89、写真74)

本遺構は調査区南部のI16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形である。周壁はLIVで直線的に急外傾して立ち上がり、底面はLV(砂利層)で緩く湾曲している。遺構内堆積土は4層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。底面全体が埋没した後に壁際から順次堆積している。ℓ3はLIV塊を多く含み、他の層はLV起源の礫を含んでいる。

本遺構の性格は不明である。なお、似たような堆積状況を示す遺構に108・198・431・511号土坑がある。(能登谷)

12号土坑 SK12 (図90、写真75)

本遺構は調査区南部のI16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形である。周壁・底面ともLIVで、周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、人為堆積土と推測される。ℓ1から弥生土器の甕の大型片が内面を上に向けて横位の状態で出土し、その上から底部付近の破片が出土した。この大型片は口縁部から体部下半に至るもので、口縁部が北側を向いていた。また、南西部のℓ1上部には45×29×10cmの扁平な礫が側面を下にして北西-南東主軸でやや南西に傾いて立っていた。

本遺構の性格は不明である。(能登谷)

14号土坑 SK14 (図90、写真75)

本遺構は調査区南部のI17グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形である。周壁上部はLIV、中央部はLV(砂層)、下部から底面はLV(砂利層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ1は廃絶後の堆積土、ℓ2は柱痕、ℓ3・4は柱抑えの土と推測される。ℓ3・4には多量のLIV粒とLV起源の砂利が含まれている。

本遺構は掘立柱の柱穴である。なお、似たような堆積状況を示す遺構に91・95・305・382号土坑等がある。(能登谷)

20号土坑 SK20 (図91、写真76)

本遺構は調査区南部のI17グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の不整長方形である。周壁上部はLIV、下部から底面はLV(砂利層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、深さ29cmを測る。底面には平面形が円形ないしは不整形の大小4基の掘り込みが主

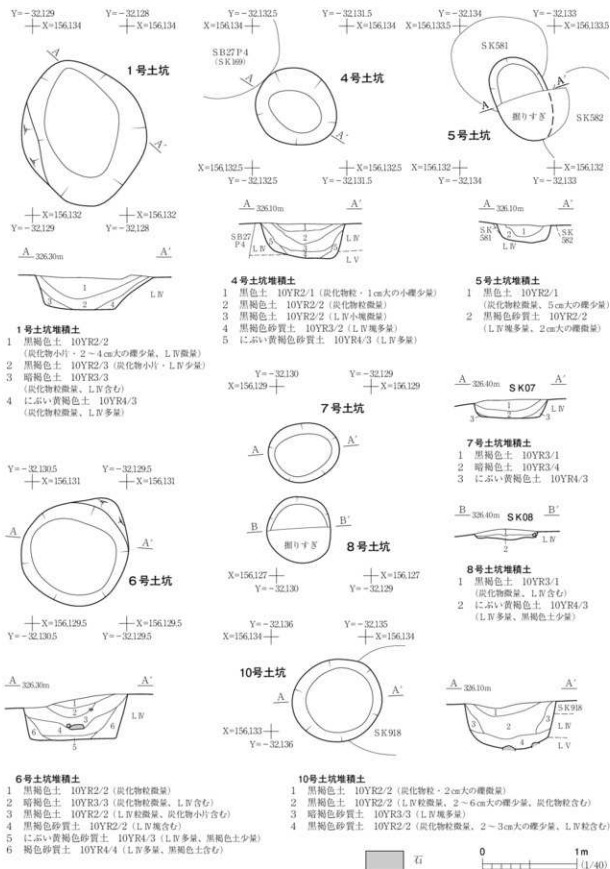


図89 1・4~8・10号土坑

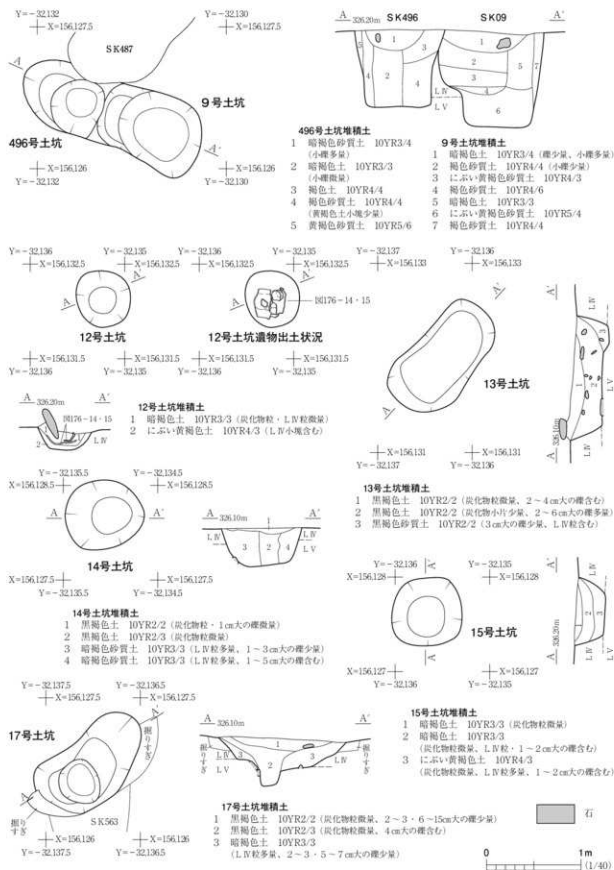


図90 9・12・15・17・496号土坑

軸に沿って存在する。東端の掘り込みは径36cmで、底面からの深さ14cm、検出面からの深さ40cmを測る。その西隣の掘り込みは周壁が直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、規模は、長径44cm、短径37cm、底面からの深さ40cm、検出面からの深さ65cmを測る。中央部の掘り込みは周壁が直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、規模は径60cmで、底面からの深さ76cm、検出面からの深さ110cmを測る。西側の掘り込みは周壁の立ち上がりは緩く、規模は、長軸長94cm、短軸長46cm、底面からの深さ12cm、検出面からの深さ50cmを測る。遺構内堆積土は5層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。ℓ3・5には礫が多く含まれている。

本遺構の底面のそれぞれの掘り込みは掘立柱の柱穴と推測される。(能登谷)

25号土坑 SK 25 (図91、写真76)

本遺構は調査区南部のH16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形である。周壁はLⅣで直線的に急外傾して立ち上がり、底面は緩く湾曲している。遺構内堆積土は5層で、ℓ1～3は柱抜き取り後の堆積土、ℓ4・5は柱抑えの土と推測される。

本遺構は掘立柱の柱穴である。なお、似たような堆積状況を示す遺構に89・93・111・119・330・647号土坑などがある。(能登谷)

33号土坑 SK 33 (図92、写真77)

本遺構は調査区南部のI16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で、周壁・底面ともLⅣである。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層で、ℓ1は柱痕、ℓ2・3は柱抑えの土であるが、ℓ1は上部がしだいに広がっていることから柱は抜き取られているものと推測される。また、ℓ2には礫が多く含まれている。

本遺構は、掘立柱の柱穴である。なお、似たような堆積状況を示す遺構に、63・312号土坑などがある。(能登谷)

50号土坑 SK 50 (図93、写真78)

本遺構は調査区南部のG・H17グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の隅丸長方形で、東側が円筒形に掘り込まれている。周壁は西側上部ではLⅣであるが、それ以外の周壁及び底面はLⅤ(礫を少量含む砂層)である。周壁は円筒形部分も含めて直線的に急外傾して立ち上がり、西側の底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。ℓ1から石皿が裏面に上に向け、斜位の状態で出土した。

本遺構は掘立柱の柱穴と推測される。(能登谷)

57号土坑 SK 57 (図94、写真79)

本遺構は調査区南部のJ15グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北西-南東主軸の隅丸長方形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直線的に外傾し、底面はやや起伏が認められ、両端から中央に向けて緩く上昇している。遺構内堆積土は2層で、人為堆積土と推測される。

本遺構は、長軸長が2.2mを超える規模を有する。遺跡内の形態が類似する他の土坑とともに土坑墓の可能性もある。(能登谷)

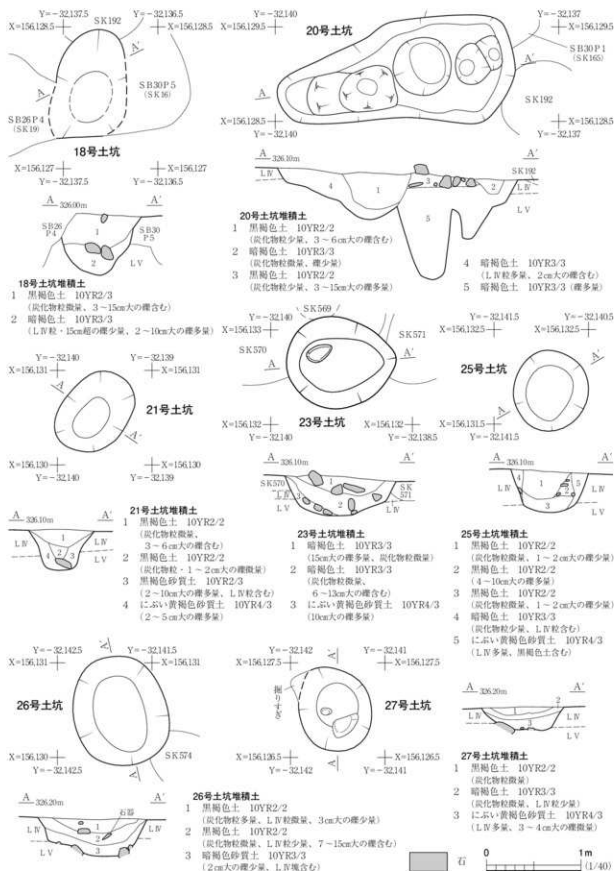


图91 18·20·21·23·25~27号土坑

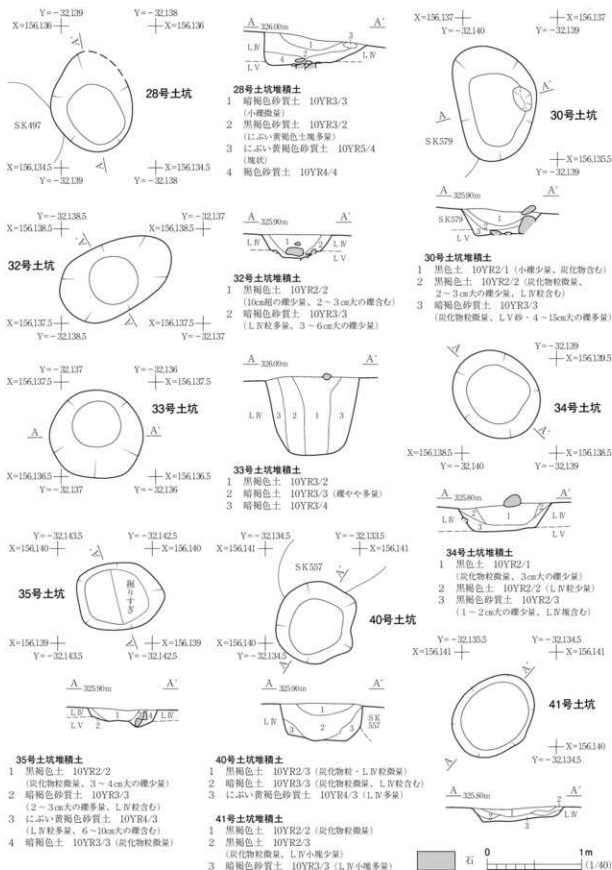


図92 28・30・32・35・40・41号土坑

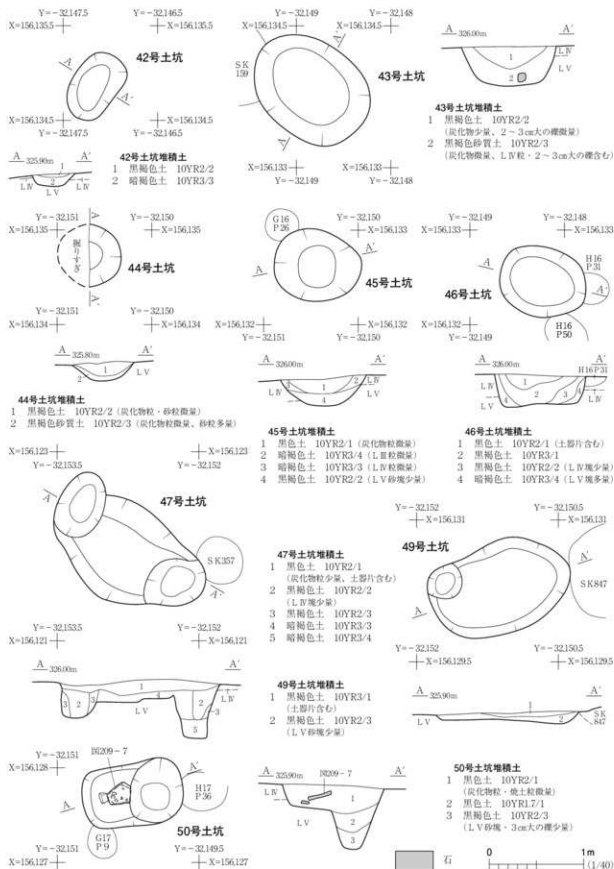


図93 42~47・49・50号土坑

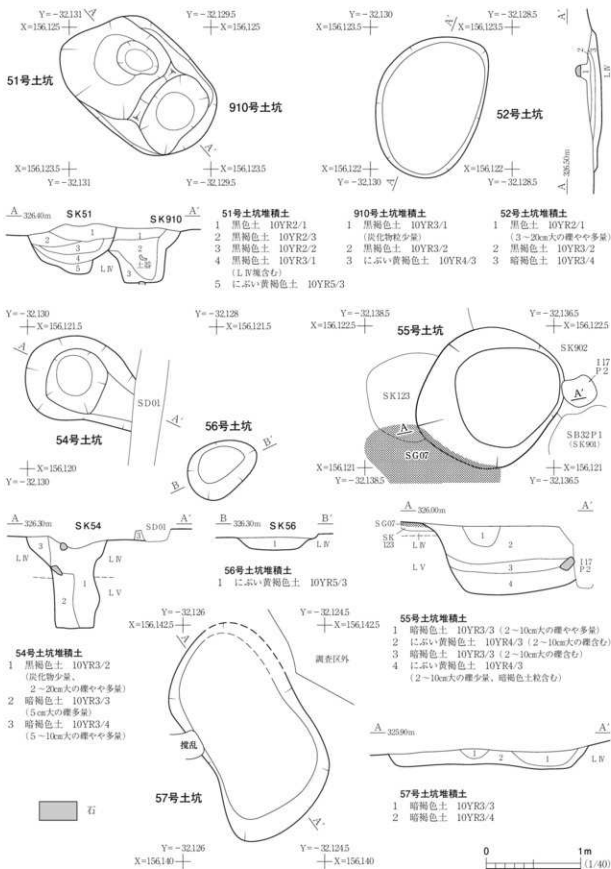


図94 51・52・54~57・910号土坑

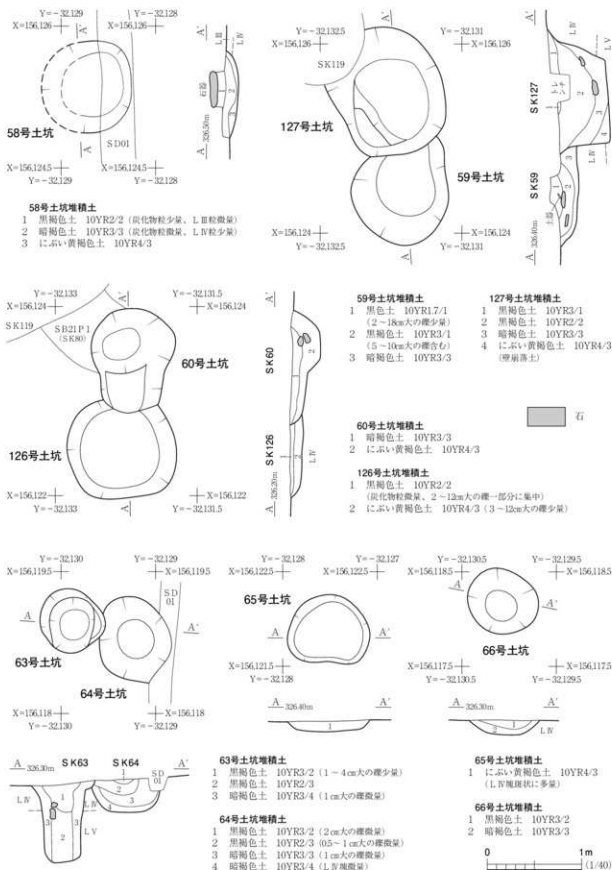


図95 58~60・63~66・126・127号土坑

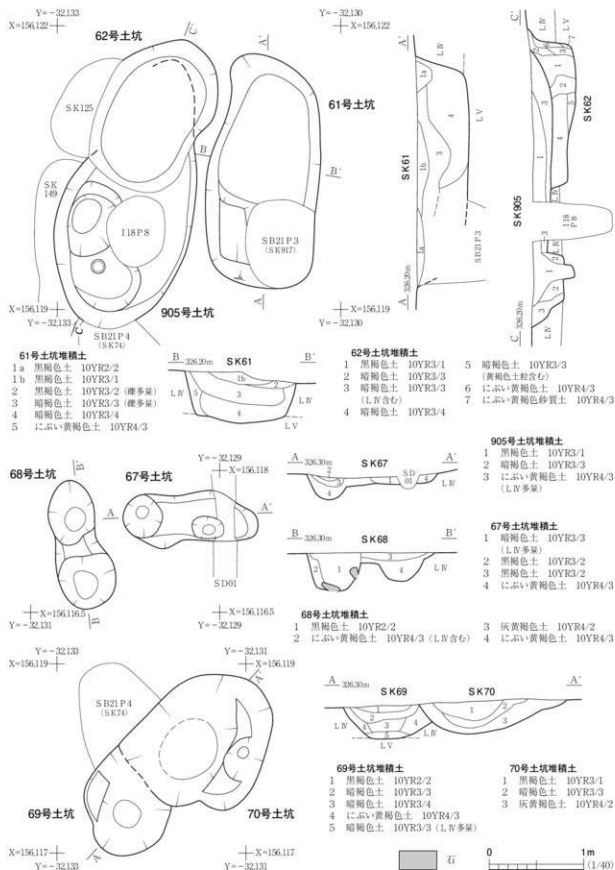


図96 61・62・67・70・905号土坑

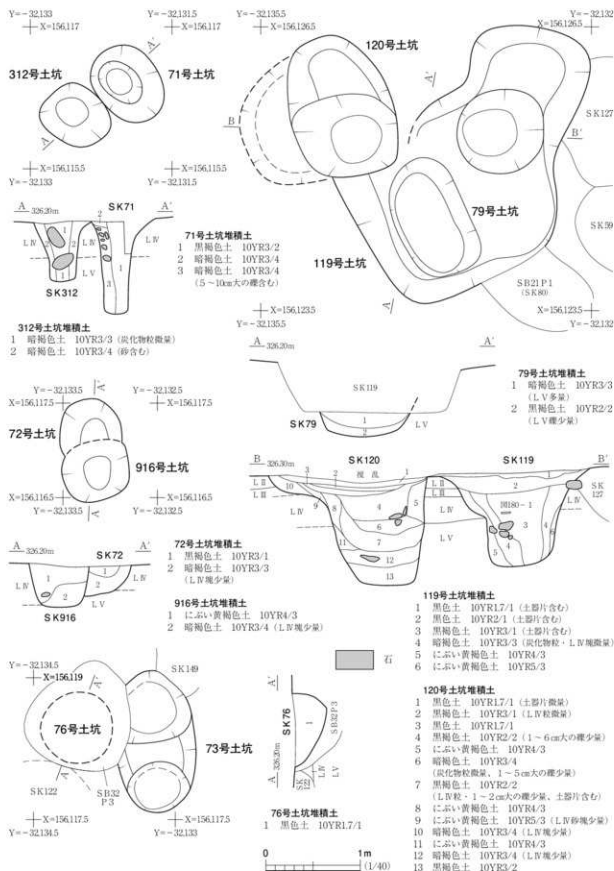


図97 71・73・76・79・119・120・312・916号土坑

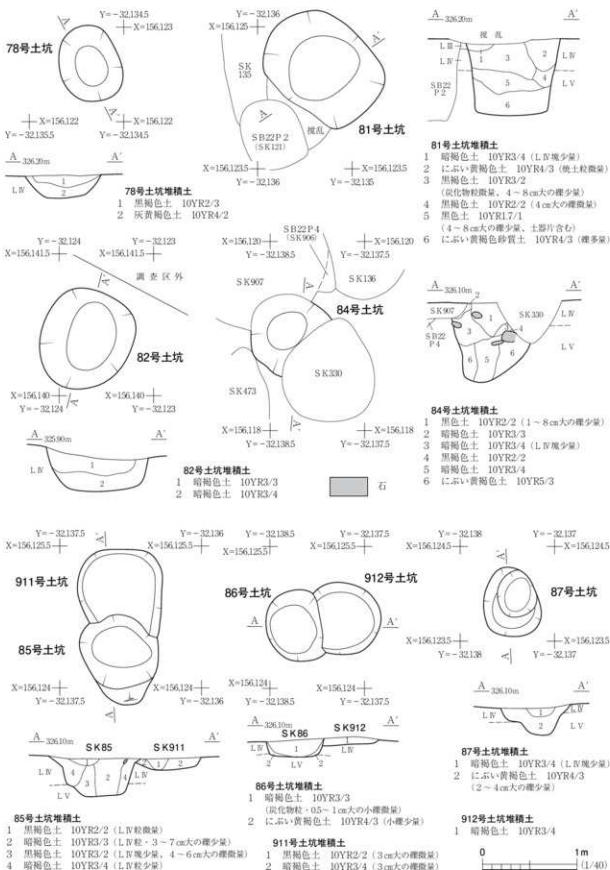


図98 78・81・82・84・87・911・912号土坑

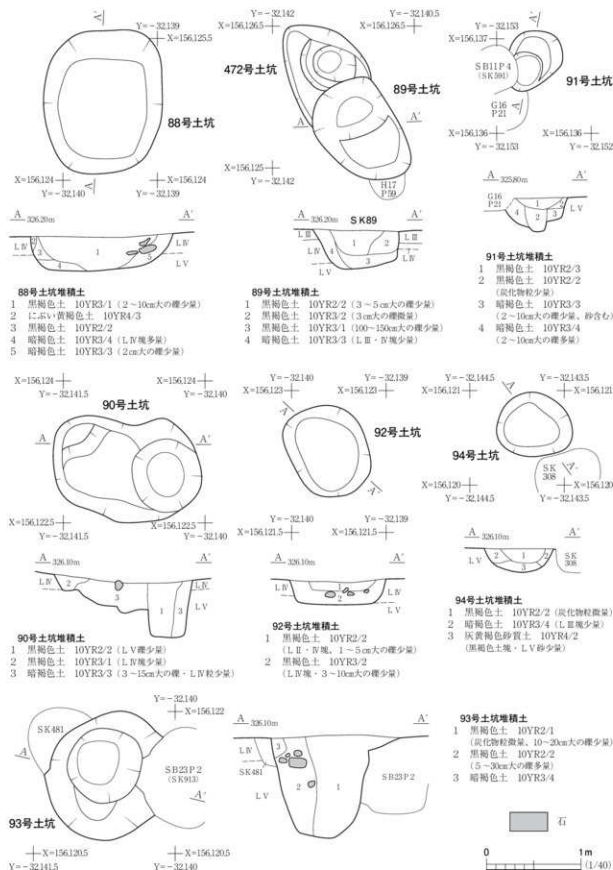


図99 88~94・472号土坑

105号土坑 SK 105 (図100、写真83)

本遺構は調査区南部のH 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形で、周壁は南西側上部ではL IVであるが、それ以外の周壁及び底面はL V (礫を少量含む砂層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は3層に分層され、ℓ 1は柱痕、ℓ 2・3は柱抑えの土である。

本遺構は掘立柱の柱穴と考えられ、似たような堆積状況を示す遺構に139号土坑がある。(能登谷)

110号土坑 SK 110 (図101、写真84)

本遺構は調査区南部のJ 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形で、周壁はL IV、底面はL V (砂利層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は緩く湾曲している。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3・4は柱抑えの土、ℓ 5は柱設置時に柱の高さ調整のために底面上に埋めた土と推測される。

本遺構は、掘立柱の柱穴と考えられる。なお、似たような堆積状況を示す遺構として、533号土坑がある。(能登谷)

114号土坑 SK 114 (図101)

本遺構は調査区南部のI 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形と推測され、周壁は北壁及び西壁ではI 18 P 6・7堆積土で、他は底面も含めてL IVである。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、東壁及び南壁の上部では立ち上がりが緩くなっている。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は1層で、人為堆積土と推測される。ℓ 1上部から土器片が多く出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

117号土坑 SK 117 (図101、写真84)

本遺構は調査区南部のJ 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の長楕円形と推測され、周壁及び底面はL IVである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、両端は窪んでいる。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ 1は自然堆積土の可能性もあるが、いずれも人為堆積土と推測される。

本遺構は本来の長軸長が2 mを超えると考えられ、遺跡内の形態が類似する土坑とともに土坑墓の可能性もある。(能登谷)

123号土坑 SK 123 (図102、写真85)

本遺構は調査区南部のI 17グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形と推測され、周壁上部はL IV、周壁下部から底面はL V (砂利層)である。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上部では緩く立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ 1～3は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 4・5は柱抑えの土である。ℓ 1には小型の礫が多く含まれ、ℓ 2とℓ 3の境付近には大小の礫が集中している。また、ℓ 4には長さ10～40cmの礫が多く含まれている。

本遺構は掘立柱の柱穴と考えられる。柱抑えの土に多くの礫が含まれていることが特徴で、似た

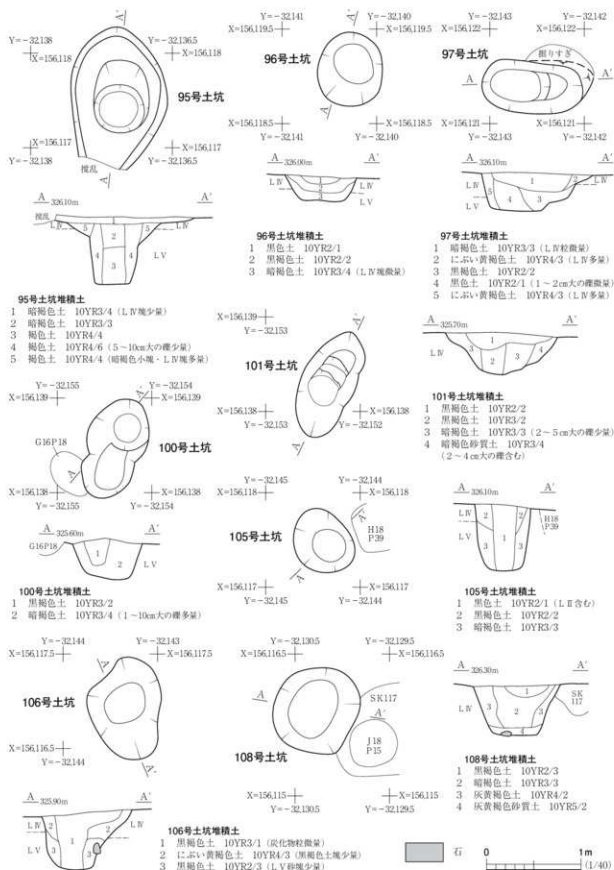


图100 95~97·100·101·105·106·108号土坑

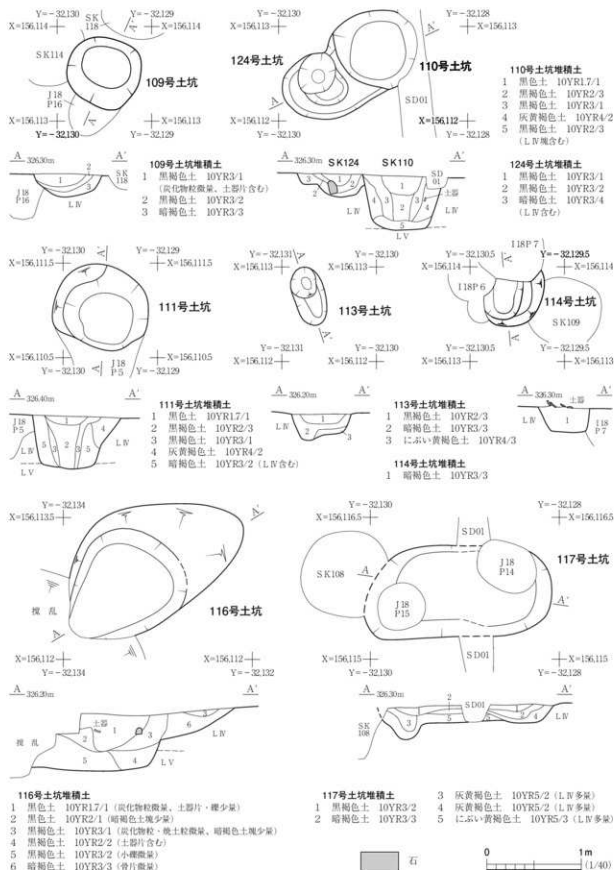


図101 109～111・113・114・116・117・124号土坑

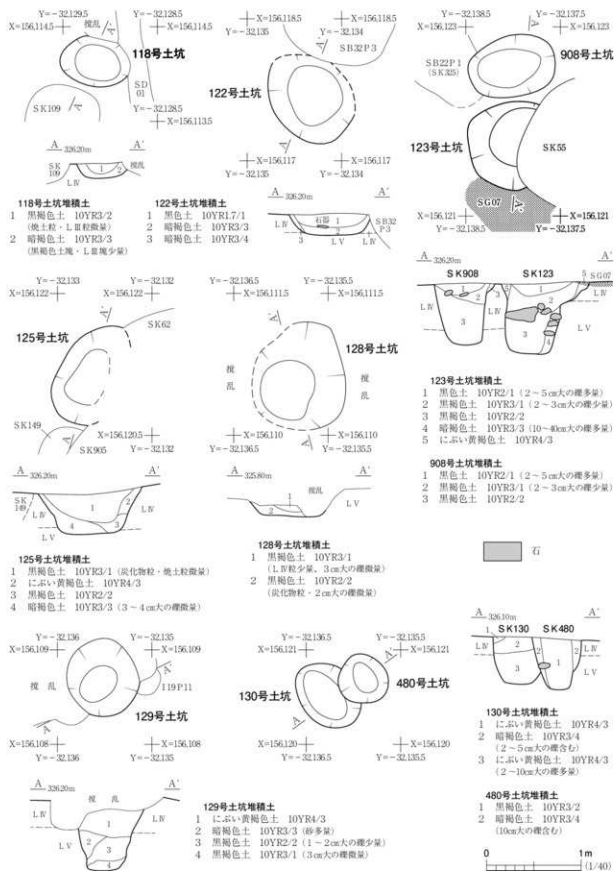


図102 118・122・123・125・128・130・480・908号土坑

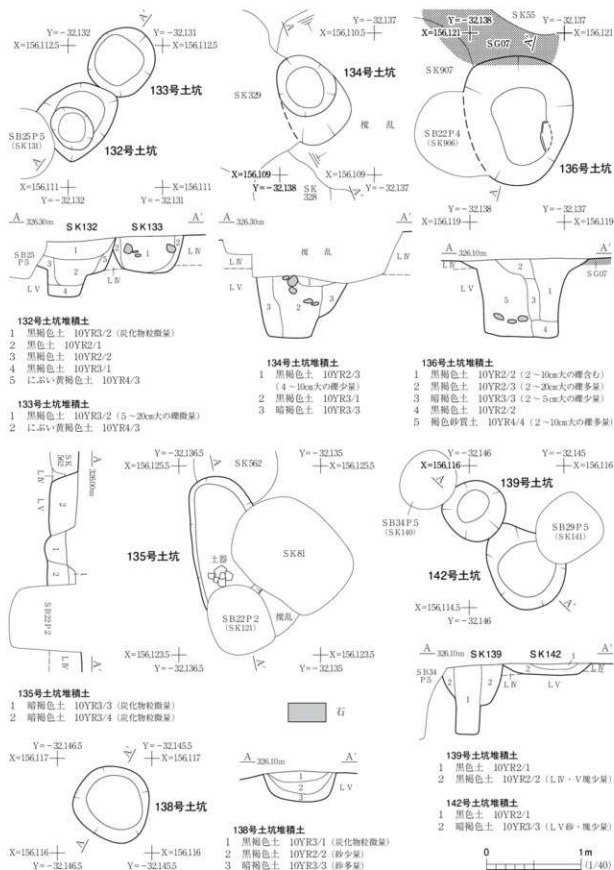


図103 132~136・138・139・142号土坑

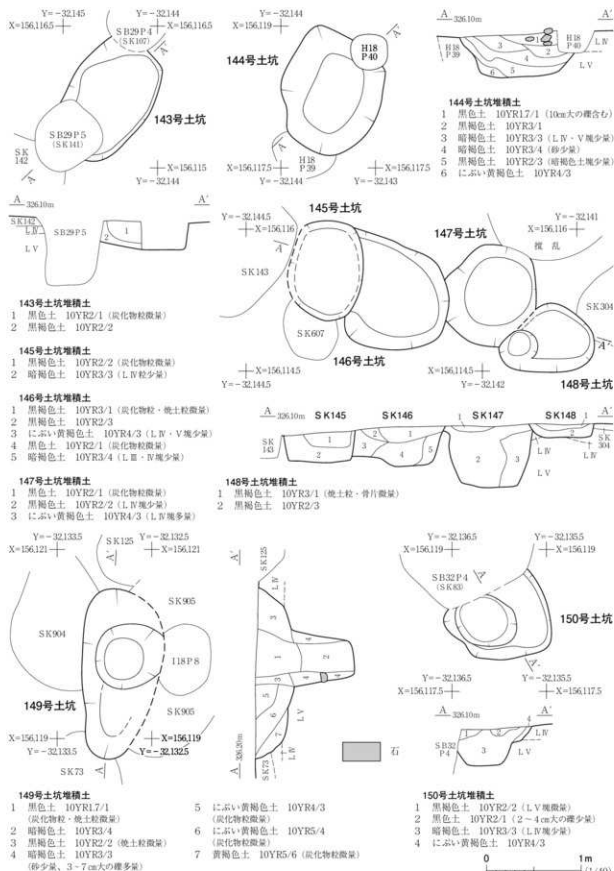


図104 143~150号土坑

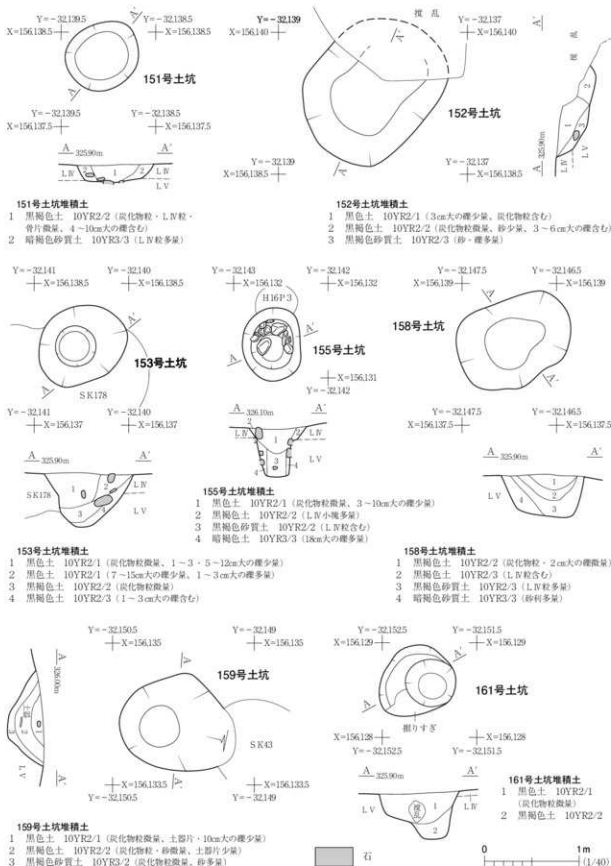


図105 151~153・155・158・159・161号土坑

ような状況を示す遺構に155号土坑がある。

(能登谷)

155号土坑 SK 155 (図105、写真88)

本遺構は調査区南部のH 16グリッドに位置する。平面形は南北主軸の楕円形で、周壁上部はL IVで、周壁下半から底部はL V (砂利層)である。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、上部では緩く立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 3は柱痕、ℓ 2・4は柱抑えの土である。ℓ 3には大小の礫が多く含まれる。

本遺構は掘立柱の柱穴である。柱抑えの土に多くの礫が含まれていることが特徴で、似たような状況を示す遺構に123号土坑がある。

(能登谷)

172号土坑 SK 172 (図106、写真88)

本遺構は調査区南部のG 17グリッドに位置する。平面形は北東-南西主軸の不整楕円形で、西壁中央部が円筒形に掘り込まれている。周壁は重複する遺構(372・776・877号土坑、G 17 P 19)の堆積土ないしはL IVで、直線的に急外傾して立ち上がる。底面はL V (砂層)で、両端が窪んでいる。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ 1は自然堆積土、ℓ 2は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 3～5は柱抑えの土と推測される。ℓ 1上部から弥生土器の壺がやや底面を上に向けた状態で出土し、長さ1～4cmの緑色の剝片も一部で重なり合いながら合計15点出土した。

本遺構は掘立柱の柱穴であるが、ℓ 1が堆積している部分に関しては、異なる別の遺構の可能性もある。

(能登谷)

201号土坑 SK 201 (図109、写真91)

本遺構は調査区南部のK 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の楕円形で、周壁及び底面はL IVである。周壁は東壁では緩やかに立ち上がるが、その他では直線的に急外傾して立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。出土層位は不明であるが、堆積土中から接合可能な表面が光沢のある石片が2点出土したことから、このうちの1点を化学分析に供したところ、赤鉄鉱(鏡鉄鉱)であることが判明した(付章第2節参照)。本遺構の性格は不明である。

(能登谷)

208号土坑 SK 208 (図109、写真91)

本遺構は調査区南部のJ 18・19グリッドに位置し、平坦面に立地する。検出面において、黒色土の円形プランの東から南にかけて長さ10～18cmの礫が多く認められた。平面形は東西主軸の不整楕円形で、周壁及び底面はL IVである。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、上部では緩く立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は1層で、長さ8～21cmの礫を多く含み、柱抑えの土と推測される。

本遺構は掘立柱の柱穴である。遺構内の柱抑えの土に多くの礫が含まれ、その上面にも多くの礫を配していたことがうかがえる。

(能登谷)

211号土坑 SK 211 (図110、写真92)

本遺構は調査区南部のJ 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は不整隅丸方形で、

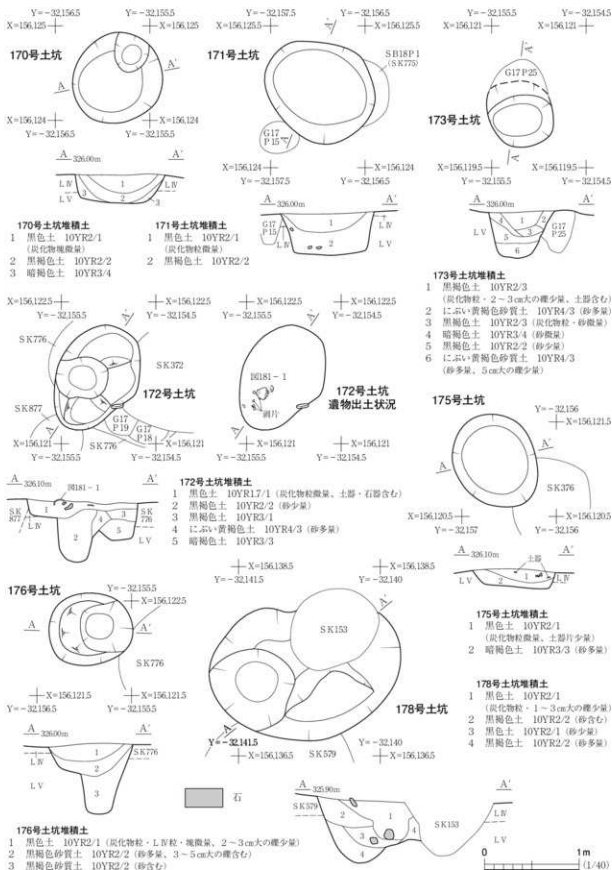


图106 170~173·175·176·178号土坑

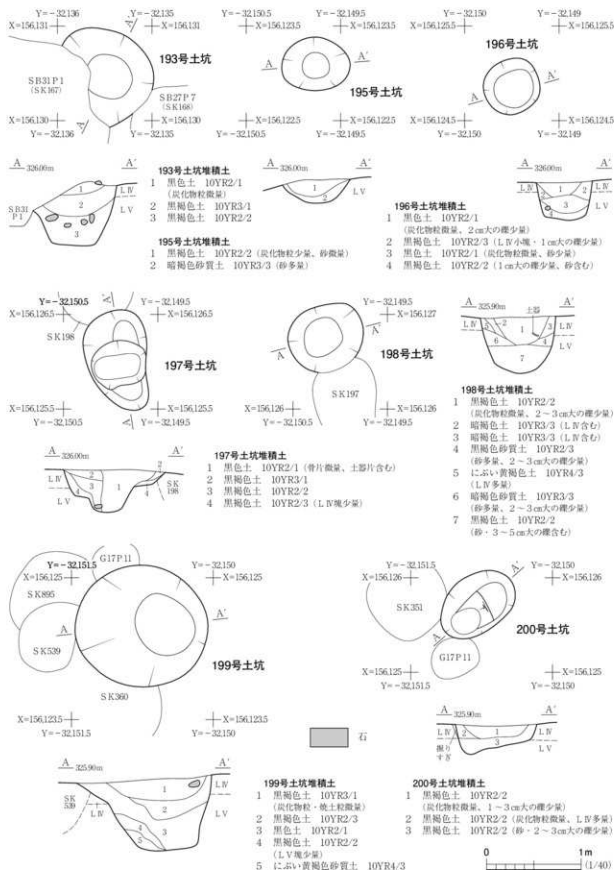


図108 193・195~200号土坑

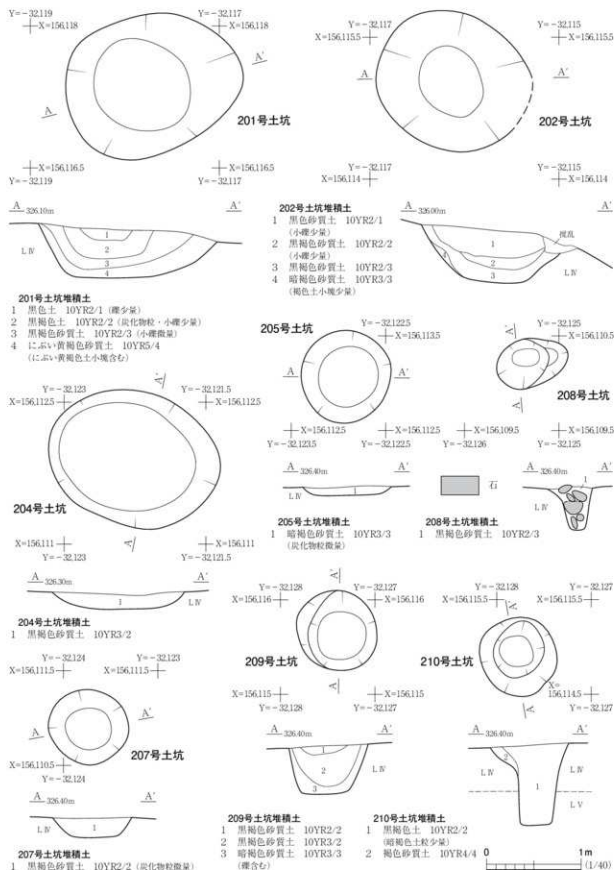


図109 201・202・204・205・207～210号土坑

西側が円筒形に深く掘り込まれていることから、東側に段をもつ。周壁上半はLⅣで、周壁下半から底面はLⅤ(砂利層)である。周壁上半は直線的に急外傾して立ち上がり、下半では直立気味に立ち上がる。底面は平坦で、東側の段との比高は22cmを測る。遺構内堆積土は3層で、自然堆積土と推測される。本遺構は掘立柱の柱穴である。(能登谷)

212号土坑 SK 212 (図110、写真92)

本遺構は調査区南部のJ 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で、周壁は重複する遺構(613・687号土坑)の堆積土ないしはLⅣで、周壁の下部から底面はLⅤ(砂利層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は6層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

213号土坑 SK 213 (図110、写真92)

本遺構は調査区南部のJ・K 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は急外傾して立ち上がり、東壁では緩く立ち上がる。底面は部分的に起伏が認められる。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。ℓ2下部から、底部を欠損した縄文土器の深鉢が口縁部を南東に向けた横倒しの状態で潰れて出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

214号土坑 SK 214 (図110、写真92)

本遺構は調査区南部のJ 19グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直線的に緩く外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2は人為堆積土と推測される。ℓ2には礫が少量含まれている。

本遺構は長軸長が1.5mで小型であるものの、平面形が長楕円形を呈し、遺跡内の形態が類似する土坑とともに土坑墓と推測される。(能登谷)

245号土坑 SK 245 (図113、写真96)

本遺構は調査区南部のI 19グリッドに位置し、平坦面に立地する。南東に隣接して246号土坑が存在する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2は人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約1.9mで、平面形が長楕円形を呈し、近接する246～248号土坑と同様に土坑墓と推測される。(能登谷)

246号土坑 SK 246 (図113、写真96)

本遺構は調査区南部のI 19グリッドに位置し、平坦面に立地する。北西に隣接して245号土坑が存在し、南東約0.2mに247号土坑が存在する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2は人為堆積土と推測される。ℓ1から管玉1点出土した。

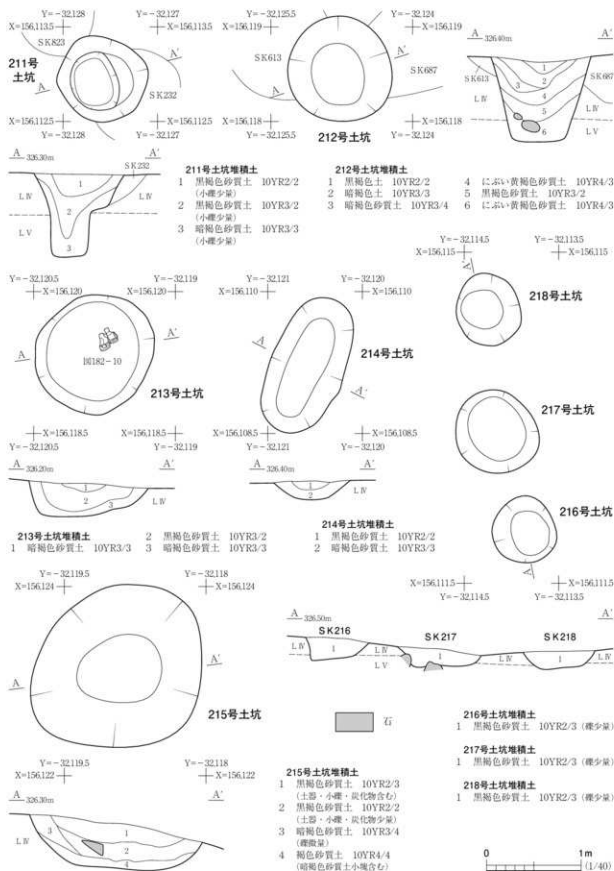


図110 211~218号土坑

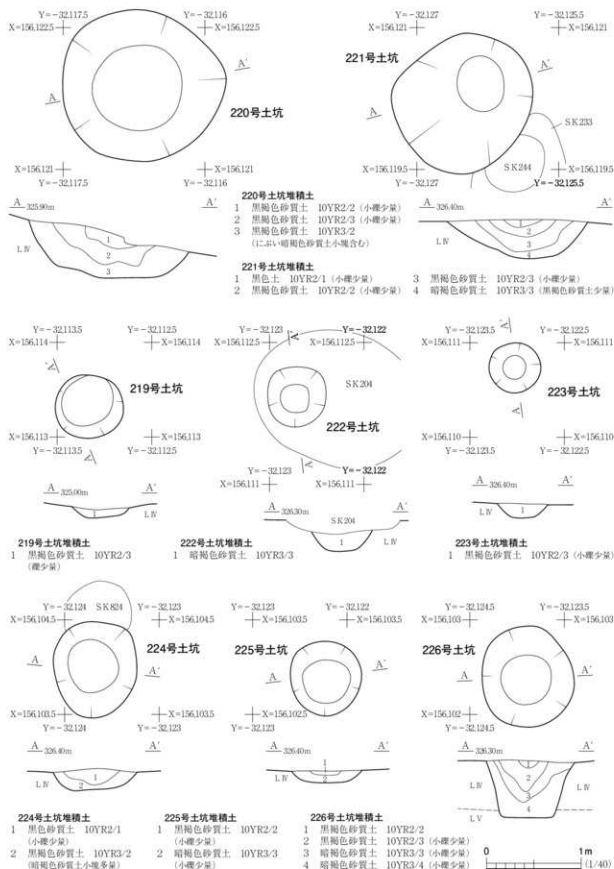


図111 219～226号土坑

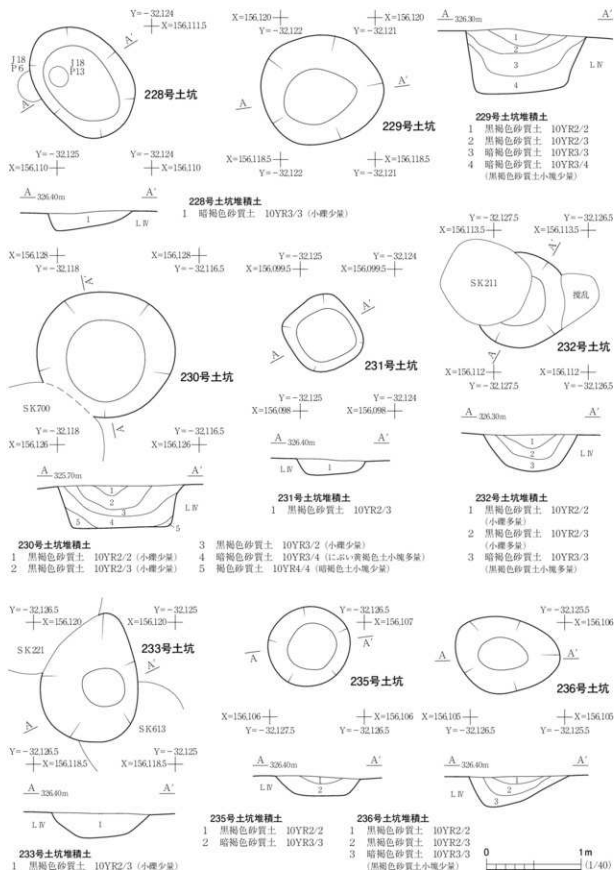


图112 228~233·235·236号土坑

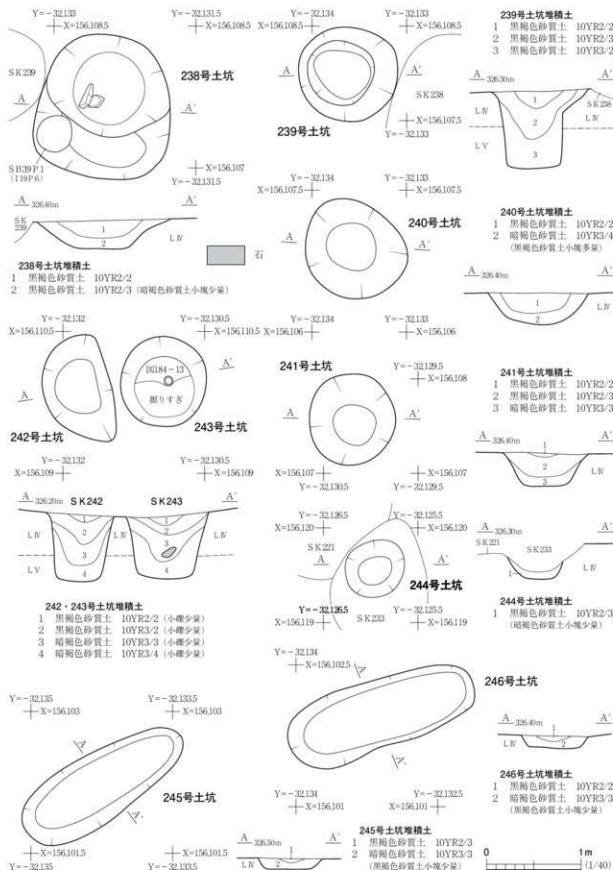


図113 238～246号土坑

本遺構は長軸長が約2.0mで、平面形が長楕円形を呈し、管玉が出土していることから、土坑墓と推測される。(能登谷)

247号土坑 SK 247 (図114、写真96)

本遺構は調査区南部のI 19グリッドに位置し、平坦面に立地する。北西約0.2mに246号土坑、南東約0.6mに248号土坑が存在する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2は人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が2mを超え、平面形が長楕円形を呈し、近接する245・246・248号土坑と同様に土坑墓と推測される。(能登谷)

248号土坑 SK 248 (図114、写真96)

本遺構は調査区南部のI 19・20グリッドに位置し、平坦面に立地する。北西約0.6mに247号土坑が存在する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが、北東部には深さ約10cmのビットが2基あり、北壁際中央部には深さ約40cmのビットが存在する。本遺構とこれらのビットの同時性は不明である。遺構内堆積土は2層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2は人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約2.4mで、平面形が長楕円形を呈し、近接する245～247号土坑と同様に土坑墓と推測される。(能登谷)

252号土坑 SK 252 (図114、写真96)

本遺構は調査区南部のI・J 19グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は外傾して立ち上がる。底面は緩く湾曲し、やや起伏が認められる。遺構内堆積土は3層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2・3は人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約3.1mで、平面形が長楕円形を呈し、近接する245～248号土坑と同様に土坑墓と推測される。(能登谷)

304号土坑 SK 304 (図120、写真102)

本遺構は調査区南部のH・I 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は不整形で、周壁上部ではLⅣ、周壁下部から底面はLⅤ(砂利層)である。周壁は直立気味に立ち上がり、上部では緩く立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層に分層され、ℓ1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ2・3は柱抑えの土と推測される。本遺構は掘立柱の柱穴である。(能登谷)

370号土坑 SK 370 (図125、写真108)

本遺構は調査区南部のG 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の隅丸長方形で、周壁はLⅤ(砂層)を重ねる遺構の堆積土である。周壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。底面中央部からℓ2上面にかけて大型土器片が割れた状態で出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

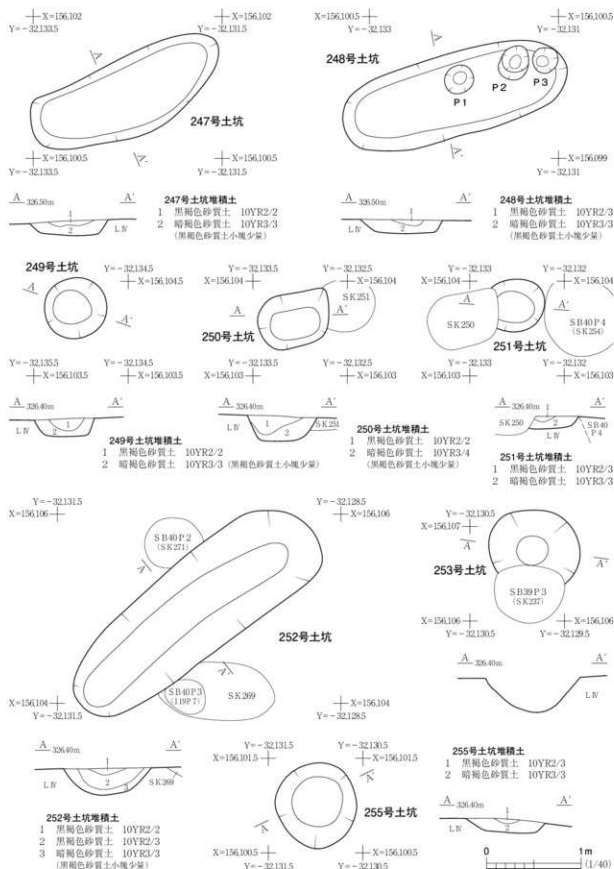


図114 247～253・255号土坑



図116 266～270・272～274号土坑

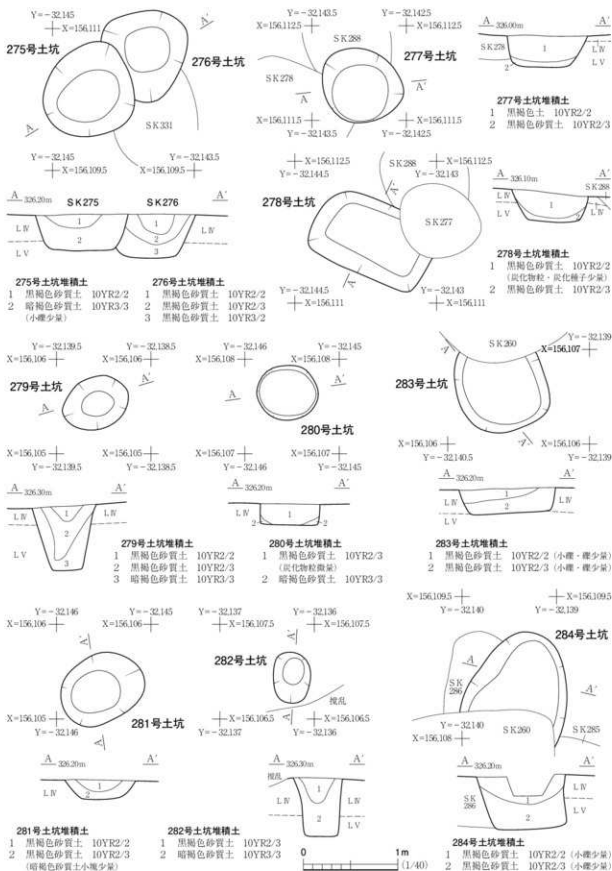


図117 275~284号土坑

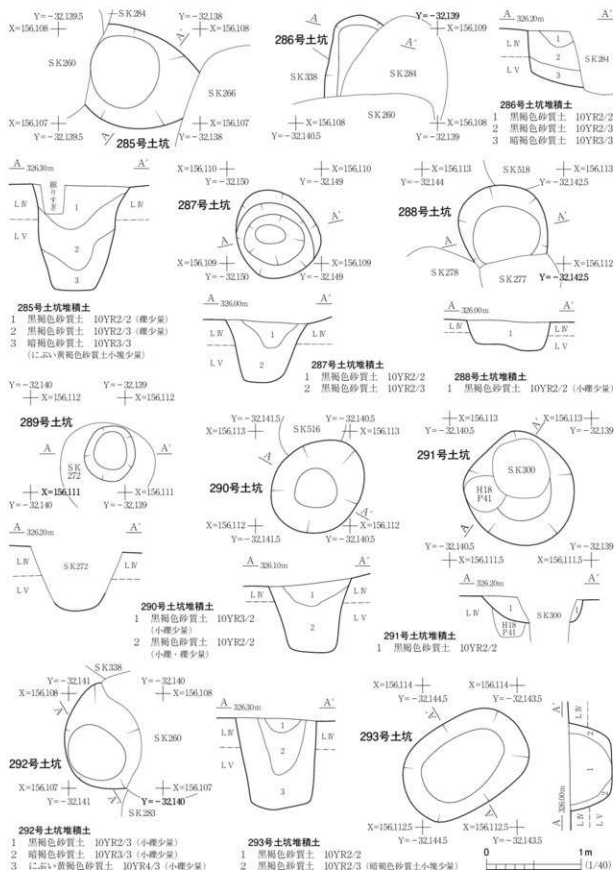


図118 285～293号土坑

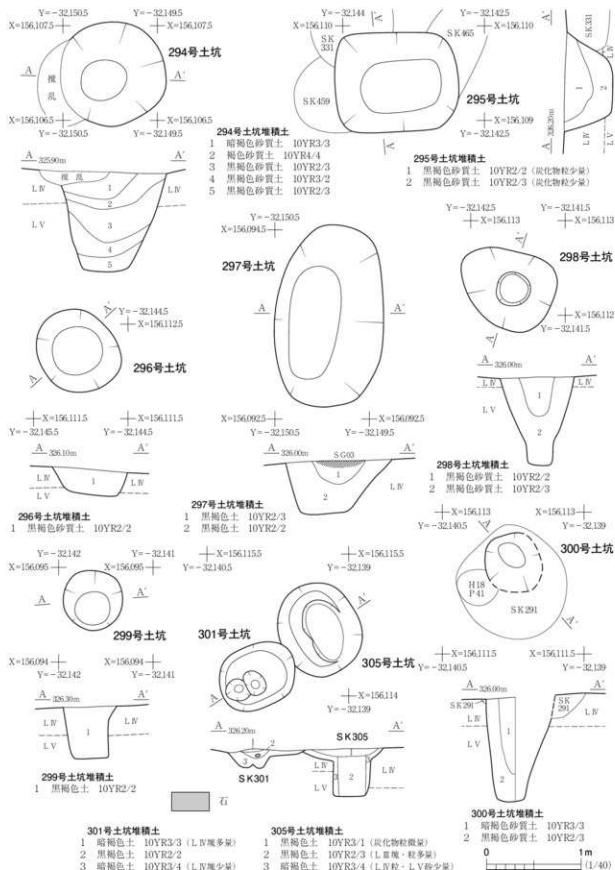


図119 294～301・305号土坑

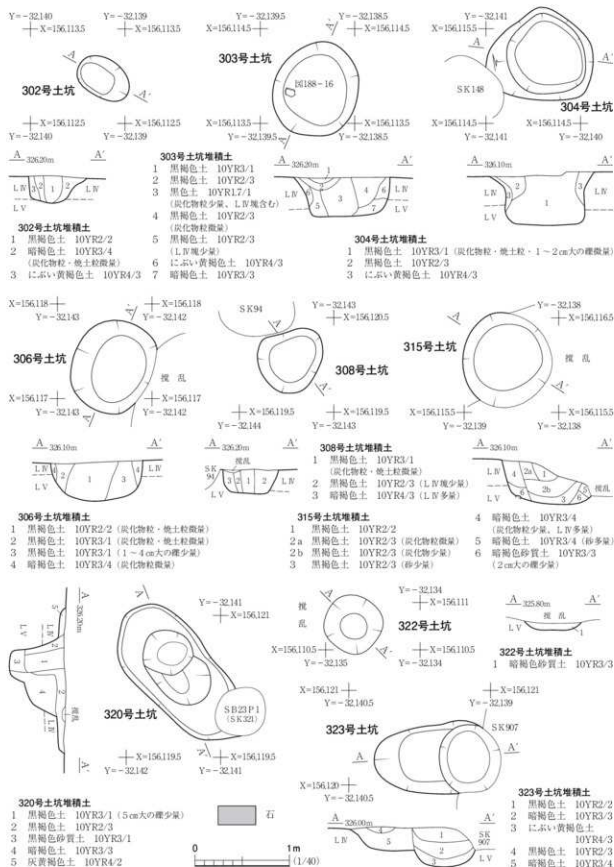


図120 302・304・306・308・315・320・322・323号土坑

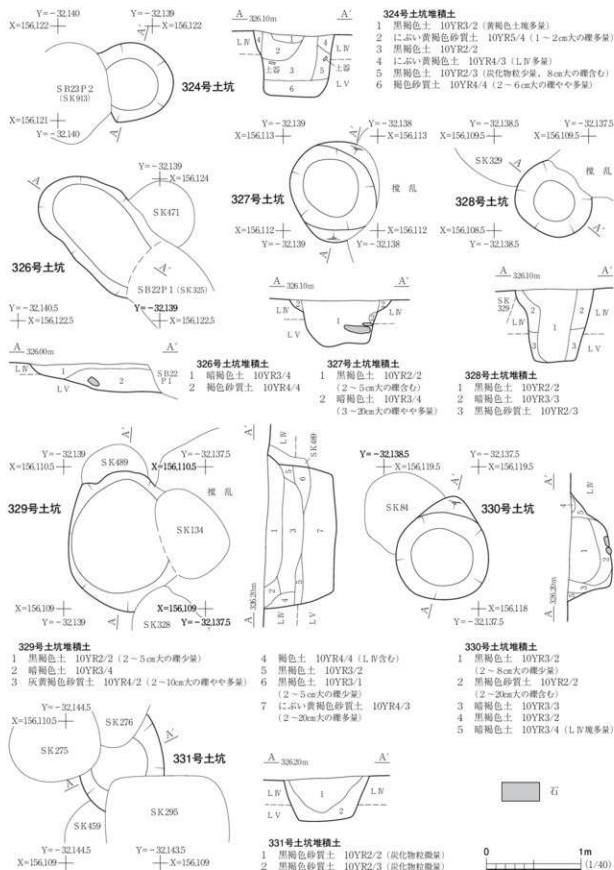


図121 324・326~331号土坑

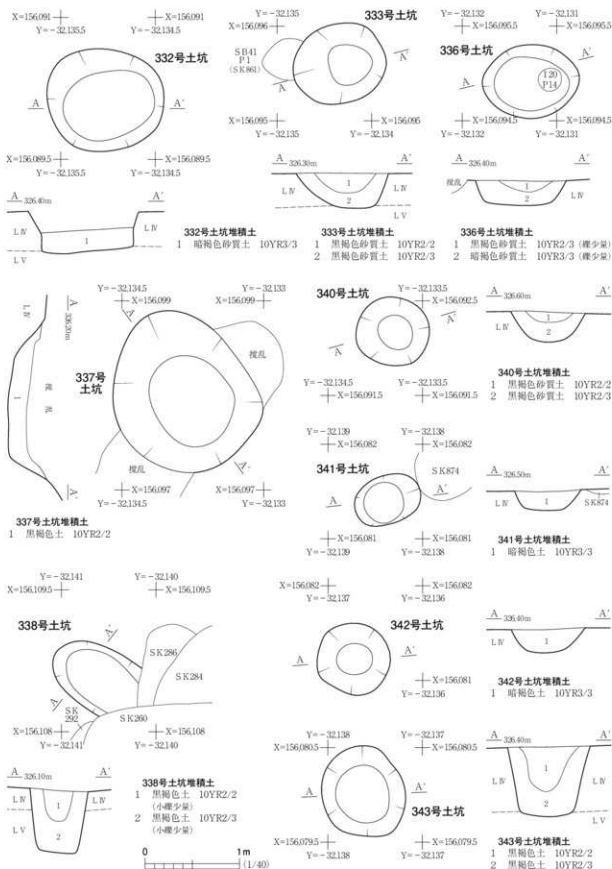


図122 332・333・336～338・340～343号土坑

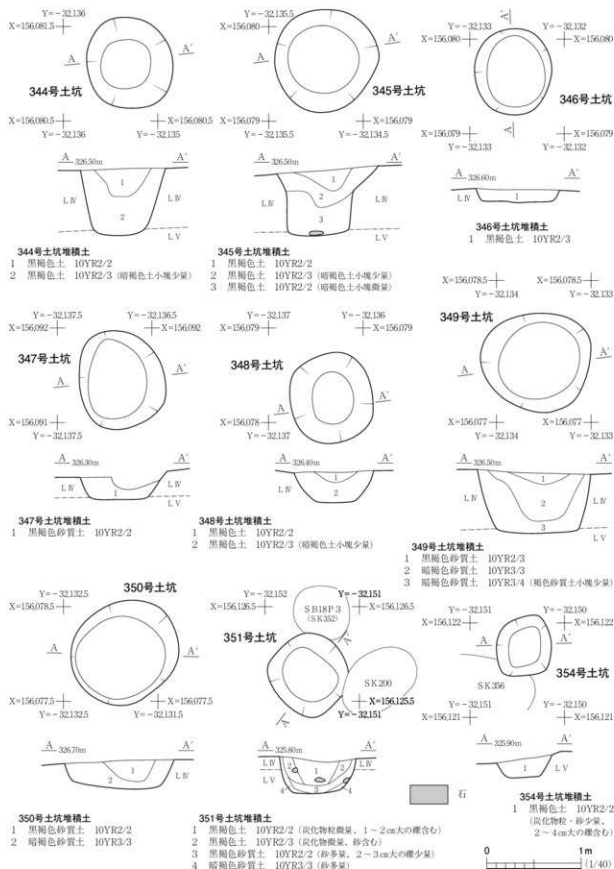


図123 344~351・354号土坑

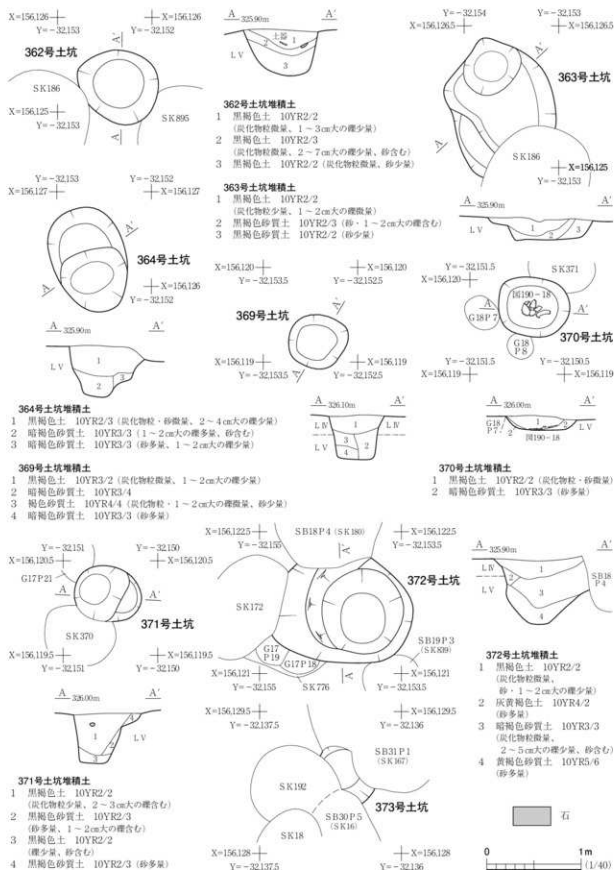


图125 362~364·369~373号土坑

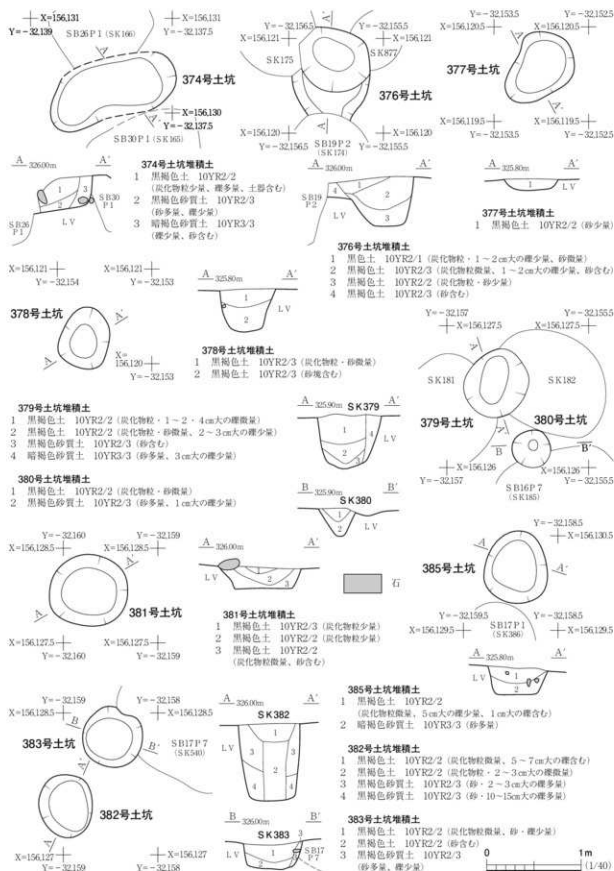


図126 374・376~383・385号土坑

382号土坑 SK 382 (図126、写真109)

本遺構は調査区南部のG 17グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形で、周壁及び底面はL V (砂層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ 1は廃絶後の堆積土、ℓ 2は柱痕、ℓ 3・4は柱抑えの土である。

本遺構は掘立柱の柱穴である。なお、似たような堆積状況を示す遺構に14・91・95・305号土坑がある。(能登谷)

406号土坑 SK 406 (図128、写真111)

本遺構は調査区南部のG 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北西-南東主軸の隅丸長方形で、周壁及び底面はL V (砂層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面はやや起伏が認められる。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。北東壁中央部壁際の底面近くから大型土器片が重なって出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

431号土坑 SK 431 (図130、写真113)

本遺構は調査区南部のF 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は不整形で、周壁上部ではL IV、周壁下部から底面はL Vである。周壁は下半では直線的に急外傾して立ち上がり、上半では若干緩く立ち上がる。底面は緩く湾曲している。遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ 1は人為堆積土、ℓ 2～4は自然堆積土と推測される。ℓ 1には礫が多く含まれ、土器片や磨製石斧が含まれている。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

432号土坑 SK 432 (図130、写真113・114)

本遺構は調査区南部のG 17グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の楕円形で、周壁及び底面はL V (砂層)である。周壁は南西側の状況は不明であるが、北東側では緩やかに立ち上がる。底面は北東側に緩く下降し、北東側は窪んでいる。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。ℓ 1から弥生土器甕の下半部の大型片が内面を上に向けて開いた状態で出土し、上半部は下半部側に口縁部を向けて斜位の状態で出土した。また、この下半部の土器片間の上位から長さ17cm、幅15cmの偏平な礫がほぼ水平の状態で出土した。

ℓ 1から出土した弥生土器甕は扁平礫で蓋がなされ、遺構内に正位の状態で置かれたものと推測される。(能登谷)

445号土坑 SK 445 (図131、写真115)

本遺構は調査区南部のF 16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は不整形隅丸方形で、周壁上部はL IV、周壁中位から底面はL V (砂利層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ 1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 2～4は大小の礫を多く含む柱抑えの土である。ℓ 1の一方の側縁が検出面までほぼ直立し、他側縁は上部が開いている。

本遺構は掘立柱の柱穴である。なお、遺跡内において、ℓ 1 (柱痕)の側縁が検出面まで直立し、他側縁の上部が開く堆積状況を示す遺構に54・71・90・106号土坑等がある。(能登谷)



图127 387·389·390·393~400号土坑



図128 401~404・406・407・409・410・412・920号土坑

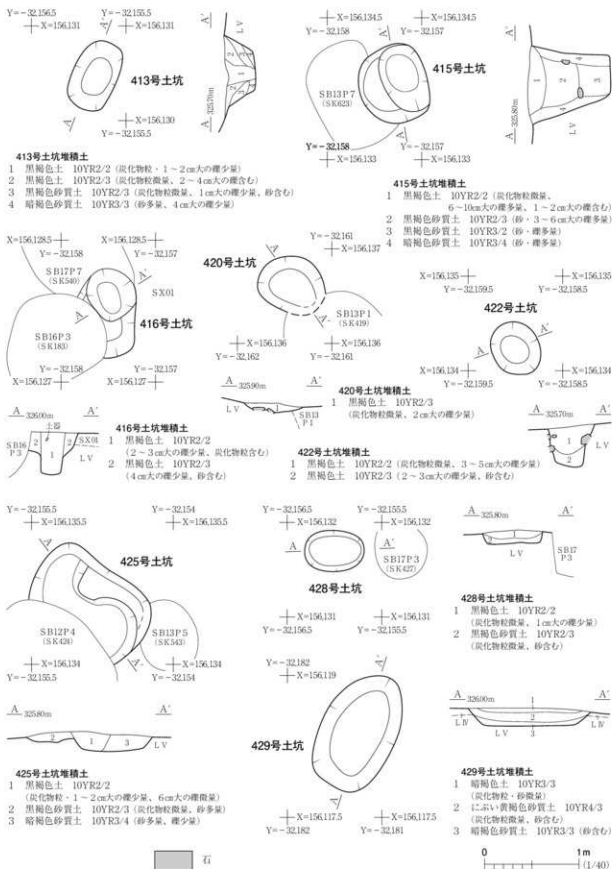


図129 413・415・416・420・422・425・428・429号土坑

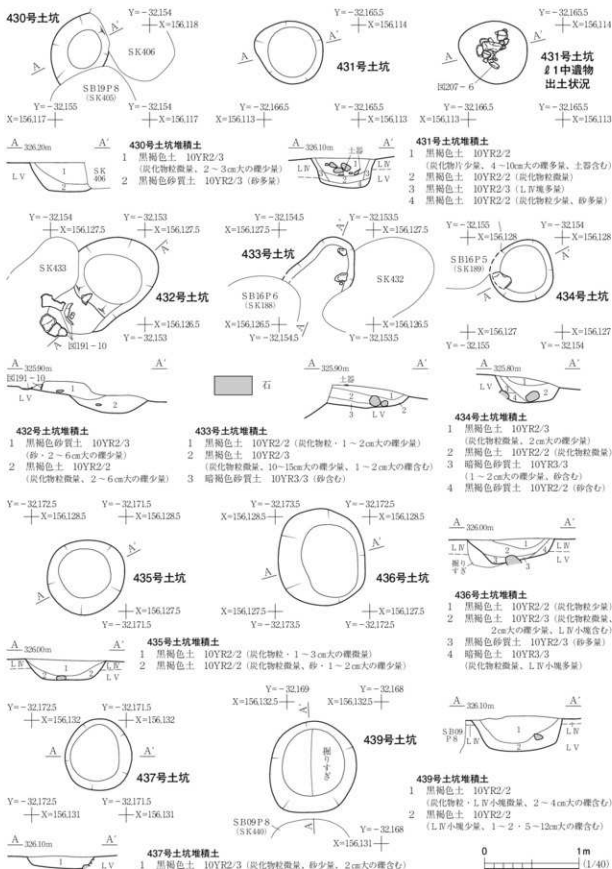


図130 430~437・439号土坑

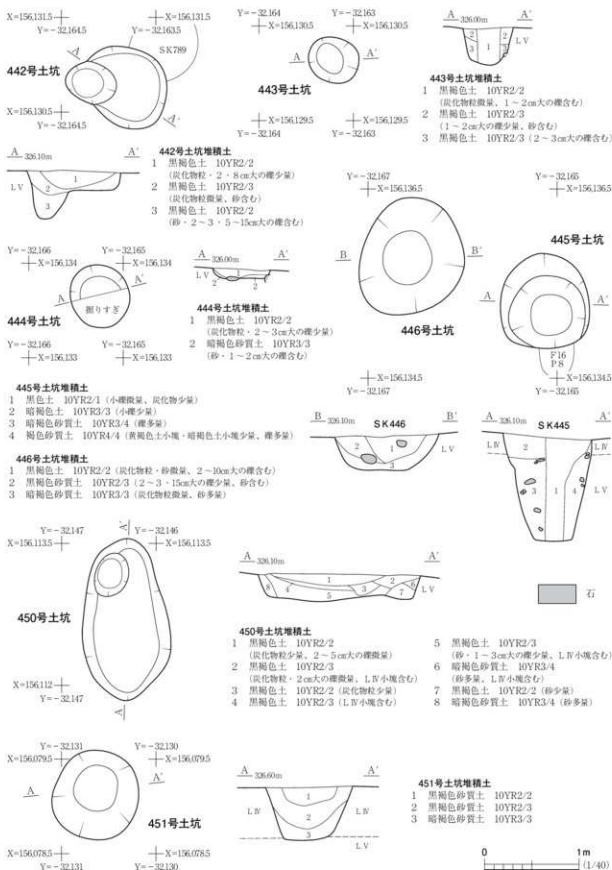


図131 442~446・450・451号土坑

450号土坑 SK 450 (図131、写真115)

本遺構は調査区南部のH 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は南北主軸の長楕円形で、周壁及び底面はL V (砂層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は起伏が認められる。底面の北西部に深さ18cmのビットが存在するが、本遺構との同時性は不明である。遺構内堆積土は8層に分層され、いずれも人為堆積土である。

本遺構は長軸長が約1.7mで、遺跡内の形態が類似する土坑(247号土坑)とともに土坑墓の可能性がある。(能登谷)

483号土坑 SK 483 (図134)

本遺構は調査区南部のI 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形と推測され、周壁上部はL IV、周壁下部から底面はL Vである。周壁は下部では直立気味に立ち上がり、上部では直線的に急外傾して立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は3層に分層され、ℓ 1は柱抜き取り後の堆積土、ℓ 2・3は柱抑えの土である。ℓ 1は検出面から底面まで最上部を除いてほぼ垂直に堆積する。

本遺構は掘立柱の柱穴である。(能登谷)

511号土坑 SK 511 (図136、写真120)

本遺構は調査区南部のK 20グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形で、周壁上部はL IV、周壁下部から底面はL Vである。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。ℓ 2・4には礫が多く含まれ、ℓ 2・3からは管玉や多くの土器片が出土した。

本遺構は廃棄土坑と推測される。(能登谷)

525号土坑 SK 525 (図138、写真122)

本遺構は調査区南部のE 15グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で、周壁及び底面はL Vである。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。ℓ 3には炭化物が多く含まれ、ℓ 1からは全面に赤色顔料が付着した小礫が1点出土した。本遺構の性格は不明である(能登谷)

545号土坑 SK 545 (図139、写真123)

本遺構は調査区南部のG 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で、周壁及び底面はL IVである。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ 1・2は自然堆積土、ℓ 3はℓ 4・5の上面に鉄分が沈着した層、ℓ 4・5はL IV塊を含む人為堆積土である。

本遺構の性格は不明である。堆積土中に鉄分が沈着した層が認められるのが特徴である。(能登谷)

549号土坑 SK 549 (図140、写真124)

本遺構は調査区南部のH・G 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は楕円形で、周壁上部はL IV、周壁下部から底面はL Vである。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち

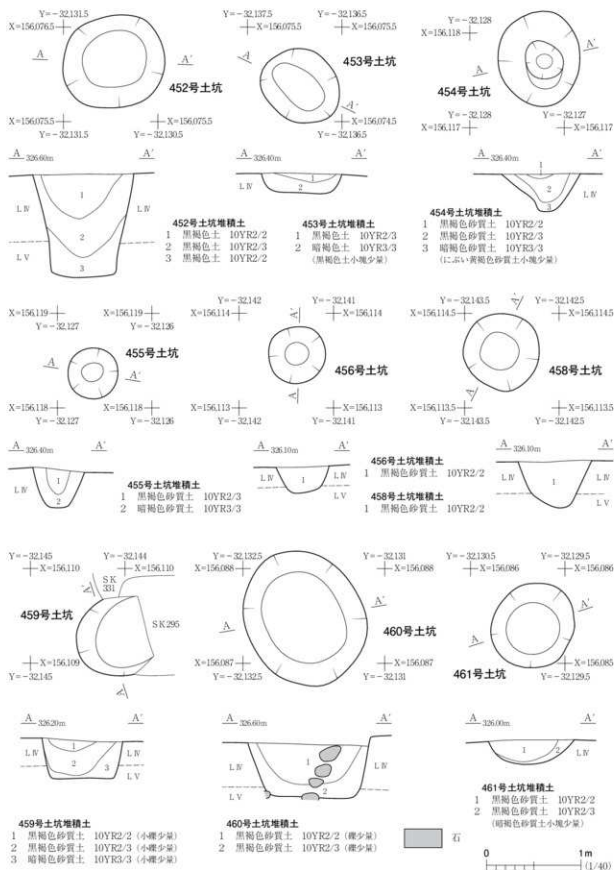


図132 452~456・458~461号土坑

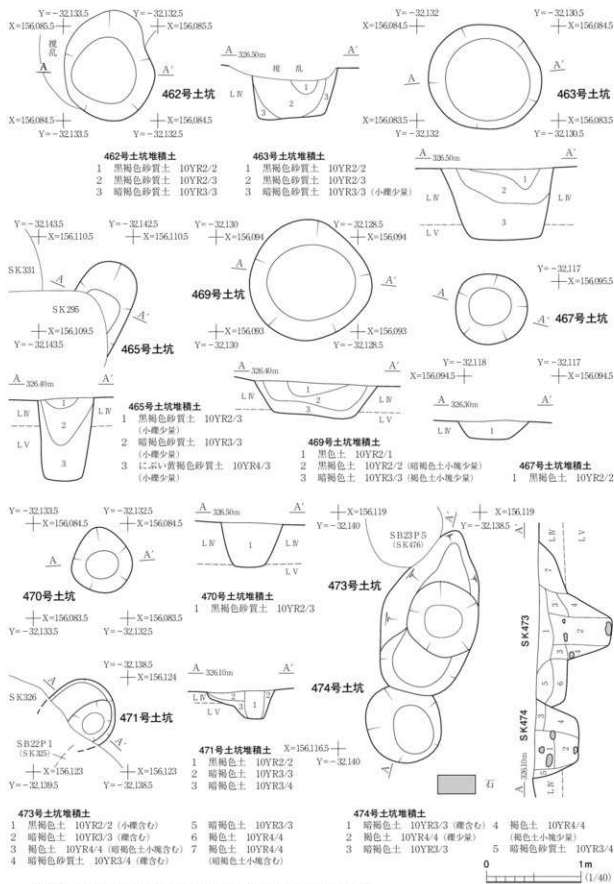


圖133 462・463・465・467・469・471・473・474号土坑

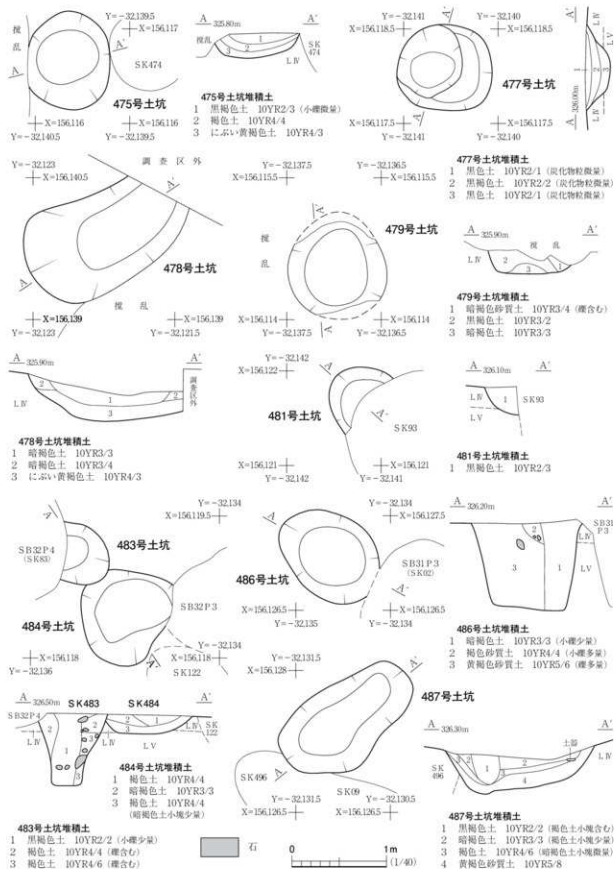


図134 475・477・479・481・483・484・486・487号土坑

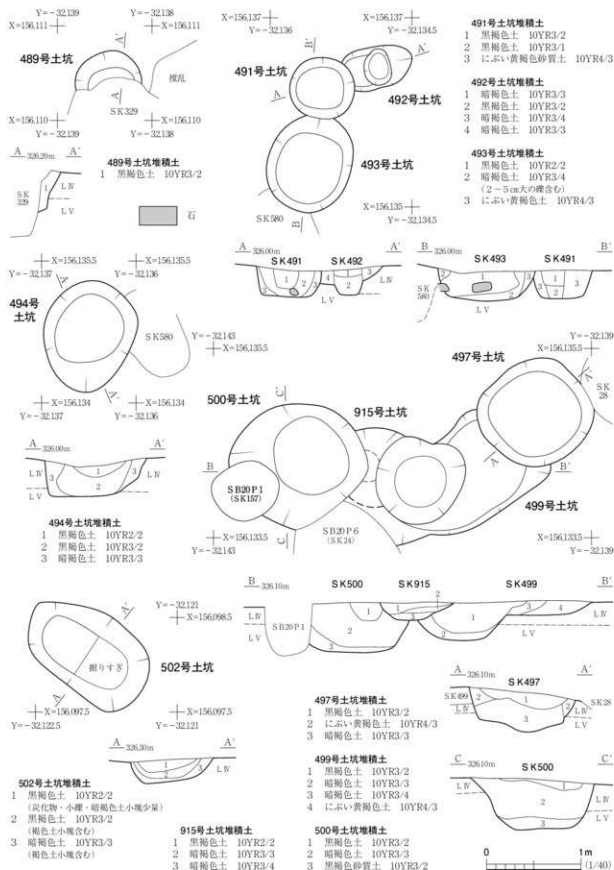


図135 489・491～494・497・499・500・502・915号土坑

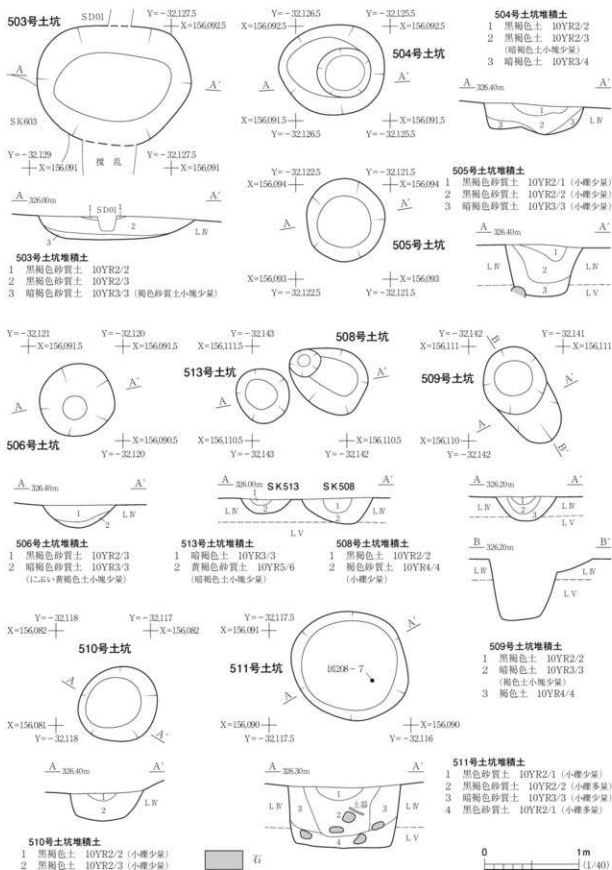


図136 503~506・508~511・513号土坑

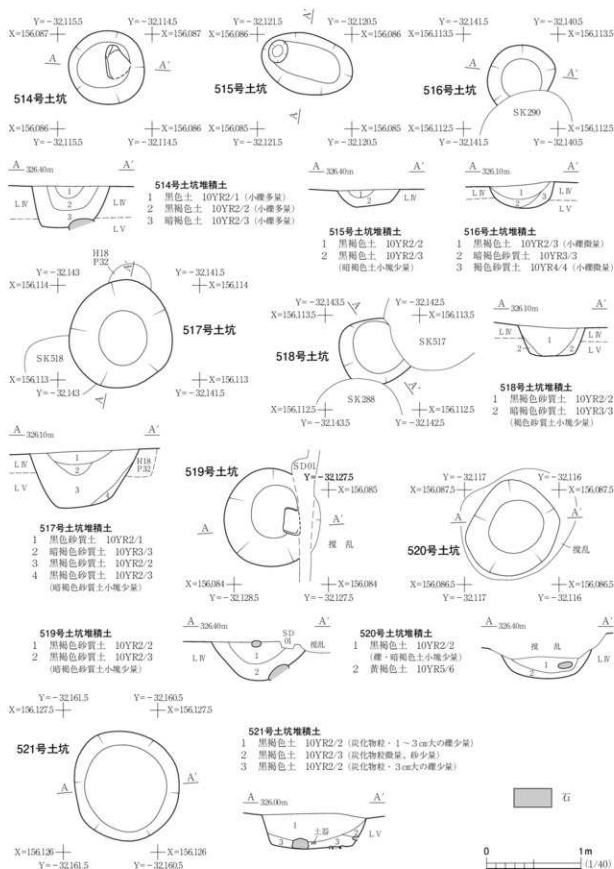


图137 514~521号土坑

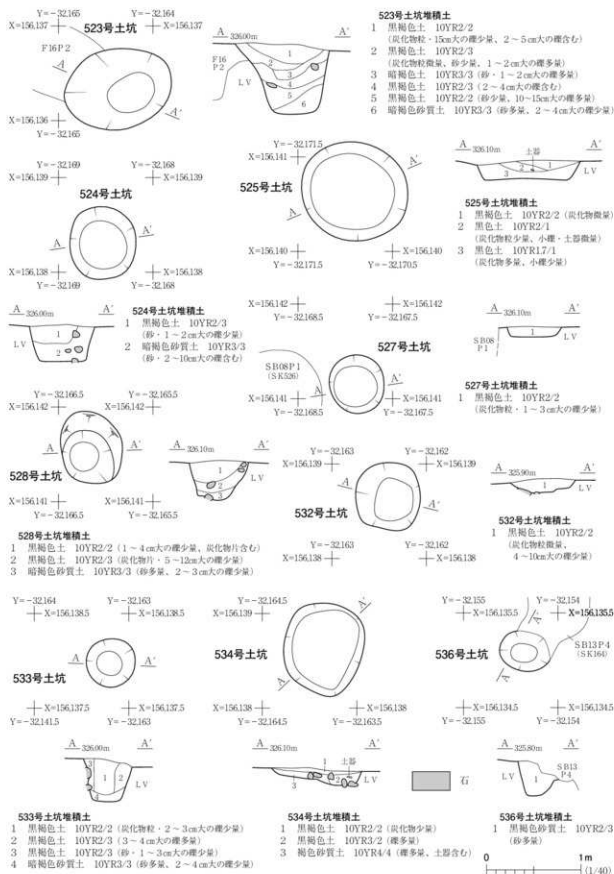


図138 523~525・527・528・532~534・536号土坑

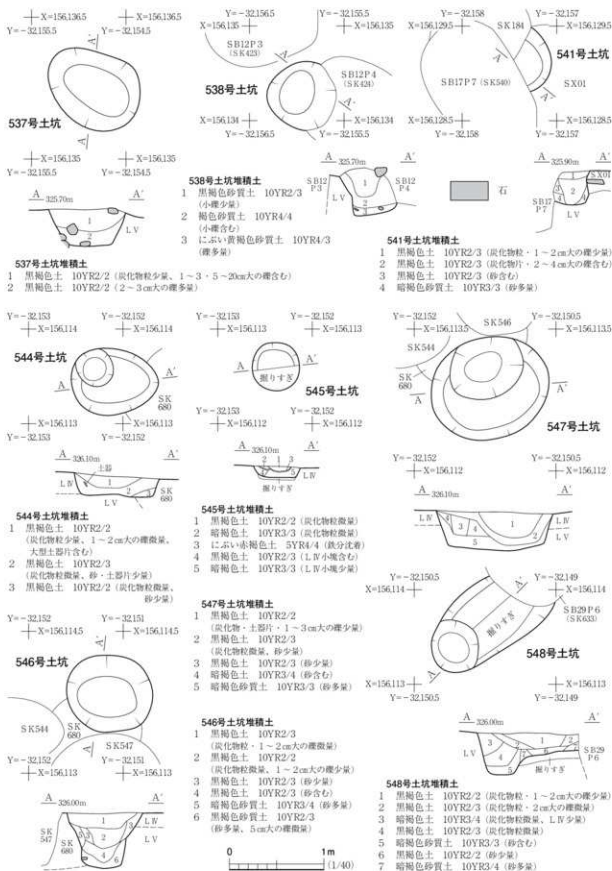


図139 537・538・541・544～548号土坑

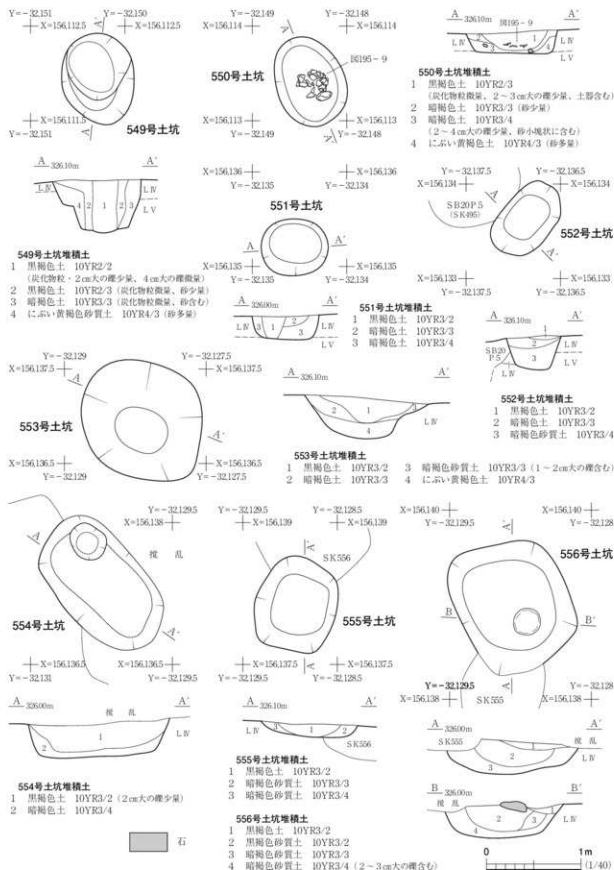


図140 549~556号土坑

上がり、底面は中央部が若干窪んでいる。遺構内堆積土は4層に分層され、 $\ell 1$ は柱痕、 $\ell 2 \sim 4$ は柱抑えの土である。 $\ell 1$ の両側縁が検出面まで直立している。 $\ell 1$ から $24 \times 18 \times 13\text{cm}$ の赤鉄鉋(鏡鉄鉋)が1点出土した。

本遺構は掘立柱の柱穴と推測される。なお、遺跡内において $\ell 1$ (柱痕)の両側縁が検出面まで直立する堆積状況を示す遺構に、 $105 \cdot 139 \cdot 566 \cdot 666$ 号土坑がある。(能登谷)

550号土坑 SK 550 (図140、写真124)

本遺構は調査区南部のH 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北西-南東主軸の楕円形で、周壁はL IV、底面はL V(砂層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、自然堆積土と推測される。 $\ell 1$ 下部から壺がまともって出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

557号土坑 SK 557 (図141、写真125・175)

本遺構は調査区南部のI 15グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁はL IV、底面はL V(砂利層)である。周壁は北西壁では直立気味に立ち上がり、それ以外では直線的に急外傾して立ち上がる。底面は砂利により凸凹している。遺構内堆積土は3層に分層され、人為堆積土と推測される。 $\ell 3$ 下部から管玉が2点出土した。

本遺構は、管玉が出土したことから規模が小さいものの土坑墓と推測される。(能登谷)

618号土坑 SK 618 (図146、写真130)

本遺構は調査区南部のJ 19グリッドに位置する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はL IVである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約2.1mで、平面形が長楕円形を呈し、西方の246~248・252号土坑と同様に土坑墓と推測される。(能登谷)

639号土坑 SK 639 (図148、写真132)

本遺構は調査区南部のF 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。遺構上部は北東から南西にかけて後世の攪乱を受けている。平面形は楕円形で、周壁及び底面はL Vである。周壁は外傾して立ち上がり、底面は若干起伏が認められる。遺構内堆積土は3層に分層され、自然堆積土と推測される。 $\ell 2$ から、縄文土器深鉢の下半部が底部を南西に向けた状態で出土した。

本遺構の性格は不明である。(能登谷)

656号土坑 SK 656 (図150、写真133)

本遺構は調査区南部のE 15グリッドに位置し、平坦面に立地する。東に6号建物跡が隣接する。平面形は北西-南東主軸の楕円形で、周壁上部はL IV、周壁中央部から底面はL Vである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、東壁中央部ではオーバーハングし、北西壁上部は緩く立ち上がる。底面は緩く湾曲している。遺構内堆積土は6層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。 $\ell 1 \sim 5$ から土器が多く出土し、 $\ell 2$ には焼土粒が多く含まれている。また、 $\ell 1 \cdot 3 \cdot 5$ に

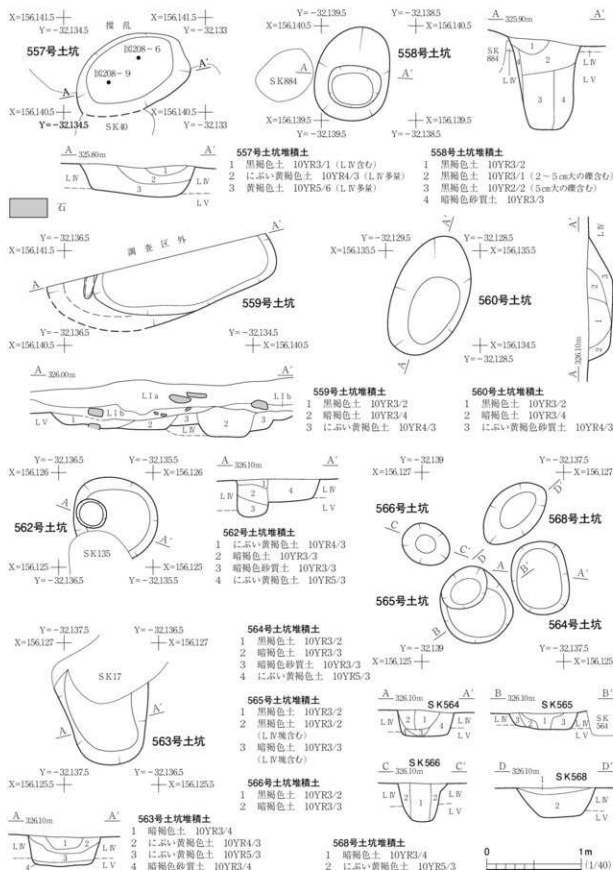


図141 557~560・562~566・568号土坑

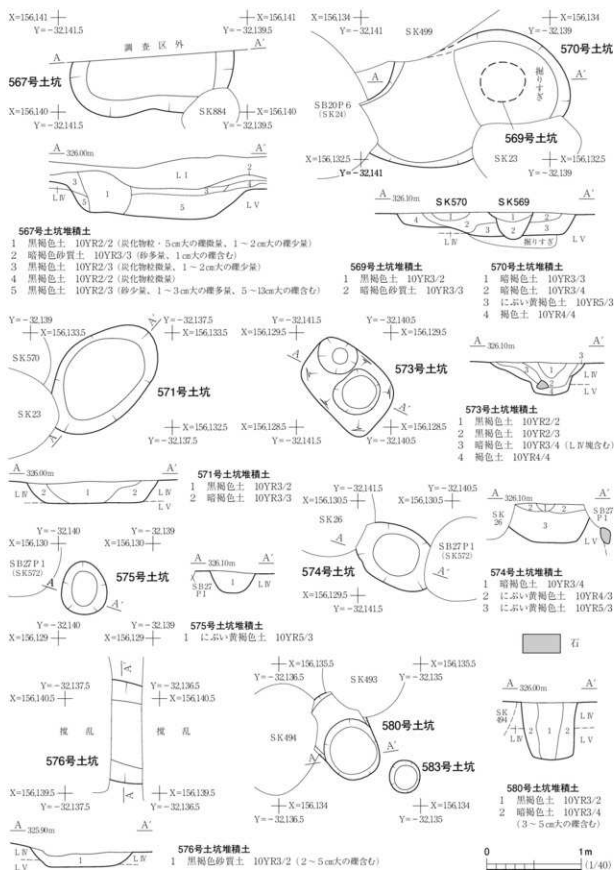


图142 567·569~571·573~576·580·583号土坑

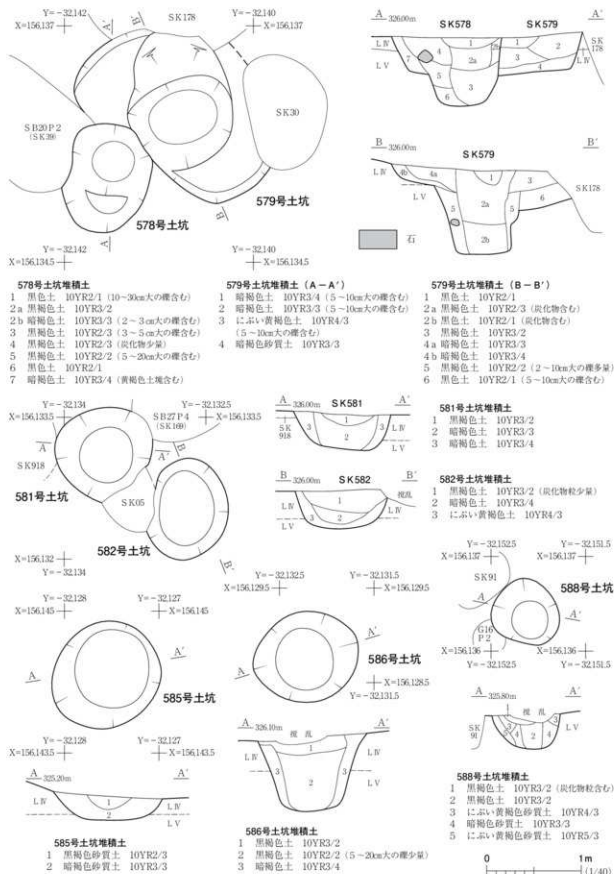


図143 578・579・581・582・585・586・588号土坑

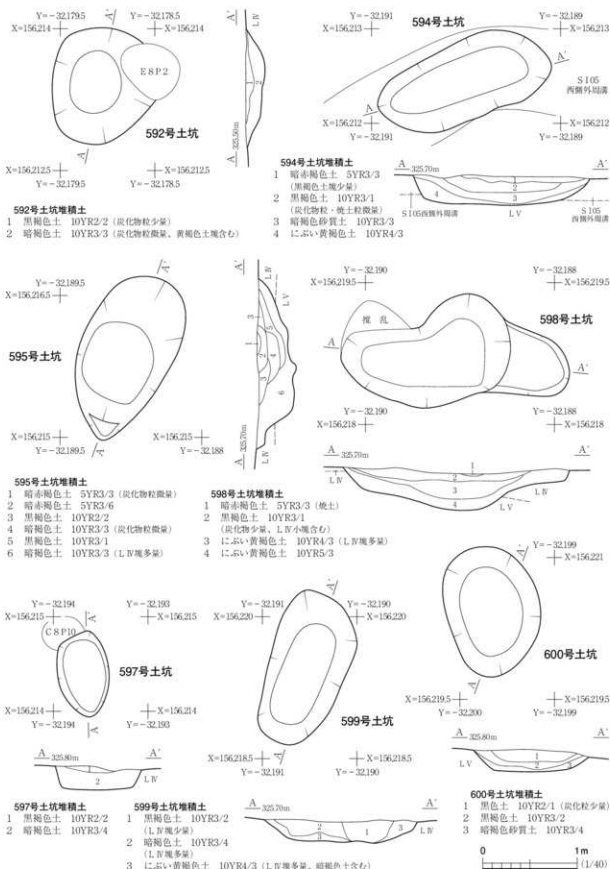


図144 592・594・595・597～600号土坑

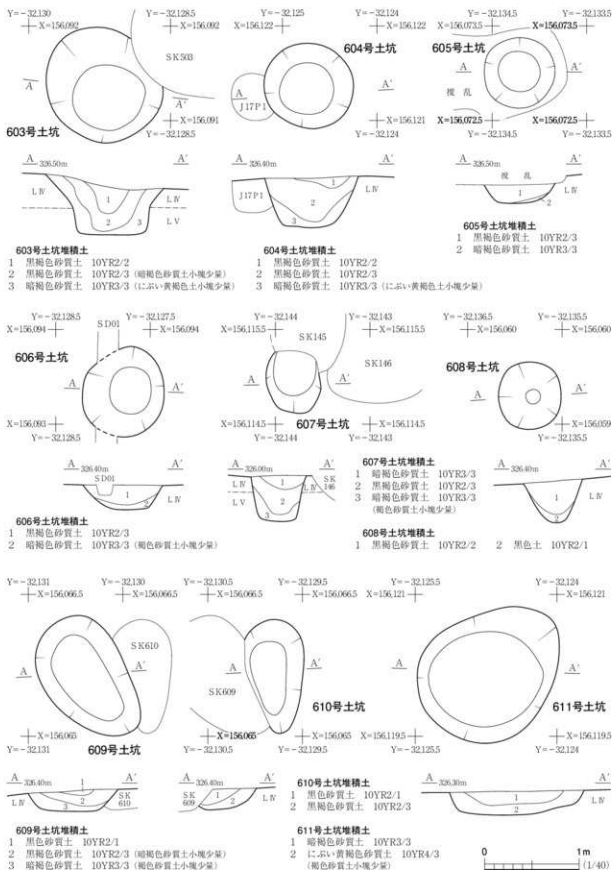


図145 603～611号土坑

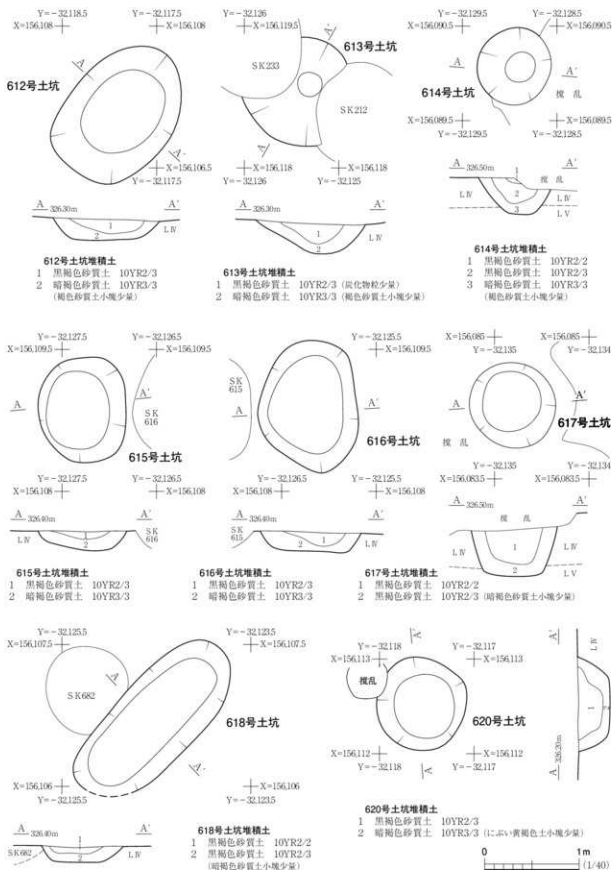


图146 612~618·620号土坑

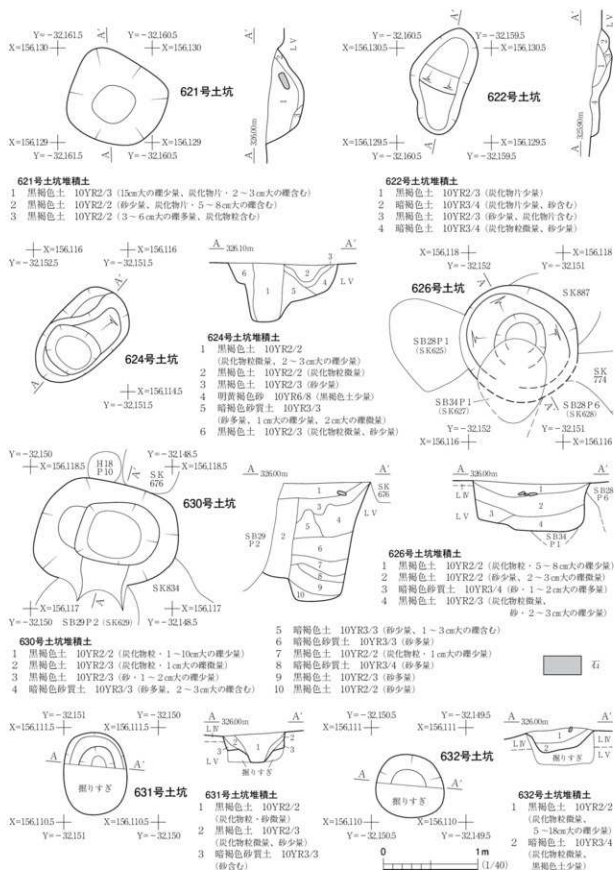


図147 621・622・624・626・630～632号土坑

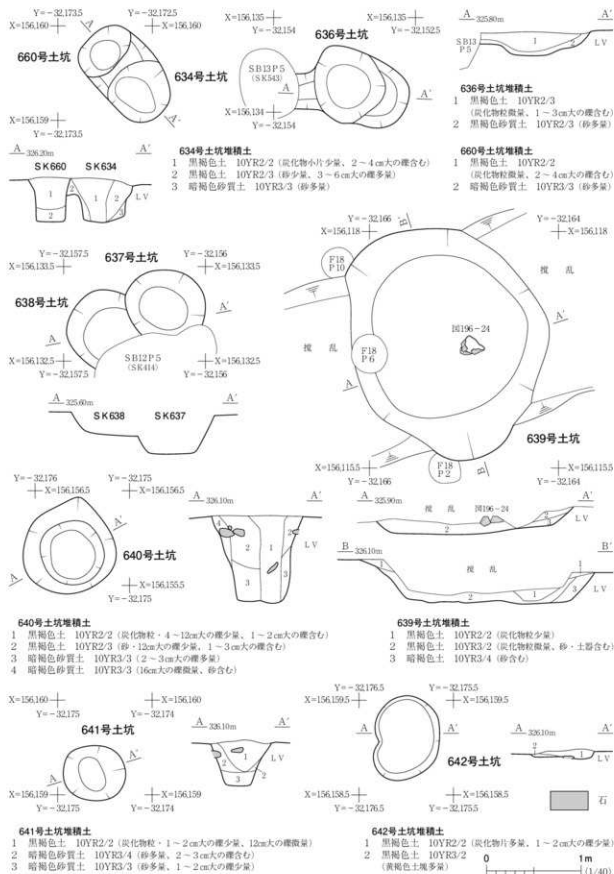


図148 634・636~642・660号土坑



図149 643~647・649・651・652号土坑

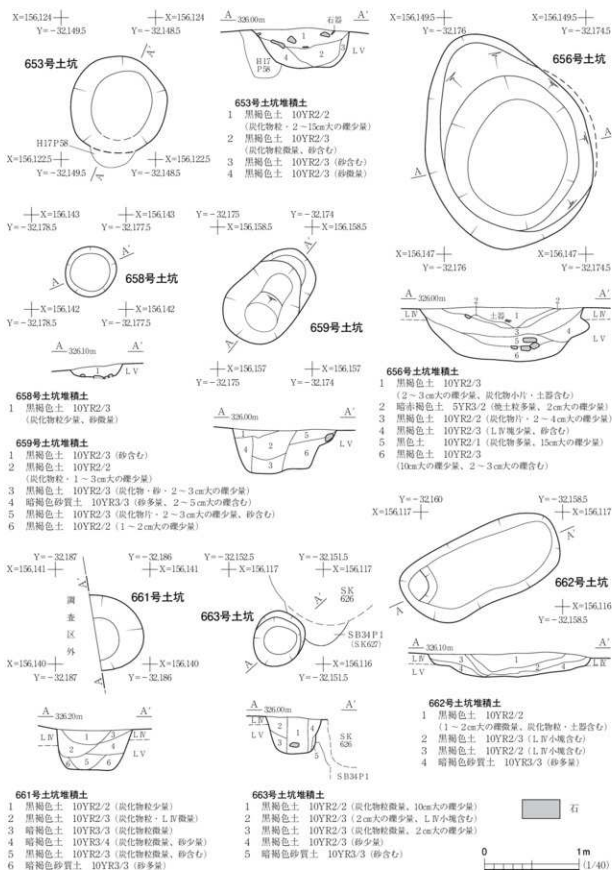


図150 653・656・658・659・661~663号土坑

は炭化物が含まれているが、特に、 $\ell 5$ には多く含まれている。

本遺構は南東方に所在する8・9号建物跡に伴う廃棄土坑と推測される。(能登谷)

662号土坑 SK 662 (図150、写真134)

本遺構は調査区南部のF・G18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の隅丸長方形で、周壁はLⅣ、底面はLⅤである。周壁は直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がり、底面は両端から中央に向けて緩く下降している。遺構内堆積土は4層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約1.7m、平面形が細身の隅丸長方形を呈し、土坑墓の可能性はある。(能登谷)

692号土坑 SK 692 (図154、写真137)

本遺構は調査区南部のJ16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の不整隅丸長方形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は外傾して立ち上がり、底面には若干起伏が認められる。遺構内堆積土は2層に分層され、人為堆積土と推測される。北西壁際の $\ell 1$ から管玉2点が出土した。

本遺構は長軸長が1.7mで、平面形が細身の不整隅丸長方形を呈し、検出面と堆積土の上部から弥生土器の壺(図198-1)、壁際から管玉が2点(図208-4・5)出土していることから土坑墓と推測される。(能登谷)

694号土坑 SK 694 (図154、写真138)

本遺構は調査区南部のJ16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の長楕円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は急外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層に分層され、人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約1.5mで、平面形が長楕円形を呈する。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

700号土坑 SK 700 (図155、写真138)

本遺構は調査区東部のK17グリッドのLⅣ、河岸段丘崖最上部の緩斜面に位置する。検出面はLⅣである。1号配石遺構・230号土坑と重複し、出土遺物から本遺構がいずれよりも新しいと判断される。平面形は東西主軸の楕円形で、長軸長約1.7mである。周壁は西部が急な角度で立ち上がるのに対し、その他の部分はこれよりやや緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は3層からなり、底面からやや浮いた状態で図200-5の深鉢と人頭大の礫、検出面で同図1の壺が出土した他、堆積土から293点の土器、34点の石器・剥片が出土した。人頭大の礫は、本遺構より古い1号配石遺構から落ち込んだものと思われる。本遺構の性格は不明である。(青山)

702号土坑 SK 702 (図155、写真139)

本遺構は調査区北部のC8・9グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の直線的な溝状で、周壁はLⅣ、底面は浅いところではLⅣ、深いところではLⅤである。周壁は急外傾して立ち上がる部分と緩やかに立ち上がる部分があり、底面には凹凸がみられる。遺構内堆積土は5層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。本遺構の性格は不明である。(能登谷)



図151 664~671号土坑

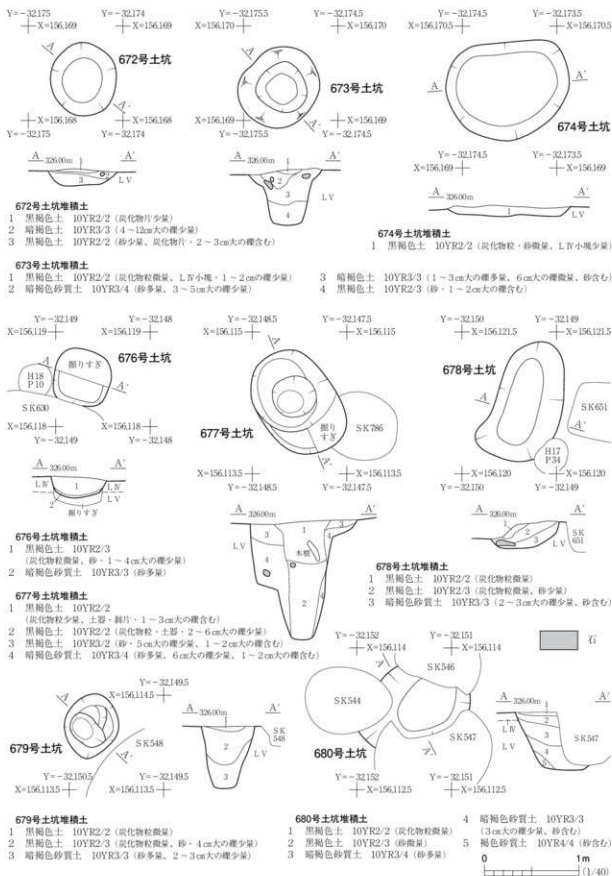


图152 672~674·676~680号土坑

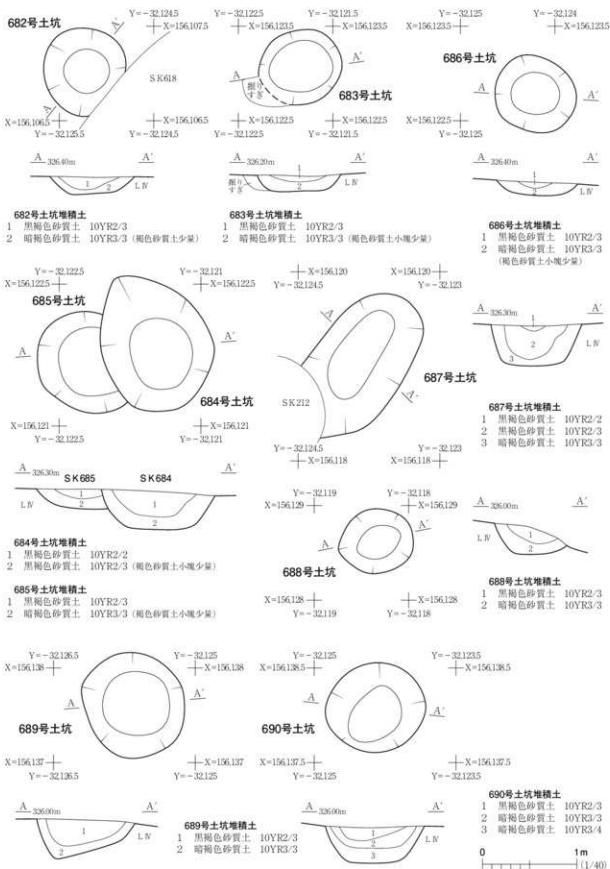


図153 682~690号土坑

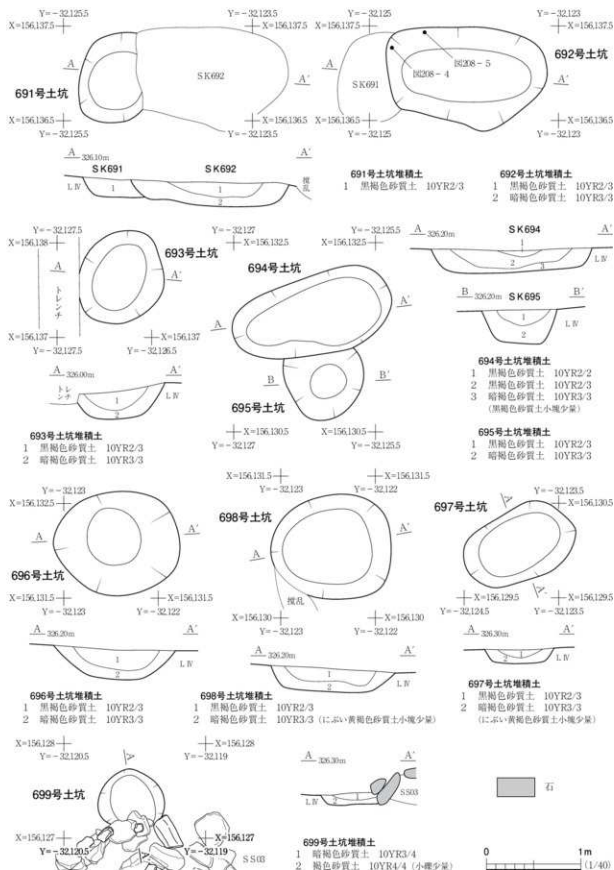


図154 691～699号土坑

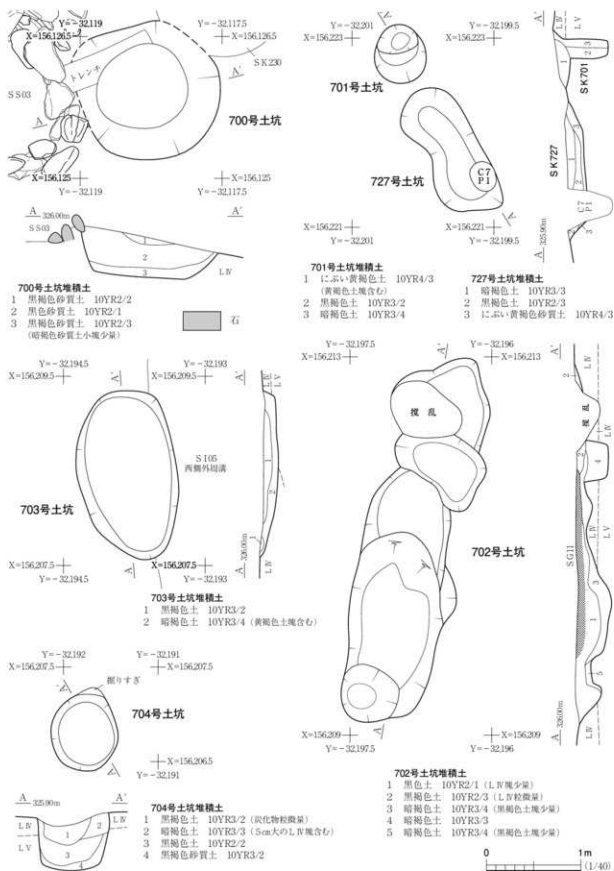


図155 700～704・727号土坑

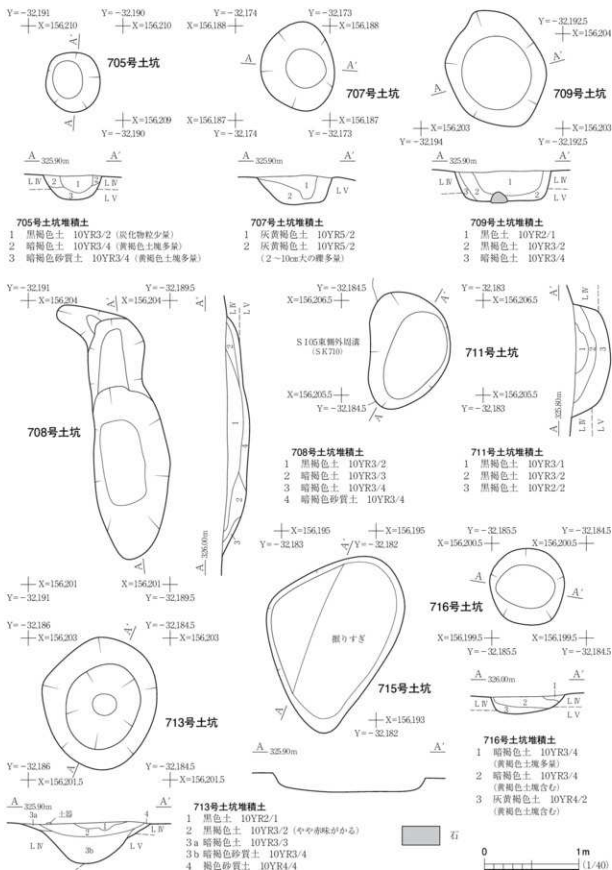


図156 705・707～709・711・713・715・716号土坑

721号土坑 SK 721 (図157、写真141)

本遺構は調査区北部のE 9グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北東-南西主軸の不整な溝状で、周壁はLⅣ、底面は南端の浅い所でLⅣ、その北方でLⅤ(砂利層)である。周壁は急外傾して立ち上がる部分と緩やかに立ち上がる部分があり、底面には凹凸がみられる。遺構内堆積土は6層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

723号土坑 SK 723 (図157、写真141)

本遺構は調査区北部のD 9グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は、急外傾して立ち上がる。遺構内堆積土は2層に分層され、自然堆積土と推測される。底面近くから、弥生土器高杯の脚部が正位の状態出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

745号土坑 SK 745 (図159、写真142)

本遺構は調査区北部のE 10グリッドに位置し、平坦面に立地する。南方約1 mに746号土坑が存在する。平面形は北西-南東主軸の隅丸長方形である。周壁は南壁ではLⅣ、その北側では上部はLⅣ、下部はLⅤ(砂利層)で、直線的ないしは直線的に急外傾して立ち上がる。底面はLⅤ(砂利層)で、部分的に弱く被熱して赤褐色を呈している。遺構内堆積土は5層に分層され、人為堆積土と推測される。ℓ 1は暗赤褐色を呈し、ℓ 4以外の各層には炭化物が含まれている。特に、ℓ 1・5には多く含まれている。

本遺構は、周壁の被熱は認められないが、底面の一部がわずかに被熱し、堆積土に炭化物が多く含まれ、暗赤褐色土層も認められることから、木炭焼成土坑と推測される。時期は、他の遺跡の類例から平安時代頃と推測される。(能登谷)

746号土坑 SK 746 (図159、写真142)

本遺構は調査区北部のE・F 10グリッドに位置し、平坦面に立地する。北方約1 mに745号土坑が存在する。平面形は北西-南東主軸の隅丸長方形で、周壁上部はLⅣ、周壁下部から底面はLⅤ(砂利層)である。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は起伏が認められる。遺構内堆積土は4層に分層され、人為堆積土と推測される。ℓ 2は暗赤褐色を呈し、ℓ 3は炭化物層である。

本遺構は、周壁の被熱は認められないが、堆積土に暗赤褐色土や炭化物層が認められることから、木炭焼成土坑と推測される。時期は、他の遺跡の類例から平安時代頃と推測される。(能登谷)

750号土坑 SK 750 (図159、写真143)

本遺構は調査区北部のD 7グリッドに位置し、北東方向に下降する緩斜面に立地している。平面形は南北主軸の楕円形で、周壁上部はLⅣ、周壁中央部はLⅤ(砂利層)、周壁下部から底面はLⅤ(砂層)である。周壁は下半では直立気味ないしは直線的に急外傾して立ち上がるが、上半ではやや緩く立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は5層に分層され、自然堆積土と推測される。

本遺構は形態的な特徴や遺構内堆積土の状況から、落し穴の可能性がある。詳細な時期は不明である。(能登谷)

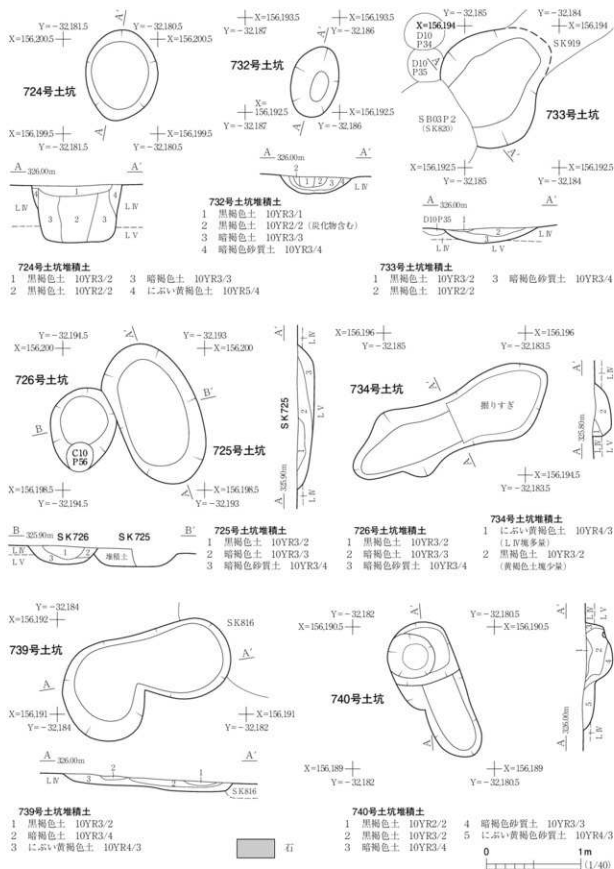


図158 724・726・732・734・739・740号土坑

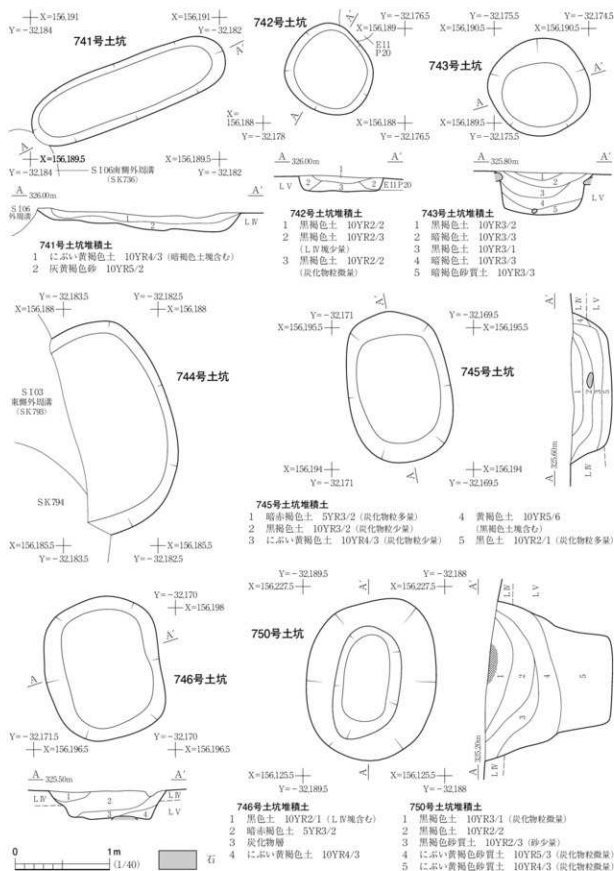


図159 741～746・750号土坑

754号土坑 SK 754 (図160、写真143)

本遺構は調査区南部のJ 16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の隅丸長方形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は北西部では緩やかに立ち上がり、その他では急外傾して立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は2層に分層され、人為堆積土と推測される。底面中央部から弥生土器の甕が底部を南に向け潰れた状態で出土した。

本遺構は長軸長が約20mで、平面形が隅丸長方形を呈する。遺構の性格は不明である。(能登谷)

757号土坑 SK 757 (図160、写真143・144)

本遺構は調査区南部のJ 16グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は円形で底面が狭く、周壁が外傾して立ち上がることから、全体の形状はボウル形を呈している。周壁及び底面はLⅣである。遺構内堆積土は2層に分層され、自然堆積土と推測される。底面からはほぼ完形の縄文土器の甕が正位の状態出土した。本遺構は貯蔵穴と推測される。(能登谷)

809号土坑 SK 809 (図165、写真148)

本遺構は調査区北部のC 5グリッドに位置し、東方に下降する緩斜面に立地する。本調査で検出した遺構のうち、最北に位置する。平面形は東西主軸の隅丸長方形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は直立気味に立ち上がる。壁面は被熱してにぶい赤褐色を呈しており、灰オリーブ色を呈した硬化面が部分的に認められる。このにぶい赤褐色部分は、灰オリーブ色の硬化面が剥落した後の状態と推測される。被熱した範囲は壁の表面から約2cmの厚さがあるが、灰オリーブ色を呈するのは壁の表面付近のみである。底面は平坦である。遺構内堆積土は4層に分層され、 $\ell 1 \cdot 3$ は人為堆積土、 $\ell 4$ は木炭焼成後に残された炭化物層で、 $\ell 1 \cdot 3$ の境には部分的に薄い炭化物層($\ell 2$)が認められる。

本遺構は木炭焼成土坑で、時期は他の遺跡の類例から平安時代頃と推測される。(能登谷)

813号土坑 SK 813 (図165、写真148)

本遺構は調査区北部のC 7グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は三角形に近い不整形で、周壁及び底面はLⅣである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は緩く湾曲している。遺構内堆積土は4層に分層され、いずれも自然堆積土と推測される。完全に埋没後、上面に13号焼土遺構が形成されている。

本遺構は長軸長が約29mの大型土坑であるが、性格は不明である。(能登谷)

815号土坑 SK 815 (図165、写真148)

本遺構は調査区北部のC 6・7グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は東西主軸の不整形長楕円形で、周壁の大部分はLⅣ、東側の周壁下部及び底面はLⅤ(砂層)である。周壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は若干起伏が認められ、東側へ緩く下降している。遺構内堆積土は2層に分層されるが、自然堆積か人為堆積かの判断は難しい。

本遺構は長軸長が約17mで、平面形が不整形長楕円形を呈し、土坑墓の可能性はある。(能登谷)

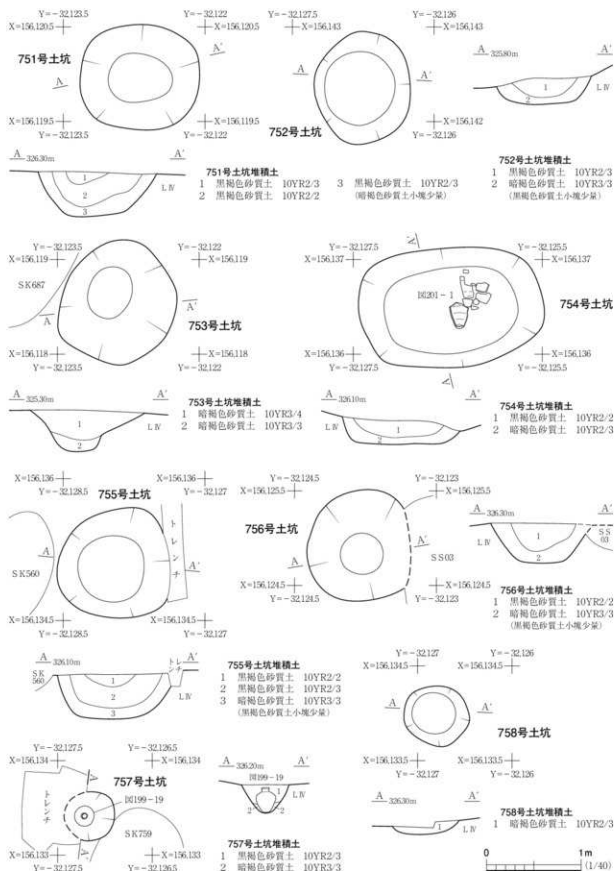


図160 751～758号土坑

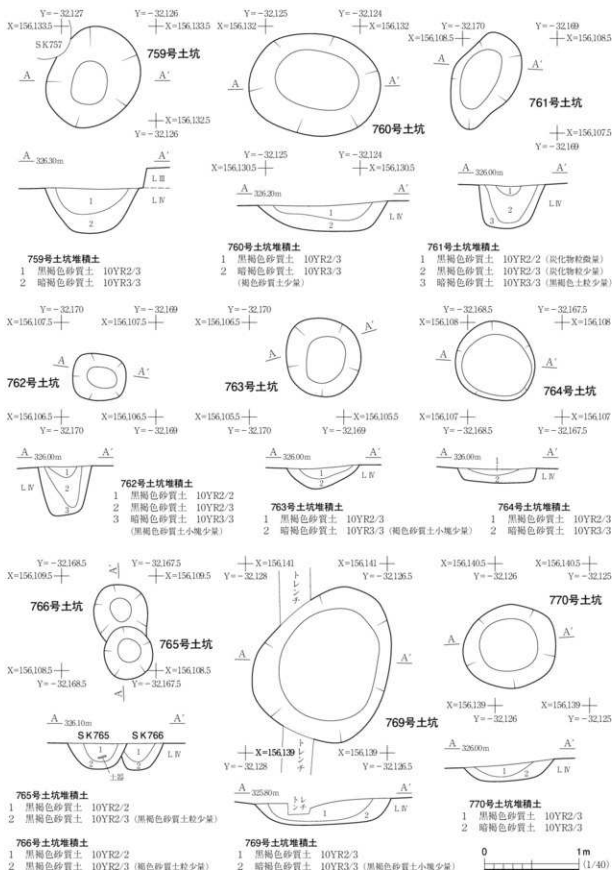


图161 759~766·769·770号土坑

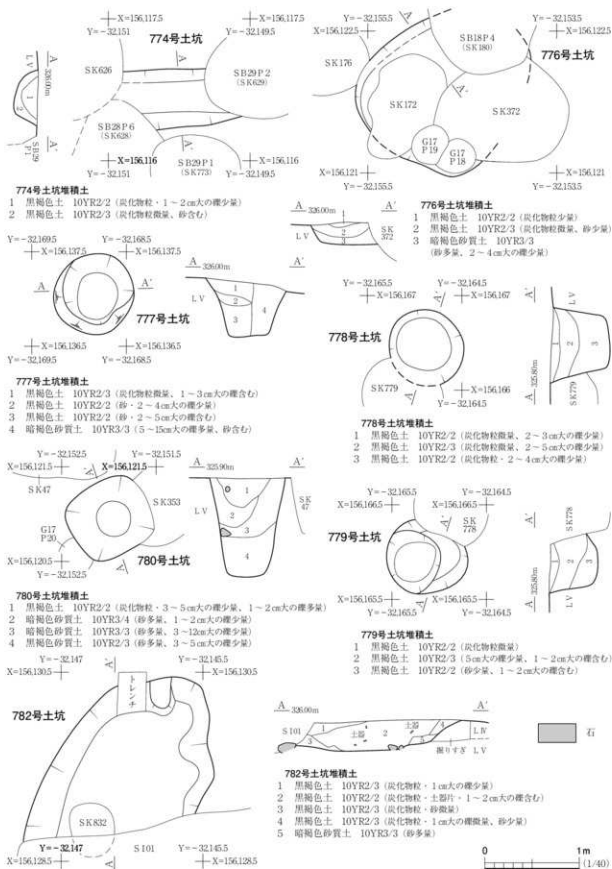


図162 774・776~780・782号土坑

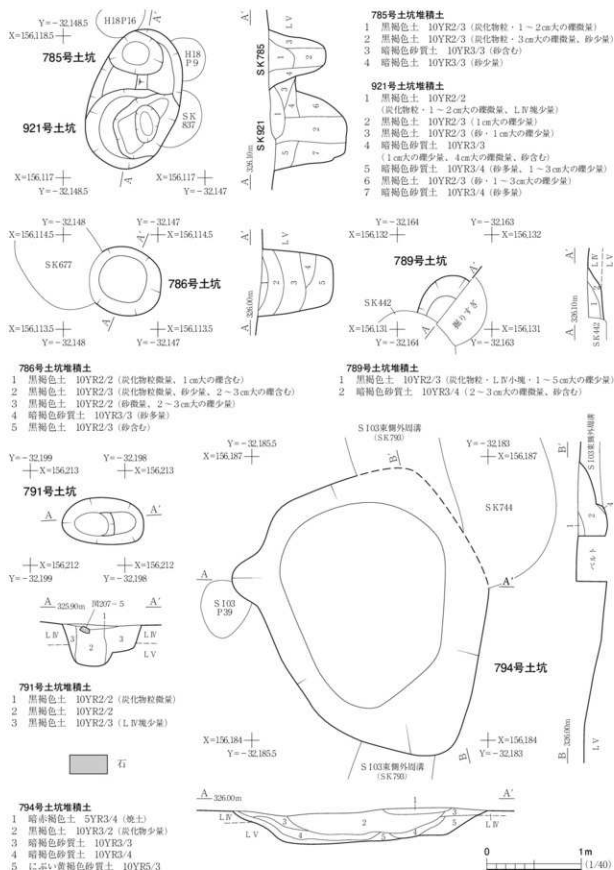


図163 785・786・789・791・794・921号土坑

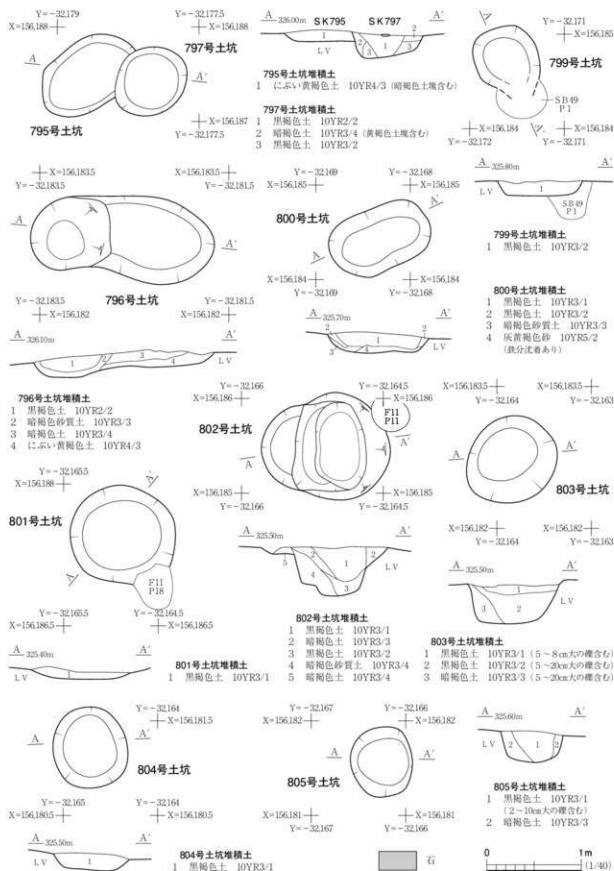


図164 795~797・799~805号土坑

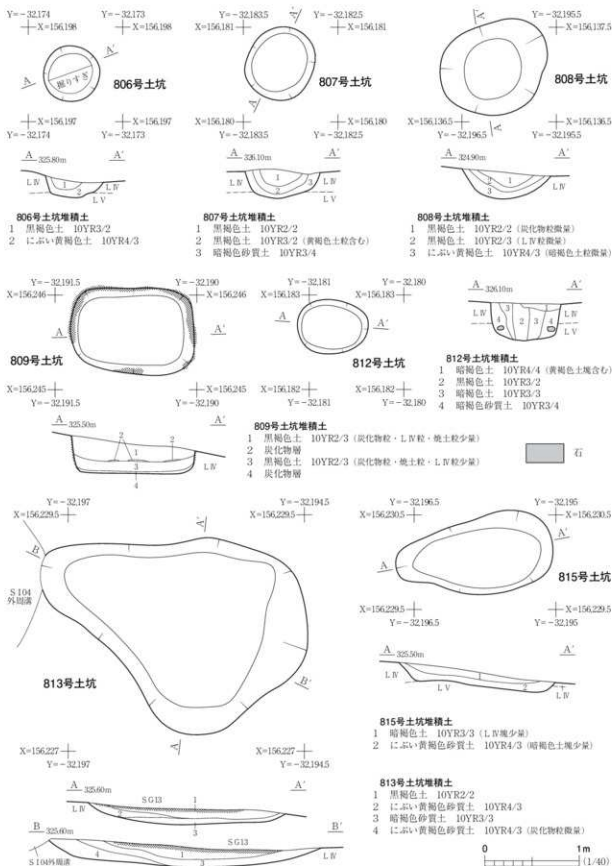


図165 806・809・812・813・815号土坑

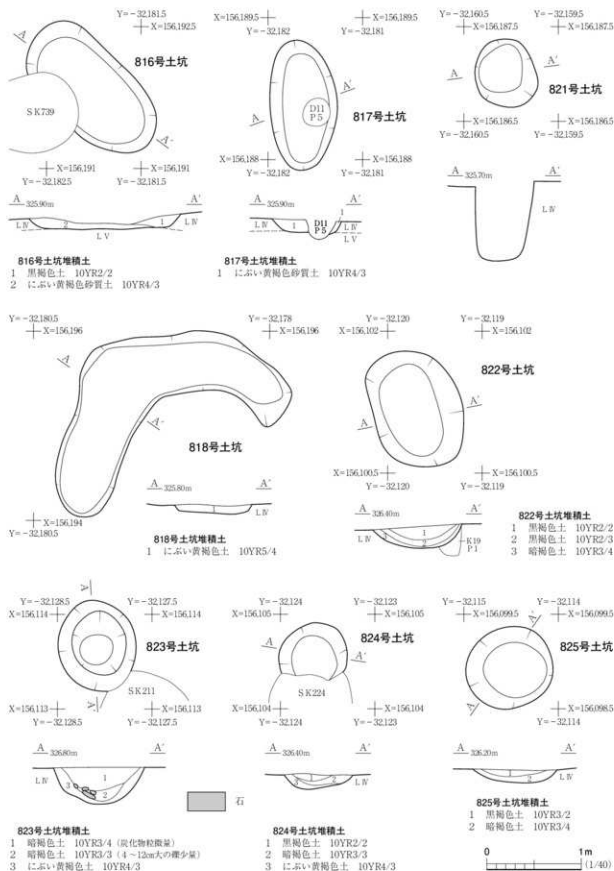


图166 816~818·821~825号土坑

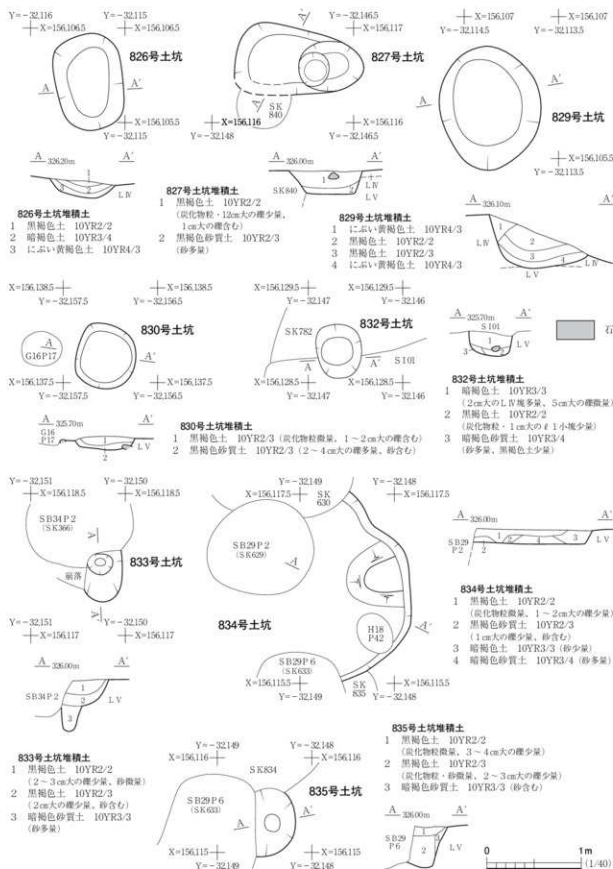


図167 826・827・829・830・832~835号土坑

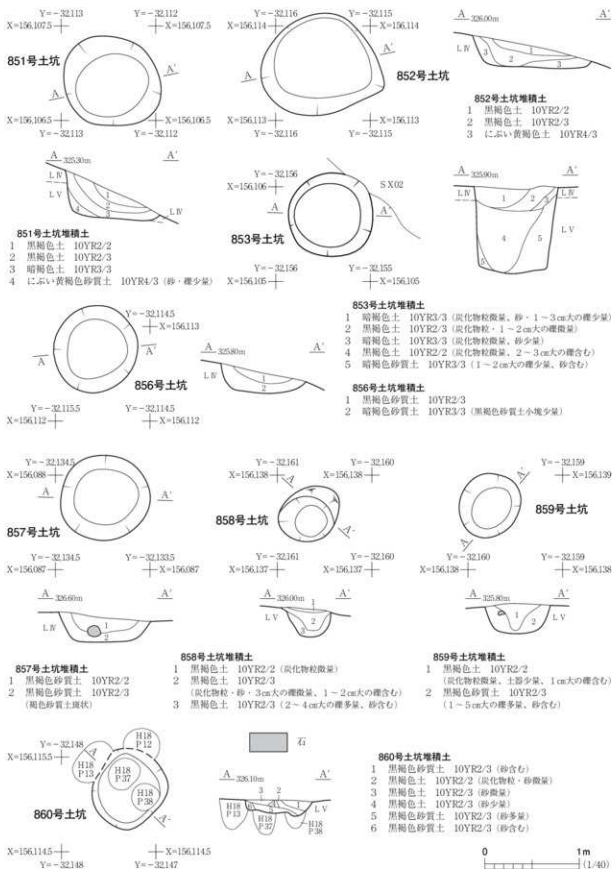


図169 851~853・856~860号土坑

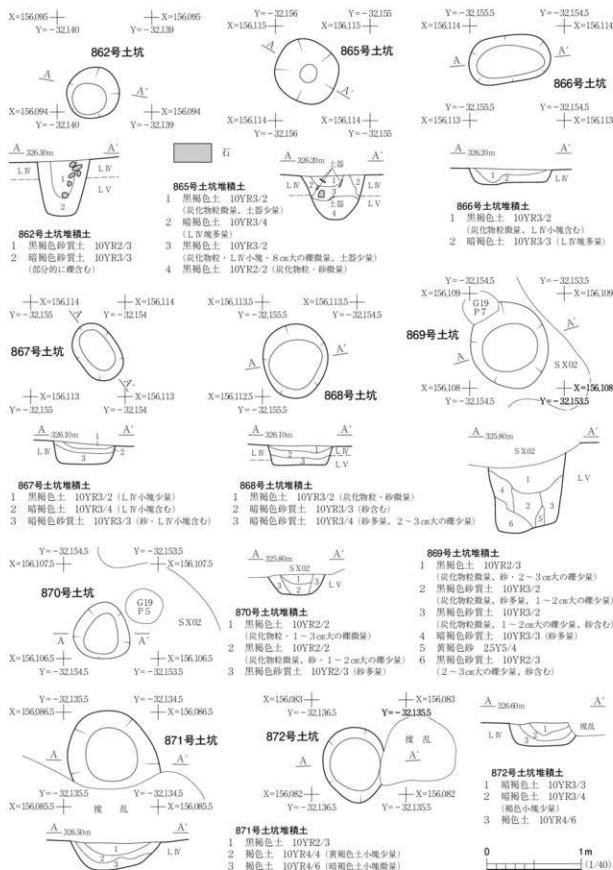


図170 862～865～872号土坑

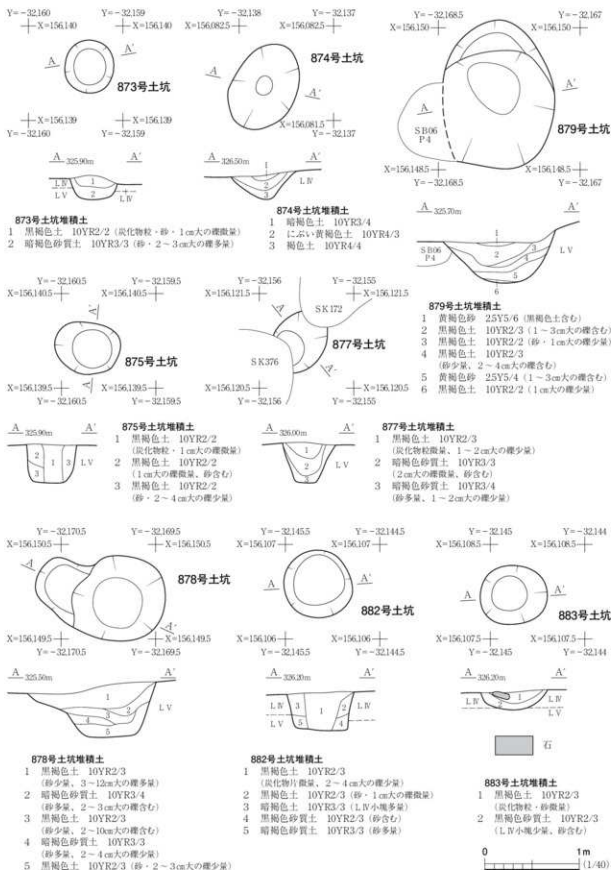


图171 873~875·877~879·882·883号土坑

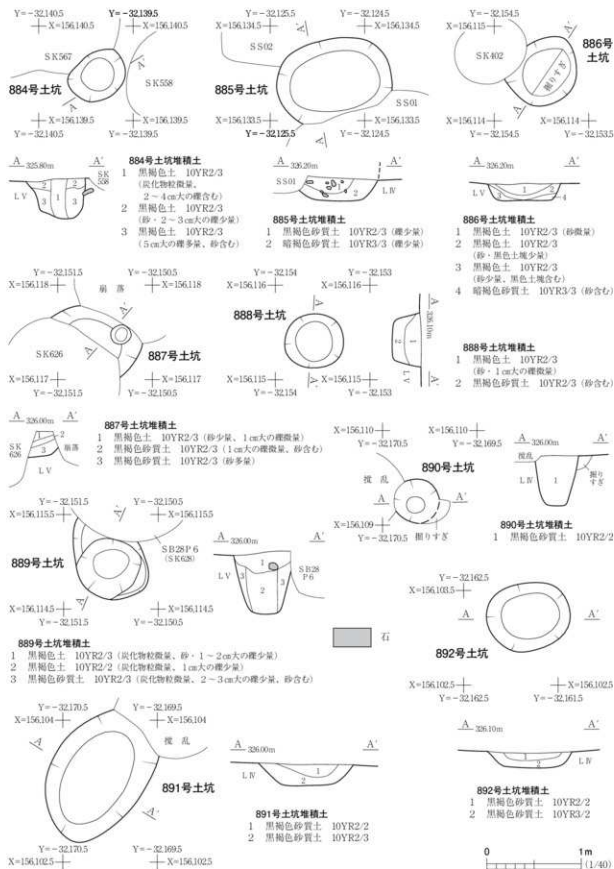


図172 884~892号土坑

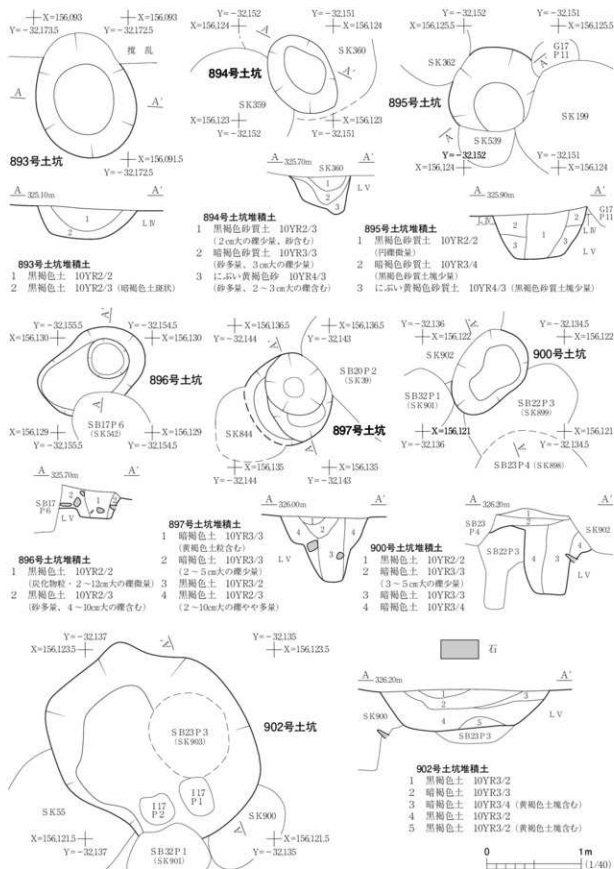


図173 893~897・900・902号土坑

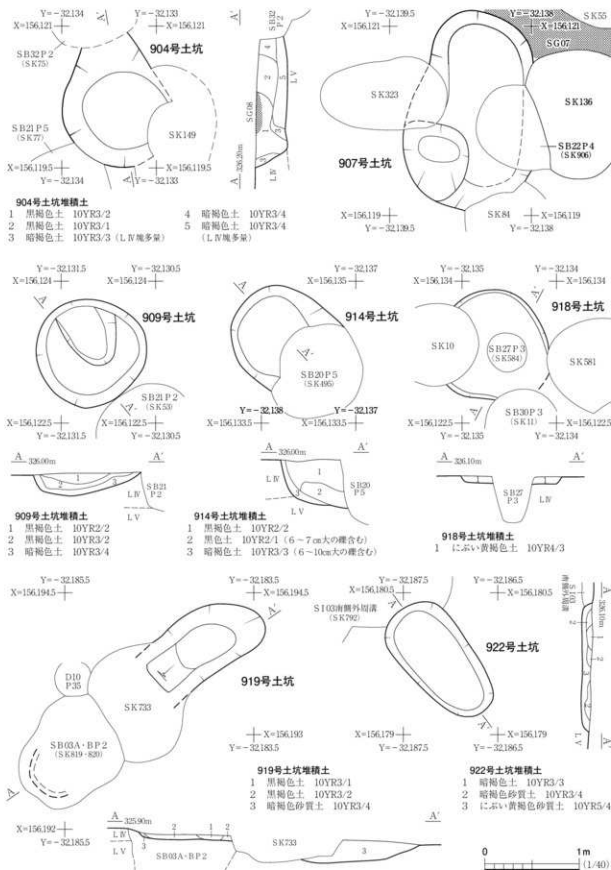


図174 904・907・909・914・918・919・922号土坑

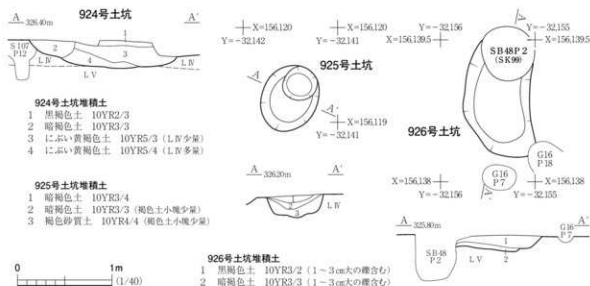


図175 924~926号土坑

816号土坑 SK 816 (図166、写真148)

本遺構は調査区北部のD 10グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は北西-南東主軸の長楕円形で、周壁はL.V、底面はL.V(砂層)である。周壁は直線的に緩やかに外傾して立ち上がり、底面は若干起伏が認められる。遺構内堆積土は2層に分層され、人為堆積土と推測される。

本遺構は長軸長が約1.6mで、平面形が長楕円形を呈し、土坑墓の可能性ある。(能登谷)

818号土坑 SK 818 (図166、写真148)

本遺構は調査区北部のD・E 10グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は鉤形で、周壁及び底面はL.Vである。周壁は直線的に外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺構内堆積土は1層で、人為堆積土と推測される。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

865号土坑 SK 865 (図170、写真152)

本遺構は調査区南部のG 18グリッドに位置し、平坦面に立地する。平面形は隅丸方形で底面が狭く、周壁が急角度で立ち上がることから、全体の形状はボウル形を呈している。周壁上部はL.V、周壁下部から底面はL.Vである。遺構内堆積土は4層に分層され、人為堆積土と推測される。ℓ 1・3から弥生土器片が散在的に出土した。本遺構の性格は不明である。(能登谷)

遺 物

再三述べたように、本遺跡で検出された遺構でもっとも多いのは土坑である。特に調査区中央部で環状に密集した土坑群が検出され、土器をはじめ多くの遺物が出土した。

ここでは、これら土坑群の形成過程を検討するため、各土坑の時期を示す遺物をできる限り示した。図示しなかったものについては特徴を記載し、時期の判断に資するよう努めた。

出土土器の大半は、粗製の深鉢である。全量を集計することはかなわなかったが、およそ9割5分以上は条痕か縄文が施された粗製の土器で、その多くに炭化物が付着している。ただし、粗製の

土器は数こそ多いものの時期を判断する材料とはなりづらく、図示した土器の大半は、文様から時期の判断ができるものである。

土坑群は重複が多い。検出時に新旧の判断ができなかったものについては断面で確認するために重複する複数の土坑を同時に掘り込んだり、重複していることがわからないまま掘り込みを行ったため、複数の遺構に含まれる遺物を同時に取り上げた場合も少なくない。記述を行うにあたっては、その旨を明記した。

図は土器と石器に大別し、石器についてはさらに器種ごとに図示した。土器については、縄文土器か弥生土器かを本来であれば記載するところであるが、特に縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の粗製土器は判断に苦慮するものが多く、ここでは器種のみを記した。

各土坑出土土器は、多くの場合で各時期のものが混在する。土坑の時期の判断は出土土器のうちもっとも新しい土器によったが、上述のような理由により混入がない訳ではなく、土器から判断される時期はあくまで上限を示すものである。

なお、遺物の時期は本来であれば「縄文時代晩期」、「弥生時代前期」などと記述するところであるが、本項に限り「時代」を省略し「縄文晩期」「弥生前期」などと記した。また、記述は遺物が出土した土坑のみとした。ここに記述がない土坑は、遺物が出土しなかったものである。土坑として調査し、その後の検討で掘立柱建物跡の柱穴であることが判明したものの出土遺物については、「第4節 掘立柱建物跡」に掲載した。あわせて表3の土坑一覧を参照されたい。

4号土坑 (図176-1・2、写真193)

図176-1は、鉢もしくは高杯の口縁部である。沈線で文様が描かれ、外面に炭化物がわずかに付着する。同図2は、鉢の口縁部である。工字文が描かれる。弥生前期。

5号土坑 (図176-3・4、写真193)

図176-3は、深鉢もしくは鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図4は壺である。口頸部の他、体部がわずかに遺存する。頸部は外反し、口縁部が屈折して外傾する。口縁部は波状をなす。口頸部は無文でミガキが施され、体部には縄文が施される。弥生前期。

6号土坑 (図176-5・6、写真193)

図176-5・6は、深鉢の体部である。接合しないが同一個体と思われる。縄文を施したのち沈線で流水工字文が描かれる。内外面に炭化物が付着する。弥生前期。

7号土坑 (図176-7～9、写真193)

図176-7～9は、いずれも深鉢の体部である。7は磨消縄文で、8・9は沈線でそれぞれ文様が描かれる。8は外面に炭化物が付着する。弥生前期。

8号土坑 条痕を施す粗製の深鉢が含まれる。縄文晩期末葉～弥生中期。

9号土坑 (図176-10、写真193)

図176-10は、深鉢の体部である。4本の沈線が密集して巡る。沈線の底には工具の先端を止め押しした跡が観察される。縄文晩期末葉～弥生前期。

10号土坑 (図176-11~13、写真193)

図176-11~13はいずれも深鉢で、11・12は体部、13は口縁部である。11は工字文が描かれ、沈線と縄文施文部に赤彩が施される。12・13は磨消縄文で文様が描かれ、13はカナムグラの擬縄文が充填される。弥生中期中葉。

12号土坑 (図176-14~16、写真187・193)

図176-14・15は甕である。接合しないが同一個体と思われる。平底、長胴で、体上部が弱く張り、口縁部は直立に近い角度で外傾する。底面に網代の圧痕が付される。外面に条痕を施したのち、体上部から中ほどにかけて縄文が施される。外面の口縁部から体上部にかけてと内面の底部付近を一周するように、同じく内面の体上部に炭化物が付着する。内面に付着する炭化物については炭素・窒素安定同位体比分析を行い、 C_3 植物に由来するという結果が得られている(付章第6節)。同図16は、粗製の深鉢の体上部から口縁部である。口縁部下端に輪積み痕を残してわずかに肥厚させて段をつくり、外面に横方向から斜め方向の条痕が粗雑に施される。外面に炭化物が付着する。弥生前期。

13号土坑 (図207-7、写真249)

図207-7は磨製石斧である。この他、磨消縄文が施された土器が出土した。弥生前~中期。

14号土坑 沈線で文様を描く土器が含まれる。弥生前~中期。**15号土坑** (図176-17、図209-6、写真193・251)

図176-17は、深鉢の口縁部から体上部である。磨消縄文でヒトデ文などが描かれる。外面に炭化物が付着する。図209-6は、敲石である。弥生中期前葉。

17号土坑 (図176-20、写真193)

図176-20は、粗製の深鉢の口縁部から体上部である。口縁部下端に輪積み痕を残して段をつくり、外面に横方向の条痕が施される。体部に炭化物が厚く付着する。縄文晩期末葉~弥生前期。

18号土坑 (図176-18・19・21、写真193)

図176-18・19・21は、26号建物跡P4、30号建物跡P5、18号土坑を同時に掘り込んだ際これらの上層から出土し、ここにまとめて掲載した。18は深鉢の体部で、縄文を施したのち工字文が描かれる。掘り去り部が特に深く掘られている。内外面に炭化物が付着する。19は器種不明の口縁部である。複合口縁で、肥厚部に縄文の末端結節が回転施文される。外面に炭化物が付着する。同図21は鉢の口縁部である。口唇部下に縄文帯が、その直下に3本の沈線が巡る。弥生前期。

20号土坑 (図176-22~24、写真194)

図176-22は、蓋の口縁部である。外面に縄文を施したのち口縁部直上に2本、内面の口縁部直上に1本の沈線がそれぞれ巡らされる。内外面に炭化物が薄く付着する。同図23は、深鉢の口縁部から体部である。口唇部に幅3cmの無文部を残して刻み目が施され、外面に磨消縄文で文様が描かれる。同図24は、深鉢の体部である。乳頭状の突起が外面に付され、突起の基部に横方向の貫通孔が穿たれる。突起が付されたのち、その直上に2本の沈線が巡らされ、突起の周囲を四角形の沈線文で囲み、密集する斜め方向の沈線が突起の両脇に充填される。弥生中期前葉。

21号土坑 磨消縄文で文様を描いた小片が含まれる。帯状の無文部がある。弥生前～中期。

23号土坑 (図176-25、写真194)

壺の頸部と思われる小片である。連弧文らしき文様が櫛描きによって上下数段描かれる。粒子の粗い赤色顔料が、外面と破断面の一部にみられる。弥生中期。

25号土坑 帯状の磨消縄文が描かれた小片が含まれる。弥生前～中期。

26号土坑 (図203-7、写真245)

図203-1は割器である。この他、帯状の磨消縄文が描かれた小片が含まれる。弥生前～中期。

27号土坑 磨消縄文が描かれた小片が含まれる。弥生前～中期。

28号土坑 細縄文を充填する磨消縄文で文様が描かれた小片が含まれる。弥生中期。

30号土坑 粗製深鉢の口縁部が含まれる。条痕が施され、口唇部直下に沈線文が描かれる。縄文晩期末葉～弥生中期。

32号土坑 帯状の磨消縄文が描かれた小片が含まれる。弥生前～中期。

33号土坑 (図176-26・27、写真194)

図176-26・27は、いずれも深鉢の体部である。26は、磨消縄文で文様が描かれる。27は、沈線で多重の四角形が描かれているようである。弥生中期中葉。

34号土坑 (図176-28・29、写真194)

図176-28は器種不明で、体部と思われる。縄文を施したのち数本の沈線を引き、その後に磨消している。沈線部分に赤彩が施される。同図29は壺で、体部の最上部のようである。上部に3本の沈線を巡らせ、その下にヒトデ文が描かれる。ヒトデ文の外側には刺突文が充填される。弥生中期中葉。

35号土坑 沈線で多重の四角形が描かれた小片、大洞C2式の小片が含まれる。弥生中期。

40号土坑 炭化物が付着する細片のみである。時期不明。

41号土坑 (図177-1・2、写真194)

図177-1は、深鉢の体部である。磨消縄文で重四角文が描かれる。縄文は充填されている。外面に炭化物が付着する。同図2は、壺の体部である。水平に巡らされた1本の沈線より上に沈線で文様が描かれ、下に縄文が施される。弥生中期。

42号土坑 (図177-3、写真194)

網目状然糸が施された粗製の深鉢の体部である。外面に炭化物が付着する。縄文晩期中葉。

43号土坑 (図177-4～6、写真194)

図177-4～6は、壺の体部である。4・5は同一個体と思われ、沈線で渦文が同心円文が描かれたのち交互ミガキが施される。外面に炭化物が付着する。6は口頸部境に4本の沈線を巡らせて縦の短いスリットを重ね、以下に渦文が同心円文、その間に銀杏葉形の小文を描く。弥生中期後葉。

44号土坑 (図177-7、写真194)

図177-7は、深鉢の体部である。沈線で多重の四角形が描かれ、その内部を横方向の波状文で充填する。外面に炭化物が付着する。弥生中期。

45号土坑 (図177-8・9、写真194)

図177-8・9は、いずれも壺の体部である。渦文もしくは同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。9は、逆三角形の小文が加えられる。弥生中期後葉。

46号土坑 条痕と縄文が施される小片のみである。弥生中期以前。**47号土坑** (図177-10~15、写真187・195)

図177-10は、鉢の口縁部から体部である。体上部はやや張り、頸部は弱くびれ、口縁部は外反する。波状口縁で、波頂部に刻みを1箇所有し、波頂部の刻み部分を除いた口唇部に沈線を巡らせる。体上部には工字文が描かれ、以下に縄文が施される。口頸部は無文である。同図11は、深鉢の口頸部である。緩やかに外反する。口唇部直下に4本の沈線を巡らせ、その下に沈線でやや縦長の四角形が4重に描かれる。内外面に炭化物が付着する。同図12は、甕の口縁部から体上部である。体上部が弱く張り、頸部はややくびれ、口縁部は外反する。口縁部外面を肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。頸部と体部には条痕が施される。口縁部外面の一部に炭化物が付着する。同図13・14は深鉢である。13は口縁部、14は体部である。いずれも工字文が描かれる。14は地文の上に工字文が描かれ、地文部分にわずかに赤彩が残る。同図15は深鉢の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期。

49号土坑 (図177-16~18、写真195)

図177-16は、壺の体部である。横方向のハケメを施したのち、櫛描で波状文、ついで縦のスリット文が描かれる。内面も外面と同じ原体で調整されている。同図17は、甕の体部から口縁部である。体上部は内傾し、口縁部は急な角度で外傾する。口縁部外面はヨコナデが施され、口唇部に縄文が回転施文される。体部は縄文が施され、その上端に末端結節が巡る。同図18は、壺の体部である。渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。弥生中期後葉。

50号土坑 (図177-19、図202-21、図209-7、写真195・244・251)

図177-19は、壺の体部である。渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキが粗雑に施される。図202-21は、石錐である。図209-7は、凹石である。弥生中期後葉。

51号土坑 (図178-1~6、図204-1、写真187・195・246)

図178-1・2は、深鉢の体部である。1は工字文が描かれ、2は磨消縄文で文様が描かれる。同図3は、壺の体下部である。縄文を施したのち平行する2本の沈線を巡らせ、その上部に2本の沈線で波状文が巡らされる。2本の沈線は同時施文である。同図4は、蓋である。鉢か高杯の可能性もあるが、口縁部付近の一部に炭化物が付着することから蓋として図示した。外面に縄文を施したのち、口唇部の直上に幅広の浅い沈線を巡らせ、体部に弧線で文様を描く。同図5は粗製の深鉢である。縄文を施したのち、口唇部直下に沈線による鋸歯文が巡らされる。外面に炭化物が付着する。同図6は、壺の口縁部である。口径の大きい広口のものである。口縁部外面を肥厚させて複合口縁とし、複合部に縄文が施される。頸部は無文である。頸部と内面にミガキが施される。この他、図示しなかったが、底部に笹葉圧痕をもち、外面に条痕を施す大型の粗製土器が出土した。図

204-1は、石罫である。弥生中期前葉。

52号土坑 沈線で工字文を描く土器が含まれる。弥生前期。

54号土坑 (図177-20、写真196)

図177-20は、高杯か鉢である。緩やかに湾曲しながら外傾し、口唇部に二山の突起をもつ。口唇部下に3本の沈線を巡らせ、その直下に掘り去り部を配置して、掘り去り部どうしは緩やかな上弦の弧線で結ばれる。掘り去り部の両脇には粘土塊が低く貼り付く。体部最下端にも沈線が巡らされ、体下部は縄文が施される。外面には赤彩が施されている。縄文晩期末葉～弥生前期。

55号土坑 (図177-21・22、写真196)

図177-21は、粗製の深鉢である。体上部に最大径をもち、口縁部は内湾する。外面に縄文が施され、口唇直下に末端結節が巡る。外面に炭化物が付着する。同図22は、深鉢の体部下半である。平行する2本の沈線を上下2段に巡らせ、その間に縄文が充填される。平行する沈線の間は無文である。破片の上端部に沈線文がわずかに遺存する。内外面に炭化物が付着する。弥生前期～中期前葉。

56号土坑 褐鉄鉾が出土した。

58号土坑 縄文を施す粗製深鉢の体部のみである。弥生中期以前。

59号土坑 (図177-23-25、図209-1、写真197・251)

図177-23は、壺の口縁部である。最上部が外側に屈曲する。外面に縦方向の条痕を施したのち、沈線で多重の「V」字と2重の縦長の隅丸方形が口唇部下に並んで描かれる。隅丸方形の内部はミガキが施されて条痕が消されている。同図24・25は深鉢である。24は体部で、平行する2本の沈線で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。25は口縁部で、内湾する。磨消縄文で文様が描かれる。図209-1は、凹石である。弥生中期前葉。

60号土坑 細縄文が施された土器が出土した。弥生中期。

61号土坑 (図178-7・8、図204-5、図208-1、写真197・246・249)

図178-7は、深鉢の体部である。体部最大径の位置よりやや上に2本の沈線を巡らせ、その上部に沈線で波状の文様が描かれる。外面全体に縄文が施されているようであるが、範囲や沈線との先後関係は摩滅のため判然としない。同図8は、壺の体部である。密集する重鋸歯文が棒状の施文具で描かれる。図示しなかったが、本土坑周囲の遺構外から同一個体と考えられる破片が数点出土した。図204-5は石罫、図208-1は石核である。弥生中期前葉。

62号土坑 (図204-3、写真246)

図204-3は、石罫である。この他、工字文が描かれる土器が数点出土した。口縁部内面に沈線を巡らせるもの、沈線内に赤彩が施されるものがある。弥生前期。

64号土坑 (図178-9、写真197)

図178-9は、粗製の深鉢の口縁部である。やや内湾する。外面に縄文が施され、口唇部直下に末端結節が巡らされる。外面に炭化物が付着する。弥生中期以前。

66号土坑 剥片のみで、土器は出土しなかった。

67号土坑 土器の小片のみで、時期を判断できる遺物は出土しなかった。

68号土坑 土器の小片のみで、時期を判断できる遺物は出土しなかった。

69号土坑 (図178-10、図204-2、写真197・246)

図178-10は、壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。外面に炭化物が付着する。図204-2は、石楾である。弥生中期後葉。

70号土坑 (図178-11-13、写真197)

図178-11は、壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。同図12は、器種不明の口頸部である。口縁部は外反する。口頸部の境に平行する2本の沈線を巡らせ、口縁部に縦方向の密集する沈線を引き、頸部に2本の沈線による波状文が描かれる。同図13は、壺の頸部と思われる。二本同時施文の沈線で弧文が描かれる。弥生中期後葉。

71号土坑 剥片のみで、土器は出土しなかった。

72号土坑 (図178-14、写真197)

図178-14は、深鉢の口縁部である。やや内傾する。口唇部直下に縄文が施され、その下部に3本の沈線を巡らせる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

73号土坑 (図178-15、写真197)

図178-15は壺の体部である。重三角文が描かれたのち、交互ミガキが施される。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

76号土坑 (図178-16・17、写真187・197)

図178-16は、甕である。体下部以下を欠損する。最大径を体部中ほどにもつ張りの弱いやや長胴の体部と外傾する口縁部からなる。頸部外面に輪積み痕を残して段をつくり、その直上に列点を2列、その上に2本の沈線でピッチの長い波状文を上下2段に巡らせる。波状文と列点文は同じ二本同時施文具が用いられている。口唇部と体部には、オオバコのもと思われる擬縄文が施される。口縁部内外面の一部に炭化物が付着する。同図17は、壺の体上部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期末葉～後期初頭。

78号土坑 条痕が施される土器、網代の圧痕を付す底部が出土した。弥生中期以前。

79号土坑 条痕が施される土器が出土した。弥生中期以前。

79・119・120号土坑 (図179-1、写真197)

3基の土坑を同時に掘り込んだ際に、これらの上層から出土したものである。図179-1は、鉢の口縁部である。外面に変形工字文が描かれ、工字文の内部に縄文が施される。沈線に赤彩が施される。内面の口唇部下にも沈線が巡らされる。弥生前期。

81号土坑 (図178-18-20、図204-4・6、写真187・246)

図178-18・19は、鉢である。18は、網代の圧痕が付される平底、外傾する体部からなる。磨消縄文で文様が描かれる。19は平底で、体部と口縁部にかけて直線的に外傾し、口唇部に二山の突起を有する。口縁部内面には稜線が巡る。外面に磨消縄文で正逆の三角形を組み合わせた文様が

描かれる。同図20は、粗製の深鉢である。口縁部から体下部が遺存する。体部は外傾して体上部に最大径を有し、無頸で、口縁部は内湾する。外面に条痕が施される。内面にはわずかに輪積み痕が残る。図204-4・6は石鉢である。4は未成品と思われる。弥生中期前葉。

82号土坑 磨消縄文で文様が描かれた土器が出土した。弥生中期。

84号土坑 縦の沈線をもつ工字文、帯をもたない磨消縄文が描かれた土器が出土した。弥生前期～中期前葉。

85号土坑 精製された無文の壺の体部片が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

87号土坑 肩部に鋸歯文が巡る小型の壺と思われる小片が出土した。時期不明。

88号土坑 (図179-2、写真197)

図179-2は鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

89号土坑 (図179-3、写真198)

図179-3は、深鉢の体部である。磨消縄文で逆三角形と菱形を組み合わせた文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

90号土坑 (図179-4・5、写真198)

図179-4は、深鉢の体部である。工字文が描かれ、外面に炭化物が付着する。同図5は蓋の口縁部である。外面に縄文が施され、内面の口唇部直上に沈線が巡らされる。口縁部内外面に炭化物が付着する。弥生前期～中期前葉。

91号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

92号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

93号土坑 (図179-6・7、写真198)

図179-6・7は、いずれも壺の体部である。6は、渦文が描かれ交互ミガキが施される。7は、渦文もしくは同心円文とこれらを結ぶブリッジが描かれ、細縄文が充填される。縄文施文部は赤彩が施されているようであるが色調は赤くなく、7.5YR5/1褐色である。弥生中期後葉。

94号土坑 磨消縄文で文様が描かれた土器が出土した。弥生前～中期。

95号土坑 磨消縄文で文様が描かれた土器が出土した。弥生前～中期。

96号土坑 条痕が施された土器の小片のみである。弥生中期以前。

97号土坑 磨消縄文が施された土器が出土した。弥生前期～中期前葉。

100号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

101号土坑 沈線で文様を描く土器が出土した。弥生前期～中期前葉。

105号土坑 (図179-8・9、写真198)

図179-8・9は、壺の体部である。接合しないが、同一個体と思われる。磨消縄文で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期中葉。

106号土坑 (図202-1、写真244)

図202-1は凸基の石鉢である。他に縄文と条痕を施す粗製土器が出土した。弥生中期以前。

108号土坑 (図179-10・11、写真198)

図179-10は、粗製深鉢の口縁部から体上部である。口縁部は内湾し、外面に輪積み痕を残して段をつくる。口縁部に横方向の、体部に斜め方向の条痕が施される。外面には炭化物が付着する。同図11は、深鉢の体部である。体上部に複数本の沈線を巡らせ、その下方に目の細かな条痕が施される。縄文晩期末葉～弥生前期。

110号土坑 (図179-12～14、写真198)

図179-12は深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図13は鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図14は壺の体部である。ハケメを施したのち2本の沈線による波状文を巡らせ、その下部に多重の沈線で「V」字などを描く。59号土坑から出土した土器(図177-23)と特徴が似ることから同一個体の可能性がある。弥生中期前葉。

111号土坑 (図179-15～17、写真187・198)

図179-15は、鉢の底部である。磨消縄文で文様が描かれる。底面には笹葉の圧痕が付されているようだが、わずかしこ遺存せず判然としない。同図16は、蓋あるいは高杯と思われる。体部に縄文が施される。同図17は、壺の体上部である。磨消縄文でヒトデ文が描かれる。弥生中期前葉。

113号土坑 土器の小片のみである。時期不明。**114号土坑** (図179-18、図202-20、写真187・244)

図179-18は、甕である。底部を欠損する。体下部は外傾し、体上部に最大径をもち、口頸部は緩やかな湾曲をもってわずかに外傾する。口頸部の境と頸部体の境にそれぞれ沈線を1本巡らせ、口縁部に無節の縄文が、頸部にミガキが、体部に条痕が、それぞれ施される。外面の体部最大径付近と内面の体下部に炭化物が付着する。図202-20は、石錐である。弥生前期～中期前葉。

116号土坑 (図179-19～22、図202-18、図205-1、写真199・244・247)

図179-19は鉢の体部、同図20は深鉢の体部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれ、20の外面には炭化物が付着する。同図21は、粗製の深鉢の口縁部から体上部である。口縁部に横方向の条痕、体部に縦走する縄文を施し、口唇部直下に沈線で波状文が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図22は壺の口縁部から体上部で、体上部がやや張り、緩やかに湾曲しながら外傾する口頸部に至る。口縁部の外面が肥厚し、肥厚部に縄文が施される。頸部は無文で、体部に縄文が施される。体部にわずかに炭化物が付着する。図202-18は石錐、図205-1は石鉞である。弥生中期前～中葉。

117号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。弥生中期以前。**119号土坑** (図180-1、写真188)

図180-1は、深鉢の口縁部から体部である。体下部は外傾し、体上部に最大径をもち、無頸で、口縁部は内湾する。体上部に流水工字文を多段に描き、工字文に磨消縄文を千鳥に施す。弥生前期。

120号土坑 (図180-2・3、写真199)

図180-2は、壺の体部である。渦文が同心円文が描かれ、摩滅のため判然としないが交互ミガキが施されているようである。同図3は深鉢の体部である。磨消縄文が描かれる。弥生中期後葉。

122号土坑 細縄文が充填される渦文か同心円文を描く壺が含まれる。弥生中期中葉。

123号土坑 (図180-4・5、写真199)

図180-4は深鉢の体部で、変形工字文が描かれ、外面に炭化物が付着する。同図5は甕の口頸部で、口頸部の境に沈線を巡らせ、口縁部にカナムグラの擬縄文が施される。外面に炭化物が付着する。この他、図示しなかったが、直線的な沈線と細縄文による磨消縄文が施された小片が出土した。弥生中期前～中葉。

125号土坑 (図180-6・7、写真199)

図180-6は、深鉢の体部である。条痕を施したのち工字文が描かれる。同図7は、壺の体部である。磨消縄文で渦文か同心円文が描かれ、細縄文が充填される。弥生中期中葉。

126号土坑 条痕と縄文を施す土器が出土した。時期不明。

127号土坑 (図180-8・9、写真199)

図180-8・9はいずれも深鉢の体部で、磨消縄文による文様が描かれる。弥生中期前葉。

130号土坑 (図180-10、写真199)

図180-10は、深鉢の口縁部である。口唇部に二山の突起を有する。口唇部下に2本の沈線を巡らせ、口縁部に縄文を施す。頸部は無文である。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

134号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

135号土坑 体部に縄文を施し底部に笹葉の圧痕を付す粗製深鉢、条痕を施す粗製深鉢の体部の大破片、網代の圧痕を付す底部が出土した。縄文晩期末葉～弥生中期前葉。

136号土坑 細い沈線と交互ミガキが施された土器、附加条縄文が施された土器が出土した。弥生中期後葉。

138号土坑 (図180-11、写真200)

図180-11は、深鉢の体部である。多重の四角形と四角形どうしを結ぶブリッジが沈線で描かれる。弥生中期中葉。

139号土坑 (図180-12、写真200)

図180-12は、深鉢の体部である。縄文を施したのち変形工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生前期。

142号土坑 (図205-2、写真247)

図205-2は、石楯である。その他、条痕を施す土器片が出土した。時期不明。

143号土坑 磨消縄文で文様が描かれた小片、無文の粗製深鉢の大破片が出土した。弥生中期前葉。

144号土坑 (図180-13～15、図205-3、図207-4、図209-9、写真188・200・247・250・251)

図180-13は、高杯の脚部である。脚上部は中空で垂直に近い急な角度で据に向かって広がり、裾部は屈折して短く「ハ」字に広がる。裾部外面が肥厚し、肥厚部に無節の縄文が施される。杯部は欠損するが、遺存した部分は急な角度で立ち上がる。同図14は深鉢の体部で、磨消縄文で文様

が描かれる。同図15は、壺の体部か頸部である。重連弧文が描かれ、交互ミガキが施される。この他、細い沈線で多重の菱形の文様を描き交互にミガキと赤彩を施す小片、附加条縄文を施す甕の小片、カナムグラの擬縄文を施す小片が出土した。図205-3は石鉢、図207-4は磨製石斧、図209-9は凹石である。弥生中期後葉。

145号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

146号土坑 (図180-16～18、図202-2、写真200・244)

図180-16は、高杯の脚部である。「ハ」字に広がり、裾部外面を肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。肥厚部直上には円窓がほぼ等間隔に穿たれる。同図17は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。同図18は、壺の体部である。渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。図202-2は、凸基の石鉢である。弥生中期後葉。

147号土坑 (図180-19)

図180-19は蓋のつまみ部である。上面に木葉痕が付され、笠部に細縄文が施される。弥生中期中葉。

148号土坑 磨消縄文が施された小片が出土した。弥生前期～中期中葉。

149号土坑 工字文、結節を有する縄文が体部に施された壺が出土した。弥生前期。

150号土坑 (図180-20、写真200)

図180-20は蓋の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれ無節の縄文が充填される。弥生中期前葉。

151号土坑 掘り去り部のある工字文を描き、口縁部内面に沈線を巡らせる鉢が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

152号土坑 (図180-21、写真188)

図180-21は、高杯である。脚部の裾を欠損する。脚上部は円錐台形で、杯部は浅く、体部はきわめて緩やかに湾曲しながら緩やかな角度で立ち上がり、口縁部は明瞭な稜線を境に屈折して内傾する。口唇部は短く外傾し、口唇部直下の内面に沈線が巡らされる。口縁部の下半から体上部にかけてを文様帯とする。文様帯は、上下に沈線を巡らせて区画し、流水工字文が描かれる。脚部の中ほどに3本の沈線を巡らせ、体部下半から脚上半にかけての沈線の間に横走る縄文が施される。工字文は口縁部と体部をまたぎ、縄文施文部は体部と脚部をまたぐというように、文様帯が部位をまたぐ特徴がある。全体に精巧で丁寧なつくりである。弥生前期。

153号土坑 (図180-22・23、図202-3、図203-1、写真200・244・245)

図180-22は壺の体部である。渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキが粗雑に施される。同図23は、深鉢の体部である。沈線で多重の四角形が描かれる。外面に炭化物が付着する。図202-3は凸基の石鉢、図203-1は石匙である。弥生中期後葉。

153・178号土坑 (図180-24・25、写真200)

2基の土坑を同時に掘り込んだ際にその上層から出土したものである。図180-24は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図25は、壺の頸部と思われる。沈線が巡らされ、縦方向の短い沈線が密に引かれる。

155号土坑 (図180-26~28、写真200)

図180-26は、壺か深鉢の頸部から体部である。縄文を施したのち、頸部部の境に沈線で鋸歯文が上下2段に描かれる。外面に炭化物が付着する。同図27は壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、カナムグラの擬縄文が施される。同図28は、深鉢の体部である。ブリッジを有する磨消縄文による文様が描かれる。弥生中期中葉。

159号土坑 (図180-29、写真200)

粗製深鉢の体部である。網目状断糸文が施される。外面に炭化物が付着する。縄文晩期中葉。

161号土坑 (図180-30、写真200)

深鉢の体部である。磨消縄文でヒトア文が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

170号土坑 (図180-31・32、写真200)

いずれも深鉢の体部で、31は磨消縄文、32は密集する沈線で文様が描かれる。弥生中期前~中葉。

171号土坑 地文を施したのち重ねて沈線文を描く土器が出土した。弥生前期~中期前葉。

172号土坑 (図181-1~5、写真188・200)

図181-1は、壺の体部下半である。平底で体下部がやや急な角度で立ち上がる。最大径の位置に平行する2本の沈線を巡らせ、これより上を文様帯、これより下に縄文がまばらに施される。縄文は無節のようである。内面と破断面に炭化物が付着する。後述する175号土坑出土土器(図181-8)と同一個体と思われる。同図2は、深鉢の体部である。掘り去り部のある工字文が描かれる。同図3は、鉢の口縁部である。口唇部下に4本の沈線が回り、その下方に4本の沈線で波文を描き、さらにその下方に数本の沈線が巡らされる。波文の空隙には細縄文が充填される。口唇部には刻み目が施される。同図4・5は、壺である。4は口縁部で、口唇部直下に沈線を巡らせ、その下に3重の連弧文が描かれる。口唇部直下の沈線上に大豆大の粘土粒が貼り付けられる。5は体部で、渦文が同心円文が描かれたのち、交互ミガキが施される。弥生中期後葉。

173号土坑 (図181-6、写真200)

鉢の口縁部である。変形工字文と思われる文様が描かれる。炭化物が付着する。弥生前期。

175号土坑 (図181-7・8、写真201)

図181-7・8は、壺の口縁部である。7は受け口状で、口唇部直下に4本の沈線が巡らされる。8は直線的に外傾し、口唇部直下と頸部に平行する2本の沈線を巡らせ、平行する2本の沈線による層波文が口縁部に描かれる。層波文の頂部には縦の短沈線が配置される。層波文内には縄文が充填される。縄文は無節のようである。外面と破断面に炭化物が付着する。前述した172号土坑出土土器(図181-1)と同一個体と思われる。弥生中期中葉。

176号土坑 (図181-9・10、写真201)

図181-9は、高杯か鉢の口縁部である。口唇部に二山の突起を有する。突起の頂部には刻みが1箇所施され、突起を除く口唇部に沈線が巡る。外面に掘り去り部のある工字文が描かれる。同図10は壺の体部である。細い沈線で渦文が同心円文と思われる文様が描かれる。弥生中期後葉。

178号土坑 (図181-11・12、図205-4、写真201、247)

図181-11は、深鉢か壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図12は、器種不明の口縁部である。二本同時施工具により弧線と斜め方向の直線が描かれる。図205-4は石罫である。弥生中期。

179号土坑 (図181-13・14、図208-3、図209-8、写真201・250・251)

図181-13は、鉢の口縁部である。口唇部を内面に肥厚させて肥厚部に1本の沈線を巡らせ、沈線の底に円形の刺突列を密に巡らせる。肥厚部の下には無文帯が巡り、さらにその下に4本の沈線が巡らされる。同図14は、深鉢の口縁部である。口唇部に突起を有する。外面に縄文を施したのち口唇部下に3本の沈線を巡らせ、突起に縦の短沈線が付かれる。図208-3は石核、図209-8は凹石である。縄文晩期末葉～弥生前期。

181号土坑 (図181-15・16、図205-5、写真188・201・247)

図181-15は、深鉢の体部である。平行する2本の沈線で菱形の文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図16は、蓋の笠部である。外面全体に条痕を施したのち、口縁部付近の一部に帯状の縄文が施される。図205-5は、石罫である。弥生中期前葉。

182号土坑 (図181-17・18、写真201)

図181-17は、深鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図18は壺の体上部である。条痕を施したのち、二本同時施工具で格子状の文様が描かれる。弥生中期。

184号土坑 (図181-19、写真201)

図181-19は、深鉢の体部である。縄文を施したのち工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。図示しなかったが、この他に二ツ釜式の壺の体部片が出土した。弥生中期後葉。

186号土坑 帯状の磨消縄文、附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期中～後葉。**187号土坑** 太い沈線を巡らす土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。**192号土坑** 縄文を施す粗製土器の体部片のみである。時期不明。**193号土坑** (図181-20・21、写真201)

図181-20・21はいずれも深鉢の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。21は、カナムグラの擬縄文が施される。弥生中期中葉。

195号土坑 縄文を施す小片のみである。時期不明。**196号土坑** (図181-22、写真201)

図181-22は、深鉢の体部である。磨消縄文でヒトデ文が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

197号土坑 (図181-23・24、写真201)

図181-23は、壺の口縁部である。受け口状で、外面に細縄文が施される。同図24は、器種不明の体部である。内外面に条痕を施したのち、外面に櫛描で波状文などの文様が描かれる。弥生中期。

198号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生前期～中期中葉。

199号土坑 (図181-25、写真202)

図181-25は、蓋の口縁部である。口唇部直上に4本の沈線を巡らせ、やはり4本の沈線で鋸歯文が描かれる。口縁部内面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

200号土坑 (図181-26、写真202)

図181-26は、高杯の脚部である。層波文と思われる文様が3・4本の沈線で描かれ、縄文が充填される。弥生中期中～後葉。

201号土坑 (図181-27・28、図182-1・2、図202-4・22、図205-6、写真202・244・247)

図181-27は鉢の口縁部から体部である。浮線網状文により文様が描かれ凹部に赤彩が施される。内面の口唇部下に沈線が巡らされる。同図28は壺の体上部である。磨消縄文でヒトデ文などの文様が描かれる。図182-1は高杯の杯部と脚部で、脚部の大半を欠損する。体部は緩やかに湾曲しながら外傾し、口縁部は外側に屈折してほぼ水平に延びる。口唇部は波状で、上からみると花弁状をなす。口縁部と体部の境には、外面に沈線が巡らされ、内面に稜線が巡る。体部と脚部の境には稜線が巡る。内外面とも無文で、ナデとミガキで平滑に調整される。胎土に混和材は含まれず、色調は灰色である。同図2は蓋の笠部である。外面全体に無節の縄文が施される。図202-4は凸基の石鉢、同図22は石鉢、図205-6は石鉢である。弥生中期前葉。

202号土坑 (図182-3～7、写真188・202)

図182-3は、鉢の体部から口縁部である。無頸で、体部から口縁部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁部は内湾する。口唇部に突起を有する。外面に浮線網状文が描かれ、凹部に粒子の粗い顔料で赤彩が施される。同図4は、鉢の底部から口縁部である。平底で、体下部は直線的に外傾し、体部最大径の位置で屈折して体上部は直線的に内傾する。体上部を文様帯とする。文様帯は上下に沈線を巡らせて区画し、流水工字文が描かれる。体下部には縄文が施され、底面には網代の圧痕が付される。内外面にわずかに炭化物が付着する。同図5は、鉢か高杯の体部から口縁部である。掘り去り部のある工字文が描かれ、内面の口唇部下に沈線が巡らされる。同図6は、深鉢の体上部から口縁部である。体上部に工字文が描かれ、口縁部は無文である。同図7は、器種不明の口頸部である。頸部に沈線を2本巡らせ、口縁部に斜め方向に密集する沈線文が描かれる。内外面とも赤彩が施される。弥生前期。

204号土坑 目の細かい条痕を施す土器が出土した。時期不明。

205号土坑 工字文に縄文が充填される小片が出土した。弥生前期。

212号土坑 (図182-8・9、図208-2、写真188・202・249)

図182-8は、深鉢である。底部を欠損する。体下部は急角度で立ち上がり、体上部は膨らみをもって張り、口縁部は短く外傾する。口縁部と体部の境に段を有する。体上部を文様帯とする。文様帯は、上下を沈線で区画し、左右を連結する2重の菱形が沈線で描かれる。体下部は、縄文が施されたのち平行する3本の沈線を3単位巡らせ、その間の縄文が磨り消される。内外面に炭化物が付着する。同図9は、深鉢の体上部から口縁部である。口縁部と体部の境に段を有する。体部に条痕を

施したのち、段の直下に数本の平行する沈線が巡らされ、掘り去り部を設けて工字文としている。
図208～2は、石核である。弥生前期。

213号土坑（図182～10、写真188）

図182～10は、深鉢である。底部を欠損する。体下部は急角度で立ち上がり、体上部はわずかな膨らみをもって張り、口縁部は短く外傾する。体上部を文様帯とする。文様帯は、体下部に縄文を施したのち上下に沈線を巡らせて区画し、掘り去り部のある変形工字文が描かれる。体下部の地文上に平行する2本の沈線が巡らされ、内面の口唇部直下に1本の沈線が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

215号土坑（図183～1～3、図202～5、写真188・202・244）

図183～1は、鉢である。平底で、体下部から口縁部まで直線的に外傾する。体上部を文様帯とする。文様帯は、上下に沈線を巡らせて区画し、太い縦の短沈線がある工字文が描かれる。体下部には縄文が施される。沈線と縄文施文部のごく一部に赤彩が残る。外面全体に赤彩が施されていたと思われる。同図2は、鉢か高杯の体部から口縁部である。外面に沈線で文様が描かれ、内面の口唇部下に沈線が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。同図3は、鉢の口縁部から体部である。工字文が描かれる。図202～5は、凸基の石鐏である。弥生前期。

217号土坑（図183～4、写真203）

図183～4は、深鉢か鉢の体上部である。条痕を施したのち、沈線を巡らせて文様帯の上下を区画し、平行する2本の沈線で鋸歯文が描かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

218号土坑（図183～5、写真203）

図183～5は、深鉢の体部から口縁部である。口唇部に突起を有する。外面に工字文が描かれ、突起の外面に縦の短沈線が引かれる。弥生前期。

220号土坑（図183～6～11、写真188・189・203）

図183～6～8は、深鉢の体部から口縁部である。6は、体上部に変形工字文が描かれる。工字文内部には縄文が施される。7は、口唇部に突起を有し、突起の外面に縦の短沈線が引かれる。外面に炭化物が付着する。8は、口唇部に突起を有し、体上部に工字文が描かれる。沈線の一部に赤彩が施される。内外面に炭化物が付着する。同図9・10は深鉢である。接合しないが同一個体と思われる。平底で、体下部が直線的に立ち上がる。体上部は膨らみをもって張り、口縁部は外側に湾曲しながら垂直に近い急な角度で立ち上がる。口頸部境に段を有する。体上部に縄文を施したのち平行する複数本の沈線が巡らされる。体下部には横走する縄文が施される。口縁部は無文である。内外面に炭化物が付着する。底部は焼成後に内面側から穿孔されているようである。同図11は鉢である。平底で、緩やかに湾曲しながら外傾して立ち上がり、口縁部に至って垂直に近い角度となる。外面全体に縄文が施されていると考えられるが、外面の大部分に炭化物が厚く付着し、観察できない状態である。底面には網代の圧痕が付される。内面にはごくわずかに炭化物が付着する。縄文晩期～弥生前期。

221号土坑 (図183-12~14、図202-6、写真189・203・244)

図183-12は壺の口頸部と体部の一部である。頸部は上方に向かってわずかに開く筒形で、口縁部は緩やかに湾曲しながら開く。口縁部外面は肥厚して頸部との境に段を有し、口唇部を指頭で押圧して波状につくる。無文で、外面にわずかに炭化物が付着する。同図13は、蓋である。天井は平坦で、寸胴のつまみ部から緩やかに湾曲しながら開いて笠部に至る。外面に末端結節のある無節の縄文が施される。同図14は、深鉢の体部から口縁部である。磨消縄文によりヒトデ文などの文様が描かれる。内外面に炭化物が付着する。図202-6は、凸基の石鏃である。弥生中期前葉。

223号土坑 (図202-7、写真244)

図202-7は、平基の石鏃である。土器は出土しなかった。

224号土坑 (図184-1、写真203)

図184-1は深鉢の体部から口縁部である。外面に縄文を施したのち、体部最上部に3本の沈線が巡らされる。外面にわずかに炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

226号土坑 (図184-2、写真203)

図184-2は深鉢の体部である。掘り取り部のある工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

229号土坑 (図184-3、写真203)

図184-3は、深鉢の体部から口縁部である。口唇部に突起を有する。外面に工字文が描かれ、炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

230号土坑 (図184-4、図206-1、図209-2・3、写真203・247・251)

図184-4は深鉢の体部から口縁部で、口唇部に突起を有する。掘り取り部のある工字文が描かれる。図206-1は石鏃、図209-2・3は凹石である。縄文晩期末葉。

231号土坑 波状文を浅い沈線で口縁部に描く粗製深鉢が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

233号土坑 太い沈線を数本巡らせる土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

236号土坑 蓋の口縁部の小片が出土した。弥生前～中期。

238号土坑 (図184-5・6、写真189)

図184-5・6は、粗製の深鉢である。体上部と体下部が接合しないが同一個体と思われる。体下部は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、体上部に最大径を有し、口縁部は内湾する。口縁部から体部中ほどにかけて無節の縄文が施される。数箇所に補修孔が穿たれ、外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生中期。

239号土坑 (図184-7・8、写真203)

図184-7は、器種不明の体部である。縄文を施したのち沈線を引いて文様を描き、一部が磨り消されているようである。同図8は、深鉢の体部である。オオバコの擬縄文を施したのち、数本の沈線が巡らされる。弥生前期。

240号土坑 (図184-9・10、写真203)

図184-9は、深鉢の口縁部である。縄文を施したのち、沈線で文様が描かれる。同図10は、粗製の深鉢の体部である。櫛描きで文様が描かれる。弥生前～中期。

242号土坑 (図184-11、写真203)

図184-11は、深鉢の口縁部である。磨消縄文により文様が描かれる。弥生中期前葉。

243号土坑 (図184-12・13、写真189・204)

図184-12は、深鉢の体部である。菱形と正逆の三角形を組み合わせた文様が描かれ、菱形の内面には「へ」字形の文様が、三角形の底辺には直線が添えられる。三角形の内部に縄文が充填される。外面に炭化物が付着する。同図13は、深鉢の底部から体下部である。やや凹面をなす平底で、体下部は急な角度で立ち上がる。体部の最下部に縄文を施したのち、掘り去り部がある工字文が外面全体に多段に描かれる。沈線部分に赤彩が施される。縄文晩期末葉～弥生中期前葉。

244号土坑 縄文を施す小片のみである。時期不明。**245号土坑** (図184-14・15、写真203)

図184-14は、深鉢の体部である。密集する沈線で逆三角形が描かれる。同図15は、壺の頸部か体部である。平行する4本の沈線を巡らせ、赤彩が施される。弥生中期中～後葉。

246号土坑 (図184-16、図208-8、写真204・250)

図184-16は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。図208-8は、管玉である。弥生中期中葉。

248号土坑 土器の小片のみである。時期不明。**249号土坑** 土器の小片のみである。時期不明。**250号土坑** 土器の小片のみである。時期不明。**251号土坑** 土器の小片のみである。時期不明。**252号土坑** (図184-17～19、図202-8、写真204・244)

図184-17・18は、壺の体部である。17は渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。交互ミガキが施されない部分には赤彩が施される。18は、直線的な沈線で文様が描かれる。同図19は、深鉢か壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。図202-8は、凸基の石籤である。弥生中期後葉。

253号土坑 (図184-20、写真204)

図184-20は、深鉢の体部である。体上部に最大径をもつ。最大径の位置より上を文様帯とする。外面に縦方向の条痕を施したのち、文様帯の上端に掘り去り部のある工字文、下端に沈線を巡らせて区画し、内部に綾杉文が描かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

255号土坑 (図184-21、写真204)

図184-21は、深鉢の体部から口縁部である。磨消縄文で文様が描かれ、帯状の無文部には連続する刺突文が巡らされる。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

258号土坑 (図184-22、写真204)

図184-22は、鉢の体部から口縁部である。緩やかに湾曲しながら外傾する。磨消縄文で文様が描かれ、帯の内部は無節の縄文で充填される。弥生中期前葉。

259号土坑 (図185-1、写真204)

図185-1は、深鉢か鉢の体部である。工字文が描かれる。弥生前期。

260号土坑 (図185-2・3、図203-6、写真204・245)

図185-2は、壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図3は、深鉢の口縁部である。数本の沈線が巡らされる。図203-6は石匙である。弥生前期～中期前葉。

261号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

262号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

263号土坑 (図185-4～6、写真189・204)

図185-4は、深鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図5は、深鉢の体部である。変形工字文が描かれ、沈線内に粒子の粗い赤彩が施される。同図6は、粗製の深鉢である。体下部は緩やかに湾曲しながら外傾し、体上部が弱く張り、口縁部は内湾する。外面に条痕を施したのち、口唇部直下に2本の沈線が巡らされる。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

264号土坑 (図185-7、写真190)

図185-7は蓋である。つまみ部は直線的に外傾し、笠部は「ハ」字に開く。つまみ部の端部外面を肥厚させ、肥厚部と笠部に縄文を施す。笠部の特に口縁部内外面に炭化物が付着する。弥生中期中葉。

266号土坑 (図185-8～10、写真204・205)

図185-8は、深鉢の体部である。沈線を引いたのち縄文を施し、沈線の一部をもう一度引き直している。外面に炭化物が付着する。同図9は、深鉢の口縁部である。磨消縄文で文様を描く。縄文は無節である。同図10は、粗製の深鉢である。外面に条痕が施される。弥生中期前葉。

268号土坑 (図185-11、写真204)

図185-11は深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。縄文は無節である。弥生中期前葉。

269号土坑 (図185-12、写真205)

図185-12は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。縄文はカナムグラの擬縄文である。弥生中期中葉。

270号土坑 (図185-13、写真205)

図185-13は、壺か深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。縄文施文部に赤彩が施される。弥生中期前葉。

272号土坑 (図185-14、写真205)

図185-14は、深鉢の体部から口縁部である。口唇部に突起を有する。欠損しているが、突起は二山のようなものである。外面に条痕を施したのち、口唇部下に5本の沈線が巡らされ、突起の外面に「へ」字形の文様が描かれる。縄文晩期末葉～弥生前期。

273号土坑 (図185-15~17、写真190・205)

図185-15~17は、いずれも深鉢の体部である。15は変形工字文が描かれ、外面に炭化物が付着する。16は密集する沈線で文様が描かれ、外面に炭化物が付着する。17は粗製深鉢の体上部から口縁部で、口縁部は内湾する。外面に条痕が施され、炭化物が付着する。縄文晩期末葉~弥生前期。

274号土坑 (図185-18・19、写真205)

図185-18は、壺の口縁部である。ヨコナデののち沈線で文様が描かれる。同図19は、深鉢の体部である。沈線で重四角形が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

275号土坑 (図185-20~22、写真205)

図185-20~22はいずれも深鉢で、20は口縁部、21・22は体部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれる。20・21の外面には炭化物が付着する。弥生中期前~中葉。

276号土坑 (図185-23~25、写真205)

図185-23は、鉢の体部から口縁部である。体部は弱く張り、口縁部は緩やかに外反する。縄文を施したのち沈線で文様を描き、一部をミガキによって磨り消している。同図24は、深鉢の体部から口縁部である。変形工字文が多段に描かれる。外面に炭化物が付着する。同図25は、壺の体部である。縄文を施したのち、密な沈線で文様が描かれる。弥生前期~中期中葉。

277号土坑 (図186-1~9、写真189・190・206)

図186-1は、深鉢である。口縁部を欠損する。平底で、きわめて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。体下部に縄文を施したのち、体上部に工字文が描かれる。底面には網代の圧痕が付される。内外面に炭化物が付着する。同図2は鉢である。無文で、外面に光沢のある炭化物が薄く付着する。同図3は、壺の体上部から口縁部である。肩部が張り、口縁部は外傾する。無文である。同図4・5は、蓋である。接合しないが、同一個体と思われる。つまみ部上面は剥離によって欠損する。笠部は緩やかに湾曲しながら口縁部に向かって開く。外面に縄文が施され、口縁部に沿って末端結節が巡らされる。口縁部内外面に炭化物が付着する。同図6・7は、深鉢の体部である。いずれも磨消縄文により文様が描かれる。6は、内外面に炭化物が付着する。同図8は、粗製深鉢の口縁部である。291号土坑出土土器と接合した。外面に条痕を施したのち、口唇部直下の外面に2本の沈線で波状文が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図9は深鉢である。平底で、体下部は緩やかに湾曲しながら急な角度で立ち上がり、体部中ほどに至って垂直となり、体上部は影らみをもって最大径を有し、口縁部は内湾する。体上部と体部中ほどを文様帯とする。文様帯は、上下に沈線を巡らせて区画し、体上部と体部中ほどにそれぞれ異なる文様が磨消縄文で描かれる。体上部には、菱形、正逆の三角形、直角三角形を組み合わせた文様が描かれる。体部中ほどの文様帯は、横長の長方形が巡らされる。体下部には縄文が施される。底面には、木葉痕と多数の種実(キビ)圧痕が付される(付章第7節)。弥生中期前葉。

278号土坑 (図187-1~4、図203-8、写真206・245)

図187-1~3は深鉢である。1・2は口縁部で、口唇部下に沈線を巡らせて区画し、縄文を施す。

2は縄文施文部に赤彩を施す。3は体部で、磨消縄文で文様が描かれる。同図4は、壺の口縁部か蓋のつまみ部か高杯の脚部のいずれかである。口唇部直下の外面を肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。図203-8は、不定形石器である。弥生中期前葉。

279号土坑 (図187-5、写真206)

図187-5は、高杯か鉢の体部から口縁部である。体部は直線的に外傾し体部と口縁部境の明瞭な稜線を境に屈折し、口縁部は内傾する。外面に変形工字文と思われる文様が描かれ、内面の口唇部直下と口唇部に沈線が巡らされる。非常に精巧で丁寧なつくりである。1号配石遺構出土土器に同一個体と思われる破片(図217-10)がある。弥生前期。

280号土坑 (図187-6、写真206)

図187-6は、深鉢の体部から口縁部である。体上部が張り、無頸で、口縁部は内湾する。体上部を文様帯とする。文様帯は、外面全体に縄文を施したのち、口唇部直下に巡らされた外面に掘り去り部のある工字文と、体部最大径の位置よりやや下に巡らされた平行する2本の沈線で上下が区画され、2本の沈線による帯で横長の「X」字形の文様が描かれ、帯の内部と隣り合う「X」字の間にできた菱形の内部が磨り消される。「X」字形の文様どうしの間に何かしらの文様が描かれているようであるが欠損している。体部下半には縄文が施される。外面に炭化物が付着する。弥生前期～中期前葉。

281号土坑 条痕を施したのち沈線を引く土器が出土した。時期不明。

282号土坑 オオバコの擬縄文、無節の縄文を施す土器が出土した。時期不明。

283号土坑 縄文、条痕を施す土器が出土した。時期不明。

284号土坑 (図187-7、写真206)

図187-7は、粗製深鉢の口縁部である。外面に縄文が施され、口唇部直下に末端結節が巡らされる。縄文晩期末葉～弥生中期前葉。

285号土坑 (図187-8、写真207)

図187-8は、壺の体部である。沈線で2重の三角形が互いに接して複数描かれ、三角形の内部と間隙に刺突文が充填される。弥生中期前葉。

287号土坑 (図187-9・10、写真190・207)

図187-9は高杯の脚部で、杯部が一部遺存する。脚部は裾から急な角度で直線的に立ち上がる。脚部天井と杯底部は平坦である。脚部に縄文を施したのち、杯部の最下部に1本、脚端部直上に2本の沈線を巡らせる。脚部の天井に赤色顔料が付着することからバレットとして使用されたと思われる。同図10は深鉢の体部である。縄文を施したのち数本の沈線が巡らされる。弥生前期～中期前葉。

288号土坑 (図187-11、写真207)

図187-11は、深鉢の体部である。平行する2本の沈線が巡らされ、その上方に磨消縄文で文様が描かれる。2本の沈線の下方には縄文が施される。弥生中期前葉。

289号土坑 縄文を施す土器のみである。時期不明。

290号土坑 (図187-12、写真190)

図187-12は、壺か深鉢の底部から体下部である。外面に縄文が施され、底面に笹葉の圧痕が付される。底部内面にわずかに炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生中期前葉。

291号土坑 (図187-13～17、写真190・207)

図187-13は深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図14は壺の体上部である。磨消縄文で文様が描かれる。沈線で文様を描き、結節のある縄文を充填し、もう一度沈線をなぞっている。同図15は蓋である。つまみ上部を欠損する。笠部は直線的に開き、内面の天井は平坦である。つまみ下部は垂直に立ち上がり、笠部上面につまみ部の剥離痕が観察される。笠部に縄文が施され、つまみ部は無文で、下部に刺突具による盲孔が穿たれる。口縁部内外面に炭化物が付着する。同図16は粗製深鉢の体部である。最大径の位置に沈線が走り、以上に縄文が、以下に条痕が施される。内外面に炭化物が付着する。同図17は広口の壺の体上部から口縁部である。体上部は弱く張り、頸部は筒形で、口縁部は緩やかに外湾する。口頸部の境に1本、頸体部の境に2本の沈線を巡らせ、口縁部と体部に縄文を施す。頸部は無文である。内外面に炭化物が薄く付着する。弥生中期前葉。

293号土坑 (図188-1～3、写真190・207)

図188-1は、粗製深鉢の体部から口縁部である。きわめて緩やかに外反する。平口縁であるが、不規則に波打つ。外面に縄文が施され、口唇部直下に末端結節が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。同図2・3は深鉢の体部である。2は工字文が描かれ、外面に炭化物が付着する。3は、磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

294号土坑 (図188-4、図206-2、写真208・248)

図188-4は壺で、底部から体下部を欠損する。体下部は直線的に外傾し、体上部に張りを有し、口縁部は外傾する。口唇部直下の外面に沈線を1本巡らせる。口縁部と体部の境に段を有し、体部に縄文が施される。体部最大径の位置に沈線で矩形が一箇所描かれるが、欠損のためどのような文様かはわからない。体上部に炭化物が薄く付着する。他に、磨消縄文が描かれた土器が出土した。図206-2は、石鉢である。弥生中期前葉。

295号土坑 (図188-5～10、写真190・207)

図188-5～9は、壺の体部である。接合しないものの同一個体と思われる土器が周辺の遺構外から出土しており、あわせて図示した。いずれも体部で、頸部がわずかに遺存する。頸部は無文で、体部に磨消縄文で文様が描かれる。同図10は、深鉢か鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

296号土坑 (図188-11、写真207)

図188-11は、深鉢の体部である。磨消縄文で菱形の内部にヒトデ文が描かれる。弥生中期前葉。

297号土坑 (図188-12、写真209)

図188-12は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。弥生中期中葉。

298号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

300号土坑 (図188-13、写真209)

図188-13は、粗製深鉢の体部から口縁部である。外面に輪積み痕を残して肥厚させ、体部との境に段をつくる。口縁部に横方向、体部に縦方向の条痕が施される。炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

301号土坑 (図188-14、写真209)

図188-14は、深鉢の体部である。密集する沈線で正逆の三角形が描かれ、内部に縄文が充填される。外面に炭化物が付着する。弥生中期。

302号土坑 密集する沈線で文様を描く土器が出土した。弥生中期。

303号土坑 (図188-15・16、図203-2、写真209・245)

図188-15は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図16は、蓋の笠部である。外面全体に縄文が施され、口縁部に幅の狭い無文帯と末端結節が巡らされる。図203-2は、石匙である。弥生中期前～中葉。

304号土坑 (図188-17～21、写真190・209)

図188-17は、鉢の底部から体下部である。平底で、体部は外傾して立ち上がる。外面に沈線で文様を描き縄文が充填される。沈線内に赤彩が施される。同図18は壺か深鉢で、変形工字文が描かれる。同図19は深鉢の口縁部で、磨消縄文で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図20・21は壺の体部である。5本の沈線が同時に施文されている。弥生中期前葉。

305号土坑 (図188-22～25、写真209)

図188-22は、壺か深鉢の体部である。太い沈線で文様を描き、内部に縄文が充填される。同図23は甕の体部である。条痕を施したのち簾状文と波状文が櫛描で描かれる。外面に炭化物が付着する。同図24は壺の体部である。渦文が同心円文が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。同図25は、粗製深鉢の体部である。条痕を施したのち、櫛歯状の工具で文様が描かれる。弥生中期中葉。

306号土坑 (図189-1・2、写真209)

図189-1は、鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれ、縄文施文部に赤彩が施される。同図2は、深鉢の体部である。ハケメ様の条痕を施したのち沈線文を描き、文様の内部を磨り消している。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

308号土坑 (図189-3、写真209)

図189-3は、甕の口縁部である。外反し、内外面にヨコナデが施される。口唇部に縄文を回転施文したのち縄文原体の側面で斜めに刻目を施しているか、附加条2種を回転施文しているかのどちらかである。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

315号土坑 (図189-4・5、図202-9、写真209・244)

図189-4は、深鉢の体部から口縁部である。磨消縄文で菱形と三角形を組み合わせた文様が描かれる。縄文施文部の一部に赤彩が施されるが、炭化物が付着し、範囲は不明瞭である。同図5は、壺の口縁部である。口唇部直下の外面に縄文帯が巡らされる。外面の一部に炭化物が薄く付着する。

図202-9は、凸基の石鐎である。弥生中期前葉。

320号土坑 条痕と縄文を施す土器のみである。時期不明。

322号土坑 (図189-6、写真209)

図189-6は、壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

323号土坑 (図189-7、写真209)

図189-7は、鉢の体下部である。縄文を施したのち工字文が描かれ、外面全体に赤彩が施される。弥生前期。

324号土坑 (図189-8～11、図202-10・23、写真210・244)

図189-8～10は深鉢で、8は体部、9・10は口縁部である。8は変形工字文が描かれ、工字文内に縄文が施される。9・10は変形工字文が描かれ、10は工字文内に縄文が充填される。いずれも外面に炭化物が付着する。同図11は、深鉢か鉢の口縁部である。口縁部を文様帯とする。文様帯は平行する2本の沈線を巡らせて上下を区画し、平行する2本の沈線で波状文が描かれる。波状文の波頂部と波底部にそれぞれ縦の短沈線が引かれる。波状文の空隙には縄文が充填される。図202-10は凸基の石鐎、同図23は石甕である。弥生前期。

326号土坑 (図189-12・13、写真210)

図189-12は壺の口縁部である。口唇部下の外面に指頭押圧を巡らせ、内面に条痕を施す。同図13は深鉢の体部である。磨消縄文でヒトデ文が描かれ、外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

327号土坑 (図189-14～16、写真210)

図189-14は、深鉢の体上部から口縁部である。波状口縁で、体部に変形工字文が描かれる。口縁部内面には沈線が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。同図15は蓋の笠部である。無文で、外面の一部に輪積み痕が残るなど雑な作りである。口縁部内面に炭化物が付着する、同図16は、壺の体下部である。外面に条痕が施される。弥生前期。

328号土坑 (図189-17・18、写真210)

図189-17は、深鉢の体部である。太く浅い沈線で文様が描かれ、内部に目の細かい縄文が施される。内外面に炭化物が付着する。同図18は、沈線区画内に刺突文が密集して充填される。弥生中期前葉。

329号土坑 (図189-19、図202-11、写真210・244)

図189-19は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。図202-11は、凸基の石鐎である。弥生中期前葉。

330号土坑 附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期中～後葉。

331号土坑 (図189-20～27、写真210)

図189-20は、鉢の体上部である。体部最大径の位置に刻み目を施す突帯を巡らせ、その直上に平行する2本の沈線を巡らせる。同図21～23は深鉢の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。同図24は、壺の口頸部である。口縁部外面をやや肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。同図25は蓋の

口縁部である。外面に無節の縄文を施し、口唇部直上の外面に2本、同じく内面に1本の沈線が巡らされる。同図26・27は、粗製深鉢の口縁部である。26は口唇部に突起を有する。外面に縄文を施し、口唇部下に末端結節を巡らせる。27は外面に条痕が施される。弥生中期前～中葉。

333号土坑 (図189-28・29、写真211)

図189-28・29は、いずれも深鉢の体部である。28は、無節の縄文を施したのち3本の沈線で波状文が描かれる。29は磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期。

336号土坑 (図189-30～34、写真211)

図189-30は、深鉢の口縁部である。波状口縁の可能性がある。磨消縄文で文様が描かれる。同図31は、壺の頸部である。小渦文が多段に描かれ、その間隙に菱形の小文が配置される。小文内にはミガキが施される。沈線内にわずかに赤色顔料が残る。同図32は、甕の体部である。櫛描波状文が描かれる。同図33は、甕の口縁部である。内外面にヨコナデが施され、口唇部にオオバコの擬縄文が回転施文される。同図34は、鉢の底部から体下部である。平底で、体下部が直線的に外傾して立ち上がる。外面にカナムグラの擬縄文が施される。内面の一部に赤色顔料が付着する。弥生中期後葉。

337号土坑 (図189-35～41、写真211)

図189-35・36は深鉢である。35は口縁部で、無節の縄文を施したのち2本の沈線で層波文が描かれる。外面に炭化物が付着する。36は体部で、磨消縄文で文様が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。同図37は鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図38は壺の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。沈線は細く直線的で、縄文は細かい。同図39は深鉢の体部である。沈線で多重の四角形が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図40は壺の体部で、渦文が同心円文が描かれ交互ミガキが粗雑に施される。同図41は、壺の口頸部である。口縁部は外面に輪積み痕を残して肥厚させ段をつくり、肥厚部と口唇部に縄文を施す。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

340号土坑 縄文を施す土器のみである。時期不明。

343号土坑 (図189-42、写真211)

図189-42は粗製深鉢の口縁部である。外面に条痕が施される。縄文晩期末葉～弥生中期前葉。

351号土坑 (図190-1～4、写真211)

図190-1・2は深鉢である。1は口縁部、2は体部で、同一個体と思われる。磨消縄文で文様が描かれ、内外面に炭化物が付着する。同図3は壺の体部で、縄文を施したのち2本の沈線で波状文などが描かれる。同図4は鉢の体部で、縄文を施したのち沈線で文様が描かれる。弥生中期前葉。

353号土坑 (図190-5～7、図207-8、写真211・249)

図190-5は深鉢の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図6は壺の体部から頸部である。磨消縄文で文様が描かれ縄文施文部に赤彩がわずかに残る。同図7は蓋である。磨消縄文で文様が描かれる。図207-8は磨製石斧、図209-4は凹石である。弥生中期前葉。

354号土坑 (図190-8、写真211)

深鉢の体部である。掘り去り部のある工字文が描かれ、沈線内に赤彩が施される。縄文晩期末葉。

356号土坑 (図190-9、写真211)

図190-9は、深鉢の口縁部である。口唇部に突起を有し、頂部に指頭による浅い凹みがある。口唇部下の外面に沈線を巡らせ、口唇との間に縄文を施す。突起外面に縦の短沈線が引かれる。沈線の底には、工具を止め押した跡が観察される。縄文晩期末葉。

358号土坑 (図190-10、写真211)

図190-10は、深鉢の口縁部である。口唇部に突起を有し、口唇部下の外面に平行する2本の沈線を巡らせ、口唇部との間に縄文を施す。縄文晩期末葉～弥生前期。

359号土坑 (図190-11、図206-3、写真211・248)

図190-11は壺の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。図206-3は石楯である。弥生中期前葉。

360・539号土坑 (図190-12～14、写真212)

2基の土坑を同時に掘り込んだ際に出土した土器である。図190-12は深鉢の体部で、四角形の内部を鋸歯文と横方向の直線で充填する。外面に炭化物が付着する。同図13は、鉢もしくは高杯の口縁部である。外面に縄文を施したのち沈線で文様を描き、赤彩が施される。同図14は、深鉢の口縁部である。口唇部に突起を有し、突起以外の部分に沈線を巡らせる。口唇部下の外面に突起を起終点とする波状文が3本の沈線で描かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期と弥生中期。

361号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明。

362号土坑 (図190-15、写真212)

図190-15は、深鉢の体部である。条痕を施したのち、数本の沈線が巡らされる。沈線の底には、工具を止め押した跡が観察される。外面に炭化物がわずかに付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

363号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明

364号土坑 (図190-16、写真212)

図190-16は、壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

369号土坑 工字文を描く小片が出土した。弥生前期。

370号土坑 (図190-17・18、写真212)

図190-17は、深鉢の口縁部である。口唇部下の外面に平行する4本の沈線が巡らされる。同図18は、粗製深鉢の体部から口縁部である。寸胴で、頸部がわずかにくびれる。外面に条痕が施され、口縁部に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

371号土坑 (図190-19、写真212)

図190-19は、深鉢の体部から口縁部である。口縁部と体部の境に段を有する。縄文を施したのち工字文が描かれ、工字文の内部が一部磨り消される。口縁部は無文である。外面に炭化物が付着する。弥生前期。

372号土坑 (図190-20～22、写真212)

図190-20・21は、深鉢の体上部である。20は、オオバコの擬縄文を施したのち沈線で変形工字文が描かれ、文様内が磨り消されている。文様は菱形を左右に連結したもので、菱形内部に左右の対角線を結ぶと思われる沈線が引かれる。21は、縄文を施したのち沈線で波形の文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図22は、壺の口縁部と思われる。直線的に外傾する。口唇部に縄文を回転施し、その直下に2本の沈線が巡らされ、さらにその直下に重四角文が描かれる。重四角文の中心には縄文が充填され、赤彩がわずかに残る。弥生中期前～中葉。

374号土坑 (図190-23、写真212)

図190-23は、深鉢の体部である。縄文を施したのち、沈線で文様が描かれる。弥生前期。

378号土坑 (図190-24、写真212)

図190-24は壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、縄文施文部に赤彩を施す。弥生中期中葉。

379号土坑 (図190-25、写真212)

図190-25は、器種不明の口縁部である。口縁部の傾きも定かでない。口唇部直下の外面をやや肥厚させ、その直下に2本の沈線を巡らせて区画し、内部に縄文を充填して縄文帯とする。弥生中期中葉。

380号土坑 縄文を施す土器のみである。時期不明。

381号土坑 平行する数本の沈線を巡らせる土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

382号土坑 (図190-26、写真212)

図190-26は、深鉢の体部である。変形工字文が描かれる。弥生前期。

383号土坑 沈線で文様を描く土器が出土した。時期不明。

385号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明。

390号土坑 無文の土器が出土した。時期不明。

392号土坑 無文の土器が出土した。時期不明。

393号土坑 (図190-27、写真212)

図190-27は深鉢の体部で、磨消縄文で文様を描く。外面に炭化物が付着する。弥生中期中葉。

394号土坑 (図190-28・29、写真213)

図190-28は、壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。同図29は器種不明の体上部から口縁部である。体部に複数の文様が密集して平行に巡らされる。上から、2列の列点文、3本の沈線、1列の列点文、1本の沈線である。口縁部は無文である。弥生前～中期。

395号土坑 (図190-30、写真213)

深鉢の体部である。掘り去り部のある工字文を描き、沈線に赤彩を施す。縄文晩期末葉。

396号土坑 (図190-31、写真213)

図190-31は、深鉢の口縁部である。縄文を施したのち、複数本の平行する沈線が巡らされる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

397号土坑 条痕と縄文を施す土器、網代の圧痕を付す底部が出土した。弥生中期中葉以前。

398号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

399号土坑 (図190-32、写真213)

図190-32は、深鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

400号土坑 沈線内に赤彩を施す土器の小片が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

401号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

402号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

403号土坑 縄文、条痕を施す土器、網代の圧痕を付す底部が出土した。弥生中期中葉以前。

404号土坑 (図190-33、写真213)

図190-33は、深鉢の口縁部である。口唇部に低い突起を有し、これを起点・終点とする沈線が口唇部に沿って描かれ、その下に沈線が巡らされる。沈線内に赤彩が施される。縄文晩期末葉～弥生前期。

406号土坑 (図190-34～36、写真190・213)

図190-34・35は、深鉢である。34は体上部から口縁部である。体上部は弱く張り、頸部はやくぐれ、口縁部は急な角度で外傾する。口唇部に突起を有するが欠損する。口縁部と体部に条痕を施したのち、口縁部に4本の平行する沈線を巡らせ、体部に掘り去り部のある工字文が描かれる。内面の口縁部にも1本の沈線が巡らされる。口縁部突起の内外面にも沈線が引かれるが、欠損のため全体の形は明らかでない。遺存した部分から推測すれば、外面は「V」字形、内面は縦の沈線のようである。頸部は無文でミガキが施される。沈線の底には、工具を止め押した跡が観察される。35は体上部から頸部である。体上部は張り、頸部はくびれる。体上部を文様帯とする。文様帯は、ハケメ様の条痕を施したのち、上部に2本の沈線、下部に1本の沈線をそれぞれ巡らせて区画し、内部に2・3本の沈線で多重の菱形が描かれる。菱形の内部には、左右の対角を結ぶ1本の沈線が引かれ、菱形どうしの間には上下の区画線に沿って1本の沈線がそれぞれ引かれる。沈線の底には、工具を止め押した跡が観察される。外面に炭化物が付着する。同図36は、深鉢の体部である。磨消縄文で重四角文とこれを結ぶブリッジが描かれる。弥生中期中葉。

407号土坑 (図191-1・2、写真213)

図191-1は、深鉢の口縁部である。工字文が描かれる。同図2は、蓋の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

409号土坑 (図191-3、写真213)

図191-3は、器種不明の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

410号土坑 条痕を施す土器の小片のみである。時期不明。

412号土坑 (図191-4、写真213)

図191-4は、甕の体部から口縁部である。体部に無節の縄文が施される。口縁部は無文である。外面に炭化物が付着する。弥生中期。

413号土坑 (図191-5、写真213)

壺の体部で、渦文か同心円文が描かれ、カナムグラの擬縄文が施される。弥生中期中葉。

415号土坑 (図191-6、写真213)

図191-6は、深鉢の体部である。工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生前期。

416号土坑 (図191-7、写真213)

図191-7は、鉢か高杯の口縁部である。口唇部直下に、外面2本、内面1本の沈線が巡らされる。沈線の底に工具の先端を止め押した跡が観察される。縄文晩期末葉～弥生前期。

422号土坑 無文の口縁部が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

428号土坑 網代の圧痕を付す底部が出土した。弥生中期中葉以前。

430号土坑 波状口縁下に沈線を数本巡らせる土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

431号土坑 (図191-8・9、図207-6、写真214・249)

図191-8・9はいずれも壺で、8は体部、9は体部から頸部である。8は渦文か同心円文、9は渦文がそれぞれ描かれ、粗雑な交互ミガキが施される。図207-6は磨製石斧である。弥生中期後葉。

432号土坑 (図191-10、写真190)

図191-10は、粗製深鉢である。底部から体下部を欠損する。体下部から緩やかに湾曲しながら立ち上がり、無頸で、口縁部は内湾する。外面全体に条痕を施したのち、口唇部直下に1本の沈線による波状文が巡らされる。外面の一部に炭化物が薄く付着する。縄文晩期末葉～弥生中期。

433号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明。

434号土坑 縄文を施す土器のみである。時期不明。

435号土坑 (図191-11、写真214)

図191-11は、粗製深鉢の底部から体下部である。底面に網代の圧痕を付し、外面に目の細かな条痕が施される。内面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生中期中葉。

436号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明。

439号土坑 (図191-12、写真214)

図191-12は、深鉢の体部である。条痕を施したのち、4本以上の沈線が巡らされる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

442号土坑 (図191-13、写真214)

図191-13は、深鉢の口縁部である。口縁部下に沈線が巡らされ、口唇部との間に縄文が施される。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

443号土坑 条痕を施す土器のみである。時期不明。

444号土坑 (図191-14、写真214)

図191-14は、壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期中葉。

445号土坑 (図191-15、写真214)

図191-15は、壺の頸部である。細い沈線で文様が描かれる。弥生中期後葉。

446号土坑 (図191-16~19、写真214)

図191-16~18は壺で、16は体部、17は体上部から頸部、18は口縁部である。16は磨消縄文で文様が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。17は、体部に渦文か同心円文を描き銀杏葉形の小文がその間に配置され、頸部に数本の沈線が巡らされる。渦文か同心円文に交互ミガキが、銀杏葉形の小文にミガキが施される。ミガキが施されない部分には赤彩が施される。18は、受け口状で、連弧文が描かれ、交互ミガキが施される。同図19は、壺か深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期後葉。

450号土坑 (図192-1・2、写真214)

図192-1は、甕の体上部から口縁部である。体上部はなで肩で、口縁部は緩やかに外反する。外面と口唇部に無節の縄文が施される。体部内面にはヘラナデが施される。同図2は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、外面に炭化物が付着する。弥生中期前~中葉。

452号土坑 縄文を施す土器のみである。時期不明。

454号土坑 磨消縄文を施す土器が出土した。弥生中期前~中葉。

456号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明。

458号土坑 (図191-20~22、写真214)

図191-20・21は、深鉢の体部である。20は磨消縄文で、21は沈線で文様が描かれる。21は外面に炭化物が付着する。同図22は壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。無文部はミガキが施される。体下部には附加条縄文が施される。弥生中期中葉。

459号土坑 (図191-23、写真215)

深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

460号土坑 無節の縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

462号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

465号土坑 沈線を巡らせる土器が出土した。弥生前期~中期中葉。

467号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

471号土坑 (図192-3、写真215)

図192-3は、片口鉢の口縁部である。口唇部下の外面に片口を起点に4本の沈線を引いたのち縄文が施される。口唇部にも縄文が回転施文される。内面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

472号土坑 磨消縄文を施す土器が出土した。弥生中期前~中葉。

473号土坑 (図192-4・5、写真190・215)

図192-4は、壺の体部である。細い沈線で文様が描かれたのち、ナデもしくはミガキによって沈線が消されている。体部下半には縄文が施される。同図5は、深鉢である。底部から体下部を欠損する。縄文が施されたのち、変形工字文が多段に描かれ、一部が磨り消される。外面に炭化物が付着する。4は重複する476号土坑に伴う遺物と考えられ、5が本土坑の時期を示す土器と考えられる。弥生前期。

474号土坑 (図192-6、図203-9、写真215・245)

図192-6は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。図203-9は、楔形石器である。弥生中期前～中葉。

475号土坑 (図192-7、写真215)

図192-7は、深鉢の体部である。縄文を施したのち、沈線で文様が重ねて描かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

477号土坑 (図192-8、写真215)

図192-8は、深鉢の体部である。縄文が施されたのち、数本の沈線が巡らされ、沈線間が磨り消される。弥生前期～中期前葉。

478号土坑 (図192-9・10、図202-19、写真215・244)

図192-9は、鉢の口縁部である。外面に変形工字文が描かれ、工字文内に縄文が施される。内面の口唇部直下には沈線が巡らされる。10は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。図202-19は、石錐である。弥生中期前～中葉。

480号土坑 (図192-11、写真215)

図192-11は、深鉢か壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前～中葉。

481号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

483号土坑 無文の蓋が出土した。弥生前期～中期中葉。

484号土坑 (図192-12、図206-5、写真215・248)

図192-12は深鉢の体部で、磨消縄文で文様を描く。図206-5は石鋏である。弥生中期前～中葉。

486号土坑 (図192-13・14、写真215)

図192-13は、深鉢の体部である。数本巡らせた沈線の下方に横走する縄文が施される。沈線内と縄文施文部に赤彩が施される。胎土がきめ細かく、焼成は良好で、丁寧なつくりである。同図14は、壺か深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

487号土坑 (図192-15、写真215)

図192-15は、深鉢の口縁部である。口唇部の突起を欠損する。条痕を施したのち9・10本の沈線が巡らされる。突起の外面にも沈線が一部遺存する。縄文晩期末葉～弥生前期。

489号土坑 (図192-16、写真215)

図192-16は、深鉢の口縁部である。縄文を施したのち太い沈線が数本巡らされる。沈線の底には工具の先端を止め押した跡が観察される。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉～弥生前期。

492号土坑 条痕が施された土器、蓋の口縁部の可能性がある無文の土器が出土している。時期不明。

493号土坑 (図192-17～19、写真215)

図192-17は、深鉢の体上部から口縁部である。工字文が描かれ、内外面に炭化物が付着する。同図18は、甕の体上部から口縁部である。口縁部は無文で、体部との境に平行する2本の沈線を

巡らせ、その下に縄文が施される。口縁部に補修孔が穿たれている。外面に炭化物が付着する。同図19は、鉢の口縁部である。蓋の可能性もある。外面に磨消縄文で文様が描かれる。体部の縄文施文部に赤彩が施される。弥生前期～中期前葉。

494号土坑 (図192-20・21、図202-12、写真215・244)

図192-20・21は、いずれも深鉢の口縁部である。20は、口唇部直下に4本の沈線が巡らされ、その下方に縄文が施される。21は、口唇部に低い突起を有し、口縁部に多数の沈線が巡らされたのち、口唇部直下に縄文が沈線に重ねて巡らされる。内面の口唇部直下にも沈線が巡らされる。図202-12は、凸基の石甕である。縄文晩期末葉～弥生前期。

496号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

497号土坑 (図192-22～24、写真215)

図192-22・23は深鉢で、22は口縁部、23は体下部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれる。22は外面に、23は内外面に炭化物が付着する。同図24は壺の体部と思われる。密集する沈線で文様が描かれる。文様は縦方向の1本沈線の脇に「へ」字形を重ねているようである。弥生前期～中期中葉。

499号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

500号土坑 (図192-25、写真216)

図192-25は、蓋もしくは高杯の口縁部である。縄文を施したのちに沈線が巡らされ、沈線の間が磨り消されている。弥生前期～中期前葉。

502号土坑 縄文を施す小片のみである。時期不明。

503号土坑 カナムグラの擬縄文を施す土器、口縁部に円形刺突文を施す土器が出土した。弥生中期中葉。

504号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

505号土坑 (図192-26～29、写真216)

図192-26・27は深鉢である。26は体部で、ハケメ様の条痕を横方向に施したのち方格を多重に描き、方格内に鋸歯文が3列重ねて描かれる。27は口頸部で、縄文を施したのち、口唇部下に平行する2本の沈線を引き、その下方の頸部に重四角文とこれを横に連結するブリッジが描かれる。口唇部下の沈線の間に斜め方向の短沈線が充填され、重四角文の外側の条痕は磨り消されている。補修孔が1箇所穿たれている。同図28・29は、壺の体部である。28は渦文が同心円文が描かれ、カナムグラの擬縄文が充填される。29は体部最大径の位置に2本の平行する沈線を巡らせ、その上方に同心円文が描かれる。同心円文は左右に分離し、ブリッジを有する。同心円文どうしの間隙には2重の三角形が配置される。体下部には附加条縄文が施される。弥生中期後葉。

508号土坑 (図192-30、写真216)

図192-30は、深鉢の体上部から口縁部である。縄文を施したのち変形工字文が描かれ、工字文の内部が磨り消されている。内外面の口縁部付近に炭化物が付着する。弥生前期。

509号土坑 縄文と条痕を施す土器のみである。時期不明。

510号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

511号土坑 (図193-1～3、図194-1、図203-4、図206-4、図208-7、写真191・216・245・248・250)

図193-1・2はいずれも深鉢で、体部は弱く張り、頸部はわずかにくびれ、口縁部はきわめて緩やかに外反する。1は、口頸部に磨消縄文で「エ」字形などの文様が多数に描かれたのち、文様の外側にオオバコの擬縄文が施される。体下部と内面にはケズリが施される。外面に炭化物が付着する。同図2は、口唇部下に沈線を巡らせて縄文を施し、頸部と体部に磨消縄文で四角形の文様が上下2段に描かれる。四角形の内部は、ヒトデ文、ブリッジ、途切れが不規則に組み合わせられる。内外面に炭化物が付着する。同図3と図194-1は、粗製の深鉢である。いずれも体部の張りは弱く、口縁部がわずかに外傾する。図193-3は、外面全体に無節の縄文が施され、内外面に炭化物が付着する。図194-1は、外面全体に横方向の条痕が施され、内外面にわずかに炭化物が付着する。図203-4は石鉢、図206-4は石鉢、図208-7は管玉である。弥生中期中葉。

515号土坑 細い沈線を多数巡らせ、ミガキをまばらに施す土器が出土した。弥生中期後葉。

516号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

517号土坑 (図194-2～4、図207-1、写真191・216・248)

図194-2は、壺の体上部から頸部である。球胴で、体上部がしだいに角度を増しながら内傾し、頸部に至る。遺存する頸部から体上部の外面全体に、浅い沈線を密集させた文様が描かれる。頸部と体上部に各6・7本の沈線を巡らせて文様帯を区画し、体上部から頸部の文様帯に密集する縦の短い沈線が、体上部の文様帯に3本を1単位とする沈線による鋸歯文がそれぞれ巡らされる。体部最大径付近より下は横方向の沈線が条痕様に施される。同図3は、深鉢の底部から体下部である。寸胴で、縄文を施したのち平行する2本の沈線が巡らされる。沈線の間と上方は磨り消される。底面に木葉痕が付される。同図4は深鉢の口縁部である。縄文を施したのち、変形工字文が描かれ、工字文の内部が一部磨り消される。外面に炭化物が付着する。図207-1は石鉢である。弥生前期。

518号土坑 磨消縄文を施す土器、口縁部に波状文を巡らせる粗製深鉢、網代の圧痕を付す底部が出土した。弥生前期～中期中葉。

520号土坑 条痕、縄文を施す土器が出土した。時期不明。

521号土坑 (図194-5・6、写真216)

図194-5・6はいずれも深鉢で、5は体部、6は口縁部である。いずれも縄文を施したのち変形工字文が描かれ、一部が磨り消される。いずれも外面に炭化物が付着する。弥生前期～中期前葉。

523号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

524号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

525号土坑 (図194-7、写真216)

壺の体部である。細い沈線で山形の文様が上下に重ねて描かれている。弥生中期後葉。

527号土坑 細い沈線で文様を描き、附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期後葉。

528号土坑 波状口縁で口唇部に沈線を巡らせ、内外面に赤彩が施された土器が出土した。縄文晩期末葉。

532号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

534号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

537号土坑 (図194-8・9、写真216)

図194-8は、壺の体上部である。磨消縄文でヒトデ文などの文様が描かれる。同図9は、壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキがまばらに施される。弥生中期後葉。

538号土坑 本土坑は12号建物跡P4と同時に掘り込みを行い、その出土土器との峻別ができないため、出土土器はすべて12号建物跡の図に掲載した(図42)。その出土土器には弥生前期と同中期後葉に位置づけられるものがあり、本土坑が古いことを勘案すれば、本土坑は弥生前期のものと考えられる。

541号土坑 粗製深鉢の複合口縁、笹葉の圧痕を付す底部が出土している。縄文晩期末葉～弥生前期。

544号土坑 (図194-10～12、写真217)

図194-10は、深鉢の体下部である。磨消縄文で文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。同図11は、壺の体部である。細く直線の沈線で四角形を描いたのち、その外側に縄文が施される。同図12は、深鉢の体部である。方形の文様を描いたのち、その外側にカナムグラの擬縄文が施される。弥生中期中葉。

545号土坑 (図194-13、写真217)

深鉢の体部である。縄文を施したのち、3本以上の沈線が巡らされる。縄文晩期末葉～弥生前期。

546号土坑 磨消縄文で文様を描く土器、網代の圧痕を付す底部、内面に炭化穀粒痕を有する土器などが出土した。弥生中期前～中葉。

547号土坑 (図195-1～3、写真217)

図195-1～3はいずれも深鉢の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。1は、オオバコの擬縄文が施される。いずれも外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

548号土坑 (図195-4・5、写真217)

図195-4・5は、いずれも深鉢の体部である。4は縄文を施したのち、変形工字文が描かれる。5は、磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前～中葉。

549号土坑 (図195-6・7、図202-13、写真217・244)

図195-6は壺、7は深鉢である。いずれも体部で、磨消縄文で文様が描かれる。図202-13は、凸基の石甕である。弥生中期中葉。

550号土坑 (図195-8～10、写真191・217)

図195-8・9は、壺である。接合しないものの同一個体と考えられる。口縁部と底部付近を欠損する。体下部は緩やかに湾曲しながら急な角度で立ち上がり、体部のやや上部にある最大径の位置

で急にカーブし体上部へ至る。体上部は緩やかに湾曲しながら内傾し、円錐台形の頸部へ移行する。頸部と体部の境と体部最大径の位置に沈線を巡らせ、体上部の文様帯の上下を区画する。体上部の文様帯には、沈線で横長の長方形を上下2段に互い違いに描いたのち、細縄文が長方形の外に施される。頸部は無文で、体下部には体上部の文様帯に施されたものとは異なるための縄文が施される。縄文施文部には赤彩が施されているようであるが、遺存状況は悪い。頸部上端の破断面にもこれと同様の赤色顔料が付着する。頸上部の内面に、これとは色調が異なる褐色の付着物があり、分析により赤色顔料で着色した漆であることが判明した(付章第1節参照)。これとは別に、頸部の破片どうしを漆で接着した破片があるが接合しない。同図10は、深鉢の体部である。沈線で3重以上の四角形が描かれ、内部に横方向の沈線が引かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

551号土坑 (図195-11、写真217)

鉢の体部から口縁部で、磨消縄文で文様を描く。外面に炭化物が付着する。弥生中期前～中葉。

552号土坑 (図195-12・13、写真217)

図195-12は深鉢、同図13は壺である。いずれも体部で、磨消縄文で文様が描かれる。12の外面には炭化物が付着する。弥生中期中葉。

553号土坑 縄文を施す土器、無文の土器が出土した。時期不明

554号土坑 条痕、縄文を施す土器が出土した。時期不明。

555号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

556号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

557号土坑 (図195-14・15、図208-6・9、写真191・217・250)

図195-14は壺である。体下部以下を欠損する。体部は弱く張り、口縁部は内側にきわめて緩やかに湾曲しながら外傾する。頸部に稜線を有する。口唇部に刻み目が施され、口唇部直下の外面に大豆大の粘土粒が4方向に付される。文様は、口縁部と体上部にそれぞれ上下2段に横長の四角形様の図形が互い違いに細い沈線で描かれる。四角形は、左右の辺が外側に湾曲して張り出し、内部に横方向の2本の沈線が左右の辺を結んで引かれる。下段の四角形はそれぞれ全体が上弦の弧を描く。四角形様の図形の内部のみミガキが施される。口縁部の内外面に粒の粗い赤色顔料で赤彩が施され、一部は沈線を埋め尽くすほどであるが、全体として遺存状態は悪い。同図15は鉢の口縁部である。蓋の可能性もある。4本の沈線で層波文が描かれ、空隙を無節の縄文で充填する。口唇部にも回転施文されているようである。図208-6・9は管玉である。弥生中期後葉。

558号土坑 沈線で文様を描く土器が出土した。時期不明。

559号土坑 (図195-16、写真217)

図195-16は、壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前～中葉。

560号土坑 縄文を施す小片のみである。時期不明。

562号土坑 磨消による帯状の無文部が巡る深鉢の体下部が出土した。弥生前期～中期前葉。

563号土坑 笹葉の圧痕を付す底部が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

565号土坑 縄文を施す土器と無文の土器が出土した。時期不明。

566号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

570号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

571号土坑 (図195-17、写真217)

壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。弥生中期後葉。

573号土坑 (図195-18、写真217)

図195-18は、器種不明の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前～中葉。

578号土坑 (図196-1・2、図202-14、写真218・244)

図196-1・2は深鉢の体部で、磨消縄文で文様を描く。外面に炭化物が付着する。図202-14は、凸基の石甕である。弥生中期前～中葉。

579号土坑 (図196-3～5、写真218)

図196-3～5はいずれも深鉢で、3・5は体部、4は口縁部である。いずれも縄文を施したのち文様が描かれ、一部が磨り消される。弥生中期前葉。

580号土坑 直線的な沈線と細い縄文を施す土器、縄文を施し口縁部に沿って末端結節を巡らせる蓋が出土した。弥生中期中葉。

581号土坑 磨消縄文を施す土器が出土した。弥生前期～中期前葉。

582号土坑 (図196-6、写真218)

深鉢の口縁部で、縄文を施したのち沈線を引き、一部を磨り消す。弥生前期～中期前葉。

586号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

588号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期中葉。

594号土坑 (図196-7、写真218)

図196-7は、甕の体上部から口縁部である。体上部がやや張り、口縁部は外傾する。口縁部にヨコナデを施し、体上部に二本同時施工具による5単位の平行沈線がおおむね等間隔に巡らされる。平行沈線はもっとも上が直線、以下が波長の長い緩やかな波形を描く。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

595号土坑 (図196-8・9、写真218)

図196-8は深鉢の頸部である。波状文が上下に重ねて描かれる。同図9は蓋の口縁部である。口縁部に沿って数本の細い沈線で文様が描かれる。弥生中期後葉。

598号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

599号土坑 附加条縄文を施した土器が出土した。弥生中期後葉。

600号土坑 (図196-10・11、写真218)

図196-10は、壺の口縁部である。沈線で弧文などを描き、口唇部に縄文を回転施文する。同図11は、甕の体上部である。体上部に7本以上の沈線を等間隔に巡らせる。弥生中期後葉。

603号土坑 (図196-12・13、写真218)

図196-12は、甕の体上部から口縁部である。口縁部にヨコナデを施し、頸部から体上部に櫛描きによる直線が巡らされる。同図13は、深鉢の体部である。沈線で重三角文が描かれる。いずれも外面に炭化物が付着する。弥生中期中～後葉。

604号土坑 (図207-2、写真248)

図207-2は石甕である。他に、細い直線的な沈線と細縄文を施す土器が出土した。弥生中期中葉。

606号土坑 土器の碎片のみである。時期不明。

607号土坑 (図196-14、写真218)

鉢か深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期中葉。

611号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

612号土坑 口縁部に波状文を描く粗製の深鉢が出土した。縄文晩期末葉～弥生中期中葉。

613号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

615号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

616号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

618号土坑 縄文を施したのち沈線で文様を描く土器、磨消縄文で文様を描く土器が出土した。

弥生前期～中期中葉。

620号土坑 (図196-15・16、写真218)

図196-15・16は鉢の口縁部である。外面に変形工字文が描かれ、内面の口唇部下に1本の沈線が巡らされる。16には焼成前の穿孔が口唇部下に2箇所あり、外面の沈線に赤彩が施される。縄文晩期末葉。

621号土坑 (図196-17、写真218)

鉢の口縁部で、口唇部に突起を有し、磨消縄文で文様が描かれる。内面に稜が巡る。弥生中期中葉。

624号土坑 (図196-18、写真218)

深鉢の体上部である。工字文が描かれ、赤彩が施される。縄文晩期末葉。

626号土坑 (図196-19～22、写真218・219)

図196-19は、壺の頸部から口縁部である。口縁部と頸部の境に沈線を、口縁部に連続する指頭圧痕を巡らせ、頸部に条痕が施される。同図20は、鉢の頸部から口縁部である。口縁部に工字文が描かれ、焼成前の穿孔が2箇所みられる。頸部は無文である。同図21は、深鉢の体部である。沈線で重四角文が描かれ、外面に炭化物が付着する。同図22は深鉢の体上部から口縁部である。無頸で、体上部に最大径をもち、口縁部は内湾する。口唇部下と体部最大径の位置に平行する2本の沈線をそれぞれ巡らせて文様帯の上下を区画し、文様帯に2本の沈線で波状文が描かれる。体下部には条痕が施される。内外面に炭化物が付着する。弥生前期～中期中葉。

630号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土している他、774号土坑から出土した土器と接合した破片がある(図201-4)。弥生中前期～中葉。

631号土坑 (図196-23、写真219)

図196-23は鉢の口縁部である。変形工字文が描かれ、沈線部分に赤彩が施される。弥生前期。

632号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。**636号土坑** 条痕を施す土器が出土した。時期不明。**637号土坑** 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。**639号土坑** (図196-24・25、写真191・219)

図196-24は、深鉢である。口縁部を欠損する。平底で、緩やかに湾曲しながら急角度で立ち上がり、体上部に最大径を有する。底部付近を除く体部に縦走する縷糸文が施され、頸部に3本の沈線が巡らされる。底面には木葉痕が付され、内外面に炭化物が付着する。内面底部付近の器壁が荒れている。同図25は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれ、内外面に炭化物が付着する。弥生中期前葉。

643号土坑 (図196-26・27、写真191)

図196-26は、鉢である。平底でやや扁平な半球形の体部をもち、無頸で、口縁部は内湾する。掘り取り部のある工字文が口縁部に描かれ、沈線に赤彩が施される。胎土に海綿骨針を含む。同図27は、台付鉢で、台部を欠損する。体部は半球形で、口縁部は緩やかに外反する。波状口縁で、波頂部に深い刻みを1箇所有する。体部に条痕を施し、口縁部に2本の沈線、頸体部の境に眼鏡状隆帯、体上部と体下部にそれぞれ2本と5本の沈線が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

645号土坑 (図197-1、写真219)

鉢の口縁部で、掘り取り部のある工字文が描かれ、沈線に赤彩を施す。縄文晩期末葉。

647号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。**651号土坑** (図209-5、写真251・284)

図209-5は、やや扁平な碟の側縁の一部に、赤色顔料が付着しているものである。この他、縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

652号土坑 小片のみである。時期不明。**653号土坑** (図197-2、写真219)

図197-2は、深鉢の体部である。磨消縄文で層波文が描かれる。弥生中期前葉。

656号土坑 (図197-3～7、写真191・219)

図197-3は、鉢が高杯の口縁部である。口縁部に工字文が描かれる。口縁部内面には稜線が巡る。同図4は、深鉢の体上部から口縁部である。波状口縁で、口縁部に縄文を施したのち、頸部に5本の沈線を巡らせ、突起下に縦の短沈線が引かれる。内面の口唇部下にも1本の沈線が巡らされる。頸体部の境に段を有し、体部は無文である。外面に炭化物が付着する。同図5～7は、深鉢である。5は平底で、体下部が急角度で立ち上がる。体上部に最大径を有し、頸部はくびれ、口縁部は長く外傾する。波状口縁で、一部の波頂部に1箇所の刻みを有する。口縁部と頸部、頸部と体部

の境にそれぞれ段を有する。口縁部と体部に条痕を施したのち、口縁部に5本、体部の最下部に2本の沈線を巡らせる。体部の最上部に工字文を、最大径の位置よりやや下に1本の沈線をそれぞれ巡らせて体上部の文様帯を区画し、文様帯に綾杉文が描かれる。波頂部下には、2本の短沈線が「ハ」字形に描かれる。内外面に炭化物が付着する。6は、体上部から頸部にかけて緩やかに湾曲しながら内傾し、口縁部は緩やかに外反する。口縁部外面が肥厚し、頸部と体部の境に段を有する。口縁部と体部に条痕を施したのち、口縁部中ほどと頸部との境、頸部と体部の段の位置に沈線が巡らされる。口縁部の2本の沈線の間に円形の小浮文が1箇所貼り付けられている。浮文の上面は荒れており、破断面のようにもみえる。頸部は無文である。内外面に炭化物が付着する。7は、口唇部に一山と二山の2種の突起を有する。口縁部と体部に条痕を施したのち、口縁部に5本の沈線が巡らされる。内面の口唇部下にも沈線が巡らされる。一山の突起の内外面には縦の短沈線が引かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

660号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

661号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

662号土坑 (図197-8、写真220)

壺の体部である。重鋸歯文が描かれ、交互ミガキがまばらに施される。弥生中期後葉。

663号土坑 (図197-9、写真220)

深鉢の体部である。縄文を施したのち変形工字文が描かれる。弥生前期。

664号土坑 (図197-10、写真220)

図197-10は、深鉢の体部である。縄文を施したのち重四角文が描かれる。縄文は磨り消されているようだが、どの段階で磨り消されたかは不明である。外面に炭化物が付着する。弥生中期前～中葉。

665号土坑 (図203-3、写真245)

図203-3は、石匙である。この他、磨消縄文を施す土器が出土した。弥生中期前葉。

667号土坑 (図197-11、写真220)

図197-11は、壺の口縁部である。きわめて緩やかに湾曲しながら外傾する。二本同時施文具による4単位の波状文が巡らされる。波状文は、振れ幅とピッチが小さく、波状文どうしの間隔は一定しない。弥生中期後葉。

668号土坑 (図197-12、写真192)

図197-12は、鉢である。平底で、体下部がやや緩やかな角度で直線的に立ち上がる。最大径は体上部にあり、急カーブしてやや内傾する頸部に至る。口縁部はほぼ直立する。口縁部と体上部を文様帯とする。各文様帯は、1本の沈線を巡らせて上下を区画し、口縁部の文様帯には工字文、体部の文様帯には右肩上がりの沈線、三角形か菱形、短い沈線などが組み合わされた文様が描かれる。頸部と、体下部は無文である。外面に光沢のある炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

669号土坑 口唇部に縄文を回転施文し、体部に末端結節のある堯の口縁部から体部が出土し

た。弥生中期後葉。

674号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

676号土坑 磨消縄文を施す土器が出土した。弥生中期前葉。

677号土坑 (図197-13、写真220)

図197-13は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

678号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

679号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

680号土坑 工字文を描く土器が出土した。縄文晩期末葉。

682号土坑 (図197-14、写真220)

図197-14は、壺の体部である。渦文が同心円文が描かれる。弥生中期後葉。

683号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

684号土坑 (図197-15、写真220)

鉢の体部から口縁部である。変形工字文が描かれ、沈線に赤彩が施される。弥生前期。

687号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

688号土坑 無文の土器が出土した。時期不明。

689号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

692号土坑 (図198-1、図208-4・5、写真192・250)

図198-1は、壺である。頸部の中ほどより上を欠損する。平底で、体下部は急な角度で立ち上がる。体部中ほどよりやや上で急カーブを描いて緩やかに湾曲しながら内傾する体上部に至る。口頸部の境で緩やかに屈曲して急な角度で立ち上がり、円錐台形の頸部に至る。頸部は無文で、体上部から中ほどに渦文が描かれる。渦文は、頸体部の境に沈線を巡らせた下方に4単位描かれ、縄文が充填される。体下部にも縄文が施される。図208-4・5は、管玉である。弥生中期中葉。

694号土坑 (図199-1、写真220)

図199-1は、深鉢の体上部から口縁部である。体上部が緩やかに張り、口縁部は垂直に近い角度で外傾する。口唇部に突起を有する。体部最大径以上の体部に工字文が上下2段描かれる。体部最大径以下には縄文が施される。口縁部は無文である。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

695号土坑 無文の土器が出土した。時期不明。

696号土坑 口縁部突起を有し、内面に沈線が巡る土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

698号土坑 (図199-2、写真220)

鉢の口縁部である。口唇部に突起を有し、口縁部に工字文が描かれる。縄文晩期末葉。

699号土坑 無文の土器が出土した。時期不明。

700号土坑 (図200-1～5、図202-15、写真192・221・244)

図200-1は、壺である。口縁部を欠損する。平底で、体部は急な角度で直線的に立ち上がり、肩部で急に屈曲して内傾する。頸部はくびれる。長胴で、体部高に対して体部径が小さく、体部最

大径は体部の最上部に位置する。体部最大径以下に文様が施される。文様は密な沈線によって多段に描かれ、上から工字文、鋸歯文、5本の沈線、工字文、6本の沈線、綾杉文、工字文、2本の沈線が巡らされる。肩部には縄文が施される。外面に光沢のある炭化物が薄く付着する。同図2は、深鉢の体部から口縁部である。体部から口縁部まで直線的に外傾する。遺存する外面のほぼ全面に流水工字文が上下3段に描かれる。2段目と3段目の間には縄文帯が巡る。外面に炭化物が付着する。同図3は、鉢の体上部から口縁部である。外面に工字文が描かれ、内面の口唇部下に沈線が巡らされる。沈線に赤彩が施される。同図4は、器種不明で部位も不明である。2本の沈線で文様が描かれ、内部に刺突文が充填される。わずかに赤彩の痕跡が残る。同図5は、粗製の深鉢である。ほぼ完形である。平底で、緩やかに湾曲しながら立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。口唇部に4単位の突起を有する。突起の頂部は、指頭によりわずかに窪む。口縁部外面に輪積み痕を残した段があり、口縁部に横方向の、体部に縦方向の条痕が施される。底面には、笹葉の圧痕が付される。内外面に炭化物が付着する。図202-15は、凸基の石鉢である。弥生前期。

702号土坑 (図199-3、写真220)

図199-3は、壺の体部が頸部である。二本同時施工具による平行沈線で鋸歯文が描かれ、平行沈線の外側に赤彩が施される。弥生中期後葉。

703号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

704号土坑 附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期後葉。

705号土坑 (図199-4、写真220)

図199-4は、壺の体上部である。二本同時施工具で渦文が描かれ、渦文の下方に渦文の下半に沿う波状文が3重に描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

708号土坑 「く」字口縁で、口唇部に刻み目、内外面にヨコナデを施す甕、綾杉文を描く土器が出土した。弥生中期中～後葉。

709号土坑 (図199-5、写真220)

図199-5は、甕の体上部である。櫛描波状文が施される。弥生中期後葉。

711号土坑 (図199-6、写真221)

壺の頸部で、密な沈線で波状文が描かれる。外面に炭化物が付着する。弥生中期中葉。

713号土坑 (図199-7、写真221)

図199-7は、甕の体上部から口縁部である。口唇部に刻み目が、内外面にナデが施される。内外面に炭化物が付着する。弥生中期。

715号土坑 (図199-8、写真221)

図199-8は、壺の体部である。重三角文が描かれ、その下方は無文である。外面に炭化物が厚く付着する。弥生中期後葉。

717号土坑 細い沈線で文様を描く土器が出土した。弥生中期後葉。

719号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

721号土坑 (図199-9、写真221)

図199-9は、壺の体部である。渦文か同心円文とこれを結ぶブリッジが描かれる。赤彩が施されているようであるが、外面に炭化物が厚く付着しているため、赤彩の範囲は明らかでない。弥生中期後葉。

722号土坑 土器の小片のみである。時期不明。**723号土坑** (図199-10、写真192)

図199-10は、高杯の脚上部から杯下部である。脚部中ほどに平行する2本の沈線が巡らされ、縦2本の短沈線でスリットが入れられる。脚頂部の内面は凸面をなす。弥生中期後葉。

727号土坑 沈線で波状文を描く蓋の口縁部が出土した。弥生中期。**732号土坑** 附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期後葉。**734号土坑** (図199-11、写真221)

図199-11は壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。弥生中期後葉。

740号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。**741号土坑** (図199-12、写真221)

図199-12は器種不明で、体部と思われる。地文を施したのち細い沈線を3本巡らせ、その端の1本にのみ刻み目が入れている。地文は細く浅く、縄文か条痕か判断できない。弥生中期後葉。

742号土坑 (図199-13・14、写真192・221)

図199-13は、壺の体上部から口縁部である。渦文か同心円文が描かれ、間隙に銀杏葉形の小文が配置される。頸体部の境に縦のスリットがある連弧文が2本の沈線で描かれる。渦文か同心円文には交互ミガキが施され、交互ミガキが施されない部分に赤彩が施される。同図14は、高杯の脚部である。中空棒状で、脚頂部は開口する。脚上部に6本の沈線を巡らせ、幅の狭い無文帯を挟んだ脚下部に4本の沈線が巡らされる。最上端の沈線と杯部との間の無文部に赤彩が施される。弥生中期後葉。

743号土坑 (図199-15、写真221)

図199-15は、器種不明の体部である。2本の沈線が巡らされ、沈線の間にミガキが施される。沈線下方に附加条縄文と赤彩が施される。弥生中期後葉。

745号土坑 (図199-16・17、写真192・221)

図199-16は、壺の体部である。渦文か同心円文が描かれる。同図17は、甕の体上部から口縁部である。体上部は急な角度で立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。外面全体と口唇部に無節の縄文が施される。外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

746号土坑 地文を施す土器が出土した。時期不明。**750号土坑** 土器の小片のみである。時期不明。**751号土坑** 変形工字文を描いたと思われる小片が出土した。弥生前期。**752号土坑** 工字文を描いた土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

753号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

754号土坑 (図201-1、写真192)

図201-1は、甕である。平底、長胴で、体下部は急な角度でほぼ直線を描いて立ち上がって体上部に至り、肩部は短く内湾する。口縁部は短く外傾し、平縁だが不規則に低く波打つ。底面に網代の圧痕を付す。外面全体に横走る縄文が施され、外面の一部に炭化物が薄く付着する。この他に、磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生前期～中期前葉。

755号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

756号土坑 (図199-18、写真221)

図199-18は、深鉢の口縁部である。波状口縁で、波頂部にさらに突起を有する。欠損しているものの、二山と思われる。突起の頂部を起点とする沈線が口縁部に沿って外面に2本、内面に1本引かれ、沈線に赤彩が施される。内外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

757号土坑 (図199-19、写真192)

図199-19は壺で、ほぼ完形である。平底で、体下部は急な角度で立ち上がり、体上部に最大径を有する。頸体部の境に明瞭な稜線が巡り、頸部はきわめて急な角度で外反する。口縁部外面は断面カマボコ形に肥厚する。無文で、外面に薄く炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

759号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

761号土坑 (図199-20、写真221)

図199-20は、壺の頸部である。小渦文が描かれる。弥生中期後葉。

762号土坑 (図199-21、写真221)

図199-21は壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。弥生中期後葉。

765号土坑 (図201-2、写真222)

図201-2は、壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、下方に附加条縄文が施される。縄文施文部の一部に赤彩が認められる。弥生中期後葉。

769号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期中葉。

774号土坑 (図201-3・4、写真222)

図201-3・4はいずれも壺の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期中葉。

776号土坑 (図201-5、写真222)

図201-5は、鉢の口縁部である。波状口縁の波頂部下に「へ」字形を2つ重ねて描き、下方に磨消縄文で文様が描かれる。その他、工字文を描き、沈線に赤彩を施す土器が出土した。弥生前期。

778号土坑 高杯の脚部と附加条縄文を施した土器が出土した。弥生中期後葉。

779号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

780号土坑 (図201-6、写真222)

図201-6は高杯の杯部である。下部に縄文を施したのち、変形工字文と思われる文様が描かれ、沈線と縄文施文部に赤彩が施される。弥生前期。

782号土坑 (図201-7、図202-16、図207-3、写真222・244・248)

図201-7は壺の体部である。渦文と、渦文どうしを結ぶブリッジが描かれ、ブリッジには大豆大の粘土粒が貼り付けられる。図202-16は凸基の石鉢、図207-3は石鉢である。弥生中期後葉。

785号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。**786号土坑** 縄文と条痕を施す土器、無文の土器が出土した。時期不明。**791号土坑** (図201-8、図203-5、図207-5、写真222・245・249)

図201-8は壺の体部である。重三角文が描かれ、交互ミガキが粗雑に施される。図203-5は石匙である。図207-5は磨製石斧である。弥生中期後葉。

794号土坑 (図201-9・10、写真222)

図201-9は、壺の体部である。渦文が描かれ交互ミガキが粗雑に施される。同図10は、蓋の口縁部である。口縁部に沿って1本の沈線、これに接して2列の波状文が巡らされる。口唇部には無節と思われる縄文が回転施文される。内外面に炭化物が付着する。弥生中期後葉。

796号土坑 二本同時施文具で渦文か同心円文を描く土器が出土した。弥生中期後葉。**797号土坑** 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前葉。**802号土坑** 附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期後葉。**805号土坑** 条痕を施す土器が出土した。時期不明。**806号土坑** 条痕を施す土器が出土した。時期不明。**813号土坑** 条痕を施す土器が出土した。時期不明。**822号土坑** (図201-11、写真222)

図201-11は、壺の頸部である。地文を施したのち沈線が巡らされ、重鋸歯文が描かれる。地文は撚糸文のようである。弥生前期～中期前葉。

823号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。**826号土坑** (図201-12・13、写真222)

図201-12は、壺の体部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが粗雑に施される。同図13は、鉢の体部から口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期後葉。

829号土坑 (図201-14・15、写真222)

図201-14は、壺の体上部である。渦文か同心円文が描かれ、交互ミガキが粗雑に施される。一部に赤色顔料が付着している。赤彩ではないようである。同図15は、壺の体部である。太く浅い沈線を1・2本巡らせて文様帯の上下を区画し、文様帯に3重の下弦の弧文が描かれる。弧文は1本の短い横方向の沈線で互いに連結される。弧文の内外に無節の縄文が施され、弧文に沿って内外各2列の刺突列が、文様帯の上を画する沈線に沿って1列の刺突列がそれぞれ施される。文様帯の下端を画す2本の沈線の間には、竹管文が等間隔に押捺される。弥生中期後葉。

834号土坑 (図201-16、写真222)

図201-16は、深鉢の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期中葉。

835号土坑 二山の口縁部突起、笹葉の圧痕のある底部、磨消縄文で工字文を描く土器が出土した。弥生前期。

837号土坑 多数の沈線を巡らせる土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

840号土坑 (図201-17、写真222)

図201-17は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前～中葉。

847号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

849号土坑 (図201-18、写真222)

図201-18は、壺の頸部である。6本の沈線を巡らせる。沈線は二本同時施工具によって引かれているようであるが、沈線どうしの間隔は一定しない。弥生中期後葉。

851号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

852号土坑 (図201-19、写真222)

図201-19は、深鉢の体上部である。条痕を施したのち掘り去り部のある工字文とその下に綾杉文が描かれる。外面に炭化物が付着する。縄文晩期末葉。

853号土坑 (図201-20、写真222)

図201-20は、深鉢の体上部である。工字文が描かれ、沈線に工具の先端を止め押した跡がみられる。弥生前期。

856号土坑 多数の沈線を巡らせる土器、突起のある無文の口縁部、体部に結節縄文を施す粗製の深鉢が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

858号土坑 細縄文を施す壺の受口状の口縁部が出土した。弥生中期中葉。

859号土坑 変形工字文を磨消縄文で描く土器が出土した。弥生前期。

860号土坑 太い沈線で文様を描く土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

862号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

865号土坑 (図201-21、写真222)

図201-21は、深鉢の体部である。磨消縄文で文様が描かれる。弥生中期前葉。

866号土坑 沈線で文様を描く土器が出土した。時期不明。

867号土坑 波状口縁の小型の土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

868号土坑 土器の小片のみである。時期不明。

870号土坑 太い沈線を多数巡らせる土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

873号土坑 太い沈線で文様を描く土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

877号土坑 (図201-22、写真223)

図201-22は高杯の杯底部である。細い沈線を4本巡らせ、交互ミガキを施す。弥生中期後葉。

878号土坑 縄文を施す土器が出土した。時期不明。

882号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

883号土坑 無文と縄文を施す土器が出土した。時期不明。

886号土坑 沈線と竹管文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

887号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

888号土坑 渦文が同心円文を描き交互ミガキを施す土器が出土した。弥生中期後葉。

889号土坑 (図201-23、写真223)

図201-23は、鉢か深鉢の口頸部である。頸部に工字文が描かれ、沈線に赤彩が施される。口縁部に補修孔が1箇所穿たれている。縄文晩期末葉。

890号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

891号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

898～903号土坑 (図201-24～26、写真223)

6基の土坑を同時に掘り込んだ際に出土した土器で、いずれの土坑に伴うかは明らかでない。なお、898号土坑は23号建物跡P4、899号土坑は22号建物跡P3、901号土坑は32号建物跡P1、903号土坑は23号建物跡P3である。図201-24は、鉢か高杯の体上部から口縁部である。縄文を施したのち工字文が描かれ、一部が磨り消される。内面の口唇部直下にも沈線が巡らされる。同図25は、壺の体部である。重鋸歯文が描かれ、交互ミガキが粗雑に施される。同図26は、深鉢の体部である。重三角文が沈線で描かれ、三角形の内部は刺突文が充填される。外面に炭化物が付着する。それぞれ、弥生前期、同中期後葉、同中期中葉に位置づけられる。

905号土坑 (図201-27・28、写真223)

図201-27・28は、いずれも深鉢の体部である。27は工字文が描かれ、沈線に赤彩が施される。28は縄文を施したのち沈線で文様を描き、磨り消されている。弥生中期前葉。

907号土坑 (図201-29～31、図202-17、写真223・244)

図201-29・30は深鉢で、29は体上部から口縁部、30は体部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれ、内外面に炭化物が付着する。同図31は、壺の頸部か高杯の脚部である。無文帯を挟んで4・5本の沈線が等間隔に巡らされたのち、ミガキが粗雑に施される。図202-17は、凸基の石甕である。弥生中期後葉。

908号土坑 (図201-32、写真223)

図201-32は、深鉢の体上部から口縁部である。縄文を施したのち変形工字文が描かれ、外部が磨り消される。外面に炭化物が付着する。この他、附加条縄文を施す土器が出土した。弥生中期後葉。

909号土坑 縄文と条痕を施す土器が出土した。時期不明。

910号土坑 太い沈線で文様を描く土器が出土した。縄文晩期末葉～弥生前期。

911号土坑 条痕を施す土器が出土した。時期不明。

914号土坑 磨消縄文で変形工字文が描かれる土器、笹葉の圧痕を付す底部が出土した。弥生前期。

916号土坑 磨消縄文で文様を描く土器が出土した。弥生中期前～中葉。

(青 山)

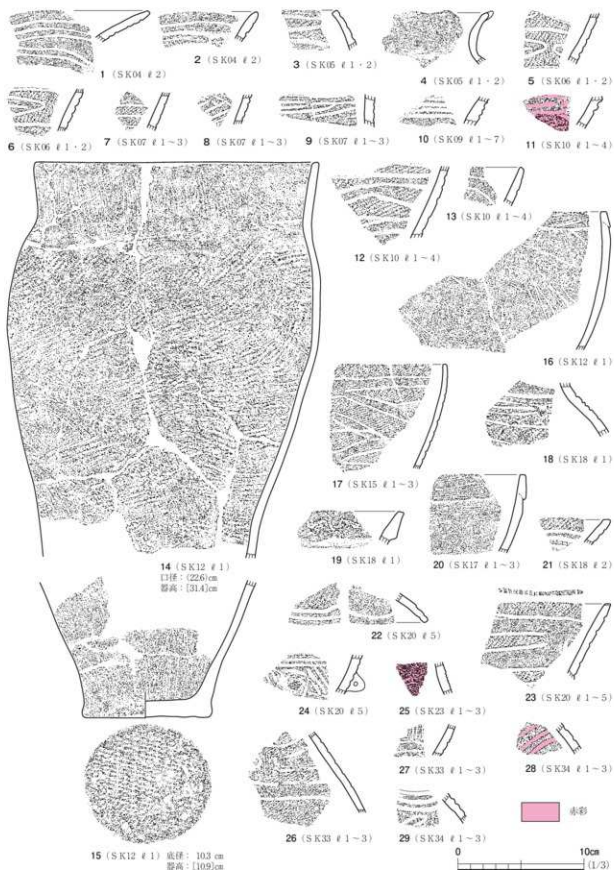


図176 土坑出土遺物 (1)

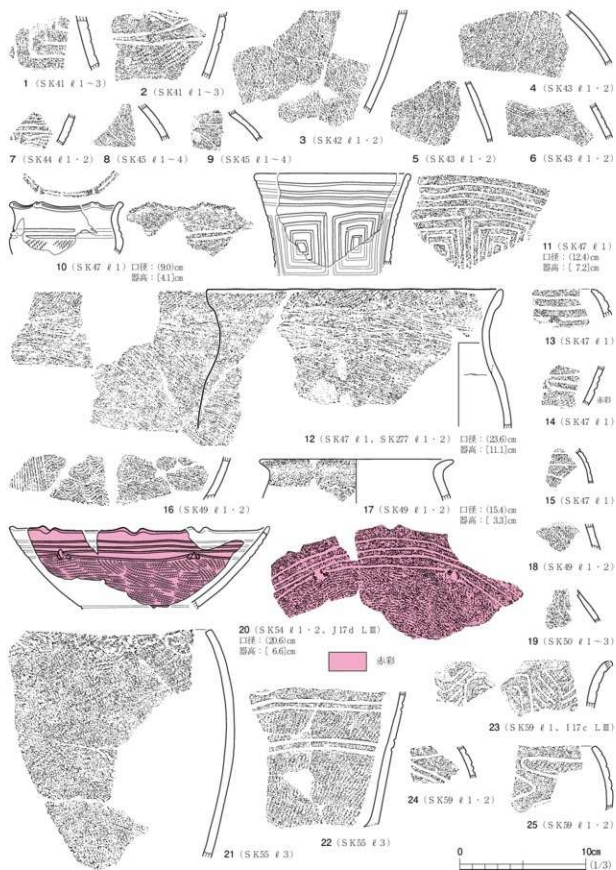


圖177 土坑出土遺物(2)

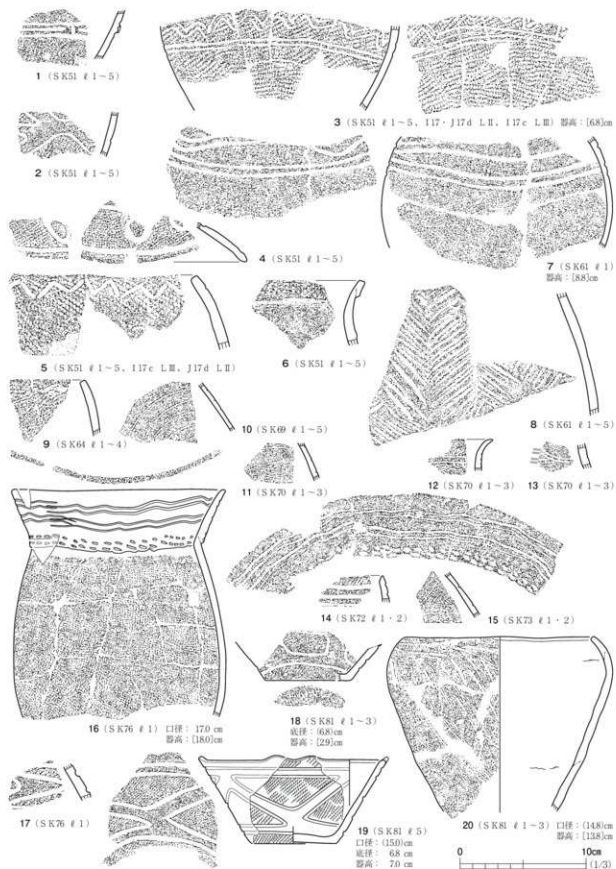


図178 土坑出土遺物(3)

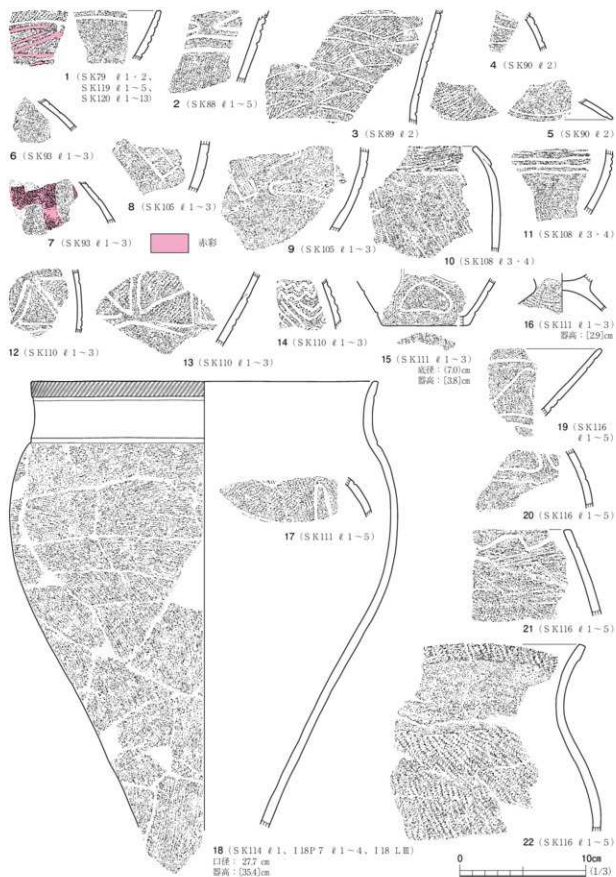


図179 土坑出土遺物 (4)

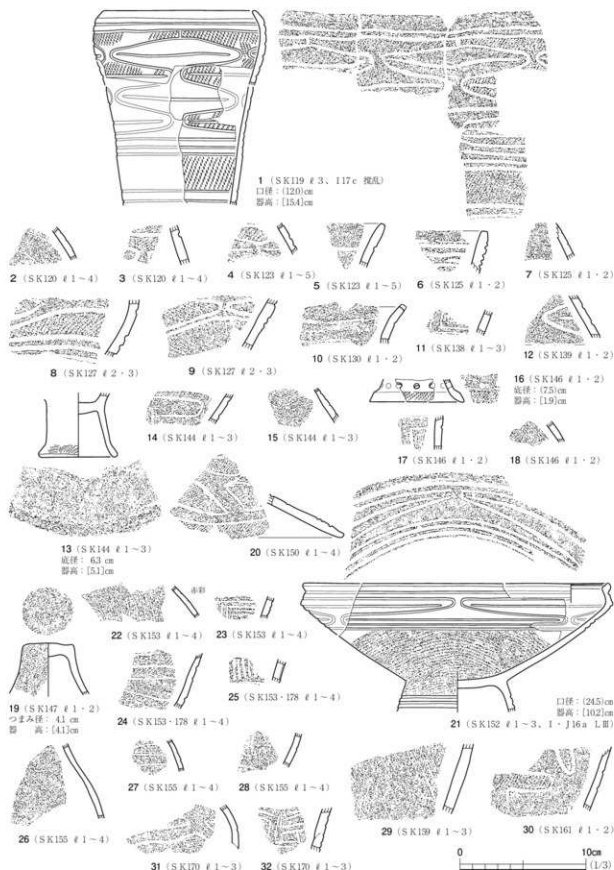


図180 土坑出土遺物 (5)

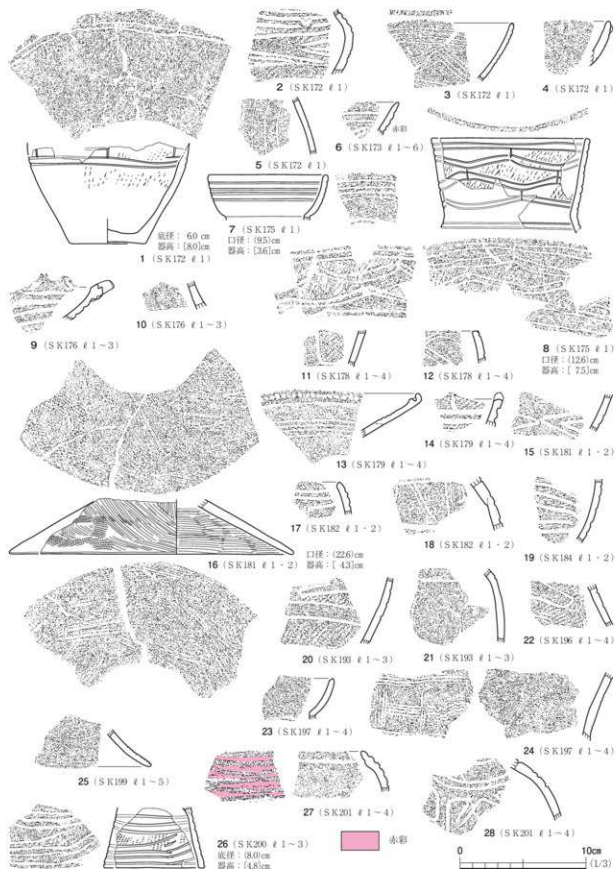


图181 土坑出土遺物(6)

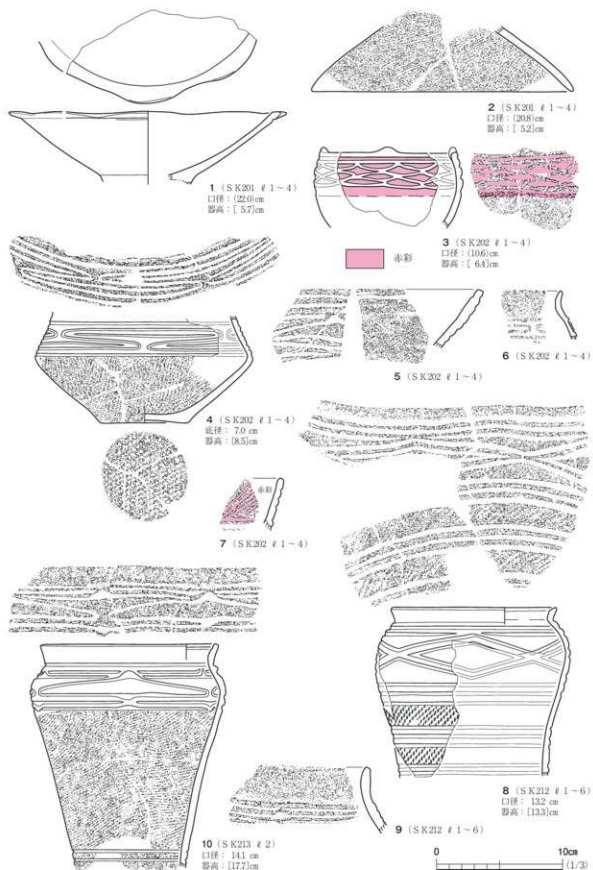


図182 土坑出土遺物 (7)

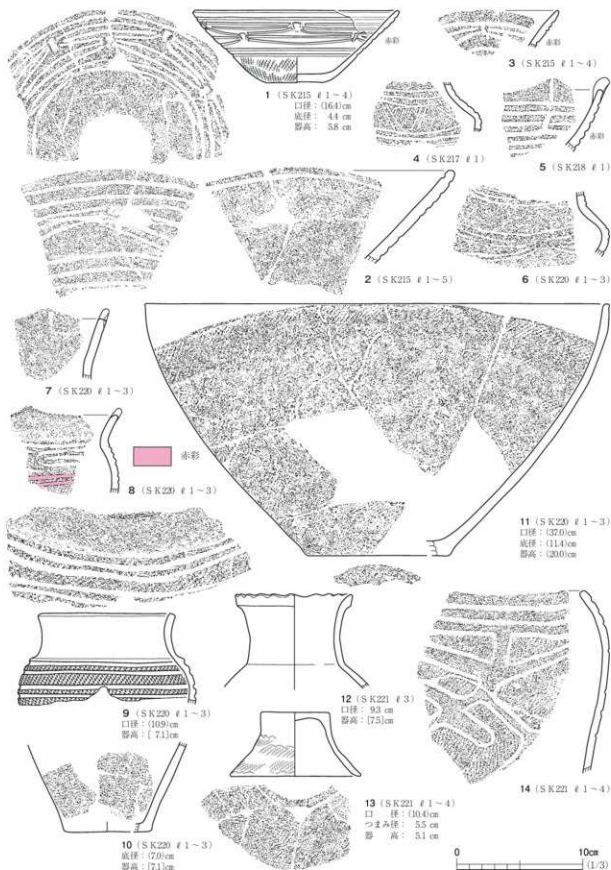


図183 土坑出土遺物 (8)

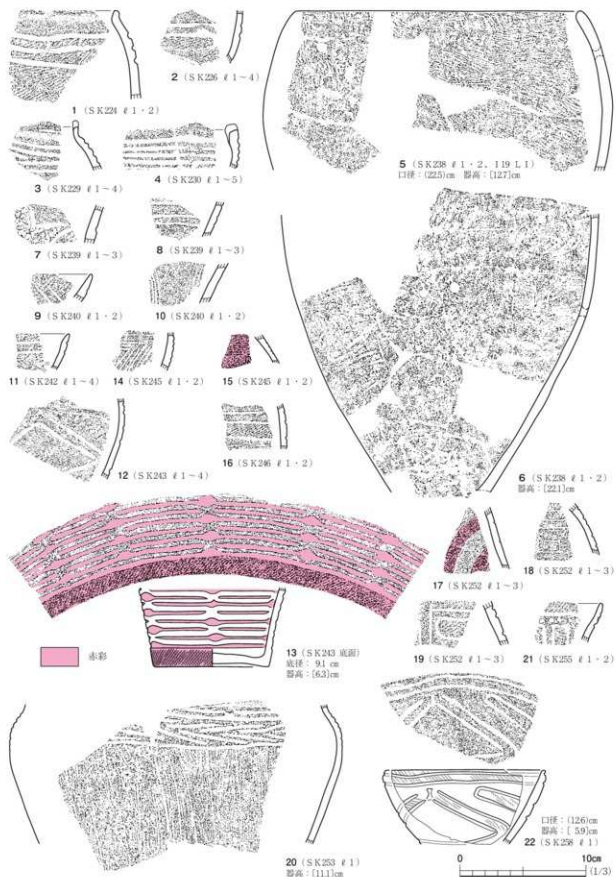


図184 土坑出土遺物 (9)

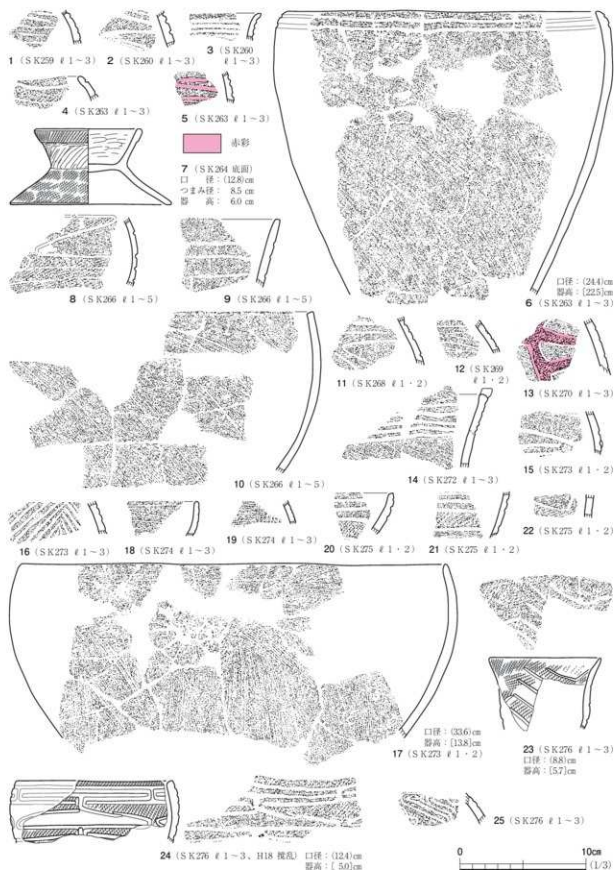


図185 土坑出土遺物 (10)

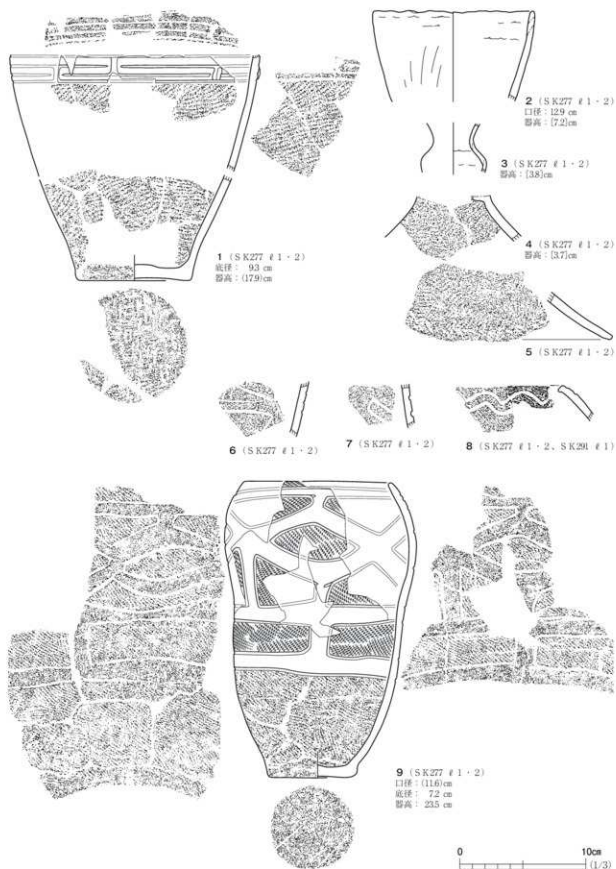


図186 土坑出土遺物 (11)

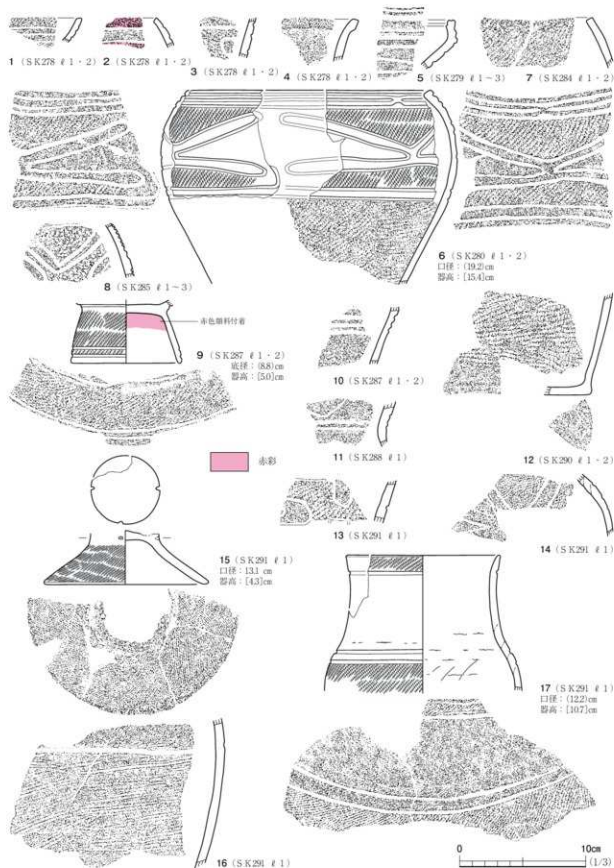


図187 土坑出土遺物 (12)

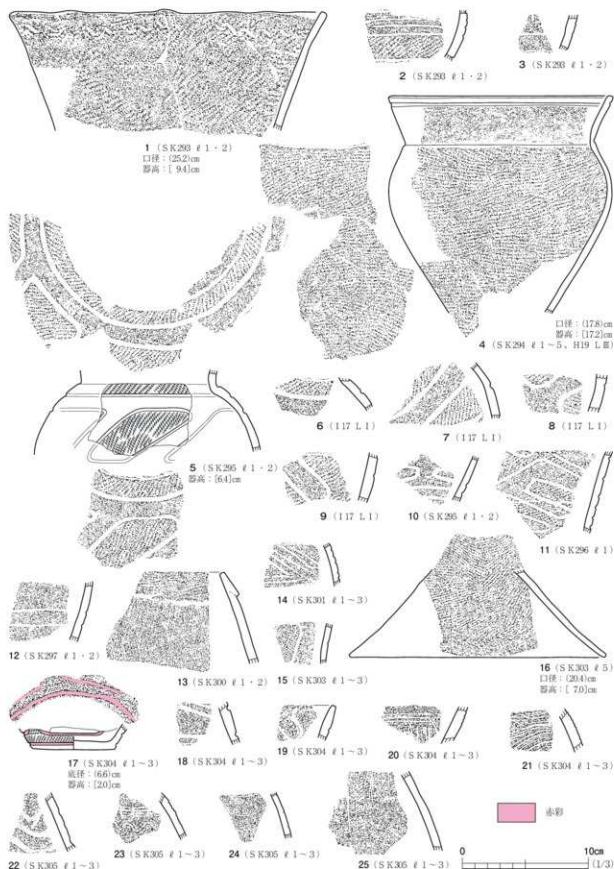


図188 土坑出土遺物 (13)

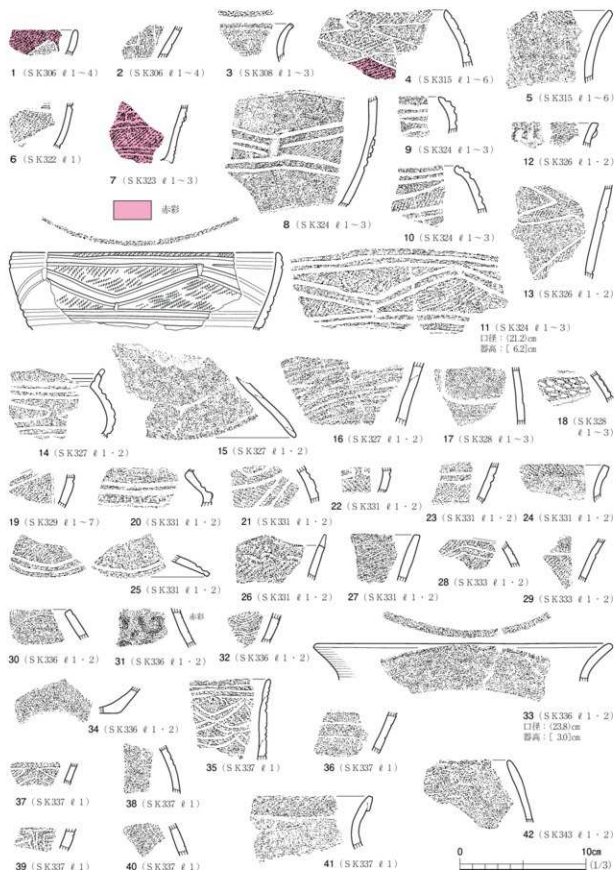


図189 土坑出土遺物 (14)

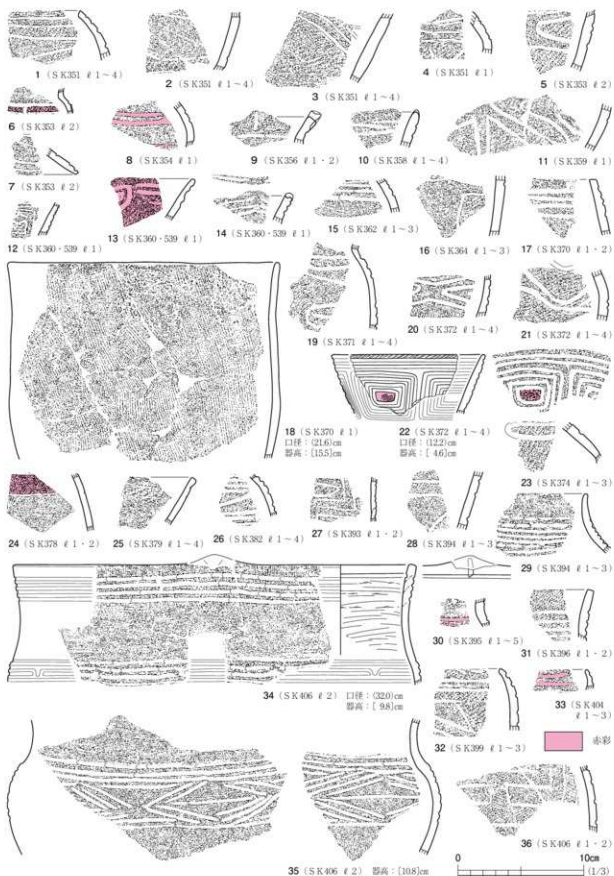


図190 土坑出土遺物 (15)

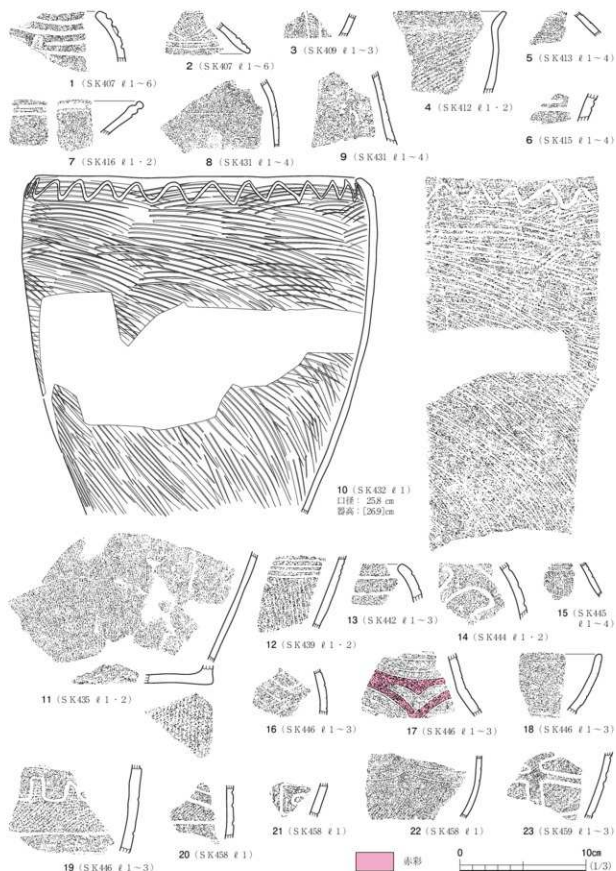


図191 土坑出土遺物 (16)

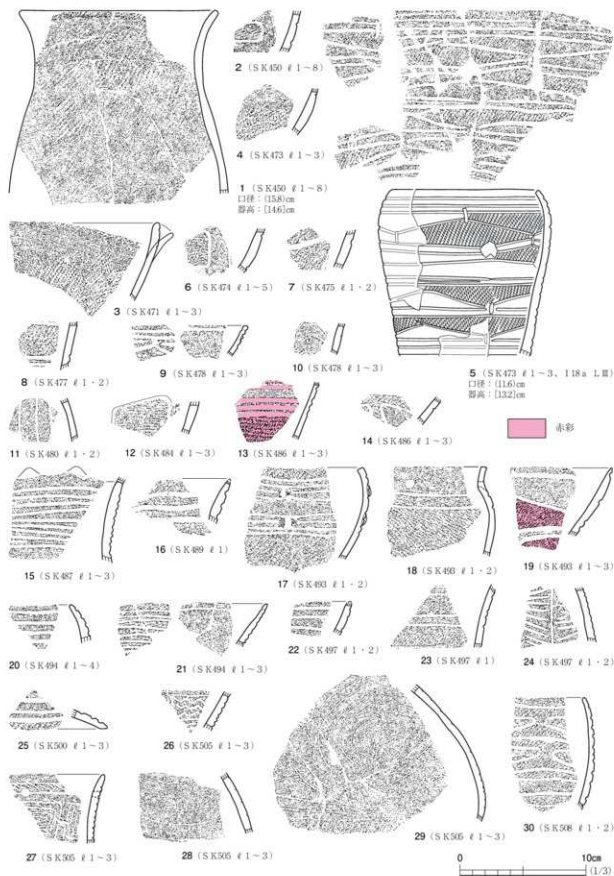


図192 土坑出土遺物 (17)

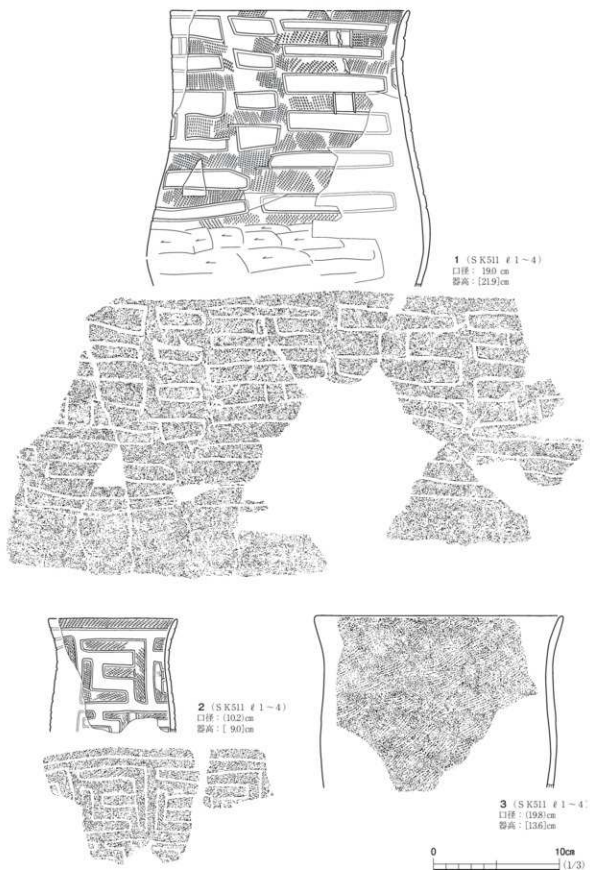


図193 土坑出土遺物 (18)

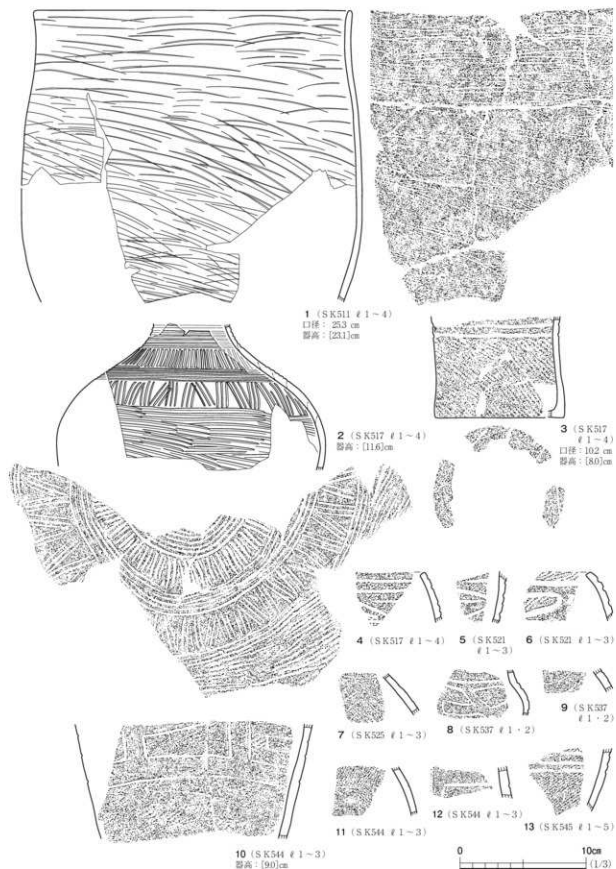


図194 土坑出土遺物 (19)

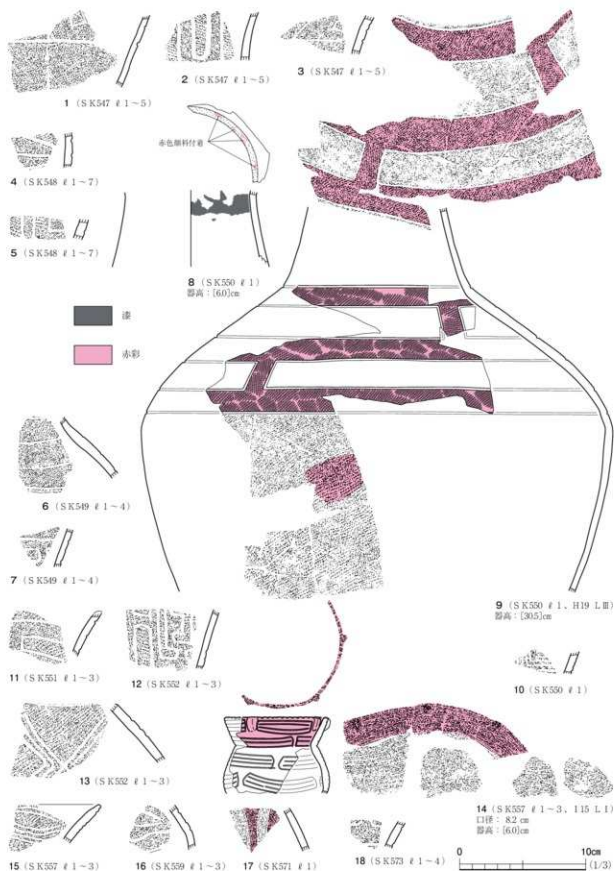


図195 土坑出土遺物 (20)

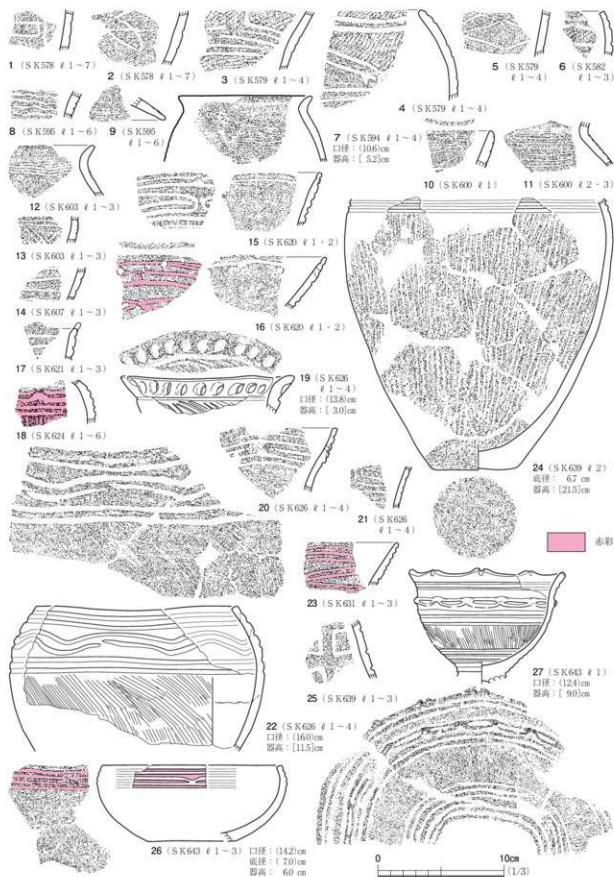


図196 土坑出土遺物 (21)

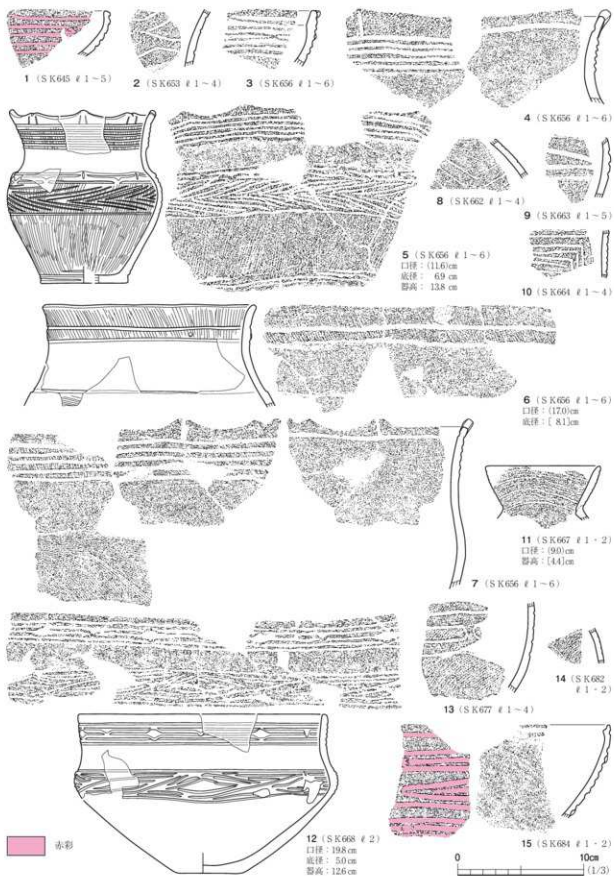


図197 土坑出土遺物 (22)

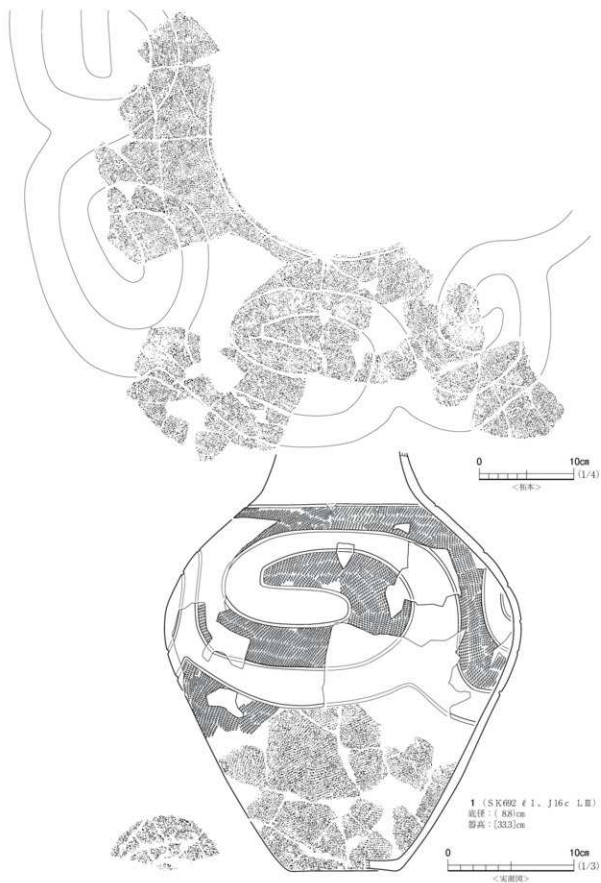


図198 土坑出土遺物 (23)

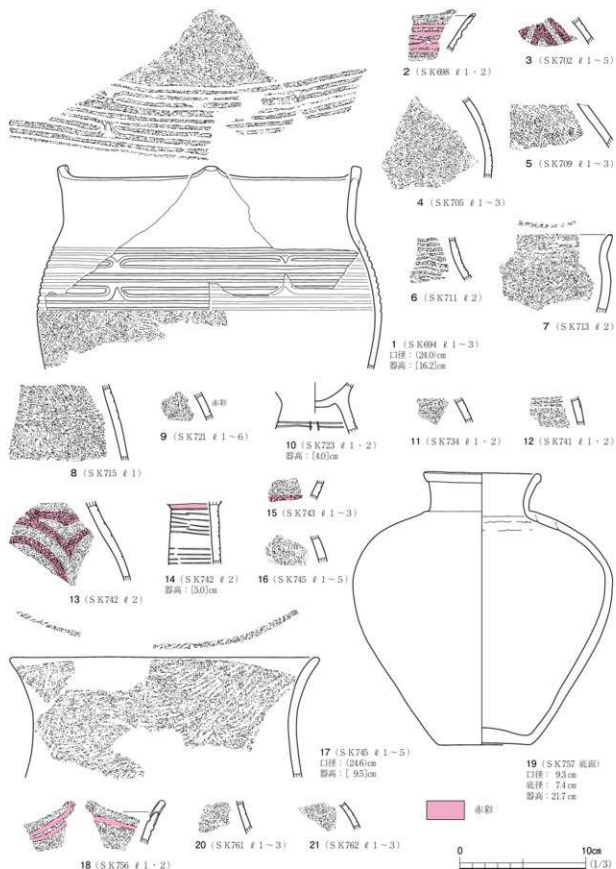


図199 土坑出土遺物 (24)

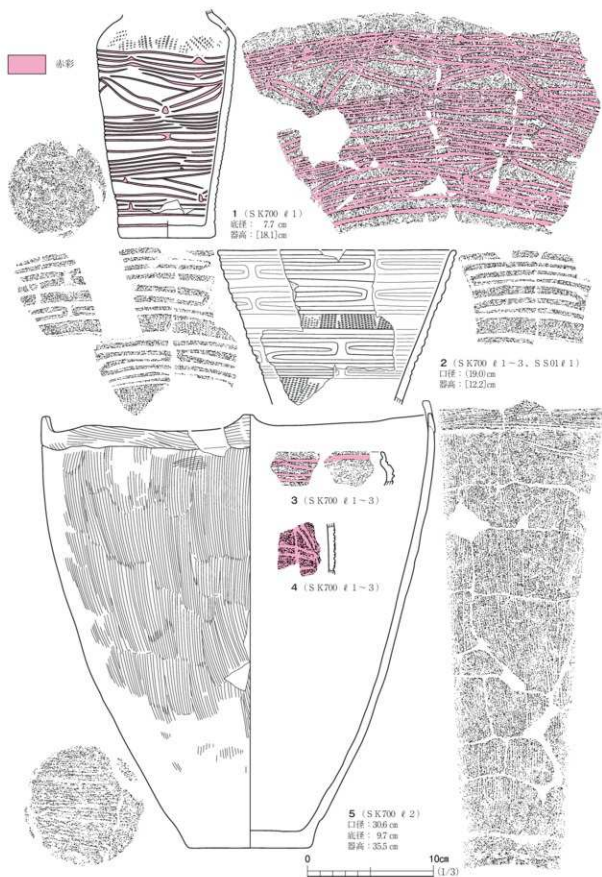


図200 土坑出土遺物 (25)

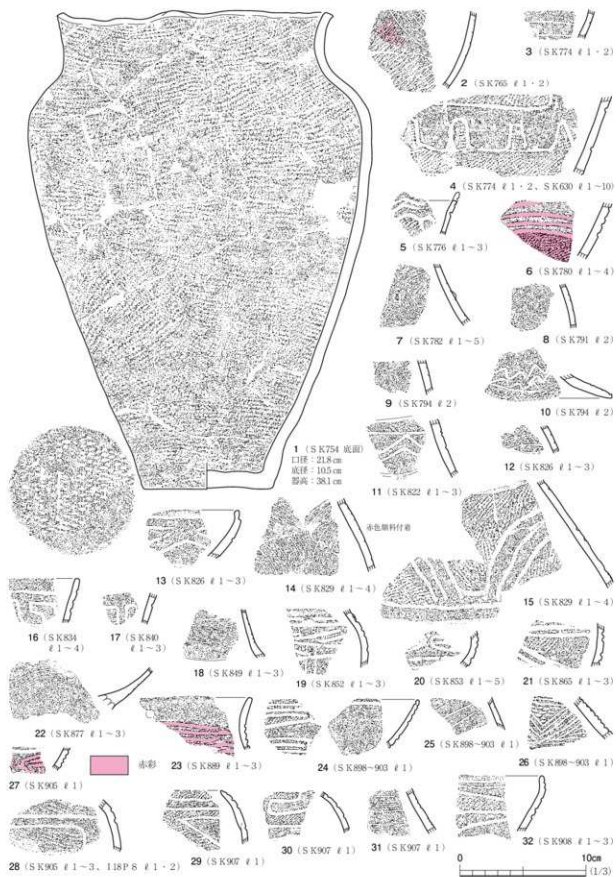


図201 土坑出土遺物 (26)



図202 土坑出土遺物 (27)

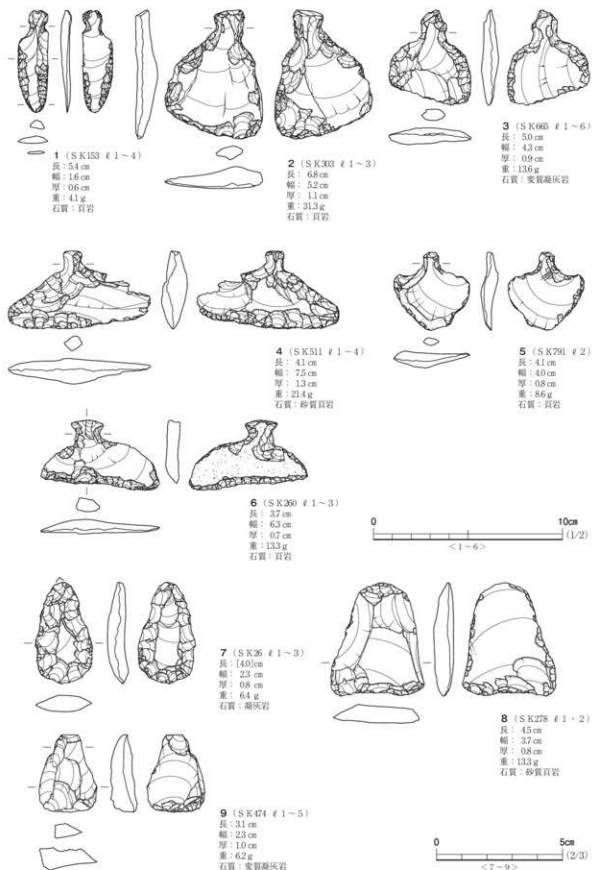


圖203 土坑出土遺物 (28)

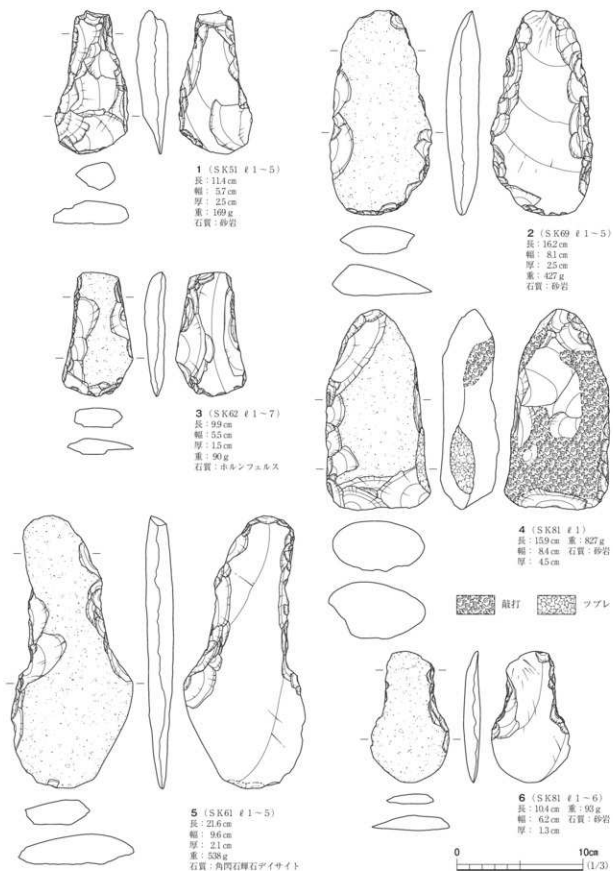


図204 土坑出土遺物 (29)

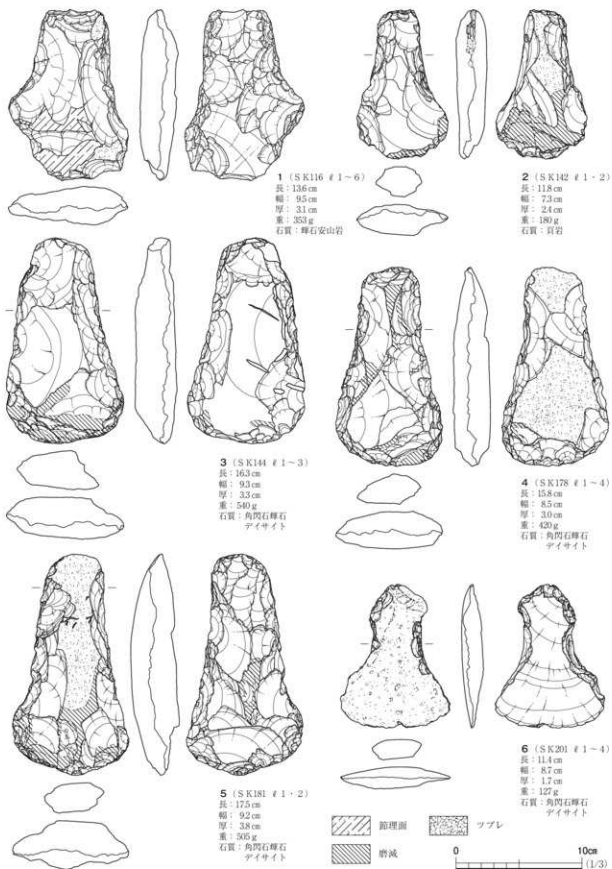


図205 土坑出土遺物 (30)

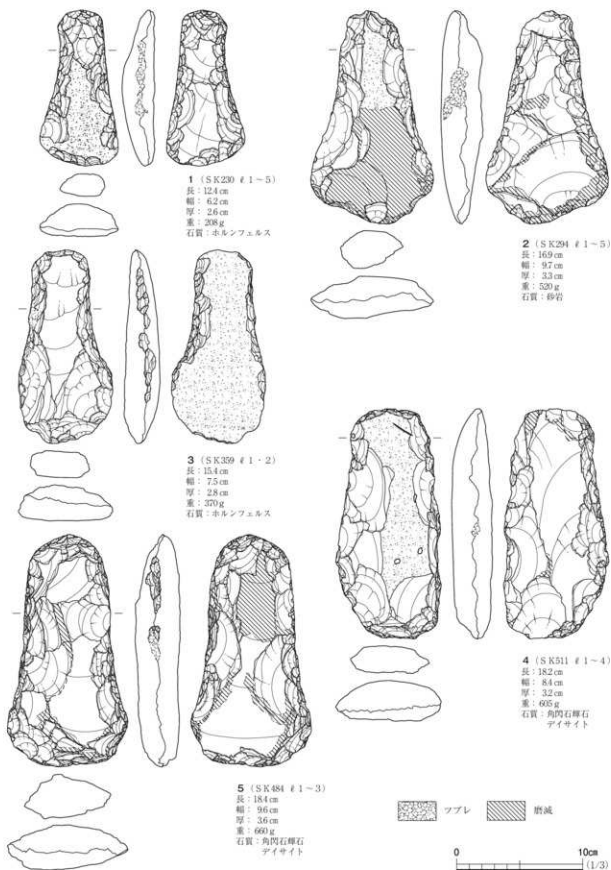


図206 土坑出土遺物 (31)

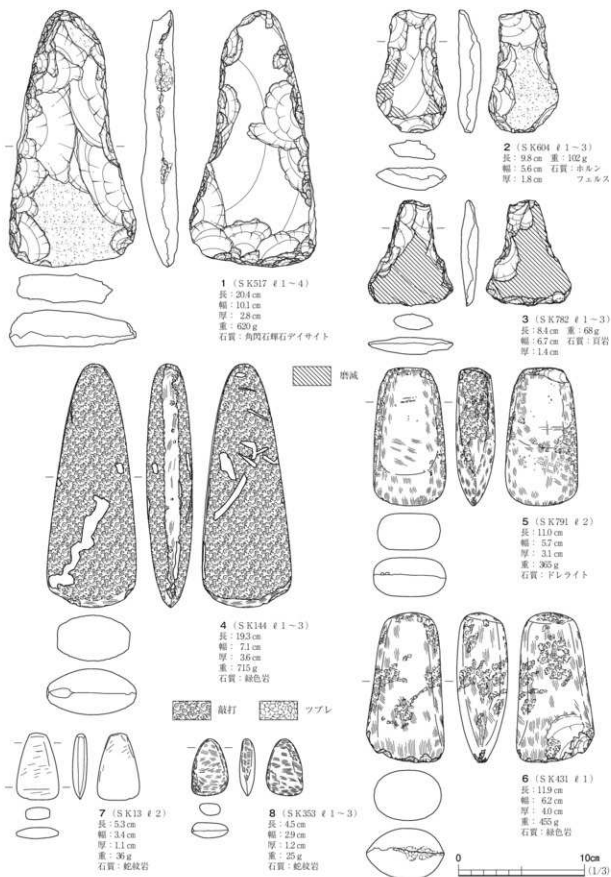


図207 土坑出土遺物 (32)

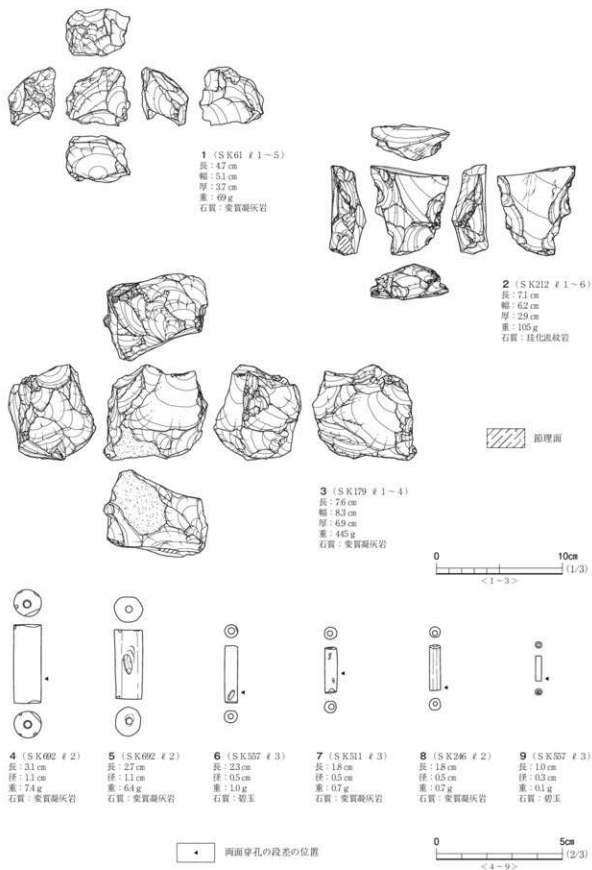


図208 土坑出土遺物 (33)

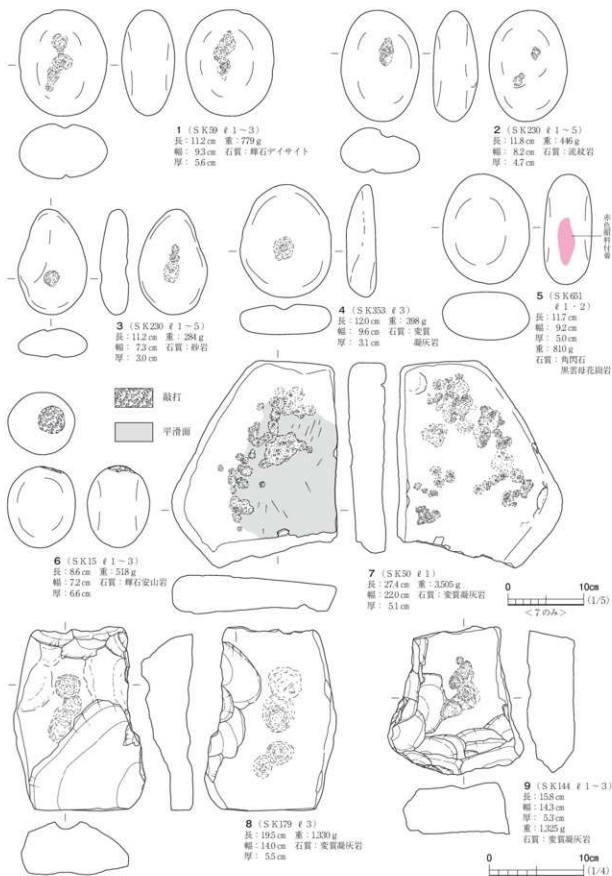


図209 土坑出土遺物 (34)

表 3-3 土坑一覽

[illegible]

表3-4 十坑一覽

[illegible]

表3-5 十坑一覽

[illegible]

表3-6 十坑一覽

[illegible]

[illegible]

表 3-8 十坑一覽

No.	アール・P No.	名称 (国・番)	平面的 位置 (1/25000)	測量(1/25000) 以上精度					地上測量方法		時期	タリ	ト	ト	本	備考
				測量	測量	測量	測量	測量	測量	測量						
002	100	50000-100000-50000	内陸部	11	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
003	101	50000-100000-50000	内陸部	12	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
004	102	50000-100000-50000	内陸部	13	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
005	103	50000-100000-50000	内陸部	14	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
006	104	50000-100000-50000	内陸部	15	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
007	105	50000-100000-50000	内陸部	16	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
008	106	50000-100000-50000	内陸部	17	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
009	107	50000-100000-50000	内陸部	18	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
010	108	50000-100000-50000	内陸部	19	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
011	109	50000-100000-50000	内陸部	20	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
012	110	50000-100000-50000	内陸部	21	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
013	111	50000-100000-50000	内陸部	22	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
014	112	50000-100000-50000	内陸部	23	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
015	113	50000-100000-50000	内陸部	24	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
016	114	50000-100000-50000	内陸部	25	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
017	115	50000-100000-50000	内陸部	26	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
018	116	50000-100000-50000	内陸部	27	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
019	117	50000-100000-50000	内陸部	28	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
020	118	50000-100000-50000	内陸部	29	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
021	119	50000-100000-50000	内陸部	30	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
022	120	50000-100000-50000	内陸部	31	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
023	121	50000-100000-50000	内陸部	32	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
024	122	50000-100000-50000	内陸部	33	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
025	123	50000-100000-50000	内陸部	34	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
026	124	50000-100000-50000	内陸部	35	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
027	125	50000-100000-50000	内陸部	36	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
028	126	50000-100000-50000	内陸部	37	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
029	127	50000-100000-50000	内陸部	38	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
030	128	50000-100000-50000	内陸部	39	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
031	129	50000-100000-50000	内陸部	40	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
032	130	50000-100000-50000	内陸部	41	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
033	131	50000-100000-50000	内陸部	42	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
034	132	50000-100000-50000	内陸部	43	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
035	133	50000-100000-50000	内陸部	44	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
036	134	50000-100000-50000	内陸部	45	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
037	135	50000-100000-50000	内陸部	46	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
038	136	50000-100000-50000	内陸部	47	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
039	137	50000-100000-50000	内陸部	48	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
040	138	50000-100000-50000	内陸部	49	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
041	139	50000-100000-50000	内陸部	50	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
042	140	50000-100000-50000	内陸部	51	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
043	141	50000-100000-50000	内陸部	52	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
044	142	50000-100000-50000	内陸部	53	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
045	143	50000-100000-50000	内陸部	54	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
046	144	50000-100000-50000	内陸部	55	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
047	145	50000-100000-50000	内陸部	56	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
048	146	50000-100000-50000	内陸部	57	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
049	147	50000-100000-50000	内陸部	58	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
050	148	50000-100000-50000	内陸部	59	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
051	149	50000-100000-50000	内陸部	60	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
052	150	50000-100000-50000	内陸部	61	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
053	151	50000-100000-50000	内陸部	62	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
054	152	50000-100000-50000	内陸部	63	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
055	153	50000-100000-50000	内陸部	64	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
056	154	50000-100000-50000	内陸部	65	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
057	155	50000-100000-50000	内陸部	66	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
058	156	50000-100000-50000	内陸部	67	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
059	157	50000-100000-50000	内陸部	68	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
060	158	50000-100000-50000	内陸部	69	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
061	159	50000-100000-50000	内陸部	70	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
062	160	50000-100000-50000	内陸部	71	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
063	161	50000-100000-50000	内陸部	72	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
064	162	50000-100000-50000	内陸部	73	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
065	163	50000-100000-50000	内陸部	74	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
066	164	50000-100000-50000	内陸部	75	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
067	165	50000-100000-50000	内陸部	76	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
068	166	50000-100000-50000	内陸部	77	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
069	167	50000-100000-50000	内陸部	78	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
070	168	50000-100000-50000	内陸部	79	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
071	169	50000-100000-50000	内陸部	80	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
072	170	50000-100000-50000	内陸部	81	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
073	171	50000-100000-50000	内陸部	82	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
074	172	50000-100000-50000	内陸部	83	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
075	173	50000-100000-50000	内陸部	84	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
076	174	50000-100000-50000	内陸部	85	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
077	175	50000-100000-50000	内陸部	86	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
078	176	50000-100000-50000	内陸部	87	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
079	177	50000-100000-50000	内陸部	88	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
080	178	50000-100000-50000	内陸部	89	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
081	179	50000-100000-50000	内陸部	90	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
082	180	50000-100000-50000	内陸部	91	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
083	181	50000-100000-50000	内陸部	92	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
084	182	50000-100000-50000	内陸部	93	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
085	183	50000-100000-50000	内陸部	94	10	41	12	0	0	0	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部	内陸部
086																

第6節 溝 跡

本遺跡では、2条の溝跡が検出された。

1号溝跡 S D 01 (図210・211、写真158・242)

本遺構は、調査区東部のJ 16～24グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約10～25m離れた場所で、検出面はLⅣである。J 21グリッドより北の部分は周りを多くの遺構に囲まれ複数の遺構と重複する一方、J 22グリッドより南の部分は西側にいくつかの遺構があるだけで重複する遺構はない。重複するいずれの遺構よりも、本遺構が新しい。

本遺構は、南北に長く延び、J 21・22グリッド付近などにきわめて緩やかなカーブがある他はほぼ直線を描く。J 21・22グリッドに途切れる部分が2箇所ある。J 20・21グリッドは攪乱によって壊されている。長さは81.4mで、北端と南端を結ぶ線は、北から2°西を指す。幅は、J 24グリッドがもっとも広く70cm、J 19グリッドがもっとも細く18cmで、多くの部分で30～40cmほどの幅をもつ。深さは、もっとも深い部分で20cmである。堆積土は①・②が自然堆積する。掘り直しが行われた痕跡は見いだせなかった。

本遺構からは、縄文・弥生土器18点、陶器1点、石器・剥片4点が出土した。縄文・弥生土器、石器・剥片は、周囲に縄文～弥生時代の遺構がある北部のJ 19グリッド以北で出土したものである。陶器は、溝跡の南部で出土した。

本遺跡の時期を示す遺物は陶器で、図示しなかったが近世のものである。この他、石錐1点を図211-1に示した。

本遺跡で検出された近世の遺構は本溝跡のみで、他にキセルが遺構外から出土している。本溝跡が何を目的に掘削されたかについての所見は得ることができなかった。

(青 山)

2号溝跡 S D 02 (図211、写真159)

本遺構は、調査区南東部のK 23グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から約10m離れた場所で、検出面はLⅣである。重複する遺構はない。

本遺構はおおむね南北に直線的に延びる。規模は、長さ4.1m、最大幅44cm、深さ10cmほどである。堆積土は3層からなる。いずれも自然堆積である。掘り直しの痕跡は見いだせなかった。遺物は出土しなかった。

本遺構の時期や性格を考えることのできる所見は得られなかったが、西側に18m離れて位置する1号溝跡と、溝が延びる方向がほぼ同じであること、幅、深さなどの特徴が類似することが注意される。

(青 山)

1号溝跡全体図
(S=1/400)

Y=-32.130
X=156.132

Y=-32.128
X=156.132

北部北半

SK58

X=156.123
Y=-32.130

SK32

SK54

SK63

SK64

SK67

SK108

SK117

J18
P15

X=156.115
Y=-32.130

SK118

X=156.115
Y=-32.128

Y=-32.130
X=156.114

SK118

SK110

J18
P10J18
P12

Y=-32.127
X=156.114

1号溝跡

X=156.105
Y=-32.130

X=156.105
Y=-32.127

0 2m
(1/80)

Y=-32.129
X=156.097

Y=-32.127
X=156.097

SB43P4
(SK601)

図210 1号溝跡 (1)

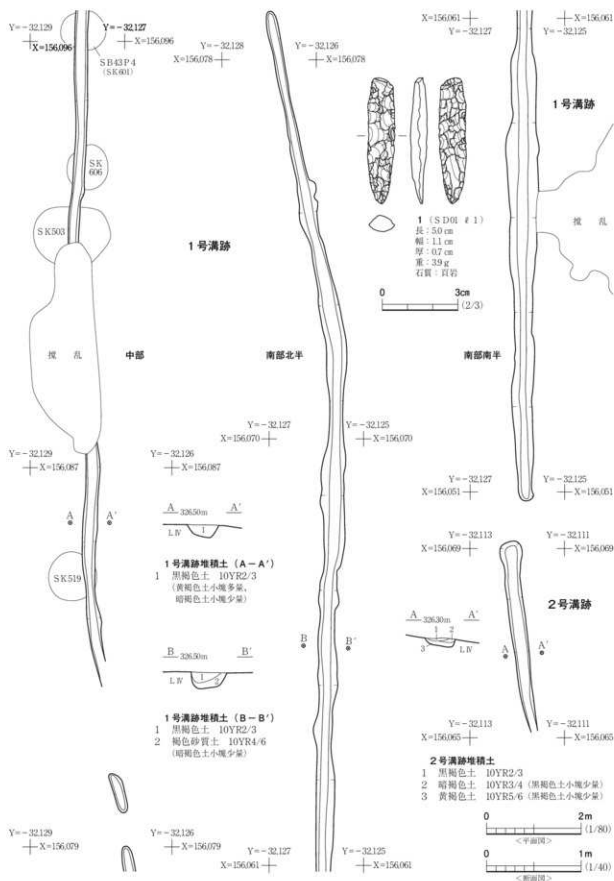


図211 1号溝跡 (2)・出土遺物、2号溝跡

第7節 集石遺構・配石遺構

本遺跡からは、2基の集石遺構と1基の配石遺構が検出された。いずれも只見川に臨む河岸段丘の縁辺近くに位置し、互いに近接している。検出作業を終えた段階では、3基とも自然石が多用されていることから集石遺構と考え、SS01～03の略号を付した。しかし掘り込みを進める過程でSS03については集石とはいいがたい遺構であることが判明し、必ずしも適当な呼称ではないものの、これを配石遺構とした。ただし、略号はそのままとし、SS01・02を1・2号集石遺構、SS03を1号配石遺構とした。

1号集石遺構 SS01

遺 構 (図212～214、写真160～162)

本遺構は、調査区東部のJ16グリッドに位置する。検出面は、LⅢ上面である。表土(LⅠ)の除去を人力で行っていた際、密集する礫群が確認されたためこれを覆う土を竹べらなどで取り除いて全体を検出した。885号土坑と重複し、これより新しい。北側0.5mには2号集石遺構が軸方向を同じくして位置する。検出当初は礎床墓の可能性も考慮し、周辺を入念に精査したものの、本遺構を囲む溝などは検出されなかった。

検出した時点では、東西方向に長軸をもつ小判形の範囲に5～18cmの大きさの礫が密集し、その周囲に同様の礫が散在していた。礫が密集する範囲の規模は、東西2.4m、南北1.4mで、東西のセクションであるA-A'を結ぶ長軸線は北から97°西を指す。密集する礫の上面は、礫の大きさによって凸凹し、LⅢ上面から最大で約8cmの高さがあった。また、西半部のほぼ中央にのみ、礫がきわめて少なく、LⅢと同様の黒褐色土が堆積する部分がある。この部分は東西方向に細長く、東西75cm、南北15cmを前後する規模を有し、A-A'を結ぶ長軸線より7°東を指す(写真161a)。

本遺構を掘り込むにあたっては、東西と南北のセクションに沿って区割りを行い、その南西部をa区、北西部をb区、北東部をc区、南東部をd区と呼称し(図214右)、まずd区の掘り下げ(礫の除去)を行った。サブトレンチを入れることも考えたが、遺構の規模が小さく難しいことから、全体の4分の1(d区)をサブトレンチとして掘り込むこととした。礫と礫との隙間には締まりのまったくない砂質土が堆積し、そのすべてをフルイにかけた。

d区の掘り下げ(礫の除去)を行ったところ、礫はLⅢ上面に敷き詰められているのではなく、LⅢを掘り込み面とする掘形に充填されていることが判明し、さらに掘り下げたところLⅢ上面から31cmの深さで掘形の底面が現れた(写真161e)。底面はLⅣに達し、壁は緩やかに立ち上がる。

この時点の断面観察で二つの所見が得られた。一つは、掘形に充填された礫が上下2層に大別されることである。上層には大小の礫がみられる一方、下層は3cm大ほどの小礫が大部分を占める。もう一つは、上述した西半部の礫がない部分が下層近くまで達していることである。この部分に堆

積する土が基本土層と同程度の締まりをもつことも判明した。これをℓ1、上層の礫をℓ2とした。

この段階でこの遺構が他に例のない稀有な遺構の可能性を考え、掘り込みを中断して多くの方々にみていただき、数々の助言を得ることができた。上述の所見は、これらに負うところが大きい。

次に、c区の掘り下げ(礫の除去)を行った。上下2層がこの遺構の構築手順を反映している可能性を勘案し、下層上面の検出をもくろんだ。c区の上層を除去したところ、下層の上面はほぼ水平かつ平坦であること、上下2層に対応するように掘形の壁に段があるらしいことがわかった。

以上から、まず掘形に小礫を敷き詰めて平坦な面をつくった後、大小の礫を入れて掘形を埋め尽くすという手順で構築されているものと思われた。よって、次に下層上面全体の検出を目指した。

c区上層の掘り下げを終えた段階における短軸方向(B-B')の断面観察では、礫がない部分の土層(ℓ1)が断面「V」字あるいは「U」字形に堆積し、基本土層と同じ程度の締まりをもつ黒褐色砂質土が大小の礫を交えて自然堆積していることがわかった。また、上層がℓ1のやや右で左右に細分されるのではないかという見方があったが、上面では確認されなかった(写真161c)。

この段階で不可解な点が一つあった。それは、これまで姿を現した掘形の壁にはいずれも基本土層のLⅢ・Ⅳが露出したが、北壁のセクションを設けた部分についてのみ若干の礫が露出していたことである。後に判明したことだが、この部分は本遺構によって壊された885号土坑の堆積土であった。この時点ではまだ885号土坑の存在に気づいていなかった。885号土坑は北に隣接する2号集石遺構の南縁をわずかに壊してその礫を堆積土に含んでいた。この段階ではそのことに気づかず、掘り足りていないと考えたため、この部分の壁をやや掘りすぎてしまった(写真162e・h)。

礫がない部分の土層(ℓ1)がどのように生じたかについては、三つの可能性が考えられた。

第一は、下層と上層を構築した後、上層の上面から一部の礫を取り除くことで細長い穴を穿った可能性、第二は、下層の構築を終えた段階でその上面に何らかの有機質のものが置かれ、その後に上層の礫によって有機質のものを覆う形で掘形が埋め尽くされ、有機質の腐朽によって陥没坑が生じ、そこに周囲から土が流れ込んだ可能性、第三は、置かれた有機質のものが掘形の上端を超える高さをもっていた可能性である。いずれにしても、ℓ1は上層の堆積後に形成された可能性が考えられることから、残るa・b区の掘り込みに着手する前にℓ1の掘り込みを行った。

ℓ1の掘り込みを開始してまもなく、その中央部の南に寄った位置から一個体の小型の土器が出土した(図214-1)。検出面から約3cm下で、横倒しの状態で口縁部を南に向けていた。土器の上にはこぼし大の礫が乗っていた(写真162-c)。

ℓ1を掘り上げると、周囲の壁、底面とも、露出した大小の礫による凹凸がみられ、面がそろっているような状況はみられなかった。底面にも明確な面といえるものはみられず凸凹しており、もっとも深い部分で上面から約25cmの深さがあった(写真162a・b)。

ℓ1を掘り下げる作業には時間がかかった。間口が狭い穴に腕を入れて礫や土を取り出さなければならなかったことによる。周囲の礫を崩さないための注意も必要で、足場の確保にも苦慮した。

このような状況から、礫を取り除くことで細長い穴をつくったと考える第一の可能性は小さいも

のと思われた。一方、 ℓ 1 を掘り上げたことによって現れた礫が不規則な状態であった点から、これらが陥没によって落ち込んだ礫である可能性が考えられた。

次いで、a区、b区のそれぞれ上層を除去した。この作業の際、 ℓ 2 の内部に何かしらの構造があるかに注意を払ったが、大小の礫が一樣に堆積している状況であった。下層上面を検出したところ(図213)、その全体がほぼ水平かつ平坦で、何かしらの掘え形や粘土塊などはみられなかった。ただし、先にサブトレンチとして掘り込んだd区については下層上面を掘り飛ばしたため、この部分の状況は不明である(写真162 e)。この他、新たに掘形の平面形が卵形であることがわかった(図213)。掘形の壁付近には、礫が少なく締まりのある土が堆積していた(ℓ 3)。

最後に下層の小礫をすべて除去し、掘形の全体を検出した。前述のように掘形の平面形は卵形で、掘形の壁の中ほどに段があることがここでも確認され、検出面から段の位置まではやや緩やかに、段から底面までの壁はやや急な角度で傾斜していることがわかった。上層と下層の境はこの段の位置に対応する(写真162 h)。

掘形の規模は、長径248cm、短径148cm、検出面からの深さ31cmである。底面の平面形は小判形で、おおむね平坦である。

なお、本遺構の掘り下げを進めるにあたっては、最初に掘り込んで掘形底面が露出したd区を足場とすることが多かった。このため、作業が進むにつれd区の底面が靴底によって少しづつ掘り下がり、完掘の時点でa～c区の底面の高さより約10cm低い状態となってしまった(写真162 h)。

遺物(図214、写真224・225)

本遺構からは、縄文・弥生土器が184点、剥片が23点出土した。礫の隙間に堆積する土をすべてフルイにかけた結果で、多くが小片である。骨片などその他の遺物は含まれていなかった。このうち、弥生土器4点を図示した。

図214-1は、壺である。平底、ややなで肩の球胴で、口縁部は急な角度で短く外傾する。口縁部と体部に無節の縄文がまばらに施される。底面には、陽刻の木葉痕が付される。木葉痕のある土器の底部を下に敷いて製作されたものであろうか。外面の広い範囲に炭化物が薄く付着する。体部はやや歪み、口唇部が不規則に波打つなど、粗製の土器である。

同図2・3は、壺である。接合しないものの、同一個体の可能性がある。遺構外出土の図235-11も、やはり接合しないが同一個体と思われる。2は体下部で、急な角度で立ち上がる。底部が剥離し欠損する。外面に条痕が施される。3は体部で、沈線が引かれたのち、条痕が施される。

同図4は、壺である。体上部と思われる。磨消縄文でヒトデ文が描かれる。

まとめ

本遺構は、2段に掘り込まれた掘形の下部に小礫を入れて上面を平坦にならし、何らかの有機質のものを置き、大小の礫でこれを覆って掘形を埋め、その上面に小型の土器が置かれたものと考えられる。その後、有機質の腐朽によって陥没孔が生じ、上面に置かれた土器が落ち込んだものと思われる。本遺構の性格については、ただちには断定できない。

陥没坑から出土したのは図214-1の弥生土器の壺で、本遺構に伴うと考えられる唯一の遺物である。同図2-4の土器は、いずれも礫に混じって破片の状態で出土したもので、本遺構を構築した際に混入したものと思われる。1の壺は無節の縄文以外に時期を考える特徴に乏しいが、破片の状態で出土した土器は、弥生時代中期前葉のものと考えられる。

図214-1の壺については、外面に付着する炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果の2 σ 暦年代範囲は、541calBC-401calBCである(付章第5節)。この値は、縄文時代晩期末葉の土器に付着する炭化物の年代測定結果に近似する。また、 ℓ 4から採取した土壌サンプル3点の放射性炭素年代測定結果の2 σ 暦年代範囲は、206calBC-52calBC、544calBC-399calBC、1016calBC-897calBCである(付章第4節)。それぞれ、弥生時代中期中～後葉、縄文時代晩期末葉、同晩期中葉の土器に付着する炭化物の年代測定結果に近似する。(青山)

2号集石遺構 SS 02

遺 構 (図212～214、写真160・163)

本遺構は、調査区東部のJ16グリッドに位置する。検出面は、LⅢ上面である。表土(LⅠ)除去を人力で行っていた際、礫の密集が確認されたためこれを覆う土を竹べらなどで取り除くことで全体を検出した。本遺構は、885号土坑と重複してこれより古い。南側0.5mには、1号集石遺構が軸方向を同じくして位置する。1号集石遺構と同様、周囲を巡る溝などは検出されなかった。

検出の時点では、東西方向に長軸をもつ小判形の範囲に2～12cmの礫が密集し、その周囲に同様の礫が散在していた。密集する部分は、小礫が多くを占める。礫が密集する範囲の規模は、東西1.6m、南北1.0mで、東西のセクションであるC-C'を結ぶ線は北から96°西を指す。礫の上面は礫の大小で凸凹し、LⅢ上面から最大で約5cm盛り上がっていた。また、中央部だけ小礫に混じって黒褐色の土が堆積していた。その範囲は軸方向と同じ東西に長く、東西0.9m、南北0.4mである。

本遺構の掘り下げにあたっては、東西と南北のセクションに沿って区割りを行い、その南西部をa区、北西部をb区、北東部をc区、南東部をd区と呼称し(図214右)、まずd区の掘り下げ(礫の除去)を行った。礫と礫との隙間には締まりのまったくない砂質土が堆積し、これらの土のすべについてフルイがけを行った。

d区の礫をすべて除去して検出された面はLⅣ上面とほぼ一致し、壁の立ち上がりは確認できなかった。次に掘り下げた(礫を除去した)c区も状況は同じであった。

のちに判明したことであるが、本遺構の南縁は885号土坑によって壊されていたが、885号土坑の存在にはこの時点では気づいていなかった。

この時点で、本遺構の中央部にみられた礫混じりの黒色土がレンズ状に堆積している状況が、短軸方向の断面(D-D')で観察された(写真163b)。

次いで、a・b区の礫を除去したところc・d区と同じ高さで掘形底面が検出され、北・西・南側の三方が緩やかな角度で立ち上がることが確認された。これが掘形の壁と考えられる。掘形の平

面形は礫が密集していた範囲とほぼ一致する。規模は、遺存した部分で、東西72cm、南北105cm、検出面からの深さ12cmである。c・d区で掘形が確認できなかったのは、検出の段階で周囲を掘り下げすぎたためと、わずかに遺存していた壁に気づかずこれを含めて掘り下げたためと考えられる。掘形は礫が密集する形と同様の小判形の平面形をもっていた可能性がある。

遺物 (図214、写真225)

本遺構からは、縄文・弥生土器が7点、剥片が1点出土した。すべて小片である。その他の遺物や骨片などは出土しなかった。このうち、弥生土器1点を図示した。

図214-5は、器種不明の口縁部である。磨消縄文で文様が描かれる。

まとめ

本遺構は、浅い掘形に小礫を敷きつめた集石遺構で、1号集石遺構の0.5m北に位置し、長軸をおおむねそろえてつくられている。

1・2号集石遺構の調査を終えた後で判明したことがある。それは、両者の構築順序である。2基の集石遺構の調査を終えた後、これらの掘り込み面であるLⅢを除去してLⅣ上面を精査したところ、2基の集石遺構のちょうど中間で885号土坑が検出された。本遺跡で検出された多くの遺構と同様にLⅣまで掘り下げてその存在に気づいたものである。885号土坑と2基の集石遺構の平面図を重ね合わせると、885号土坑は2号集石遺構の南縁部を削って掘り込まれ、885号土坑は1号集石遺構によってその南半部が壊されていることがわかった(図212・214)。つまり、これらの構築順序は、本遺構→885号土坑→1号集石遺構である。885号土坑からは遺物は出土しなかった。

本遺構から出土した遺物は少ないものの、この構築順序を考え合わせれば、本遺構は弥生時代中期前葉を下限とすることができる。本遺構の性格は、ただちには判断できないものの、中央部にみられた礫じりの黒色土の範囲に何かしらの有機質のものが存在した可能性がある。

ℓ2から採取した土壌サンプル3点の放射性炭素年代測定結果の2σ暦年代範囲は、204calBC-52calBC、361calBC-159calBC、806calBC-751calBCで(付章第4節)、それぞれ、弥生時代中期中～後葉、同前期～中期中葉、縄文時代晩期末葉の土器付着炭化物の年代測定結果に近似する。(青山)

1号配石遺構 SS 03

遺構 (図215・216、写真164・165)

本遺構は、調査区東部のJ・K17グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺で、本遺構の東辺のすぐ東側は、段丘崖の緩斜面である。

表土(LⅠ)除去を人力で行っていたところ、LⅢ上面で「コ」字形に並ぶ礫が検出された。この時点では周辺に人頭大までの大きさの礫が散在し、これらを残してLⅢを掘り下げたところ、LⅣ上面で複数の土坑が検出されるとともに「コ」字形に並ぶ礫の内側に黒褐色土の範囲が広がることが判明し、礫の列の内部に掘形を有する遺構であると認識された(写真164b)。周囲に散在していた大小の礫(写真168cなど)はこの時点で遺構でないと判断し除去した。検出の時点で、堆積土に

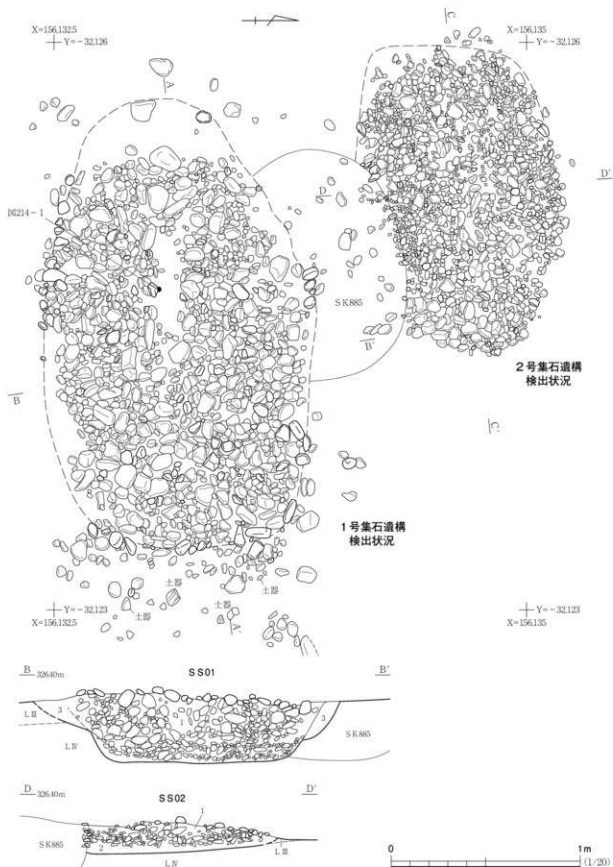


図212 1・2号集石遺構 (1)

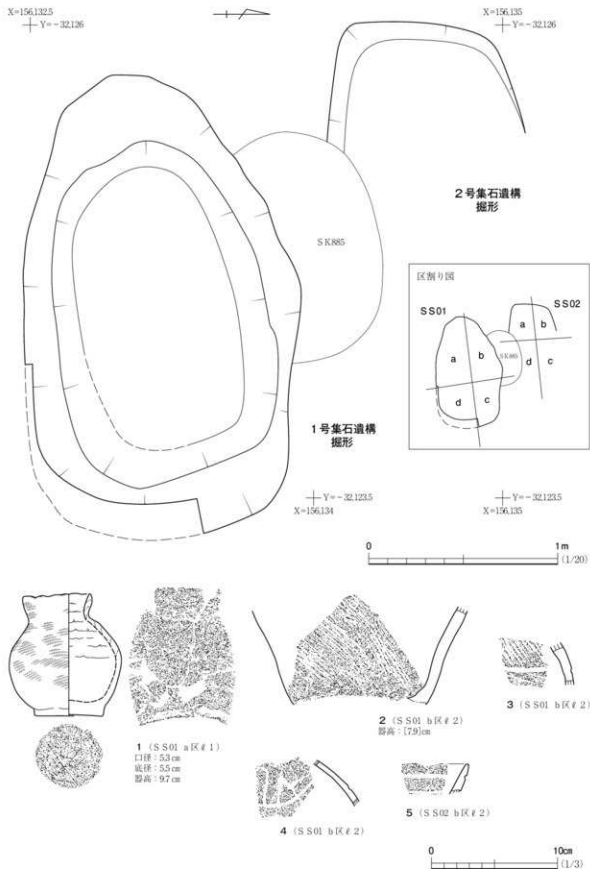


図214 1・2号集石遺構(3)・出土遺物

炭化種子が含まれることが確認された。

本遺構は699・700・756号土坑と重複し、このいずれより古い。ただし、検出の時点では699・700号土坑と本遺構の重複部分に本遺構の礫が位置し、756号土坑との重複部分もわずかであったため、それぞれとの新旧関係の判断はつかなかった。本遺構を先行して掘り込んだが、もっとも古いのは本遺構であった。西側1.8mには、2号土器埋設遺構が位置する。

平面形は長方形で、検出した時点では、北・東・南の三辺に前述のように「コ」字形に礫が並んだ状態で、その内部に黒褐色土の範囲が広がっていた。

規模は、東西4.5m、南北2.1mで、東西のセクションであるA-A'を結ぶ線は北から118°西を指す。「コ」字形に並ぶ礫の上端は、礫の大小などによる凸凹があってそろっていない。礫のもっとも高い部分は、LⅣ上面から最大で約30cmである。

掘り下げを始めたところ、検出面から約5cm下、西辺の内側90cmの位置で南北に並ぶ礫の列が検出された。これにより、検出当初「コ」字にみえた礫の列は長方形であること、北・東・南辺は掘形の壁に礫が張り付いた状態で並ぶ一方、西辺だけ掘形の壁から90cm離れた位置に礫が並ぶことがわかった。長方形に並べられた礫の列の規模は、この時点で、東西4.1m、南北2.3mである。

堆積土は、3層が掘形内にレンズ状に堆積していた。西辺付近の堆積土も他の部分と同様の堆積状況で、西辺から離れた位置に礫が並べられた後に裏込めなどはなされず、他の部分と同時に埋没したと考えられる(写真164d)。

検出作業の時点で堆積土に炭化種子が含まれていることが認識されたため、堆積土をすべてフルイにかけたところ、ザル1杯半分の炭化種子が出土した。粉々に砕けて捨てざるを得なかった炭化種子もきわめて多く、実際にはこれに倍する量が含まれていたと思われる。

底面はLⅣ中にあり、わずかな起伏があるがおおむね平坦である。東半部は平坦であるが、西壁から約2mの位置から西に向かって緩やかに標高が上がり、西壁際の高さは底面中央より15cm高い。

底面からは、地床炉が一箇所検出された。地床炉は、掘形底面のやや東寄り、長方形に並べられた礫の中央に位置し、LⅣの褐色砂質土を赤変させ、弱く硬化させている。平面形は東西に長い楕円形で、中央部が特に強く被熱している。規模は、長径98cm、短径49cm、断ち割りによって確認された赤変範囲は、底面からの深さ11cmに及ぶ。中央部は周囲の底面より10cm高く盛り上がっている。床面精査の際、その南縁を下げすぎたため、短径は50cmを超える規模であったと思われる。

北・東・南の各壁には礫が並び、西壁はLⅣが露出する。西壁は、底面から緩やかに立ち上がってしだいに傾斜を増し、どこまでが底面でどこからが壁面か不明瞭である。西壁付近の検出面と底面の標高差は、およそ20cmである。

四辺に並ぶ礫には大きく二つの状態がみられた。立った状態のものと、横倒しの状態で掘形内外の壁からやや離れた位置にあるか立った状態の礫に寄りかかっているものである。掘形内に横倒しの状態で寄りかかる礫の多くは底面から浮いた状態で、壁に並ぶ礫には原位置にあるものと壁に沿って並べられていたものが遺構内外に横倒しになったものの二者があると考えられた(図215上)。

原位置をとどめていない磔を取り外したところ、壁際に立つ磔には、壁に張り付いた状態のまま垂直に近い角度で立つものと、壁際に位置しながら傾いているものが認められた(図215下)。前者は原位置を保ち、後者は原位置にありながら傾いた状態にあると思われる。この時点で長方形に並べられた磔の規模は、東西3.6m、南北2.1mである。また、掘形の東側に横倒しになっていた磔は、LⅢの上に位置していた。

この段階で、壁際の磔の多くが赤く変色し被熱した状態であることが認識された。磔にみられる割れやヒビも、被熱による可能性がある。周辺で出土した割れた磔と、壁際に並んだ磔が接合するものもあった。被熱は南壁の磔に特に顕著にみられた。磔を外したあとで磔の裏側を観察したところ、赤変した部分は認められなかったことから、並べられた状態で被熱したと考えられる。

磔は扁平なものが多い。磔の扁平な面を壁に当て、長軸を横にした状態で片側縁を接地させて置かれていたものが多く、長軸を縦にした状態で置かれたものは少ない。磔の並びは、大小と縦横が混ざり、規則性は特に認められなかった。磔の大きさは大小さまざまである。もっとも大きいものは、長さ68cm、幅35cm、厚さ20cmで、大人が2人がかりでもち上げたほどの重さがあった。小さなものはこぼし大で、指先大の小磔も出土した。

これらの磔をすべて撤去すると、掘形の全体が現れた。掘形の東辺は、上述したように原位置をとどめない磔を取り外した際に現れたLⅢを掘り込んでいて本遺構の堆積土との峻別が難しく、掘形の平面形は明瞭には把握できなかった。この部分は不明瞭であるものの、掘形の平面形はおおむね隅丸長方形で、規模は、長軸およそ4.5m、短軸2.4mである。

掘形の底面にはいくつかの磔の接地部分がめり込んでいたものの、明確な据え形は確認されなかった。掘形と磔との間にはLⅣと同様の土(ℓ4)が堆積していた。これら磔の裏や下からも堆積土に含まれていたものと同様の炭化種子が出土した。

これら掘形を精査している際、底面に露出するLⅣと考えていた土の中からも、堆積土に含まれていたものと同様の炭化種子が出土した。このためサブトレンチにより断ち割ったところ、掘形の北西部、底面から40cmの深さまで掘り下げる間に数片の土器片、磔、炭化種子が出土した(写真165h)。このため底面を掘り込む何らかの遺構があると判断しその平面形の検出に努めたものの、捉えることができなかった。土に含まれる炭化種子や土器片を頼りにサブトレンチを掘り広げたが、LⅣとの峻別はきわめて困難で、炭化種子や土器片がまったく含まれなくなった時点を壁とし、底面についてはLⅣ下のLⅤの砂礫層に達したところで掘削を止めた。この状態を記録したものが図216である。土器片や炭化種子が含まれていた範囲は掘形の北西部に位置し、推定で1.2～1.5m以内の平面規模を有し、掘形底面から60cm以内の深さをもつ。これについては、本遺構の自然堆積が始まった時点で完全に埋没していたピット、もしくは掘形の一部と考えられる。この周囲と掘形東部の底面をさらに断ち割ったものの、この他の部分では土器や炭化種子は出土しなかった。

本遺構からは多くの遺物が出土した。検出面では図217-6がつぶれた状態で出土した。同図1は、壁に並んだ磔と掘形との間から出土した。同図3は、掘形を断ち割った際に出土した土器片が

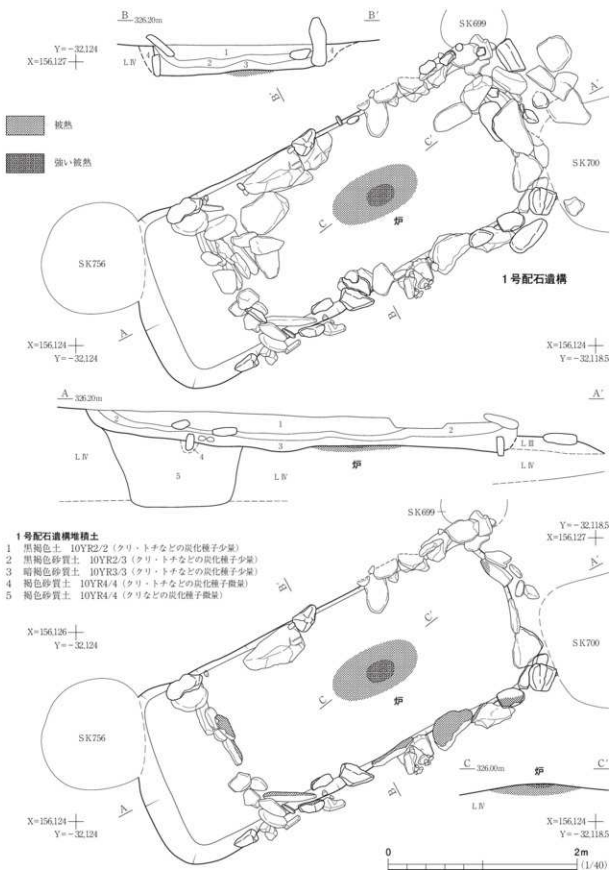


図215 1号配石遺構 (1)

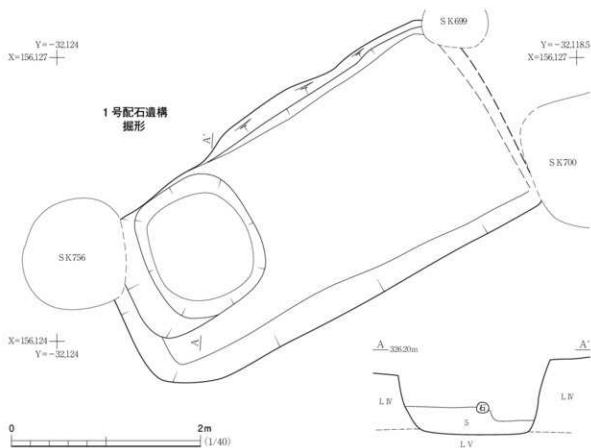


図216 1号配石遺構(2)

接合したものである。その他は、 $\phi 1 \sim 3$ の堆積土から出土したものである。

遺物 (図217、写真224・225)

本遺構からは、縄文・弥生土器345点、石器・剥片95点が出土した。このうち、縄文土器9点、弥生土器1点を図示した。その他、上述したように炭化種子が多量に出土した。

図217-1~8は、縄文土器の深鉢である。1は口縁部突起、2は突起のある口縁部である。2は、突起から口縁部にかけて粘土紐を「8」字形に立体的に貼り付け、体部に麻手文、円文などが描かれる。3は、深鉢の体部から口縁部である。波状口縁で、波頂部を欠損する。口縁部に沿って沈線が2本が引かれ、沈線間に列点文が施される。波頂部下にも縦方向に同様の文様が描かれる。外面に炭化物が付着する。4は体部で、列点で縁どられた円形の文様内部に、緩く弧を描く多数の弧線が充填される。5は体下部で、縦走する撚糸文が施されたのち「八」字形の文様が描かれる。同図6は、体上部から口縁部である。体上部が急角度で立ち上がって肩部に最大径を有し、頸部から口縁部が直線的に外傾する。口唇部に二山の突起を有する。口縁部外面には突起を起終点にした沈線が口唇部に沿って引かれ、その直下、口縁部の上半に6本の沈線が巡らされる。口縁部下半は無文である。体部には条痕が施されたのち肩部に工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。7は、これと同一個体と思われる。8は体上部で、肩部に4本の沈線を巡らせる。内外面に炭化物が薄く付着する。

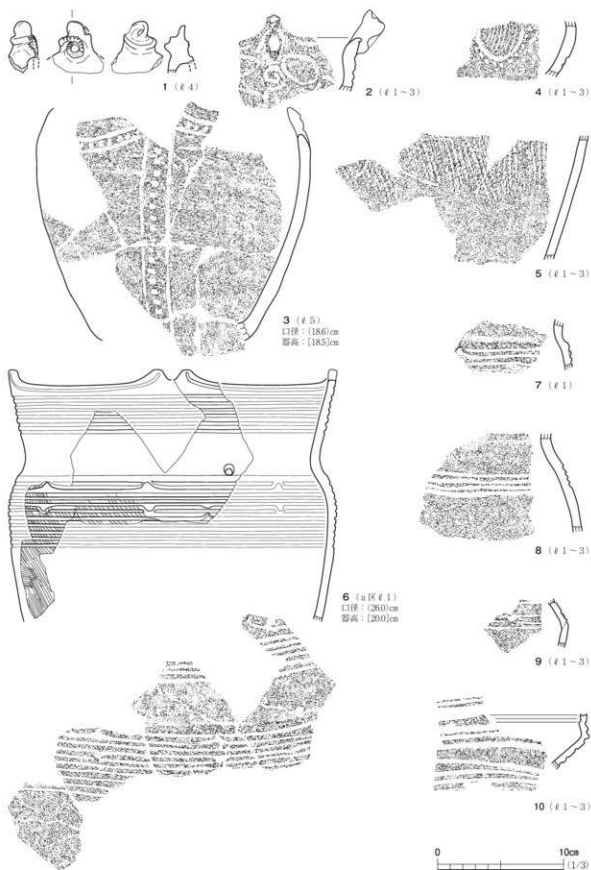


図217 1号配石遺構出土遺物

同図9は、縄文土器の鉢の体部である。最大径の位置で緩やかに屈曲する。最大径の位置に沈線を描き、その上方に工字文が描かれ、下方に縄文が施される。

同図10は、弥生土器の鉢が高杯の体上部から口縁部である。口縁部と体部の境で屈曲する。口縁部は波状口縁で、口唇部に沈線が引かれ、外面に2本、内面に1本の沈線が巡らされる。体部には変形工字文が描かれる。内外面ともミガキが丁寧に施される。279号土坑出土土器(図187-5と接合しないものの、同一個体の可能性がある。

本遺構から出土した炭化種子は、重さにして565gである。その同定をすべて外部に依頼することにはかなわず、一部について同定を依頼した(付章第8節)。これを標本として分類したところ、クリ382g、トチ113g、クルミ4g、細片で分類できなかった種子51g、炭化した木片15gであった。クリはいずれも乾燥して皺が寄ったいわゆるカチグリの状態で炭化している。

まとめ

本遺構は、只見川に臨む河岸段丘の縁に位置する。本遺跡の多くの遺構が縄文時代晩期～弥生時代のものであるのに対し、本遺構の掘形から出土した土器は縄文時代後期初頭のものである。堆積土から出土した炭化種子3点の放射性炭素年代測定の結果の2 σ 暦年代範囲が、2462calBC-2284calBC、2301calBC-2140calBC、2489calBC-2338calBCであることも、本遺構が縄文時代後期初頭のものであることを示す(付章第4節)。本遺跡で検出されたもっとも古い遺構ということになる。

底面の地床炉は、地床炉としては規模が大きく、赤変した範囲が深くに及んでいたことから、相当の強さで火が焚かれたことを示す。礫の被熱はこの地床炉による可能性が考えられ、礫が赤変したり割れたりしていた状況とも一致する。

堆積土と掘形に含まれていた大量の炭化種子との関係は推測するしかないが、掘形と堆積土の両方に炭化種子が含まれていたことからすれば、本遺構の構築から埋没までの間、周辺には常に多くの炭化種子が存在していたことになる。種子を炭化させた具体的な場所などについては、調査では所見を得ることができなかった。

本遺構は、整った隅丸長方形の平面形をもち、壁に沿って多くの礫が並べられるなど、多大な労力をもって構築され、西辺のみ礫の列が掘形の壁から離れていること、礫の列が被熱していること、堆積土と掘形に炭化種子が多く含まれていたことなど、特筆される特徴を多く有する。

以上の所見をもとに本遺構の構築過程を復元すれば、次のようになる。まず、隅丸長方形の掘形が掘削された。その際、掘形の北西隅が深く掘られ、おそらく掘り上げた土を用いてまもなく埋め戻された。その際、破片の状態となった土器や礫、炭化種子が混入した。底面を平坦にならしたのち、北・東・南壁と西壁から90cm離れた位置に礫が長方形に並べられた。その中央に地床炉が設けられ、周囲に並べられた礫が赤変・ひび割れるほど盛大に火が焚かれた。本遺構はまもなく廃絶し、周囲から土が流れ込んだ。その際、周囲にやはり炭化種子があり、完全に埋没しきるまでこれらの炭化種子もあわせて流れ込んだ。埋没がある程度進んだ段階で、礫の一部が本遺構の内外に横倒しの状態となった。原位置をとどめていない礫の出土状況からすれば、原位置をとどめた礫の

上に重ねて礫が置かれていたと考えられる。検出面で縄文時代晩期～弥生時代前期の土器が出土したことは、この頃までに埋没していたことを示す。

もう一つ注意されるのは、西側1.8mに位置する2号土器埋設遺構である。縄文時代後期初頭の遺構で、本遺跡でこの時期に位置づけられる遺構はこの2基のみである。両者の何らかの関係が示唆される。本遺構と2号土器埋設遺構の先後関係は不明である。

本遺構の具体的な性格を考えることは難しい。ここでは配石遺構としたが、平面形や地床炉の存在は本遺構があるいは一種の住居跡であることをも示す。ただし、本遺跡で検出された同時期の遺構は前述のように2号土器埋設遺構だけで、仮に住居跡としての性格を想定すれば、特殊な機能や性格をもった住居が1軒だけ建てられたことになる。上屋の存在を示す柱穴は検出されなかった。

いずれにしても、本遺構には特殊な性格があることが考えられる。類例が見当たらない遺構である1・2号集石遺構がやはり只見川を臨む河岸段丘の縁辺に位置することを考えあわせても、本遺構に何かしらの特別な機能・性格があることを示しているように思われる。(青山)

第8節 土器埋設遺構

1号土器埋設遺構 SM01

遺 構 (図218、写真166)

本遺構は調査区東部のJ16グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅡ掘削中に検出した。埋設する土器よりも一回り大きい掘形の中に底部を欠いた深鉢を正位に埋設している。土器内堆積土は3層に分層され、いずれも人為堆積土である。掘形は平面形が円形で、全体の形状は楕円形を呈している。周壁上部はLⅢ・Ⅳで、周壁下部から底面はLⅤである。規模は、径31cm、深さ22cmを測る。掘形内堆積土は2層に分層され、ℓ5は掘形内に土器を埋設する前に掘形底面上に埋めた土、ℓ4は土器をℓ5上に設置した後に土器の外側に埋めた土と推測される。

遺 物 (図219、写真224)

図219-1は、縄文土器の深鉢である。底部から体下部を欠損する。体下部は急な角度で立ち上がり、体上部は張りをもって最大径を有し、無頸で、口縁部は内湾する。口縁部は、外面に輪積み痕を残してやや肥厚させる。外面全体に条痕が施され、内外面に炭化物が付着する。

ま と め

本遺構は、底部を欠損する深鉢が埋設された遺構である。時期は、土器の特徴から縄文時代晩期末葉～弥生時代前期と推測される。(能登谷)

2号土器埋設遺構 SM02

遺 構 (図218、写真167)

本遺構は、調査区東部のJ17グリッドに位置する。只見川を東に臨む河岸段丘の縁辺から6m

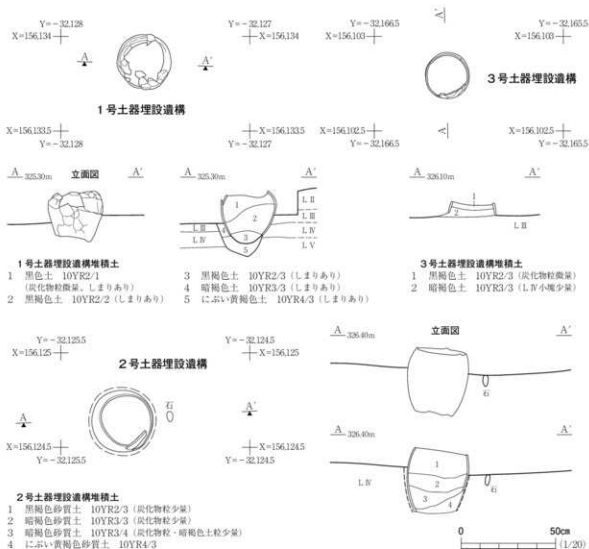


图218 1~3号土器埋设遗构

ほど離れた場所である。人力による表土(L I)除去を行っていた際にL IV上面で検出された。東側18mにはI号配石遺構が位置する。他の遺構との重複はない。

検出時は、褐色砂質土のLⅣ上面に口縁部が顔を出した状態で、土器の内部にのみ黒褐色砂質土が堆積していた。周囲に明確な掘形は確認できなかった。

土器は底部側を下にして、東にわずかに傾いた状態で埋設されていた。土器内の堆積土は、下層ほどしIVの土色に漸移的に変化していた。これを4層に分けた。土器内部の土はすべてフルイにかけたが、遺物、骨片、炭化種子などは含まれていなかった。

遺物 (図219、写真224)

図219-2は、縄文土器の深鉢である。底部から体下部を欠損する。体下部は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、体部中ほどよりやや上部が弱く張って最大径を有し、体上部から口縁部は内傾する。口唇部に突起を3方向に有する。体上部には条痕がまばらに施される。条痕は、まず右肩下がり、次いで左肩下なりに施され、両者が交差して斜め格子を描く。

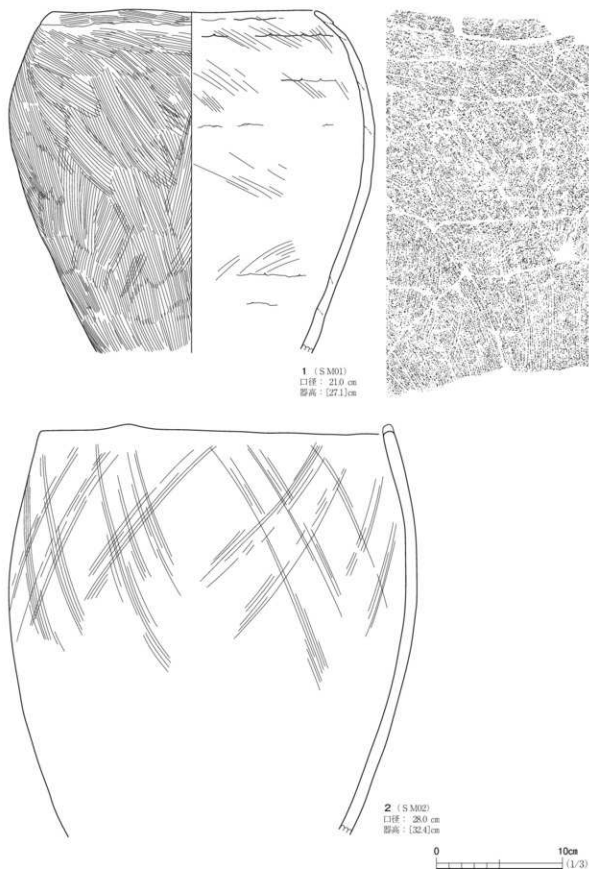


図219 土器埋設遺構出土遺物 (1)

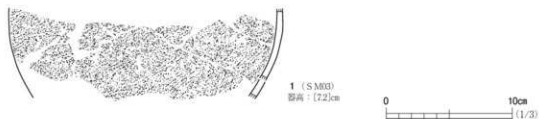


図220 土器埋設遺構出土遺物 (2)

まとめ

本遺構は、底部を欠損する深鉢が埋設された遺構である。土器の特徴から縄文時代後期初頭に位置づけられる。本遺跡で検出された縄文時代後期の遺構は、東側1.8mに位置する1号配石遺構と本遺構のみである。2基の遺構には何かしらの関係がある可能性が考えられる。(青 山)

3号土器埋設遺構 SM03

遺 構 (図218、写真168)

本遺構は調査区南部のF19グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅢ掘削中に、輪切りにされ倒立状態の深鉢の体部を検出した。土器内堆積土は2層に分層され、いずれも人為堆積土と推測される。なお、掘形は検出されなかった。

遺 物 (図220、写真224)

図220-1は、縄文土器か弥生土器の深鉢である。体下部のみが遺存する。外面に結節のある縄文が施され、炭化物が付着する。

まとめ

本遺構は、底部を欠損する土器が埋設された遺構である。上部は削平され遺存していない。土器から時期を推定することは難しいが、縄文時代晩期～弥生時代中期と推定される。(能登谷)

第9節 焼 土 遺 構

本調査において、焼土遺構が12基検出された。地山が直接焼土化している1・2・4号焼土遺構、古い遺構の堆積土上面が焼土化している3・6～8・10～13号焼土遺構、焼土塊が遺構内堆積土の上部に集積した9号焼土遺構がある。なお、5号焼土遺構は欠番である。

1号焼土遺構 SG01 (図221、写真170)

本遺構は調査区南部のH23グリッドに位置し、南東から北西方向に延びる浅い沢状地形の底面付近の平坦面に立地する。LⅢ上面において検出した。

平面形は暗赤褐色を呈する径34cmの不整形円で、焼土化した範囲は検出面から4cmの深さまで及んでいる。時期は不明である。(能登谷)

2号焼土遺構 SG 02 (図221、写真170)

本遺構は調査区南部のH 21 グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅢ上面において検出した。平面形は暗赤褐色を呈する北西-南東主軸の不整形である。規模は、長軸長48cm、短軸長34cmを測り、焼土化した範囲は検出面から7cmの深さまで及んでいる。時期は不明である。(能登谷)

3号焼土遺構 SG 03 (図221、写真170)

本遺構は調査区南部のG・H 20 グリッドに位置し、平坦面に立地する。297号土坑の堆積土上面において検出した。

平面形は暗赤褐色を呈する径54cmの円形で、焼土化した範囲は検出面から9cmの深さに及ぶ。時期は297号土坑が弥生時代中期中葉と推測されることから、それ以降と推測される。(能登谷)

4号焼土遺構 SG 04 (図221、写真170)

本遺構は調査区南部のK 20 グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅣ上面において検出した。平面形は褐色を呈する南北主軸の楕円形である。規模は、長径62cm、短径49cmを測り、焼土化した範囲は検出面から深さ7cmまで及んでいる。時期は不明である。(能登谷)

6号焼土遺構 SG 06 (図221、写真170)

本遺構は調査区南部のI 17・18 グリッドに位置し、平坦面に立地する。23号建物跡P 4の堆積土上面において検出した。

平面形は極暗赤褐色を呈する北東-南西主軸の楕円形である。規模は、長径76cm、短径66cmを測り、焼土化した範囲は検出面から9cmの深さまで及んでいる。本遺構からは縄文・弥生土器が2点出土したが、いずれも小片で、時期は不明である。本遺構の時期は23号建物跡が弥生時代中期中葉と推測されることから、それ以降に位置づけられる。(能登谷)

7号焼土遺構 SG 07 (図221、写真171)

本遺構は調査区南部のI 17 グリッドに位置し、平坦面に立地する。LⅣ上面及び123・907号土坑堆積土上面において検出した。55・123・136・907号土坑と重複し、55・136号土坑よりは古く、123・907号土坑よりは新しい。

平面形は暗赤褐色を呈する北西-南東主軸の楕円形と推測される。規模は、長径149cm、短径(遺存値)74cmを測り、焼土化した範囲は検出面から6cmの深さまで及んでいる。

本遺構より古い123号土坑が弥生時代中期前～中葉、907号土坑が弥生時代中期後葉、本遺構より新しい136号土坑が弥生時代中期後葉であることを勘案すると、本遺構の時期は弥生時代中期後葉と推測される。本遺構より新しい55号土坑から弥生前期～中期前葉の土器が出土しているが、

重複する遺構からの混入の可能性が考えられる。

(能登谷)

8号焼土遺構 SG 08 (図221、写真171)

本遺構は調査区南部のI 17・18グリッドに位置し、平坦面に立地する。149・904号土坑堆積土上面において検出した。

平面形は暗赤褐色を呈する北東-南西主軸の不整隅丸長方形である。規模は、長軸長75cm、短軸長47cmを測り、焼土化は6cmの深さまで及んでいる。時期は本遺構より古い149号土坑が弥生時代前期、904号土坑が時期不明であることから、弥生時代前期以降と推測される。

(能登谷)

9号焼土遺構 SG 09 (図222、写真171・226)

本遺構は調査区南部のE 16グリッドに位置し、平坦面に立地する。L IV上面において検出した。

遺構検出の際に、焼土塊や炭化物粒を含む土の広がり方が確認され、平面的に観察すると、焼土塊を多量ないしは焼土小塊を含む土の範囲(ℓ 1・2)、焼土粒を微量含む土の範囲(ℓ 3・4)、これらを囲んで炭化物粒やL IV小塊を含む土の範囲が認められた。これらの堆積状況を確認するために掘り下げたところ、これらは平面形が北西-南東主軸の不整なかぎ形を呈する溝状の掘り込みの中に人為堆積していることを確認した。ℓ 2には焼土塊が多量に含まれている。この掘り込みの規模は、長軸長336cm、短軸長129cm、深さ34cmを測る。

本遺構からは、縄文・弥生土器36点、剥片1点が出土した。このうち縄文土器1点を図示した。図222-1は、深鉢の体上部から口縁部である。口唇部に突起を有する。口縁部と体部に条痕を施したのち、口唇部下に2本、頸部と体部の境に1本の沈線を巡らせ、口唇部外面に縦の短沈線が引かれる。外面に炭化物が付着する。

本遺構は遺構内堆積土の上部に焼土塊が集積した遺構で、時期は出土遺物から縄文時代晩期末葉と推測される。

(能登谷)

10号焼土遺構 SG 10 (図222、写真171)

本遺構は調査区北部のC 7グリッドに位置し、平坦面に立地する。4号住居跡外周溝堆積土の上面において検出した。

平面形は暗赤褐色を呈する南北主軸の長楕円形で、南北に焼土化のやや強い部分が認められる。規模は、長径138cm、短径70cmを測り、焼土化した範囲は検出面から4cmの深さまで及んでいる。時期は4号住居跡が弥生時代中期後葉であることから、それ以降と推測される。

(能登谷)

11号焼土遺構 SG 11 (図222、写真172)

本遺構は調査区北部のC 8・9グリッドに位置し、平坦面に立地する。702号土坑堆積土の上面において検出した。

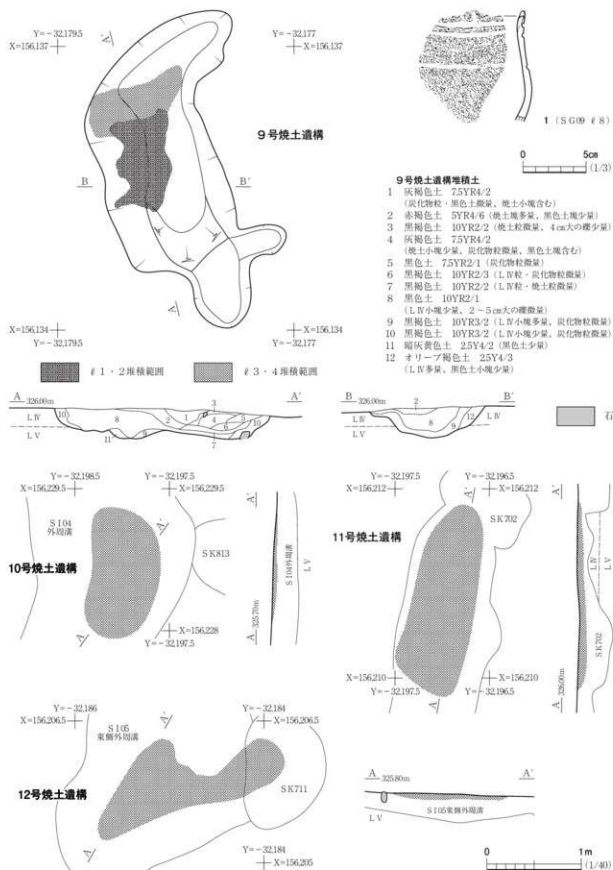


図222 9～12号焼土遺構・出土遺物

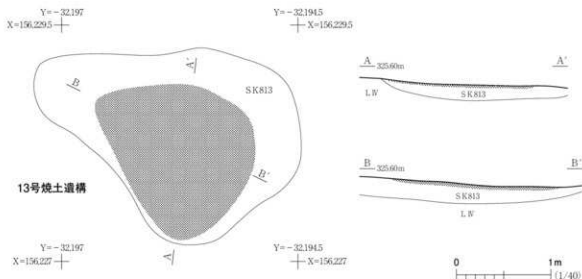


図223 13号焼土遺構

平面形は暗赤褐色を呈する北東-南西主軸の不整長楕円形である。規模は、長径204cm、短径74cmを測り、焼土化した範囲は検出面から7cmの深さまで及んでいる。時期は702号土坑が弥生時代中期後葉であることから、それ以降と推測される。(能登谷)

12号焼土遺構 SG 12 (図222、写真172)

本遺構は調査区北部のD9グリッドに位置し、平坦面に立地する。5号住居跡東側外周溝堆積土及び711号土坑堆積土の上面において検出した。

平面形は暗赤褐色を呈する北東-南西主軸の不整形である。規模は、長軸長212cm、短軸長78cmを測り、焼土化した範囲は検出面から6cmの深さまで及んでいる。時期は5号住居跡が弥生時代中期後葉であることから、それ以降と推測される。(能登谷)

13号焼土遺構 SG 13 (図223、写真172)

本遺構は調査区北部のC7グリッドに位置し、平坦面に立地する。813号土坑堆積土上面において検出した。

平面形は暗赤褐色を呈する北西-南東主軸の薄針形で、長軸長182cm、短軸長144cmを測り、焼土化した範囲は検出面から4cmの深さまで及んでいる。出土遺物はなく、重複する813号土坑が時期不明である。本遺構の時期は不明である。(能登谷)

第10節 ビット

本遺跡では、799基のビットが検出された。

この調査では径がおおむね50cm以下のものをビットとし、平面図と深さを記録した。前述したが、

径50cm以上のものは土坑として取り扱った。ピットの名称は、グリッドごとに通し番号を付した。

表4には規模と柱痕の有無を記した。また、ピットのうち住居跡や掘立柱建物跡など他の遺構の一部と判断されるものについては、その旨を備考欄に記した。

遺 構 (図224～228、写真172)

本遺跡の調査範囲には、ピットの分布のまとまりが2箇所認められる。

一つは、調査区北部のC～F-7～14グリッドである。ピット270基である。特に住居跡の周辺に多くのピットが散在して位置する。

もう一つは、調査区中央部のF～Jの15～20グリッドである。ピット415基である。これについては環状に分布する建物跡と土坑群の分布と重なるが、H16・17グリッドについては、土坑などが少ない一方ピットが多く検出されている。

ピットの多くは径に対して深く掘り込まれ、柱痕が確認できたものは少ないものの、柱穴が多く含まれると考えられる。図224の右上には、掘り込みが浅く、底面に酸化鉄が沈着したD13P1と同P22を図示した。

遺物が出土したピットは少ない。

遺 物 (図229、写真224・226・250・252)

図229-1～13は、いずれも弥生土器である。1・2は、深鉢である。1は口縁部で、内湾する。変形工字文が描かれ、外面に炭化物が付着する。2は体部で、磨消縄文で文様が描かれる。3は、壺の底部から体下部である。底面は凹面をなす。体下部に、太く浅い沈線が文様が描かれる。4～7は、壺である。4は体下部で、体部最大径の位置に2本の沈線による鋸歯文が巡らされる。5～7はいずれも体上部で、5・6は渦文、7は方形の文様が、いずれも磨消縄文で描かれる。6・7は沈線が細く、7は細縄文が充填されている。8は器種不明の体部で、磨消縄文で文様が描かれる。縄文は、カナムグラの擬縄文である。9・10は、壺の体上部から頸部である。9は渦文が同心円文が描かれ、交互ミガキが施される。間隙には銀杏葉形と思われる文様が縦に重ねて配置される。10は、重四角文と辺の中央に背中合わせのカッコによるブリッジが描かれたのち、交互ミガキが施される。11は、高杯の脚部である。中空筒形で、中ほどに5本の沈線が巡らされる。5本の沈線の間の部分を除き赤彩が施されている。脚部内面の天井から裾部にかけて褐色の漆が分厚く固着することから、漆を入れる容器に転用されたと考えられる。漆には縮みじわがみられる。12は、甕の体上部から口縁部である。口縁部は外傾する。口唇部と体部にオオバコの擬縄文が施される。外面に炭化物が付着する。13は、壺である。上面に小さな平坦面があるつまみ部から、笠部が「八」字に開く。つまみ部上面の縁辺に小突起が四方向に付される。口唇部には刻み目が施される。炭化物が全体に付着し、特に口唇部付近の内外面に多く付着する。

同図14・16・17は石器である。14は凸基の石鏃、16は石鏃である。17は不定形石器で、扁平な自然礫の一端縁に両面から剥離を加え、刃部をつくり出している。同図15は、細型の管玉である。両面から穿孔されている。

(青 山)

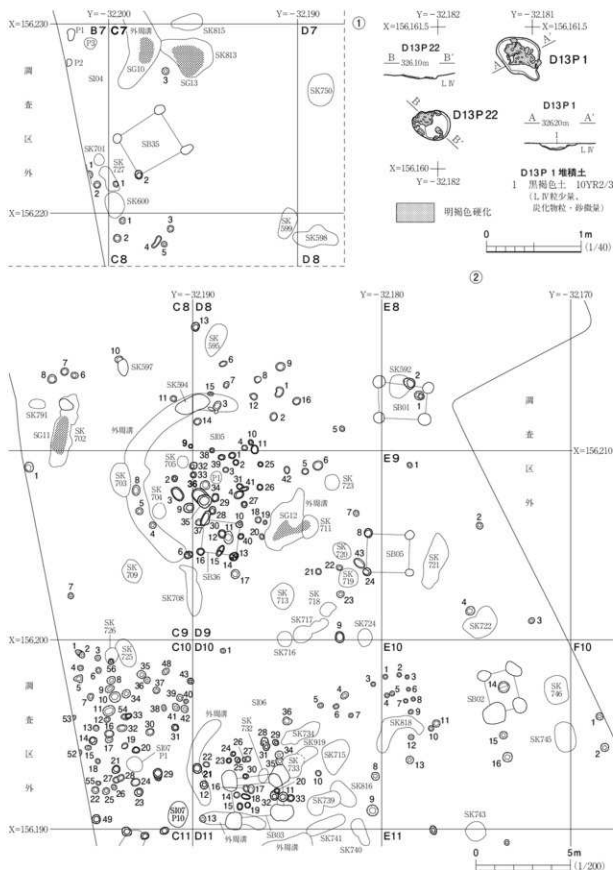


図224 ビット (1)

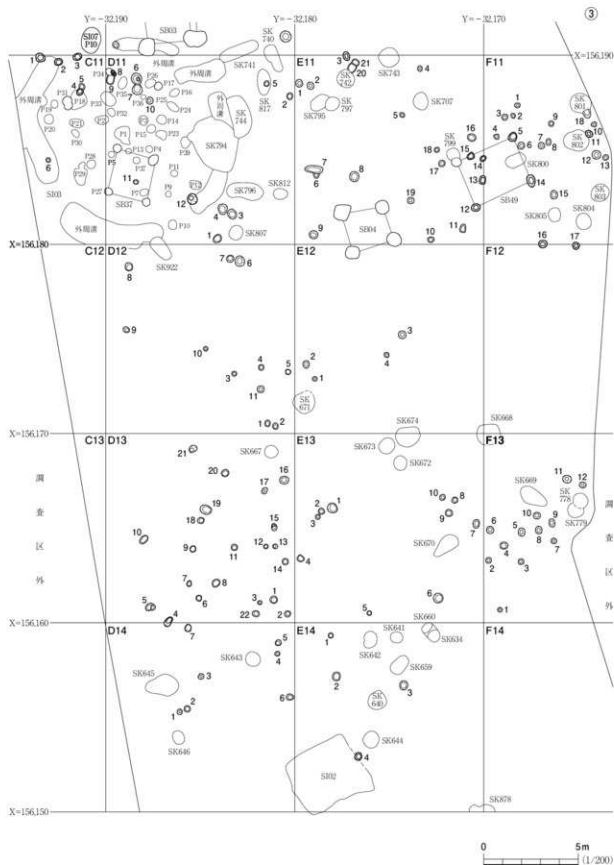


図225 ピット (2)

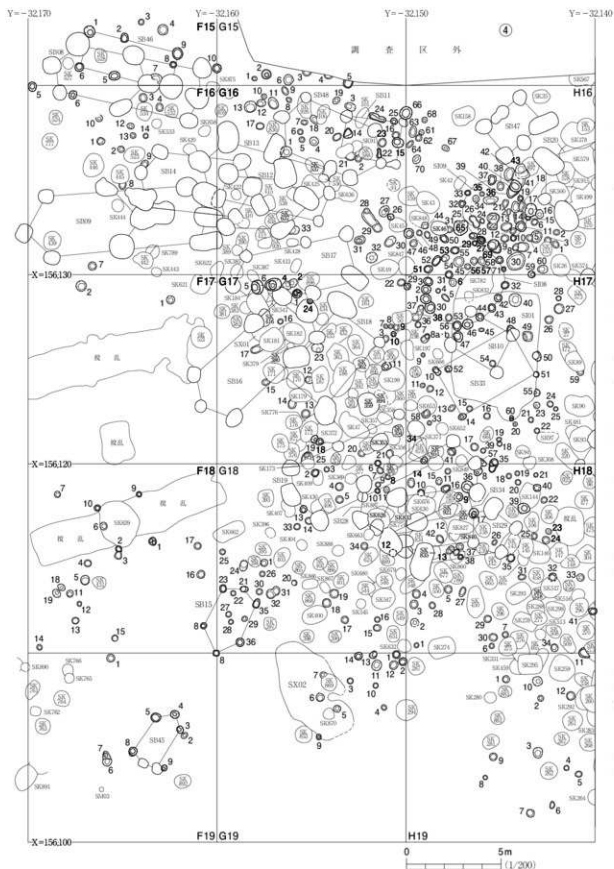


図226 ビット (3)

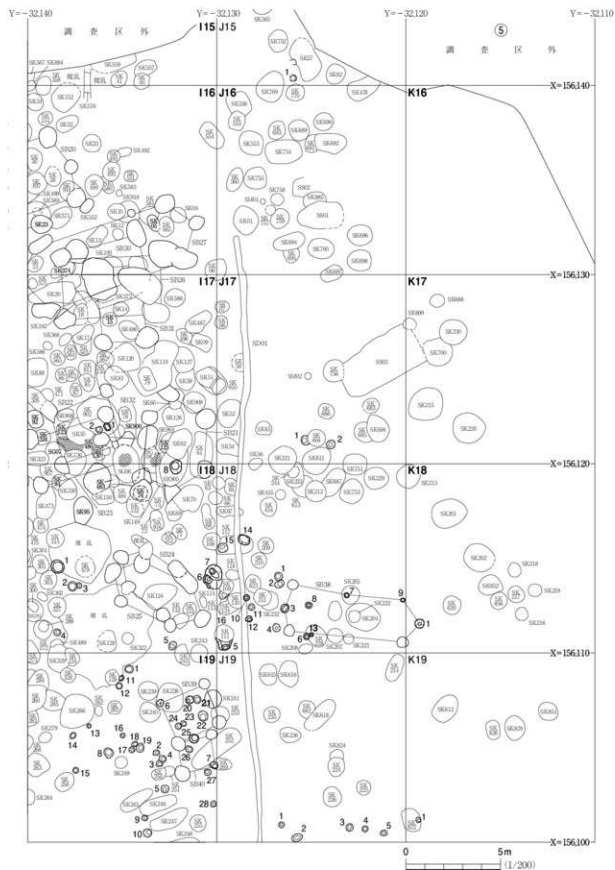


図227 ピット (4)

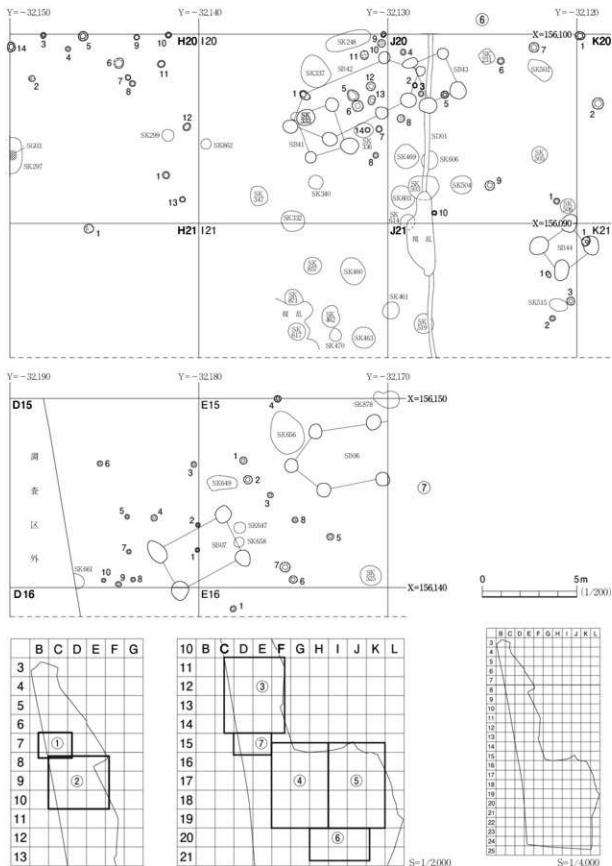


図228 ビット (5)

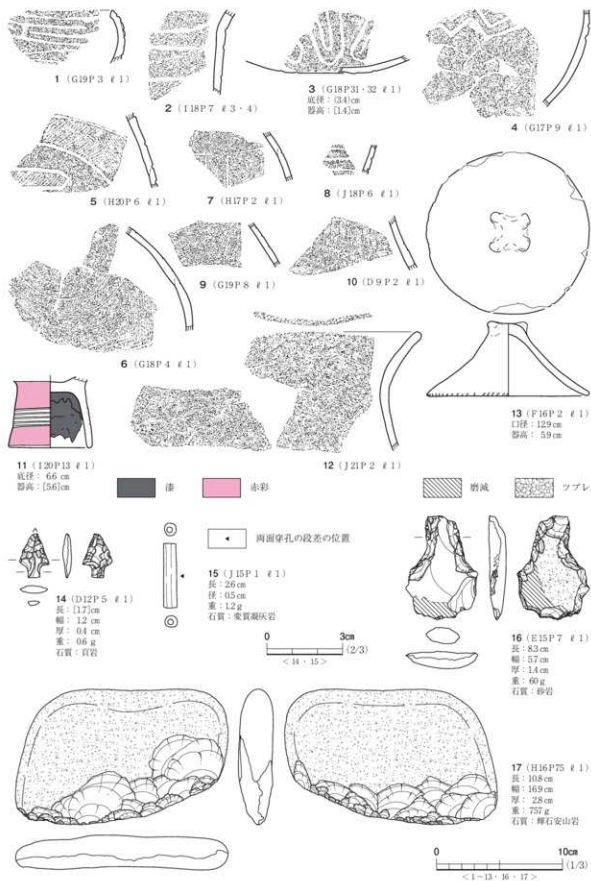


図229 ビット出土遺物

表4-1 ビット一覧

アドレス No.	番号	範囲 (cm) []は遠存値 長さ 幅 高さ 柱数	備考
C5	P1	[41] [20] 35	
	P2	37 34 31	
	P3	[32] [26] 43 12	
C7	P2	47 39 43 15	SI03P4
	P3	38 28 17	
	P4	64 29	
C8	P1	35 31 40 15	
	P2	42 40 34 21	
	P3	35 34 29	
	P4	64 29	
	P5	31 29 26	
	P6	40 33 27	
	P7	41 38 24	
	P8	47 46 42	
	P9	23 23 16 13	SI03P17
P10	P2	42 30 20	
	P11	34 31 29	
C9	P1	56 46 54	
	P2	34 30 26	SI03P16
	P3	80 33 5	
	P4	[36] [34] [24]	
	P5	[36] [37] [28]	16
	P6	30 39 30	
	P7	33 30 35	
	P8	55 40 [14]	
	P9	56 50 31	SI03P15
C10	P1	28 24 25	
	P2	30 30 35	
	P3	30 30 23	
	P4	30 28 26	
	P5	46 43 28	
	P6	30 30 24	
	P7	38 32 6	
	P8	46 40 6	
	P9	50 33 6	
P10	P6	54 10	
	P11	65 53 12	
	P12	34 27 6	
P13	P2	32 30 6	
	P14	40 40 17	SI07P6
	P15	34 24 12	
P16	P6	49 38 9	
	P17	40 [30] 14	
	P18	28 24 14	
P19	P35	29 31	
	P20	41 34 29	SI07P3
	P21	48 40 31	SI07P2
P22	P3	39 36 16	
	P23	46 43 16	SI07P5
	P24	49 39 10	
P25	P3	39 34 24	
	P26	32 27 12	
	P27	[33] 33 28	
P28	P3	38 34 6	
	P29	66 47 54	SI07P4
	P30	43 37 12	
P31	P3	38 36 26	SI07P8
	P32	52 36 80	
	P33	38 28 24	SI07P7
P34	P4	48 41 41	
	P35	40 40 31	
	P36	36 35 21	
P37	P3	36 35 6	
	P38	35 25 8	
	P39	38 34 10	
P40	P4	26 25 18	
	P41	44 35 18	
	P42	40 38 30	
P43	P3	35 33 31	

アドレス No.	番号	範囲 (cm) []は遠存値 長さ 幅 高さ 柱数	備考
C10	P44		欠番
	P45		欠番
	P46		欠番
	P47		欠番
	P48	45 30 22	
	P49	48 46 33	SI07P12
P50	P51		欠番
	P52	[32] [13] 45	
	P53	[25] [23] 37	
	P54	[41] 32 9	
	P55	28 23 4	
	P56	32 28 38	
C11	P1	50 48 44	
	P2	42 38 35	SI07P11
	P3	49 38 30 24	
	P4	40 32 30	
	P5	[34] 32 12	
	P6	26 24 [17]	
D8	P1	56 42 38	
	P2	46 38 29	
	P3	55 36 [3]	
	P4	32 27 27	
	P5	32 28 28	
	P6	45 27 15	
	P7	36 28 13	
	P8	35 34 15	
	P9	51 45 35	
P10	P11	32 27 19	SI03P10
	P12	47 39 35	
	P13	42 36 38 14	
	P14	46 43 15	
	P15	42 35 14	
	P16	[34] [26] 21	
D9	P1	40 36 52 22	SI03P3
	P2	32 31 29 16	SI03P7
	P3	30 28 21 15	
	P4	54 40 49 23	
	P5	36 34 25	
	P6	54 50 31	
	P7	32 29 32	
	P8	46 41 40	SI03P1
	P9	59 48 40	
P10	P11	36 35 36 12	SI03P2
	P12	67 47 63 19	
	P13	46 40 40	
	P14	38 [24] 35 7	SI03P3
	P15	44 [25] 34	
	P16	65 30 32	
	P17	42 39 47	SI03P4
	P18	47 46 51	
	P19	36 32 17	
	P20	28 25 14	
	P21	32 26 16	
	P22	33 30 17	
	P23	34 30 36 15	
	P24	38 35 36	
	P25	44 41 49	SI03P4
	P26	30 28 17	SI03P11
	P27	33 32 20 16	SI03P12
	P28	35 32 21 18	SI03P13
	P29	43 35 36 18	SI03P14
	P30	46 35 15	
	P31	86 46 44	SI03P1
	P32	[36] 32 48	SI03P4
	P33	40 38 47 16	SI03P2
	P34	32 32 8	SI03P6

アドレス No.	番号	範囲 (cm) []は遠存値 長さ 幅 高さ 柱数	備考
D9	P34	50 47 17	
	P35	72 70 49	SI03P9
	P36	78 70 24	SI03P5
	P37	35 [32]	
	P38	18 16 11	
	P39	37 28 9	
	P40	34 30 17	
	P41	47 22 35	
	P42	40 30 28	
D10	P43	66 40 24	
	P2	28 35 19	欠番
	P3	27 25 14	
	P4	46 32 14	
	P5	32 36 30	
	P6	30 26 23	
	P7	25 22 15	
	P8	43 42 20	
	P9	58 58 12	
P10	P10	30 30 26	
	P11	52 51 51	SI03P3
	P12	45 42 43	
	P13	40 33 32	
	P14	34 33 34	
	P15	39 32 28	SI03P4
	P16	38 [29] 21	
	P17	48 36 33	
	P18	51 29 34	SI03P8
P19	P19	32 30 28	SI03P12
	P20	30 27 29	SI03P7
	P21	54 48 47 20	SI07P9
	P22	35 28 27	
	P23	31 28 25	SI03P1
	P24	28 26 15	SI03P5
	P25	34 29 32	SI03P9
	P26	28 [18] 20	
	P27	30 [28] 20	
	P28	47 40 26	SI03P6
	P29	36 32 16	SI03P10
	P30	30 28 20	
	P31	40 [34] 24	SI03P2
	P32	[47] [44] 8	
	P33	[40] 38 43	SI03P11
	P34	[42] [30] 16	
	P35	[38] [34] 12	
	P36	30 42	
D11	P1	50 40 28 20	
	P2	36 30 18	
	P3	52 45 22	
	P4	56 50 11	
	P5	31 28 [18]	
	P6	65 56 15	
	P7	[54] 54 7	
	P8	35 21	
	P9	[51] 40 11	
	P10	37 36 10	
	P11	29 25 24	
	P12	58 51 29	
D12	P1	28 28 29	
	P2	32 25 20	
	P3	24 22 16	
	P4	30 28 21	
	P5	36 26 27	
	P6	50 45 33	
	P7	38 34 19	
	P8	40 38 38 20	
	P9	29 28 20 18	
	P10	21 21 12	

表4-2 ビット一覧

グランド No	番号	規模 (cm)		1/4透存値		備考
		長さ	幅	高さ	柱数	
D12	P1	38	37	25	19	
D13	P1	48	38	7		北面上に 瓦葺きの層
	P2	33	31	38		
	P3	27	26	40		
	P4	55	34	29		
	P5	57	37	36		
	P6	32	29	22		
	P7	31	27	20		
	P8	43	33	18		
	P9	34	34	20		
	P10	52	34	28		
	P11	30	28	44		
	P12	38	25	11		
	P13	29	26	18		
	P14	44	40	47		
P15	43	30	31			
P16	47	44	31			
P17	29	27	36			
P18	45	35	36			
P19	60	47	23			
P20	40	35	34			
P21	42	35	30			
P22	40	32	5		北面上に 瓦葺きの層	
D14	P1	28	27	17		
	P2	32	31	37		
	P3	29	27	33		
	P4	32	30	35	20	
	P5	38	24	27	10	
	P6	40	32	22		
	P7	37	35	15		
D15	P1	25	24	13		
	P2	25	23	18		
	P3	30	30	19		
	P4	34	33	19	16	
	P5	25	23	16		
	P6	28	28	25		
	P7	25	22	14		
	P8	24	24	19		
	P9	32	27	21		
	P10	23	20	23		
E8	P1	54	47	37	18	
	P2	64	56	18		
E9	P1	30	26	13		
	P2	37	34	25	17	
	P3	33	30	25		
	P4	50	44	12		
E10	P1	26	26	23		
	P2	25	23	30		
	P3	22	22	30		
	P4	26	26	15		
	P5	28	25	6		
	P6	22	20	16		
	P7	25	23	16		
	P8	24	23	23		
	P9	30	25	26		
	P10	30	30	18		
	P11	40	38	6		
P12	30	28	12			
P13	40	40	15			
P14	60	60	14		SK806	
P15	40	40	28			
P16	50	50	50			
E11	P1	41	38	18		
	P2	41	35	16		
	P3	50	34	16		
	P4	30	25	10		

ブリアド No	番号	規模 (cm)	〔 〕は遺存部	柱数	備考
		長さ	幅	高さ	
E11	P5	30	25	8	SD49P4
	P6	30	26	6	
	P7	96	40	12	
	P8	54	50	15	
	P9	46	42	8	
	P10	35	30	10	
	P11	45	34	16	
	P12	49	40	24	
	P13	43	34	16	
	P14	28	28	20	
	P15	40	36	35	
	P16	48	40	10	
	P17	38	37	7	
E12	P18	28	28	10	
	P19	35	15	35	
	P20	[46]	43	13	
	P21	40	[32]	14	
	P1	26	24	23	
E13	P2	40	33	46	
	P3	42	42	14	
	P4	30	25	29	
	P1	56	48	15	
E14	P2	30	30	22	
	P3	24	23	24	
	P4	35	28	20	
	P5	23	22	14	
	P6	48	48	20	
	P7	37	30	8	
	P8	30	25	23	
	P9	38	32	22	
	P10	29	28	19	
	P1	27	25	30	
E15	P2	43	40	25	
	P3	48	40	21	
	P4	41	39	25	
	P1	38	37	32	
E16	P2	47	43	28	
	P3	30	30	33	
	P4	36	33	12	
	P5	37	34	12	
	P6	42	39	9	
	P7	53	50	27	
	P8	30	28	17	
	P1	31	30	14	
F10	P1	45	43	40	
	P2	38	38	38	
F11	P1	28	25	18	
	P2	28	23	10	
	P3	34	32	17	
	P4	26	26	26	
	P5	51	45	52	
	P6	36	36	15	
	P7	36	34	38	
	P8	36	28	24	
	P9	30	30	15	
	P10	28	28	26	
F13	P11	42	36	50	
	P12	48	46	32	
	P13	32	30	24	
	P14	67	44	39	
	P15	46	38	30	
	P16	46	40	30	
	P17	40	36	28	
	P18	[47]	43	46	
F13	P1	27	24	13	
	P2	32	31	22	
	P3	31	30	20	
	P4	44	38	23	

グランド No	番号	規模 (cm)	〔 〕は遺存部	柱数	備考
F13	P5	49	35	34	
	P6	39	39	29	
	P7	30	29	17	
	P8	41	35	32	
	P9	42	30	21	
	P10	38	36	15	
	P11	46	40	18	
P12	37	31	13		
F15	P1	63	56	43	SD46P1
	P2	49	40	37	SD46P2
	P3	37	33	14	
	P4	47	45	32	
	P5	60	47	40	SD46P5
	P6	46	46	25	SD46P6
	P7	48	[40]	50	
F16	P8	36	33	16	
	P9	62	57	45	SD46P3
	P10	47	39	27	
	P11				
F16	P1	74	[51]	86	
	P2	[38]	[35]	[30]	
	P3	40	37	39	
	P4	37	30	18	
	P5	40	25	14	
	P6	40	34	70	
	P7	46	44	71	22
F17	P8	30	[34]	26	
	P9	28	[25]	40	
	P10	31	25	22	
	P11				欠番
	P12	30	27	15	
	P13	29	28	18	
	P14	20	18	5	
F17	P1	40	40	46	17
	P2	55	47	43	
F18	P1	41	32	39	15
	P2	30	26	51	
	P3	36	34	30	20
	P4	35	32	46	20
	P5	35	35	35	
	P6	40	38	23	
	P7	23	20	24	
	P8	32	29	40	SD15P5
	P9	25	25	19	
	P10	31	28	16	
F19	P11	37	35	26	
	P12	28	24	20	
	P13	38	36	38	
	P14	30	29	24	
	P15	33	33	25	
	P16	44	41	23	
	P17	38	36	14	
	P18	45	[31]	22	
	P19	50	[38]	31	
	F19	P1	43	42	18
P2		38	28	36	
P3		40	36	46	SD43P2
P4		46	42	53	SD43P1
P5		52	48	61	SD43P6
P6		48	[40]	34	
P7		[48]	44	31	
F19	P8	50	44	56	SD43P5
	P9	32	32	14	
G15	P1	30	26	8	
	P2	50	50	24	
	P3	47	[25]	31	
	P4	[46]	[30]	17	
	P5	[50]	50	33	
	P6	52	52	18	

表4-3 ビット一覧

アドレス No	番号	範囲 (cm)		112連存値		備考	
		長さ	幅	高さ	柱数		
G16	P1	[58]	57	42		SB48%	
	P2	48	45	13			
	P3	50	42	50			
	P4	45	45	30			
	P5	44	43	20			
	P6	40	30	24			
	P7	37	36	22			
	P8	29	20	11			
	P9	48	30	13			
	P10	30	30	10			
	P11	60	50	26			
	P12	50	37	23			
	P13	72	45	13			
	P14	53	52	21			
	P15	62	52	40			
	P16	36	[36]	22			
	P17	43	36	10			
	P18	[54]	[37]	14			
	P19	45	31	12			
	P20	50	35	19			
	P21	[54]	[46]	15			
	P22	53	28	24			
	P23	46	42	16			
	P24	92	36	16			
	P25	38	34	17			
	P26	35	34	46			
	P27	64	48	41			
	P28	28	28	18			
	P29	138	54	23			
	P30	66	45	41			
	P31	60	43	36			
	P32	60	55	34			
	P33	[60]	[45]	30			
G17	P1	48	48	33		25	
	P2	[44]	46	33			
	P3	36	[32]	40			
	P4	45	[38]	28			
	P5	76	64	76			
	P6	88	64	53			
	P7	21	20	20			
	P8	23	22	24			
	P9	33	33	23			
	P10	27	26	37			
	P11	45	[37]	24			
	P12	40	33	26			
	P13	43	36	13			
	P14	44	[38]	18			
	P15	30	26	30			
	P16	25	20	11			
	P17	[50]	30	28			
	P18	38	[34]	46			
	P19	42	[34]	47			
	P20	37	[34]	26			
	P21	40	40	36			
	P22	43	30	9			
	P23	64	46	46			
	P24	[29]	[25]	43			
	P25	60	36	45			
G18	P1	41	38	22		18 22	
	P2	43	43	31			
	P3	34	30	20			
	P4	42	40	25			
	P5	40	40	18			
	P6	31	30	27			
P7	36	36	25				
P8	32	36	22				
P9	30	30	39				
P10	29	36	42				

アドレス No	番号	範囲 (cm)	1は遠近値	備考	
		長さ	幅	柱数	
G18	P11	31	[30]	55	
	P12	-	-	-	消失
	P13	29	37	20	18
	P14	35	[30]	36	
	P15	37	34	28	18
	P16	28	28	34	
	P17	26	34	36	13
	P18	43	42	36	16
	P19	41	40	29	
	P20	28	28	32	
	P21	40	30	43	16
	P22	25	24	12	SB15P1
	P23	39	31	40	SB15P6
	P24	44	32	35	10
	P25	31	28	20	
	P26	32	30	33	11
	P27	31	30	26	
	P28	25	25	34	
	P29	27	26	39	
	G19	P30	31	29	18
P31		36	34	37	15
P32		42	[36]	16	
P33		31	30	11	
P34		35	35	22	
P35		51	45	49	SB15P2
P36		33	31	[31]	SB15P3
P1		35	34	32	
P2		38	36	25	21
P3		31	31	16	
P4		28	27	30	
P5		31	28	47	
P6		28	27	37	
P7		26	26	45	15
P8		38	32	40	SB15P4
P9		32	26	20	
P10	28	28	32		
P11	58	50	33		
P12	47	43	34		
P13	43	35	43		
P14	42	41	34		
H16	P1	42	34	25	
	P2	32	30	18	
	P3	36	[34]	25	
	P4	34	34	26	
	P5	65	57	30	
	P6	35	34	25	
	P7	[62]	49	20	
	P8	38	31	28	
	P9	43	37	28	SD9P18
	P10	32	32	33	SD9P4
	P11	55	53	55	SD9P3
	P12	36	30	36	SD9P17
	P13	61	44	13	SD9P16
	P14	[60]	50	21	
	P15	30	[23]	15	SD9P2
	P16	48	[40]	37	20
	P17	70	67	30	19
	P18	50	32	17	SD9P15
	P19	31	30	24	
	P20	58	41	75	SD9P14
P21	44	30	17	SD9P13	
P22	52	[40]	12	SD9P19	
P23	66	[50]	10	SD9P20	
P24	29	22	10	SD9P21	
P25	[38]	38	12	SD9P22	
P26	[34]	36	17	SD9P23	
P27	47	41	25	SD9P6	
P28	44	33	17		

アドレス No	番号	範囲 (cm)	1は遠近値	備考	
長さ	幅	高さ	柱数		
H16	P29	28	27	14	SD9P1
	P30	104	89	18	
	P31	[30]	33	17	
	P32	38	38	21	SD9P7
	P33	30	30	19	SD9P8
	P34	36	34	20	SD9P9
	P35	27	26	18	SD9P10
	P36	78	40	10	SD9P11
	P37	54	41	15	SD9P1
	P38	43	38	19	SD9P12
	P39	[66]	60	23	SK341
	P40	[58]	60	34	SK342
	P41	[80]	[68]	30	SK343
	P42	71	50	16	
	P43	84	[60]	41	SK344
	P44	[38]	[36]	51	
	P45	32	30		SD9P19
	P46	52	51	40	
	P47	40	37	51	
	P48	30	30	16	
	P49	40	28	34	
	P50	30	38	23	
	P51	56	41	46	SD9P13
	P52	60	38	36	SD9P14
	P53	45	34	33	SD9P21
	P54	58	53		SD9P20
	P55	47	38	17	SD9P15
	P56	42	38		SD9P14
	P57	48	38		SD9P17
	P58	42	40		SD9P2
	P59	38	36	21	
	P60	55	44	27	
	P61	30	26	30	
	P62	36	32	25	
	P63	60	38	22	
	P64	46	26	18	
	P65	80	77	12	
	P66	70	64	36	
	P67	40	30	23	
	P68	32	28	6	
P69	82	63	9	SD9P5	
P70	48	40	30		
P71	26	25		SD9P3	
H17	P1	55	50	44	20
	P2	48	48	45	SD9P11
	P3	45	45	43	SD9P12
	P4	27	27	28	SD9P24
	P5	37	26	27	16
	P6	46	45	31	SD9P23
	P7	26	26	20	19
	P8a	48	34	20	
	P8b	29	28	33	
	P9	21	18	13	11
	P10	53	32	23	SB33P1
	P11	28	25	14	
	P12	40	36	28	
	P13	40	30	22	
	P14	39	36	21	15
	P15	31	29	15	SB33P4
	P16	35	34	23	
	P17	42	39	44	
	P18	22	21	28	
	P19	36	21	23	
P20	25	25	20		
P21	35	36	25		
P22	30	29	22		
P23	35	34	32		
P24	36	35	46		

表4-4 ビット一覧

アドレス No	番号	規格 (cm) 長さ 幅 高さ	は遺存物 長さ 幅 高さ	仕様	備考
H17	P25	24 23 33			
	P26	44 43 30			
	P27	51 47 33			
	P28	28 27 22			
	P29	40 35 39			
	P30	60 55 19		SI08P20	
	P31	45 45 59		SI08P22	
	P32	46 41 24		SI08P4	
	P33	26 22 31			
	P34	31 31 43			
	P35	43 28 44			
	P36	34 30 25			
	P37	38 [20] 18 [15]			
	P38	27 27 34			
	P39	24 22 36			
	P40	[68] [66] [42]			
	P41	44 43 23			
	P42	[44] [42] [30]		SI08P5	
	P43	[44] [39] [28]		SI08P6	
	P44	[44] [42] [42]		SI08P7	
	P45	[30] [30] [24]			
	P46	[53] [53] [36]		SI08P8	
	P47	[38] [48] [30]			
	P48	[38] [30] [30]		SI08P2	
	P49	[32] [32] [16]			
	P50	[54] [44] 35			
	P51	[37] [32] 38		SI08P3	
	P52	37 36 18			
	P53	[52] [46] [30]		SI08P9	
	P54	[37] [33] [52]			
	P55	41 [31] 12			
	P56	40 34 32 14		SI08P16	
	P57	[49] [22]			
	P58	[48] [46] 50			
	P59	39 24 9			
	P60	27 22 29			
H18	P1	25 24 43			
	P2	46 42 32			
	P3	41 41 34 18			
	P4	40 36 45 21			
	P5	39 38 37			
	P6	26 25 24			
	P7	32 30 27			
	P8	48 [40] 35			
	P9	44 [34] 36 [11]			
	P10	36 36 18			
	P11	30 29 14			
	P12	37 34 14			
	P13	51 33 21			
	P14	50 39 17			
	P15	41 33 31			
	P16	54 37 33		SI03P4	
	P17	54 49 44			
	P18	30 28 28			
	P19	27 25 16			
	P20	30 28 32			
	P21	23 23 24			
	P22	31 31 30			
	P23	33 30 21			
	P24	40 40 27			
	P25	33 30 42			
	P26	32 21 45			
	P27	54 30 29			
	P28	35 31 23			
	P29	40 40 10			
	P30	44 39 14			
	P31	41 29 40			
	P32	46 [37] 36			

アドレス No	番号	規格 (cm) 長さ 幅 高さ	は遺存物 長さ 幅 高さ	仕様	備考
H18	P33	38 38 25			
	P34	42 39 45			
	P35	47 [33] 43			
	P36	[58] 62 28		SI03P3	
	P37	[35] [29] 20			
	P38	[30] [26] 17			
	P39	67 [60] 47			
	P40	39 38 24			
	P41	46 37 43			
	P42	45 35 44			
H19	P1	28 38 43			
	P2	32 31 21			
	P3	57 45 23			
	P4	28 26 20			
	P5	36 32 16			
	P6	42 26 22			
	P7	41 40 31			
	P8	24 23 14			
	P9	42 40 19			
	P10	49 49			
	P11	[60] [57] 35 24			
	P12	45 45 47			
H20	P1	36 35 48			
	P2	32 31 30			
	P3	32 17 26			
	P4	27 26 31			
	P5	50 49 22			
	P6	56 [46] 26			
	P7	30 27 31			
	P8	32 28 35			
	P9	29 28 18			
	P10	32 30 27			
	P11	40 36 23			
	P12	44 37 29			
	P13	29 27 8			
	P14	51 42 18			
H21	P1	50 46 54			
H17	P1	[43] [32] 21			
	P2	[34] [30] 48			
H18	P1	[72] [68] 18			
	P2	50 46 24			
	P3	32 [28] 17			
	P4	38 36 30			
	P5	47 37			
	P6	[52] [42] 30			
	P7	92 [76] 69			
	P8	[75] [60] 85			
H19	P1	31 18 47			
	P2	30 14 16			
	P3	23 17 21			
	P4	22 19 25			
	P5	19 19 22			
	P6	38 36 41		SI08P1	
	P7	[43] [37] [41]		SI04P3	
	P8	35 31 19			
	P9	15 15 20			
	P10	25 22 16			
	P11	[34] [23] 15			
	P12	24 24 53			
	P13	22 22 14			
	P14	39 28 25			
	P15	30 30 39			
	P16	25 24 16			
	P17	18 14 20			
	P18	20 20 23			
	P19	30 17 15			
	P20	18 14 26			
	P21	16 15 12			

アドレス No	番号	規格 (cm) 長さ 幅 高さ	は遺存物 長さ 幅 高さ	仕様	備考
J19	P22	30 30 17			
	P23	19 14 15			
	P24	21 20 19			
	P25	35 34 14			
	P26	21 20 19			
	P27	19 17 9			
	P28	19 12 12			
J20	P1	31 22		SI04P2	
	P2			欠番	
	P3			欠番	
	P4			欠番	
	P5	66 56 18			
	P6	56 56 28			
	P7	36 32 9			
	P8	30 27 12			
	P9	30 27 16			
	P10	41 40 35			
	P11	47 41 23			
	P12	47 46 15			
	P13	48 36 48			
	P14	34 34 [16]			
J15	P1	36 [19] 15		管末出土	
J17	P1	53 [46] 37			
	P2	48 45 42			
J18	P1	43 43 77			
	P2	53 36 43			
	P3	48 [40] 49		SI08P7	
	P4	43 38 47			
	P5	92 66 47			
	P6	33 32 83			
	P7	37 36 86		SI08P2	
	P8	38 34 80			
	P9	50 42 86		SI08P3	
	P10	35 33 38			
	P11	35 32 58			
	P12	37 30 48			
	P13	21 20 [22]			
	P14	67 50 60			
	P15	50 50 39			
	P16	48 [46] 47			
J19	P1	32 30 28			
	P2	60 40 40			
	P3	42 40 40			
	P4	35 32 32			
	P5	34 30 34			
J20	P1	35 33 22			
	P2	28 25 21			
	P3	30 27 17			
	P4	30 29 21			
	P5	40 39 35			
	P6	36 35 30			
	P7	52 50 48			
	P8	40 39 30			
	P9	52 50 30			
	P10	28 24 28			
J21	P1	36 23 35			
	P2	30 28 30			
	P3	42 42 44			
K18	P1	50 47 41		SI08P4	
K19	P1	29 25 34			
K20	P1	50 45 21			
	P2	60 60 34			
K21	P1	54 42 33			

第11節 性格不明遺構

本調査において、前節までに記述してきた遺構の他に性格不明遺構2基が検出された。

1号性格不明遺構 SX 01

遺 構 (図230、写真172)

本遺構は調査区南部のG17グリッドに位置し、平坦面に立地する。LV(砂利層)上面において検出した。16・17号建物跡、181・182・184・379・416・541号土坑、G17P16と重複し、G17P16との新旧関係は不明で、416・541号土坑より新しく、これ以外より古い。多くの遺構と重複していることから、全容は不明であるが、平面形は隅丸三角形に復元され、規模は、長軸長(北東-南西)2.4m、深さ20cmを測る。周壁は直線的に急外傾して立ち上がり、底面は北東方向に緩く下降している。

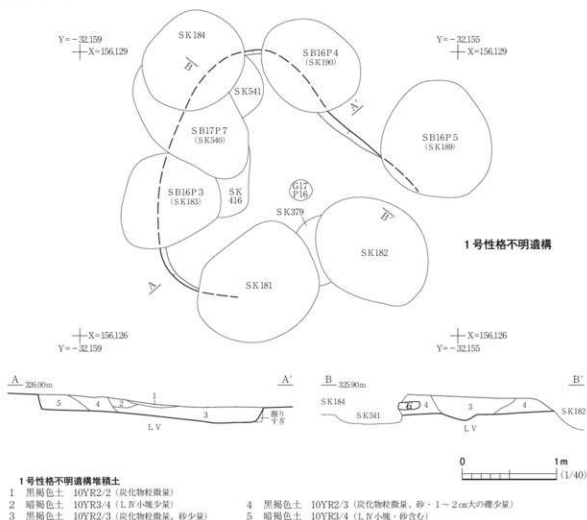


図230 1号性格不明遺構

遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ1は自然堆積土、ℓ2～5は人為堆積土と推測される。

本遺構からは弥生土器14点と剥片3点が出土した。図示した遺物はないが、磨消縄文が施された土器が含まれる。

まとめ

本遺構は掘立柱建物跡や土坑が密集して検出された地域の中で古い段階の遺構である。性格は不明で、時期は出土遺物より弥生時代中期前葉と考えられる。本遺構より古い416・541号土坑の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、本遺構より新しい16号建物跡の弥生時代中期前葉、17号建物跡の弥生時代中期中～後葉、181号土坑の弥生時代中期前葉、182号土坑の弥生時代中期、184号土坑の弥生時代中期後葉、379号土坑の弥生時代中期中葉という年代とも矛盾しない。(能登谷)

2号性格不明遺構 SX02

遺 構 (図231、写真173)

本遺構は調査区南部のG18・19グリッドに位置し、平坦面に立地する。西壁付近はLⅣ上面、それより東はLⅤ上面において検出された。853・869・870号土坑、G19P5～7・9と重複し、G19P9よりは古く、853・869・870号土坑よりは新しい。なお、G19P5～7との新旧関係は不明である。

平面形は北西－南東主軸の不整形で、東壁の南側には掘り残しにより半島状に内側に張り出している部分がある。規模は、長軸長5.7m、短軸長3.2m、深さ28cmを測る。周壁は西壁ではLⅣ、その他ではLⅤで、いずれも外傾して立ち上がる。底面は、東側から南側にかけてと西壁際ではLⅤであるが、その内側は最大厚13cmの貼土が部分的に施されている。底面には全体的に小さく緩やかな起伏が認められ、長軸方向では両端から中央に向かって緩やかに下降し、短軸方向では東方へ緩やかに下降している。

遺構内堆積土は4層に分層され、ℓ1～3は自然堆積土、ℓ4は貼土である。北側中央部のℓ1下部から42×15×9cmの大型礫が横位の状態で出土した。

遺 物 (図231、写真226)

本遺構からは、縄文・弥生土器52点、剥片11点が出土した。このうち弥生土器1点を図示した。

図231-1は、深鉢の体部である。ブリッジを有する重四角文が描かれる。縄文は、文様内に部分的に施されている。

まとめ

本遺構は、底面に貼土が部分的に施された大型の遺構である。平面形が不整形で、底面から焼物が検出されなかったことから、積極的に堅穴住居跡とすることはできない。時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉と推測される。本遺構より古い853号土坑の弥生時代前期、869号土坑の時期不明、870号土坑の縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、本遺構より新しいG19P9の時期不明という年代とも矛盾しない。(能登谷)



図231 2号性格不明遺構・出土遺物

第12節 遺構外出土遺物

遺構外からは、縄文・弥生土器50,906点、石器(剥片含む)・石製品8,502点、陶器12点、金属製品1点が出土した。このうち、縄文・弥生土器と石器・石製品の出土点数をグリッドごとに集計したものが図232である。

図示した遺物は、土器181点、石器314点、石製品(石皿・玉類)148点、金属製品1点である。

土器については、縄文土器、弥生土器、土師器に大別した。ただし、縄文土器と弥生土器との区

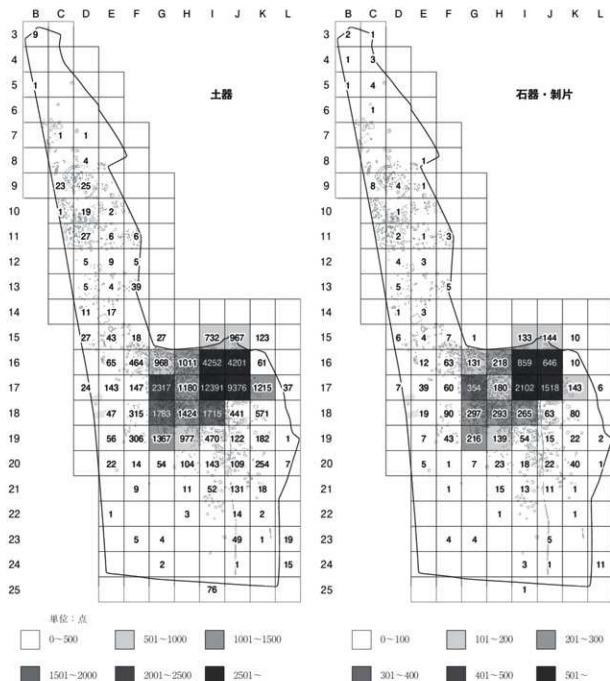


図232 グリッド別遺物出土量

別が難しい粗製の土器については、弥生土器の項目に一括して掲載した。

石器は、石鏃、石錐、石匙、石鋸、磨製石斧、削器、不定形石器、器種不明、二次加工のある剥片、石核に分類し、これを項目とした。

土 器 (図233~241、写真227~241)

縄文土器

図233、図234-1~13は縄文土器である。

図233-1~10は、いずれも深鉢である。1は口縁部の突起で、突起の上面と内外面に隆帯で渦文が描かれ、外面の下方に縄文が施される。外面には炭化物が付着する。2・3は、体上部から口縁部である。体上部は外傾し、口縁部はやや内湾する。接合しないものの、同一個体と思われる。口唇部に突起を有する。2の突起は二山で片方が高く突出し、その上面に円形の凹みが穿たれている。2・3とも突起を起終点に隆帯が巡らされ、口縁部と体部とを画す。突起部分の隆帯は、2が「C」字、3が「の」字をそれぞれ描く。隆帯には刻み目が施され、隆帯の上下にはこれに沿って各1本の沈線が引かれる。下に沿う沈線の直下には刻み目がこれに沿って施される。体部には、縦走する燃糸文が施されたのち突起下に蕨手文と思われる文様が、2は沈線で、3は隆帯で描かれる。4は、突起を有する口縁部である。外傾する。突起の外面から口縁部に、正逆の「C」字を組み合わせた入組文が刻みを施す隆帯によって描かれ、直下にその下半を囲むように「U」字を描いて刻み目が施される。口縁部と体部の境には指幅の浅い沈線が引かれ、その直下には刻み目が施される。5~8は、体部である。5・6は、いずれも浅い沈線とこれに沿う刻み目によって文様が描かれる。7は、縄文を施したのち2本の平行する沈線が巡らされ、その上方に2本の沈線で連弧文が描かれる。8は、内部に弧線を充填する円形文と蕨手文が互いに接して描かれる。9は、口縁部である。内傾する。沈線で曲線的な文様が描かれる。10は、体上部から口縁部を欠損する。平底で、きわめて緩やかに湾曲しながら急な角度で立ち上がる。外面に縄文が施され、底面に網代の瓦痕が弱く付される。内外面の一部に炭化物が付着する。

図234-1は、鉢の体部である。浮線で楕円文が描かれる。

同図2は、深鉢の体部から口縁部である。体上部は張り、口縁部は外傾する。口唇部に突起を有し、口縁部外面は肥厚する。口頸部は無文で、体上部に工字文が描かれる。外面に炭化物が付着する。

同図3は、高杯か鉢の体上部から口縁部である。波状口縁の内外面に口縁部に沿って沈線が引かれ、これとは別に1本の沈線がこの下方に巡らされる。外面の体部には、工字文が無文帯を挟んで上下2段に描かれる。内外面に赤彩が施され、波頂部付近のみ光沢のある黒色の付着物が内外面にみられる。あるいは黒漆の可能性もある。

同図4は、深鉢の体上部から口縁部である。口唇部に突起を有し、口縁部に工字文が描かれる。

同図5は、深鉢の体部から口縁部である。体下部は急な角度で外傾し、体上部は弱く張って最大径を有し、口縁部はわずかに内傾する。口唇部直下に幅の狭い縄文帯を巡らせ、直下に工字文が3段描かれ、幅広の縄文帯を挟んで体下部に3本以上の沈線が巡らされる。内外面に炭化物が付着する。

同図6・7は、鉢である。6は体上部から口縁部で、口唇部に突起を有し、突起の外面に縦の短沈線が引かれる。口縁部に工字文が描かれる。外面に赤彩が施される。7は体上部で、工字文が多段に描かれ、沈線に赤彩が施される。

同図8は、深鉢の体上部から口縁部である。口唇部のほとんどが削られたように欠損するが、波高の低い波状口縁のようである。波頂部下に縦の短沈線が引かれ、この間に口縁に沿う弧線が2本引かれる。口縁部は無文で、体上部に工字文が多段に描かれ、直下に縄文が施される。工字文の沈

線には赤彩が施される。口唇部付近の内外面と体部外面に、炭化物が付着する。

同図9は、鉢の体上部から口縁部である。口唇部に突起を有し、突起の外面に縦の短沈線が引かれる。楕円の中に工字文が沈線で描かれ、沈線内に赤彩が施される。

同図10は、鉢の口頸部である。口縁部外面が肥厚し、特殊工字文が描かれる。頸部は無文である。

同図11は、深鉢の口頸部である。口唇部に二山の突起を有し、突起の外面にそれぞれ縦の短沈線が引かれる。口縁部に5本の沈線が巡らされ、沈線の底には工具の先端を止め押した跡がみられる。頸部は無文である。外面に炭化物が付着する。

同図12は、深鉢の体上部から口縁部である。口唇部に突起を有し、口縁部は輪積み痕を残して段をつくり外面が肥厚する。口頸部は無文で、体部に条痕が施される。外面に炭化物が付着する。

同図13は、高杯の杯部である。体部は浅い角度で直線的に外傾し、口縁部に至って緩やかに角度を増す。口縁部内面をやや肥厚させて稜線が巡る。杯部底面は脚部との接合面で剥離し、凸面をなす。口縁部から体上部を文様帯とする。文様帯は、2本の沈線を巡らせて上下を区画し、ピッチの長い鋸歯文が1本の沈線で描かれる。沈線の底には工具の先端を止め押した跡がみられる。体下部には条痕が施される。光沢のある炭化物が内外面の広い範囲に付着する。炭化物は脚部が剥離した面にも付着することから、脚部を欠損した状態で使用されたと考えられる。

弥生土器

図234-14-21、図235-239は、弥生土器である。

図234-14は、鉢の体上部から口縁部である。変形工字文が上下2段に描かれ、沈線内に赤彩が施される。内面の口唇部下にも沈線が巡る。体部は無文である。

同図15・16は、深鉢である。15は、体上部から口縁部である。波状口縁で、体部外面に変形工字文が描かれる。16は、体上部である。変形工字文が描かれ、外面に炭化物が付着する。

同図17は、鉢の体部から口縁部である。体上部は張り、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。口縁部と体部の境に段を有する。口縁部には、外面に3本、内面に1本の沈線が巡らされる。体部外面には、縄文が施されたのち変形工字文が描かれる。頸部は無文である。外面の口縁部と体部、内面に巡らされた沈線より上に赤彩が施される。頸部外面にもわずかに赤彩が残る。

同図18・19は、深鉢である。18は口縁部、19は体部で、いずれも縄文を施したのち工字文が描かれる。いずれも外面に炭化物が付着する。

同図20は、高杯の脚部である。裾部から急な角度で直線的に立ち上がる。円窓が上下2段で互い違いに穿たれる。裾部に3本の沈線が巡らされ、その上方に横方向の短沈線もしくは刺突文が密集して入れられたのち、円窓の周りにこれを縁どる沈線が引かれる。短沈線に赤彩が施される。

同図21は鉢である。平底で、緩やかに湾曲して立ち上がり口縁部に至る。底面に篋葉の圧痕が付される。口唇部は平らな面を有し、沈線が1本巡る。口縁部直下に3本、体部中ほどのやや下に2本の沈線が巡らされ、体下部に縄文が施される。縄文施文部を含め内外面全体にナデが施され、縄文は大部分がナデ消されている。内外面に炭化物が付着し、内面の炭化物は光沢を有する。

図235-1は、深鉢の体上部から口縁部である。縄文を施したのち変形工字文が描かれ、工字文内の一部が磨り消される。外面の一部に炭化物が付着する。

同図2は、鉢の体上部から口縁部である。縄文が施されたのち変形工字文が描かれる。

同図3～7は深鉢である。3・4・7は口縁部、5・6は体部である。いずれも縄文を施したのち変形工字文が描かれ、工字文内部の一部が磨り消される。いずれも外面に炭化物が付着する。

同図8は、深鉢の口縁部である。二重の菱形を沈線で描いたのち、縄文がその外側に施される。縄文は、オオバコの擬縄文のようである。外面に炭化物が付着する。

同図9は、深鉢の体部である。縄文を施したのち、2本の沈線で菱形とその左右の角から伸びる帯が描かれ、その内部が磨り消される。菱形は上下多段に描かれる。

同図10・11は深鉢の体部、同図12は鉢の体上部から口縁部、同図13は壺の体上部、同図14は高杯の杯部である。いずれも磨消縄文で層波文が描かれる。10・12・13・14は帯部が無文、11は帯部に縄文が施される。11・14は帯が3本の沈線で描かれる。10の縄文はオオバコの擬縄文、13は附加条縄文である。12は、縄文施文部に赤彩が施される。10・11の外面に炭化物が付着する。

同図15～20は深鉢、21は蓋で、いずれも磨消縄文でヒトデ文が描かれる。沈線が引かれたのち縄文が施され、もう一度沈線が引かれる。15～19は帯部に縄文が施され、20・21は帯部が無文である。21の縄文施文部に赤彩が施される。16・17は外面、21は口縁部内外面に炭化物が付着する。

同図22・23は深鉢、24は鉢である。いずれも正逆の直角三角形を組み合わせた文様が磨消縄文で描かれる。22は帯部に縄文が施され、23・24は帯部が無文である。24は、内面の口唇部下に沈線が巡らされ、沈線内に赤彩が施される。22は内外面に、23は外面に炭化物が付着する。

同図25は、壺の底部から体下部である。平底で、体下部が緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底面に網代の圧痕が付される。体下部に磨消縄文で文様が描かれる。

図236-1・2は深鉢である。1は、底部付近を欠損する。体下部は直線的に急な角度で立ち上がり、体上部が張って最大径を有し、口縁部は内湾する。体上部を文様帯とし、磨消縄文で文様が描かれる。体下部には縄文帯と沈線が巡らされる。外面に炭化物が付着する。2は、底部から体下部が遺存する。平底で、体下部は垂直に近いきわめて急な角度で立ち上がり、体上部に向かって立ち上がる角度はやや緩やかになる。体部の中ほどより上に磨消縄文で文様が描かれる。文様は、方形を多段に互い違いに描き、その内部と体下部に末端結節のある縄文が施される。

同図3は、深鉢の体部である。沈線で二重の四角形が描かれたのち、内側の四角形の内部に縄文が充填される。外面に炭化物が付着する。

同図4～7は壺である。4～6は体部で、接合しないが同一個体と思われる。7は頸部である。いずれも磨消縄文で文様が描かれ、縄文を施したのち縄文施文部に刺突文が施される。4は無文部に、6は縄文施文部に波状文が描かれる。5は、縄文施文部の一部に漆のような付着物がある。

同図8・9は、壺の体上部から頸部である。8は、磨消縄文で重三角文が描かれる。重三角文の内部に刺突文が充填され、外側に縄文が施される。重三角文の沈線に赤彩が施され、外側の縄文施

文部には漆と思われるものが塗られている。9は、縄文が施されたのち太く浅い沈線で頸部に沈線が巡らされ、体部に多重の三角形が描かれる。

同図10・11は、壺の体部である。10は沈線と波状文が巡らされ、刺突文を充填する小円文が描かれる。円文の外側には縄文が施される。11は沈線で文様を描いたのち条痕が施される。

同図12は、深鉢の体上部から口縁部である。体上部は張りをもち、頸部は急激にすぼまり、口縁部は急な角度で短く立ち上がる。波長の短い波状口縁で、波底部の一部に指頭で押した痕がみられる。口縁部外面に輪積み痕を残して肥厚させ、肥厚部には縄文が施される。頸部は無文で、体部に磨消縄文で文様が描かれる。

同図13は深鉢の口縁部で、口縁部に3本の沈線が巡らされ、体部に磨消縄文で文様が描かれる。

同図14は、鉢の体上部から口縁部である。磨消縄文で文様が描かれ、文様の間には縦の短沈線が引かれる。外面に炭化物が付着する。

同図15は、壺の球胴の体部である。最大径の位置に沈線が2本巡らされ、その上方に文様が描かれる。下方には、ケズリが施されたのち赤彩が施される。文様は、横長の隅丸長方形が互い違いに多段に描かれ、内部にカナムグラの擬縄文が充填される。内面の体上部には輪積み痕が残る。

同図16は、深鉢の体部である。2本の沈線が体下部に巡らされ、その上方に横長の長方形が描かれたのち、その内外にカナムグラの擬縄文が施される。体下部には、ケズリが施される。

同図17は、鉢か深鉢の底部から体下部である。平底で、体下部が急な角度で直線的に立ち上がる。文様は磨消縄文で描かれる。

同図18・19は、蓋である。18は、縄文が施されたのち口縁部に沿う2本の沈線と錐形の文様が描かれ、文様の外側が磨り消される。縄文は擬縄文のようである。19は磨消縄文で文様が描かれる。

同図20は、高杯である。複数の掘立柱建物跡と遺構外から出土した破片が接合したため、遺構外出土土器として取り扱った。脚部は円錐台形で、杯部は浅い皿形である。脚は、裾部の外面を肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。その他は無文で、上下2段の円窓が4方向に穿たれ、ミガキが施される。杯部には、外面全体に縄文を施したのち口縁部に沿って浅く一段掘り下げた無文帯を巡らせる。杯体部にも、同様の手法によってヒトデ文らしき文様が描かれる。杯部内外面と脚部外面の一部に炭化物が付着する。特に、杯部内面には口唇部付近を除いて炭化物が広範囲に付着する。杯部内面の炭化物は炭素・窒素安定同位体分析を行い、 C_3 植物に由来するものであるという結果が得られた(付章第6節参照)。

同図21～23は、蓋である。高杯の可能性もある。接合しないものの、同一個体と思われる。縄文を施したのち、指頭で文様が描かれる。笠部に補修孔が1箇所穿たれ、補修孔の内部と補修孔脇の破断面に黒漆が付着する。内外面に炭化物が付着する。

同図24は、壺の体部である。縄文を施したのち磨り消して文様が描かれる。

図237-1～14は深鉢である。9のみ壺の可能性もある。1～3は口縁部、4～14は体部である。いずれも磨消縄文で、重四角形、これらを結ぶブリッジ、鍵形などを組み合わせた文様が描かれる。

9は、遺存状況が悪いものの縄文施文部に赤彩が施されているようである。2・4、6・8・10・12・13は外面に炭化物が付着する。

同図15は、深鉢である。底部から体下部を欠損する。20号建物跡P5から出土した破片とも接合したが、大部分は遺構外出土であることからここで取り扱うこととした。体部は急な角度で外傾し、体上部に張りをもって最大径を有する。口縁部は内湾する。体部に、渦文、渦文から伸びるヒトデ文、これらを結ぶブリッジなどによる文様が磨消縄文で描かれる。接合しないものの、同一個体と思われるものが他に数点出土した。

同図16～21は、壺の体上部である。16は渦文、17は渦文が同心円文、18は横方向の沈線を多数充填する方形、19・20は重四角文、21は重三角文が、磨消縄文で描かれる。18～21は、沈線が細く直線的である。縄文は、16がカナムグラの擬縄文、18～21が細縄文である。19の縄文は判然とせず、カナムグラの擬縄文の可能性もある。17の縄文施文部には赤彩が施される。

同図22は器種不明の体部である。最大径の位置に小指先大の突起が貼り付けられ、横方向の貫通孔が突起に穿たれる。そののち磨消縄文で文様が描かれ、縄文施文部に赤彩が施される。

同図23は、鉢の体上部から口縁部である。体部に磨消縄文で層波文が描かれ、口縁部にヨコナデが施される。帯部に細縄文が充填される。

同図24～28は壺の口縁部で、27は体上部も遺存する。いずれも受け口状で、24・25は口唇部直下の外面、26は口唇部に縄文が回転施文される。いずれも重連弧文が描かれ、26は間隙に三角形と半円形が、28は半円形が配置される。26には、交互ミガキが施される。27の体上部には渦文が同心円文の上端部がわずかに遺存し、間隙に銀杏葉形の小文が配置される。銀杏葉形は一箇所だけ逆三角形に置き換えられている。27は外面全体、28は沈線内に赤彩が施され、いずれも破断面にもこれと同じ赤色顔料が付着する。26の内面には、炭化物が盛り上がり分厚く付着する。

同図29は、高杯か鉢の口縁部である。口唇部直下に3本の沈線が巡らされ、その下方に2本の短沈線によるスリットを入れる連弧文が4本の沈線によって描かれる。口唇部には刻み目が施される。

同図30は、壺の口縁部である。半円形を内部に配置する重連弧文が外面に描かれ、内面に2本の短沈線によるスリットを入れる3本の沈線が口唇部直下に巡らされる。外面の重連弧文どうしの接点には、ボタン状の貼り付けが付される。内外面とも赤彩が施される。

図238-1・2は、壺の頸部である。1は、背中合わせのカッコ形をスリットとする2本の横方向の沈線が上下4段描かれる。2は、縦の短沈線をスリットとする上弦の2重の連弧文と、その下方に下弦の3重の連弧文が巡らされる。1の外面には炭化物が付着する。

同図3～5は、壺の体部である。3・4は渦文が同心円文、5は渦文が描かれ、交互ミガキが施される。5は渦文どうしの間隙に重三角文が配置される。重三角文の底辺は緩やかな上弦の弧を描き、中央には扁平な銀杏葉形が描かれる。

同図6・7は鉢で、いずれも体上部から口縁部、7はこれに加えて接合しないものの底部から体下部が遺存する。6は、体上部が緩やかに湾曲しながら内傾し、口縁部は外反する。口唇部は、波

長の短い波状口縁である。口縁部の内外面と頸部部の境の外面に3本の平行する沈線が巡らされ、口縁部内面を除き逆「ハ」字形のスリットが入れられる。体部外面には、渦文が同心円文とその間隙に逆三角形が描かれ、交互ミガキが施される。そののち、渦文が同心円文外縁の上下左右に低いボタン貼状付けが付される。外面に炭化物が付着する。沈線内にわずかに赤彩がみられるが、炭化物に覆われ、赤彩の範囲はわからない。7は、平底、やや扁平な球胴、外反する口縁部をもつ。口唇部に刻み目が施され、口縁部外面に4本、内面の口唇部直下に1本の沈線が巡らされる。体部外面には渦文が描かれ、各渦文の頂からブリッジが上方に伸びる。渦文の上方の間隙には逆三角形が配置され、下方には渦文の下縁をなぞる2重の連弧文が互い違いに2段描かれ、連弧文の内部には底辺が弧を描く三角形が配置される。下段の連弧文と三角形は、なかばナデ消され模範としている。渦文には交互ミガキが施され、ミガキが施されない部分には赤彩が施される。赤彩は雑に塗られ、線をはみ出す箇所がみられる。赤彩は口縁部の内面にも施される。

同図8は、壺である。口縁部、頸部、体部がそれぞれ接合しないものの、同一個体と判断した。体部は、最大径の位置で緩やかに屈曲するやや扁平な球胴で、体上部から緩やかに移行する頸部はやや長く内傾し、口縁部は受け口状である。口唇部直下、口頸部の境、頸部部の境、体部最大径の位置にそれぞれ2本から数本の沈線が巡らされ、口唇部直下には大豆大の粘土粒の貼り付け、頸部部の境と体部最大径の沈線に4本の短沈線によるスリットが入れられる。口縁部と頸部に四角文、体部に重四角文が描かれ、それぞれに横方向の沈線が多数充填される。体部下半はわずかしこ遺存せず、遺存した範囲については無文である。

同図9・10は、片口付き鉢の体上部から口縁部である。接合しないが同一個体と思われる。片口の口唇部は欠損する。口唇部直下に幅の狭い縄文帯とその直下に5本の沈線が巡らされ、片口の下部分の沈線は片口の下縁をなぞるように緩やかな「U」字を描く。その直下に末端結節を有する附加条縄文が施される。内外面に炭化物が厚く付着する。

同図11・12は、壺の頸部である。いずれも間隔の狭い二本同時施文具で重菱形文と思われる文様が描かれる。

同図13は、蓋のつまみ部から笠部の上端である。つまみ部は短い筒形で、笠部は浅い角度で開く。外面全体に縄文が施され、炭化物が外面の大部分に付着する。

同図14・15は、壺の口頸部である。14は、頸部の中ほどが湾曲してぐね、口縁部は外反する。口縁部外面を肥厚させ、肥厚部に縄文が施される。口唇部は波長の短い波状口縁で、波底部に指頭や爪先の圧痕がみられる。15は口縁部が外傾し、口唇部に沈線、口唇部下の外面に隆帯が巡らされる。内外面とも無文で、赤彩が施される。

図239-1~6は、深鉢の体上部から口縁部である。いずれもおもに沈線で文様が密に描かれる。1・2は、口縁部が緩やかに外反する。1の口頸部には、上から2本の沈線、5重の波状文、刺突文帯が巡らされる。2は、上から3重の波状文、2本の沈線を巡らせた直下に重四角文が描かれ、さらにその直下に沈線と多重の波状文が巡らされる。3は、外面と口唇部に無節の縄文を施したの

ち、口唇部直下に3本の沈線を巡らせ、その直下に重三角文が描かれる。4は、口唇部直下に2本の沈線、以下上から順に、波長の短い2重の波状文、波長の長い2・3重の波状文、2本の沈線が巡らされたのち、口唇部直下に2本1単位の短い縦長の浮文が付され、さらにそののち口唇部に刻み目が施される。5・6は、接合しないものの同一個体と思われる。口唇部直下を無文帯とし、以下、上から順に、3本の沈線、3重の鋸歯文、3本の沈線、2重の鋸歯文、3本の沈線が巡らされる。いずれも外面に炭化物が付着する。1・4・5は、内面にも炭化物が付着する。

同図7・8は深鉢である。7は、弱く張る体部最大径の位置に2本の沈線が巡らされ、その上方に重四角文が沈線で描かれる。重四角文の中心には、縄文が充填されたのち横方向の短い沈線が1本引かれる。四辺の中央には2本の短沈線によるスリットが入れられる。2本の沈線の下方には、重鋸歯文が巡らされる。8は頸部で、やや横長の重四角文が沈線で描かれ、中心に刺突列が上下2段に充填される。四辺の中央には2本の沈線によるスリットが入れられる。外面に炭化物が付着する。

同図9は、壺の頸部である。重三角文が沈線で描かれる。

同図10～13は、深鉢の体部である。10は、沈線文帯の下方に4本の沈線による鋸歯文が巡らされる。沈線文帯は1本の横一直線と波長の短い2本の波状文が交互に巡り、鋸歯文の間隙には細縄文が充填される。外面に炭化物が付着する。11は、重四角文が描かれ、中心に縄文を充填する「コ」字形が描かれる。重四角文の上部には2本の短沈線によるブリッジが配置される。沈線と縄文施文部の色調は橙色であるが、赤彩ではないようである。12は、2重に巡らされた鋸歯文の下方に2重の四角文が描かれ、内部に横方向の沈線が引かれる。13は重三角文が描かれ、内部に横方向の刺突列が上下4段充填される。外面に炭化物が付着する。

同図14は、壺の底部から体下部である。底部は平底で、底面中央が浅く凹む。体下部は急な角度で直線的に立ち上がって最大径に至り、緩やかに湾曲して体上部に移行する。体部最大径の位置より下方に1本の沈線が巡らされる。その直下には1・2重の「ハ」字が巡らされ、上方には重四角文が描かれる。その中央には横方向の短い沈線が数本充填される。体部最大径の位置に重四角文の中心が位置すると思われる。体下部にはケズリが施される。内外面の一部に炭化物が付着する。

同図15は、壺の頸部である。密集する沈線で文様が描かれる。5本の沈線を巡らせて体部と頸部の境を画し、その上方に密集する沈線で重鋸歯文と思われる文様が描かれる。

同図16は、甕の体部である。密集する沈線で文様が描かれる。最大径の位置に1本の沈線が巡らされたのち、この沈線の上に約8cm間隔の垂線が引かれ、垂線の間に10重以上の重鋸歯文が描かれる。沈線の直下には斜め方向の文様の上部がわずかに残る。外面に炭化物が付着する。

同図17は、壺の頸部である。黒豆大の粘土粒が横長に貼り付けられたのち、その両脇に縦方向の沈線が各4本以上引かれ、粘土粒の下方、縦方向の沈線の間に重山形文が沈線で描かれる。

同図18は壺の体上部で、頸部との境の稜線がわずかに残る。稜線の直下に、上から順に、綾杉文、櫛描きの縞状文、2条の櫛描文が巡らされる。

同図19は壺の体部である。体上部に5本の沈線による波状文が多段に描かれ、体下部には条痕

が横方向に施される。内外面に炭化物が付着する。

同図20は壺の体下部である。オオバコと思われる擬縄文が施されたのち、上弦の連弧文が2本の沈線に描かれ、弧の中腹どうしと弧の弦が2本の沈線で架橋される。外面に炭化物が付着する。

同図21・22は、甕の体部である。21は櫛描きによる縦方向の線を引いたのち櫛描き波状文が多段に描かれ、さらに横方向の櫛描きによる線が巡らされる。22は、体部が弱く張る。2条接した縦の櫛描きによる線を等間隔に引き、この間に横方向の櫛描波状文が多段に充填される。

図240-1~5は、粗製深鉢の口縁部から体上部である。いずれも複合口縁で外面が肥厚する。1は口縁部と体部に、2は体部に条痕が施される。3は、口縁部と体部に縄文が施される。4は、口縁部に鋭利な工具で斜め方向に刻み目、体部に横方向の条痕が施される。5は無文である。

同図6・7は、粗製の深鉢の体上部から口縁部である。6は、体上部に最大径を有し、口縁部は内湾する。無文で、外面に炭化物が付着する。7は、体上部が緩やかに湾曲しながら垂直に近い急な角度で立ち上がり、口縁部はやや内湾する。外面に条痕が施され、炭化物が付着する。

同図8~16は、粗製深鉢の口縁部である。8~11・13は、条痕を施したのち口縁部に波状文、12は結節縄文が巡らされる。14・15は、口縁部に列点文が巡らされ、体部に縦走る縄文が施される。16は外面にオオバコの擬縄文が施される。9・10・12・14・16は外面に炭化物が付着する。

同図17~28は、甕の口縁部である。17は外面にオオバコの擬縄文、口唇部に刻み目が施される。刻み目の原体はオオバコのようなものであるが判然としない。18は、縦方向と横方向の条痕が施される。19は口唇部に刻み目が施され、口縁部上半に4本の沈線が巡らされる。体部には条痕が施される。20は、口唇部に無節の縄文が回転施文され、口縁部に4本の波状文と1本の沈線が巡らされる。体部には無節の縄文が施される。21は、口縁部と体部の境に沈線が巡らされ、口縁部に斜め方向の沈線が密に引かれる。22は、口縁部と体部の境に2本の沈線間に描かれた鋸歯文が巡らされ、体部に無節の縄文が施される。口縁部にはヨコナデが施される。23は、口縁部にヨコナデ、体部に縄文が施され、両者の境目に横方向のミガキのような浅い沈線が施される。24は、体部に縄文が施され、口縁部には部分的に縄文が施される。頸部は無文である。25~27は、「く」字口縁で体部はなで肩である。いずれも口唇部に縄文が回転施文され、口縁部にヨコナデ、体部に末端結節がある縄文が施される。25は直前段多条、26は附加条、27はこれらとは異なる縄文が施される。28は、口唇部に縄文が回転施文され、口縁部にヨコナデ、体上部に5本の沈線が巡らされる。もっとも下の沈線に入れられたスリットがわずかに遺存する。いずれも外面に炭化物が付着する。17は、内面の口唇部付近にも付着する。

図241-1・2は、蓋である。1は、つまみ部の上面が凹面をなし、笠部との境がくびれ、笠部は「八」字に開く。くびれ部には指頭の圧痕が巡り、笠部の内外面にハケメ様の条痕が施される。内外面に炭化物が付着する。2は、つまみ部である。上部は中空の筒形で、笠部に向かうにしたがいわずかに開く。上面の4方向に突起が付される。つまみ部と笠部の境に2本同時施文によると思われる沈線が巡らされる。

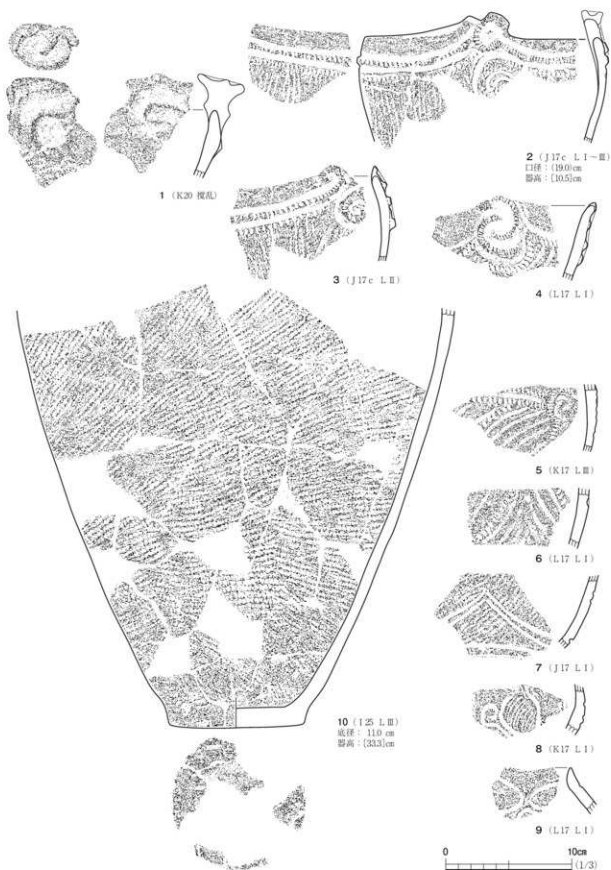


図233 遺構外出土遺物 (1)

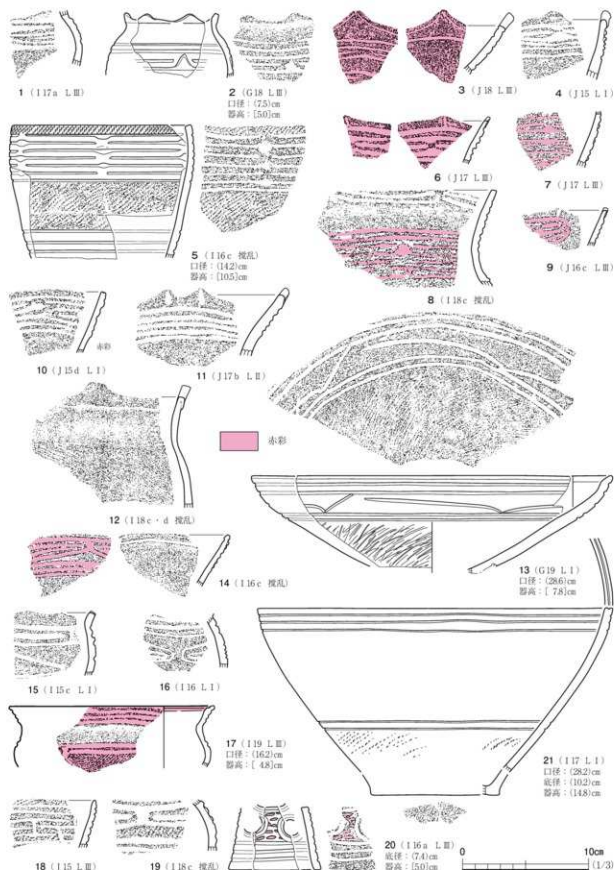


図234 遺構外出土遺物 (2)

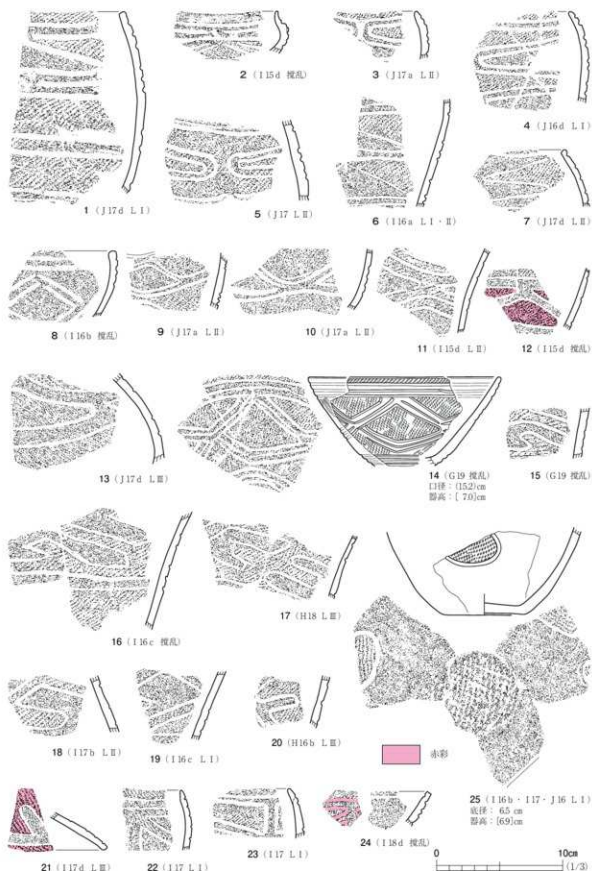


図235 遺構外出土遺物 (3)

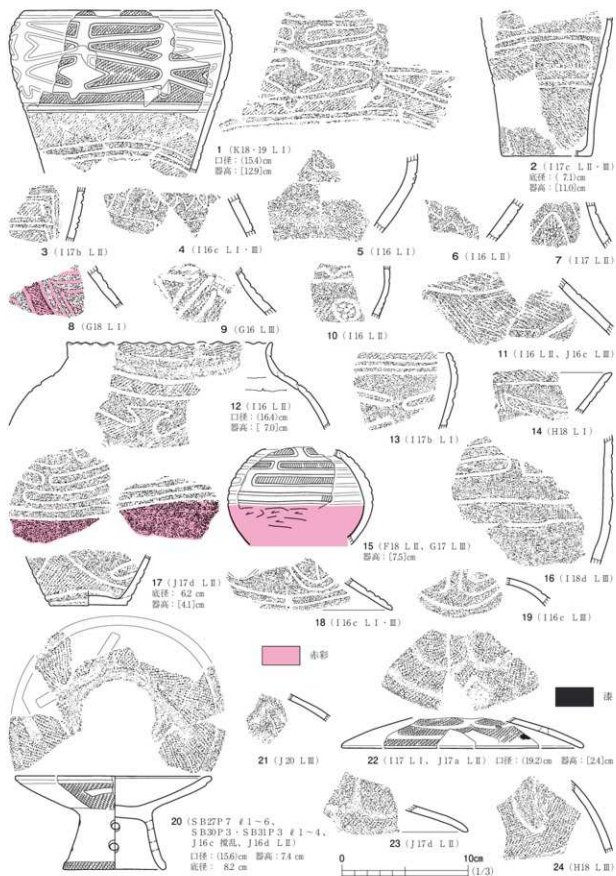


図236 遺構外出土遺物 (4)

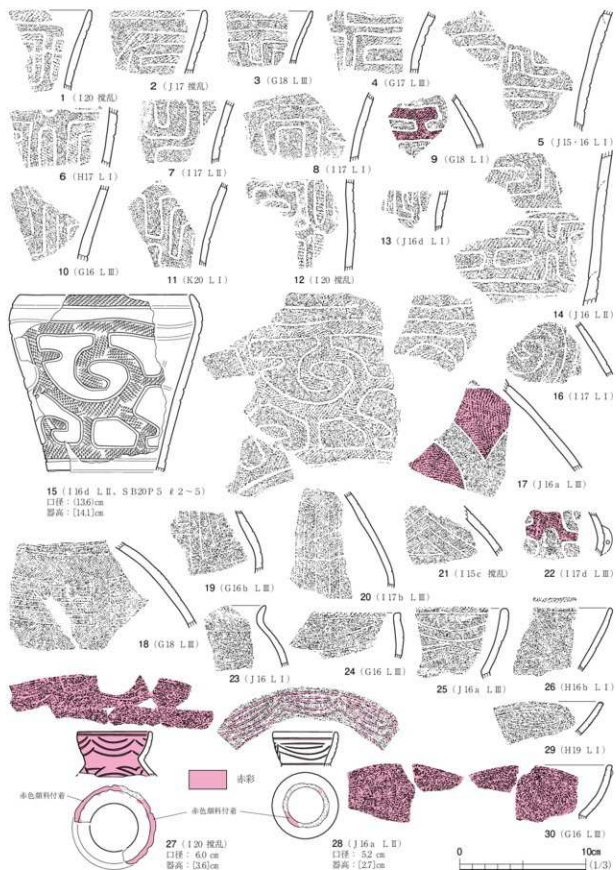


図237 遺構外出土遺物 (5)

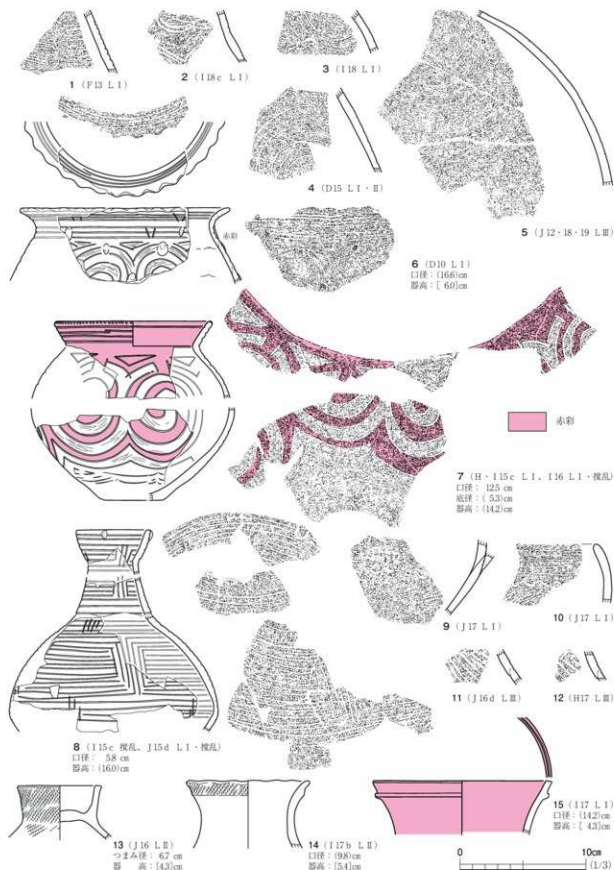


図238 遺構外出土遺物 (6)

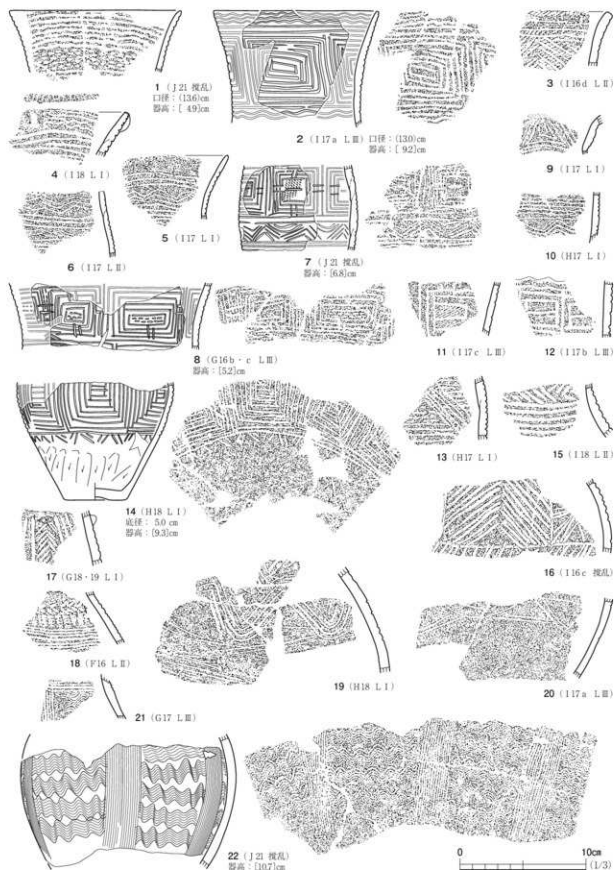


図239 遺構外出土遺物 (7)

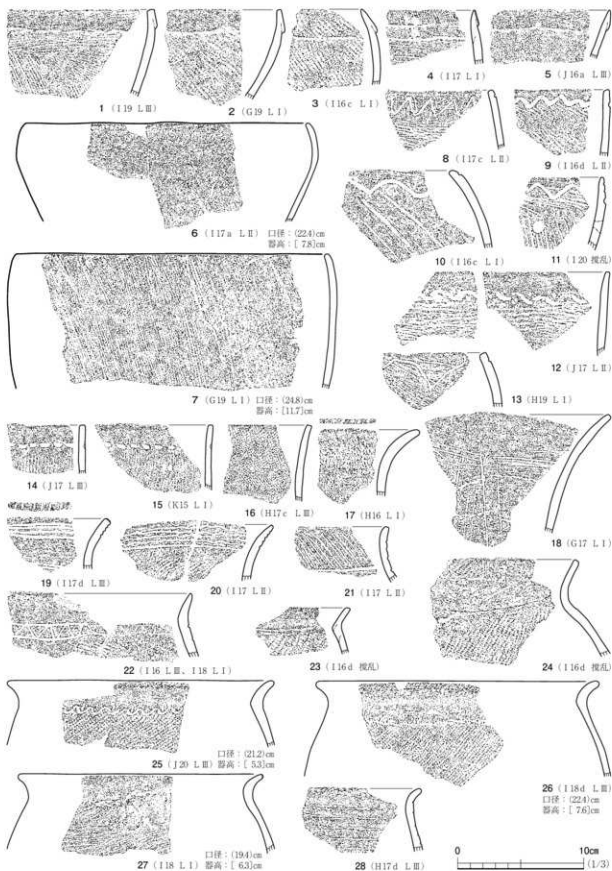


図240 遺構外出土遺物 (8)

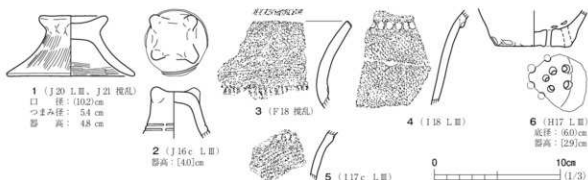


図241 遺構外出土遺物（9）

同図3・4は甕で、いずれも口縁部下端に段を有する。3は、口縁下部に横方向の条痕が施されたのち、口縁部にオオバコの擬縄文、口唇部と口縁部下端の段に刻み目が施される。4は、頸部から口縁部である。頸部にオオバコと思われる擬縄文が施され、口縁部下端に棒状工具による連続した押捺が施される。わずかに遺存する口縁部は無文である。いずれも外面に炭化物が付着する。

同図5は、壺の口頸部である。口縁部下端に段を有する。口縁部下端に竹管を下方向から刺突した刺突文が巡らされ、頸部に縄文が施される。

土 師 器

図241-6は、土師器の甕である。底部は平底で、体下部が急な角度で立ち上がる。底部から体部の下端にかけて多数の貫通孔が穿たれる。貫通孔は外面から内面に向けて穿たれている。

石器・石製品・金属製品（図242～281、写真253～286）

石 鍬 図242・243は、石鍬である。図242-1～31、図243-1～23は凸基、図243-24は平基が凹基、同図25は基部の両側縁に抉りを入れたものである。アスファルトが付着するものはない。

石 錐 図244・245は、石錐である。図244-1～17、図245-1～4は柄部をもたないもの、図245-5・6は柄部をもつものである。

図244-4・5は片方の端、同図11は両端が顕著に磨減し、剥離面の稜線が丸みを帯びている。

石 匙 図246・247は、石匙である。図246-1～6は横型、同図7～13、図247-1～7は縦型である。縦型の石匙には、つまみ部に大小の二者がある。図246-7～12はつまみ部が小さいもの、図247-1・2・4～7はつまみ部が大きいものである。

図246-6は、つまみ部以外の両面に黒色の付着物が部分的に薄くみられる。つまみ部にはまったく付着していないことから、紐などが装着された状態で付着したものと考えられる。付着物が何であるかは不明である。アスファルトではないようである。同図12の背面の一部にも同様の付着物がみられる。やはりつまみ部には付着していない。

石 鍬 図248～265-7は石鍬である。このうち、図248-1・2は分銅形、同図3～8、図249-1～8、図250-1～6は有肩形、図251-1～6、図252-1～6、図253-1～6、図

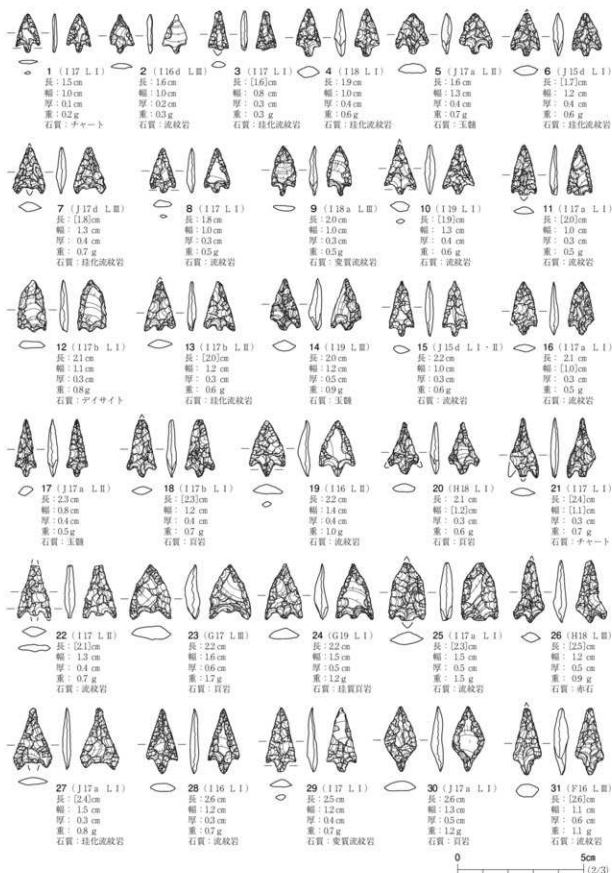


図242 遺構外出土遺物 (10)

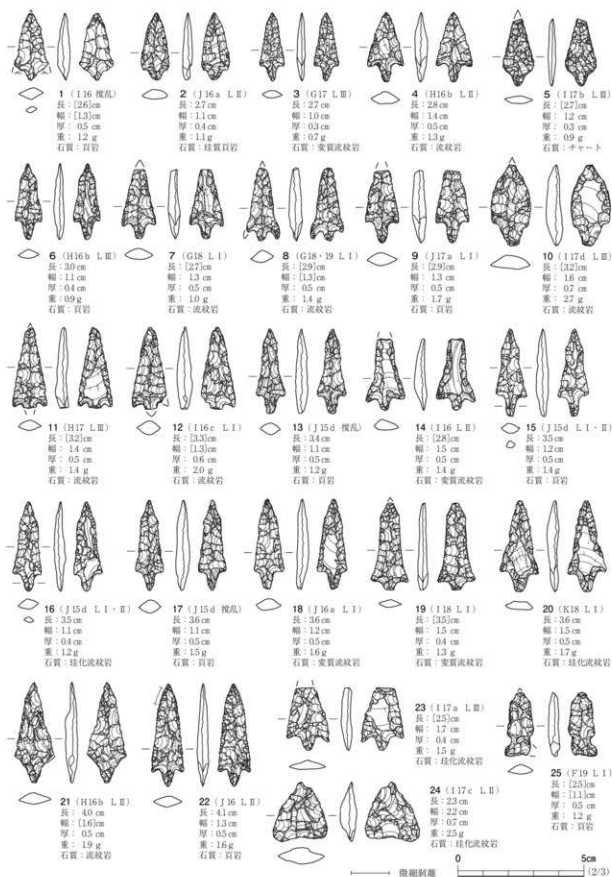


圖243 遺構外出土遺物 (11)

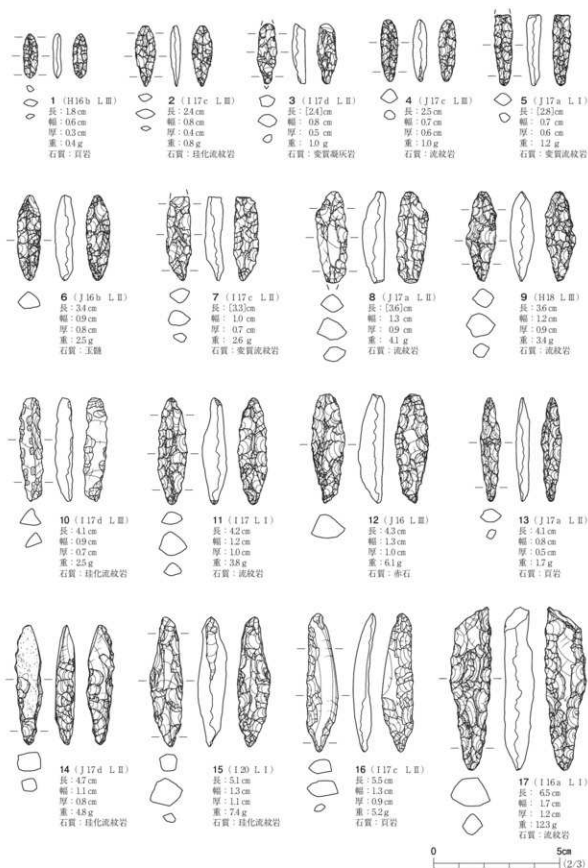


図244 遺構外出土遺物 (12)

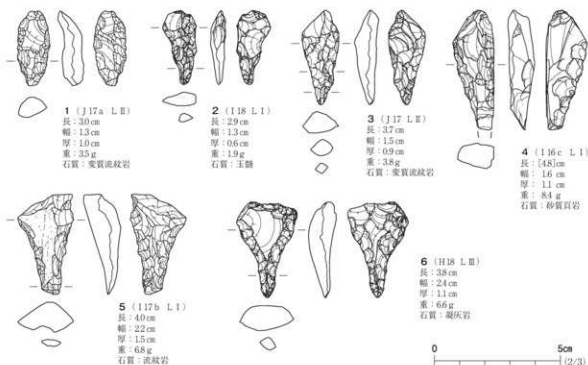


図245 遺構外出土遺物 (13)

254-1~6、図255-1~6、図256-1~6、図257-1~6、図258-1~5は撥形、図258-6・7、図259-1~7、図260-1~6、図261-1~6、図262-1~5は短冊形である。図262-6は柄部をもつものである。図263-1は、未成品と考えられる。同図2~5、図264-1~11、図265-1~7は欠損したものである。

本遺跡出土の石鋸は、背面に自然面を残すものが多くを占める。石材は、灰色で相対的に硬質のものと、灰黄色ないし浅黄色の相対的に軟質のものに二分別することができる。前者は、頁岩、砂岩、粘板岩、ホルンフェルスなどで、おおむね小型の石鋸に多く用いられる。後者はデイサイト、安山岩などで、おおむね大型の石鋸に多く用いられる。

刃部には、使用痕がほとんどみられないものの他、刃部が磨滅するもの(図248-2、図249-6、図250-1・4、図252-1・6、図254-6、図255-2・5、図260-6、図265-3)がある。磨滅の程度には強弱があり、使用頻度が反映されていると考えられる。

使用痕がみられるものの中には、使用痕が剥離によって切られているものがある(図248-4・6・8、図253-2・4・6、図254-1・2、図255-1・6、図256-1・6、図257-2、図258-2、図259-2・6、図260-4、図261-1・3、図262-5)。これらについては、使用による刃部の破損か、刃部が再調整されたかの二つの可能性が考えられる。複数の剥離面それぞれに打点があるもの(図249-4・5、図251-2・4・5)は再調整が行われた可能性がある。図253-3、図254-5、図255-4、図256-2・3、図257-1・4・5、図259-7、図261-6、図262-1・3・6は、再調整あるいは部分的な小破損の前後の使用痕の両者がついているようである。

刃部に鋭利さがいないもの(図249-2、図251-3、図252-2・3、図258-4・5、図260-1・

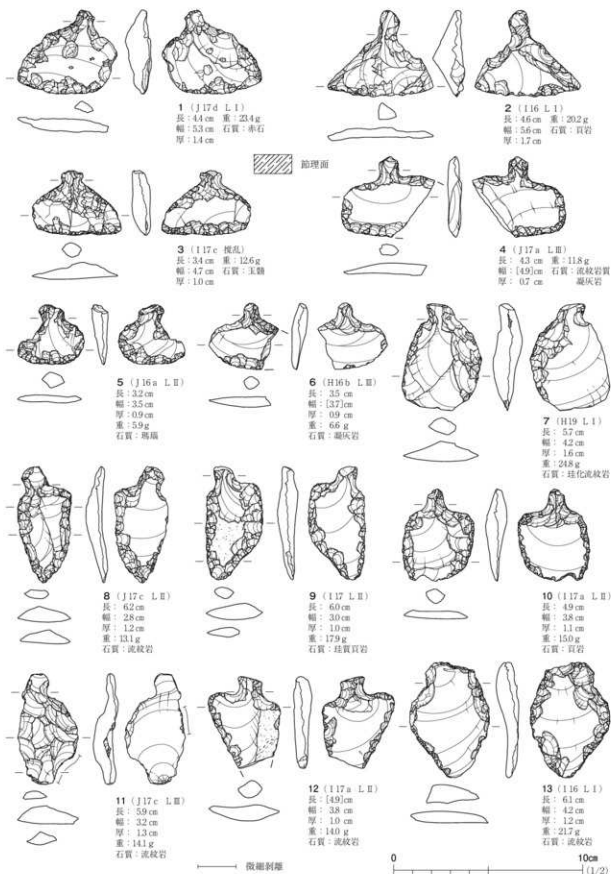


図246 遺構外出土遺物 (14)

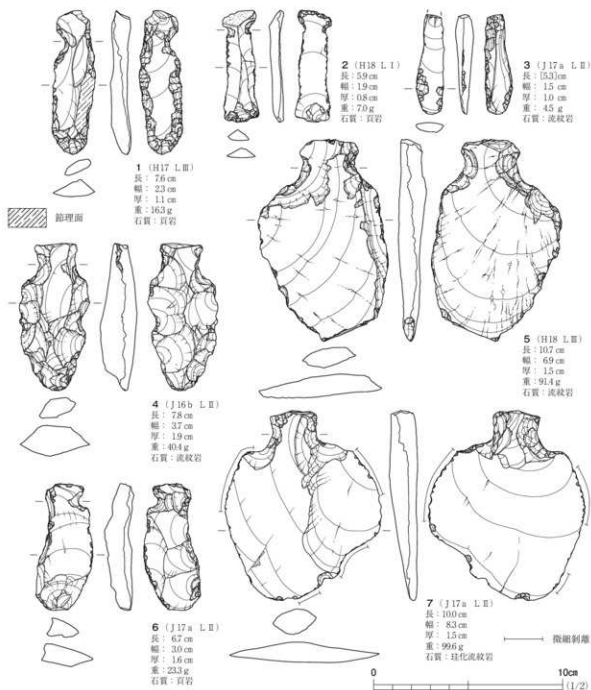


図247 遺構外出土遺物 (15)

2・5、図262-2は、刃部が破損して失われたと考えられる。

図259-7、図260-3、図261-4、図262-2は、基部の中ほどに磨滅した部分がある。柄の装着に関わる可能性がある。

図256-1は腹面の中央部が平滑になっており、砥石としても使用された可能性がある。

磨製石斧 図265-8・9は磨製石斧である。いずれも片刃で、平面形は、基部が弧を描いてやや突出する台形である。8は背面がやや盛り上がり、腹面の基部付近には荒削りの際の剥離面が磨き切れずに残る。9は全面が丁寧に研磨され、石材の縞模様を表出する。

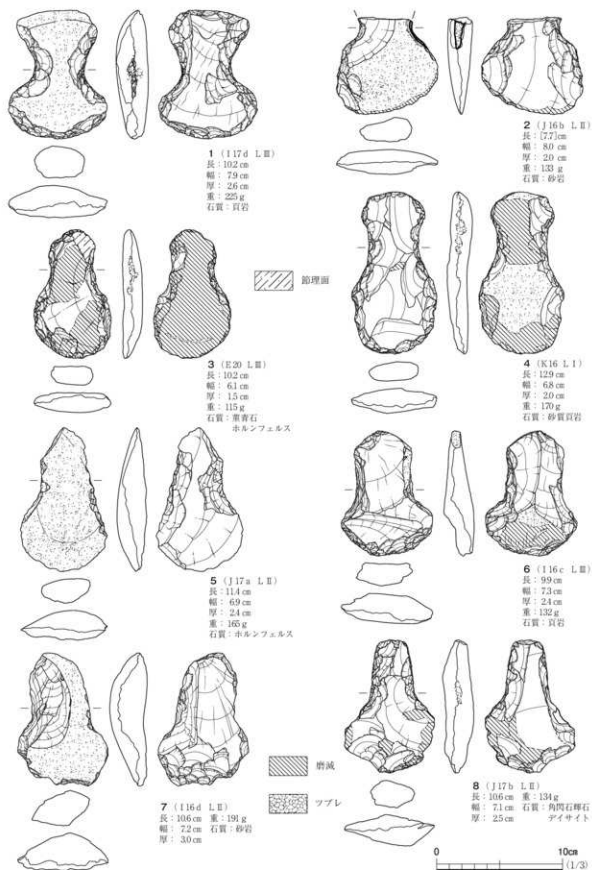


図248 遺構外出土遺物 (16)

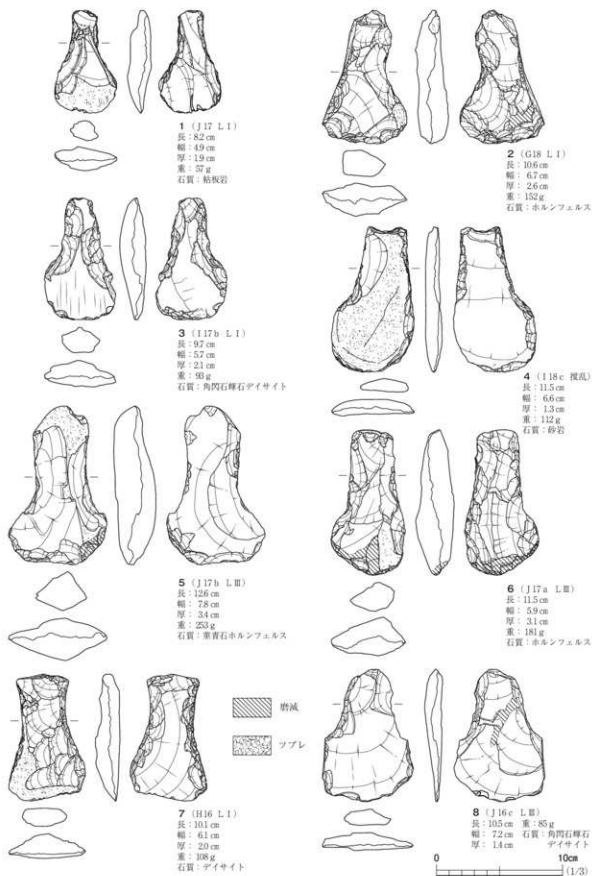


図249 遺構外出土遺物 (17)

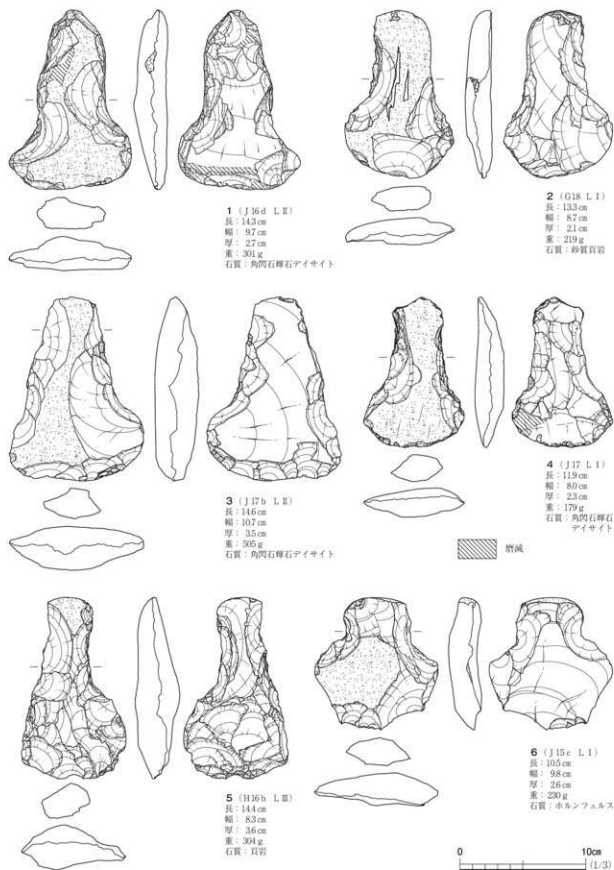


図250 遺構外出土遺物 (18)

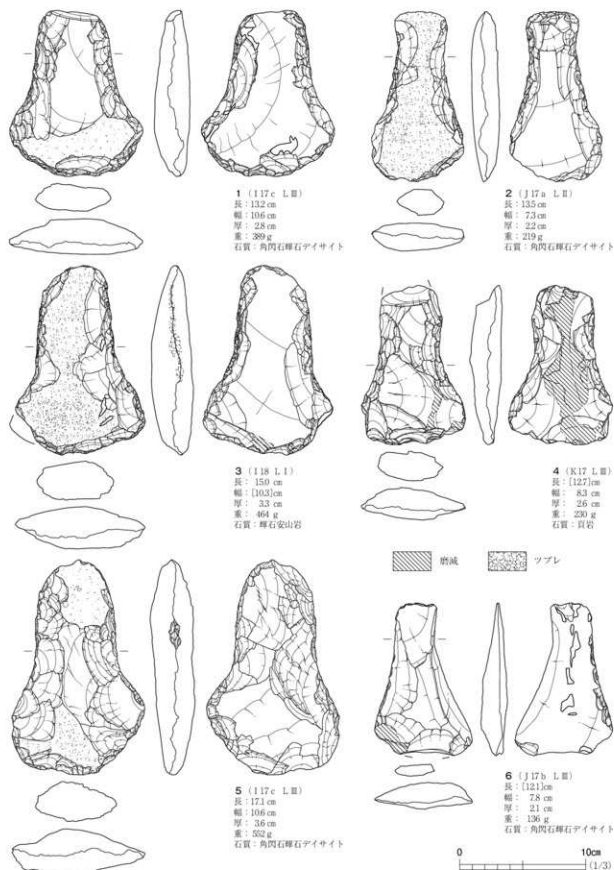


図251 遺構外出土遺物 (19)

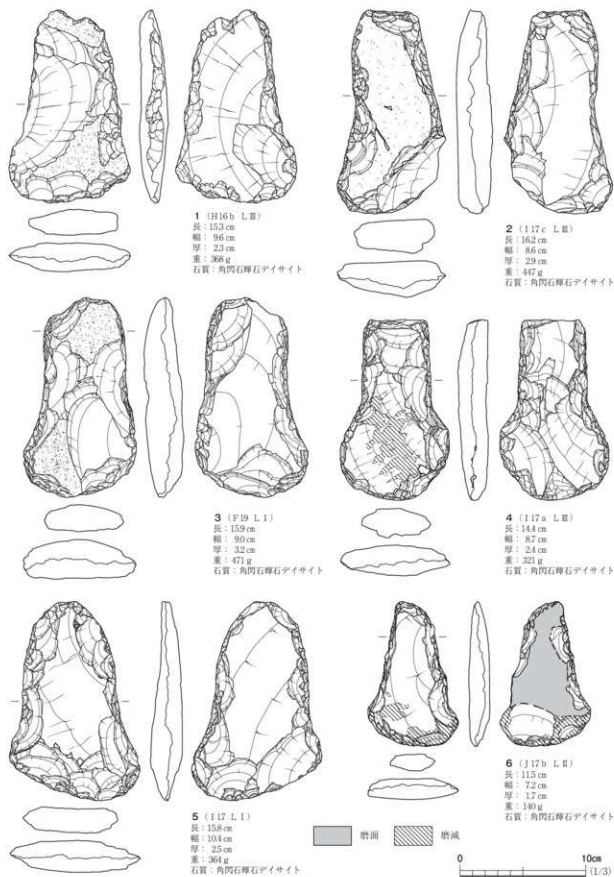


図252 遺構外出土遺物 (20)

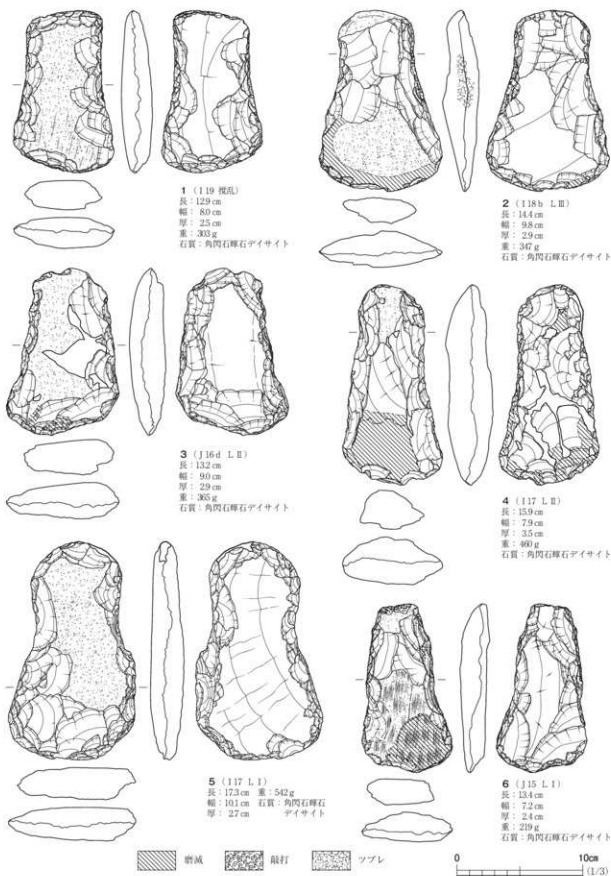


図253 遺構外出土遺物 (21)

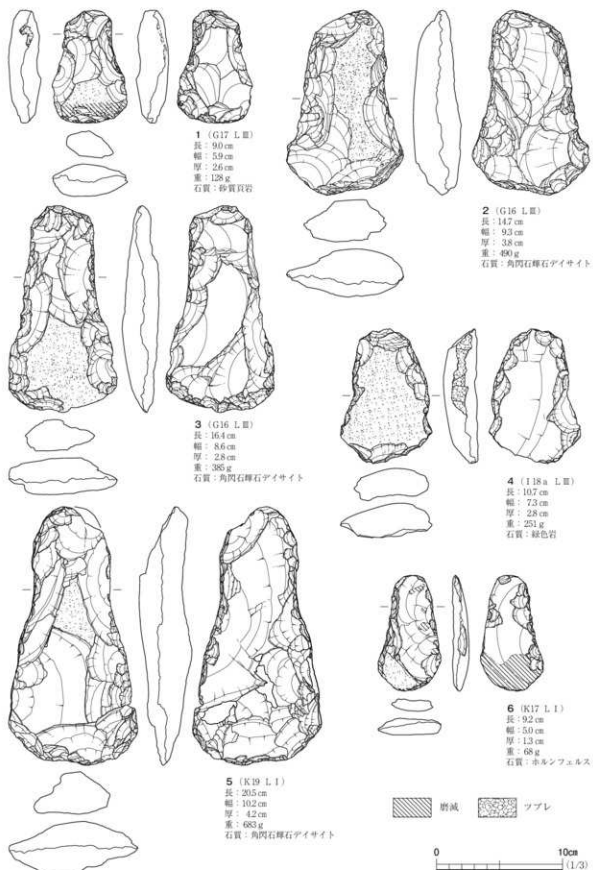


図254 遺構外出土遺物 (22)

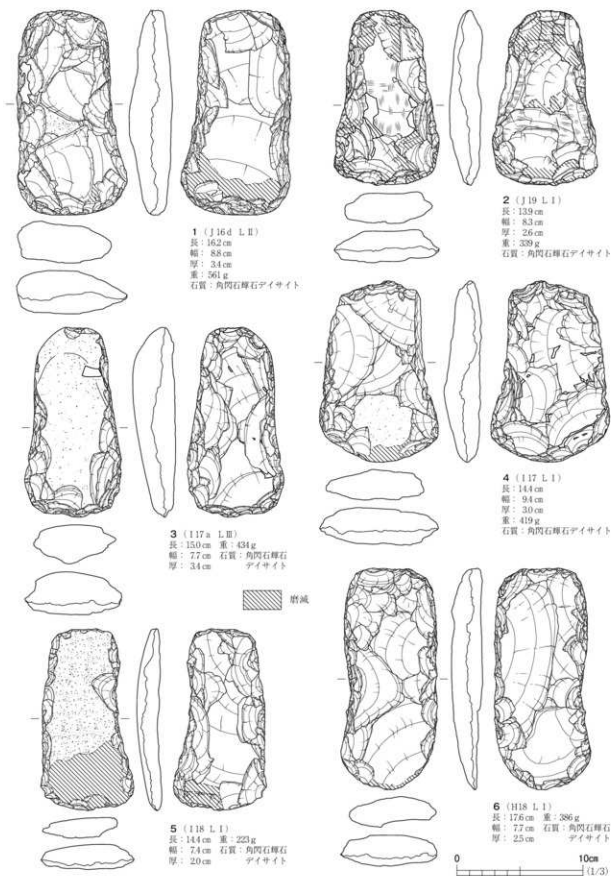


図255 遺構外出土遺物 (23)

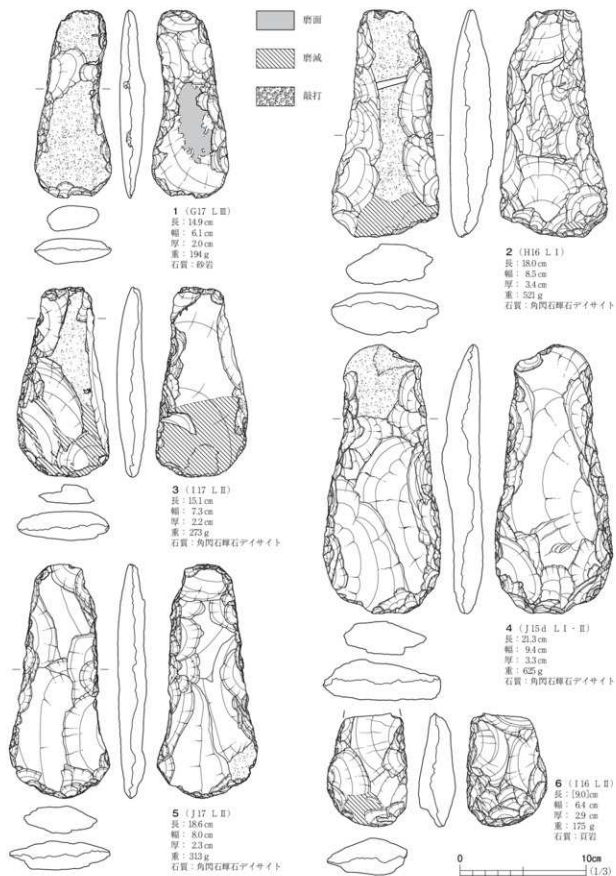


図256 遺構外出土遺物 (24)

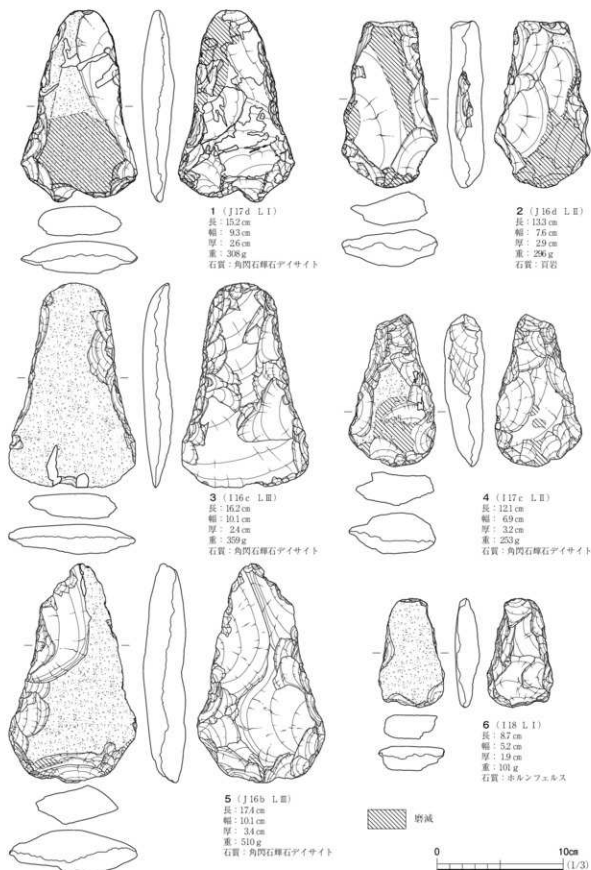


図257 遺構外出土遺物 (25)

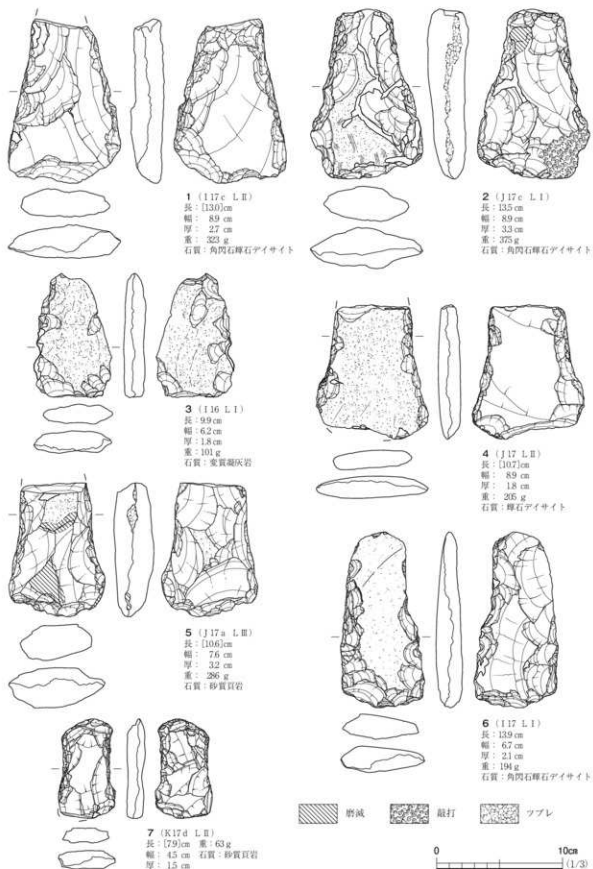


図258 遺構外出土遺物 (26)

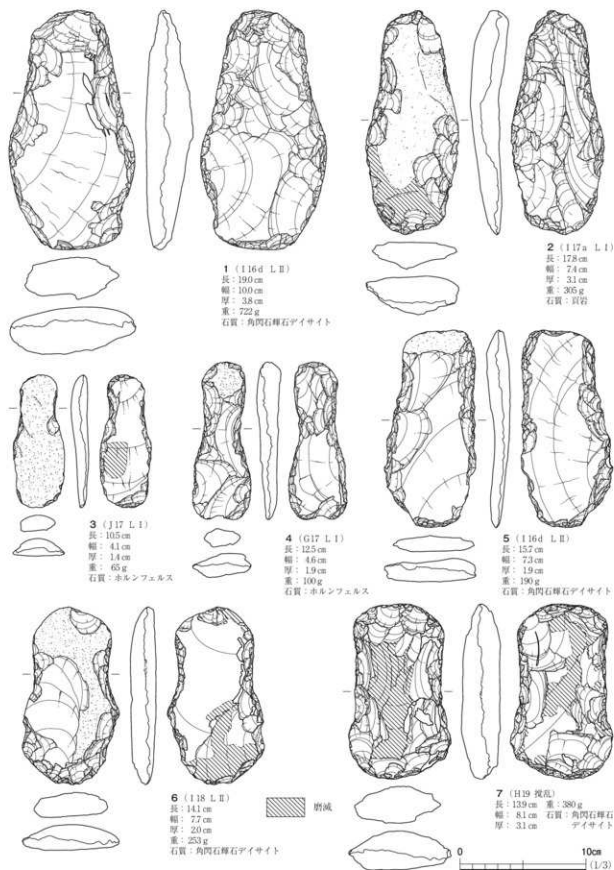


図259 遺構外出土遺物 (27)

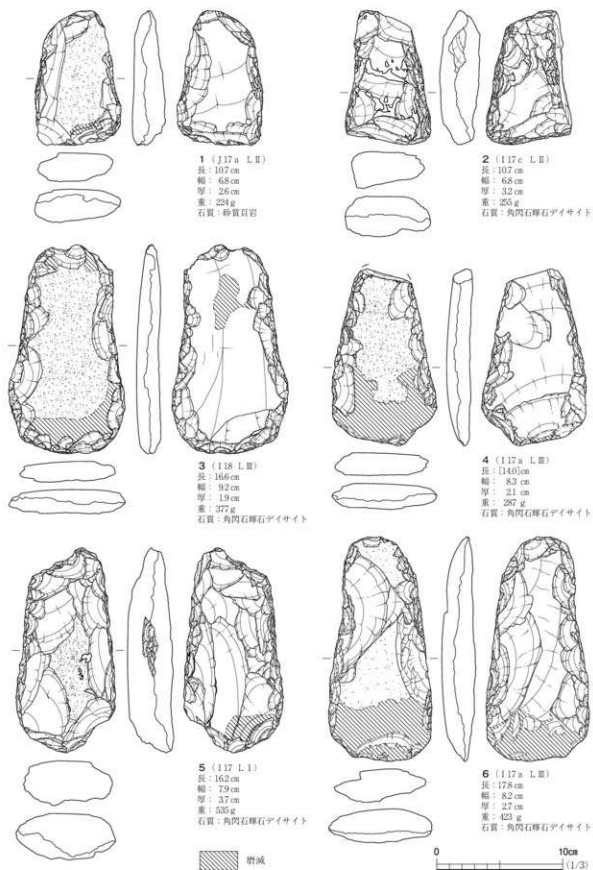


図260 遺構外出土遺物 (28)

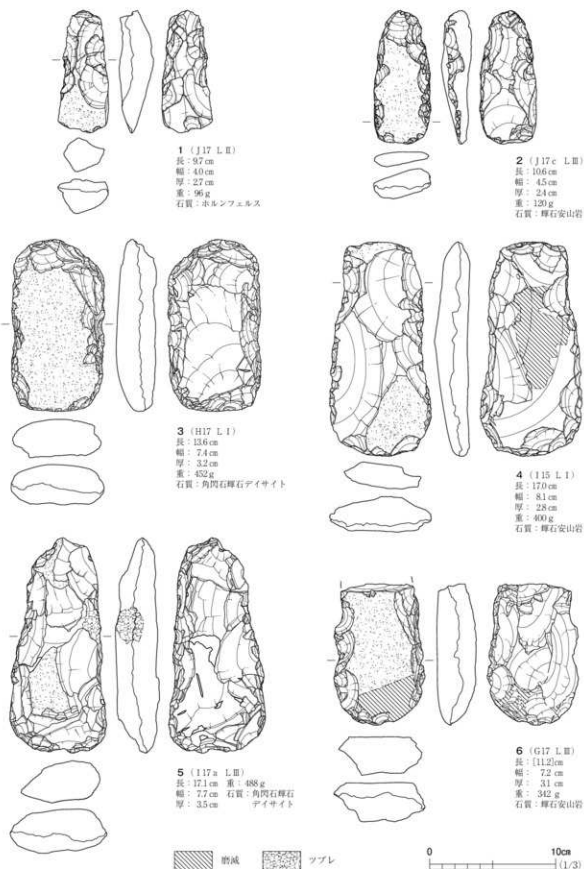


図261 遺構外出土遺物 (29)

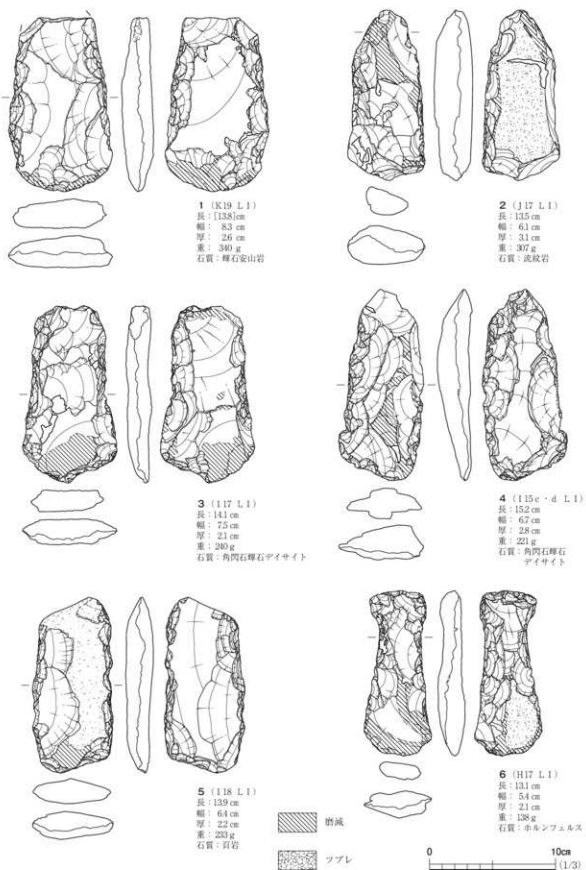


図262 遺構外出土遺物 (30)

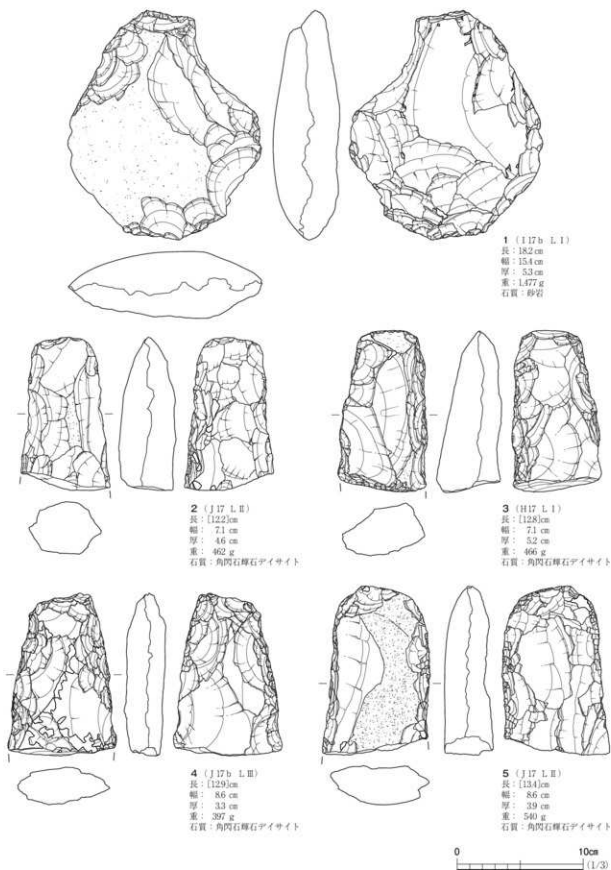


図263 遺構外出土遺物 (31)

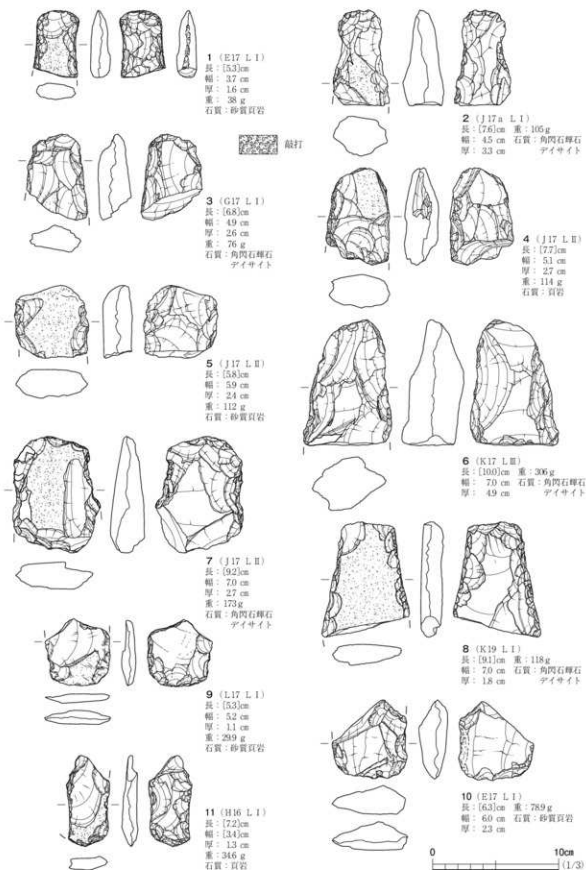


図264 遺構外出土遺物 (32)

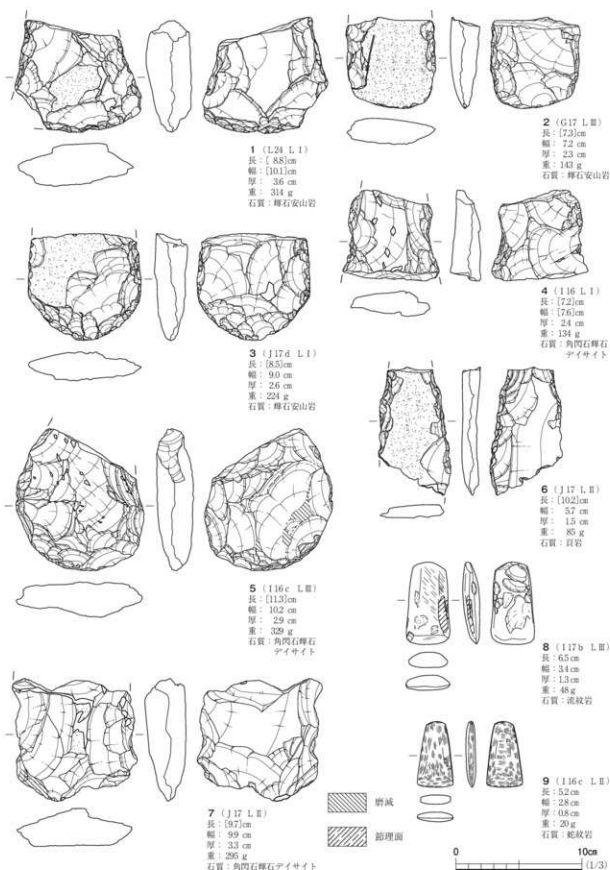


図265 遺構外出土遺物 (33)

削 器 本遺跡からは、水滴形の平面形をもつ石器が一定量出土した。図266-1～10に示したものである。他遺跡における出土例は、石鋸、石錐、削器などとして報告される例がある。本遺跡から出土したものについては、石鋸や石錐と同様に両面剥離によって縁辺が調整され、先端が尖るものの、石鋸としてはやや大きく、厚みがあり、石錐としては先端の形状が穿孔具としては機能しないと考えられるものが含まれることから、これらのいずれとも異なる器種と判断される。ただし、具体的な機能や用途は不明である。ここではこれを他遺跡の報告例にならって削器としたが、あくまで便宜的な呼称で、機能や用途については検討を要する。本遺跡出土例は、使用痕を明瞭に残すものは含まれていない。

不定形石器 図266-11～14は、両面に剥離調整が加えられ、石器として製作されたものであることは明らかであるものの、これまで述べてきたいずれの器種にも属さないものである。

器種不明 図266-15・16は、欠損のため器種が特定できないものである。

二次加工のある剥片 図267-1～9、図268-1～13、図269-1～10、図270-1～7は、二次加工のある剥片である。縦長の剥片を素材としたもの(図267-1～9、図268-1～4)、横長の剥片を素材としたもの(図268-5～12)、剥片に加えられた加工により素材剥片の形状が不明なもの(図268-13、図269-1～10、図270-1～7)がある。

加工礫 図270-8は、扁平な自然礫の縁辺の一部に剥離が加えられたものである。

横刃形石器 本遺跡から出土した剥片には、縁辺の一部に微細な剥離や磨滅、あるいはその両者がみられるものがある。このような剥片には平面形が楕円形のもものが一定量あり、何らかの用途に使用されたものとも考えられる。また、剥片の縁辺を整形して同様の形としたものも認められる。他遺跡の報告例では、横刃形石器、打製穂摘具などと呼ばれる場合があるもので、ここでは横刃形石器とした。これらを、図271-1～9、図272-1～5に示した。

縦長剥片と横長剥片の両者があり、背面に自然面を残すものが多い。図271-2・4、図272-3は、縁辺が整形されたものである。縁辺の一部に微細剥離がみられるものは、図271-1・6・9、図272-3、縁辺の一部が磨滅するものは、図271-2・4・7・8、微細剥離と磨滅の両者がみられるのは、図271-5、図272-1・2・4・5である。図271-8は、石鋸の破損したものの可能性があり、またそれを転用したものの可能性もある。

石 核 図273-1～5、図274-1～11、図275-1～8、図276-1～8、図277-1～10、図278-1～6は、石核である。

本遺跡出土の石核には、大まかにいくつかの形状がある。図273-1～5、図274-1～7は多面体のもの、図274-8～11、図275-1～8は断面形が三角形ないしこれに近いもの、図276-1～8は剥片を素材としてと思われるもの、図277-1～10、図278-1～6は上記の分類に当てはまらないものである。

環状石斧 図278-7は、環状石斧である。ごく一部が遺存するのみである。表裏とも丁寧に研磨されている。刃部の大部分は多数の小剥離によって欠損し、遺存する部分はわずかである。

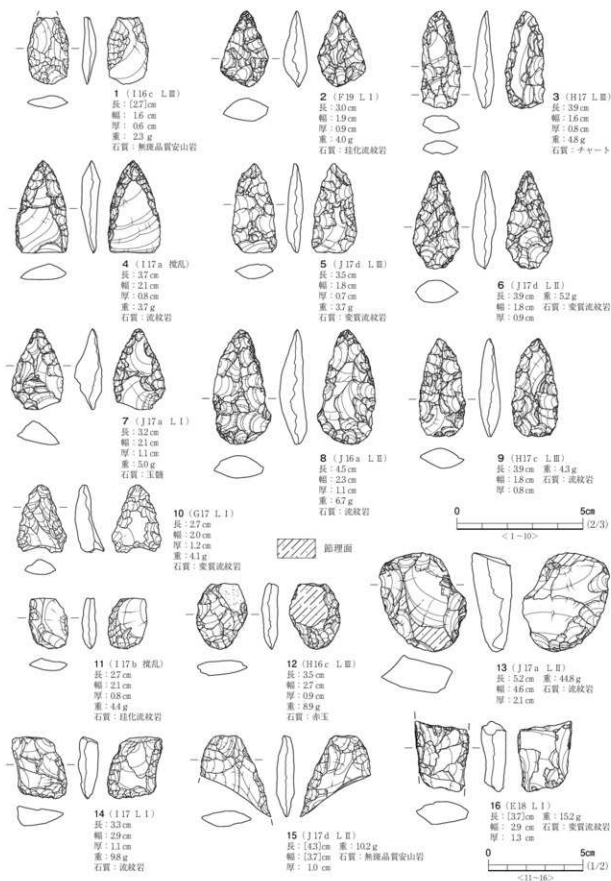


圖266 遺構外出土遺物 (34)

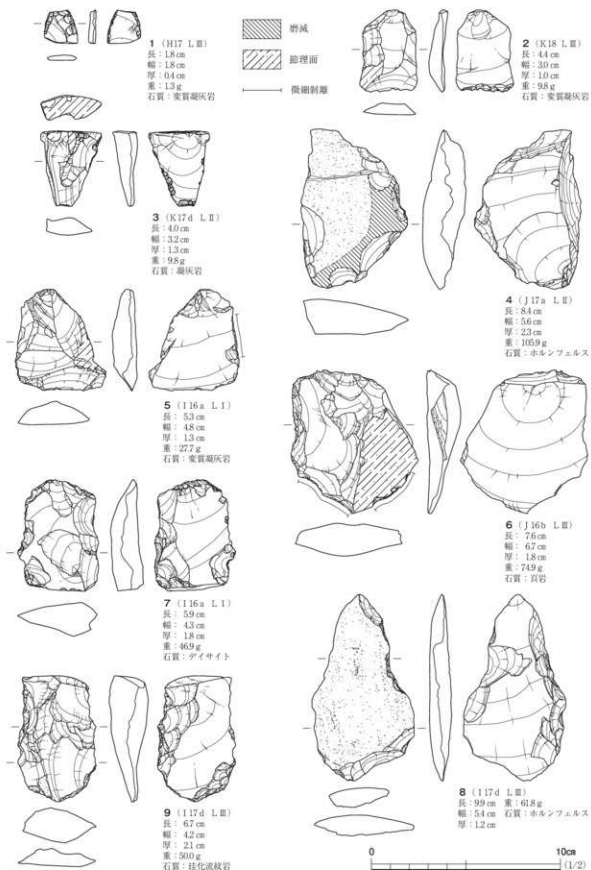


図267 遺構外出土遺物 (35)

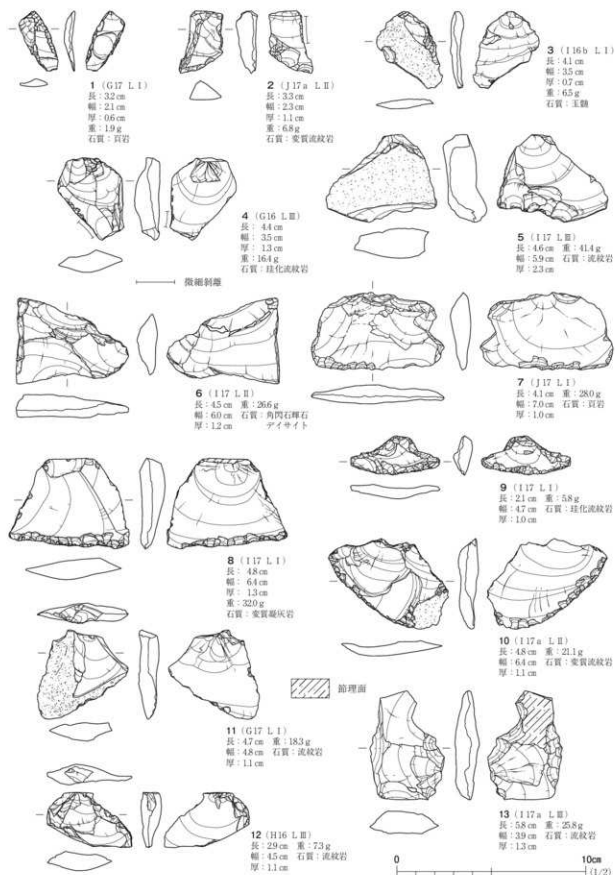


圖268 遺構外出土遺物 (36)

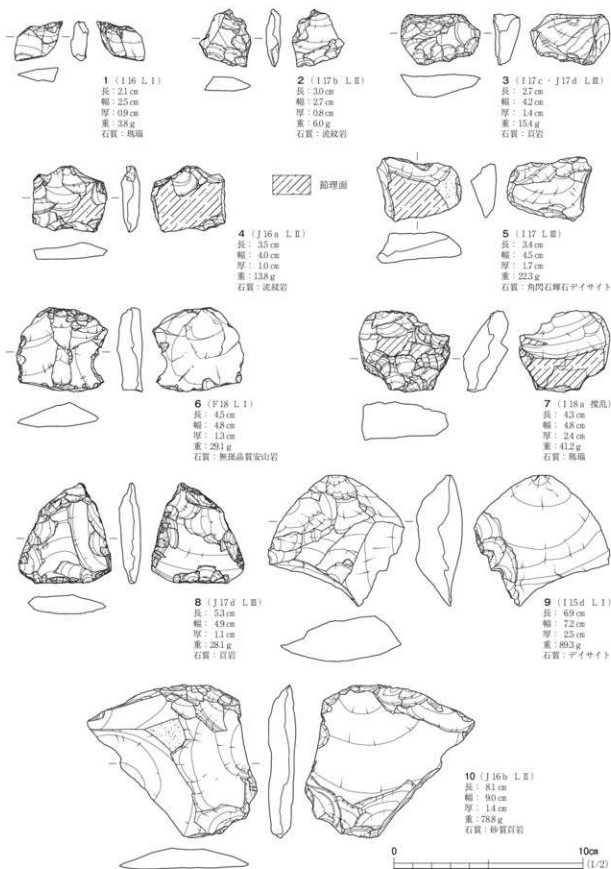


図269 遺構外出土遺物 (37)

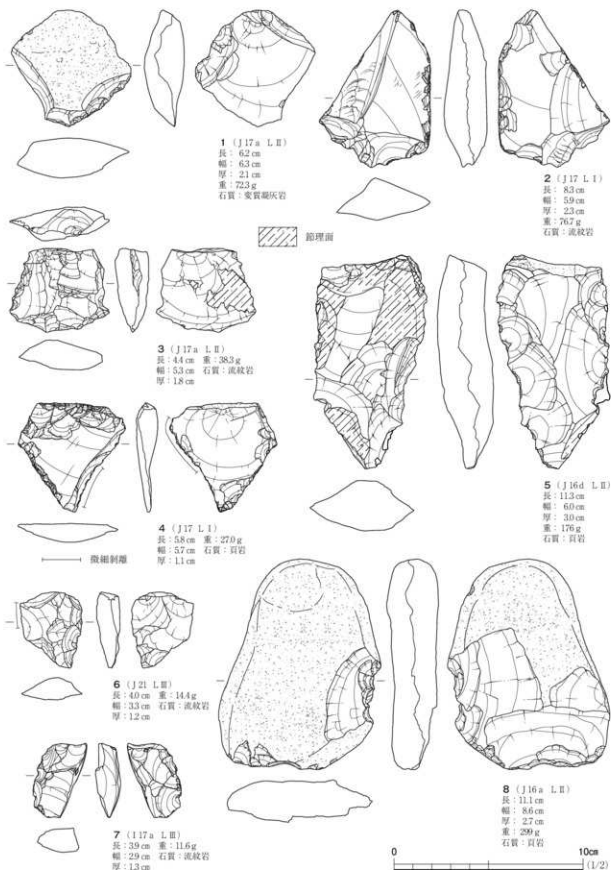


圖270 遺構外出土遺物 (38)

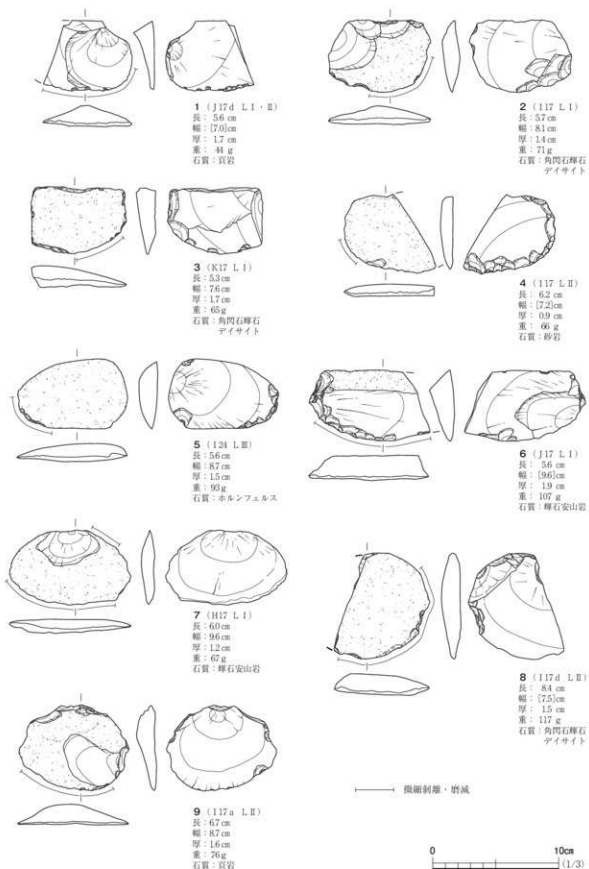


図271 遺構外出土遺物 (39)

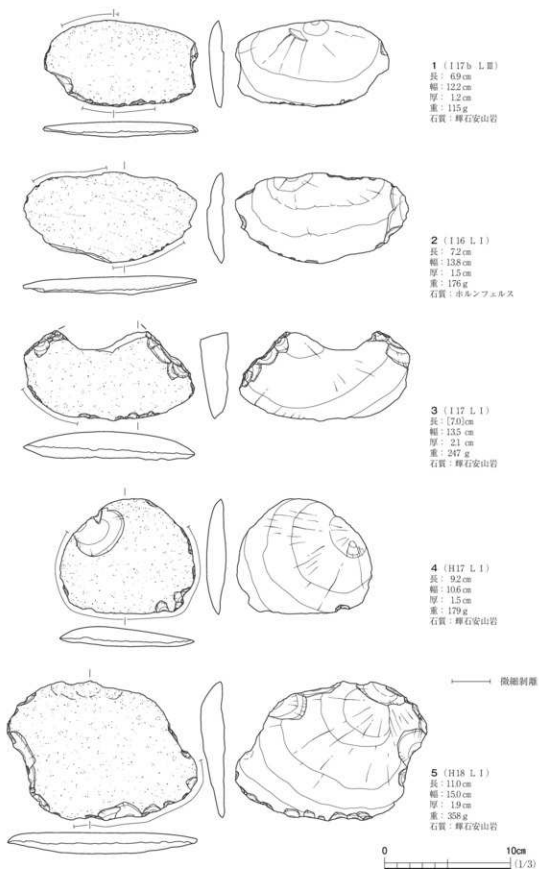


図272 遺構外出土遺物 (40)

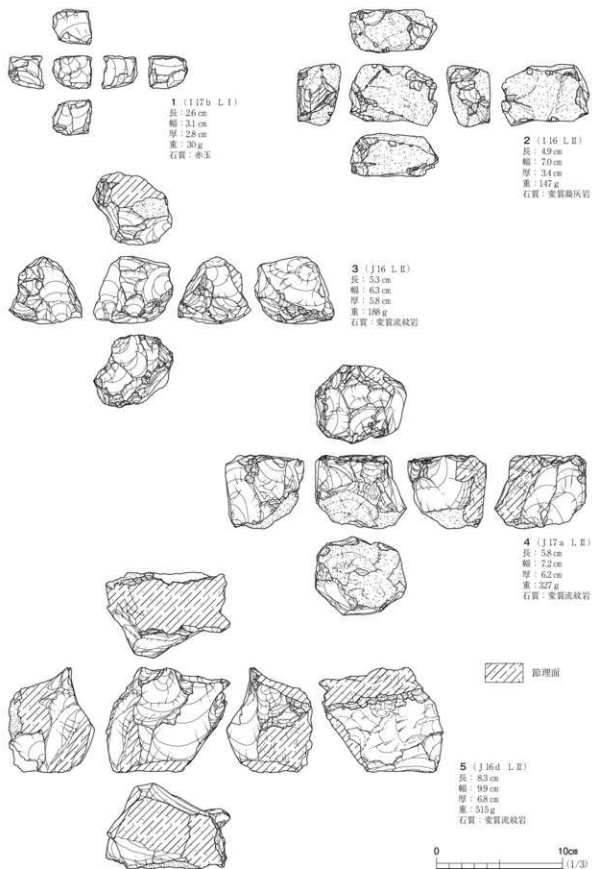


図273 遺構外出土遺物 (41)

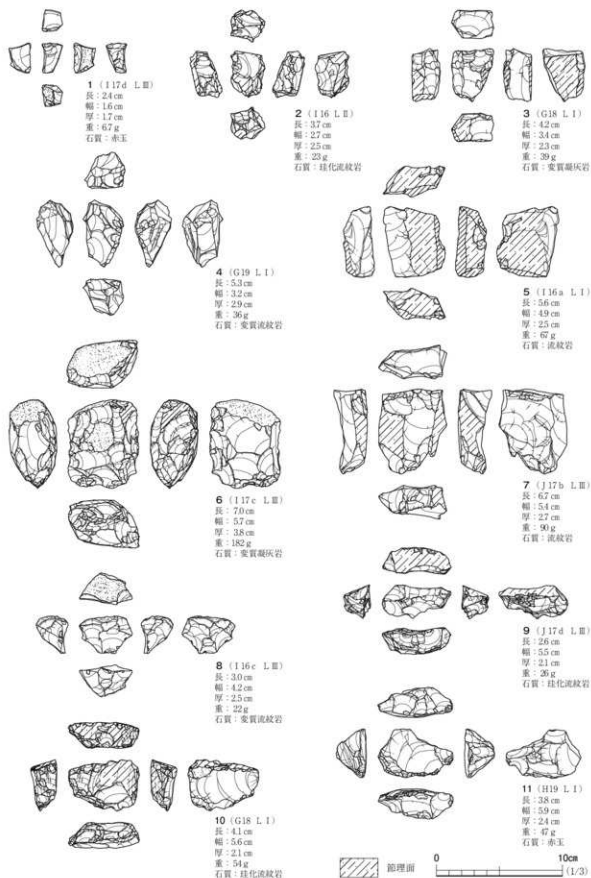


図274 遺構外出土遺物 (42)

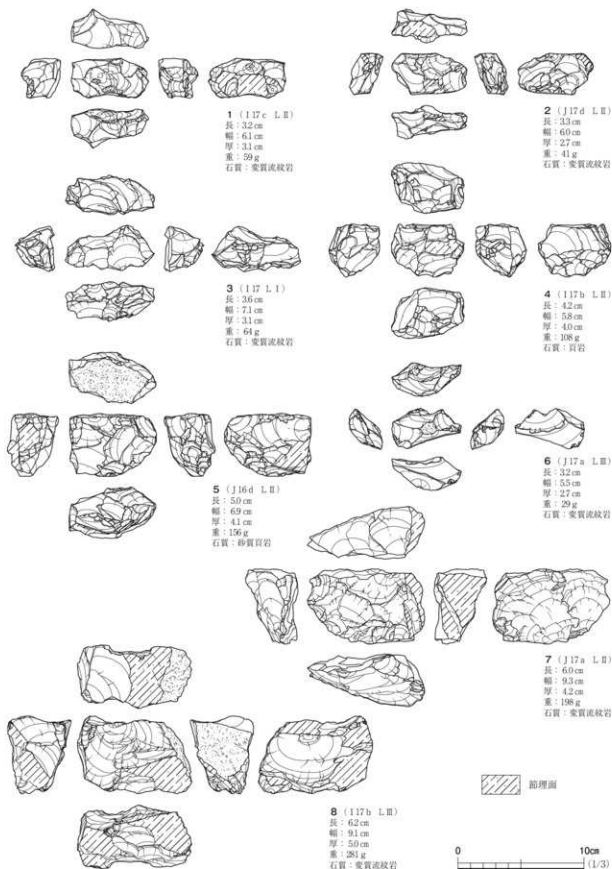


図275 遺構外出土遺物 (43)

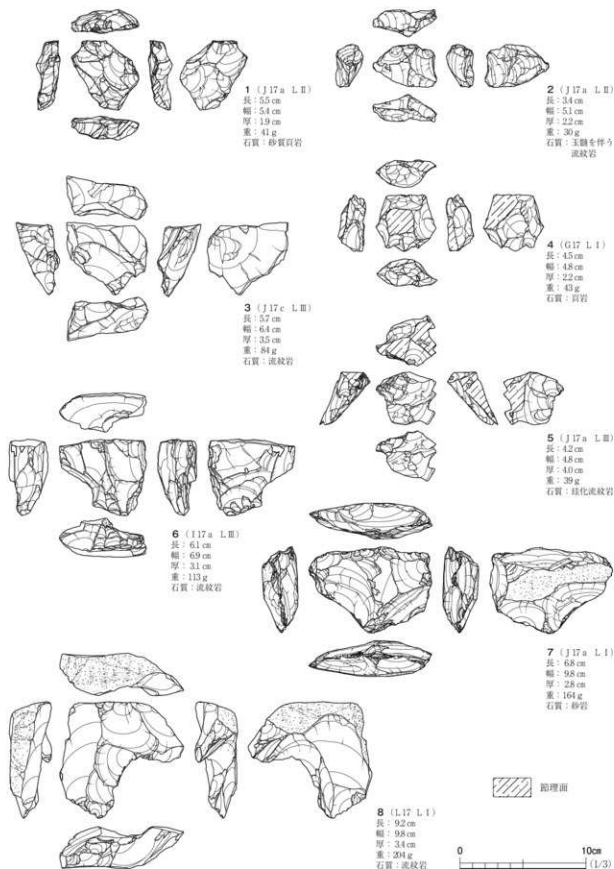


図276 遺構外出土遺物 (44)

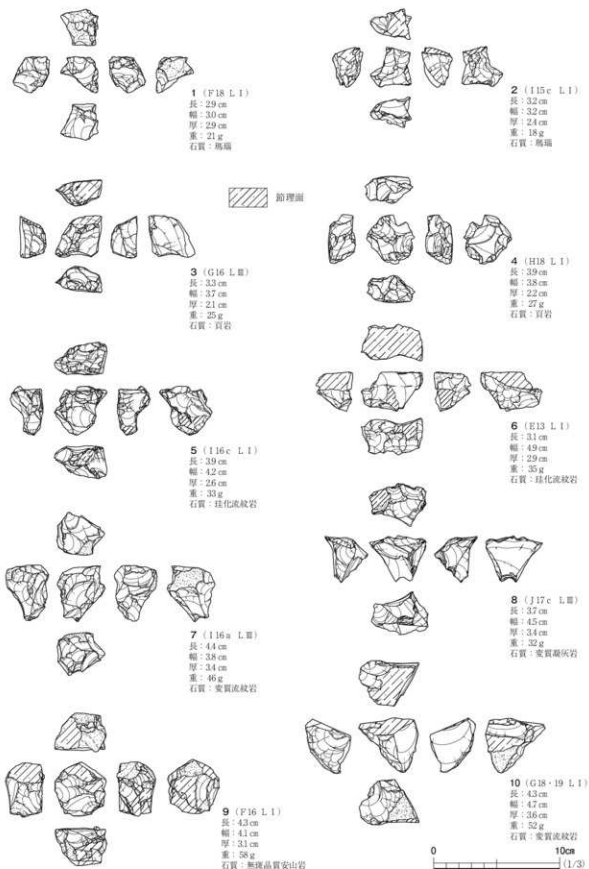


図277 遺構外出土遺物 (45)

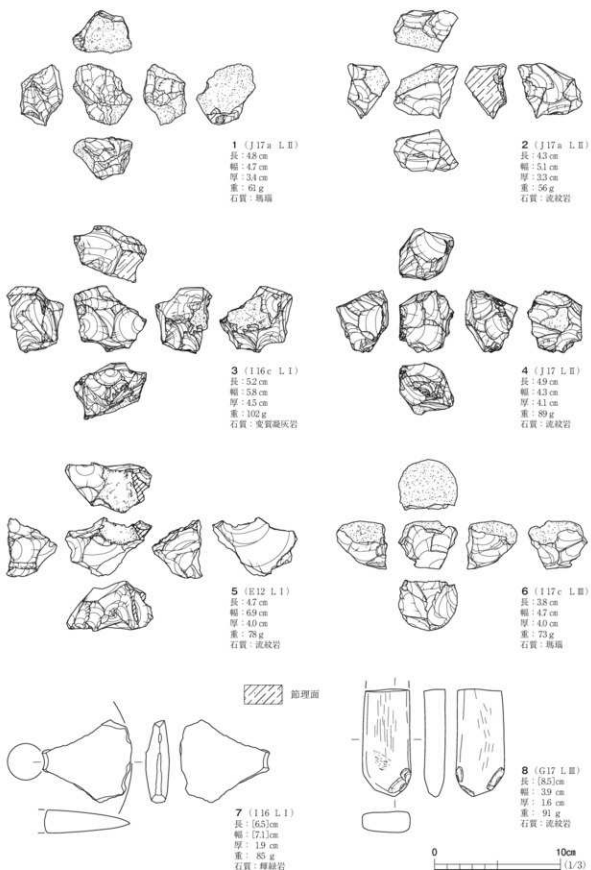


圖278 遺構外出土遺物 (46)

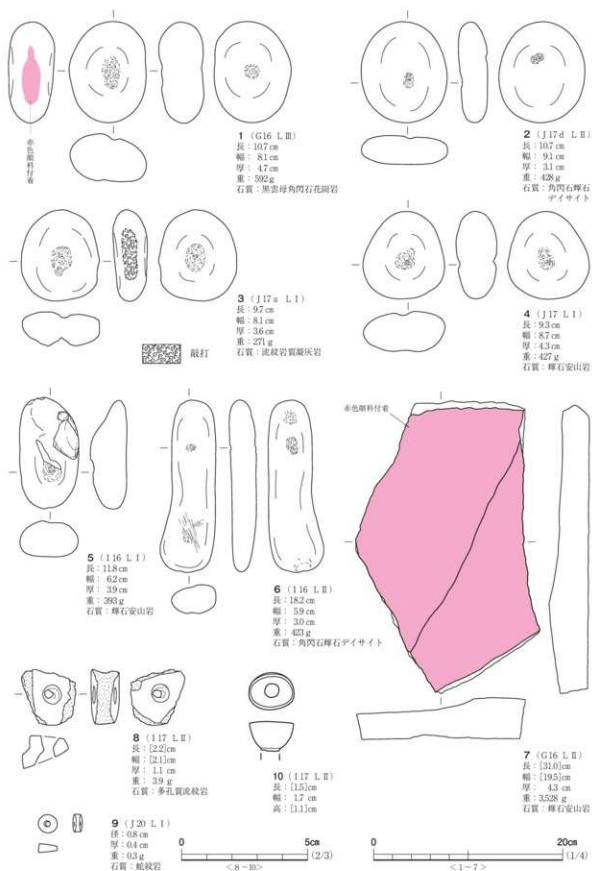


図279 遺構外出土遺物 (47)

砥石 図278-8は砥石である。中ほどで欠損する。長く扁平で断面がおおむね長方形の石の表裏面の中央部が砥面として使用される。砥面には石の長軸方向と一致する擦痕がみられる。

凹石 図279-1～6は凹石である。1～5は、やや扁平な自然礫の片面あるいは両面に凹みを有する。1は、側縁の1箇所に赤色顔料が付着する。赤色顔料は、分析によりベンガラ由来の可能性のあるものと判明した(付章第3節)。6は、細長くやや扁平な自然礫の両面に1・2箇所の凹みを有する。また、片面の端部に寄った位置に擦痕を有する。

石皿 図279-7は石皿である。別々に出土した2片が接合したものである。扁平な礫の片面の全面に赤色顔料が付着する。赤色顔料は、分析によりベンガラ由来の可能性のあるものと判明した(付章第3節)。礫の平面形は現状で五角形で、五辺のいずれもが破断面である。破断面には赤色顔料がまったく付着していないことから、赤色顔料が付着したのちに破断したと考えられる。また、赤色顔料が付着していない面に、3箇所の浅い凹みがある。この凹みは、いずれも破断した辺の中央にあってこの凹みの部分で破断していることから、破断した際の打撃痕の可能性のある。この石皿は、赤色顔料が付着しない側の面に打撃を加えて壊されたと考えられる。

穿孔のある石 図279-8は、穿孔のある石である。縁辺がすべて破断面で、表裏面は平滑であるものの、研磨は加えられていない。両面から穿孔されて貫通しているが、食い違いが大きい。貫通孔の壁には穿孔具の回転でできた横方向の筋が顕著に観察される。多孔質の石材が用いられ、何らかの石製品の一部である可能性などが考えられる。

平玉 図279-9は、平玉である。表裏面はそれぞれ平坦であるが平行せず、厚さは均等ではない。全面が丁寧に研磨される。色調は黒色で、白色の部分がわずかにみられる。

キセル 図279-10は、キセルの火皿である。小口から火皿の付け根までの管部分を欠損する。

管玉 図281-1～145は管玉である。ここに図示した145点のうち142点はI・Jの15～17グリッドに集中する。他の3点は、1点がC9グリッド、2点がG16グリッドで出土した。

管玉が集中して出土した地点の周辺は、発掘調査前の立木伐採と伐根作業によって広い範囲が攪乱を受けていた。この攪乱の掘り込みを開始してまもなく数点の管玉が出土したため、フルイがけを行うとともに出土した管玉の出土地点の座標を逐一記録した。この座標をもとに管玉が出土した地点をドットで示したものが、図280である。

この図から、管玉出土地点が2箇所にまとまる状況が看取される。以下では、これらを1・2号管玉集中地点とする。1号管玉集中地点は、I15グリッド南東部の、東西約15m、南北約25m、標高325.2～326.0mの範囲、2号管玉集中地点は、J15グリッド西部の、東西約12m、南北約20m、標高325.2～325.9mの範囲にあり、いずれの集中地点も北東-南西方向に長く延びる範囲に特に集中する。1号は範囲が広く出土点数が多いのに対し、2号は範囲が狭く出土点数が少ない。それぞれの出土点数は、どこまでを集中範囲に含めるかによるものの、1号が88点、2号が35点である。両者は互いに約1mの距離をへだてて位置し、これらの管玉を蔵する2基の遺構が隣接して存在した可能性が示唆される。

遺構外から出土した管玉は、直径によって二つに分類することができる。一つは、図281-1～11で、細型と呼ばれる径0.4cm以上のものである。もう一つは、同図12～145で、極細型と呼ばれる径0.2～0.3cmのものである。それぞれ長さには幅があり、細形は1.7～2.7cm、極細型は0.4～2.1cmである。極細型については長さの幅が大きい。片面穿孔と両面穿孔の両者があり、遺構外出土管玉145点のうち61点が両面穿孔と判断された。両面穿孔のものは、食い違いの段差の位置が片側に極端に寄っているものが多い。食い違いの段差はいずれも非常に小さく、一見すると片面穿孔のようにみえるものもある。図に表現することが難しく、食い違いの位置はそれぞれの管玉の横に「◀」で示した。いずれも丁寧に研磨され、荒割りの剥離面が残るものは少ない。管玉の長軸方向に延びるきわめて緩やかな稜線が観察されるものがある。色調は、『標準土色帖』に掲載がないため客観的な表現ができないものの、1～142が濃緑色から浅緑色、143～145が赤色で、石材はそれぞれ碧玉・変質凝灰岩と赤玉に対応する。

1号管玉集中地点では、細型8点、極細型82点(極細型のうち2点が赤玉製)、同2号集中地点では、極細型32点(うち1点が赤玉製)が出土した。

(青 山)

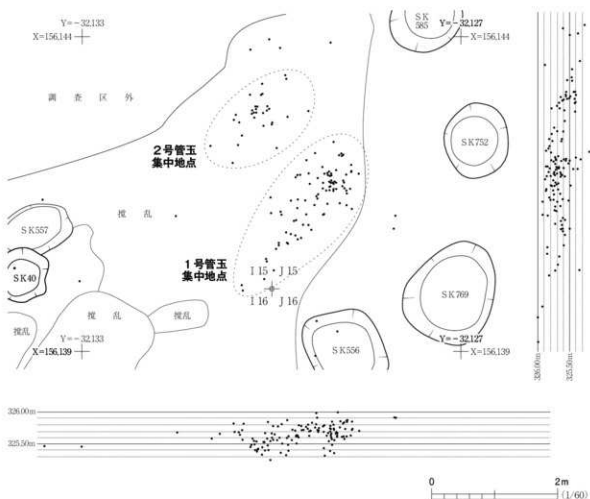


図280 管玉出土状況

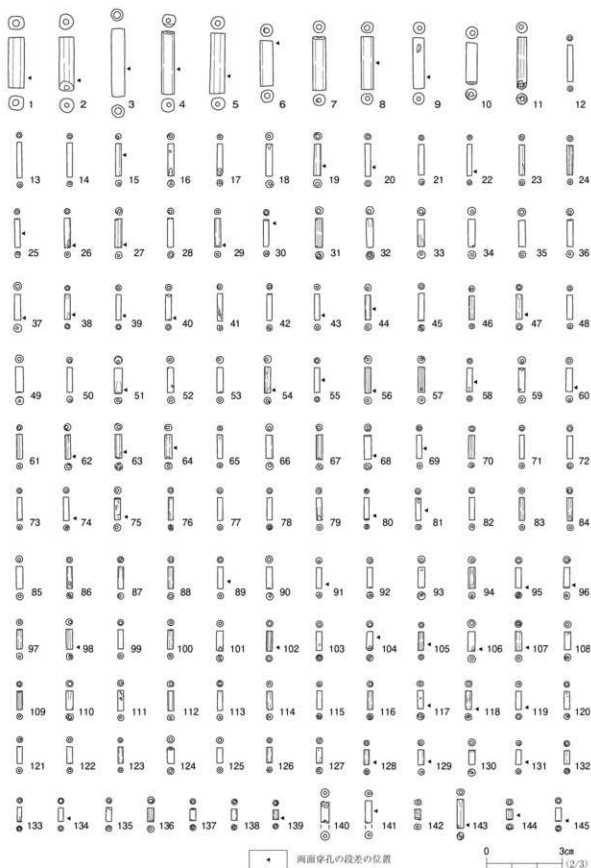


図281 遺構外出土遺物 (48)

表5 遺構外出土管玉一覧

図281 図1%	長さ (mm)	径 (mm)	重さ (g)	出土位置	集中 地点	石質
1	20	0.62	1.67	J 9 L 1	1	雲母陶片
2	23	0.60	1.84	J 15 L 1	1	雲母陶片
3	27	0.55	1.40	J 15 d 残片	1	雲母陶片
4	25	0.50	1.36	J 15 d 残片	1	雲母陶片
5	24	0.60	1.40	J 15 d L 1	1	雲母陶片
6	1.8	0.50	0.89	J 15 d 残片	1	雲母陶片
7	21	0.50	0.96	J 17 L 2	1	雲母陶片
8	21	0.50	0.91	J 15 d 残片	1	雲母陶片
9	20	0.45	0.78	J 15 c 残片	1	雲母陶片
10	17	0.45	0.82	J 15 d 残片	1	雲母陶片
11	23	0.40	0.55	G 16 L 1	1	雲母陶片
12	15	0.25	0.15	J 15 c 残片	2	雲母
13	15	0.20	0.11	J 15 c 残片	2	雲母陶片
14	14	0.25	0.30	J 15 c 残片	1	雲母陶片
15	13	0.25	0.12	J 15 c 残片	2	雲母陶片
16	13	0.25	0.18	J 15 d 残片	1	雲母
17	13	0.25	0.11	J 15 c 残片	2	雲母陶片
18	13	0.25	0.14	J 15 d 残片	1	雲母
19	13	0.25	0.16	J 15 d 残片	2	雲母陶片
20	13	0.20	0.10	J 15 d 残片	1	雲母
21	12	0.25	0.14	J 15 d 残片	1	雲母
22	13	0.20	0.09	G 16 残片	1	雲母陶片
23	12	0.25	0.11	J 15 d L 1	1	雲母陶片
24	12	0.25	0.12	J 15 d L 1	1	雲母陶片
25	12	0.25	0.11	J 15 c 残片	2	雲母陶片
26	12	0.25	0.12	J 15 d 残片	1	雲母
27	12	0.25	0.17	J 15 d 残片	1	雲母
28	12	0.25	0.13	J 16 a L 2	1	雲母陶片
29	12	0.25	0.17	J 16 a 残片	1	雲母陶片
30	11	0.25	0.11	J 15 d 残片	1	雲母
31	12	0.30	0.16	J 16 L 2	1	雲母
32	12	0.30	0.14	J 15 d 残片	2	雲母陶片
33	11	0.20	0.16	J 15 d 残片	1	雲母陶片
34	11	0.30	0.15	J 15 c 残片	1	雲母陶片
35	11	0.30	0.12	J 15 d 残片	1	雲母陶片
36	11	0.25	0.11	J 15 d L 1	1	雲母陶片
37	11	0.30	0.13	J 15 c 残片	1	雲母陶片
38	10	0.20	0.10	J 15 c 残片	2	雲母陶片
39	10	0.20	0.08	J 15 c 残片	2	雲母陶片
40	11	0.20	0.12	J 15 d 残片	1	雲母
41	11	0.20	0.12	J 15 d L 1	1	雲母陶片
42	11	0.20	0.11	J 15 d L 1	1	雲母陶片
43	11	0.20	0.10	J 15 d 残片	1	雲母陶片
44	10	0.25	0.14	J 15 d 残片	1	雲母陶片
45	11	0.25	0.12	J 16 L 1	1	雲母陶片
46	10	0.25	0.08	J 15 d 残片	1	雲母
47	10	0.25	0.13	J 15 d 残片	1	雲母
48	10	0.20	0.10	J 16 b 残片	1	雲母陶片
49	11	0.30	0.15	J 15 d 残片	1	雲母陶片
50	10	0.25	0.10	J 16 a L 1	1	雲母陶片
51	10	0.30	0.15	J 15 d 残片	1	雲母
52	10	0.25	0.11	J 15 d 残片	1	雲母
53	10	0.25	0.12	J 15 d 残片	1	雲母陶片
54	11	0.25	0.12	J 15 d L 1	1	雲母
55	10	0.20	0.09	J 15 d L 1	1	雲母陶片
56	10	0.25	0.09	J 15 c 残片	2	雲母陶片
57	10	0.25	0.10	J 17 L 1	1	雲母
58	10	0.20	0.09	J 15 d 残片	1	雲母陶片
59	10	0.25	0.11	J 15 d 残片	1	雲母陶片
60	10	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母陶片
61	10	0.25	0.09	J 15 c L 1	1	雲母陶片
62	10	0.25	0.13	J 15 d L 1	1	雲母
63	10	0.25	0.14	J 15 d 残片	1	雲母陶片
64	10	0.20	0.13	J 15 d L 1	1	雲母陶片
65	10	0.25	0.09	J 15 d L 1	1	雲母
66	10	0.25	0.14	J 15 d 残片	1	雲母陶片
67	10	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母
68	10	0.25	0.14	J 15 d L 1	1	雲母
69	10	0.20	0.10	J 15 d L 1	1	雲母陶片
70	09	0.25	0.09	J 15 d 残片	1	雲母陶片
71	10	0.20	0.08	J 15 c 残片	2	雲母陶片
72	09	0.25	0.07	J 15 c 残片	2	雲母陶片
73	09	0.20	0.06	J 15 d L 1	1	雲母
74	10	0.20	0.12	J 15 d L 1	1	雲母陶片
75	09	0.25	0.09	J 15 c 残片	1	雲母
76	09	0.20	0.09	J 15 d L 1	1	雲母陶片
77	09	0.25	0.11	J 15 c 残片	1	雲母陶片
78	09	0.20	0.09	J 15 d 残片	1	雲母陶片
79	09	0.20	0.10	J 15 c 残片	2	雲母陶片
80	09	0.20	0.08	J 15 d L 1	2	雲母
81	09	0.20	0.09	J 15 d 残片	1	雲母陶片
82	09	0.20	0.08	J 15 c 残片	2	雲母
83	09	0.20	0.09	J 15 d 残片	1	雲母陶片
84	09	0.20	0.10	J 15 c 残片	1	雲母陶片
85	09	0.25	0.11	J 15 c 残片	2	雲母陶片
86	09	0.25	0.08	J 15 c 残片	2	雲母
87	09	0.25	0.10	J 15 c 残片	2	雲母陶片
88	09	0.25	0.08	J 15 c 残片	2	雲母陶片
89	09	0.20	0.09	J 15 c 残片	2	雲母陶片
90	09	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母陶片
91	09	0.20	0.08	J 15 d 残片	1	雲母
92	09	0.25	0.11	J 15 d L 1	1	雲母陶片
93	09	0.30	0.11	J 15 d 残片	1	雲母陶片
94	09	0.25	0.12	J 16 a 残片	1	雲母
95	09	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母陶片
96	09	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母
97	08	0.25	0.11	J 15 c 残片	2	雲母
98	08	0.25	0.11	J 17 b L 1	1	雲母陶片
99	08	0.25	0.07	J 15 d 残片	1	雲母陶片
100	08	0.25	0.07	J 15 c 残片	2	雲母陶片
101	08	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母陶片
102	08	0.25	0.08	J 15 d 残片	1	雲母陶片
103	08	0.25	0.08	J 15 d 残片	1	雲母陶片
104	08	0.25	0.08	J 15 c 残片	2	雲母
105	08	0.20	0.06	J 15 d 残片	1	雲母陶片
106	08	0.30	0.11	J 15 d 残片	1	雲母陶片
107	08	0.25	0.09	J 15 d 残片	2	雲母陶片
108	07	0.25	0.08	J 15 c 残片	2	雲母陶片
109	08	0.20	0.07	J 15 d 残片	1	雲母陶片
110	08	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母
111	08	0.25	0.09	J 15 d 残片	1	雲母陶片
112	08	0.25	0.09	J 15 c 残片	2	雲母
113	08	0.20	0.07	J 15 d L 1	1	雲母陶片
114	08	0.20	0.07	J 15 d 残片	1	雲母陶片
115	08	0.20	0.07	J 15 c 残片	2	雲母
116	08	0.25	0.07	J 15 d L 1	1	雲母陶片
117	08	0.25	0.09	J 15 d L 1	1	雲母
118	08	0.25	0.10	J 15 c 残片	1	雲母
119	07	0.25	0.08	J 15 d 残片	1	雲母
120	08	0.20	0.06	J 15 d L 1	1	雲母
121	07	0.25	0.06	J 15 d 残片	1	雲母陶片
122	07	0.20	0.06	J 15 d 残片	1	雲母
123	07	0.20	0.05	J 15 d 残片	1	雲母
124	07	0.30	0.08	J 15 d L 1	2	雲母陶片
125	06	0.25	0.06	J 15 c 残片	2	雲母陶片
126	07	0.20	0.06	J 15 d L 1	1	雲母
127	06	0.25	0.07	J 15 d 残片	1	雲母陶片
128	06	0.20	0.05	J 15 d 残片	1	雲母陶片
129	06	0.25	0.06	J 15 d 残片	1	雲母
130	06	0.25	0.09	J 15 d 残片	1	雲母
131	06	0.20	0.04	J 15 c 残片	1	雲母
132	06	0.20	0.04	J 15 d 残片	2	雲母陶片
133	06	0.20	0.05	J 15 d L 1	1	雲母陶片
134	06	0.20	0.04	J 15 d 残片	1	雲母陶片
135	06	0.25	0.06	J 15 d 残片	1	雲母
136	06	0.25	0.05	J 15 c 残片	1	雲母
137	05	0.20	0.04	J 15 c 残片	2	雲母陶片
138	05	0.20	0.04	J 15 d L 1	1	雲母
139	04	0.20	0.03	J 15 d 残片	1	雲母
140	[09]	0.30	0.10	J 15 d 残片	1	雲母
141	[10]	0.25	0.10	J 15 d 残片	1	雲母
142	05	0.25	0.03	J 15 d 残片	1	雲母
143	12	0.30	0.17	J 16 a 残片	1	赤玉
144	05	0.25	0.05	J 15 d 残片	2	赤玉
145	06	0.25	0.05	J 15 d 残片	1	赤玉

[] : 遺存物

集中地点: 1号墳集集中地点

集中地点: 2号墳集集中地点

第2章 総 括

第1節 遺 物

中西部遺跡で出土した遺物は、縄文時代後期、縄文時代晩期中葉～弥生時代中期末葉、弥生時代後・終末期、平安時代、近世のものである。もっとも多く出土した遺物は土器で、次いで石器・剥片が多い。他に、石製品(管玉など)、金属製品(刀子、キセル)がある。

1. 土 器

(1) 縄文時代後期

縄文時代後期の遺物は少量である。1号配石遺構出土の土器(図217-1～5)と2号土器埋設遺構(図219-2)の他、遺構外から出土した土器(図233-1～10)がある。遺構外出土の土器は、1号配石遺構の周辺、調査区の東部と南部で少量が出土した。いずれも後期初頭～前葉に位置づけられるもので、会津地方における類例は、三島町稲荷原遺跡(小柴2001)、柳津町石生前遺跡(佐藤他1991)、会津坂下町経塚遺跡(吉田他1992)、下郷町下平遺跡(鈴木他2013)、喜多方市長者屋敷遺跡(芳賀他1983)、会津若松市屋敷遺跡(木本他1991)などにある。

この他、加曾利B式の口縁部片が179号土坑から1点出土している(図181-13)。

(2) 縄文時代晩期中葉～弥生時代中期後葉

出土土器の大半がこの時期のものである。多くは破片の状態出土し、完形品は少ない。

ここでは、会津地方と周辺地域の土器編年(中村1976など)を参照しながら本遺跡出土土器を整理し、遺跡の変遷過程を検討するための時間軸とする。

土器の変遷 福島県域では、縄文時代晩期は大洞諸型式(本遺跡ではこのうち大洞C2式、同A式、同A'式が出土、大洞C2式、同A式はごく少量)、弥生時代前・中期は、御代田式、西麻生式、今和泉式、南御山2式、ニツ釜式、川原町口式、御山村下式の編年が用いられることが多い。ただし、基準資料が採集品であったり正式報告が未刊行であったりするなど、本遺跡出土土器との比較検討が難しい場合がある。型式内容の重複、住居跡や再葬墓などの一括資料中に複数の型式が含まれる例があるなどの指摘もある(大竹1985)。

本遺跡出土土器は一遺構から各時期の土器が破片の状態混在して出土する例が多く、一括といえる資料は少ない。ここでは、縄文時代晩期後・末葉(大洞A式、A'式)～弥生時代中期の土器の変遷を、おもに文様の検討から次の①～③に分類する(図282～285)。

- ① 工字文の掘り去り部が大きいもの。浮線文技法がみられる。大洞A式に相当する土器群。
- ② 工字文に小掘り去り部がみられる。大洞A'式に相当する土器群。
- ③ 小掘り去り部が描かれるものが減少し、かわって縦の短い沈線が配置されるか、折り返しに

よる工字文(流水工字文)が描かれるもの。

- ④ 縄文を施したのち工字文を描き、一部を磨り消すもの。工字文を多段に描くものが増加する。
- ⑤ 工字文から副線がなくなり、菱形と三角形を組み合わせた構図の文様が描かれるもの。磨消縄文手法が定着し、無文部を帯状とするものが現れる。
- ⑥ 菱形や三角形の内部に舌状部を突出させる(ヒトデ文)、菱形や三角形を左右に分割する、磨消縄文の施文部と無文部の反転(ネガポジ反転)、モチーフの端部どうしを連結する、菱形や三角形の角を落とす、モチーフを入れ子に描く、などの手法により文様が複雑化・多様化するもの。
- ⑦ 前段階からの複雑化と多様化により、菱形と三角形の組み合わせをもとにした新たな文様モチーフが派生する。本遺跡には、横長の長方形を半単位ずらして多段に配置するもの、左右対称に配置される手バサミ形のモチーフ、平行四辺形がみられる。この他、角を落とす手法がモチーフを結ぶブリッジへ変化したものがみられる。カナムグラの擬縄文が現れる。
- ⑧ 舌状突出部(ヒトデ文)の先端がJ字形やL字形に屈曲する、あるいは枝分かれする、モチーフを入れ子に描くことが進行した多重化、モチーフの各所へのブリッジの配置、ネガポジ反転の常態化、などによって文様の複雑化が進む。
- ⑨ 舌状突出部の屈曲の度合いの進行による渦文の成立、モチーフの多重化の進行による重四角文・重三角文・同心円文の成立など、派生した文様モチーフそれぞれの変遷が進む。細い沈線で矩形を描くものが現れ、細縄文が出現する。

- ⑩ 交互ミガキ手法が普及し、磨消縄文手法が急減する。各文様モチーフの多重化・複雑化がさらに進み、文様の間隙に小モチーフを配置するものが増加する。附加条縄文が普遍化する。

- ⑪ 二本同時施文具で文様を描くことが始まり、多重化した文様を描く線が等間隔でなくなる。

以上①～⑪の分類は、土器を構成する属性のうち文様モチーフの変遷を跡づけたものである。器種組成、器形、文様構成、縄文など、土器群を構成する属性の総合的な検討は本遺跡出土資料のみでは難しい。ここでは以上を製作の同時性を示す分類単位とし、時期を推し量る際の指標とする。

これらと当地域における各型式のタイプサイト出土土器群との対応を示すと次のようになる。

御代田遺跡出土資料(目黒1962)	②③④ ⑥⑦
西麻生遺跡出土資料(中村他1980)	③④⑤⑥ ⑧ ⑩⑪
今和泉遺跡出土資料(小滝1960)	③④⑤⑥⑦
南御山遺跡出土資料(杉原1961)	⑥⑦ ⑨⑩
二ツ釜遺跡出土資料(中村1959)	⑩
川原町口遺跡出土資料(中村・穴沢1958)	⑩⑪

二ツ釜遺跡を除く各資料に複数の段階が含まれ、それぞれに時間幅と重複があることがみて取れる。このことは、縄文時代晩期～弥生時代中期の遺跡の多くが複数の型式にわたって継続することも示している。当該期は遺跡の継続期間が長い場合が多く、一遺跡から出土する土器が単一の型式にまとまる例は少ないと考えられる。

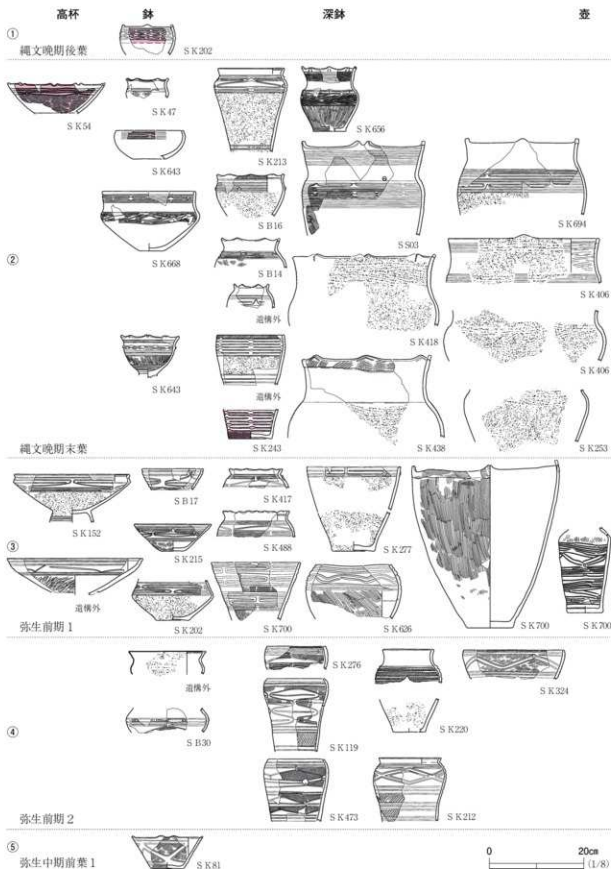


図282 土器の変遷 (1)

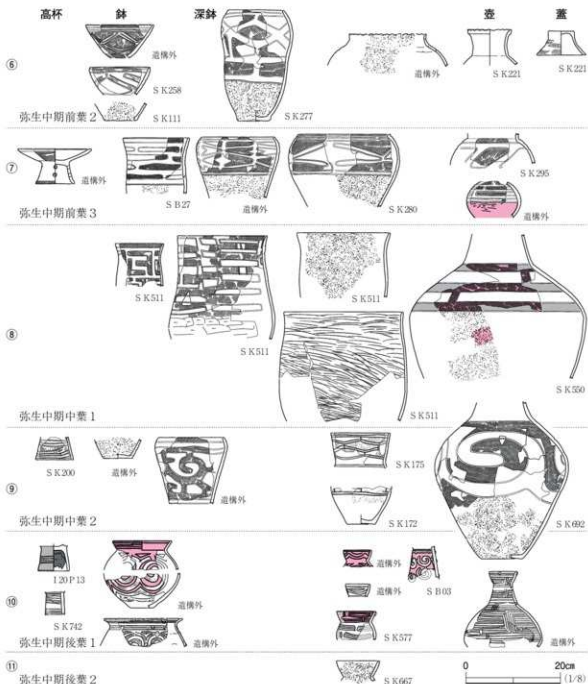


図283 土器の変遷 (2)

ここでは便宜的に、上述の①を縄文時代晩期後葉、②を同末葉、③④を弥生時代前期、⑤⑥⑦を同中期前葉、⑧⑨を同中期中葉、⑩⑪を同中期後葉とする。

本遺跡では、511号土坑が⑧、700号土坑が③の土器のみを出土した。再三述べるように、本遺跡では一遺構から各時期の土器が混在して出土する場合が多いが、511・700号土坑出土土器は型式にまとまりがあり、一括資料としてよい事例である。

異系統の土器 ここまで整理したように、会津地方とその周辺における当該期の土器は、工字文とこれを祖形とするさまざまな文様モチーフを、磨消縄文技法や交互ミガキ手法、二本同時施文手

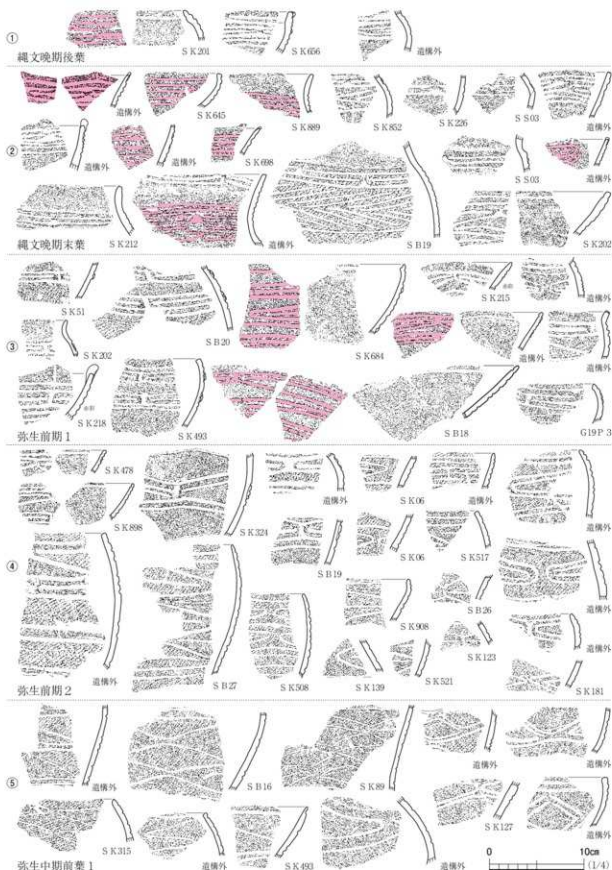


図284 土器の変遷 (3)



図285 土器の変遷 (4)

法によって描くものが多い。この他に、これとは異なる文様モチーフや手法で文様を描く異系統の土器が伴う場合がある。これらには他地域に系譜がある土器が含まれ、当該期における地域間交流のあり方を示す(石川1996)。以下で、本遺跡出土の異系統土器を概観する。

ア 東北北部(図286-1~6)

緻密な胎土、精緻な施文、縦走・横走縄文などを特徴とする。精製されたつくりから当地域の土器との峻別が可能で、一部は搬入品の可能性がある。いずれも弥生時代前期のものである。

イ 関東・中部高地・東海(図286-7~27)

図286-7は平沢型壺に類似する文様構成をもつもの、同図8・9は条痕によって施文・調整されたもので、8は群馬県域(柿沼1986)や長野県域(百瀬他1987)など、9は愛知・静岡・長野各県域などに類例が散見される。同図10は野沢式、11は池上式、12は栃木県出流原遺跡に類例がある。同図13~21は沈線文系に類似する土器で、東海や中部高地などに類例が見いだせる。同図22~27は、櫛描による波状文、簾状文などが施された土器で、栗林式と考えられる。

以上は、東海・関東・中部高地・北陸など、本地域の西方に系譜がある土器である。本遺跡の出土状況から、弥生時代中期前~後葉に位置づけられる。

ウ 仙台平野(図286-28~31)

層波文が描かれるもので、仙台平野を中心に分布する杵形式の影響を受けた土器と考えられる。細い沈線と細縄文が施されたものが多く、弥生時代中期中~後葉に位置づけられる。

エ 唱崎の仲間(図286-32~66)

「唱崎の仲間」は、福島県只見町唱崎遺跡(只見町史出版会1970)出土土器の一部をもって中村五郎氏によって命名された土器群である。同氏は、同町窪田遺跡(古川・和田1987)のまとまった資料の他、矢吹町八幡町B遺跡(藤谷他1999)、同文京町遺跡(松本他1999)などに類例を見だし、南御山2式以前の伊南川流域の土器群とした(中村2001)。関東にも若干の類例を指摘する。

本遺跡では、「唱崎の仲間」が多く出土した。中村氏が指摘するように、精製の深鉢が多いこと、口縁部直下に数本の沈線か波状文・鋸歯文を巡らせること、本遺跡出土例のほぼすべてに炭化物が付着することを指摘することができる。

本遺跡出土の「唱崎の仲間」には二者がある。一つは、沈線が太いこと、重四角文が多いこと、磨消縄文手法が一部にみられることなど、弥生時代中期中葉の土器と共通する属性をもつ(32~44)。これを1群とする。もう一つは、沈線が細いこと、文様にブリッジが加えられたものがあること、重四角文と重三角文が多いことなど、同中期中~後葉の土器群と共通する属性をもつ。この他、文様の中央に列点を充填するものがあるという特徴を有する(45~66)。これを2群とする。

本遺跡出土例は小片が多く、明確な共伴例は少ないものの、274号土坑で2群と二ツ釜式が、505号土坑で2群と南御山2式・二ツ釜式が共伴した。以上から「唱崎の仲間」は弥生時代中期中~後葉の土器群とすることができる。油田遺跡(阿部他2007)1351・1353坑にも同様の共伴例がある。

唱崎遺跡、窪田遺跡、本遺跡とも、出土土器の多くを占めるのは磨消縄文土器群とこれに後続す

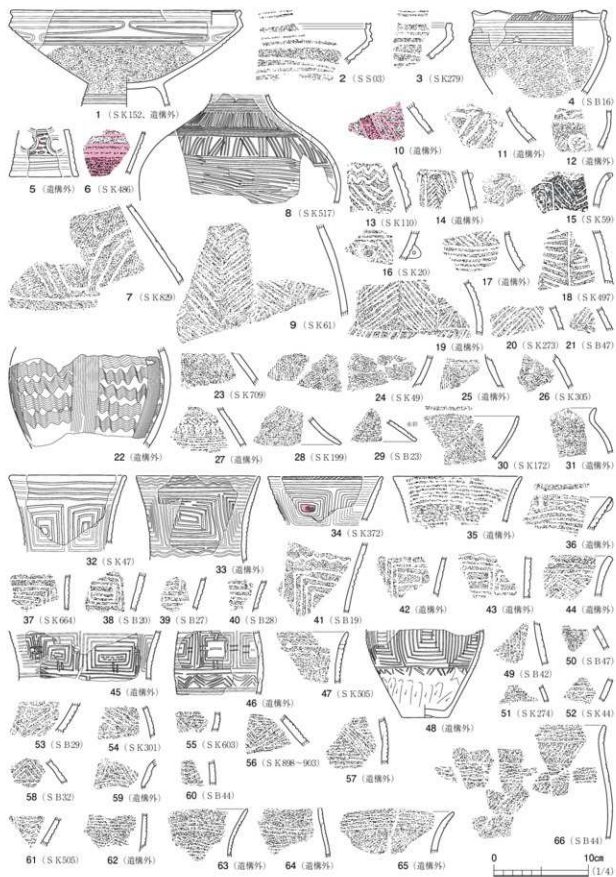


図286 異系統土器

る二ツ釜式で、「唱崎の仲間」の出土量は相対的に少ない。金山町宮崎遺跡(周東・外岡1977、周東・佐藤1978)では報告書による限り「唱崎の仲間」の出土が確認できないなど当地域の弥生時代中期中～後葉の遺跡から普遍的に出土するわけではないこと、本土器群が出土土器の多くを占める遺跡が未確認であることなど、課題は少なくない。

以上、本遺跡出土の異系統土器を概観した。弥生時代前期にみられる東北北部に系譜がある土器は中期前葉に姿を消す一方、関東・中部高地・東海など西方に系譜のある土器が増加し、同中期中葉に仙台平野の影響を受けた土器が加わる。「唱崎の仲間」は、異系統かどうかを含め課題である。

本地域は広範囲な地域間交流の只中にあり、異系統土器にそのあり方と変化の一端が示されている。ここにとり上げなかった系譜の不明な異系統土器も多い。課題としたい。

漆による土器の補修 本遺跡では、漆の使用を示す遺物が少量ながら出土した(付章第1節)。

一つは漆が入られた土器である。小型の高杯脚部を漆容器に転用したもので、I 20グリッドP 13の底面に置かれた状態で出土した。縮みじわがある褐色の漆が固着している。

土器の補修に漆が使用されたことを示す遺物も出土している。550号土坑出土の壺(図195-8・9)の一部の破片の破断面などに付着した黒漆は、彩色ではなく接着剤として用いられたことを示す(付章第1節、図302-2a)。遺構外出土の蓋もしくは高杯(図236-22)には補修孔が穿たれ、その内部や周辺、破断面に黒漆が付着する。これも土器の補修に漆が使われた例と考えられる。いずれも弥生時代中期前～中葉の土器である。

土器の補修に漆を用いた例は、喜多方市上野遺跡(芳賀1986)、新潟県新発田市村尻遺跡(佐藤2009)がある。いずれも弥生時代前期の例である。下郷町明神遺跡出土の弥生時代中期後葉の壺頸部に付着する黒漆(佐藤他2013)も、写真で判断する限り土器の補修に用いられたと考えられる。

本遺跡で出土した漆に関わる遺物は、いずれも土器の補修に使用されたことを示すものである。三島町荒屋敷遺跡や会津美里町下谷ヶ地平遺跡(縄文時代晩期)、喜多方市金山遺跡(弥生時代中期)など漆で彩色された土器があるが、本遺跡では漆塗り製品は出土しなかった。

(3) 弥生時代中期末葉以降

弥生時代中期末葉以降の土器は少量である(図287)。いずれも、これまで知られている該期の土器とはやや異なる特徴がみられる。

図287-1は、二本同時施文であること、沈線に筋状の凹凸があることなど、弥生時代中期末葉～後期初頭にみられる手法で施文される。会津地方では、会津美里町油田遺跡(中村他2011)、会津若松市イタミ七堂遺跡(石田・平吹1999)、同東高久遺跡(萩生田2000)などに類例があり、同様の施文具で口縁部に波状文を描くものは、福島市扇田遺跡(柴田・鈴木1990)、須賀川市前田川かつ坂古墳(永山・目黒1967)、石川町大池下遺跡(藤谷1987)、山形県南陽市上大作裏遺跡(今・須賀井2009、佐藤2021)にみられる。以上から、弥生時代中期末葉～後期初頭に位置づけられる。口頭部境の段、口縁部下端に巡る列点、オオバコと思われる擬縄文は、この時期には類例をみない。

同図2～6は、口縁部下端に連続する指頭押圧や刻み目が巡らされる点で天王山式系に類似する。

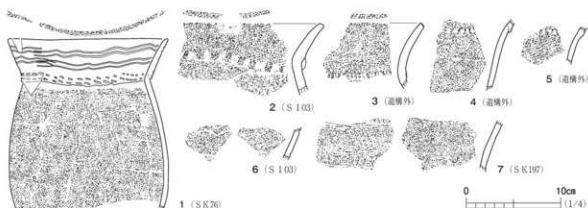


図287 弥生時代中期末葉以降の土器

同図7は、湯川村五丁目宮前遺跡(中村1994)に類例がある。同例は文様帯の下部に連縄文が描かれる。以上は、弥生時代後～終末期に位置づけられる。2～5はオオバコと思われる擬縄文が施される。天王山式系土器にはみられない属性である。

この他、この時期のものと思われる2点の蓋がある。F16グリッドP2と遺構外から出土したもので(図229-13、図241-2)、つまみ部の頂に4方向の突起をもつ。後者はつまみ部下部に平行沈線が巡らされる。宮城県名取市清水遺跡神明開地区(恵美1982)に類例がある。

(4) オオバコの擬縄文

本遺跡出土土器には、(3)で述べた土器の他にもオオバコと思われる擬縄文が施された土器が散見される。厳密にはオオバコとは断定できないが、本書ではこれをいずれもオオバコとした。239号土坑出土例(図184-8)の弥生時代前期、372号土坑出土例の同中期前葉(図190-20)、511号土坑出土例の同中期中葉(図193-1)、336号土坑出土例の同中期後葉(図189-33)など、数は少ないものの、本遺跡では弥生時代前期からみられる属性である。

縄文時代晩期の土器にオオバコの擬縄文が施された例は、只見町窪田遺跡(古川・和田1987: 第84図17、第111図797～802)、会津坂下町鬼渡A遺跡(芳賀1989: 第17図82)、福島市南諏訪原遺跡(武田他1991: 図73-6)などにみられる。上の(3)で述べた土器に施されたオオバコの擬縄文は、このような属性が当地域では弥生時代中期末葉～後期初頭まで続いたことを示す。

(5) 古代

古代の土器は少量で、おもに1号住居跡とその周辺から出土した。1号住居跡に伴う土器はロクロ土師器である。再調整を施さず底部に回転系切り痕を残すことから9世紀後半に位置づけられる。

同住居跡とその周辺の遺構外から、輪積み成形された内黒の杯と多孔式の甌(図16-3、図241-6)も出土した。杯は古墳時代終末期～奈良時代のものであり、多孔式の甌は7世紀後葉～8世紀前葉頃が下限である。これらの土器は、本遺跡において古墳時代終末期～奈良時代の小規模な活動があったこと示唆する。これらが1号住居跡周辺で出土したことも注意される。

(6) 放射性炭素年代測定の成果と土器

本遺跡出土土器のうち炭化物が付着するものについて放射性炭素年代測定を行った(付章第5

節)。その結果と上述した本遺跡出土土器の変遷との対比を表6に整理した。

上述した土器の編年の位置と放射性炭素年代測定の結果はおおむね対応するものとなった。ただし、新古の錯綜がいくつかみられる。弥生時代中期末葉～後期初頭に位置づけた76号土坑出土土(図178-16)は紀元前4～2世紀、同後・終末期に位置づけた3号住居跡出土土(図21-1)は紀元前3～1世紀前半で、いずれも一般的な理解より古い年代である。他に、図196-24、図234-5、図214-1、図237-15、図66-4、図192-5、図184-12図がやや整合しない結果が得られている。

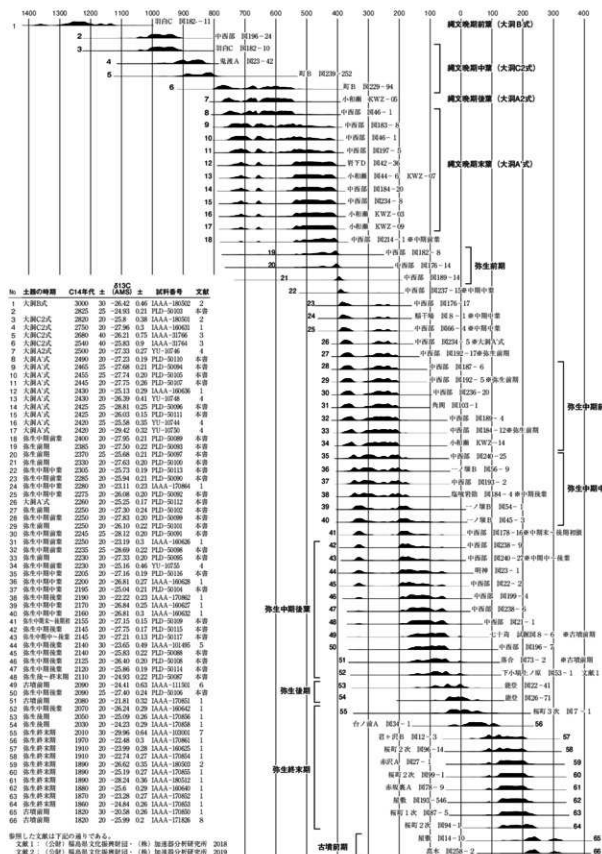
図288は、県内で行われた土器付着炭化物を試料とした放射性炭素年代測定のうち、土器の編年の位置が明確なものについてIntCal120校正曲線とoxcal(ver.4.4.4)を用いてマルチプロット図を作成し、測定結果の古い順に示したものである。2019年時点における当財団と加速器分析研究所による分析の集成(三浦・(株)加速器分析研究所2019)と本書の他、国立歴史民俗博物館の遺跡発掘調査報告書放射性炭素年代測定データベースを参照して県内の測定結果を集成し、海洋リザーバー効果が大きいとされる $\delta^{13}C$ の値が-23を超えるものを除外した。

他遺跡の測定結果にも土器の編年の位置と整合しないものが散見される。このような例を除いたうえで、現状で把握される各期の幅を図に示した。大洞A'式の終末が紀元前400年前後であるこ

表6 放射性炭素年代測定結果と土器

試料 No.	図 No.	枝 No.	遺構	器種	型式	時期	1 σ 暦年範囲	2 σ 暦年範囲	%	備考
17	194	24	S K 639	深鉢	-	晩期～前期	BC 1009-931	BC 1023-911	88.85	
24	46	1	S B 14	深鉢	②	晩期	BC 756-547	BC 654-542	56.48	24と接合
19	46	1	S B 14	深鉢	②	晩期	BC 748-481	BC 593-453	42.34	19と接合
21	197	5	S K 656	深鉢	②	晩期	BC 740-423	BC 573-413	54.89	
10	184	20	S K 253	深鉢	②	晩期	BC 715-416	BC 549-406	75.75	
25	233	8	遺構外	深鉢	②	晩期	BC 714-417	BC 547-407	77.90	
26	233	5	遺構外	深鉢	②	晩期	BC 388-234	BC 290-226	46.48	
8	183	8	S K 230	深鉢	③	前期	BC 750-518	BC 598-461	37.76	
14	189	14	S K 327	深鉢	③	前期	BC 403-391	BC 413-374	95.45	
16	192	17	S K 493	深鉢	③	前期	BC 384-232	BC 307-207	61.55	
7	182	8	S K 212	深鉢	④	前期	BC 476-400	BC 519-397	92.35	
11	176	14	S K 12	甕	-	前期?	BC 462-395	BC 516-392	95.05	
15	192	5	S K 473	深鉢	④	前期	BC 383-231	BC 309-207	63.96	
3	214	1	S S 01	甕	⑤～⑦	中期前葉	BC 512-405	BC 541-401	93.68	
9	184	12	S K 243	深鉢	⑤	中期前葉	BC 363-208	BC 318-203	75.97	
12	189	4	S K 315	深鉢	⑤	中期前葉	BC 375-210	BC 315-205	71.62	
4	176	17	S K 15	深鉢	⑥	中期前葉	BC 365-236	BC 399-354	65.00	
13	187	6	S K 280	深鉢	⑥	中期前葉	BC 384-232	BC 307-207	62.36	
6	66	4	S B 27	深鉢	⑦	中期前葉	BC 393-235	BC 397-353	56.26	
5	235	20	遺構外、SB27・30・31	高杯	⑦	中期前葉	BC 382-231	BC 310-207	65.66	
18	193	2	S K 511	深鉢	⑧	中期中葉	BC 354-199	BC 360-272	55.57	
27	236	15	遺構外、S B 20	深鉢	⑨	中期中葉	BC 399-381	BC 404-360	89.34	
30	239	25	遺構外	甕	⑨	中期中葉	BC 356-201	BC 363-196	94.10	
31	239	27	遺構外	甕	⑨	中期中葉	BC 342-125	BC 205-99	71.33	
29	237	9	遺構外	片口鉢	⑩	中期後葉	BC 342-153	BC 205-99	70.44	
2	22	2	S I 04	甕	⑩	中期後葉	BC 340-113	BC 205-94	74.07	
28	237	7	遺構外	鉢	⑩	中期後葉	BC 170-60	BC 180-87	74.51	
22	199	4	S K 705	甕	⑪	中期後葉	BC 174-59	BC 200-90	78.08	
20	196	7	S K 594	甕	⑪	中期後葉	BC 149-51	BC 172-43	95.35	
23	178	16	SK76	甕	-	中期末葉～後期初頭	BC 344-167	BC 208-105	60.12	
1	21	1	S I 03	甕	-	終末期	BC 163-57	BC 176-49	93.76	

第2章 総括



参照した文献は下記の通りである。

- 文献1：『古墳』堀江俊文監修、(株) 加賀藩分限研究所 2018
 文献2：『古墳』堀江俊文監修、(株) 加賀藩分限研究所 2019
 文献3：『古墳』堀江俊文監修、(株) 加賀藩分限研究所 2019
 文献4：『古墳』堀江俊文監修、(株) 加賀藩分限研究所 2019
 文献5：『古墳』堀江俊文監修、(株) 加賀藩分限研究所 2019
 文献6：『古墳』堀江俊文監修、(株) 加賀藩分限研究所 2019

図288 放射性炭素年代測定結果と土器

とが読み取れる他は各期の年代を論じるには試料が少なく、大まかな年代幅が把握することができるととどまる。特に、縄文晩期前～中葉、弥生時代前期、同後期、古墳時代以降の分析結果は少なく、今後の分析結果の蓄積が望まれる。

(7) 種子圧痕と土器の年代

本遺跡出土土器には、多数の種子圧痕がみられる。このうち、土器の特徴から時期の判明する43点について、レプリカ法による同定を委託によって行った(付章第7節)。その結果のうち、種実を同定できたものを年代順に示したものが表7である。

イネ科植物についてはキビとヒエ属が確認され、他に堅果類の可能性のあるものが確認された。もっとも多いのはキビで、可能性のあるものを含めて16点が確認された。年代の確実なものは弥生時代中期前～後葉のものである。ヒエ属は、可能性のあるものを含めて2点が確認された。いずれも弥生時代中期中～後葉のものである。

以上、本遺跡では遅くとも弥生時代中期前葉にキビ、また遅くとも同後葉にヒエ属の存在が確認される。この他に確認されたホタルイ属とミクリ属は、食用ではない植物である。

277号土坑出土の深鉢底面には圧痕が十数箇所あり(図186-9、写真189右下)、同定を依頼した10点すべてがキビであった。この土器の製作時に多数のキビが存在したことを示す。

表8は、会津地方で確認された種子を示したものである。レプリカ法で同定された例をあげると、

表7 種実圧痕と土器

試料No	図番号	器種	型式	遺構	時期	種実	部位
27	図233-10	鉢	②	遺構外	縄文晩期	不明(堅果類?)	
8	図184-1	深鉢	-	S K 224	弥生前期	ホタルイ属	果実
4	図178-8	壺	-	S K 61	弥生前～中期	キビ	有ふ果
22	図187-15	蓋	-	S K 291	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
21	図187-17	壺	-	S K 291	弥生中期	ミクリ属	核
23	図190-16	壺	-	S K 364	弥生中期前葉	ホタルイ属	果実
31	図235-12	深鉢	⑥	遺構外	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
33	図235-2	深鉢	-	遺構外	弥生中期前葉	キビ?	種子(穎果)
19	図187-6	深鉢	⑥	S K 280	弥生中期前葉	ホタルイ属	果実
9	図186-9 B	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
10	図186-9 C	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
11	図186-9 D	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
12	図186-9 F	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
13	図186-9 G	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
14	図186-9 H	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
15	図186-9 J	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ?	有ふ果
16	図186-9 K	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
17	図186-9 L	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
18	図186-9 M	深鉢	⑥	S K 277	弥生中期前葉	キビ	有ふ果
25	図194-11	壺	⑨	S K 544	弥生中期中葉	キビ?	有ふ果
35	図236-19	壺	⑨	遺構外	弥生中期中葉	不明(キビかヒエ属)	有ふ果?
39	図235-3	深鉢	-	遺構外	弥生中期中葉	ホタルイ属	果実
40	図238-14	壺	⑨	遺構外	弥生中期中葉	不明(堅果類?)	
37	図237-4	壺	⑨	遺構外	弥生中期後葉	ヒエ属	有ふ果
26	図199-8	壺	⑩	S K 715	弥生中期後葉	キビ	有ふ果
41	図238-22	壺	-	遺構外	弥生中期後葉	不明(キビ種子?)	

表8 会津地方の種子圧痕

所在地	遺跡名	縄文晩期		弥生前期			弥生中期			弥生後期	古墳前期	文 献
		後葉	末葉	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉			
会津美里町	下谷ヶ地平	アサ										高瀬 2021
三島町	小和瀬	アワ	アワ サンショウ		アワ シソ属							山本 2022
西会津町	上野尻			オオムギの仲間								木本 2006
金山町	中西部				キビ	キビ キビかヒエ属		キビ	キビ ヒエ属			本書
会津若松市	山側山					イネ						高瀬 2012・2013
下郷町	蔵ノ入								イネ・キビ			佐々木他 2017
会津坂下町	和泉								イネ・ヒエ ダイズ属 シソ属 メロン仲間 ニワトコ	イネ・ダイズ属 ブドウ属 メロン仲間 ニワトコ		菊地他 2024

アワが縄文時代晩期～弥生時代中期前葉、キビが弥生時代中期前～後葉、イネが弥生時代中期中葉～後期、ヒエ属が弥生時代中期後葉～同後期にそれぞれ確認されている。他に、アサ、サンショウ、ダイズ属などがある。オオムギは肉眼観察による同定である。

2. 石器・石製品

(1) 概 要

本遺跡出土石器には、石鏃、石錐、石匙、石鋏(打製石斧)、磨製石斧、環状石斧、削器、楔形石器、不定形石器、横刃形石器、石核、凹石、敲石、石皿がある。

本遺跡出土石器の特徴は、組成のもっとも多くを石鋏が占める組成にある。本報告書に掲載した石器の組成を示せば、石鋏33%、石鏃19%、石核12%、二次加工のある剥片12%、石錐7%、石匙6%、削器・横刃型石器・凹石が各3%、その他3%である。ただ、石器の大半は遺構外から出土したもので、出土土器が特に多い縄文時代晩期末葉～弥生時代中期後葉という時間幅にはおおむね位置づけられるものの、遺構で伴出した土器から具体的な時期が判明する石器は少ない。よって、上述のような時間幅の中における組成や形態の変化を捉えることは難しい。

(2) 石 鋏

このような中、石鋏は遺構出土例が比較的多く、共伴した土器から時期を推定できるものがある(図289)。各時期ともさまざまな形態と法量があること、弥生時代中期前葉の出土例が多いことが指摘できるが、全体の様相を反映していない可能性もある。

石鋏には、法量と石材に対応関係がみられる。小型のものはホルンフェルス・砂岩・頁岩など、大型のものは角閃石輝石デイサイトが多く用いられる。色調は、前者が濃い灰色、後者は灰白色からにぶい黄橙色が多い。角閃石輝石デイサイトは沼沢火山周辺に分布する石材のようである。

石鋏を大量に出土した周辺の遺跡に、只見町窪田遺跡(古川・和田1987)、同七十苅遺跡(渡部2012)、三島町荒屋敷遺跡(小柴他1990)、会津美里町油田遺跡(阿部他2007)などがある。このうち窪田遺跡と荒屋敷遺跡の石鋏は、背面に自然面を残すことや形態、石鋏に特有の石材が用いられる点は同様である一方、いずれも本遺跡の石鋏とは異なる石材が用いられている。窪田遺跡は「粘板

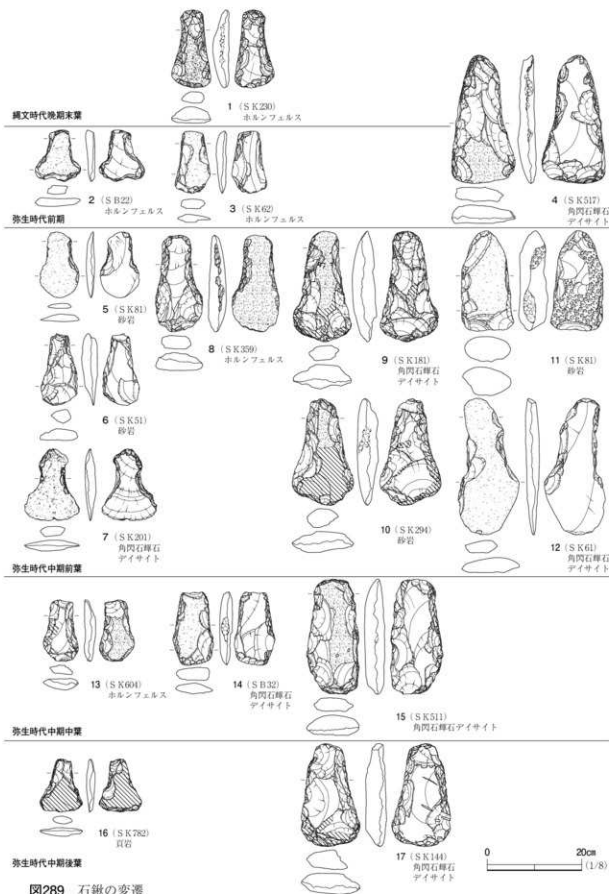


図289 石鋏の変遷

岩系」とされ、伊南川流域に分布する石材であることが指摘されている(渡部2012)。油田遺跡は安山岩が群を抜いて多く、荒屋敷遺跡は、石英珎岩、泥岩、凝灰岩が多い。

石鐮、石錐、石匙など小型の石器に特定の石材との対応関係はみられず、多様な石材が用いられる。一方、石鐮の石材は遺跡ごとに特定の石材が多用される場合があり、それぞれ近隣で得られる石材の使用が示唆される。大型の石鐮に用いられる石材は、他の器種にはほとんど用いられないことも共通する。目が粗く軟質で、鋭い刃部をくつすることに適さないためと考えられる。

本遺跡出土の石鐮の刃部には、使用による破損や磨減などの使用痕が顕著にみられるものがある。これらが具体的にどのような活動によるものかは不明であるが、本遺跡に掘り込まれた千数百基もの遺構が、大量に出土した石鐮の使用方法の一つを示唆する。

(3) 横刃形石器

背面に自然面を残す縦長か横長の剥片に簡単な調整剥離が加えられ、縁辺の一部に微細な剥離や磨減などの使用痕がみられるものである。調整剥離が加えられないものも多い。石材は、頁岩、砂岩、安山岩、ホルンフェルス、デイサイトなどが用いられる。本遺跡では遺構からの出土例がなく、本遺跡で出土土器の量が多い縄文時代晩期末葉～弥生時代中期後葉におおむね位置づけられる。

会津地方では、これに類似する石器が縄文時代晩期後葉以降に存在することが指摘されてきた(図290)。三島町銭森遺跡では「石庖丁状石器」(小柴1986)、三島町荒屋敷遺跡では「打製石庖丁状石器」(小柴他1990)、喜多方市金山遺跡では「石庖丁様石器」(古川他1986)として報告されている。

会津地方におけるまとまった報告例に、只見町窪田遺跡がある(古川・和田1987)。同報告書では「石製穂摘み具」とされ、安山岩質で背面に自然面を残すものが多いこと、弥生時代のものであることが指摘される。下郷町明神遺跡では横刃形石器に類似する流紋岩製石器にコーングロスが認められること(鈴木他2013)、会津若松市門田条里制跡(平野1993)では玄武岩製石器に使用痕があることが報告されている。後者は同じトレンチから二ツ釜式土器が出土している。

会津地方以外では、須賀川市松ヶ作A遺跡(吉田他2001)、飯館村羽白C遺跡(鈴鹿他1989)に特徴が一致するものが含まれる。松ヶ作A遺跡は縄文時代晩期末葉(大洞A'式)～弥生時代中期前葉、羽白C遺跡は縄文時代晩期中葉(大洞C2式)～弥生時代前期の土器が出土している。

会津地方では他に磨製の穂摘み具ではないかと指摘されるものが報告されている。(図290-28・29・33)。「石鎌」などと報告される場合もある(同図30～32・34)。これらは縄文時代晩期の遺跡から出土する例が多い。

以上のような石器については、陸耕に関わる石器とする意見がある(春成1986、神村1997)。群馬県域における横刃形石器の使用痕分析では、イネ科植物や木を加工した場合に生じる使用痕が確認され、「穂刈り」に使用されたことが想定されている(高瀬2004)。本遺跡出土例にも使用痕がみられる。その具体的な用途は使用痕分析を行った上での検討が必要である。

(4) 玉 類

管玉152点、平玉1点が出土した。管玉には、太型、細型、極細型があり、点数は、太型3点、

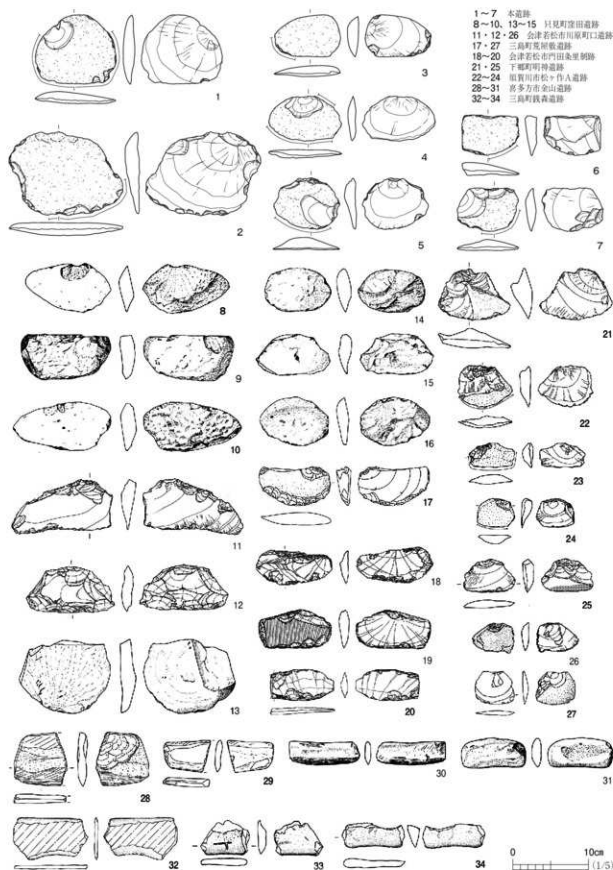


図290 横刃形石器の諸例

細型14点、極細型135点である。伴出土器から時期が特定できるものは少なく、692号土坑出土の太型2点と511号土坑出土の細型1点が弥生時代中期中葉に、557号土坑出土の細型と極細型各1点が同中期後葉に位置づけられるのみである。この他は伴出土器が少なく、細型を出土した246号土坑が弥生時代前期～中期中葉、欠損した太型を出土した41号建物跡が同中期に位置づけられる。

本遺跡で出土した管玉の大半は極細型で、事実記載で述べたように、その大半が攪乱から2箇所にとまってして出土した(1・2号管玉集中地点)。

福島県域で玉類を出土した当該期の遺跡は、管見で32遺跡ある。このうち遺構出土例を伴出した土器によって古い順に示したものが、表9である。多くは墓域から出土したものである。ここに玉類の消長をみて取ることができる。

縄文時代晩期中葉～弥生時代中期前葉まで平玉が大半を占める。

管玉は、遅くとも弥生時代中期前葉に太型と細型が出現し同後葉まで継続する。同中期後葉に極細型が出現して出土量を増加させ、油田遺跡1356号土坑の35点やノ堰B遺跡SK01の65点のように一遺構から数十点が出土する例がある。赤玉製も加わり、おつて半球形勾玉が出現するなど、二ッ釜式期に継起的な変化がみられ、出土量は弥生時代を通じて最大となる。川原町口式期に管玉の出土量は突如として激減し、南相馬市南入A・長瀬遺跡で赤玉製管玉1点が桜井式期の1号土器埋設遺構から出土した例があるのみである。山形県山形市河原田遺跡(武田2004)SK5や橋本町天神原遺跡1・2号土坑墓にみられるように、管玉にかわって半球形勾玉が増加する。続く後・終末期における玉類の出土例はきわめて少ない。

表9を参照すれば、本遺跡の1号管玉集中地点(細型8点、極細型82点うち2点が赤玉製)、2号管玉集中地点(極細型32点うち1点が赤玉製)は弥生時代中期後葉のものである可能性が高い。

管玉の産地については、金山町宮崎遺跡出土品の分析により、石川県小松市域と新潟県佐渡島の石材が用いられていることが指摘されている(薬科他2016)。肉眼観察による限り宮崎遺跡と本遺跡の管玉の石材に大きな違いはなく、これらの地域で生産された可能性がある。

(5) 赤色顔料の生産に関わる遺物

当該期の遺物には赤色顔料による彩色が多くみられるが、赤色顔料の生産については不明な点が多い。本遺跡では赤色顔料の生産に関わると思われる遺物が出土した。赤色顔料が付着する石皿(図279-7)と礫(図209-5、図279-1)で、蛍光X線分析により赤色顔料はベンガラの可能性が高いことがわかった(付章第3節)。これらは、ベンガラの生産が行われたことを示唆する。

また、本遺跡から出土した自然遺物のうち、その原料の可能性のある資料の分析を委託によって行ったところ、赤鉄鉱にその可能性があることが示された(付章第2節)。このことは赤色顔料の原料がすべて赤鉄鉱であることを示すものではなく、候補の一つが示されたものである。なお、赤彩された土器(図238-7)の赤色顔料分析結果はパイプ状ベンガラで、赤鉄鉱の他、含水酸化鉄を原料とするものがあることが判明した。

(青 山)

表9 福島県城の玉類

遺跡名	所在地	遺構名	分類	土器型式	時期	管玉						その他
						平玉	太型	細型	細型 (赤土)	細型 (赤土)	勾玉	
塚田	只見町	S K103	①?	大洞C 2式	縄文晩期中葉	172						
金山	喜多方市	遺構外	①?	大洞A式?	縄文晩期後葉							1
権坂山下	会津美里町	65号土坑	②	大洞A式	縄文晩期末葉							分銅和1
瀧田	会津美里町	637号土坑	②	大洞A式	縄文晩期末葉							
瀧田	会津美里町	706号土坑	③		弥生前期	1						
権坂山下	会津美里町	S X04	③		弥生前期	2						
大平・佐間	福島市	S M15	③~④		弥生前期~中期中葉							不明X編平1
瀧田	会津美里町	734号土坑	④		弥生前期	1						
瀧田	会津美里町	337号土坑	⑤		中間前期	240						
瀧田	会津美里町	672号土坑	⑥~⑧		前期~中期中葉	1	1					
瀧田	会津美里町	345号土坑	(未定)		中間前期	4		1				
瀧田	会津美里町	328号土坑	⑧		中間中葉	15						
瀧田	会津美里町	340号土坑	⑧		中間中葉	1						
瀧田	会津美里町	1512号土坑	—	—	—		1					磁鈴
塚田	只見町	S K15	⑦~⑧		中期前~中葉	1						
経城	会津坂下町	S K26	⑦~⑧		中期前~中葉	1						
経城	会津坂下町	S K27	⑦~⑧		中期前~中葉	5						
経城	会津坂下町	S K21	⑦~⑧		中期前~中葉	1	3					
龍門寺	いわき市	2号住居跡	⑧	龍門寺式	中間中葉	1						
中西郡	金山町	S K511	⑨	南陶山2式	中間中葉			1				
中西郡	金山町	S K602	⑨	南陶山2式	中間中葉			2				
経城	会津坂下町	S K28	⑨	南陶山2式	中間中葉			1				
経城	会津坂下町	S K30	⑨	南陶山2式	中間中葉			7				磁鈴
中西郡	金山町	S B41 P.3	—	—	—		1					磁鈴
田ノ上	柳井町	—	—	—	—		2	2				磁鈴
上森川段	石川町	小笠大墓	⑩?	南陶山2式	中間中葉			4				
宮崎	金山町	q 跡	—	—	—			15				
陣場	本宮市	10号土坑	⑩?	ニッ版式?	中間後葉			2				
一ノ瀬B	会津若松市	S K62	—	—	—			1				
一ノ瀬B	会津若松市	S K60	⑩	ニッ版式	中間後葉		1					
一ノ瀬B	会津若松市	S K57	⑩	ニッ版式	中間後葉		1					
大久保	飯坂町	1号土坑	⑩?	ニッ版式	中間後葉			11				
柏山	郡山	1号p坑	—	—	—		1	4+				
柏山	郡山	5号小墓穴	—	—	—			1				
柏山	郡山	3号小墓穴	—	—	—			2				
瀧田	会津美里町	609号土坑	—	—	—			1				磁鈴
瀧田	会津美里町	671号土坑	—	—	—			1				磁鈴
瀧田	会津美里町	708号土坑	—	—	—			1				
瀧田	会津美里町	740号土坑	—	—	—			1				
瀧田	会津美里町	1388号土坑	—	—	—			1				
栗木内	玉川村	S K05	—	—	—			1				
一ノ瀬B	会津若松市	S K34	⑩	ニッ版式	中間後葉		3					
一ノ瀬B	会津若松市	S K47	⑩	ニッ版式	中間後葉					1		
一ノ瀬B	会津若松市	S K39	⑩	ニッ版式	中間後葉			5				
瀧田	会津美里町	1394号土坑	—	—	—			1		1		
瀧田	会津美里町	1397号土坑	—	—	—					1		
瀧田	会津美里町	1388号土坑	—	—	—					1		
中西郡	金山町	S K507	⑩	ニッ版式	中間後葉		1	1				
一ノ瀬B	会津若松市	S K71	⑩	ニッ版式	中間後葉		5	1				
上ノ内	いわき市	95号土坑	—	—	—			13				
上ノ内	いわき市	8号土器坑	—	—	—			13				
瀧田	会津美里町	1303坑	⑩	ニッ版式	中間後葉	1				6		
柏山	郡山	1号小墓穴	—	—	—					4		
柏山	郡山	2号p坑	—	—	—			1		8		
柏山	郡山	2号小墓穴	—	—	—			3		15		
一ノ瀬B	会津若松市	S K73	⑩	ニッ版式	中間後葉			31				
一ノ瀬B	会津若松市	S K01	⑩	ニッ版式	中間後葉					65		
瀧田	会津美里町	1547号土坑	—	—	—							
中西郡	金山町	1号智玉集中心点	—	—	—			8		80	2	
中西郡	金山町	2号智玉集中心点	—	—	—					31	1	
瀧田	会津美里町	1366号土坑	⑩	ニッ版式	中間後葉					34	1	18
一ノ瀬B	会津若松市	S K36	⑩	ニッ版式	中間後葉						1	
一ノ瀬B	会津若松市	S K10	⑩	ニッ版式	中間後葉						1	
一ノ瀬B	会津若松市	S K33	—	—	—						4	
上ノ内	いわき市	33号住居跡	⑪	—	—						1	
南入久・長瀬	南和町	S M01	⑫	板井式	中間後葉				1			
天神堂	磐前町	第1号土坑墓	—	天神塚式	中間後葉							58
天神塚	磐前町	第2号土坑墓	—	天神塚式	中間後葉				1			26
天王山	白河市	S X02	—	天王山式	後期							1

第2節 遺 構

1. 竪穴住居跡

本遺跡では2軒の竪穴住居跡が確認された。このうち1号住居跡は、出土遺物から平安時代に位置づけられる。2号住居跡は遺物が出土せず時期は不明であるが、平面形が方形であることなどから、1号住居跡と同時期かこれを前後する時期のものと考えられる。

1号住居跡は、平面形が南北に長い長方形で、 6.1×4.6 mの規模をもち、南壁の東寄りの位置にカマドがある。2号住居跡も、南壁の東寄りの位置にカマド跡と考えられる焼土面がある。

図291左上は、会津地方における平安時代の竪穴住居跡のうち規模の判明する134軒をグラフに示したものである。一辺6m未満のものが多く、本遺跡1号住居跡は大型の部類に入るといえる。

同図2～4に、本遺跡1号住居跡に平面形と規模が類似する例を示した。西会津町上ノ台遺跡1号住居跡にみられる外延溝(小滝1992)、喜多方市内屋敷遺跡29号住居跡の中軸線上の2基の柱穴(植村他2004)、会津美里町北ノ前遺跡1号住居跡(阿部他1984)が1軒のみ単独で立地していることなど、それぞれの報文でその特殊なあり方が指摘されている。外延溝は、手工業生産を行う工場の排水機能が指摘される施設である(山川2007)。

図291下左は、会津地方の平安時代の竪穴住居跡におけるカマドの位置を集計したものである。

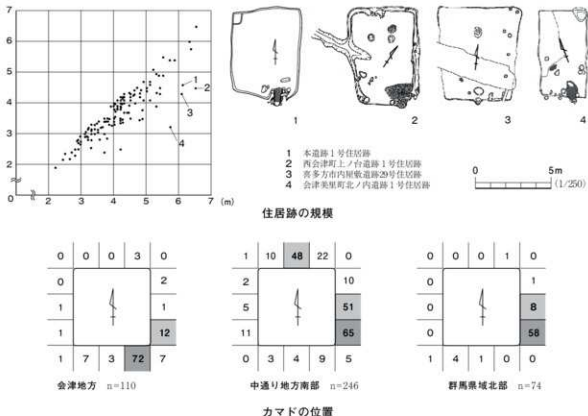


図291 会津における平安時代の住居跡

比較資料として中通り地方南部と群馬県域北部を同図下中と下右に示した(註)。

会津地方では134軒中110軒でカマドが確認され、このうち82軒が南壁に、さらにこのうち72軒が東寄りの位置にある。1号住居跡のカマドの位置は、会津地方の平安時代のカマドに多いものである。次に多いのは東壁南寄りに付すもので、会津ではカマドを住居の南東部に付す例が多いといえる。中通り地方南部は東壁南寄りか北壁中央、群馬県域北部は東壁南寄りにカマドを付す例が多い。新潟県域は平安時代の竪穴住居跡の検出例が少なく、様相は不明瞭である。

本遺跡の1号住居跡は、会津地方の同時期の住居跡とカマドの位置に共通性がある一方、平面形と規模はやや特異なあり方をもつ。会津地方の平安時代集落の多くは会津盆地にある。南会津地方では数少ない調査例で、その特殊なあり方とあわせて注意される。(青 山)

2. 平地住居跡

今回の調査により平地住居跡が7軒検出された。いずれも平面形は円形ないしは楕円形で、住居跡全体の掘り込みをもたず、地表面を床面としていたものと推測される。壁際に柱穴が楕円形状に巡るタイプの8・9号住居跡と方形に配された主柱穴の周囲に支柱穴が巡り、その外側に幅広の外周溝を伴うタイプの3～7号住居跡がある。

前者は壁際に柱穴が楕円形状に巡るもので、会津坂下町鬼渡A遺跡(芳賀1989)の例を基に、群在するビット群の中から各住居跡に伴うビットを抽出したもので、炉跡は検出されていない。なお、縄文時代晩期中葉の大洞C2式期の住居跡としては鬼渡A遺跡の6軒の他、須賀川市浜井場B遺跡でこれに類似する柱穴群が確認されている(阿部・山崎1988)。

3～7号住居跡は方形に配された主柱穴とその周囲に巡る支柱穴、さらにその外側に外周溝で構成されることを基本としているが、本遺跡ではこれらの一部が欠落しているものもある。外周溝は完全に一周するものではなく、弧状の溝跡ないしは溝状土坑が断続的に環状に巡っているのが特徴である。また、3・5・7号住居跡では主柱穴で囲まれた方形区画内の中央付近に、長軸長64～108cmの楕円形ないしは不整形のP1が存在する。縄文・弥生時代の住居跡の場合、この位置には炉跡が存在するのが一般的であるが、堆積土中には焼土も認められず、炉跡との関連は薄いといえる。3号住居跡では中央部が深くなり、7号住居跡では堆積土に柱痕が確認されていることから、屋根を支える柱が設置された柱穴の可能性がある。

本遺跡と同じように幅広の外周溝が巡る平地住居跡の類例は北陸地方に求めることができ、岡本淳一郎(岡本2005)及び中川晃子(中川2018)が同地方の当該遺構を集成・分類している。両氏の分類によると、本遺跡の住居跡は、岡本分類の土坑式平地建物開口型4本主柱、中川分類の広溝式平地建物の土坑連結型+開口型に当たると思われるが、本遺跡の場合4本主柱の周りに支柱穴が楕円形ないしは円形に巡っており、岡本分類の土坑式平地建物開口型多主柱にも類するよう思える。

福島県内における類例は管見の限りでは認められないが、弥生時代終末期の湯川村桜町遺跡(安田他2005、福島他2011)では、一部が途切れる環状溝跡の内部に小型の掘立柱建物跡が存在する遺

構が4基(5・12号溝跡、6号周溝状遺構、13号周溝状遺構、17号周溝状遺構)検出されている。これらは、岡本分類の広溝式平地建物開口型4本主柱、中川分類の広溝式平地建物の開口型に当たる。なお、環状溝跡の内部に存在する掘立柱建物跡は1×1間の方角のものと1間×2～3間の長方形のものがある。

本遺跡のような形態の平地住居跡は福島県内では類例に乏しく、後述の亀甲形の掘立柱建物跡と同様に、類例の多い北陸地方の影響を受けて本遺跡に登場したものと推測される。(能登谷)

3. 掘立柱建物跡

今回の調査により合計50棟の掘立柱建物跡が検出された。ここでは、前章において記した各建物跡の事実報告をもとに、平面形による分類を行うとともに、規模による傾向性や類例についてみてみることにする。

(1) 平面形による分類

本遺跡における掘立柱建物跡の平面形(遺構を構成する柱穴の外側の柱穴を結んだ平面形)は、亀甲形・片亀甲形・長方形(不整長方形・平行四辺形含む)の3種類(I～Ⅲ類)がある(図292)。

I類：亀甲形平面となるもので、側柱の柱穴による長方形平面ないしは方形平面の建物跡の両妻側の中央外側に棟持柱の柱穴をもつ。さらに、桁行が1間のもの(A類)と2間のもの(B類)に分類される。I B類は長大な建物跡で、棟持柱の柱穴が両端の他に内部にも1基有するもの(1類)と両端のみのもの(2類)がある。各類に属する建物跡は以下の通りである。

I A類：12・14・15・20・21・24・25・28・29・34・45・48号建物跡

I B-1類：8・9・38号建物跡

I B-2類：6・13・16・19・27・42号建物跡

II類：片亀甲形平面となるもので、側柱の柱穴による長方形平面ないしは方形平面の建物跡の一方の妻側の中央外側に棟持柱の柱穴をもつ。さらに、桁行が1間のもの(A類)と2間のもの(B類)に分類される。各類の建物跡は以下の通りである。

II A類：23・30号建物跡

II B類：17号建物跡

III類：長方形平面ないしは方形平面となるもので、側柱の柱穴のみで構成される。さらに、桁行が1間のもの(A類)と2間のもの(B類)に分類される。各類の建物跡は以下の通りである。

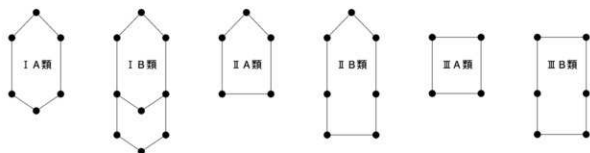


図292 掘立柱建物跡の分類

ⅢA類：1・2・3A・3B・4・5・7・10・11・18・22・26・31・32・33・35・36・

37・39・40・41・43・44・49号建物跡

ⅢB類：46・47号建物跡

(2) 規模 (桁行長と梁行長)

各建物跡の側柱の柱穴による長方形平面の建物跡の桁行長と梁行長の数値をもとにグラフ化し、先の平面形による分類ごとのまとまりを図293に示した。

I A類は桁行長22～3.1m、梁行長1.6～3.3mの範囲(I A-1類：12・15・21・24・25・45号建物跡)と桁行長4.2～5.3m、梁行長2.4～3.0mの範囲(I A-2類：14・28・29号建物跡)、桁行長3.9～4.2m、梁行長2.9～3.7mの範囲(I A-3類：20・34・48号建物跡)の3箇所にドットの集中域が認められる。

I B-1類は桁行長6.0～7.8m、梁行長2.5～3.2m(8・9・38号建物跡)、I B-2類は桁行長4.7～7.6m、梁行長2.8～3.4m(6・13・16・19・27・42号建物跡)である。

II A類は平面形が方形で桁行長3.3m、梁行長3.3mの30号建物跡(II A-1類)と平面形が長方形で桁行長4.6m、梁行長2.7mの23号建物跡(II A-2類)に分かれる。II B類は1棟のみ(17号建物跡)で、桁行長5.4m、梁行長2.6mである。

ⅢA類は桁行長1.8～3.4m、梁行長1.6～3.0mの範囲(ⅢA-1類：1・5・10・11・22・32・35～37・39～41・43・44・49号建物跡)と桁行長4.0～5.3m、梁行長2.7～3.2mの範囲(ⅢA-2類：7・18・26・31・33号建物跡)の2箇所にドットの集中域が認められる。

ⅢB類は2棟のみで、桁行長3.0m、梁行長2.0mの47号建物跡(ⅢB-1類)と桁行長5.0m、梁行長2.1mの46号建物跡(ⅢB-2類)に分かれる。

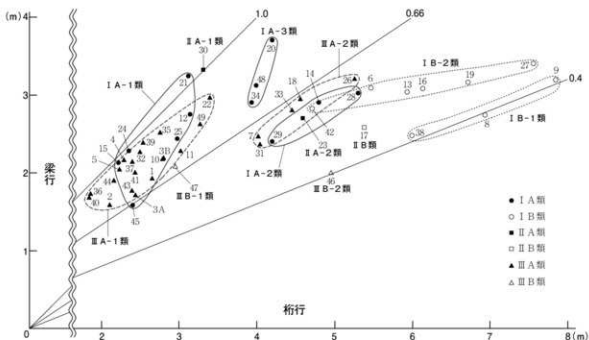


図293 掘立柱建物跡の規模 (桁行・梁行)

図293をみると、桁行が1間になる建物跡では、ⅠA-1類、ⅡA-1類、ⅢA-1類は分布範囲が重複し、ⅠA-2類、ⅡA-2類、ⅢA-2類も分布範囲が重複していることが看取される。つまり、規模において類を越えて近似する2群が認められる。また、桁行が2間になる建物跡では、ⅡB類は桁行・梁行ともⅠB類の数値範囲内にあるのに対して、ⅢB類は梁行長が短く、ⅠB類の群とは切り離して考えた方が良さそうである。

桁行1間のⅠA-2類、ⅢA-2類と桁行2間のⅠB-2類を比較してみると、ⅠB-2類の梁行長はⅠA-2類及びⅢA-2類の梁行長の範囲の高位と近似しているが、桁行長は範囲が一部重複するものの、ほとんどがⅠA-2類及びⅢA-2類よりも長いことが看取される。この重複する範囲(桁行長約4.7～5.3m)には他にⅢB-2類もあり、桁行1間と2間の建物跡が混在しているといえる。桁行1間の建物跡には桁行長5.3mを超えるものが認められず、桁行長5.3m以上の範囲には他にⅡB類も認められることから、桁行長5.3mは桁行を1間にする場合の限界であり、桁行長が約4.7mを超える場合は桁行を2間にするという思惟がうかがえるのではないかと。

(3) 規 模(面積)

各建物跡の側柱の柱穴による長方形平面部分の面積を先の分類ごとに図294に示した。ⅠA-1類は3.3～9.1㎡、ⅠA-2類は9.2～15.8㎡、ⅠA-3類は11.0～14.5㎡、ⅠB類は12.5～23.9㎡、ⅡA-1類は10.4㎡、ⅡA-2類は11.8㎡、ⅡB類は13.8㎡、ⅢA-1類は3.0～9.3㎡、ⅢA-2類は9.3～16.1㎡、ⅢB-1類は5.4㎡、ⅢB-2類は9.5㎡である。なお、ⅠA-1類は5㎡以下のものと7㎡以上に分かれ、ⅢA-1類は6.5㎡以下が主体をなしている。

桁行が1間のⅠA-1類とⅠA-2類は9.1㎡台半ばに境界があり、ⅢA-1類とⅢA-2類は9.2㎡台後半に境界がある。相対的にみると、ⅠA-1類とⅢA-1類、ⅠA-2類とⅢA-2類は対応関係にあるように看取され、ⅡA-1・2類はⅠA-2類及びⅢA-2類の範囲内にある。

桁行が2間の建物跡では、ⅠB-1・2類には境界を設けるような傾向性は認められず、ⅡB類はⅠB-1・2類の範囲内にあるのに対して、ⅢB-1・2類は規模が小さい。

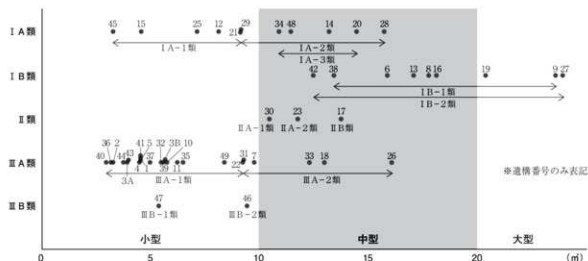


図294 掘立柱建物跡の規模(長方形部分の面積)

前章でも記したが、側柱による長方形平面部分の面積が10.0㎡未満の建物跡を便宜的に「小型」、10.0㎡以上20.0㎡未満の建物跡を「中型」、20.0㎡以上の建物跡を「大型」とした。それぞれの比率は、小型59%、中型35%、大型6%となっている。各類の大きさをみてみると、ⅠA-1類、ⅢA-1類、ⅢB-1・2類は小型のみであり、ⅠA-3類とⅡA-1・2類、ⅡB類は中型のみである。ⅠA-2類とⅢA-2類は小型と中型があるが、ⅠA-2類では小型1棟、中型2棟で、ⅢA-2類では小型2棟、中型3棟である。ⅠB-1・2類はそれぞれ中型と大型があるが、ⅠB-1類では中型2棟、大型1棟であり、ⅠB-2類では中型4棟、大型2棟である。

(4) 柱穴の規模

各建物跡を構成する柱穴の中には、上部が皿状で一部分が円筒形に深く掘り込まれているものや廃絶時の柱抜き取りやその後の周壁の崩落などにより上部が原状を留めていないものがある。そこで、柱が据えられていた深い掘り込み部分の規模を再検討し、図295に規模による各建物跡の柱穴構成を示した。

図の横軸に柱穴の規模を示したが、便宜的に長さ55cm単位で区切り、長さ55cm未満を「小型」、長さ55cm以上110cm未満を「中型」、長さ110cm以上165cm未満を「大型」、長さ165cm以上を「超大型」とした。柱穴の規模は長さ25cmから178cmまでとその幅が大きいが、総数269基の内訳は、小型46基(17%)、中型169基(63%)、大型49基(18%)、超大型5基(2%)である。

建物跡の柱穴構成をみてみると、小型のみで構成されるもの、中型のみで構成されるもの、大型のみで構成されるものの他に、2種類以上の大きさの柱穴によって構成されているものがあり、これら2種類以上の大きさの柱穴から構成されるものに関しては、主体となる大きさが抽出されるものと各大きさが均等に構成されるものがある。

小型のみも含めた小型主体の柱穴によって構成される建物跡は5・15・33・35～37・45・49号建物跡の8棟、中型のみも含めた中型主体の柱穴によって構成される建物跡は1～4・6・7・10・11・14・17～19・21・23・25・27～29・31・34・39～44・47・48号建物跡の28棟、大型のみも含めた大型主体の柱穴によって構成される建物跡は8・9・30号建物跡の3棟、小・中型主体の柱穴によって構成される建物跡は46号建物跡の1棟、小・中型の柱穴が均等に構成される建物跡は38号建物跡の1棟、中・大型の柱穴が均等に構成される建物跡は12・16・22・26・32号建物跡の5棟、中・大・超大型の柱穴が均等に構成される建物跡は13・20号建物跡の2棟で、中型主体が60%を占め、次いで小型主体が16%を占めている。

(5) 各類と柱穴の規模の関係

先述の平面形及び規模による各類と柱穴構成の関係をみてみると、以下のようになる。

ⅠA-1類：小型主体2棟、中型主体3棟、中・大型均等1棟

ⅠA-2類：中型主体3棟

ⅠA-3類：中型主体2棟、中・大・超大型均等1棟

ⅠB-1類：大型主体2棟、小・中型均等1棟

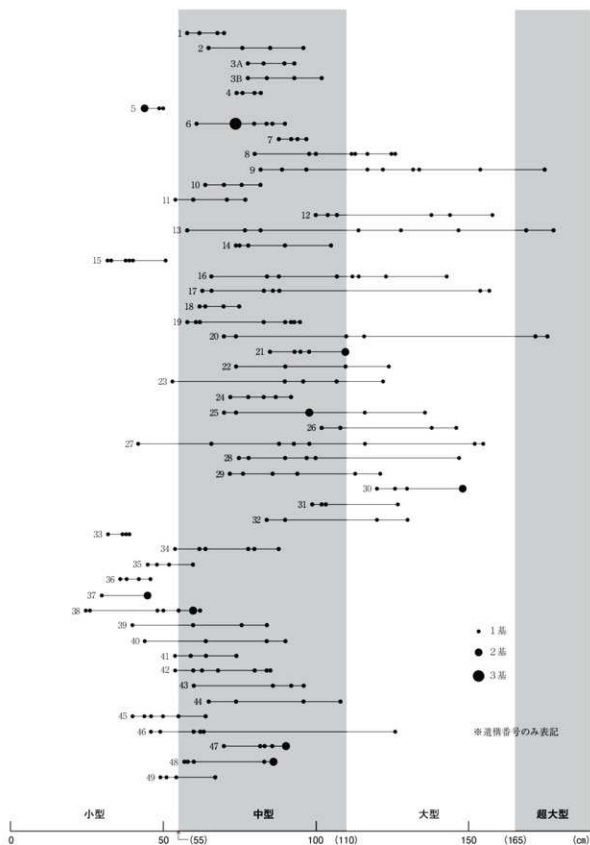


図295 掘立柱建物跡を構成する柱穴の規模

I B - 2 類：中型主体 4 棟、中・大型均等 1 棟、中・大・超大型均等 1 棟

II A - 1 類：大型主体 1 棟、II A - 2 類：中型主体 1 棟、II B 類：中型主体 1 棟

III A - 1 類：小型主体 5 棟、中型主体 12 棟、中・大型均等 2 棟

III A - 2 類：小型主体 1 棟、中型主体 3 棟、中・大型均等 1 棟

III B - 1 類：中型主体 1 棟、III B - 2 類：小・中型主体 1 棟

以上のように、一つの柱穴構成が特定の類に片寄る傾向は認められないが、小型主体は規模の小さい I A - 1 類及び III A - 1 類に多くみられ、中型主体は I B - 1 類と II A - 1 類以外の多くの類においてみられる。

(6) 柱痕の規模

掘立柱建物跡を構成する柱穴 269 基のうち、84 基から柱痕が確認された。これらの中には平面で確認できたものもあるが、ほとんどは柱穴内堆積土の断面観察で確認されたことから、前章で柱痕の規模は径が不明なものは幅でも表現してきた。柱痕の確認された 84 基の柱穴の柱痕の規模は、柱痕幅 7～10cm のものが 2 基、11～15cm のものが 16 基、16～20cm のものが 35 基、21～25cm のものが 14 基、26～30cm のものが 16 基、31cm 以上のものが 1 基で、16～25cm のものが約 6 割を占め、幅 20cm のものが 10 基に上る。また、掘立柱建物跡を構成する柱穴のうち、3 基以上の柱穴に柱痕が認められた掘立柱建物跡は 14 棟あり、柱痕幅が 11～20cm のみのもの 4 棟、11～20cm のものが主体をなすもの 5 棟、21～30cm のみのもの 1 棟、21～30cm のものが主体をなすもの 4 棟であり、建物跡ごとに柱痕の値が近似すること、つまり、同じような太さの柱が設置されていたことが推測される。特に、6 号建物跡では、柱痕が確認された 7 基の柱穴のうち、3 基の柱痕は 22cm である。

なお、掘立柱建物跡に認定できなかった土坑の中には堆積土断面に柱痕が認められるものが 93 基あり、これらの柱痕の規模もみてみると、柱痕幅 10cm のものが 1 基、11～15cm のものが 10 基、16～20cm のものが 33 基、21～25cm のものが 27 基、26～30cm のものが 19 基、31cm 以上のものが 3 基であり、16～25cm のものが 6 割超を占め、幅 20cm のものは 14 基に上るのが特徴的である。

(7) 分布状況と時期、各類の消長

本遺跡における掘立柱建物跡の占地をみると、調査区北半部中央に 10 棟が存在し、調査区南半部北寄りに 40 棟が存在する。

調査区北半部中央に存在する 10 棟(1～5・35～37・49 号建物跡)は、すべて平面形が長方形で小型の III A - 1 類である。出土遺物及び他の遺構との重複関係から具体的な時期が推測されるのは、2 号建物跡(弥生時代中期)、3 A・3 B・5 号建物跡(弥生時代中期後葉)、36 号建物跡(弥生時代中期後葉以降)のみであるが、この区域ではおおむね弥生時代中期後葉を中心に小型の掘立柱建物跡が構築されていたものと推測され、小型の柱穴主体のものと中型の柱穴主体のものがそれぞれ 5 棟ずつ存在するが、柱穴の規模の差が時期差なのか、用途の違いなのかは不明である。

調査区中央部には掘立柱建物跡をはじめとして遺構が密集し、掘立柱建物跡どうしの重複も認められる(以降、遺構密集域とする)。巨視的にみると、10・33 号建物跡以外の掘立柱建物跡は G 16

グリッド南東部及びH16グリッド南部からH17グリッドにかけての区域(8・9号住居跡付近)を囲むように環状に巡り、さらに、その分布範囲は北西方向及び南西方向、南東方向へと延びていることがうかがえる。また、掘立柱建物跡を個別にみると、主軸方向を環状の内側(8・9号住居跡付近)に向けているものが多いことがうかがえる。

先の分類に着目すると、ⅠA-1類6棟、ⅠA-2類3棟、ⅠA-3類3棟、ⅠB-1類3棟、ⅠB-2類6棟、ⅡA-1類1棟、ⅡA-2類1棟、ⅡB類1棟、ⅢA-1類19棟、ⅢA-2類5棟、ⅢB-1類1棟、ⅢB-2類1棟となる。

この遺構密集域の掘立柱建物跡の時期については、前章において出土遺物及び他の遺構との重複関係からおおよそ以下のように推定した。

- ・縄文～弥生時代：7号建物跡
- ・縄文時代晩期末葉～弥生時代前期：8・9・38・45号建物跡
- ・縄文時代晩期末葉～弥生時代中期後葉：18号建物跡
- ・縄文時代晩期末葉～弥生時代中期：33号建物跡
- ・弥生時代前期～中期前葉：14・15・22・34号建物跡
- ・弥生時代中期前葉：11・16・21・25・30・40号建物跡
- ・弥生時代中期前葉～中葉：24号建物跡
- ・弥生時代中期中葉：19・20・23・26～29・31・48号建物跡
- ・弥生時代中期中葉～後葉：17号建物跡
- ・弥生時代中期後葉：12・13・32・42～44・46・47号建物跡
- ・弥生時代中期：10・39・41号建物跡
- ・弥生時代中期中葉～後期：6号建物跡

このように、推定時期範囲が広いものと狭いものがあるが、このうち、推定時期範囲の狭い5時期に関して、先の分類による内訳をみると、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の建物跡のうち、8・9・38号建物跡はⅠB-1類、45号建物跡はⅠA-1類の内でも小型の面積が5㎡以下のものである。弥生時代前期～中期前葉の建物跡は、ⅠA-1類の中でも小型の面積が5㎡以下のもの、ⅠA-2類、ⅠA-3類、ⅢA-1類があり、弥生時代中期前葉の建物跡は、ⅠA-1類、ⅢA-1類、ⅠB-2類、ⅡA-1類がある。弥生時代中期中葉の建物跡は、ⅠA-2類、ⅠA-3類、ⅠB-2類、ⅡA-2類、ⅢA-2類があり、弥生時代中期後葉の建物跡は、ⅠA-1類、ⅠB-2類、ⅢA-1類、ⅢB-1類、ⅢB-2類がある。

次に、上記の5時期以外の推定時期範囲の広いものに関して少々大胆に推定時期を絞ってみることにすると、7・18・33号建物跡は先の分類のⅢA-2類で、ⅢA-2類は弥生時代中期中葉にみられることから、弥生時代中期中葉を中心とした時期と推測され、17号建物跡は近接する12・13・19号建物跡との関係から、おおよそ弥生時代中期中葉と推測される。10号建物跡は33号建物跡と重複し、同遺構よりも新しいことから、弥生時代中期後葉と推測され、39・41号建物跡は先

の分類のⅢA-1類で、同類の中の主軸方向が近似する43号建物跡とはほぼ同じことからおよそ弥生時代中期後葉と推測される。また、6号建物跡は先の分類のⅠB-2類で、同類の13号建物跡と平面形や規模が近似していることから、およそ弥生時代中期後葉と推測される。

ここで各時期の状況を再度みると、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の建物跡は、遺構密集域の北西部(8・9号建物跡)、南西部(45号建物跡)、南東部(38号建物跡)に存在する。先に分類したⅠB-1類の全てがこの時期に存在することが特徴的である。弥生時代前～中期前葉の建物跡は、遺構密集域東部(22号建物跡)、南西部(15・34号建物跡)、北西部(14号建物跡)に存在する。先の分類では、ⅠA-1類、ⅠA-2類、ⅠA-3類、ⅢA-1類が各1棟である。弥生時代中期前葉の建物跡は、遺構密集域北西部(11号建物跡)、西部(16号建物跡)、東部(21・30号建物跡)、南東部(24・25・40号建物跡)に存在する。先の分類では、ⅠA-1類3棟、ⅢA-1類2棟、ⅠB-2類とⅡA-1類が各1棟である。なお、南東部の24号建物跡は中葉に下る可能性もある。弥生時代中期中葉の建物跡は、遺構密集域の北東部から東部(20・23・26・27・31号建物跡)、中央部(33号建物跡)、北西部(7・48号建物跡)、西部(17・18号建物跡)、南西部(19・28・29号建物跡)に存在し、このうち東部の3棟(26・27・31号建物跡)と南西部の3棟(19・28・29号建物跡)は重複することから、各区域で3時期にわたる変遷がうかがえる。先の分類では、ⅠA-2類2棟、ⅠA-3類2棟、ⅠB-2類2棟、ⅡA-2類1棟、ⅡB類1棟、ⅢA-2類5棟がある。各建物跡の新旧や同時性に関しては不明である。弥生時代中期後葉の建物跡は、遺構密集域の中央部(10号建物跡)、北西部(6・12・13・46号建物跡)、北東部(47号建物跡)、東部(32号建物跡)、南東部(39・41～44号建物跡)に存在し、このうち北西部の12・13号建物跡と南東部の41～43号建物跡はそれぞれ重複することから、各区域で2～3時期の変遷がうかがえる。先の分類では、ⅠA-1類1棟、ⅠB-2類3棟、ⅢA-1類6棟、ⅢB-1類1棟、ⅢB-2類1棟がある。

以上のことを基に各類の消長をまとめてみると(図296)、Ⅰ類では、ⅠA-1類は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期後葉まで一貫して存在し、ⅠA-2・3類は弥生時代前期～中期前葉に出現後、中期中葉まで存在する。ⅠB-1類は縄文時代晩期末葉～弥生時代前期にのみ存在するのに対

調査区	分類	縄文時代 晩期末葉	弥生時代 前期	弥生時代 中期中葉	弥生時代 中期中葉	弥生時代 中期後葉	弥生時代 後期
南平	ⅠA-1類						
	ⅠA-2類						
	ⅠA-3類						
	ⅠB-1類						
	ⅠB-2類						
	ⅡA-1類						
	ⅡA-2類						
	ⅡB類						
	ⅢA-1類						
	ⅢA-2類						
	ⅢB-1類						
	ⅢB-2類						
北平	ⅢA-1類						

図296 掘立柱建物跡の各類の消長

して、ⅠB-2類は弥生時代中期前葉～後葉まで存在し、中期後葉には平面亀甲形の建物跡の主体をなしている。Ⅱ類では、ⅡA-1類は弥生時代中期前葉にのみ存在し、ⅡA-2類とⅡB類は中期中葉にのみ存在する。Ⅲ類では、ⅢA類は弥生時代前期以降、時期を追うごとに数が増加し、中期後葉では建物跡全体の主体をなしている。ⅢB-1・2類は中期後葉にのみ存在する。

(8) Ⅰ・Ⅱ類の類例

今回の調査で検出された掘立柱建物跡のうち、約半数を占めるⅠ・Ⅱ類の掘立柱建物跡について、本遺跡と近似する時期の近接地域における類例をみてみる。

双葉郡浪江町田子平遺跡は縄文時代後期後葉～晩期前葉の集落跡で、26棟の掘立柱建物跡が半円状に検出されている(山岸他2010)。後期後葉～晩期初頭には平面亀甲形で1×1間の掘立柱建物跡4棟、平面長方形ないしは方形で1×1間の掘立柱建物跡11棟が存在し、晩期前葉には平面長方形ないしは方形で1×1間の掘立柱建物跡15棟が存在する。

福島市南諏訪原遺跡は縄文時代晩期中・後葉の集落跡である(武田他1991)。集落跡の周囲に柵列跡が巡り、その内側に二重の同心円状に掘立柱建物跡が検出されている。掘立柱建物跡は亀甲形で桁行と梁行が1×1間のものが1棟、平面長方形か方形で1×1間のものが7棟検出されている。

新潟県新潟市青田遺跡は縄文時代晩期末葉の大規模な集落跡である(荒川他2004)。平面亀甲形で桁行と梁行が1×1間の掘立柱建物跡(A類)27棟、平面亀甲形で2×1間の掘立柱建物跡(B1類)11棟、平面片亀甲形で2×1間の掘立柱建物跡(B2・3類)16棟、平面長方形で1×1間の掘立柱建物跡(C類)4棟が検出されている。このうち、桁行が2間となるB1～3類は落棟付平屋建物とされ、桁行の長い方が母屋で短い方が下屋(落棟)と復元されている。

新潟県三条市藤平遺跡は縄文時代晩期末葉の集落跡である(家田1986)。平面亀甲形で桁行と梁行が1×1間の掘立柱建物跡14棟、平面亀甲形で2×1間の掘立柱建物跡2棟、平面片亀甲形で2×1間の掘立柱建物跡3棟、平面長方形で1×1間の掘立柱建物跡2棟が環状に巡っている。桁行2間のものは妻側一方の柱穴が小さく、基本的には1×1間の構造で、小さな柱は補助柱とされていることから、青田遺跡同様、落棟付平屋建物ということになる。

新潟県北蒲原郡京ヶ瀬村(現阿賀野市)猫山遺跡は弥生時代中期前葉の集落跡である(古澤他2003)。主軸方向が放射状に配置された平面亀甲形で2×1間の掘立柱建物跡が3棟検出され、これらは青田遺跡の例から落棟付平屋建物と推測されている。

新潟県長岡市尾立遺跡は弥生時代中期前半の集落跡である(胸形・小熊1991)。平面亀甲形で2×1間の掘立柱建物跡1棟、平面長方形で1×1間の掘立柱建物跡3棟、平面長方形で2×1間の掘立柱建物跡1棟が検出されている。平面亀甲形のものは周溝が付属する。

以上のように、福島県内においては縄文時代晩期末葉以前から平面亀甲形の掘立柱建物跡が存在しているが、それらは全て1×1間であり、各遺跡でも主体をなすことはなく、少数派である。一方、新潟県内ではここに示した遺跡よりさらに遡る縄文時代中期や後期の遺跡においても平面亀甲形の掘立柱建物跡が確認されており、縄文時代晩期末葉には各遺跡で主体をなし、長大な掘立柱建

物跡が出現している。さらに、弥生時代にも長大な掘立柱建物跡は継続されている。

(9) 上屋構造について

本遺跡では、長大なⅠB-1類は棟持柱の柱穴を建物跡内部にももつが、同様に長大なⅠB-2類やⅠA-2類の中の長大なものの場合、両妻側の中央外側の棟持柱のみで棟を支えられるか疑問である。また、一方の棟持柱の柱穴しか検出されていないⅡA-2類及びⅡB類についてもどのようにして棟を支えたか疑問である。

ⅠB-2類に関しては、調査時及び整理作業時に掘立柱建物跡の認定を試みた際に、建物跡内部の棟持柱の柱穴の把握ができなかった可能性は否めないし、後世の削平等により消失した浅い柱穴や床面に据えた可能性もあるのではないかと考えられるが、桁の半分あたりに小屋梁を渡し、その中央に真東を立てて棟木を受けていた可能性もある。また、ⅡA-2類及びⅡB類については、棟持柱の柱穴がない方の妻側の梁の中央に真東を立てて棟木を受けていたと推測される。

先述のように、本遺跡のⅠB-1類と似た柱穴配置を採る青田遺跡や猫山遺跡では、2×1間の長大な亀甲形の掘立柱建物跡に関して、桁行の柱間の長い方を母屋、短い方を落棟(下屋)とした落棟付建物と推測されているが、本遺跡のⅠB-2類やⅡB類、ⅢB類では桁行の柱間は一方が長く、他方が短いという特徴があるものの、ⅠB-1類の3棟の場合、それぞれの建物跡の中では桁行の各柱間の長さに大きな差が認められず、取えて落棟を想定することは避けたい。

このように、本遺跡におけるⅠ・Ⅱ類の掘立柱建物跡の出現とその後の展開には、新潟県域の遺跡の影響が少なからずあったものと推測され、地理的にみると、本遺跡の東側に沿って北流する只見川は阿賀野川水系の支流であり、阿賀野川(阿賀川)・只見川を通じて、本遺跡の下流に所在する青田遺跡や猫山遺跡などの情報が入ってきていたことは想像に難くない。

本遺跡における掘立柱建物跡の柱穴の配置からみると、ⅠB類はⅠA類が長大化したものと捉えることができ、その中で、ⅠB-1類は内側にも棟持柱をもつもの、ⅠB-2類は内側に棟持柱をもたないものとして整理ができる。縄文時代晩期末葉～弥生時代前期、本遺跡にⅠB-1類が登場するが、青田遺跡に存在する落棟付建物が丸ごと導入されたわけではなく、亀甲形という平面プランのみが採用され、その後、本遺跡内でⅠ・Ⅱ類の掘立柱建物跡が独自に展開していったものと推測される。

(能登谷)

4. 遺構密集域

縄文時代晩期～弥生時代中期後葉の遺構は、調査区中央部、F～Jの16～19グリッドに遺構密集域を形成する。その中央に空閑地と呼べるような遺構が希薄な部分があり、遺構はその周りに環状に分布する。遺構密集域の平面形はおおむね円形で、規模は、東西約40m、南北約40mである。中央の空閑地は東西約10m、南北約12mの楕円形である。

中央の空閑地は遺構がまったく存在しないわけではなく、小規模なピットと、このようなピットからなる8・9号住居跡が位置する。縄文時代晩期中葉大洞C2式期のもので、遺構密集域の中で

はもっとも古い。この空閑地には平安時代の竪穴住居跡である1号住居跡も位置し、これに壊された遺構があったことも考えられる。遺構密集域は、以後、縄文時代晩期末葉～弥生時代中期後葉まで、実年代にして約500年の間に形成される。

本遺跡の整理にあたっては、個々の遺構の時期を客観的に判断できるよう、遺構出土土器を可能な限り掲載した。重複による遺物の混入、時期が判明する遺物がない遺構の存在、出土土器の大半が小片であるなどの制約があり、ある程度の時間幅の中に位置づけることができただけの遺構も少なくないが、このような作業を経て遺構集中域の形成過程を次のように復元することができる。

嚙矢は、上述のように縄文時代晩期中葉、大洞C2式期の住居跡である。周辺のビット群もこの時期の可能性がある。本遺跡の大洞C2式の土器の多くはこの付近で出土している。

縄文時代晩期後葉、大洞A式期の遺構は確認されず、遺物も少ないものの、同A'式期に遺構・遺物とも増加し、弥生時代前期にかけての遺構が遺構密集域中央の空閑地をやや遠巻きにして環状に位置する。北西側やや離れた位置に大型の建物跡である8・9号建物跡が位置する他、東側にやや離れた河岸段丘縁辺部に数基の土坑が位置する。このうち201・202号土坑から土器が大量に出土した。この時期に位置づけられる遺構は他の時期に比べて少ないものの、遺構密集域形成の初期段階にあることを考慮すれば、遺物を出土しなかった遺構のいくつかはこの時期の可能性がある。

弥生時代前期～中期前葉には、やはり遺構密集域の北西やや離れた位置に大型の14号建物跡が位置する他、土坑が増加する。遺構はやはり空閑地を取り巻くように分布する。河岸段丘の縁辺部にも引き続き数基の土坑が分布し、やはり遺物を大量に出土した土坑が散見される。

同中期前～中葉も遺構が空閑地を取り巻く傾向は変わらないものの、河岸段丘の縁辺部の土坑はみられなくなる。北東部には引き続き建物跡が位置する。

同中期中～後葉にもこのような様相が継続し、加えて調査区の北部に住居跡群と建物跡群が、調査区の南東部I・J20グリッドに建物跡が建てられる。

これをもって遺構集中域の形成はほぼ終了する。弥生時代中期末葉の土坑とビットが少数あるだけで、弥生時代後期の遺構はなく、同後・終末期の住居跡は調査区北部に1軒あるのみである。

以上のように、遺構密集域は縄文時代晩期～弥生時代中期後葉まで、中央部の空閑地の周囲に建物建て土坑を掘り込むことで形成された。その集積が環状の遺構密集域となった。

注意されるのは、遺構密集域形成の端緒となった縄文時代晩期中葉の大洞C2式を除いた各時期とも、一貫して中央の空閑地を避け、その周囲に遺構を掘り込んでいることである。ここに遺構を設けないうという意図が通底しているようでもある。

もう一つ注意されるのは、この空閑地に平安時代の1号住居跡がすっぽりと収まって位置することである。遺構密集域の形成が終了する弥生時代中期後葉の実年代を紀元前後と考えれば、1号住居跡が建てられた9世紀まで800年以上の開きがある。

大洞C2式期の住居跡、遺構密集域の中心部、平安時代の住居跡、これらはほぼ同じ位置にある。このような現象がなぜ生じたかについては、発掘調査では明らかにできなかった。

5. 土 坑 墓

本遺跡で検出された土坑のうち、246・557・692号土坑は、副葬品と考えられる管玉が出土したことや形態から土坑墓と考えられる。平面形は、246・557号土坑が長楕円形、692号土坑が不整隅丸長方形で、692号土坑は南御山2式の壺の破片が上面に散在する状態で、557号土坑からは二ツ釜式の土器が堆積土から出土した。このような状況は、当該期の土坑墓群が確認された会津若松市一ノ堰B遺跡(芳賀他1988)、同社田A遺跡(矢木・角田2016)、会津美里町油田遺跡(阿部他2007)と共通する。本遺跡も上述の3基の周囲に土坑墓群が形成されている可能性があるが、本遺跡はこれらの遺跡と異なり、周囲の多数の遺構の中から土坑墓と思われるものを抽出する必要がある。

246号土坑の周囲には、同様の平面形・規模・深さをもつ一群の土坑が群在する。245・247・248号土坑である。これらよりやや規模の大きい252号土坑と、離れた位置にある214・612・618号土坑も、この一群に含めてよいと思われる。

557・692号土坑は調査区中央部の河岸段丘の縁辺に位置する。付近の57号土坑が土坑墓の可能性があり、他にも可能性がある土坑はあるものの、土坑墓群としては小規模である。この他、遺構としては捉えられなかったが、1・2号管玉集中地点がこの範囲に位置する。

以上の二箇所が土坑墓群と考えられる。いずれも遺構密集域の外縁部に位置する。この他、117・450・662・815・816号土坑が平面形や深さから土坑墓の可能性を指摘できるが、いずれも群をなさない。このうち、117・450・662号土坑は遺構密集域の外縁部に位置する。

下で述べる1・2号集石遺構の性格については不明点が多いが、墓である可能性も否定しきれない。管玉を出土した692号土坑の南側1.5～2.7mの至近に両集石遺構があること、長軸方向を同じくする点は注意される。年代は、以上の中では1・2号集石遺構がもっとも古い。

6. 集石遺構

本遺跡で確認された2基の集石遺構は、大小の2基が長軸をそろえて互いに0.5m離れて位置すること、只見川を見下ろす地点にあることなど、特殊な遺構であることをうかがわせるものの、具体的な性格を考える手掛かりは少ない。類例も見いだせない。

ここでは、これら2基の集石遺構の構築過程と互いの関係を整理する。

(1) 1号集石遺構

本遺構の構築過程には複数の段階がある(図297)。

まず、卵形の平面形をもつ掘形が掘り込まれた。壁の中ほどに段があることからすれば、上段が掘り込まれた後、その底面を掘り込み面として下段の掘り込みが行われた可能性がある。

次に、掘形の下段に小礫を入れてその上面を水平かつ平坦にならし、何らかの有機質のものが掘形の軸方向に向きをそろえやや西寄りの位置に置かれた。

さらに、これを覆って大小の礫で掘形が埋め尽くされ、その上面に小型の壺が置かれた。

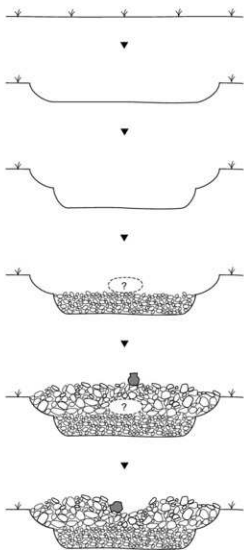


図297 1号集石遺構の構築過程

ば、それは乳幼児と思われる。墓であるとすれば、当地域の当該期の墓制である再葬墓との関係も検討しなければならない。何より、このような構造をもつ墓の報告例はない。

考え得る有機質のものにはさまざまな候補があるが、いずれも上のような推測を重ねるだけで、それが何であるかを考える材料は調査では得られなかった。

(2) 2号集石遺構

1号集石遺構がいくつかの段階を経て構築されているのに対し、2号集石遺構は1号集石遺構に比べて規模が小さく、掘形に小礫を敷きつめているだけの簡素な構造である。

注意されるのは、本遺構が1号集石遺構の下層部分とよく似ていることである。平面形が小判形であること、平面規模と敷きつめられた礫の厚さがほぼ同じであること、小礫が多いことなど、両者は同形同大といってよいほど特徴が一致する。両者の関係を考える上で注意される点である。

(3) 1・2号集石遺構の関係

第1章で述べた通り、二つの集石遺構の間に位置する885号土坑との切り合い関係から、これら

やがて有機質が腐朽してつぶれ、その上部にあった礫が落ち込んで陥没坑が生じた。その際、遺構上に置かれた小型の壺が陥没坑に落ち込んだ。陥没坑の範囲からすれば、この有機質は長さ90cmほどと考えられる。陥没坑には周囲から土が流れ込んだ。

本遺構の性格は、下層上面に置かれた有機質のものを何と考えるかで解釈が異なる。これを遺体と考えれば、本遺構は墓ということになる。ただし、本遺構の堆積物の大部分が礫であるにも関わらず、また、礫の隙間に堆積する土をすべてフルイにかけたにも関わらず、骨片などは出土しなかった。

墓の可能性を考えた場合、遺体を納める棺の存在も考慮する必要がある。本遺構が弥生時代のものであることを勘案すれば組み合わせ式木棺の可能性があり、下層の上面にも掘形の底面にも木棺の握え形や粘土塊は確認されなかった。例り抜き式木棺が置かれた可能性もあるが、弥生時代の検出・出土例は知られていない。陥没坑の規模が小さいことから、木棺の存在は想定しづらい。遺体が樹皮に覆われるかくるまれていた可能性は排除できないが、これを積極的に支持する所見は得られなかった。仮にこれを墓と考え、陥没坑の大きさが遺体の大きさを反映しているとすれ

の遺構の構築順序が、2号集石遺構→885号土坑→1号集石遺構であることが判明した。小さく簡素な構造の2号集石遺構が先につくられ、885号土坑の掘り込みと埋没を経て、より大きく複雑な構造をもつ2号集石遺構がつくられたことになる。

この構築順序から次のことがいえる。1号集石遺構は、下層の上面に何らかの有機質が置かれたと考えられた。とすれば、2号集石遺構の上面にも何かの有機質のものが置かれた可能性がある。ただし、2号集石遺構は表土に覆われていただけで、これを覆う上部構造は検出されなかった。何かの有機質が置かれたのだとすれば、それは露天にさらされたか土が被せられたことになる。図にはうまく表現できなかったが、2号集石遺構の中央部にみられる小礫と黒褐色砂質土が混じった土の範囲(写真163-a)はここに何かの有機質があった痕跡の可能性もある。そして、次につくられた1号集石遺構は、2号集石遺構を祖形としつつこの点を改め、大きく深い掘形を掘り込み、有機質のものを礫で覆う構造とした、という解釈も一つの仮説として成り立ち得る。

1・2号集石遺構の類例は、管見では見いだすことができなかった。縄文時代晩期～弥生時代中期の集石遺構の報告例は、只見町窪田遺跡S X 01(古川・和田1987)、同宮前遺跡1号集石(渡部2017)、会津坂下町鬼渡りA遺跡1号集石(古川・和田1989)、下郷町瀧ノ入遺跡1・2号集石遺構(吉野・鶴見2017)がある。しかし、いずれも集石遺構であること以外の共通点は少なく、同じ性格をもつ遺構とは考えづらい。

以上、2基の集石遺構の構築過程を整理し、少しの解釈を述べたが、推測以上のものではない。これら集石遺構の性格は、類例の出現をもってあらためて検討されるべきものである。

なお、1・2号集石遺構の礫の隙間に堆積していた各所の土をサンプルとして採取している。本遺構の性格を考える上で有効な情報が含まれている可能性があるが、分析などは現時点で実施していない。(青 山)

7. 配石遺構

1号配石遺構は、その西側1.8mに位置する2号土器埋設遺構とともに、本遺跡で検出されたただ2基の縄文時代後期の遺構である。同時期の遺構が他にないこと、只見川を見下ろす位置にあること、四周の壁に扁平な石が立て巡らされていること、その石が被熱していること、炭化した堅果類が堆積土に大量に含まれていたことなど、特異な性格をうかがわせる遺構である。石の裏込めや堆積土に炭化した堅果類が含まれるということは、構築と埋没の時点で周囲に炭化した堅果類が散らばっていたことを示唆する。本遺構の周囲で行われた活動の一端がうかがわれる。

表10と図298は、壁に石を立てた遺構の類例を示したものである。古い例は縄文時代中期末葉の複式炉をもつ敷石住居跡にみられる。壁に石を立て並べたものは「石壁」とも呼ばれる。後期初頭にかけて敷石をもたない例が現れ、平面形は円形→隅丸の長方形か方形へ、炉は複式炉から石組炉へ変遷する。関東地方では柄鏡形敷石住居跡に石壁をもつ例がある。埋設土器を伴う場合も多い。

本遺跡の1号配石遺構は、平面形が長方形であること、地床炉をもつことなど、福島県域では

表10 配石遺構

No	所在地	遺跡名	時 期	平面形	備 考	文 献
1	飯館村	宮内A	2号住居跡	円形	複式炉・敷石	鈴鹿他1989
2	飯館村	上ノ台D	2号住居跡	円形	複式炉・敷石	鈴鹿他1990
3	福島市	大枝館跡	4号住居跡	円形	複式炉	堀江・富田2001
4	福島市	廊下	6号住居跡	隅丸方形	複式炉	堀江・浅野2003
5	福島市	八方塚A	23号住居跡	隅丸長方形	複式炉	山内他1999
6	福島市	上川向	3号住居跡	隅丸方形	土器埋設石組炉	堀江他1997
7	福島市	廊下	17号住居跡	隅丸長方形	石組炉?	堀江・浅野2003
8	金山町	中西部	1号配石遺構	長方形	地床炉	本書

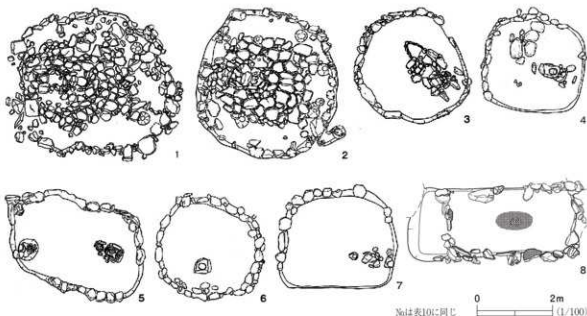


図298 1号配石遺構の類例

もっとも新しい位置に置くことができる。後期初頭の土器が出土したことも矛盾しない。

上述の類例は、いずれも「住居跡」として報告されている。本遺跡の1号配石遺構も地床炉をもち、住居跡としての性格をもち合わせているが、上述のような特徴や状況は日常の居住を目的とした住居跡ではないことも示唆する。「周石型礫石施設」という呼称もある(石井2009)。

本例に年代的に後続する例はみられないが、群馬県月夜野町深沢遺跡(下城他1987)など石壁・敷石をもつ後期前葉の遺構が、おもに関東地方で数多く調査されている。これらは炉をもたないものもあり、配石遺構として報告される場合も多い。

なお、本遺構の堆積土に含まれていた炭化した堅果類の放射性炭素年代測定を行ったところ、縄文時代後期初頭～前葉に相当する結果が得られた(付章第4節)。

8. 土器埋設遺構

本遺跡では、3基の土器埋設遺構が確認された。いずれも底部を欠いた土器が正位に埋設され、検出の際に明瞭な掘形が確認されなかったものである。この他、757号土坑から打ち欠きのない完形の壺が正位の状態出土した。これについては、検出の際に土坑の平面形が土色の違いとして明

瞭に確認されたため土器埋設遺構ではなく土坑として調査した。

これらのうち、1・2号土器埋設遺構と757号土坑は、調査区中央部の河岸段丘の縁辺部に近い位置、遺構密集域の東側にあって、土坑墓群の他、集石遺構、配石遺構など、本遺跡で確認された特異な性格をうかがわせる遺構が周囲に群在する。3号土器埋設遺構のみ、調査区西部、遺構集中域の南西側に位置する。遺構集中域の外側に位置する点は、他の土器埋設遺構と共通する。

1・2号土器埋設遺構は粗製の深鉢で、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期と縄文時代後期初頭、同3号は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期、757号土坑から出土した壺は縄文時代晩期末葉のものである。

もっとも古いのは2号土器埋設遺構で、同じ時期の1号配石遺構の西側約2mにあってこれと関連すると考えられる。その後、縄文時代晩期に1号土器埋設遺構と757号土坑がつくられる。両者は約1mの距離にある。周囲の土坑墓群はこの時点でまだ造営されていない。

土器埋設遺構の性格を考える材料は本調査では得られなかったが、土器埋設遺構から小児骨が出土する例があることを勘案すれば、本遺跡の場合も同様の性格が考えられる。(青山)

第3節 ま と め

本遺跡の調査によって以上の所見を得ることができた。最後に本遺跡の調査成果をまとめる。

1. 縄文時代後期

本遺跡におけるもっとも古い人類活動の跡は、縄文時代後期初頭のものである。確認された遺構は、1号配石遺構と2号土器埋設遺構の2基で、いずれも河岸段丘の縁辺に位置する。他に同時期の遺構はなく、遺物はおもに向遺構の周辺から出土した少量の土器がある。縄文時代後期における活動は短期間で小規模なものであったと考えられる。1号配石遺構は類例の少ない遺構である。

会津地方では、縄文時代後期に遺跡数が急速に減少する。そのような状況下において、特殊な性格をうかがわせる遺構が本遺跡の一画、只見川を見下ろす場所につくられた。

2. 縄文時代晩期～弥生時代中期

(1) 集落と墓域

本遺跡においてもっとも多く多くの遺構と遺物が確認され、長期間の継続した活動が明らかとなった。大洞A式期の遺構が確認されなかったものの、土器の変遷には中断はみられない。

特に注目されるのは、調査区の中央部に位置する遺構密集域である。そのもっとも古い遺構は大洞C2式期の2軒の住居跡で、遺構密集域の中央部に位置する。

上述のように、大洞A式期の遺構は確認されなかった。遺物も少ない。大洞A'式以後、同C2式の2軒の住居跡の周辺を空地としながら、掘立柱建物跡、柱穴を含む土坑などの造営が弥生時代中期後葉まで継続する。実年代にして約500年間である。その結果、遺構が環状に分布する遺構

密集域が形成された。遺構密集域の外縁には、土坑墓群、集石遺構、土器埋設遺構が位置する。

出土土器の大半は、炭化物が付着する深鉢や甕である。これらの土器は本遺跡が生活の場であったことを示す。祭祀に関わると考えられる遺物は見いだせない。この時期の掘立柱建物跡については、住居跡であるという説と祭祀施設や倉庫であるという説があるが、本遺跡の状況はここが居住の場であったことを示す。ただし、掘立柱建物跡に伴う炉跡は検出されなかった。

このような配置をもつ遺構群は環状集落と呼ばれる(図299)。東北ではおもに縄文時代にみられる集落形態で、県内では、福島市宮畑遺跡(齋藤・堀江2008他)、郡山市下羽広遺跡(高田他1997)、隣県では、新潟県村上市元屋敷遺跡(滝沢他2002)、同アチャ平遺跡(富樫他2002)、同三条市藤平遺跡(家田1986)、宮城県蔵王町西浦B遺跡(鈴木他2011)などが知られる。宮畑遺跡は広場を中心に掘立柱建物跡が環状に巡り、土器埋設遺構や土坑墓が外縁に位置するなど構造が類似する。

一方、本遺跡には他の環状集落と異なる点がある。それは年代である。環状集落の多くは縄文時代後・晩期までのものであるが、本遺跡は縄文時代晩期末葉に始まり弥生時代中期後葉に活動を停止する。弥生時代の環状集落は、長野県塩尻市五輪堂遺跡(鳥羽他1989)などが知られるだけである。

本遺跡では、環状集落の造営が停止する弥生時代中期後葉に、調査区北部にそれまでと異なる形態の住居跡群が現れる。周溝をもつ平地住居跡と一週四方の掘立柱建物跡で構成される集落である。これらの住居跡は北陸に類似があり、土器や管玉などの遺物にも北陸との関係がうかがえる。

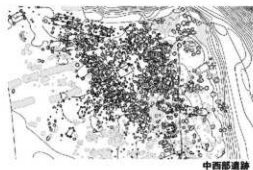
環状集落の外縁、特に只見川を見下ろす河岸段丘の縁には、土坑墓群、土器埋設遺構、集石遺構が位置する。集石遺構の性格は明らかではないものの、集落の外縁に土坑墓と土器埋設遺構などからなる墓域が位置するという構造は、前述の宮畑遺跡にもみられるものである。

土坑墓は、出土土器や管玉の特徴から弥生時代中期中～後葉に位置づけられる。環状集落が営まれ始めた当初、縄文時代晩期末葉～弥生時代中期前葉まで土器埋設遺構はあるが土坑墓は存在せず、環状集落が営まれてしばらく後にその外縁部に土坑墓群が設けられたことになる。

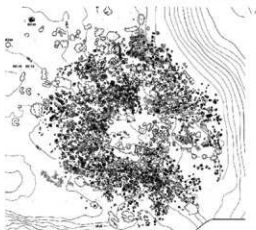
東北部周辺の墓制は、弥生時代中期中葉に再葬墓から土坑墓へ移行する。本遺跡の北東約10kmにある金山町宮崎遺跡(周東・外岡1977、周東・佐藤1978)は、縄文時代晩期末葉～弥生時代中期の再葬墓として知られる。土坑墓が現れる以前に本遺跡に住んだ人々は死して再葬墓に葬られ、その造営停止とともに自らの居住地に墓域を設けたとも考えられる。本遺跡における土坑墓の出現は、再葬墓制の終焉を契機とする可能性がある。

本遺跡は、弥生時代中期後葉に活動の規模を縮小する。同中期末葉の遺構・遺物はきわめて少ない。同後・終末期には周溝を巡らせる住居跡が1軒確認されたのみである。

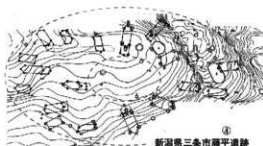
会津地方における当該期の遺跡は、弥生時代中期後葉に規模を縮小する例が少なくない(図300)。縄文時代晩期～弥生時代中期までは、長期間にわたって活動を継続する遺跡が多い。弥生時代中期後葉の二ツ釜式期には、南会津地域で遺跡が増加することが指摘されている(樋口1990)ものの、川原町口式以降、弥生時代中期末葉までの遺跡は少なく、継続期間も短い。継続期間が短い状況は同後期にも続く。本遺跡の規模縮小は、このような動向の中で理解することができる。



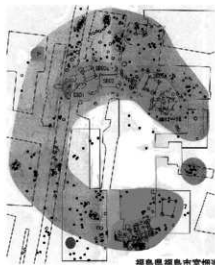
中西部道跡



新潟県上市アチヤ平道跡



④
新潟県三条市藤平道跡



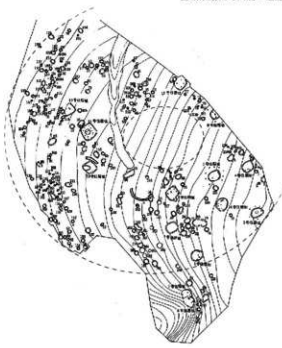
新潟県新潟市宮畑道跡



福島県郡山市下羽広道跡



宮城県蔵王町西瀬B道跡



長野県塩尻市五輪堂道跡

各報告書より転載、一部改変

0 50m
(1/1,200)

図299 環状集落の諸例

道地名	所在地	新石器時代		商周		秦漢時代		魏晉南北朝		隋唐五代		宋元明清	大正	文獻	春秋時代後、終末期の編年は南山(2022): 2と
		新石器時代	新石器時代	商周	商周	秦漢時代	秦漢時代	魏晉南北朝	魏晉南北朝	隋唐五代	隋唐五代				
下谷+地中A	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川 1985、矢野 1984	
上野A	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀 1990	
村下	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	周東・宮沢1991	
堂平	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	佐藤・山崎1987	
上野+地中B	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	石田1996、古川・平野1999、穴沢1970	
保田	只見町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川・和田1987	
金山	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川他1985・1986	
沢門	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢他1983	
武野野原	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀他1985、矢野・石本1984	
中田+地中B	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀・佐藤1987	
下川原	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	金子2004	
快取	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢1976	
塩崎岩館	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀・小暮1994	
上林	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川他1983b、古川1999	
柳屋	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	長谷川1983	
志ノ	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	森野他1984	
下谷+地中C	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	森野他1985	
下谷+地中B・C	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀1986	
林森	三島町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢1975・小沢1986	
荒野	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢他1990	
田子	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢1984	
砂子+地中平	柳津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	横川1978	
滝澤A	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀1989、古川・和田1989	
小田	三島町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小澤2022	
田子	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小澤1977・田中他1984、石田2002	
中野原	金山町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	本郷	
上野沢	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	鈴木・梅宮1980、本本2005	
五石山	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1983、1990	
鹿屋山下	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	渡邊1998	
吉野	只見町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	渡邊2017	
柳屋	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	森田1986	
七石	只見町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	渡部2012	
上野	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川1979	
内野	磐梯町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	山岸1990	
今泉	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢1980	
藤ノ子	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川・和田1988	
柳田	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	阿部2000・阿部他2007	
川原町門	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	熊谷1994	
西森	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	中村他1986、和田開、生江1975	
荒瀬	金山町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	岡本・石田1977、岡本・長島1978	
五石山	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	中村1981、小松山他1984	
柳屋	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川他1982	
南朝山	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	杉原1981・小沢1986	
越ノ下	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	福島他2002	
一ノ木山	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀他1988	
湯ノ口	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1990	
塩ノ小山	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1990	
下郷原	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	石本他1983	
村東山	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀他1989	
柳屋	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	本本他1991 a、石田2004	
大沢田	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	田中・生江2080	
柳田	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川・和田1988	
蔵ノ入	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	吉野・鶴見2017	
下平	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	鈴木他2012	
明神	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	島田他2013	
小山	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1990	
中井	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1990	
柴林	下郷町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1990	
門田赤見	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	江尻他1993、平野1983、江尻・平野1994他、近藤1996・2000、阿部1999他	
村田山	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	芳賀・和田2016	
村田	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	田中1993	
中野	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	玉川・橋本1983、関口1976	
津原	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口1976	
新橋A	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	柴田1996、関口1976	
折橋C・D	会津津町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	関口・松本1996	
イノ上	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	石野・平野1999	
東沢山	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	森田2000	
和泉	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	本本他1991 b	
越後	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	大塚他1990	
中津津	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	月堂・中村1980、生江他1980	
柳田	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	森田他2014	
古柳敷	喜多方市	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	和田他1999	
越後力館	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川1990	
松無瀬	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川・五十嵐1992	
矢玉	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	森田他1999	
東沢	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川・吉田1994	
松野	金山町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	安部他2003・福島他2011 a・b	
勝野宮内内・笠巻	金山町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	梶原2012・2013	
郡山	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	五十嵐2009・2014・五十嵐他2006	
三条湯原北	越前町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	栗田1995	
大田山田	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川・松本1992	
柳屋	会津荒里町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	小沢1979	
柳屋	会津坂下町	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	古川1976	

図300 会津地方における遺跡の消長

当該期は再葬墓など墓域の調査例は多いものの、集落の調査例は少ない。本遺跡が集落跡であるという所見が間違いでなければ当該期の集落の数少ない調査例となるが、これを当地域の集落形態の典型例とみてよいかは、さらなる資料の蓄積を待って検討する必要がある。

(2) 生 業

本遺跡の調査では、生業に関わる知見がいくつか得られた。

まず、プラント・オパール分析でキビ族が検出されたことがあげられる(付章第10節)。サンプル採取地点は調査区最南端で、2箇所の浅谷地形にそれぞれ最大90cmの厚さで堆積していた土層である。ただ、このうち東側の浅谷の最下層で縄文時代後期初頭の遺物が少量出土したのみで、これ以降に埋没が進んだことは判明するものの、キビ族が検出された層位の年代は明らかではない。

イネのプラント・オパールも検出されたが、積極的に水田跡とするのは難しいと指摘される。検出層位はいずれもキビ族の上層、サンプル採集地点の最上部で、やはり年代は不明である。

本遺跡出土土器にみられる種実圧痕でもっとも多いのもキビである。ついでヒエ属が少量みられる。このことを勘案すれば、本遺跡周辺でこれら雑穀の栽培が行われた可能性がある。ただし、それがどこでどのような形で行われたかを具体的に示す遺構は確認することができなかった。

堆積土に炭化種実を含む土坑も多かった。一部の遺構について堆積土の洗浄を行った結果、数種の炭化種実が得られ、一部について同定を依頼した結果、クリ、トチノキ、オニグルミ、ヤマグワ、イネと同定された(付章第8・9節)。これら同定された炭化種実を標本として、洗浄で得られた種実を分類した結果を表3に示した。炭化種実そのものの年代は明らかではないものの、本遺跡の年代である、縄文時代後期、同晩期～弥生時代終末期、平安時代のものと考えてよい。炭化したクリはすべて皺がよったいわゆるカチグリで、一般に保存食とされる。

土器の内面に付着する炭化物4点の炭素・窒素安定同位体比分析の結果は、3点がC₃植物、1点がC₃植物・草食動物に由来するものであった(付章第6節)。C₃植物には、穀物や堅果類が含まれる。

石器は石鍬がもっとも多く、石鍬がこれに次ぐ。石鍬は陸耕に関わるともいわれるが、生業との関わりについては、石器組成のもっとも多くを占めること以上の所見を得ることはできなかった。

横刃形石器も生業を考えるうえで注意される遺物である。前述のように、陸耕との関わりが指摘される石器である。本遺跡出土の横刃形石器にも多くの使用痕がみられるが、それがどのような活動によるものかは使用痕分析を待たなければならない。

多量に出土した石核や剥片は、さまざまな石材が本遺跡にもち込まれて石器が製作されたことを示す。石鍬に次いで石鍬が多いことは、狩猟が盛んに行われたことを示す。

明らかにし得なかった点は少なくないが、本遺跡を営んだ人々が、キビ・ヒエを栽培し、クリ・トチノキ・オニグルミ・ヤマグワなどを採集して一部を保存食とし、石鍬などの石器をつくり、狩猟を行ったことを読み取ることができる。漁撈に関わる遺物は見いだせなかったが、このことは本遺跡の住人が漁撈を行わなかったことを示すものではない。漆を入れた容器が出土したことや土器の補修に漆が用いられていることは、小規模な漆生産が行われたことを示す。赤色顔料が付着した

石皿や糠からは、ベンガラが生産された可能性が示唆される。

以上が、本遺跡の出土遺物や各種の採取試料から推測される生業についての概要である。キビ・ヒエ属の栽培が行われた可能性は高い一方、稲作が行われたことを示す遺物は少ない。

3. 古代以降

古墳～奈良時代の遺構は確認されなかった。南会津地方ではこの間、遺跡が少ない状態が続く。

古代の遺構としては、平安時代の堅穴住居跡が1軒確認された(1号住居跡)。2号住居跡は、時期のわかる遺物は出土しなかったものの、カマドの位置から平安時代のものである可能性が高い。検出された遺構は以上で、活動は短期間であったと考えられる。出土遺物は少なく、1号住居跡から燈明皿として使用された杯1点と鉄製刀子1点が出土したのみである。

1号住居跡は平面形が長方形で、平安時代の住居跡としてはやや大型である。平面形が長方形の住居跡の類例の中には、手工業生産を行う工房としての性格が示唆される例がある。このような例からすれば、1号住居跡は何らかの手工業生産に関わった可能性がある。この住居跡の周辺では古墳時代終末期～奈良時代の土器片も少量出土した。3基の木炭焼成土坑もこの時期の可能性もある。

中世の遺構は確認されなかった。近世には、調査区の東部を南北約80mにわたって延びる1号溝跡が掘られた。溝が掘削された目的は不明である。出土した近世陶器の小片とキセルの一部が、近世のものであることを示すのみである。

以上が、発掘調査によって明らかになった中西部遺跡の歴史である。(青 山)

註

遺跡は多いと思われるが、とり上げた遺跡は次の通りである。

会津地方

喜多方市：内原敷遺跡(植村他2004)、館ノ内遺跡(和田他1998)、家西遺跡(渡部他2016)、古屋敷遺跡(和田他1999)、大沢遺跡(片岡2002)、下屋敷遺跡(古川2000)、西原遺跡(古川・小沢1992)、小田高原遺跡(吉田他2011)、湯川村：殿田遺跡(梶原・布尾2015)、会津坂下町：宮東遺跡(和田他1990)、男壇遺跡(和田他1990)、東館遺跡(古川・吉田1994)、松無塚遺跡(古川・五十嵐1992)、館ノ内遺跡(古川・和田1988)、三本木遺跡(小柴他1992)、古館遺跡(和田・古川1992)、高畑遺跡(和田・古川1992)、京ヶ原遺跡(吉田1990)、釣場館遺跡(古川他1994)、会津若松市：横沼西遺跡(木本他1991b)、門田桑里朝跡(阿部1999)、笹山原遺跡(曾田2023)、鶴林遺跡(五十嵐・湯川2021)、会津美里町：下堀原遺跡(石本他1983)、鹿島遺跡(本間他1991)、北ノ前遺跡(高橋他1984)、鷺沢道南遺跡(本間・井1992)、冨宮西遺跡(芳賀・丹野1990)、下郷町：瀬平遺跡(小滝1996)、左走遺跡(室井・香川2006)、南会津遺跡(福島他2003)、西会津町：上ノ台遺跡(小滝1992)。

中通り地方南部

須賀川市：沼平遺跡(大越他1981)、沼平東遺跡(大越他1981)、仲林遺跡(皆川1995)、沢田A遺跡(佐藤他2006)、沢田B遺跡(高橋2008)、高木遺跡(青山他2019)、天栄村：山崎遺跡(石本他1990)、二本松遺跡(大越1987)、北大久保B・C遺跡(大越1987)、矢吹町：笹目平遺跡(鈴鹿他1992)、北大久保E遺跡(鈴鹿他1992)、上宮崎A遺跡(安田他1998)、小又遺跡(飯村他1998)、下宮崎B遺跡(飯村他1998)、白山C遺跡(福島他1999)、白山D遺跡(安田他1999)、白山E遺跡(安田他1999)、玉川村：栗木内遺跡(大越他2003)、江平遺跡(大越他2002)、石川町：源平A遺跡(玉川他1980)、杉内B遺跡(大越他1981)、七郎内D遺跡(大越他1982)、上悪戸遺跡(大越他1983)、下悪戸遺跡(大越他1983)、白河市：西原遺跡(玉川他1980)、佐平林遺跡(玉川・山内1978、大越他1980)、谷地前C遺跡(玉川・山内1978、玉川1980)、赤根久保遺跡(玉川・山内1978)、舟田中道遺跡(鈴木2001・2002)。

群馬県域北部

沼田市：十王曲遺跡(宮下2002)、渋川市：有馬桑里遺跡(坂口他1991)、昭和村：糸井宮前遺跡(山口他1985)。

引用・参考文献

- 青山博樹 2022 「天王山式」の文様モチーフ『福島考古』第64号 福島県考古学会
- 青山博樹他 2019 「阿武隈川上流河川改修事業高木地区道路調査報告」福島県文化財調査報告書第531集 福島県教育委員会
- 會田容弘 2022 「笹山原No.16第21次発掘調査」『地域創生学科学報告集』第4集 郡山女子大学短期大学地域創生学
- 穴沢味光 1970 「会津若松市上雨屋の筒形弥生式土器」『福島考古』第11号 福島県考古学会
- 阿部健太郎 2000 「油田道路」Ⅰ・Ⅱ 会津美里町文化財調査報告書第16集 会津美里町教育委員会
- 阿部健太郎他 2007 「油田道路」会津美里町文化財調査報告書第2集 会津美里町教育委員会
- 阿部 司 1999 「会津総合運動公園発掘調査報告書」会津若松市文化財調査報告書第63号 会津若松市教育委員会
- 阿部俊夫・山崎充浩 1988 「浜井場B道路」『国営総合農地開発事業母畑地区道路発掘調査』25 福島県文化財調査報告書第189集 福島県教育委員会
- 阿部俊夫他 1984 「国営会津農業水利事業関連道路発掘調査報告書Ⅱ」福島県文化財調査報告書第135集 福島県教育委員会
- 荒川隆史 2024 「越後平野における縄文時代晩期末葉の集落に関する基礎的研究」『研究紀要』第14号 公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史他 2004 「日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅴ」青田道路 新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会
- 飯島義雄 1998 「古墳時代前期における「周溝を持つ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号 群馬県立歴史博物館
- 飯村 均他 1998 「福島空港・あぶくま南道路道路発掘調査報告」2 福島県文化財調査報告書第353集 福島県教育委員会
- 家田順一郎 1985 「藤平道路発掘調査報告書Ⅱ」下田村教育委員会
- 五十嵐純一 2009 「郡山道路」Ⅴ 会津若松市文化財調査報告書第118号 会津若松市教育委員会
- 五十嵐純一 2014 「郡山道路」Ⅹ 会津若松市文化財調査報告書第140号 会津若松市教育委員会
- 五十嵐純一・滝川 鉄 2021 「鶴城道路」会津若松市文化財調査報告書第168号 会津若松市教育委員会
- 五十嵐純一他 2006 「金谷道路・郡山道路Ⅱ」会津若松市文化財調査報告書第107号 会津若松市教育委員会
- 石井 寛 1998 「第五章 縄文集落と掘立柱建物跡」『先史日本の住居とその周辺』同成社
- 石井 寛 2009 「周石型環石施設の系譜と性格」『縄文時代』第20号 縄文時代文化研究会
- 石川日出志 1996 「東日本弥生中期広域年表の概略」『Y A Y I』弥生土器を語る会
- 石田明夫 1998 「上雨屋道路発掘調査概報」会津若松市文化財調査報告書第58号 会津若松市教育委員会
- 石田明夫 2002 「葛科道路」会津若松市文化財調査報告書第78号 会津若松市教育委員会
- 石田明夫 2004 「原登道路」会津若松市文化財調査報告書第94号 会津若松市教育委員会
- 石田明夫・平吹睦美 1999 「会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書」会津若松市文化財調査報告書第62号 会津若松市教育委員会
- 石本 弘他 1983 「国営会津農業水利事業関連道路発掘調査報告Ⅰ」福島県文化財調査報告書第111集 福島県教育委員会
- 石本 弘他 1990 「国営総合農地開発事業矢吹地区道路発掘調査報告」5 福島県文化財調査報告書第225集 福島県教育委員会
- 井関敬嗣・中村五郎 1960 「中間津道路の土器」『福島考古』第3号 福島県考古学会
- 植村泰徳他 2004 「内屋敷道路」塩川町文化財調査報告第12集 塩川町教育委員会
- 江花明久他 1993 「門田桑里制跡発掘調査報告書Ⅲ」会津若松市文化財調査報告書第25号 会津若松市教育委員会
- 江花明久・平野幸伸 1994 「門田桑里制跡発掘調査報告書Ⅳ」会津若松市文化財調査報告書第35号 会津若松市教育委員会
- 恵美昌之 1982 「清水道路神明間地区」名取市文化財調査報告書第11集 名取市教育委員会
- 大河原勉 2011 「摺上川上流域における縄文時代中期末葉～後期前葉の住居跡について」『福島県文化財センター研究紀要2010』福島県文化財センター白河館
- 大賀克彦 2001 「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』86-4 日本考古学会
- 大賀克彦 2011 「弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学』5 弥生時代(上) 青木書店
- 大越道正 1987 「国営総合農地開発事業矢吹地区道路発掘調査報告Ⅰ」福島県文化財調査報告書第178集 福島県教育委員会
- 大越道正他 1980 「国営総合農地開発事業母畑地区道路発掘調査報告Ⅴ」福島県文化財調査報告書第85集 福島県教育委員会
- 大越道正他 1981 「国営総合農地開発事業矢吹地区道路発掘調査報告Ⅵ」福島県文化財調査報告書第95集 福島県教育委員会
- 大越道正他 1981 「沼平道路」『国営総合農地開発事業母畑地区道路発掘調査報告Ⅶ』福島県文化財調査報告書第96集 福島県教育委員会
- 大越道正他 1982 「国営総合農地開発事業矢吹地区道路発掘調査報告Ⅹ」福島県文化財調査報告書第108集 福島県教育委員会
- 大越道正他 1983 「国営総合農地開発事業矢吹地区道路発掘調査報告Ⅺ」福島県文化財調査報告書第116集 福島県教育委員会
- 大越道正他 1990 「能登道路」『東北横断自動車道道路調査報告Ⅹ』福島県文化財調査報告書第382集 福島県教育委員会
- 大越道正他 2002 「福島空港・あぶくま南道路道路発掘調査報告Ⅻ」福島県文化財調査報告書第394集 福島県教育委員会
- 大越道正他 2003 「福島空港・あぶくま南道路道路発掘調査報告Ⅼ」福島県文化財調査報告書第406集 福島県教育委員会
- 大竹憲治 1985 「御代田式土器の再検討」『物質文化』44 物質文化研究会

- 岡本淳一郎 2005 『観音を持つ建物跡の系譜と分類』『弥生建物の地域性と系譜』中部弥生時代研究会
- 小沢弘道他 1983 『沢口遺跡』山都町文化財調査報告第3集 山都町教育委員会
- 柳山雄三・高松俊彦他 2005 『町B遺跡』郡山市教育委員会
- 香川徹一・今野 徹 2012 『阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告』2 福島県文化財調査報告書第496集 福島県教育委員会
- 香川徹一・廣川紀子 2013 『阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告』3 福島県文化財調査報告書第489集 福島県教育委員会
- 柿沼恵介 1986 『成田遺跡』『群馬県史』資料編2 群馬県
- 梶原文子 2012 『平成22・23年度村内遺跡発掘調査報告書』湯川村文化財調査報告書第6集 湯川村教育委員会
- 梶原文子 2013 『平成24年度村内遺跡発掘調査報告書』湯川村文化財調査報告書第8集 湯川村教育委員会
- 梶原文子・布尾幸恵 2015 『殿田遺跡』湯川村文化財調査報告書第10集 湯川村教育委員会
- 片岡 洋 2002 『大沢遺跡発掘調査報告』喜多方市埋蔵文化財調査報告書第13集 喜多方市教育委員会
- 金子睦美 2004 『経営体育成基盤整備事業「上三寄地区」埋蔵文化財発掘調査報告書』会津若松市文化財調査報告第89号
会津若松市教育委員会
- 兼田芳宏 1995 『三条宮北遺跡』猪苗代町文化財調査報告書第20集 猪苗代町教育委員会
- 神村 透 1997 『石製耕作具』『弥生文化の研究』5 雄山閣
- 菊地芳朗他 2024 『東北南部における弥生-古墳移行期の穀類生産とその意義』『日本考古学協会第90回総会研究発表要旨』
日本考古学協会
- 木本元治 2005 『上野尻遺跡』『西会津町史』別巻3 考古資料 西会津町史刊行委員会
- 木本元治 2006 『上野尻遺跡出土の種子付土器』『福島県立博物館紀要』第20号 福島県立博物館
- 木本元治他 1991a 『東北横断自動車道遺跡調査報告』12 福島県文化財調査報告書第262集 福島県教育委員会
- 木本元治他 1991b 『東北横断自動車道遺跡調査報告』13 福島県文化財調査報告書第263集 福島県教育委員会
- (公財)福島県文化振興財団・(株)加速器分析研究所 2018 『まほろん収蔵資料のAMS年代測定結果報告(平成29年度分)』
『福島県文化財センター白河館研究紀要2017』公益財団法人福島県文化振興財団
- (公財)福島県文化振興財団・(株)加速器分析研究所 2019 『まほろん収蔵資料のAMS年代測定結果報告(平成30年度分)』
『福島県文化財センター白河館研究紀要2018』公益財団法人福島県文化振興財団
- 小柴吉男 1986 『銭倉遺跡』Ⅱ 三島町文化財報告第8集 三島町教育委員会
- 小柴吉男 2001 『福原原遺跡』Ⅰ 三島町文化財調査報告書第15集 三島町教育委員会
- 小柴吉男他 1990 『荒屋敷遺跡』Ⅱ 三島町文化財調査報告書第10集 三島町教育委員会
- 小柴吉男他 1992 『福島県営はまき整備事業阿賀川地区遺跡調査報告書』会津坂下町文化財調査報告第28集 会津坂下町教育委員会
- 小滝利意 1960 『今和泉』会津史談会考古学研究会
- 小滝利意 1961 『会津盆地に於ける縄文晩期より弥生式土器について』『会津史談会誌』第37号 会津史談会
- 小滝利意 1966 『南御山遺跡出土の土器に就いて』(私家版)
- 小滝利意 1975 『銭倉遺跡・荒屋敷遺跡』三島町文化財報告第3集 三島町教育委員会
- 小滝利意 1976 『袋原遺跡範囲確認調査概報』会津坂下町教育委員会
- 小滝利意 1977 『葛科』会津若松市教育委員会
- 小滝利意 1979 『南原遺跡』河東町教育委員会
- 小滝利意 1992 『上ノ台遺跡発掘調査報告書』西会津町教育委員会
- 小滝利意 1996 『蔵平遺跡発掘調査報告書』下郷町文化財調査報告第6集 下郷町教育委員会
- 小松山六郎他 1984 『五本松遺跡』会津武家屋敷報告書第2集 会津武家屋敷・会津歴史資料館
- 駒形敏朗・小畑博史 1991 『新潟県における縄文・弥生時代の掘立柱建物跡』『弥生時代の掘立柱建物跡』資料(東日本)編
埋蔵文化財研究会
- 今 正幸・須賀井新人 2009 『土大作裏遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第176集 山形県埋蔵文化財センター
- 近藤真佐夫 1996 『会津総合運動公園発掘調査概報』Ⅴ 会津若松市文化財調査報告書第48号 会津若松市教育委員会
- 近藤真佐夫 2010 『会津総合運動公園発掘調査概報』Ⅷ 会津若松市文化財調査報告書第121号 会津若松市教育委員会
- 齋藤義弘・堀江 悟 2009 『史跡宮内道跡史跡整備発掘調査報告』4 福島県文化財調査報告書第196集 福島県教育委員会
- 斎野裕彦 1998 『アクセサリーの考古学』仙台市富沢遺跡保存館
- 坂口 一他 1991 『有馬桑里遺跡』Ⅱ 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第116集 群馬県教育委員会
- 佐々木由香他 2017 『レプリカ法による土器種実圧痕の同定』『会津縦貫南道路遺跡発掘調査報告』2 福島県文化財調査報告書第522集 福島県教育委員会
- 笹澤正史 2012 『下谷地遺跡の集落構造について』『新潟考古』第23号 新潟県考古学会
- 笹澤正史 2019 『第3項 住居・掘立柱建物の変遷』『新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 佐藤 啓他 2013 『下平遺跡(1次調査)・明神遺跡』下郷町文化財調査報告書第17集 下郷町教育委員会
- 佐藤重幸他 2006 『沢田A遺跡』『仁井田地区はまき整備事業関連遺跡発掘調査報告』Ⅶ 須賀川市文化財調査報告書第55集
須賀川市教育委員会

- 佐藤光義・山崎四郎 1987 『堂平遺跡発掘調査報告書』伊南村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 伊南村教育委員会
- 佐藤光義他 1991 『石生前遺跡発掘調査報告』柳津町文化財調査報告書第1集 柳津町教育委員会
- 佐藤祐輔 2009 『漆の考古学』仙台市教育委員会
- 柴田俊彰 1995 『福島県田島町折橋A遺跡発掘調査報告』『論集しのぶ考古』同刊行会
- 柴田俊彰・鈴木 功 1990 『福島市内の弥生時代の遺跡(2)』『福島考古』第31号 福島県考古学会
- 下城 正他 1987 『深沢遺跡・前田原遺跡』上越新幹線開係埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 群馬県教育委員会
- 岡東一也・外岡龍二 1977 『岩代岡宮崎遺跡』金山市教育委員会
- 岡東一也・佐藤甲二 1978 『第三次岩代岡宮崎遺跡調査概報』金山市教育委員会
- 岡東一也・宮沢 聡 1991 『村下遺跡A地点の調査』南郷村文化財調査報告 南郷村教育委員会
- 杉原莊介 1961 『福島県会津若松市南郷山遺跡の土器』『弥生式土器集成』資料編1 東京堂出版
- 鈴木良一他 1985 『下谷ヶ地平遺跡(第2次)付 下谷ヶ谷平遺跡(予備調査)』『国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 福島県文化財調査報告書第149集 福島県教育委員会
- 鈴木良一他 1989 『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』XⅢ 福島県文化財調査報告書第210集 福島県教育委員会
- 鈴木良一他 1990 『上ノ台D遺跡』『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』XV 福島県文化財調査報告書第231集 福島県教育委員会
- 鈴木良一他 1992 『国営総合農地開発事業矢吹地区遺跡発掘調査報告』9 福島県文化財調査報告書第269集 福島県教育委員会
- 鈴木良一他 1992 『国営総合農地開発事業矢吹地区遺跡発掘調査報告』10 福島県文化財調査報告書第270集 福島県教育委員会
- 鈴木 功 2001 『舟田中道遺跡』Ⅰ 白河市埋蔵文化財調査報告書第31集 白河市教育委員会
- 鈴木 功 2002 『舟田中道遺跡』Ⅱ 白河市埋蔵文化財調査報告書第33集 白河市教育委員会
- 鈴木 功・鈴木一寿 2021 『天王山遺跡』白河市埋蔵文化財調査報告書第84集 白河市教育委員会
- 鈴木 啓・梅宮 茂 1960 『会津上野尻遺跡』『福島県文化財調査報告書』第8集 福島県教育委員会事務局
- 鈴木隆重他 2013 『下平遺跡(2次調査)・小平城跡』下郷町文化財調査報告書第17集 下郷町教育委員会
- 鈴木 雅他 2011 『西浦B遺跡』『蔵王町文化財調査報告書』第10集 蔵王町教育委員会
- 須藤 隆他 1984 『福島県会津若松市葛科遺跡』会津若松市教育委員会
- 岡 雅之他 1982 『村尻遺跡』Ⅰ 新発田市埋蔵文化財調査報告書第4集 新発田市教育委員会
- 大工原忠・若狭 徹 1988 『注連引原D遺跡』安中市教育委員会
- 高瀬克範 2004 『中野谷原遺跡における弥生時代の石製収穫・除草具』『中野谷原遺跡群』2 安中市教育委員会
- 高瀬克範 2012 『レプリカ法による植物種子圧痕の研究』『特別企画展 発掘富沢!!』仙台市道跡保存館
- 高瀬克範 2013 『レプリカ法からみた日本列島東部縄文晩期～弥生・縄文文化文相の栽培植物利用』『先史時代の植物利用戦略』北海道考古学会
- 高瀬克範 2021 『レプリカ法からみた本州島北部の初期農耕』『報』第10号 弥生時代研究会
- 高山 勝他 1997 『郡山東部』22 下羽広遺跡(第2次) 郡山市教育委員会
- 武田耕平他 1991 『南瀬田遺跡』福島市文化財調査報告書第44集 福島市教育委員会
- 武田和宏 2004 『河原田遺跡・梅野木前2遺跡発掘調査報告書』山形市埋蔵文化財調査報告書第22集 山形市教育委員会
- 高橋信一他 1984 『北ノ前遺跡』『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書』Ⅱ 福島県文化財調査報告書第135集 福島県教育委員会
- 高橋 保他 1979 『北降自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』下谷地遺跡 新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 高橋博志他 2008 『沢田B遺跡』『仁井田地区遺跡発掘調査報告』Ⅷ 須賀川市文化財調査報告書第56集 須賀川市教育委員会
- 滝沢規明 2009 『新潟県における弥生時代の建物について』『三面川流域の考古学』第7号 奥三面を考える会
- 滝沢規明他 2002 『元屋敷遺跡』上段Ⅱ 朝日村文化財報告書第22集 朝日村教育委員会
- 只見町史出版会 1970 『咽崎遺跡調査概報』『国説会津只見の歴史』福島県只見町
- 田中 敏 1993 『村西遺跡発掘調査報告書』福島県立博物館調査報告書第26集 福島県立博物館
- 田中幸臣・生江芳徳 1980 『大沢北遺跡』範囲確認調査報告 喜多方市教育委員会
- 玉川一郎・橋本博幸 1980 『田町寺前遺跡発掘調査概報』福島県文化財調査報告書第87集 福島県教育委員会
- 玉川一郎・山内幹夫 1978 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告書』Ⅱ 福島県文化財調査報告書第67集 福島県教育委員会
- 玉川一郎他 1980 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告書』Ⅳ 福島県文化財調査報告書第84集 福島県教育委員会
- 玉川一郎他 1980 『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告書』Ⅴ 福島県文化財調査報告書第85集 福島県教育委員会
- 宮澤秀之他 2002 『奥三田ダム関連遺跡発掘調査報告書』XⅢ 朝日村文化財報告書第21集 朝日村教育委員会
- 島羽嘉彦他 1989 『五輪堂遺跡』塩尻市教育委員会
- 中川晃子 2018 『新潟県における居清を持つ建物の分類と変遷』『新潟考古』第29号 新潟県考古学会
- 長島雄一 1983 『権現堂遺跡』『新鶴村遺跡試掘調査報告』新鶴村文化財調査報告書第2集 新鶴村教育委員会
- 中村五郎 1959 『ニッ釜遺跡の土器について』『考古学雑誌』45-2 日本考古学会
- 中村五郎 1961 『福島県松原五本松遺跡の土器について』『東北考古学』第2輯 東北考古学会
- 中村五郎 1976 『東北地方南部の弥生式土器編年』『東北考古学の諸問題』東出版家社

- 中村五郎 1994 「五丁ノ目宮前道跡の土器」『湯川村史』第3巻 湯川村
- 中村五郎 2001 「天王山式以前」『福島考古』第42号 福島県考古学会
- 中村五郎・穴沢味光 1958 「福島県湯川原町道跡について」『古代学研究』第19号 古代学研究会
- 中村五郎他 1980 「北会津村西麻生道跡A地点出土の弥生式土器」『福島県考古学年報』9 福島県考古学会
- 中村五郎他 2011 「油田Y期土器とその周辺」『福島考古』第53号 福島県考古学会
- 中村洋介 2018 「表層地質調査」『土地分類基本調査』只見・小林 福島県農林水産部農村計画課
- 永山倉造・日黒吉明 1967 「須賀川市前田川かつ坂古墳発掘調査報告」須賀川市教育委員会
- 生江芳徳他 1980 「開津地区道跡調査報告」会津坂下町教育委員会
- 新井田忠誠・生江芳徳 1975 「西麻生道跡出土の弥生式土器」『北会津村の文化財』第3集 北会津村教育委員会
- 芳賀英一 1986 「本県の縄文・弥生時代の漆工品について」『文化福島』Vol.173 福島県文化センター
- 芳賀英一 1986 「下谷々地帯B・C道跡」『国営会津農業水利事業関連道跡調査報告』IV 福島県文化財調査報告書第164集 福島県教育委員会
- 芳賀英一 1989 「国営会津農業水利事業関連道跡調査報告」Ⅶ 福島県文化財調査報告書第207集 福島県教育委員会
- 芳賀英一・小暮伸之 1994 「東北横断自動車道道跡調査報告」25 福島県文化財調査報告書第296集 福島県教育委員会
- 芳賀英一・高橋信一 1987 「中江聖の宮道跡」『国営会津農業水利事業関連道跡調査報告』V 福島県文化財調査報告書第177集 福島県教育委員会
- 芳賀英一・丹野隆明 1990 「国営会津農業水利事業関連道跡調査報告」Ⅷ 福島県文化財調査報告書第227集 福島県教育委員会
- 芳賀英一他 1983a 「長者屋敷道跡」山都町文化財調査報告第1集 山都町教育委員会
- 芳賀英一他 1983b 「上林道跡」山都町文化財調査報告第2集 山都町教育委員会
- 芳賀英一他 1988 「国営会津農業水利事業関連道跡調査報告」Ⅵ 福島県文化財調査報告書第191集 福島県教育委員会
- 萩生田和郎 2000 「東高久道跡」『若松北部地区旧宮は場整備発掘調査報告書』Ⅱ 会津若松市文化財調査報告書第66号 会津若松市教育委員会
- 萩生田和郎他 1999 「矢玉道跡」会津若松市文化財調査報告第61号 会津若松市教育委員会
- 樋口尚武 1978 「砂子平居平道跡」柳津町教育委員会
- 春成秀爾 1986 「弥生時代」『図説発掘が語る日本史』第2巻 新人物往來社
- 樋口弘一 1976 「南会津郡東部の弥生式土器資料」『福島考古』第17号 福島県考古学会
- 樋口弘一 1983 「南会津郡下郷町五百地路跡の弥生式土器」『福島考古』第24号 福島県考古学会
- 樋口弘一 1990 「下郷町道跡分布調査報告書」下郷町文化財調査報告書第4集 下郷町教育委員会
- 樋口弘一・松本 茂 1996 「折橋C・D道跡」田島町文化財調査報告書第12集 田島町教育委員会
- 平野幸伸 1990 「門田系里制跡発掘調査報告書」会津若松市教育委員会
- 平野幸伸 1993 「会津総合運動公園発掘調査概報」Ⅱ 会津若松市文化財調査報告書第27号 会津若松市教育委員会
- 福島雅儀・福田秀生 2012 「会津縦貫北道路道跡発掘調査報告」12 福島県文化財調査報告書第485集 福島県教育委員会
- 福島雅儀他 1999 「白山C道跡」『福島空港・あぶくま南道路道跡発掘調査報告』3 福島県文化財調査報告書第354集 福島県教育委員会
- 福島雅儀他 2003 「一般国道289号南倉沢バイパス道跡発掘調査報告」1 福島県文化財調査報告書第409集 福島県教育委員会
- 福島雅儀他 2011a 「会津縦貫北道路道跡発掘調査報告」10 福島県文化財調査報告書第474集 福島県教育委員会
- 福島雅儀他 2011b 「会津縦貫北道路道跡発掘調査報告」11 福島県文化財調査報告書第481集 福島県教育委員会
- 藤谷 誠 1986 「国営会津農業水利事業関連道跡調査報告」IV 福島県文化財調査報告書第164集 福島県教育委員会
- 藤谷 誠 1987 「大池下道跡」『国営総合農地開発事業母畑地区道跡分布調査報告』11 福島県文化財調査報告書第173集 福島県教育委員会
- 藤谷 誠他 1999 「八幡町B道跡」『福島空港・あぶくま南道路道跡発掘調査報告』7 福島県文化財調査報告書第368集 福島県教育委員会
- 藤谷 誠他 2014 「会津縦貫北道路道跡発掘調査報告」14 福島県文化財調査報告書第495集 福島県教育委員会
- 古川利意 1979 「会津上野道跡調査報告書」高郷村教育委員会
- 古川利意 1991 「窪田道跡」只見町文化財調査報告書第4集 只見町教育委員会
- 古川利意 1999 「上林道跡」山都町文化財調査報告第13集 山都町教育委員会
- 古川利意 2000 「下屋敷道跡」山都町文化財調査報告第14集 山都町教育委員会
- 古川利意・五十嵐り子 1992 「福島県宮会津南部は場整備事業若宮地区道跡発掘調査報告書」会津坂下町文化財調査報告書第24集 会津坂下町教育委員会
- 古川利意・小沢弘道 1992 「西原道跡」山都町文化財調査報告第12集 山都町教育委員会
- 古川利意・吉田博行 1994 「福島県宮は場整備事業坂下北部地区道跡発掘調査報告書」会津坂下町文化財調査報告書第41集 会津坂下町教育委員会
- 古川利意・和田 聡 1987 「窪田道跡」只見町文化財調査報告書第3集 只見町教育委員会
- 古川利意・和田 聡 1988 「館ノ内道跡・細田道跡」会津坂下町文化財調査報告第14集 会津坂下町教育委員会
- 古川利意・和田 聡 1989 「中丸道跡・鬼渡りA道跡」会津坂下町文化財調査報告書第15集 会津坂下町教育委員会

- 古川利意他 1985 『御前清水道跡・金山道跡』山都町文化財調査報告書第7集 山都町教育委員会
- 古川利意他 1986 『金山道跡』山都町文化財調査報告書第8集 山都町教育委員会
- 古川利意他 1992 『福島県宮城県整備事業若宮地区道跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第24集 会津坂下町教育委員会
- 古川利意他 1994 『福島県宮城県津南部は場整備事業坂下北部地区道跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第40集 会津坂下町教育委員会
- 古澤栄史他 2003 『県営湛水防除事業関連道跡発掘調査報告書』Ⅰ 大制道跡・嶺山道跡・大曲川端道跡 京ヶ瀬村埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 新潟県京ヶ瀬村教育委員会
- 堀江 格 2004 『掘上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告』13 総括編 福島市埋蔵文化財報告書第172集 福島市教育委員会
- 堀江 格・浅野 淳 2003 『邸下道跡』福島市文化財調査報告書第162集 福島市教育委員会
- 堀江 格・富田典典 2001 『掘上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告』9 福島市埋蔵文化財報告書第142集 福島市教育委員会
- 堀金 靖 1994 『川原町口道跡』会津若松市文化財調査報告書第36号 会津若松市教育委員会
- 本間 宏・井 憲治 1992 『町営会津農業水利事業関連道跡調査報告』XⅣ 福島県文化財調査報告書第273集 福島県教育委員会
- 本間 宏他 1991 『町営会津農業水利事業関連道跡調査報告』Ⅺ 福島県文化財調査報告書第266集 福島県教育委員会
- 松本 茂他 1999 『文京町道跡』『福島空港・あぶくま南道路道跡発掘調査報告』5 福島県文化財調査報告書第360集 福島県教育委員会
- 三浦武司・(株)加速器分析研究所 2019 『まほろん収蔵資料の放射性炭素年代測定及び炭素・酸素安定同位体分析の5か年の総括報告』『福島県文化財センター白河館研究紀要』2018 公益財団法人福島県文化振興財団
- 菅川隆男他 1995 『仲川道跡』須賀川市文化財調査報告書 須賀川市教育委員会
- 宮下昌文 2002 『沼須地区道跡群』Ⅰ 沼須市教育委員会
- 室井徳一・香川徹一 2006 『左走道跡発掘調査報告書』下郷町文化財調査報告書第14集 下郷町教育委員会
- 目黒光明 1962 『福島県田村郡御代田道跡について』『東北考古学』第3輯 東北考古学会
- 百瀬長秀他 1987 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 長野県埋蔵文化財センター
- 矢木秀典・角田洋子 2016 『社田A道跡・門田条里制跡』会津若松市文化財調査報告書第150号 会津若松市教育委員会
- 安田 稔他 1998 『福島空港・あぶくま南道路道跡発掘調査報告』Ⅰ 福島県文化財調査報告書第352集 福島県教育委員会
- 安田 稔他 1999 『福島空港・あぶくま南道路道跡発掘調査報告』Ⅱ 福島県文化財調査報告書第367集 福島県教育委員会
- 安田 稔他 2005 『会津磐坂北道路道跡発掘調査報告』5 福島県文化財調査報告書第430集 福島県教育委員会
- 柳田俊雄他 1976 『黒岩洞穴』金山町教育委員会
- 矢部一瀬・石本 弘 1984 『下谷ヶ地A道跡』『国営会津農業水利事業関連道跡調査報告書』Ⅱ 福島県文化財調査報告書第135集 福島県教育委員会
- 山内幹夫他 1999 『掘上川ダム道跡発掘調査報告』Ⅶ 福島県文化財調査報告書第350集 福島県教育委員会
- 山川純一 2007 『堅穴建物に伴う外延道構』『土曜』第11号 考古学を楽しむ会
- 山岸美夫他 1990 『東北横断自動車道道跡調査報告』8 福島県文化財調査報告書第240集 福島県教育委員会
- 山岸美夫他 2010 『常磐自動車道道跡調査報告』58 福島県文化財調査報告書第461集 福島県教育委員会
- 山口重雄他 1985 『糸井宮前道跡』Ⅰ 群馬県教育委員会
- 山本 華 2022 『レプリカによる土器複製圧痕の同定』『只見川流域築堤工事道跡発掘調査報告』Ⅰ 福島県文化財調査報告書第546集 福島県教育委員会
- 吉田 功他 2011 『阿賀川改修(長井地区)道跡発掘調査報告』Ⅰ 福島県文化財調査報告書第482集 福島県教育委員会
- 吉田秀幸他 2001 『国道古殿須賀川線(うつくしま未来博関連)道跡発掘調査報告』福島県文化財調査報告書第384集 福島県教育委員会
- 吉田博行 1990 『福島県宮城県整備事業若宮地区道跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第18集 会津坂下町教育委員会
- 吉田博行 1995 『柞ヶ森古墳』会津坂下町文化財調査報告書第33集 会津坂下町教育委員会
- 吉田博行他 1992 『経塚道跡発掘調査報告』会津坂下町文化財調査報告書第29集 会津坂下町教育委員会
- 吉野勤也・鶴見諒平 2017 『会津磐坂南道路道跡発掘調査報告』Ⅱ 福島県文化財調査報告書第522集 福島県教育委員会
- 吉野進夫 2022 『只見川流域築堤工事道跡発掘調査報告』Ⅰ 福島県文化財調査報告書第546集 福島県教育委員会
- 和田 聡・古川利意 1992 『福島県宮城県整備事業阿賀川Ⅱ期地区道跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第27集 会津坂下町教育委員会
- 和田 聡他 1990 『福島県宮城県津南部は場整備事業阿賀川地区道跡発掘調査報告書』会津坂下町文化財調査報告書第16集 会津坂下町教育委員会
- 和田 聡他 1998 『館ノ内道跡』塩川町文化財調査報告書第4集 塩川町教育委員会
- 和田 聡他 1999 『古屋敷道跡』塩川町文化財調査報告書第6集 塩川町教育委員会
- 渡部賢史 2012 『七十奇道跡』只見町文化財調査報告書第17集 只見町教育委員会
- 渡部賢史 2017 『宮前道跡』只見町文化財調査報告書第22集 只見町教育委員会
- 渡部展好他 2016 『家西道跡(1次)』喜多方市文化財調査報告書第14集 喜多方市教育委員会
- 渡邊 満 1998 『権現山下道跡』会津高田町文化財調査報告書第13集 会津高田町教育委員会
- 薬科哲男他 2016 『福島県金山町宮崎道跡再発掘出土弥生時代土器の産地分析』『福島県立博物館紀要』第30号 福島県立博物館

報告書抄録

ふりがな	ただみがわりゅういきちくいていこうじいせきはくつちょうさほうこく2							
書名	只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告2							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第570集							
編著者名	青山博樹 能登谷宣康							
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 〒960-8113 福島県福島市旭町7-7 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2025年3月4日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道路番号					
なかにし 中西部	ふくしまけんおおひなみちのまち 福島県大沼郡金山町 おおひなみちのまちなかにし 大字大塩字中西部	4454	00044	37° 24' 23"	139° 28' 11"	20220509 ～ 20221125	12,000㎡	河川改修(川幅 拡幅)に伴う記 録保存調査
所収遺跡名	種類	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
なかにし 中西部	集落跡	縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代前・中期 弥生時代後・終末期 平安時代 近世		住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝 集石遺構 配石遺構 土器埋設遺構 焼土遺構 ビット 性格不明遺構	9 50 711 2 2 1 3 12 799 2	軒棟 基 基 基 基 基 基 基 管玉 キセル	縄文土器 弥生土器 土師器 陶器 鉄製刀子 石器 石製品	只見川沿いの河岸段丘に立地する、縄文時代後期初頭、同晩期中葉～弥生時代中期後葉、弥生時代後・終末期、平安時代、近世の複合遺跡である。縄文時代晩期～弥生時代中期の環状集落が確認された。
要 約	縄文時代後期初頭 配石遺構と土器埋設遺構が各1基確認された。							
	縄文時代晩期中葉 大割C2式期の2軒の住居跡が確認された。							
	縄文時代晩期末葉～弥生時代中期後葉 4軒の住居跡、50軒の掘立柱建物跡、2基の集石遺構、多数の土坑(柱穴、土坑墓を含む)、土器埋設遺構、焼土遺構などが確認された。調査区中央部に環状集落が形成され、弥生時代中期後葉には調査区北部に周溝を巡らせる住居跡や掘立柱建物跡からなる集落が形成される。この時期の出土遺物がもっとも多く、土器、石器、管玉などの石製品がある。							
	弥生時代中期末葉～後期初頭 土坑1基などが確認され、少量の遺物が出土した。							
	弥生時代後・終末期 周溝を巡らせる住居跡1軒が確認された。							
	平安時代 住居跡1軒が検出された。遺物が少ないもう1軒の住居跡と本炭焼成土もこの時期の可能性が高い。							
	近世 溝跡が1条が検出された。遺物が出土しなかったもう1条の溝跡もこの時期のものである可能性が高い。							

※経緯度数値は世界測地系(測地成果2011)による。

福島県文化財調査報告書第570集

只見川流域築堤工事遺跡発掘調査報告2

なかにし 中
中西部遺跡

第1分冊 [本文編]

令和7年3月4日発行

編集	公益財団法人福島県文化振興財団	遺跡調査部	(〒960-8115) 福島市旭町7-7
発行	福島県教育委員会		(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団		(〒960-8116) 福島市春日町5-54
	福島県土木部		(〒960-8670) 福島市杉妻町2-16
印刷	株式会社山川印刷所		(〒960-2153) 福島市庄野字清水尻1-10